IS　インフィニット・ストラトス～偽りの翼～

しるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス～偽りの翼～

【Ｎコード】
Ｎ７５５６Ｒ

【作者名】
しるく

【あらすじ】
世界で唯一ＩＳを動かせる男子織斑　一夏。
当然周りは女子だらけ。
織斑　一夏を中心に巻き起こる騒動の日々。
そんなＩＳ学園にアメリカで発見されたもう一人のＩＳを動かせる男子
アルディ・サウスバードが転校してくる。
そんな彼は、嘘つきだった。
しかし、嘘は様々な真実を内包しながら

彼の運命を大きく変えていく・・・。
原作の強さとは何かを私しるくなりに考えて、
展開してアルディの成長を旨く書いて行ければと思っています！
感想などございましたらご自由にどうぞ！

～プロローグ～

アメリカ合衆国。

世界のすべてに影響力を持つ世界の中枢とも呼べる自由の国。

日差しがまぶしく照りつける空港で、一人の少年が今まさに一人の女性に見送られ、
日本へ飛び立とうとしていた。

一人はショートヘアーの金髪に蒼眼を持つ、まぁまぁ普通の顔立ちにサングラスをかけ、
白のパーカーとジーパンというラフな組み合わせ。そして大きなキャスター付きの旅行鞄を携えている。
そしてもう一人は、金髪は同じだが綺麗なロングヘヤーに深い緑色の瞳をもち、紺色のスーツを着こなす
綺麗な女性だ。

「アルディ、本当に忘れ物は無い？」

「姉さん、大丈夫だよ。それに、最悪パスポートさえあれば、入国は出来るしね」

彼の名前はアルディ・サウスバード。これから日本へとと旅立つ少年。

そして、もう一人の見送りの女性は、ローラ・サウスバードだ。アメリカでは結構な有名人である。

ま、なぜかは追々。

「フフッ、あなたらしいわ、まぁせいぜいがんばってらっしゃい」

「僕の苦手な事ベストスリーに入る事だねそれは」

アルディはクックッと笑うと、パーカーの前ポケットからフライト

チケットを取り出す。
それと同時に、空港内にアナウンスが響いた。
？Ｉｓｔａｒｔ００３ｆｌｉｇｈｔｓｏｆＡｌｌＮｉｐｐｏｎＡｉｒｗａｙｓｂｏａｒｄｉｎｇｐｒｏｃｅｄｕｒｅ．Ｔｈｅｅｍｂａｒｋａｔｉｏｎｐｌａｎｎｅｄｖｉｓｉｔｏｒｃｏｍｅｔｏｔｈｅｔｈｉｒｄｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌａｉｒｌｉｎｅｇａｔｅ．？

（全日空００３便搭乗手続きを開始いたします。ご搭乗予定のお客様は、国際線３番ゲートまでお越しください。）

アルディはそのアナウンスとチケットの便名を照らしあわせる。
そしてローラに向かって、微笑んだ。
「そろそろ時間みたいだね」
「そうね、行ってらっしゃい」
「うん、行ってくるよ」
そう言い残し少年は、歩き出す。
これから始まる事に、不安と期待を抱きつつ。
少年は日本へ飛び立った。

～プロローグ～（後書き）

はじめまして、しるくと申します。
本日よりＩＳの二次創作を書かせていただきます！

感想などありましたら、是非ともよろしくお願いします！

第1話～嘘つき転校生～

日本へ到着し、その日はホテルに泊まった。
流石に疲れていたのか、チェックインして部屋に着いた後の記憶が無かった。
そして時刻は現在午前6時30。
今日は、初登校の日だった。
僕は、壁に立てかけてあった旅行鞄の中から、手続きの書類の入った封筒を引っ張りだした。
確かその中に、IS学園までのアクセス方法が書いてあったはずだ。
・・・・・うん、大体読める。
良かったよ、向こうで辞書引っ張り出してローマ字表記書いといて。
漢字は苦手・・・というかはっきりってわかんないんだよね、まだ。
日本ってどうして、こう漢字、英語、カタカナ・・・こんなに複雑な表記をしてるんだろう。
ややこしいなぁ。
と、まぁそんなことを考えている間にも、時間は過ぎていくわけで。
流石にね・・・初日から遅刻はまずいよね？
僕は、手早く荷物をまとめ旅行鞄に押し込むと、ロビーへ急いだ。

チェックアウト後、最寄りの駅から電車に乗る。
日本の鉄道って言うのはほんと時間に正確だよね。
僕の住んでた所にも鉄道はあるけど、平気で遅れてくるもんね。
何のための、時刻表なのかと何度も思ったことがあるけど。
電車に揺られてしばらく。
学園案内に書かれていた、駅名を確認し電車を降りる。

さて・・・・・。

これが僕にとっての最大の難所乗り換えだ。
最後に降りる駅は分かってるんだけどね。
どっち方面なのかが分からない。
さて・・・・どうしたものか。
路線図なんて見ても分からないし・・・・。
このままだと、本当に遅刻の可能性が出てきたな・・・。
幸い日本語は流暢に話せるが・・・・。
って、僕の馬鹿・・・。
降りる駅名の名前にルビがふられていない。
つまり・・・読めない。
さ、最悪だ。
言葉が話せても、これじゃあね。
いよいよ、厄介だ。
駅員はどうやらいましがたの時間帯は、総出で電車に乗客を詰め込んでいる。
この時間帯はラッシュアワーなのだ。
とても聞けたような雰囲気じゃないねぇ。
すると、ふとどこからか声をかけられる。
「どうかしましたか?」
声の主は、黒い髪に整った顔立ちをした背の高い男子だった。
年齢はまぁ、僕と同じぐらいかね。
「いや、うんちょっと迷っちゃってね」
「どこ行きたいんです?」
「ココのモノレール乗り場なんだけど」
僕は、学園案内に書かれているモノレール乗り場を指さす。
それを見た男子は、気さくな笑顔で僕を見ると心強い一言を言ってくれた。
「おんなじ方向ですね、案内しますよ」

偶然でもなんでも、丁度いいね、こりゃ。
「それじゃ、頼もうかな」
僕は彼に連れられて、ようやく電車の乗り換えに成功した。
ただ・・・もうこの国のラッシュアワーには乗りたくは無くなったね。

更に電車に揺られること２０分余り。
ようやく目的地に到着し電車を降りる。
駅を出ると、すぐ目の前に、モノレールの軌道が見えた。
アメリカではモノレールを見たことが無かったから、一本のレールにぶら下がってゴンドラが移動する
姿は少し・・・いやかなり異様な光景だった。
「ココで、良いんですか？」
「うん、大丈夫だよ。ありがとう」
「そうですか、まぁ良かったですよ役に立てたなら。それじゃ俺ちょっと急ぐんで！」
最後まで気さくな笑顔を絶やさぬ彼を見送った後、僕はモノレールに乗り込む。
モノレールってこんな感じなのか。
モノレールは振動も少なく乗り心地は快適だった。
でも、やはり軌道が上で下にぶら下がっているというのは不思議な浮遊感を覚える体験だった。
窓の外をぼんやりと眺めていると、海上にせり出す形で建築された、大きな近未来的な施設が顔をのぞかせる。
（これがＩＳ学園か）
優秀なＩＳ操縦者を育成するために作られた国立機関。
ここに集まってくるのは各国のエリート達。
あぁ、僕は違うよ。僕の場合は？ＩＳを動かせる男？ってことで姉にも進められたけど、それ以前に気が付けば転入の手続きが終わっていて

今日からＩＳ学園に行くっていう事が結構知らない所で決められてたからね。
まぁでも、僕は別段それに関して反対とか反抗はしなかった。
大事なのは？なんとかなるでしょ？の精神だ。
何しても、今日からここの生徒になるわけだからね。
楽しまないと。

モノレールを降り、正門付近まで歩いていくと、その建物の大きさがよくわかる。
特に中央の特徴的なタワーは本当に高い。
何をする所なのか、何もしない所なのかはわからないけど、とにかく中に入らずともその大きさに
少なからず圧倒されてしまう。
ここまでくれば迷うこともないと思っていたが、この大きさは予想外だ。
受付を探すだけでも一苦労過ぎる。
なんとかたどり着いたは良いものの結局、場所はここの、生徒に聞いた。
「すいません、転入手続きお願いしたいんですけど・・・」
言いながら僕は、封筒の中身を受け付けの女性に渡す。
受付の女性は、書類を見ながら、ＰＣを操作していく。
ピアノを弾いているかのようになめらかにキーをタイピングしていく女性。
ほどなくして、生徒手帳の発行やこの学園の詳細な見取り図などを渡される。
「寮の部屋割なんですが、決まり次第担任の方からお話があると思いますので」
「あぁ、そうですか」
「それと・・・・その格好は」

女性が少し、怪訝そうに僕を見てつぶやく。
そこで初めて僕が、制服ではなくいつも通りのパーカーにジーパンというラフな格好であることに気が付く。元々アメリカの学校では特に決まった制服なんてのは無い。
その感覚が抜けきらないまま、何の疑問も持たずこの学園に来てしまったという事も確かにあるが、これには根本的な理由がある。
「その・・・・僕の住んでた所に制服届いてないんですけど」
「・・・・・あれ？」
女性は僕の返答を聞くと、受付の奥の棚から何やら伝票の束を持ってきてパラパラとめくっていく。
そして少し語気を強めて僕に言い返してくる。
「いえ、ちゃんと送ってますよここに伝票もありますし」
「でも来てないんですけど・・・」
「カリフォルニア州のロサンゼルス宛てにちゃんと発送されて・・・・」
「へ、ロス！？」
ちょっと待ってよ・・・ロサンゼルスになんて住んでないよ・・・。
一体どこへ送ってるんですか・・・。
「あの、僕サクラメントなんですけど」
「・・・・・ロサンゼルスって州都じゃないんですか？」
ここは本当に、エリート養成学校なんだろうか。
双方の都市の距離約６００？。
なんで間違える！
「私州都って大抵人が一番多く住んでるところだと・・・」
「とりあえずその考えを改めましょう、って言うかなんでそんな間違いが・・・・」
「あなたのお姉さんからの電話の際に、カリフォルニア州の州都の市役所へ送っておいてと言われて・・」
「らしい説明です」
姉さん・・・・説明不足さが、素晴らしいよ。

いやだとしても、州都を間違えるかね普通。
PCでサーチしても簡単に出てくるよ。
とりあえずだ、今それを嘆こうが制服が届くわけではない。
予鈴の時刻も迫っていたから、僕はその話を切り上げ、その女性に連れられ職員室へと案内される。
ガラッと、職員室の扉が開かれると、一斉に注目が集まる。
そりゃ珍しいんだろうけど・・・ここまで見られるのもなぁ。
というかこの学園、男の教師少ないね・・・。
まぁ仕方ないのかもしれないけど。
そして案内された先に黒いスーツで決めた、鋭い眼光を放つ女性が一人。
「織斑先生、転校生をお連れしました」
「あぁ、ありがとう」
ん・・・織斑？どこかで聞いたような・・・。
それではと言い残し、僕と織斑先生を残し女性は去っていく。
「お前が、転校生か」
「はい、アルディ・サウスバードです」
「ん？サウスバード？」
何か引っかかったのか、少し怪訝そうな顔でこちらを見やる。
「あの、何か？」
「いや、何でもない。それよりお前制服はどうした」
「事務員のミスで今頃ロスでひとり旅しています・・・」
はぁっとため息をつきボソリとまたか・・・とつぶやく織斑先生。
あの人何度も同じミスしてるんだ・・・。
「まぁ良い、制服の件は、今日中に何とかしてやる。とりあえず教室へ向かおう」
僕は織斑先生に連れられて、いまだに周囲の教師陣から異様な注目を集める職員室を足早に後にした。
「少し待っていろ」

織斑先生は僕を、廊下で待たせて一人教室へ入っていく。
騒がしかった教室内が一気に静かになり、中からかすかに織斑先生の声がする。
「おはよう、諸君。既に一部では盛り上がっているようだが、転校生を紹介する」
その発表で、中から女子生徒の声で
「やっぱりくるんだー！」
「なになに、うちのクラスなの！？」
という騒がしい声がする。
「えぇい、やかましい、いちいち騒ぎ立てるな馬鹿どもが、まったく。おい入ってこい」
さてと、行きますかね。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

転校生ねぇ。
また女子なのだろうか。
いやまぁ十中八九女子だろうけど。
俺、織斑　一夏はそう思い顎をついた。
ただまぁ、これ以上女子が一人増えても何も変わらない。
やまて！既に彼のＨＰはゼロよ！状態なんだ。
千冬姉・・・いや、織斑先生が呼ぶと同時に教室のドアが開かれ転校生が現れる。
だがそれは、女子では無かった。
学園に不釣り合いな白いパーカーとジーパン傍らには大きな旅行鞄を転がしている。

俺もだが、周囲の女子も唖然となっている。
っていうか、あいつ！
向こうもこちらに気が付いたらしい、少し驚いた顔でこちらを一瞬見たが気にせず自己紹介を始めた。
「アメリカ、カリフォルニア州出身、アルディ・サウスバード。どうぞよろしく」
流暢な日本語ですらすらと、自己紹介をするアルディ。
一通り、自己紹介を終えると再び女子達が声を上げた。
「アメリカ人！それに男の子だ！」
「織斑君とはまた違うタイプそうだよね！」
「でもなんで制服じゃないんだろう・・？」
「アメリカって私行ったことないんだ～」
・・・・最後のはどうなんだ、関係あるか？
そしてお決まりと言えばお決まりだが、騒いだ女子を一人残らず出席簿でたたいていく千冬ね・・・
「織斑先生だ、少しは学習しろ」
「・・・すいません」
なんでこう俺の考えは漏れるかね。
「それと織斑、アルディの面度を見てやれ、この学園に慣れていないしな、日本の生活にもだが」
「え・・・あ、はい。分かりました」
「よろしく頼むよ？」
ヒラヒラと手をこちらに手を振るアルディ。
なんていうか、軽い奴だな。
「それでは、これでＳＨＲは終わりだ！今日もしっかり勉学に励めよ、馬鹿ども！」
「あ、ちょっといいです？」
ビシッと締めた所に、言葉を挟むアルディ。あいつは怖いもの知らずか。
織斑先生はそのアルディを、顔を動かさずジロッと睨む。

そして、腕を組むと瞳を閉じ、何だ？と若干不機嫌そうに言う。
「僕の席が見当たらないんですが」
「ん？・・・・・」
・・・・・あ！しまったぁ！！
そう言えば昨日一つ机を運んどくように言われてたんだった・・・・。
課題やらＩＳの事やらですっかり忘れていた・・・・。
「織斑・・・・・」
千冬姉の鋭い眼光が俺を射抜く。名前だけ呼ばれただけだが何を、言わんとしているかなどすぐに分かった。
「あ、あの・・・・・忘れてました」
スパァンッ！
当然の出席簿インパクト。あの出席簿ほんと鉄でも入ってるんじゃないか？
「はぁ・・・机が無ければ話にならん！一時間目は・・・・ふむ私の授業か」
千冬姉は、時間割を見やると、こちらに向き直りまた一つ大きなため息をついた。
「お前たち二人で、準備室から机をひとつ取ってこい」
「え！僕もですかっ！？」
あぁ馬鹿！！
思ったが時すでに遅し・・・出席簿でたたかれるアルディしかも２回。
「・・・・分かったな？」
「・・・・はい」
多分今のやり取りで、千冬姉の理不尽さはよく理解してくれたと思う。
俺は、立ち上がるとアルディを連れて教室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

痛い・・・日本の教師って言うのはだれでもあんなに人をバシバシ叩くものなのかい？

・・・っていうか出席簿ってあんなに痛かったかなぁ・・・。

僕もアメリカでは、昔先生に手でたたかれた事はあったけど、あれほど痛くは・・・。

「何にしても悪かったな、こんなことに付き合わしちまって」

織斑君が頭をかきながら気まずそうに謝罪の言葉を述べる。

「まぁ、いいさなんとかなるんでしょ」

「そりゃそうだけどさぁ」

「それより君、下の名前は？」

「え？あぁ一夏だ」

イチカね。オリムラよりも呼びやすい。

「なら一夏と呼ばせてもらおう」

「ッフ、お好きなように」

少しおどける彼。

にしても偶然とは凄いものだね。

あの時駅であった男子とこんなところで生徒として会えるなんて。

・・・そうだ思いだした、織斑一夏・・・この前アメリカのニュースショーで、

トップニュースで取り上げられていた人物だ。

？世界で唯一ＩＳを使える男子？ね。今となっては僕もいるから２人だけど。

そして、あの担任織斑千冬・・・・そうだ、どこかで聞いたと思ったら姉さんだ。

姉さんがしきりに千冬千冬言っていたのを思い出す。

あの時は、僕は「だれその人」状態だったけど・・・。

あの人が・・・。

「着いたぜ、こっから机を運び出すんだが・・・・」
一夏の声に気が付き、考えをやめ顔を上げるとそこにはＰＣの機能やら何やらを丸ごと詰め込んだ
超が付く程重たそうな机が鎮座ましましていた。
これを、教室まで運ぶのかい・・・。
僕は、今来た道を振り返る。
まぁ教室は見えてはいるけど、目の前の机が見ただけで重いという事がわかるだけに、
この距離なら・・・・という前向きな気分をへし折ってしまう。
「とりあえず運んじまおうぜ・・・遅いとまた千冬姉になんて言われるかわからん」
「そう言えば、織斑先生っていつもなんななの？」
「あんなっていうと？」
「うんいや、だからいっつもこんな感じで目釣り上げて、出席簿でたたくのかなと」
「ぶっ！アルディそれ目元似てたぞ！？」
どうやら、僕のやった織斑先生の眼付の真似が似ていたらしい。
少し一夏のツボに入ったようだった。
・・・・なるほど面白い。
「もっとやってあげようか？」
「くっくく・・・やめてくれ・・・笑いをこらえるのが大変なんだぞ・・・くくく」
「ほれほれ～」
「や、やめ！！」
「ほぅ、面白そうだな私にも見せてくれ」
「いいよ、ほらこう・・・・・」
この後２人とも回数忘れるぐらい出席簿でたたかれた。
なんだか色々、あったけど初日って言うこともあり、

あっという間に授業は終わり放課後を迎える。
壇上では、織斑先生ともう一人、おっとりとてどこかドジっ子そうな小柄な山田先生が立っている。
どうやら担任が織斑先生で、山田先生は副担任と言う立場らしい。
織斑先生よりも、温和で近寄りやすい山田先生はすぐに女子たちと打ち解け楽しそうに話に参加している。
まぁ織斑先生は、あのモンドグロッソの優勝者だもんねぇ。
いくら担任とはいえ、気易く話しかけられないよね、呼ばれでもしない限り。
「おい、サウスバード」
そんなことを、思ってるからか、呼ばれたよ。
僕は、これ以上出席簿でたたかれたくないので、素早くそれに反応した。
「なんでしょう?」
「お前の制服の件だ。一時間目の終わりにサイズを聞いただろう?あの後すぐに発注をかけた。今日の放課後には上がると言っていたからな、受付まで取りに行くように」
「わかりました、ありがとうございます」
「では、山田先生そろそろ」
女子と話に花を咲かせていた山田先生を呼び、教室を出ていく。
注目すべき対象が居なくなった女子達の眼は、必然的に転校生の僕に向くわけで。
不思議だったんだよね、今の今まで何も聞かれなかったことが逆に。
まぁ・・・聞いてほしくもないけど。
一瞬の静寂の後、ワッと一斉に僕を取り囲む。
「ねぇねぇ!アルディ君もＩＳ持ってるの?」
「そんなことより、あたしは趣味とかそっちのが聞きたいなぁ～」
「アメリカってどこ!?」
・・・ちょっと思ったけどこのクラスに一人おかしな子がいるようだ。

まぁいいや、ふぅ。
「僕は持ってないよ、候補生でもないしね」
「持ってないの？織斑君は持ってるよ？ねぇ、織斑君」
「ん？いやまだ来てないって」
苦笑いして女の子のパスを上手く受け流す。
来てないってことは、あれか。もうすぐ来るってことか。
ふぅん。
で何だっけ。
「趣味はカラオケかな、と言っても邦楽ばかりだけど」
「え！？日本の曲歌えるの？」
「違うわよ、アルディ君から見て邦楽だから洋楽に決まってんでしょ」
あぁそっかと頭をかく女子。
まぁよくありがちな間違いだろうか。
それで最後の質問は。
「アメリカは、海を挟んだ日本の隣の国だよ」
「おぉ！分かりやすい」
「ん？んん？隣？？海、あぁ太平洋ね・・・隣って言うには離れ過ぎてるような」
「でも隣でしょ」
「隣って言うならハワイとかじゃないの？」
「ハワイだって立派なアメリカの州の一つさ」
「そりゃそうだけど・・・・？」
「いやだけど隣ってねぇ」
「いいじゃん分かりやすけりゃ何でも！」
・・・・ふぅ、ま、こんな感じで良いかな。
最後のあの抜けた質問のおかげで、その場を少し混乱させることに成功した僕は、
そんな彼女達を後目に教室を後にし、受付へ制服を取りに行った。

・・・・まさかここまで受付へ行くのがサバイバルとは思わなかった。
それほど距離もないはずなのに、なんであんなに女子が・・・。
僕はパンダ？
いいえ、ケフィア・・・・でもありません。
・・・これなんのＣＭだったかな。ま、いいや。
僕は制服を持って一夏に教えてもらった、男子用のトイレで着替えを済ます。
割とサイズは適当に言ったんだけど、あながち間違っていなかったようだ。
丁度いいサイズだね。

着替えを制服の入っていた袋に入れ、教室に戻り片隅に置いてあった旅行鞄にしまう。
そして立ちあがって振り向くと、そこには綺麗な金色のロングヘアーをたたえた
いかにも気品あふれる女子が立っていた。
「・・・あの、何か？」
「あなた、ひょっとしてあのローラ・サウスバードの弟ではありませんこと？」
ん？この人僕の姉を知ってるのか。
まぁそこは、嘘をつく必要もない、素直に肯定しよう。
「そうだけど」
「やっぱり」
その女子は、納得したようにうなずくとゆっくりとこちらを見やる。
「あの、いい加減自己紹介お願いできるかな・・・」
「・・・・私を知りませんの？」
いきなりジト目でこちらを見てくる。
外見はお嬢様なのに、その目とのギャップが凄い。

「あぁ、知らない」
「全くあの男といい、あなたといい私を知らないなんて、許されることではありませんわよ！」
「いや、そう言われても知らないものは・・・知らないし」
「あ、あなたねぇ・・・・・・」
ジト目を通り越して、目元が真っ暗で怒り心頭のオーラがあふれ出している。
そこまで自分を知ってなきゃ怒ることなのか？
「よろしいですこと？私は入試主席にしてイギリスの代表候補生・・・」
「セシリア・オルコット？」
「そう、私はッ・・・！？」
「間違えたかな？」
多分僕は何も間違ってないと思うけど。
相手のハッとする顔が実に面白い。
そしてそのあと必ず決まって、なぜ知っているのかという顔になる。
本当に楽しい。
「あなた、なぜ！？」
「いやだから、セシリアであってるんでしょ、名前」
「そう言うことではありません！あなた先ほど知らないと・・・・・・嘘ですのね」
激昂を途中で区切り、一気に声のトーンが下がる。
怒りのボルテージも頂点を突破すると
誰でも、ドスの効いた低い声で相手を威圧するのはどこの国でも変わらないね。
僕はフフッと口元を緩め、首をわざとらしく傾ける。
「やはり、あの人の弟だけありますわね」
「褒め言葉だね」
あの人とは、言わずもがな姉さんのローラ・サウスバードだ。
姉さんは担任の織斑千冬が優勝した第一回モンドグロッソで大会総

合二位に輝いている。
功績だけ見れば非常に輝かしいものだが、その闘い方から、地元アメリカのメディアは
実力を認めながらも、姉さんをこう揶揄した。
？Ｒｏｌａ　ｏｆ　　ｂｅｔｒａｙａｌ？（裏切りのローラ）？
と。
裏切りは言い過ぎだが、一言で言えば嘘つきなのだ。
言葉巧みに相手を、惑わせて時に卑怯とも撮れるような闘い方。
それが姉のスタイルだった。
だからセシリアが、さっきああ言ったのは、何も間違っちゃいない。
僕も同じようなものだからね。
「ふん、まぁ良いでしょう。私は寛大ですから。名前を知っていただけでも許して差し上げましょう」
「別に怒られてないんだけどね、僕」
「・・・まだそんな事言いますの？」
「別に？」
「・・・・良いですわ。今度クラス代表を決めるために、あの男とアリーナで決闘しますの。あなたも参加なさい？」
「・・・なんで」
「そのふざけた態度叩き直して差し上げますわ」
「君、代表候補生でしょ？」
「それがどうしましたの？」
「残念だけど、やめとく」
だがその返答は予想していた、というよりもそう帰ってくるのが当然と思っていたのか、
フフンと鼻を鳴らし、腰に手を当てあたかもモデルのようなポーズで、嘲笑を含んだ笑みでこちらを見やる。その目は完全にこちらを見下していた。
「フフフ、まぁそうでしょうね。少なくともこれであなたがあの男よりも、

利口だと言う事は分かりましたわ。あの男私に向かってハンデはどうすると言ったんですのよ？」
あの男・・・十中八九一夏だな。
代表候補生相手にハンデか・・・・。
流石に自殺行為だね。
「まぁ良いですわ、今回の件は、不問として差し上げましょう。観客席から、あの男がボロ雑巾になるのをとくとごらんなさい」
・・・・今思ったけど、結構口が悪いね彼女。
にしてもそんな面白そうな事があるんだねぇ。
「ま、とくと見学させてもらうさ」
僕はセシリアとの会話を切り上げ、受付で制服と一緒に貰った、部屋割表を見ながら寮へと足を進めた。
さて・・・これからどうするかね？

カタカタと、キーのタイプ音が響く薄暗い研究室。
ここはアメリカのカリフォルニア州にあるとあるＩＳの研究開発局。
「うん、そうねここはこのまま・・・こっちの数値をもう少し何とか出来ない？」
「分かりました、ちょっと考えてみます」
技術者に意見を求められ、それに的確なコメントを返す深緑の瞳の女性。
ローラ・サウスバード。
ローラはデスクに腰かけると、何もない空中に目を泳がせる。
・・・・あの子ちゃんとやってるかしら。
別に弟を信じていないわけではないが性格が、あたし似というのが気になる。

まぁ自分の性格は一番誰よりも自分が知っているが、だからこそなのだ。
浮いてなきゃいいけど。
そんな事を考えていると、いきなり右頬を、冷たい感覚が襲う。
「きゃっ！」
「あら、意外に可愛い声出すのね、さすが鳥さんね」
あたしは声の方向を見やると、あたしと同じように綺麗な金髪の女性がコーヒーを持って悪戯そうな笑みを浮かべていた。
「もう、ナターシャ・・・」
「アドバイザーがボケっとしてるからよ、ほらコーヒー」
あたしはナターシャに言われるがままに、コーヒーを受け取る。
そのコーヒーを、裏返してあったコーヒーカップに移し、砂糖を入れる。
「ブラック飲めなかったかしら？」
「あたしは、微糖派なのよ」
「・・・・それもお得意の嘘かしら？」
「あら、なんの事？」
あたしはおどけてみせたが、ナターシャにはお見通しの様だ。
「この前ブラック飲んでたじゃない。私がそれを見逃すとでも？」
「フフッ、ＩＳのテストパイロット様ともあろうお方がそれは無いわね」
互いに軽口を言いあい、少しの静寂の後ナターシャが、口を開いた。
「・・・気になってるのかしら、アルの事」
「まぁ、あの子の事だから大抵の事はスルスル蛇みたいに抜けるでしょうけれど、性格がねぇ」
「ローラ、あなたがそれ言えるの？」
「それはそうだけど」
間髪いれず、ナターシャの突っ込みが入り苦笑いが止まらない。
そう言えば、ナターシャは昔からアルディをアルと呼んで可愛がってくれていた。

ありがたいものだ。特にあたしがモンドグロッソで長期間アメリカを離れていた時には、
アルディを預かって面倒を見てくれた。
「ふふ、にしてもあのアルが、もう高校生で更にＩＳを動かせるとはねぇ、やっぱり素質なのかしら」
「どうかしら、別にあたしはただの口が達者なだけのお姉さんだから」
「それも嘘ね」
フフッとまた悪戯っぽい笑顔を残して、その場を去るナターシャ。
なんだかんだいってアルディを心配してくれているようだ。
ローラは目の前にある一機のＩＳを見やる。
青色にオレンジのラインの入った非常に無骨なフォルムに、
大きな多用途リアスラスターが目を引くＩＳ。
ほぼ完成段階に入っていて、現在は使用者のパーソナルデータなどをインストールしているため、多くのケーブルが接続されている。
それを見て優しくローラは微笑むと、ゆっくりと瞳を閉じた。

・・・頑張りなさいよ、アルディ。

あなたは、？世界第二位のお姉さんの弟？なんだからね。

第1話～嘘つき転校生～（後書き）

皆さましるくです。
ご覧頂いてありがとうございます。
ＩＳって設定が細かいのが魅力なのですが、いざそれを二次創作してみると難しいものですね。

これからＩＳの戦闘も始まるのに、大変です・・・

そう言えば、最近バイト先のスーパーでは水を初めとする防災用品が軒並み欠品状態です。
買いだめダメ絶対。
本当に必要な人へ回してあげないと！
三重県でこれですからね・・・
東京都とか大変らしいですよね。当然被災地はもっと大変でしょうけど。
募金など出来ることで「ＰＬＡＹ　ｆｏｒ　ＪＡＰＡＮ」で頑張りましょう！

それでは第２話でまたお目にかかりましょう。それでは！

第2話～アメリカからの贈り物～

えぇと・・・・１０２９、１０２９と・・・・あったぞ。
僕は渡された部屋割表と照らし合わせ、番号と同じ扉をあける。
一夏から聞いた話では、２人部屋ってことらしいけど。
そうなるとやっぱり僕は男同士一夏と相部屋なのだろう。
そう思い、扉を開くと・・・・。

・・・・・狭っ！
どこからどう見てもコレ一人部屋じゃないか。
大体大きさは四畳半。そこに机とベッド、小型の冷蔵庫が押し込まれており、
実質動ける範囲はもっと狭い。一応シャワールームはあるようだね。
同室者を気にしなくていい利点はあるにしても、まさかの一人部屋とは。
・・・・でもこれはこれで気を使わなくてやっぱりいいか。
僕は、自室の片隅に旅行鞄を置くと、中からノートＰＣなどを取り出し机の上に置く。
電源を入れ確かめたが、どうやらネット環境は整っているようだ。
よかったよかった。
ひとまず、それを確かめたかっただけなので電源は落としておく。
シャットダウンを確認すると僕はドサッとベッドへ仰向けに倒れこんだ。
ＩＳ学園か。
何にしても入学初日はあっという間に終わった。
慣れていないと言うのもやっぱりあったんだろう。
それに今日、なんくせ付けられたあのイギリス代表候補生。
セシリア・オルコット。
姉さんを知っているみたいだったけど。

っていうか、僕自身彼女をどこかで見た気がするのは気のせいだろうか・・・・。
わかんないなぁ・・・・思い出せない。
ただ、あの顔どこかで見たような見てないような・・・。
ま、いいか。
人生は楽に行かなきゃ楽しくない。
楽しいと言えば、今度あのセシリアと一夏がＩＳで決闘をするらしい。
・・・・・これは面白そうだ。
やっぱり人生は楽しまないと損だな。
そう、楽しまないと・・・・・そ・・・ん。
流石に疲れたようで、急激な睡魔に襲われる。
僕はその睡魔にあらがうことなく身をゆだね、深いまどろみへ落ちて行った。

「そしてこのざまか、転校二日目にして早くも遅刻とはな、やってくれる」
「予鈴とほとんど、ギリギリで滑りこんだんですけどっ！？」
ついつい返してしまうこの口を、今はとても恨みたい。
そのおかげで、僕は主席簿で頭を殴られる羽目になったのだから。
「今後気をつけろ、良いな？今度やってみろ、反省文を書かせるからな」
「・・・気をつけます」
僕は叩かれた頭をさすりながら、自分の席へ着いた。
一夏の何とも言えない、目が凄く痛かった。
「さて、諸君それではＳＨＲは終わりだ、山田先生それでは授業の方を」
「はい、それではみなさん、前回の福州から始めましょうか」
山田先生がそう言うと、皆が一斉に教科書を開く。

僕もゆっくりと、教科書を開く。
教科書の内容をスキャミングしていくと、一つの項目に目がとまる。
篠ノ之　束・・・・。
会ったことも見たこともないが、ＩＳの開発者として名は広く知られている人物だ。
世の中には凄い天才もいたものだ。
たった一人でＩＳのコアを開発してしまったのだから。
そういえば、篠ノ之っていう名字このクラスにいたような・・・・。
「山田先生、質問です」
唐突に後ろの方の席から声が上がる。
「篠ノ之さんって、もしかして・・・」
その問いに答えたのは山田先生ではなく織斑先生だった。
「そうだ、篠ノ之は束の妹だ」
その返答に質問をした女子を含めた数名が、驚きの声を上げた。
「凄い凄い！このクラスに織斑君以外にも凄い人がお姉さんの人がいたよ！」
「そう言えば、篠ノ之博士っていま行方不明なんだよね？」
「篠ノ之さんどこにいるのか知ってるんじゃないの？」
次々に浴びせられる、予想だにしない質問の集中砲火。
確か彼女を一夏は箒と呼んでいた。
その集中砲火に対して箒は、鋭い声で一閃した。
「あの人と、私は・・・なんの関係もない、だから教えられる事など何もない！」
はっきり、そう言いきられてしまっては、流石の女子も黙るしかない。
というよりも、発せられた言葉の鋭さに、言い返せなくなったというのが正しいのかな。
まぁ・・・なんていうか、気の強そうな子だ。
そんな感じで、授業は進んでいった。

休み時間。
一夏と箒が、さっきの件で話をしていた。
「箒、さっきの言い方は流石に無いぞ？」
「別にかまわないだろう、私とあの人は本当に関係が無い。あんなことを聞かれるだけいい迷惑だ」
「でも姉じゃないか」
「だから、関係ないと言っている！」
また声を張り上げてる。思うに、いや確実に、箒は篠ノ之　束を嫌っているんだろう。
理由は分からないが。
「やぁ、相変わらず大きい声だ」
気さくな声で話しかけたが、内容は箒の気分を害するには十分だったらしい。
キッと睨む目は、それだけで小動物なら死んでしまいそうだ。
「まぁまぁ、悪気あって言ってるんだから」
「余計にたちが悪いだろう、お前・・・アルディといったな馬鹿にしているのか！」
「いやいや、こういう性格なものでぇッ！！！」
見るものを魅了する動き、全く無駄のない動きで、教科書が刀のごとく振り下ろされる。
僕はなんとかそれを寸でで避けることに成功したが、あの速度でしかも背表紙。
加えてＩＳの教科書は僕の街の電話帳のごとく分厚い。出席簿アタックよりも威力は高そうだ。
「あ、危ないなぁ！」
「馬鹿もの、避けるやつがあるか！外れたじゃないか！」
「アメリカ人でも分かる、言葉のおかしさに気付こうね・・・！」
言葉のキャッチボールという言い方がある。
これはまぁ、その名の通り言葉とは投げかけて相手に受け取ってもらって、またそれを返す、

事を繰り返すことから名づけられたものだが、今の会話はどっちかって言うと言葉のドッヂボールだ。
しかもアウトになっても外野から生還できないと言う、鬼ルール。
すなわち・・・死。
これで死んだら死因は教科書とかなんだろうなぁ・・・体裁を気にする人間ではないが、
それは流石に格好が悪すぎる・・・。
「まぁまぁ、箒落ち着けって。アルディもなんだかんだ言ってお前の事を
気に掛けてくれてるんだからさ」
「むむぅ・・・・」
「まぁ、そう言う事に」
「ふん！」
腕を組みとドカッと腰を下ろす箒。
そう言えば気になると言えば、この二人の関係だ。
随分中がよさそうだけど。
「君たち、付き合ってるの？」
何気なく聞いてみた、これには悪気はない。サラッと。
本当にサラッと聞いただけだ。だがその言葉に、箒の顔は真っ赤に染まり、
周囲の女子は撒き餌に群がる魚のごとく集まってきた。
「えええええ！！やっぱり織斑君と、篠ノ之さんってそういう関係！？」
「やっぱり、怪しいと思ってたんだよねぇ・・・入学初日も一緒にどっか行っちゃったし」
「それに、篠ノ之さんも織斑君も、互いに親しみこめて下の名前で呼び合ってるし・・・」
「これは決まりじゃないの・・・あたし新聞部の先輩に連絡してくる！」
やいのやいの騒ぎ立てる女子。

・・・これは予想できなかった・・・・本当にごめん。
箒も、さっき見たいに怒って集まった女子をを散らすのかと思ったけど、
見るからに動揺を隠せない。
「べ、別に私は、そういう関係では・・・その」
「そうだぞ、お前ら俺と箒はただの幼馴染で、そういう関係じゃいからな」
「・・・むむぅ・・ッ！！」
動揺から一変少し不機嫌な顔でそっぽを向く箒。
だが一夏がそれに気づくことはなく、必死に周囲をなだめ、
騒動を鎮静化させていく。
うぅん・・・・なるほど。
片思いってやつなのかな。
僕も語るほど恋愛には詳しくないし、そもそも誰かを好きになったことが無いからよくわからないが
さっきの表情の変化からそれぐらいは素人の僕でも分かった。
というより普通の感性もってれば大体気が付くと思うのだが・・・。
えぇと・・・なんていったかな。そういう人の事を。
と・・・とう・・・。
「トウボウヘン？」
「唐変木だ、馬鹿もの」
そうだそうだ、唐変木だ。
って今の誰？
僕は声の方向を振り返る。
そこには、腕を組んで黒いスーツをビシッと着こなした織斑先生が立っていた。
「あ、どうも」
「早く席につけ」
僕は、出席簿がピクリと動くのを確認すると、身の危険を感じ足早に自分の席へ戻るのだった。

・・・・日本では本で叩くのが習慣・・・いや流行りなのかな。

結局あの時叩かれなくても、授業で当てられて答えられずで1発貰った僕は、まだ痛みの残る頭を気にしながらＳＨＲで壇上で話す織斑先生を見ている。

「以上が、諸君への連絡事項と・・・あぁそうだ。織斑とオルコットの試合の日程が決まった。生でＩＳの戦闘を見られるいい機会だ。これから諸君も同様の機会は増えるだろう。率先して見学するように」

「あの、織斑先生。俺の・・・そのＩＳは・・・」

「前も言っただろう、専用機だけに時間がかかると安心しろ、試合までには間に合わせるさ」

その時、教室の後ろの席から嘲笑を含んだ声が飛んだ。

「あら、間に合わない方がよろしいのではなくて？みじめな姿を見られずに済むのですからラッキーではありません事？」

「負けるとはまだ、決まってないだろ」

「決まってますわよ。何せ私は代表候補生、セシリア・オルコットなのですから」

スッと立ち上がると腰に手を当てポーズを決める。

それが様になっているだけに、そして言っていることも間違ってはいないだけに、一夏も反論に窮してしまう。

「静かにしろオルコット、候補生なだけで偉そうな口を叩くな。あとお前も安い挑発に乗るな馬鹿ものが」

織斑先生にこう言われては、流石にセシリアも一夏も黙り込むしかない。

世界一の名は伊達じゃないってことだね。

「それでは以上だ。つまらんもめごとは起こすなよ」

言うが早いか織斑先生はさっさと壇上を降り教室を後にする。

それを追いかけるように、山田先生も続いていった。

放課後。
一夏と箒が、特訓をするというのでついていくことに。
ここは剣道場か。
剣道はよくわからないけど、手合わせ１０分足らずで一夏が一本負けしたのだけは分かった。
「弱すぎる！一夏、お前いったいこれまで何をしていたんだ！！」
「じゅ、受験勉強！」
勤勉勤勉。勉強嫌いな僕からすれば関心するね。ただ、その答えは箒には納得できるものでは無かったらしい。
「受験勉強なら私もしていたぞ！」
「勉強時間の差じゃないか？」
「ふざけるな！」
バシーンっと竹刀が床を叩く音が剣道場に響く。
「えぇい、中学時代は何をしていたんだ！！」
「帰宅部だ。これでもエースだったんだぞ！」
それを聞きわなわなと、体を震わせる。
どうやらボルテージが突破したらしいね。
「軟弱者めがッ！！」
勢いよく振り下ろされる竹刀が防具をつけていない状態の一夏に振り下ろされる。
一夏はそれに素早く反応すると、竹刀でそれを受け止めた。
だが体制が悪い。
座っている一夏に対して、箒は上から両手で体重をかけているのだ。
当然いくら腕力で勝る男といえど、片手で体重を乗せた一閃を受けきることは不可能だ。
プルプルと震える腕で踏ん張りつつ一夏が必至の形相で懇願する。
「頼む箒、俺はまだ死にたくないんだ！」
「一度死ねば、強くなって帰ってくるかも知れんぞ！！」
一夏はサ〇ヤ人か何かかい？

ちなみにどうでもいいけど、ドラゴンボールはアメリカでも人気の高い先品の一つだ。
「そんな超設定俺にはない！頼む箒今度何かおごるからさ！！」
「・・・・ふんっ！これから放課後三時間必ず空けておけ、私がお前を叩き直してやる！！」
鼻を鳴らし、軽蔑のまなざしで一夏を一瞥すると剣道場を一人後にする箒。
大きく肩でため息をつく一夏に僕は、壁にもたれたままの体制で声をかけた。
「大丈夫かい？」
「そう見えたら、お前の眼一度眼科で見てもらった方が良いぞ？」
「ははッあいにくと目は良い方だよ。まぁ色は分からないけどね」
「ん、どういうことだよ？」
「色盲なのさ。世界が毎日白黒映画なんだよ」
これは本当だ。
何でも数万人に一人という確率らしいが、見事僕はその一人にあたってしまったようだ。
個人差はあるらしいが、僕の場合は色が極端に言えば白と黒しか判別できない。
後はそれ濃淡で大体なに色かを判別するしかないのだ。慣れるまで凄く戸惑ったけどね。
まさに白黒状態。幸いにして視力は良いから日常生活で困ることはあまりない。
「あ、悪い・・・なんか変な事聞いちまって」
「ん？良いよ別に。僕も聞かれなかったし」
気まずそうに頭をかくが、僕は別に気にしていない。
こんなの言わなきゃ誰もわからないし。
そんな事よりもだ。今は彼の特訓の話。
「それはそうと、箒、三時間とか言ってなかった？」
「言ってたなぁ・・・あいつ有言実行だから、みっちり本当に三

時間しごかれるに決まってる」
「昔からああいう性格なのかい彼女は？」
「あぁ、まっすぐで芯の通った良いやつなんだけどな、まっすぐすぎて困るんだ」
融通が利かないってことかな？
「だけど、やっぱり凄いわ。剣道の全国大会で優勝した腕は流石の一言だったよ」
「優勝したんだ・・・・」
それは確かに凄い。
僕は頭の中で、自分が何か一つでも優勝したり表彰されたりしたことが無かったか記憶を探るが、
全くこれっポッチも浮かんでこない。というよりそんな経験無い。
楽観的とかで賞貰えないのかな・・・。多分断トツなんだけど。
「まぁでも、俺も男。女に負けっぱなしって言うのは納得できないしな」
「フフッ、ま頑張ってよ・・・・そうだまた見学しに来ても良いかな？」
「おう、良いぜいつでも見に来いよ」
気さくに笑いかける一夏を、流し眼で見つつ僕は、寮へと足を向けた。
その後1週間みっちり、本当に三時間、一夏は箒と特訓に打ち込んでいた。

そして代表決定戦の前夜。僕はいつも通り、一夏と箒の特訓を見届けて寮の部屋に帰ってきていた。
・・・・ふぃ～今日もつかれた。
手慣れた動作で習慣化していたＰＣを立ち上げる。
さてさて、何か情報は・・・。
僕はメールボックスを開いて、新着メールを確認する。

・・・うん、今日もメルマガとかばっかりだ。
ツツーとスクロールバーを下げていくと、一通見慣れないアドレスからメールが入ってきていた。
（ｓｅｃｏｎｄ　ｐｌａｃｅ　ｓｉｓｔｅｒ@・・・？）
セカンドプライスシスター・・・？
こんなメルアド知らないけ・・・あ。
まてよ直訳すると・・・2番目の・・・姉妹・・・いや姉！
分かった、姉さんだ。
メルアドの差出人が分かったところで、そのメールをさっそく開いてみる。

？親愛なる弟へ
元気にやっているかしら。あたしはいつもどおり元気にやってるわよ。
そうそう、ナターシャがあなたの事気にかけてたわ、今度連絡でもしてあげて？
連絡先はこのメールに添付しておくから。それはそうと、あなた以前、アメリカでパーソナルデータを取ったこと覚えているかしら。
あの時は、ＩＳを動かせるからその研究材料としてって言う理由だったけど、本当は違うの。あれにはちゃんとした意味があるのよ？
この意味わかるかしら。フフッ楽しみにしていなさい。明日か遅くても明後日にはあなたの所に届くはずだから。何かは来てからのお楽しみ♪
まぁそうね、姉さんからの贈り物だと思いなさい、それじゃ頑張って！？

・・・イマイチ、わかるかしらと言われても、分かんないとしか。
それに明日か明後日って、何が届くのさ・・・。
・・・まぁ良いか。今考えても、何が来るかなんてわからない。
それにだ・・・このメール自体が嘘の可能性だってあるのだ。

はぁ、我ながらややこしい姉さんを持ったなぁ。
そうも思ったがすぐにその考えを否定する。
そうじゃない、僕も似たようなものなんだから。
何にしても明日は一夏とセシリアの決闘の日か。
それだけは変わらない。
セシリアは代表候補生だし、一夏が勝てる見込みはあるのだろうか。
・・・っていうか、一夏ＩＳの事箒から教えてもらってるのかな？
とたん嫌な考えが頭をよぎる。
で、でも流石に、教えてもらってるよね。
僕は嫌な考えを振り払うかのように、布団にくるまった。

「箒・・・・」
「なんだ」
「結局俺達、剣道場で打ち合っただけだったな」
「良いではないか。感覚も戻ってきたのではいか！？」
試合当日。
僕と箒そして一夏は、ピットに居た。
観客席でもよかったんだけど、せっかく特訓を見学したんだしお前も来いよとの一言でピットに案内されたのだ。
だが問題はそこでは無い、先ほどから一夏の質問に、わざとらしい大笑いなどで返答を誤魔化す箒。
そしてそれを見て、頭を抱える一夏。
どうやら、昨日の嫌な考えは当たったらしい。
一夏は、何も箒からは教わっていないようだ。
だってそうだよね。
僕自身も、剣道場で打ち合ってる姿しか見たことなかったし。
「おぃっ、どうしてくれるんだよ！！ＩＳの事全く知らないまま当日迎えちまったじゃないか！！」
「し、知るか！・・・そ、そうだお前が予想以上に弱かったのだ！

そのためスケジュールが狂ってだな」
「苦しい言い訳してるんじゃねぇよ！！」
ギャーギャーわめきあう二人と、それを静観する僕。
そこへ、織斑先生の鋭い声が飛ぶ。
「ピットでわめくな、やかましい！織斑！」
「あぁ、は、はい！」
ビシッと姿勢を正して、その声に反応する。
そして続いて山田先生が口を開いた。
「織斑君、お待たせしました！織斑君のＩＳが到着しました！」
一夏のＩＳが到着した。その声に僕を含めた三人の目つきが変わる。
そしてそれと同時に後ろのハッチが開き、一夏の専用機が姿を現した。

白い。
真っ白だ。
姿を現したＩＳは本当に真っ白で、まぶしいぐらいだった。
それを見て一課が声を漏らす。
「これが・・・俺の・・」
「はい！これが織斑君の専用機。その名も白式です！」
白式ね。名は体を表すと言うが本当だと思う。
その名の通り、こんなにも白い。
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間は限られている、ぶっつけ本番でモノにして見せろ」
「いやでも、俺ＩＳの事・・・」
「急いでください織斑君！」
「お前も男だろう、覚悟を決めろ！」
「い、いやあの・・・」
「「早く！！」」
「はいっ！！」
三人にせかされて、一夏は準備を始める。

搭乗者がＩＳに乗り込むと、一夏に合わせるように装甲が閉じ膨大なデータがすさまじい速度で処理されていく。
程なくフィッティングの初期段階が終了し、ハイパーセンサーが起動。
敵ＩＳのデータが表示されている。
「ハイパーセンサーの起動は問題ないようだな。気分はどうだ一夏？」
「あぁ・・・・大丈夫行ける！！」
やっぱり姉弟だねぇ。
一夏を名前で呼ぶ所をはじめてみた。
力強い返答に、一同が安堵の表情でそれを聞き。
箒が一夏に力強く声をかける。
「一夏・・・・勝ってこい！」
「・・・・あぁ行ってくる！！」
言い残しカタパルトが一夏と白式を勢いよく打ちだした。
さてどうなる事やら。
僕はモニターが見える位置に移動するとモニターを見上げる。
なにやら二、三言葉を交わして先制攻撃を行ったのはセシリアだった。
主な武装は、大型の特殊ライフルだ。
さてどうなるか・・・・と観戦を決め込む僕の首根っこを織斑先生が引っ張る。
「さてちょっと来い。お前に用事がある」
「え！？いや、あの一夏の戦闘を・・・」
「お前に関係あることだからだ。山田先生後を頼む」
そのまま僕を引きずって、織斑先生は別のピットへ僕を連れてきた。
別のピットとはいっても、解放されていないだけで別のアリーナというわけではない。
「今朝がた、空輸でＩＳ学園に一機のＩＳが届けられた」
「はぁ」

「差出人は・・・・これだ」
織斑先生は、伝票らしきものを僕に見せる。そこにあった名前は・・・。
「姉さん」
「そうだ、ローラだ」
そう言えば姉さん昨日のメールで何か送るって言ってたけど・・・・。
ま、まさかＩＳ!?
「フフッローラらしいと言えばらしいな。朝からそれでちょっとした騒ぎになってな」
「すいません」
「まぁそれは良い。サウスバード、お前も感づいているとは思うがこれはどうやらお前のＩＳのようだ」
「はい・・・多分そうでしょうね」
「今すぐフィッティング作業に入れ」
「え?」
「聞こえなかったのか、フィッティングを開始しろといったんだ」
なんで?
今すぐに!?
僕は今日別に戦わないし、保管して別の機会でも・・・・。
「いつまでも搭乗者未登録のまま放置しておくわけにもいかんだろう!!」
「あ、なるほど」
「今からそのＩＳを出す。早く準備して来い。着替えはアリーナの更衣室を使え今はだれもいないからな」
僕は織斑先生から、ＩＳ用のユニフォームを渡されと言われるままにアリーナの更衣室へ急いだ。
ＩＳスーツに身を包みピットへ戻ると、そこには大きなＩＳが折り畳まれた状態で鎮座していた。

「あの・・・大きくないですか？」
先ほどみた一夏の白式と比べてもふた周りぐらい大きい。横に織斑先生がいるからその大きさがより分かりやすかった。
「このでかさも、騒ぎの要因の一つだ、ほら急げ」
僕は先ほど一夏がやったみたいに、ＩＳへ体を預ける。
装甲が閉じ目の前のモニターには、様々な情報が処理され、その詳細が表示されていく。
そして、顔には大きなバイザーが取り付けられる。
「・・・これは！」
バイザーを通して見た世界は、これまで見たことのないほど鮮やかなものだった。
白黒映画から、一気に現代の３Ｄ映画に進化した気分だ。
バイザーのモニターの端には？Ｄｉｒｅｃｔ　ｃｏｌｏｒ　ａｄｊｕｓｔｍｅｎｔ？の表示。
直訳すると直接的色彩調整。
どうやらこのバイザーが、視覚に働きかけて欠落部分の色彩を補ってくれているらしい。
なるほど、確かにこれは僕専用のＩＳの様だと今更になって実感する。
初期設定が終了し、ハイパーセンサーが起動する。
不思議な感覚だ３６０度見えていない所まで、何があるのかはっきりとわかる。
これが・・・ＩＳ。
まだ初期設定が済んでいないため、本来の形は分からない。だがどうやら使用者の登録は済んだようだ。
「どうやら機体の設定は終わったようだな、では待機状態に戻しておけ」
織斑先生の言葉に従い、ＩＳを待機状態に戻す。鮮明だった世界が一瞬にして白黒へ。
・・・もう少し見ていたかったなぁ。

僕は名残惜しいかったが、叩かれることを思えば、白黒でも見えた方が痛くないし良いや。
待機状態の僕のＩＳはどうやら銃弾のネックレスになるらしい。
ライフルの銃弾ぐらいの大きさで、その大きさに似合った重さがある。
こんなの首からぶら下げてたら、この国じゃ大問題なんだろうなぁ・・・。
注意しよ。
そして考えを切り替えると、頭のなかでもう一つの疑問が首をもたげた。
・・・そう言えばこのＩＳの名前なんて言うんだろう。
モニターには表示されなかったけど・・・
「何をしている？戻るぞ。あの馬鹿が心配だ」
「ああぁ、はい」
織斑先生に連れられ、ピットへと戻る。
その最中もずっと、名前やらなんやら色々な事を考えていた。

ピットへ戻ると、あれ？一夏のＩＳの形が違う・・・。
「ファーストシフトだな、あれが本来の白式の形なんだ」
「先ほどから一夏は刀しか使っていないようですが、白式にはあれしか武装が無いのですか？」
箒が織斑先生へ尋ねる。刀しかないっていうのは大変だけど、良いんじゃないの。
一夏って剣道の特訓してたし。
「そうだ、白式にはあの刀・・・雪片しかない」
そしてセシリアのＩＳがモニターへ映る。セシリアのＩＳは見ただけでわかる射撃特化型のＩＳ。
そんなの相手にに刀一本で、戦っていたのか・・・。
「だが、あれ一本あれば十分なのさ・・・あれには特殊な能力もあるしな」

言っている間にも戦闘は続く。
セシリアのビットを一夏が正確な一振りで破壊していく。そして一瞬のすきをついて肉薄。
「とりあえず、俺は千冬姉の名前を守るさ！」
モニターから聞こえた自信たっぷりな声に、誰もが勝利を確信した。
だが・・・・
『試合終了、勝者　セシリア・オルコット！』
試合終了の声とともに、頭を抱える織斑先生と、ポカンとした一夏をはじめとする面々がそこにいた。

「あそこまで言ったら普通は勝つだろう・・・」
「面目ない」
箒に呆れた声で言われ、情けなく頭を下げる一夏。
「でもさ、何で負けたの？」
僕の疑問は一夏をはじめとする皆の疑問だ。
それに織斑先生が答える。
「バリア無効化攻撃を使ったからだ。雪片の特殊能力がそれだ」
「でも一気に俺のシールドエネルギーがゼロになったんだけど」
「その特殊能力をお前は、何のの代価無しに使えると思っているのか？お気楽な奴め」
「なるほど、つまりその能力を行使するためには、自分のエネルギーを攻撃に転化する必要があると言う事ですね？」
箒が得心したと言うようにうなずき、織斑先生もそれを肯定した。
中々厄介な武器だな。もろ刃の剣じゃないかそれ・・・。
出しどころを間違えなければ、最強なんだろうけど。
「さて・・・馬鹿の自爆の所為で思いのほか時間が余ってしまったな」
「馬鹿って・・・というか、織斑先生一つ聞いていいですか？なんでアルディはＩＳスーツにみを包んでいるんです？」

その問いに織斑先生は、チラリと僕を見て、ふむとうなずくと、再び一夏へ向き直った。
「丁度いいな・・・織斑、まだ行けるか？」
「え？体力は大丈夫ですけど」
「よし、すぐにエネルギーを補充しろ。これより予定外だがエキシビジョンマッチを行う！」

「「え？」」

そこに僕と一夏の抜けた声が響いた。

第2話～アメリカからの贈り物～（後書き）

こんにちはしるくです。
第2話ではセシリア、一夏の戦闘シーンを少し離らたピットから書いてみました。
そしてアメリカから届いた贈り物、アルディのＩＳとはいかに？

にしてもまだまた天候が安定しませんねぇ。
さむかったり暖かかったり雪や雨・・・
いつになったら暖かくなるのか・・・

お体にはお気を付けくださいね！
それでは第3話でまたお会いしましょう！

第3話～射撃の妖精とセシリア～

え？
え！？
なにエキシビジョンマッチって・・・。

エキシビジョン：英語表記？ｅｘｈｉｂｉｔｉｏｎ？
意味：公式記録に残らない、公開演技や模範試合

・・・って言葉の意味を考えても仕方がないじゃないか！！
そうじゃない、そうじゃないよ。
いきなりなんで？
「何をしている、サウスバード。織斑は既にエネルギーの補給に入ったぞ。お前も準備しろ」
ちょっと一夏！なんで素直に従ってるんだい？
思わず一夏に詰め寄ろうとしたが、一夏の顔を見てそれをやめた。
一夏の顔が、？お前、また殴られたいのか？？という事を物語っていたからだ。
うぅ・・・。
再度織斑先生を見る。
うわっ、箒の睨みなんて足元にも及びそうにないほどの、蛇睨み。
・・・はぁ。
まだ初期設定しか済んでないのになぁ。
僕は渋々、ＩＳを起動させる。弾丸型のペンダントが光り一瞬で装甲を展開。
一気に視点が高くなり、周囲に本来の色が塗られてゆく。
バイザーのモニターには、いまだに先ほどの段階では処理しきれなかったデータが
次々に処理されていき、装甲やインターフェースのフィッティング

が行われていく。
「大きいな・・・」
ぽつりとこぼした箒の声も、ＩＳのハイパーセンサーは拾ってくれる。
「僕も思うよ、一夏の白式に比べても明らかに大きいからね」
「でもそれ、まだファーストシフト前の形だろ？本当の形はどんなだろうな」
確かに一夏の言うとおりまだファーストシフトへ移行していない。
モニターに残り時間が表示されているが、まだ少しかかりそうだ。
そのため背部の大型スラスターも動きが怠慢で、多分今飛べば機動力は皆無だろう。
「準備はできたのか織斑？」
「あ、はい終わりました」
「サウスバードは？」
「動けますけど、まだそこまで激しくは・・・」
「・・・そうか、織斑先に出ていろ、サウスバードは後どれぐらいかかる？」
僕は再びモニターで確認する。インストールバーの下に予想終了時間が表示されている。
「えぇと・・・あと3分ぐらいです」
「よし、織斑出ていろ、準備している間にこちらも終わるだろう」
「分かりました」
待ってるぞと、言い残し一人ピットから飛び出す一夏。
はぁ、ここまで来たら覚悟を決めよう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

自分が勝ったと言うのにどこか釈然としないセシリアは、スポーツ

ドリンク片手に
汗をタオルでぬぐい、ロッカーのベンチに腰をおろしていた。
この感覚が何なのかはわからない。
いつも勝った後にはこんな感覚は無かった。
あくなき勝利への渇望。
そして今回も、過程はどうあれ自分は勝利を収めた。
でも・・・その気持ちは沈んでいた。
だがそれは、一夏に対するものでは無かった・
アルディ・サウスバード・・・・。
私と戦っていないあの男。
でも過去に一度私たちは・・・・
・・・・忘れてしまったのかしら。
でも名前を覚えていてくださいましたし・・・・。
セシリアはかぶりを振って考えを切り上げる。
このままこの考えをつづけたところで、気分が沈んでいくだけでプラスにはならない。
・・・ふぅ、まぁ今はそれよりもシャワーですわ。
浴びてスッキリすればこの気持ちも晴れるでしょう。
そう思い立ち上がった時だった。ロッカールームにまで聞こえるほどの歓声が上がる。
なんですの？
今日の試合はもう終わったはず。
いったい何が・・・・。
気になったセシリアは、自分のピットへ急ぐ。
ここからならそちらの方が近いからだ。
ピットのハッチから、何を騒いでいるのかを確認する。
辺りを見渡すと、そこには織斑一夏のＩＳ？白式？がいた。
・・・何をやっていますのしかも一人で？
間違いなく先ほどの歓声は、あの男が再び出てきたことだろうが、
何をしに出てきたのだろうか。

勝ったなら凱旋で、再び出てきてもおかしくはないが、彼は負けた。
だがその理由はすぐにわかることとなる。
あの男が出てきたピットから、もう一機見たことのないＩＳが飛び立ったのだ。
なんですの、あの機体は！？
セシリアはブルー・ティアーズのモニターを起動させ、データを照合させるが結果は・・・。
？該当データ無し？
一体あれは・・・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

？Ａｆｏｒｍａｔａｎｄａｆｉｔｔｉｎｇｗｅｒｅｆｉｎｉｓｈｅｄ．ＰｌｅａｓｅｐｕｓｈｔｈｅＣｏｎｆｉｒｍｂｕｔｔｏｎ．？
（フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください）

「織斑先生終了しました！」
「よし、行け！」
勢いよくカタパルトが、僕とＩＳを打ち出す。その最中ようやく戦闘用のＯＳが起動したようだ。
そして、モニターには次のような文字が躍る。
？Ｗｅｌｃｏｍｅｔｏｓｔｒｉｋｅｂｉｒｄｉｅ！？

ストライクバーディ・・・それが名前。
良いじゃないか、良い名前だ！
射出されると同時に僕は、翼を広げた。
それと同時に光に包まれ、？ストライク・バーディ？は本当の姿へ

とその形を変える。
元々大きかったスラスターは長方形のおおきな物に姿を変え、更に外観が武骨さを増す。
そして色は鮮やかな青色に縁どりとしてオレンジのラインが走り、両手には大型の荷電粒子砲が握られている。
腰部には・・これはプロペラントタンクだろうか、菱形の大きなエネルギータンクが取り付けられている。
これで、僕専用になったって言うわけか。
「派手だな、アルディ！」
プライベートチャンネルを通じて、一夏の声がする。
「一夏の程じゃないよ。ただ大きいだけだしね」
あいさつ程度に、軽口を言いあい、互いに戦闘態勢を整える。
さて、行こうか！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アルディのＩＳのデータは、教師陣の、端末にも送られてきていた。
「ストライク・バーディだと？」
「織斑先生ご存じなんですか？」
意味深につぶやいた、行動に疑問を感じた山田君が尋ねてくる。
「確か、記憶が正しければ、私がモンド・グロッソの決勝であいつの姉と戦ったときに使用したいたＩＳがそんな名前だった気がする」
「えぇぇ！じゃ、じゃあ、あれヴァルキリー機じゃないですか！ローラさんって確か射撃部門で優勝してましたよね！？」
確かに、ローラは総合優勝こそ逃し、？ブリュンヒルデ？の称号は得られなかったが、射撃部門の部門別では優勝し？ヴァルキリー？の栄誉が与えられている。
だが、と私は思案する。
？ストライク・バーディは果たしてあんな形だったか？と。
もっとシャープだった気がするし、あそこまでゴテゴテしていなか

ったはずだ。
それにあれはアルディの専用機。ローラのとは・・・・・・
あぁ、あぁ、そうか。そう言うことか。
「ふふ、山田君あれは確かにストライク・バーディだが、当時のものとは違うよ。
おそらくはあれを元にして、新しくＩＳを組み上げたんだろう」
「え？」
何事でもそうだが、一からすべてを作るには莫大な予算と時間が必要だ。更に人手も。
だが、なにか既存の物がありそれをチューンなり、カスタムするのは、
一から作るよりも遥かに簡単だし時間も費用も下げられる。
「つまり、延長線上という事ですか？」
「そういう意味では、さっきいったヴァルキリー機というのは正しいかもしれないが、
まったく同じというわけではないさ。それに戦いはＩＳで決まらない」
そうだＩＳがいくら優れていようとも、操るのは人間。
乗り手がヘボでは、性能を生かしきれないだろう。
フフッ、さて見せてもらおうか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

先制したのは一夏だった。
先のセシリアとの戦闘の際に学んだのか、直線的な動きではなくランダムに
飛行軸を変えて接近。ヒットアンドアウェイで正確に攻撃を当ててくる。
当ててくるのだが・・・。
「ちょ、お前のＩＳ固すぎるだろ！！」

「見た目通りで・・・」
そうさっきからほとんど、一夏はシールドエネルギーを削り取れていないのだ。
だが、いずれにしてもこれでは攻撃に転じられない。
僕は、展開可能な武装一覧を呼びだし、一夏の攻撃を最小限避けつつそれに目を通す。
そこにあったのは、三つ。
現在両手に構える、荷電粒子砲？ファイアーフライ？
背部火器内蔵スラスター？ウェポンスクエア？
そして、特殊音響兵装？ハウリングエコー？
ん、火器内臓？
僕はアイ・タッチでウェポンスクエアを選択。
その詳細が表示される。
「こりゃぁ・・・」
その内容に驚いた。
左右合わせて六門のミサイルポットに更に威力の高い、高圧荷電粒子砲とそして内臓の小型バルカン。
これに手持ちの？ファイアーフライ？を合わせた全砲門射撃まで可能とある。
・・・つまりこのＩＳは機動力を全く考えていない、重装甲重砲撃戦仕様の特化タイプということか。
だとすると現在の状況はかなりまずい。
ただでさえ距離を取らなければいけないのに、機動力不足と特性把握の遅さから、一夏に接近を許してしまっている。
「余所見するとは、余裕じゃないか、アルディ！」
「余所見じゃない、理解してただけだよ、このＩＳを！」
僕は、両手の？ファイアーフライ？を狙いもつけず無造作に放つ。
別に狙っているわけじゃない。要は牽制だ。
「おっと！」
一夏が、身をひるがえして、その射撃を次々に回避する。

かかった。
僕は口元を緩め、射撃によって次第に動きを制限していく。
自分の行動範囲が狭められているということは一夏も気づいたらしい。
ハイパーセンサーの映像からも焦りの色がうかがえる。
同時に、僕は？ウェポンズスクエア？のミサイルポットを展開。
「ｌｏｃｋ－ｏｎ」の表示が出るや、全弾を発射する。
「全部当たれば、流石に落ちるよね？」

ドガァァァァンッ！！！！
爆煙が、一夏と白式を飲み込んだ。

・・・やったかな？
――――ッ！？

いやまだだ！！
黒煙の中から、真っ白な機体が光を受けて輝く。
「避けたの！？」
「流石に同じ手はくわねぇよ！」
同じ手とはおそらくセシリア戦の事だろう。
どうやったのかは見えなかったが、一夏のＩＳに損傷らしい損傷は見受けられない。
つまり全弾回避されたという事。
っちぃ！
「今度は俺の番だ！」
一夏は今度は突っ込んでくるのではなく、僕の周囲を一定の距離を取って回る。
「お前のＩＳ確かに、攻撃力と装甲は大したもんだけどさ、機動力では俺の方が上なんだよな！」
っく、てかはっきりってこのＩＳ。大きいし、機動力もない。

単機運用を前提にしてないことない！？
それとも僕がまだ何か使いきれてないのか？
だが武装は大体見たし、機動性能だって・・・。
待てよ。
僕は背部の巨大なスラスターを見やる。
・・・これって結局、荷電粒子砲とか打つ時は前にせり出すんだよな。
ってことは・・・、これひょっとして・・・・。
？３６０度どの角度にも動いたりする？？
試してみる価値はありそうだ。
僕は一夏を見やる。
いや正確にはハイパーセンサーでその位置を見ると言った言い方の方が正しい。
縦横無尽に動く一夏の位置を確認しながら、慎重にスラスター角をイメージする。
そのイメージに従いスラスターが、任意の方向へ動き始める。
やっぱり思った通りだ。
そして、一夏がある方向で向きを変え一気に距離を詰めてくる。
「そこかぁ！！」
その瞬間一気にスラスターに火がともり、方向転換。
逆さになりながらも、一夏を素早く正面にとらえることに成功する。
「いぃ！」
「もらった！！」
今度は狙いをつけて、？ファイアーフライ？が放たれる。
真正面から受けてしまった一夏は、体勢を崩しながらも、その後の追撃をなんとか回避したが、
もうこちらのターンだ。
そうか・・・だんだんわかってきた。
？ストライク・バーディ？の戦い方が！
この機体は、動いて狙い打つチャンスをうかがう戦法ではなく、

フレキシブルに動く巨大なスラスターを利用して、高度を固定し自分が素早く３６０度旋回しながら
狙いを定め、強大な火力に物を言わせて戦う戦法が有効なのだ。
万一攻撃を貰っても、堅牢な装甲がそれを守ってくれる。
言ってみれば、固定砲台か・・・。
同じ要領で、確実に正面に一夏をとらえ続け射撃を続ける。
回避もだんだん苦しくなってきたんじゃないかな？
僕は？ファイアーフライ？とミサイルで十分にタイムを稼ぐと、
？ウェポンスクエア？を全展開させる。
スラスターが前両肩の上か前にせり出し、それまでスラスターのサポートをしていた部分が更に前に突き出しマズルサポートの役割を果たす。
そしてスラスターのバーニア下部に取り付けられた高圧荷電粒子砲と小型バルカン、マズルサポートの上部に取り付けられたミサイルポットに加えて手持ちの、？ファイアーフライ？を加えた強大な火力が一気に放たれた。

全砲門一斉射撃？アヴァランチ？
そして雌雄は決した。

『試合終了、勝者アルディ・サウスバード！』

・・・あ、あはは。
これ使いどころ間違えると危ないかも。
使っておいて何だが、この一斉射撃。どうやら何度も使える代物ではなさそうだ。
気付くと、余裕だったエネルギーは底を尽きかけ、シールドエネルキーも半分ほど無くなっている。
つまり、これエネルギーとシールドエネルギーの両方を使うのかぁ。
恐らく、最低限飛行や本体維持に必要な余力分のエネルギーを残し

て、それでも尚足りない部分はシールドエネルギーで補うという方法で、この攻撃は行われるのだろう。
それにだ。一回使っただけで、？ウェポンスクエア？から嫌な音がする。
どうやら本体にも、かなり負担を強いる攻撃の様だ。
・・・・って、はッ！！
一夏は！？
直撃だったけど・・・・。
「一夏大丈夫かい？」
「踏んだり蹴ったりだぜ・・・」
わ、悪かったね、ほんと。
僕はせめてもの償いに、一夏をピットまでえい航した。

ピットで待っていたのは、箒と織斑先生、そしてセシリアだった。
僕と一夏がＩＳを待機状態に戻すや否や、一夏には箒が、僕にはセシリアが詰め寄ってきた。
「あなた、やっぱり私に嘘をついていましたのね！」
「えぇ？流石に僕が嘘つきって言うことは自覚していても、セシリアに何か嘘ついたかな・・・」
「つきましたわ！！あなた専用機はないと、おっしゃっていたではありませんか、それがこれはどういう事ですの！！」
あぁそのことか。
いやでもあの時点では本当に無かったし、それに？ストライク・バーディ？が届いたのだって急すぎた。
少なくともあの時点では本当に、僕はＩＳを持っていなかったのだ。
そこへ織斑先生が助け舟を出してくれた。
「そう言うなオルコット。今日急に届いたんだ」
「む、むうぅ・・・」
それでも納得がいかない、セシリアだったが、織斑先生の言ったことということもあり、

追求をやめる。・・・・そうこの場では。
「ちょっと来てくださいな！」
「ま、また！？」
今度はセシリアに首根っこを捕まれピットを退場する羽目になった。

とりあえず着替えを済ましてからという僕の提案に、首を縦に振ったセシリアと分かれ僕は着替える。
ジャラ・・・。
弾丸のネックレス型をしている待機状態の愛機。
専用機か。
姉さんはどうして、僕にこれを届けたんだろうか。
何か理由があるのかな。
・・・・・・・まぁいずれわかるだろう。
それよりも今はセシリアだ。
待たせて何を言われるかたまったもんじゃない。
・・・までよ。
セシリア・オルコット・・・・？
なんかどこかで、その名前を。
・・・・えぇい、良いや。とにかく行こう。
僕はセシリアの待つ、アリーナのロビーへと急いだ。

「遅いですわよ？」
「はぁ・・・すいません」
「で、どういうつもりですの？」
どういうと言われても・・・。
セシリアの意図を測りかねる僕は、答えに窮する。
「あなた私に嘘をついていますわよね？」
「いやだからＩＳの事は本当に・・・」
「違いますわッ！」
ひと際大きい声に、少し驚き後ずさってしまう。

一体なんだって・・・・・。
「本当に思い出しませんの？」
「思い出す？」
・・・・・嘘の事じゃなかったのか。
嘘の事じゃ・・・・・ん？
待て待てさっきも、同じような考えが浮かんだが、あの時軽く流して軽口を言いあったが、
教室での会話には不審な点がいくつかある。
まずなんでセシリアは僕の姉さんを知っていたんだ？
そりゃ有名人だし、どこか雑誌か新聞で見たのか。
だがそこから、弟がいると言う事まで想像が及ぶだろうか？
そして何より？僕はなんで彼女を知っていたんだろう？
スッと口をついてでてきた名前だったが・・・・。
そしてさっきから、頭の隅に引っかかっているような気持ち悪さは？
・・・・・セシリア・オルコット。
オルコット・・・・・・。
その時ひとつの単語がぽつりと口をついた。
「・・・・セシリー」
その単語にセシリアの顔がはっとなる。
そして確信する。
セシリー・・・・まさか
「セシリーなのか？」
「ふぅ、ようやくですの・・・」
「あ、いや・・・・・」
驚いた、そうか、そうだ。
僕たちは、子供のころ一度？会っている？
昔からアメリカで、ＩＳの操縦者として抜きんでていた姉は、各国の企業が勧誘に訪れるほどの人材だった。
そしてあるとき、イギリスからＩＳ関係の会社を経営しているので、是非ともわが社へ来てほしいという女性が現れ、その女性と共に訪

米したのが、セシリアだった。
交渉は意外に伸び、二週間近くその女性はアメリカで粘りの交渉を行っていた。
結局交渉は決裂に終わったが、その間色々カリフォルニアのサクラメントの地を案内して回った記憶がある。案内と言っても、裏路地や秘密基地チックな所を連れまわしただけだったが、
彼女はとても楽しそうだった。
毎晩僕は、服を彼女は綺麗なドレスを汚しに汚しまくって帰っては怒られてたっけ。
確かその、初日に名前を言いあったんだ。
「あなた、名前は何といいますの？」
「僕？僕はアルディ。アルディ・サウスバード。君は？」
「セシリア・オルコットですわ」
「じゃあセシリーだね」
「ま、まぁ良いですわ特別に許しましょう、ではあなたは、アルディ・・・・そう、アルですわね」
こんな風に。
「そうか、すっかり頭から飛んでたなぁ・・・・」
「それもお得意の嘘ですの？」
「いや。ほんとに」
「ま、思い出しただけでも良しとしましょう」
さっきまでの雰囲気はどこへやら。
フフッと笑う。セシリーはいつも通り自信たっぷりの顔だった。
「あの時、あなたに戦いを吹っ掛けたのは、あなたが私の事を忘れていたからですわ。
名前は覚えてらしたのに・・・。結局戦えませんでしたが」
「だから・・・悪かったよ」
「冗談ですわ、もう怒ってなどいませんわ」
またクスリと悪戯っぽい笑みを浮かべるセシリー。
・・・なんて言うか、見ないうちに綺麗になったよなぁ。

まぁ、会ったのはもうだいぶ前の事だし、それから互いに月日が流れた。
成長するのは当たり前か。
「あら、私に見とれてましたの？」
「違う・・・いや違わない・・・？」
「あら、あなたらしくない返答ですのね、あいまいな返答を返した罰ですわ、
これから一緒にご飯を食べに参りましょう」
「それが罰なの？」
「もちろんおごりですのよ？」
そ、それは、確かに罰だ・・・・。
ふぅ・・・まぁ良いか。
それじゃあと・・・ロビーの出口を見やる。
・・・・そして絶句した。

そこに群がる女子女子女子女子・・・・・。
な、なんだこれ。
「あ、私達はお構いなく」
「良い感じだったよね今、しかもアルディ君セシリアの事セシリーとか呼んでたし！」
「これは何かあるよ、絶対・・・」
「米英二国間同盟だ～」
中々旨いこと言うな・・・じゃなくて。
またこのパターンだ。
最悪だよ、さっきの全部見られた。
「ねぇねぇ、セシリア、アルディ君とどういう関係よ！？」
「まさかのまさかで・・・・」
唐突な問いに、驚くかと思いきや、セシリーはにこやかに笑うと、
女子たちに意味深な言葉を残した。
「さぁ、どうでしょうね、それでは待っていますわよ、アル」

今ここでその名前で呼ぶのは、まず過ぎる・・・・・・。
絶対わざとだ・・・・。
そして当然その呼び方は、普通じゃない。
ごく親しい間柄であるという事を悟った女子群が先ほど以上に騒ぎ立てる。
「聞いた聞いた!?いまセシリア、アルって呼んでたよ!?」
「これは間違いないわ・・・・間違いない!」
「専用機持ちのビックカップル・・・・」
色々誤解があるようだ。
流石の僕もこの場を切り抜ける打開策が、口をついてでてこない。
今僕に出来ることと言えば・・・・
「あぁ・・・えぇと・・・さよならッ!」
逃げることだけだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アルディのＩＳが起動したその日の夜。
アメリカではすでに朝日が昇り多くの労働者たちが仕事に励みだす。
そしてローラも例外ではなく、？ストライク・バーディ？の稼働データに目を通していた。
ローラが自動転送するようにプログラムを指示したもので、これは今後の研究開発に活かされていく。
「うん、初稼働にしては上出来だわ」
一人、つぶやいたのだが意外に大きかったらしい。
「朝っぱらから、うるせぇなぁ」
「それはあなたもでしょ、イーリ」
「あら、ナターシャもいたのね」
アメリカの国家代表ＩＳ操縦者イーリス・コーリングとナターシャが軽口をたたきながら研究室に入ってくる。

「もって、何よもって。私はおまけ？」
「ありがたく思えよな、あたしのおまけなんて光栄じゃねぇか」
「十セントチョコのおまけぐらいかしら」
「てめぇ、流石に安すぎだろそれ・・・」
「おまけの方が高くなっちゃったわね」
クスッとナターシャは笑うと、それを見てイーリスも口をとがらせてフンと鼻を鳴らす。
私はそれを横目で見つつ、データに再度デーダに目を落とす。
「フレキシブルターンは成功、あら、あの子？アヴァランチ？を・・・」
ブツクサ言う、ローラに興味を持ったイーリスとナターシャが、軽口をやめデータを覗き込んでくる。
丁度机に座っていたので、ナターシャは椅子越しに、イーリスはデスク越しにそれぞれデータを眺める。
「これ、ひょっとして例の機体の実戦データ？」
「例の機体？」
イーリスの頭に疑問符が浮かぶ。
それを見てナターシャが補足説明を続ける。
「ここで開発されてた、？ストライク・バーディ？の事よ。ほらアルの専用機で造ってたじゃない」
「アル？・・・あぁ、ローラの弟か。にしてもストライク・バーディねぇ。このデータを見る限り原形無ぇじゃねぇか」
「仕方ないわよ、そのまま使うにはクセがありすぎたし」
元々？ストライク・バーディ？は射撃特化型とはいえ、有り余るほど高い機動性能がウリの第二世代ＩＳだった。だが、それがあまりにクセのある代物で、特に３６０度どの方向にも回る特徴的な、？フレキシブルスラスター？は慣れるまでに相当な時間を有し、最悪の場合扱いきれないという事態になりかねないものだった。
そのため、アルディの専用機ベースとして本機が選ばれた時、初め

はこのスラスターを外す方向で開発がすすめられたのだが、あまりの重装甲銃火砲の所為で機動性が確保できなくなった為に、急きょこのシステムを方向転換用に組み込むことになったのだ。

「第二世代つっても、火力だけ見たら第三世代に迫るんじゃね？」

「火力だけ見ればね。第二世代機の初期型のＩＳとしてはトップクラスの火力だから」

おっかねぇの。とイーリスは続け、黙ってまたデータを見やった。

・・・・しっかり、あの子を守ってあげてね、？バーディ？

ローラは心の中でそう呟きながら、自分の仕事に移っていく。

今日も仕事に忙殺される日常が始まっていった。

第3話～射撃の妖精とセシリア～（後書き）

どうもしるくです！
第3話お読みくださいましてありがとうございます！
原作のストーリーをなぞりつつ、オリジナルに展開していこうと思います！
もうすぐ鈴の登場ですねぇ、さてどう絡ませていくか。。

そう言えば最近思ったんですが、原発が危機を乗り切っても、あの原発使えませんよね。
どうするのかなぁ・・・

ではまた4話でお会いしましょう！
それでは！

第4話～転校生はチャイニーズ～

授業でも、先日ＩＳの実習が始まり、いよいよ皆がＩＳの自主練に取り組み始めていた。
かく言う僕も、一夏は箒と僕はセシリーにそれぞれレクチャーを受けている。
受けているのだが・・・。

「だからこう、クイッと言う感じだ！なぜわからん！！」
「違いますわ！良いです事、アル。先ほどの機動では接近されたときにあまりに無防備。
ロール角は三十五度を維持、そしてそのままピッチ角を・・・だから違いますって！」
僕と一夏は互いに顔を見合わせると、口をそろえてこういった。
「「ごめん、わからん」」
見事なハモりっぷりに二人の顔が引きつる。
「大体、箒そのクイッて感じってどんなんだよ・・・」
「セシリー、細かすぎる・・・」
さっきからレクチャーを受けているのだが、イマイチ分かりにくい。
だがまだセシリーは具体的な数値を上げてくれるだけでも本当は感謝しないといけない。
箒に至っては・・・
「クイッて感じで動いて、ズガーンと当てて、スパッと行く感じだ」
・・・
暗号だろうかこれは・・・。
「全く、よく見ていろ一夏！こうだな・・・こうして・・・クイッて感じだ」
箒が？打鉄？を使って実演してみせる。
「おぉ、そこのクイッて感じか、俺の想像とは違ったよ」

僕もそのクイッて感じだったのかと納得するが、今はそれどころじゃない。
こっちはこっちで・・・
「どこを見てらっしゃいますの！？ほらもう一度やりますわよ」
「あぁ・・・はい」
渋々従うが、やっぱり分かりにくい・・・。
もう一度浮上して、スラスター角を細かく調整する。
バシュッバシュっと細かく姿勢制御をスラスターが行っているのが分かる。
はじめて使ったあの時は、一夏にまだ直線的な動きが混ざっていたからそれほど難しく感じなかったが、
セシリーを、仮想的としてやってみると、全く狙いが定まらなかった。
まぁ、代表候補生相手だから当たり前と言えば当たり前だけど。
全方位特殊機動旋回。通称？フレキシブルターン？。
その機動をマスターしない限りこのＩＳを使いこなしたとは言えないとセシリーにも言われたが、それはそうだと思う。
？ストライク・バーディ？は前も言ったが固定砲台色の強すぎるＩＳだ。
そのためにも、回頭速度の向上は至上命題だった。
何が難しいかって、普通の砲台なら横に三六〇度で良いのだが、僕の場合は上下左右に三六〇度なのだ。
二次元から一つ次元が増えるだけでここまで難しくなるのか。
まぁ、何にしてもやってみよう。代表候補生の言うことだ。
下手な事は言わないはずだからね。
「それでは行きますわよ、私の今から言う角度にＩＳをあわせてくださいな」
「うん・・・」
しばしの沈黙の後、セシリーの声が響いた。
「ロール四五、ピッチマイナス十！」

聞こえた通りに、機体を制御する。
セシリーは僕が、角度を合わせるのを待たずに次々に角度を言い放っていく。
「次ロール十、ピッチプラス三五、続いてロール二四六、ピッチマイナス七六！」
バシュッバシュンッ！
小刻みに角度と姿勢を制御し角度を合わせていく。
矢継ぎ早に発せられるセシリーの指示を、ひたすらに追う。
そして何十回それを繰り返し、セシリーがひと際大きな声を張り上げる。
「最後ですわ！ロール一五九、ピッチプラス八七！」
「っく！！」
しまった、噴かし過ぎた！！
ここまで来て失敗したくはない。
僕は反動で行きすぎた機体を、小型バーニアの全噴射でなんとか止め，
最後は両スラスター全部で勢いを殺して、なんとか範囲内で機体を制御させる。
「くっはッ！どうかなッ！？」
バッとそのままセシリーを見やる。
セシリーは少し何かを考えている。
・・・まさか、ダメ？
「ま、及第点ですわね」
その言葉を待っていた・・・。
僕は、地上へおりるとＩＳを待機状態にしてそのまま地面に座り込む。
「はぁはぁッ・・・つかれた・・・」
「もう、このぐらいで、へこたれてしまわれても困るのですけれど・・・」
「そうは言うけどね・・・大きさを・・はぁッ、考えてよ・・・」

?ストライク・バーディ?はＩＳにしては非常に大きな部類に入る。
一夏の白式と比べても、その大きさは一回り半ぐらい・・・そのぐらい違う。
その分巨大なスラスターを備えて入るが、大きさの質量分はどうにもならない。
いくらＰＩＣで、操縦者への負担を軽減しているとはいえ、機体の重量分はごまかしようが無いのだ。
「それを使いこなしてこそ、一流ではなくて?」
「一流ね・・・」
「それぐらいになっていただきませんと、流石に不釣り合いですわ」
「不釣り合い・・・何に?」
「・・・い、いえ、何でもありませんけど・・・・・」
急にそっぽを向いてしまうセシリア。・・・なんだろうね。
「そ、それよりももうすぐお昼ですわ。食堂へ行きません事?」
「あれ?もうそんな時間なんだ・・・そうだねおなかも減ってきたし」
「ん?飯か・・・箒、俺たちも切り上げて食いに行こうぜ!」
「話を反らす・・・む、むぅまぁお前が行くというのなら・・・仕方がないな行くとしよう」
素直に行くと言えばいいのになぁ・・・
食堂は、今日は休みと言う事もあり、出掛けている生徒も多いのか、それほど混みあってもおらず、僕たち一行は奥のテーブルへ腰かける。
ちなみに、僕と一夏は日替わり定食。箒は和食御前Ａそしてセシリーは・・・サンドイッチ?
「セシリー、流石にあれだけ動いてサンドイッチって言うのは少なすぎないかい?」
「い、良いのですわ、私は・・・その・・・そうエコな女なので

す！」
え、エコな女！？
初めてそんなフレーズを聞いたけど、具体的にはどんなんなんだ？
「大方無理なダイエットで、倒れるパターンだな」
「ちょ、っちょっと箒さん？変な事おっしゃらないでくださいな」
「何がエコだ、言い訳としても苦しいな」
「食べた養分を全部胸に回してらっしゃる方に言われたくありませんわ！」
味噌汁をすすっていた箒が盛大に噴く。そしてむせる。
「おいおい、箒、大丈夫か？」
一夏が心配そうにのぞきこむが、回復した箒はそれを気にも留めず、セシリーに詰め寄った。
「お前、言って良いことと悪いことがあるだろう！！」
「なんですの！本当の事ではありませんか？！」
「まぁまぁ、二人とも・・・・」
「そうだってお前ら落ち着けって」
ワイワイ騒いで食べる事はいいことだと思う。
ただ流石に僕らを挟んで、睨みあうのはやめてほしい。
・・・その・・だから。
色々と・・当たるところとかあるわけで。
「大体、箒さんは！」
「セシリアだって！」
バシン！バシン！バシン！！！バシンッ！
「黙って食え」
「「「「はい」」」」
織斑先生・・・・。まさかいらしたとは。
ちなみに殴られた順に、箒、一夏、僕、セシリー、の順番だった。
なぜだが一番強く殴られた。

昼食を平らげ、ラウンジでくつろいでいた時。
「そう言えば一夏、転校生の噂は聞いているか？」
箒が唐突に口を開いた。
転校生か。
まず間違いなく女子だろうが、はてさてどんな子なのか。
「・・・・何か？」
「別に何でもありませんわ」
ジトーっとこちらを見ていたセシリアだったが、
言うや不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。
いや、別に変な事は考えてないよ。
「転校生ねぇ、でも珍しいな。箒が噂話に興味を示すなんて」
「別に興味があるわけではない、たださっき近くにいた生徒達が話をしているのをたまたま、耳にしただけだ」
「それを興味あるっていうんだろ？」
「ふん、屁理屈をこねるな」
「だけど、この時期に転校生かぁ、つい先日僕が来たばかりなのにね」
先日と言っても、もう数週間前だけど。
そんな、僕にセシリーが意見する。
「アル、確かにあなたが来たばかりですけれど、ここはＩＳ専門の育成機関なんですのよ？
今こうして私たちが、くつろいでいる間にも、各国ではＩＳ学園入学のために代表候補生やそれを目指す操縦者が切磋琢磨しているはずです。
そう考えても、今回の転校生も間違いなく代表候補生が来ると思って間違いなさそうですわね」
なるほどね。
確かにこの学園にＩＳ操縦者を入学させる意味は大きい。
この学園は日本に存在するが、原則どの国家機関にも分類されてい

ない。
そのため、新技術の開発・試験であったり、多くの国の代表候補生たちが集う学園なだけに、
各国とのＩＳ比較が容易に行え、かつ、操縦者は本国に関係なくこの学園で育成されていくので、
？入学した人数分のＩＳ操縦者の育成費用が浮く？これは国にとっても大きいことだ。
ＩＳだけでも国家予算の何割かを割いて行われる一大事業だし、当然国家代表、代表候補生の選出や育成にも、莫大な予算が必要となる。
だがこのＩＳ学園に一度入れてしまえば、その心配はほとんどなくなり、国は技術の開発だけに専念できるのだ。
これほど使い勝手のいい？実験施設？は無い。
「まぁ、今それを考えてもねぇ、今日は休みだし入ってくるとしても明日でしょ？」
「そうだな、気にしても明日になればわかることだし」
「一夏は・・・その・・・気になるのか？」
「そうだな、まぁ気にならないって言えば嘘になるけど」
「・・・そこは気にならないと言ってもらわないと・・・だな・・・その」
箒も・・・大変だなぁ。
一夏がここまでトウボクへ・・・・ん？
「唐変木ですわよ、アル、この前織斑先生に言われたばかりじゃありませんか」
あぁ、そうだそうだ。それそれ。
「・・・あなたも似たような、ものなんですけどね」
「ん？何か言ったかい？」
ボソッと何かセシリーが言った気がしたけど気のせいかな？
セシリーは何でもありませんわと口をとがらせ、無造作にコップを差し出す。

注いで来いってか。
はいはい、いきますよ、お嬢さま。
僕はコップを受け取ると、サーバーまで足を運んだ。

そう言えば一夏達が何を飲むか聞いてこればよかったね。
・・・・水でいいだろう。
箒は緑茶でよさそうだし。
セシリーは・・・・。なんだろう。
紅茶かな?
僕は、セシリーからしか貰ってなかったコップに加えて、備え付けのコップ三つを取り、
それぞれの液体を注いでいく。
そして整理されていた、トレーを取ってその上に乗せる。
それを片手で器用にバランスを取りながら、もといた席に向かう。
途中すれ違った女子に「わッ、まるでウェイターだね」と言われたが・・・・。そんな風に見えるのだろうか。
席に戻ると、そこでもやはり席の周りの女子から同じような事を言われた。
そうかな、と少し苦笑いしてそれぞれの前に、飲み物を置いていく。
その姿をセシリアは、ほうっとした顔で見ていた。
きっかけはさっき、誰かが言った?わぁ、まるで給仕さん?いや執事さんみたいだねぇ?という一言。
(アルの執事・・・・悪くありませんわねぇ・・・)
目の前には普通の制服姿のアルディがいるのだが、セシリアの目にはフィルターが掛かり、その服装が制服から燕尾服へすり替わり、
「どうぞ、お嬢様」と幻聴まで聞こえていた。
(お嬢様・・・・いい、良いですわ!)
そんな事を考えているとはつゆ知らず、アルディがセシリアに声を

かける。
「あの、セシリー、今更だけど紅茶でよかったかな?」
「良いですわ!!」
ガタッと勢いよく立ち、言い放つセシリアに対して、アルディは苦笑いで、「そ、そう・・・」と驚きを隠せずにいた。

その夜、僕と一夏はアリーナ使用ギリギリの時刻まで自主練に励んでいた。
コーチは変わらずセシリーと箒だったが、箒もセシリーも今回はより実践的にと箒は一夏と手合わせ。
僕はセシリーと、射撃訓練に勤しんでいた。
これがまた結構忙しい。昼間やっていた練習は角度をただ合わせるだけでよかったのだが、今回はそれに射撃が追加される。
自分で言うのもなんだが、射撃自体は苦手ではない。
姉も射撃部門で世界一に輝いているし、その姉からある程度の手ほどきは受けている。
だがそれでも、ハイパーセンサーによる瞬時捕捉、スラスター角調整、照準、射撃。
これだけの事を一度に行うのは至難の業だ。
だがそうは言っても、お手本と言ってセシリーは?フレキシブルスラスター?を持たない?ブルー・ティアーズ?で?フレキシブル・ターン?を行い見事にすべての的の中心を捉えていた。
セシリーによると
「私の?ブルー・ティアーズ?には?フレキシブル・スラスター?はありません、じゃあその機動は出来ないのかと言ったらそれは違う。
まったく同じことができないのなら、それに似たことのできる方法で、再現すればいいだけの話。

私が使ったのは、?アブソリュート・ターン?スラスター角を完璧に制御できるからこそ、可能な特殊旋回機動ですわ」
そう考えると、?ストライク・バーディ?にはこの?フレキシブル・スラスター?が付いている。
お手本を見せた相手が、いくら代表候補生とはいえ、こちらはその機動が確実に出来る機体なのだ。
僕は一通りの的に打ち終わると、体勢を立て直して、セシリアの横へ移動する。
成績は・・・・・・これまた酷いな、ほとんど的の外側じゃないか。
そのデータを見てセシリーは何か少し考えている。
「うぅん・・・・ちょっと?ファイアーフライ?貸していただけます?」
「え、いいけど」
僕はそう言って、右用の荷電粒子砲?ファイアーフライ?をセシリーに渡す。
受け取ったセシリーは、持ったり、構えたりして感触を確かめ、試しに表示されている的へ向かって一発撃つ。
当たった的が衝撃音と共に弾け、手元のモニターにデータが表示された。
「・・・・やっぱり」
そう言って?ファイアーフライ?を僕に返し、顎に手を当てまた何やら考え始めるセシリー。
僕は意図を測りかね、その顔を覗き込む。
「何がやっぱり?」
「先ほどからの、射撃訓練を見て思っていたことですわ。難しい角度なら仕方が無いにしても、簡単な角度射撃でも、的を外しかける。初めは腕かとも思いましたが、そうか思うと別もな的にはしっかり当てたりする。
これはおかしいと思って見ていましたが、先ほど一度撃ってみてその謎が解けましたの。

だから？やっぱり？なのですわ」
「えぇと・・・つまり？」
「簡単に言うと、あなたのＩＳは細かな射撃には向いていないと言う事ですわね。この？ファイアーフライ？も反動が大きすぎますし・・・。
高火力で狙いもつけずに辺りに砲撃をまき散らす。広域せん滅型と言えるでしょう」
確かに、あの時一夏に撃った？アヴァランチ？も一夏に直撃したものの、多くが地面や、アリーナのシールドに当たり爆散していた。
正確に誘導できるミサイル以外は、細々しく狙いを定めて・・・というＩＳでは無いらしい。
・・・待てよ、じゃあこの訓練はもう・・・
「今、この訓練は無駄だからもう終わりで良いと考えませんでした？それは違いますわ。そう言ったＩＳだからこそ、このような訓練が必要なのですわ、さぁまだもう少し時間はありますし、私がその・・・・・て、手取り足とり・・・・その」
「また、何かボソッと・・・」
「な、何でもないですわ！さ、再開しましょう！！」
それからもしばらく。セシリー教官の鬼のような訓練が続いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あぁ～もう受付どこよッ！！
無駄に広いわねぇ～～～ほんとに！！
電気の消えた通路を受付を探しさまよう少女が一人。
ツインテールで髪をまとめた小柄な少女は、小さなボストンバック一つを持って見るからに、いらついている。

ついさっき、探せばいいんでしょ！と何も考えずに足を踏み入れた自分を呪いたい。
外見から想像した以上に中が広かったのだ。
ほんとにもぉぉ～～～ッ！！あぁぁぁぁぁぁぁ！！！
わしゃわしゃと、自分の頭を両手で勢いよくかく。
こうなったらＩＳで空から・・・・。
とふと思ったが、その考えはまずい。
特にまだ受付も済ませていない状況で、ＩＳを機動させれば国家問題に発展する。
本国政府の官僚たちが、？頼むから軽率な事はしないでくれ？と頭を下げられるのは気持ちよかったが、それ以前に、少女の中にも流石にまずいという考えはあるようだった。
すぐにその考えを、ゴミ箱へ放り投げ、ため息をついて足取り重くトボトボと歩きだした。
しばらくすると、どこからか声がする。
それは彼女にとって誰よりも聞きたい声だった。
「結局、お前の擬音講座だったじゃねぇか・・・」
一夏だ！彼女はＩＳ学園に編入が決まった時、確かに実力が認められたその嬉しさはあったが、
何よりその学園に彼がいたという事が何よりもうれしかった。
一年ちょっと会っていない彼としかもこんなところで再開できるなんて・・・。
これはもう運命だ。明日にでも式場の予約を入れなければ！
そこまで興奮しきった、彼女の頭を一人の女子の声が一気に冷やす。
「一夏の想像力の無さの問題だ！」
「想像力とかの次元じゃねぇよ、宇宙人でも首かしげるぜ！・・・・・って聞いてんのか箒！！」
少女は、物陰に身を潜めさっきとは打って変わって冷めた目で男女を見送る。
・・・今の誰？なんで？あたしの？一夏となれなれしく話してんの？

親しそうに一夏も話してるし。
少女はスクっと立つと、本来の目的であった受付を探す。
程なく受け付けは見つかり、手続きも滞りなく済んだ。
「以上ですね。はいこれ生徒手帳です。ようこそＩＳ学園へ、凰鈴音さん！」
そんな明るい声も鈴音には届いていない。
バッと身を乗り出すと、事務員に詰め寄り一方的に質問を投げかけた。
「織斑一夏って何組かわかります？」
「え！？あ、織斑君ね。転校生にまで知られてるなんて有名人ねぇ」
「それで、何組なんですか？」
「一組よ、あなたは二組だから、お隣ね。そう言えば彼、クラス代表になったらしいわ」
クラス代表・・・あ、そーだ！
鈴音の頭にピコーンと電球が灯る。
「二組のクラス代表って決まってますよね？」
「えぇ、この時期ですからね・・・それが何か？」
「いえ、別に」
そう言って、受付を離れた鈴音だったが、別にでは無い。
ちゃんと頭の中では考えている。
待ってなさいよ一夏・・・・・。
あたし以外の女の子と、仲良くしてるツケは大きいからね・・・・・。
足取りは軽かったが、顔は反して引くぐらい怖かった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

いやぁ、今日の昼にもここにいた気がする。いや、いたね。

チラッと、壁に掛けられた横断幕を見るそこにはこう書かれていた。
?織斑一夏クラス代表就任パーティ?
ここは寮の食堂で、セシリーの特訓後二人でアリーナのロビーにいたところを、
一組の女子に半ば拉致されて食堂まで連れてこられたのだ。
それにしても騒ぐのが好きだなぁ・・・僕も嫌いじゃないけどネ!
「織斑君おめでとう!」
「一組の未来は君に任せた!」
などと、盛り上がっているが・・・。
「セシリー、君一夏に勝ったよね、なのになんで彼が?」
「そうだぞ、セシリア!俺は負けたのになんで代表になっているんだよ!」
僕の質問に便乗して、ガバッと、焦りの表情で迫る一夏にセシリーはさらりと答えた。
「辞退したからですわ、代表を」
「「どうして?」」
思わず声が重なるが、一夏は納得できていない声だった。
「ど、どうしてと申されましても・・・その・・・そう!あの試合は確かに結果私の勝ちでしたが、内容はどう取っても私の負けでした、だからですわ!」
腕を組んで、フイッと違う方向へ顔を背けるセシリーに、女子が横から茶々を入れる。
「え~。アルディ君のためじゃないの~?」
「セシリア、嘘は体に悪いのよ?」
「う、嘘ではありません!というかはじめて聞きましたわよ、そんな理論!!」
顔を真っ赤にして、大げさなアクションで否定するが、周りの女子のニヤニヤは止まらない。
「セシリアは愛くるしいなぁ~」
「可愛いなー可愛いなー」

「もうッ！やめてくださいな！！それにほら今日の主役は一夏さんでしょう！」
あーセシリアが怒った～っと最後まで茶化しながら、女子は一夏の方へと集まっていく。
まったくもぅ！と鼻を鳴らしながら着席すると、カップに入っていた紅茶を飲む。
「にしてもさ、本当にどうして辞退したんだい？あんなに自信満々だったじゃないか」
「先ほども言いましたでしょう、あれは私の負けだったと」
「本当にそれだけかい？」
「本当にそれだけです！・・・・それにほ、本当の事など言えるはず無いではありませんか・・・」
「ん？」
セシリアは、何でもないですわとアルディの追及を、そこで切らせると、昼間と同じようにアルディへカップを差し出す。はぁ・・・とため息をつくアルディだったが、受け取るとサーバーへ向かって歩いていく。
（ま、気を取り直して、お嬢様気分を味わうとしましょう）
セシリアの目には、また再び燕尾服のアルディが映っているのだった。

翌日。
結構みんなグッタリとしていた。
それもそのはず。昨日のパーティで騒ぎ過ぎたのだ。
だがそんな事を言っていては、織斑先生にどやされるのは目に見えている。
皆重たい身体をなんとか引きずって、表面上は明るくふるまっていた。

そんなクラスだったが、妙に皆ソワソワしている。
他でもない転校生の事だ。違うクラスだが、やはり気になるようだった。
「そう言えば今日か、転校生のくる日って」
「僕が来る時もこんな感じだったのかな？」
「あぁ皆、騒いでいたな」
「私も、あの日は教室に入ってから、その話を幾度となく聞きましたもの」
僕と一夏の周りには、セシリーと箒のいつものメンバーが立っている。
「何でも、中国の代表候補生らしいね」
「へぇ、中国人か」
「そう言えば二組のクラス代表は代表候補生では無かったな」
「でも、もう一度決まってしまったものを、覆せないでしょ？」
時期が時期だしね。僕は、箒にサラッと意見を述べる。
流石に転校生が代表候補生でも、決まってしまったものを・・・・。
にしても中国ねぇ。
いい時だけ先進国、途上国を使い分けるあの国に、正直言って良いイメージはしないかなぁ
なんてのを考えていたら、唐突に大きな声が一組を揺らした。
見るとそこには、全身から活発そうなオーラを放ったツインテールの女子が立っていた。
「覆せるんだなぁ～これが！」
効果音をつけるなら、？ドーン！？と言うのが正しい。
腕を組んで仁王立ちするその少女は、自信たっぷりの笑みをもらし、一夏を指さす。
「あたし、今日から二組の代表になったんだからね。一夏、今度のクラス対抗戦覚悟なさい！」
どうやらその口ぶりから、一夏の知り合いの様だ。
そして対する一夏も、彼女を見て気さくに笑う。

「お前・・・鈴、鈴なのか？久しぶりだなぁ～、にしても何やってるんだ、全然似合わないぞ？」
それを見て、箒の顔が一瞬曇ったのは内緒だ。
「あ、あんたねぇ、もうちょっと言う事考えなさいよ！」
「おい・・・・」
その声に、クラス中の顔が引きつった。だが怒り心頭の鈴にはその変化に気づけない。
「大体、あたしがせっかく来てあげてるのに、喜びそれだけ！？」
「おい！」
「こっちが、どれだけびっくりしたと思ってんのよ！ＴＶつけたらあんたがニュースになってんのよ！」
「おい！！」
「あ～もうさっきから誰よ、うっさいわっねっ！？！？」
振り返りざまに鋭い出席簿アタックが顔面にクリーンヒット。当然、織斑先生だ。
手加減などするはずもない。その衝撃でようやく鈴も我に帰り、自分のやらかした事に顔をひきつらせ冷や汗をダラダラ流す。
「ち、千冬さっぶ！！」
「織斑先生だ、馬鹿ものが・・・邪魔だ、とっとと自分のクラスに戻れ」
「っく、一夏！卑怯よ、織斑先生を呼ぶなんて！！」
「私はここの担任だ、もう一発食らいたいのか！」
鋭い声に、鈴の戦意も粉々に砕け散ったようで、「逃げないでよ！」と捨て台詞を吐いて、ようやく嵐は去った。
それを見送って、織斑先生は鼻を鳴らす。
「・・・・ふん、朝から元気のいいことだ。それに引き換えお前らは」
どうやら、織斑先生には何でもお見通しの様だ。
「騒ぐなとは言わん、時にはな必要だからな。だがそれを翌日にまで引っ張るな。

・・・丁度いい今日は、一時間目からＩＳ実習だぞ」
織斑先生の口元が緩む。だがそれを決して優しさととらえている生徒はこのクラスにはいない。
「叩き直してやろう、五分で用意し第五アリーナへ集合しろ良いな？」
うげっ！？第五アリーナぁ！？
しかも五分の制限時間付き。っていうかここからアリーナまでが大体全速力で走っても五分ぐらいかかる。
「あぁ、そうだ言い忘れていた・・・遅れたらその分数×アリーナ十週の褒美を出してやろう」
それは褒美じゃない。
僕が辞書を開いて調べた時そういうのは罰って言うって書いてあった。
完全に鬼だよ・・・。
って、こうしてる場合じゃない！！
「い、一夏！急ごう！！」
「あぁ、そっか、俺たちは更衣室が別だから遠いんだった！！」
僕たちに続いて、女子群もバタバタと教室を後にしてアリーナへ急ぐ。
それを織斑　千冬は実に楽しそうに笑うのだった。

第４話～転校生はチャイニーズ～（後書き）

セシリアが可愛すぎて生きるのがつらい。
とか何とか言うのが流行ったような流行っていないような。
どうも、しるくです。

流行ったと言えば、去年から現在に掛けて
？そんな装備で大丈夫か？？
？大丈夫だ、問題ない？と言うのが流行りましたね。
その汎用性の高さから。
ジムやザク並みに使い勝手が良かったのでしょう。
僕も使いましたしねｗ

と、言う所でお時間です。
それでは５話でお会いしましょう。さよならッ！

第5話～嵐のチャイニーズ・憂鬱のブリティッシュ～

まったく・・・あの人，生徒を何だと思ってるんだろう・・・？
あの後結局間にあわなかった、僕と一夏と一部の女子はアリーナの一番外側を三十周させられた。
ただ、なぜだろうか罰を受けているはずなのに、後ろの女子たちは意外とにこやかだったのは。
そして、走り終えたらすぐにＩＳ実習。
涙出てきた・・・・。
まぁ、いいや・・・もう終わったことだし。
どの道ようやくお昼なのだ。
疲れた体には食事、これ鉄則だね。

食堂に入ると、もう既に多くの生徒で、満席に近い状態だった。
食券を買って、食堂のおばさんに渡す。
今日は、趣向を変えて中華にしてみた。
ドーム型に盛られたチャーハン。野菜や細かく切った肉が、食欲をそそる。
さて問題は・・・座るところが無いことだ。
う～ん・・・パンとかなら立って食べてもいいけど飯物だからなぁ。
下手にこぼしそうで怖い。
「あれ、アルディじゃないか、お～いこっち開いてるぜ？」
あれこれ考えていると、奥のテーブルから一夏の声がする。
そこには今朝、織斑先生に顔面クリーンヒットを貰っていた、鈴の姿もあった。
そしてソファを隔てて向こう側にセシリーと箒が、座っている。
セシリーも鈴の事が気になるようで、チラチラその様子を観察していたが、

箒は、完全にジト目で鈴を見ていた。
まぁ今回は、一夏に呼ばれたし、一夏の方のテーブルに行こう。
「助かったよ、満席で困ってたんだ」
「チャーハンか・・・そう言えば、俺も鈴の家でよく食べたなぁ」
その一言が引き金で、箒が勢いよく立ちあがると、バンッとテーブルを叩く。
セシリーも立ってきたが、それを後ろから静観している。
「一夏、いい加減説明したらどうだ!?」
「説明って言うと・・・?」
「この転校生の事だ、知り合いなのか?」
ジロッと睨むが鈴もそれに、不敵な笑みを浮かべ、睨み返す。
「知り合いって言うか、幼馴染だよ」
「それは私だろう!」
また大きくバンッとテーブルを叩く箒。
だいぶ苛立っているようだがそれに追い打ちをかける様に鈴が口を開く。
「どーも、一夏がお世話になってます」
「な、なな・・・ふざけるな!!」
妙に?一夏が?を強調して言った鈴。
あたかも、自分の物と言いたげな鈴に箒が、怒鳴る。
だがそんな空気を、全く感じていないのか一夏は、笑いながら説明をつけたした。
「いや、箒が引っ越しして、そのすぐ後に店越してきたのが鈴だよ、丁度入れ違いみたいな感じだな」
「ま、まぁ幼馴染と言うのは、もうどうでもいい。その・・・食事をしたというのはどういうことだ!」
「食事したってそんなの、そう言うことじゃない。ねぇ一夏」
「そうだぞ、箒。丁度鈴の家が中華料理屋で、よく食べに行ってただけだ」
「・・・なるほど、店か、店なのだな。店なら、おかしくはないな・

・・うん」
必死の形相から一転、安堵しうんうんと頷く箒。
一方鈴は、さっきまでと打って変わって、顔から余裕たっぷりの笑みが消え、
そっぽを向いてブツブツつぶやいている。
「一夏の馬鹿・・・・なにも、そこまで正直に話さなくてもいいじゃない・・・」
「あん？おい鈴何言ってるんだよ」
「べ、別に何でもない何でも！」
その間も僕は黙々とチャーハンを口に運んでいく。
「あ、セシリー、水ありがとう」
「いえ、いつも運んでくださいますしね、お礼ですわ」
静観していて状況が少しこう着した時に、セシリーが水を汲んできてくれたようだ。
ありがたいありがたい。
目を再び一夏方面へ移すと今度は鈴が、一夏に訪ねていた。
「で、この子誰？」
「だ、誰だとッ！さっきから言ってるだろう、おさな・・」
「もー、うるさいなぁ、あんたには聞いてないの」
「こ、こら！」
箒を片手で制すと、鈴は一夏を見やる。
「箒だよ、篠ノ之　箒って名前で俺の幼馴染。そうだなファースト幼馴染だな、で、お前がセカンド」
「ファースト・・・そうか・・・うんうん、そうだな、初めての幼馴染は私だしな」
そう言って納得したようにうなずく箒に対して、今度は一変鈴の顔が悔しさににじむ。
「ちょっと一夏！なんであたしがセカンドなのよ！！一・五ぐらいにしなさい！！」
「やめろって、鈴！苦しいだろ、それに何だよ、一・五幼馴染って

！？」

「お前！一夏から離れないか！！」

確かに謎だ。

まぁ、セカンドよりは確かにファースト寄りだけど。

そんな中、何を思ったかセシリーが、いつも通りの腰に手を当てたポーズで箒たちの間に割り込む。

「まぁまぁ、箒さん落ち着きなさいな。

よろしいではありませんかファーストなのですから。さて、鈴さんでしたわね。

何でも中国代表候補生だとか。箒さんなどは知らなくて当然ですけど、

私はご存知ですわよね？」

・・・あぁ、なるほど。

初めはどうしたのかと思ったが、そうかセシリーは自分の知名度を、知らしめるいいチャンスだと思ったのか。

相手は注目の転校生だし。

多分セシリーの中ではこんな感じのシナリオを描いているんだろう・・・

自分が登場

←

相手は転校生で代表候補生と注目の鈴

←

鈴が「知ってるわよ、あんた確かイギリスの代表候補生のセシリアでしょ」的な事を言う

←

自分は他国にも名の知れ渡った、代表候補生と言う事で株が上がる。

と、まぁこんな感じだろう。

セシリーが期待と自信に充ち溢れた顔で鈴の返答を待っている。

そして鈴から驚きの一言が！！

「誰あんた、あたし知らないよこんな金髪、そもそも何人？」
あ、固まった。
あまりのショックにそのままの表情で固まった。
そして数秒後、セシリーが涙目で帰ってきた。
よしよし、お兄さんが飴玉を上げようね。

・・・・・っと、むっ！？
ここ数週間で、発達した織斑先生レーダーが警鐘を鳴らしている。
どこだ！？
辺りを見渡すと、食券の列に並ぶ鋭い眼光を確認した。
横を見る。一夏達はまだ気づいていない。
ぎゃあぎゃあと言い争いの真っ最中だ。
皿を見る。僕の皿は既に完食。
そして前には意気消沈のセシリー。
ここから導き出される答えは！！
？救助できる人物セシリーを連れ、この場を緊急退避？
それからは早かった。
「行こう、セシリー！」
「え！？、あ、アル？」
僕はセシリーを強引に引くと、そのまま食堂の出口に向かう。
その間にある返却口に皿を戻し、出口付近で織斑先生とすれ違った。
？・・・・命拾いしたな・・・・？
あーあー何も聞こえませーん！！
なんとか食堂からの退避に成功した僕とセシリーはそのままふりかえらず教室方面へと走った。
その直後、鉄拳制裁と思われる、鈍い音が三つ、食堂の方から響いた。

はぁっはぁはぁ・・・ここまでくれば大丈夫だろう。

僕は、教室のドア付近で立ち止まると、振り返りセシリーを見る。
「ごめんね、食後に走らせちゃって・・・」
「い、いえ・・・そのそれはよろしいのですが・・・・その・・・えっと」
ん、よく見るとセシリーの顔が心なしか赤い気がする。
息切れ・・・ではない。肩で息もしてないみたいだし。
「その・・手を・・・」
「手？」
僕は視線を落とすと、そこにはしっかりと僕の手がセシリーのか細い手を握っていた。
一気に僕の顔が熱くなっていくのが分かる。
「わぁぁ、ご、ごめん！」
「・・・ぁ」
あわてて手を離す。セシリーが何かをつぶやいたようだったが、それはよく聞き取れなかった。
・・・・しばしの沈黙の後。
互いに顔を見合う。
僕もそしてセシリーも顔が真っ赤だった。
僕はそれを誤魔化すように、目線を下に向ける。
そこには、さっきまでセシリーの手を握っていた僕の手があった。
その手には、まだ微かにだが、セシリーの手の温もりが残っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

わわわわ・・・アルったら、いきなり手を！
セシリアの頭の中は、パニック寸前だった。
だが、食堂で意気消沈していた自分の手を、いきなり取られ、状況を把握した段階では既に頭がオーバーヒート状態だったのだから、それを思うと今の状態は、これでも落ち着いた方

なのかもしれない。
でも・・・・。あの時手を・・・と言った自分を今さらになって少し悔やむ。
もう少し繋いでいればよかったと。
それにセシリアは、どこか懐かしいものを感じていた。
確か・・・そう、あれはアルとサクラメントの、アルの地元を一緒に走り回っていたあの頃。
アルはあの時も、今日みたいに私の手を握ってくださっていましたわね。

「この路地に入るんですの？」
きょとんとした顔でアルディに言うセシリア。
お互いにあどけなさの残る、幼いあの頃。
「そうだよ、この先に階段があってね、その上から見る景色が綺麗なんだ」
気さくに笑う。その笑顔がセシリアは好きだった。
彼が笑うたびに、自分の心臓がドキンと跳ねあがるのが分かるぐらいだ。
「ですけど・・せ、狭いですわね」
「大丈夫さ、セシリーは小さいから」
「全く、レディに対して細いとおっしゃるならまだしも、小さいというのは、失礼では無くて？」
「ははっ、僕は別に何が小さいとまでは言ってないよ」
「な、そう言う事を言ってるんじゃありません！」
ボッと赤くなる顔だったが、それは彼に対してなのか、彼の言ったことに対してなのか。
「ほら、行こう！」
またセシリアの手を取って路地の奥へ進んでいく。路地の壁に擦れて汚れていくドレス。
だがセシリアにはそんな事気になど、ならなかった。

セシリアの気を引いていたのは、自分の手を握っている一人の少年だったのだから。
しばらく路地を、進むと彼の言った通り、階段が目の前に現れた。
それを一段一段登っていく。
かなり長い階段だ。
「もう、息切れ？」
「まだ・・大丈夫ですわ！」
彼なりの励ましもあって、二人はようやく屋上へ辿り着く。
彼が住んでいたのはサクラメント市内でも結構山寄りの小さな街だった。
そしてそこは、簡単に言えば低所得者の暮らす一昔前のＮＹのハーレムの様な場所だ。
そして、この場所は、その中でもまぁまぁ高い、建物の屋上。
今思い出してみると、多分それは高いと言っても、すべてが一望できるほどの高さは無かった。
自分の住んでいたお屋敷の屋上の方が高かったぐらいだ。
でもその景色は、それよりも低かったのに、とてもきれいだった。
既に傾き始めていた、太陽が遠くに見えるサクラメント中心部の摩天楼を美しく照らし出し、
サクラメント川に、夕日が映えるその光景は今でも鮮明に思い出せる。
「綺麗でしょ」
「えぇ・・・本当に」
「君と、どっちが綺麗かな」
「ちょっと、くさすぎですわよ」
「アメリカでは、意外とまだ主流なんだけどなぁ」
そう言って頭をかく彼を、私は優しく見る。
そして今度はまた、もと来た道を彼に手を引かれ帰るのだ。
帰れば、私は用意された部屋に通されて、彼とは別々になってしまう。

本気でいっそこのまま帰らなかったらどうなるのだろうと考えたこともあった。
だから少しでもその手を、握っていたくて帰りは決まってゆっくり歩いて帰った。
遅くなって、母親に怒られようともそれはそれで、よかった。
母親の仕事を心配しつつも、反対に交渉がもっと長引いてくれることを望んでいた。

懐かしいですわね。
本当に懐かしい。
いまだに、昨日の事を思い出しているのかと錯覚するぐらい鮮明なその記憶に思いをはせながら、
セシリアは、アルディと繋がっていた方の手を、もう片方の手でそっと包む。
そこには微かにアルディの温かさが残っていた。

◇◆◇◆◇◆

その間も、お構いなしに色々考え事をしているようで、微妙に動くセシリー。
ちょっと、動くのだけはやめてほしいなぁ。
こっちもバランスを取るのが難かし・・・・！？
突然バランスが崩れる。
何が！？
一瞬足元を見ると、そこにはドアスライドの溝が。
・・・・嘘でしょ。
「え！？あ、アル、あなた何をって、きゃぁぁぁぁぁ！！！」
「うわっと！！」
ようやく我に返ったセシリーがこちらを振り向くが、それで体勢が立て直せるわけもなく、
そのまま一緒に盛大に倒れてしまった。

一瞬の衝撃の後、痛みと一緒に、何か手の下に柔らかい感触がが・・・・。
ん？床にしては・・・あまりに・・・・・。
焦点がまだぼやけているが、セシリーに怪我は無いようだ。
少なくとも顔には。
・・・・さっきから何を、掴んで？
「わぁ・・・・アルディ君大胆・・・・」
だい・・・何？
そりゃダイナミックに転んだけど。
そしてようやく、焦点が合って来た時、僕はその意味を理解する。
・・・・・こりゃあ。
柔らかいわけだ。
僕の右手は丁度セシリーの胸を・・・・・。
そして目の前のセシリーは、ワン、ツー、スリィ、フォー・・・・・
少なくとも四つ以上額に、血管が浮き出ている。
「あの・・・・」

ニコッ♪
ドガンッ！
笑顔とほぼ同時に、ブルー・ティアーズを部分展開した右腕がさく裂。
僕は人生初体験の、天井にめり込むという貴重な体験をした。

「さて、それではＳＨＲを始める・・・・・。どうしたサウスバードその怪我は」
「・・・・何というか、自業自得です・・はい」
昼からの授業も終わり、今は織斑先生のＳＨＲの時間だ。
これが終われば、みんな大好き放課後が始まるのだが、どうもセシリーがあの件で、ご立腹なようで・・・・。
何度が話しかけてみたのだが、すべて追い返されてしまった。

「ふむ・・・まぁいい。それよりも来月・・・まぁもう残すところ数週間と言ったところだが、
いよいよクラス対抗戦が始まる。このクラスの代表は織斑お前だな」
「はい」
「しっかり準備して、挑めよ。私のクラスにいるという意味を、よく考えてな」
つまり勝てってことか。
姉とはいえ、もの凄いプレッシャーをかけるな、織斑先生も。
「それから、サウスバードもな」
「はい！？」
「うむ、言い返事だ」
声が裏返ったのに、何が良い返事だ！
って言うか僕が何？
「あの、先生・・・僕がなんです？」
「喜べサウスバード、お前はクラス代表選の補欠候補に選ばれたぞ」

選ばれた、じゃなくて選んだんでしょ！
「いや、そんないきなり、僕はそんな話聞いてませんよ！？」
「ヨカッタナァ、イヤァホントウニヨカッタ！」
一夏・・・君か！！！
「何考えてるんだよ君は、代表らしく堂々と一人で挑みたまえよ！！」
「だって、お前俺は素人だぞ！？」
「そんなの、僕だってそうだよ！！」
「まぁそう、言うなサウスバード。私が許可したんだ。
織斑の場合練習中にも下手なミスを犯しそうだからな。それでもしもの事があれば一組は不戦敗だ。そんな情けない結果を出せると思うか？」
出せばいいじゃないかぁ。
見栄は張ると下手見るんだよ？
だが相手は織斑先生だ。
何を言っても、これが覆るなんて言うことは無いだろう。
「一夏・・・怪我したら、本気で怒るからね」
諦めて、念だけは押しておいたが・・・・。
まぁ、そうそう滅多な事は怒らないだろう。

放課後。
今日は、他の誰ともつるむことなく、一人部屋に帰ってきていた。
放課後すぐにセシリーを探したが、既にいなかったし、一夏は一夏で箒との自主練があるとのことで、アリーナへ行ってしまうし。
ってかよくよく考えたら、僕友達少ないねぇ・・・。
椅子に座りながら、考え事。
色々考えることが多すぎる。
ＩＳの操縦もそうだし、今回のクラス対抗戦そしてセシリーの事もだ。

優先順位をつけるなら・・・
一：セシリー
二：ＩＳの操縦
三：クラス対抗戦
と言ったところだが、最優先しなくちゃいけないセシリーが取り付く島もないのでは。
どうしたもんか・・・・。
その時、部屋にノック音が響いた。
ん、誰??
再び、響くノック音。
次第に音が大きくなってるような・・・。
ったく・・・わかった、わかりましたよ!
もぅ、誰だよ。
そして、僕がドアノブに手をかけた次の瞬間
バンッ!!
勢いよく開かれた、ドアが僕の顔面に直撃する。
「いったぁぁぁぁ!!!」
「ノックしたらすぐに出なさいよね、全く!!!」
その悪びれる様子もない、気丈で勝気な声・・・
「や、やぁ鈴・・・」
「やぁ、じゃないわよ!ちょっと来て」
「なんで?」
「いいから!」
無理やり僕の首根っこをつかむとそのまま部屋から引きずり出される。
この学園の女性は、首根っこを掴んで男子を引きずるのがトレンドらしい。
初めて知った。
鈴に引きずられ、連れてこられたのはアリーナだった。

放課後と言う事もあり、自主練に励む生徒たちが見受けられる。
その中に白い専用機?白式?を展開する一夏の姿もあった。
「準備してきなさい！」
「だから、なんで！」
「な、なんでって・・・そ、それは」
「それは？」
鈴は無言で、僕の頭をつかむと、一夏の方向へ顔を向けさせる。
「あそこに誰がいる？」
「一夏と箒だけど・・」
「そーよね、そう。あの女と一夏がいるわよね」
「それが僕と何の関係が・・・・」
全くわからない。
箒と一夏が自主練しようが、彼らの勝手だと思うのだが。
「どうして、一夏が、あの箒ってこと一緒に居るのかしら」
「自主練でしょ」
「あたしは何も聞いてないわよ！」
言う必要が無いだろう。って突っ込んだら、何されるかわからん。
「だから手伝いなさい」
「・・・・はい？」
「だから、手伝ってって言ってんの！」
何を手伝えと。この状況で僕が手伝わなきゃいけないことが、これまでの会話であっただろうか。
「あーもう、分かんないやつね。一夏とあいつが、自主練してる所にあたし一人乗りこんだら、あたしががっついてると思われるじゃない！」
・・・・あぁ、そうか。そう言うことか。
つまり鈴も。
「一夏が好きなのか」
「ばっ！声がでかいのよ！！なんでアメリカ人はそう言う事をズバッと言うかな！！」

真っ赤になって、詰め寄る鈴。
どうやら図星っぽい。
いいねぇ、一夏モテモテだ。
要は鈴が言いたいのはこういうことだろう。
箒と一夏が自主練しているのが気に入らない。でも、一人で出ていくと、なんだか一夏に、がっついているようで恥ずかしい。
だから僕と一緒にあたかも?自主練習しに来ました?という事を装って一夏に近づきたい。
多分そう言うことだ。
あの唐変木の一夏の事だ。
どれほどあからさまに近づこうと、自主練習で、たまたま出会ったという意見は通りやすい。
だけど・・・
なんだか、面白くない。
「なんか、それ僕にメリットでもあるの?」
「多分無いわよ」
「じゃあ、やだ」
「あんたねぇ・・・立場わかってるのかしら、初めからあんたに・・・」
さっきとは比べ物にならないほどの剣幕・・・。
そうだ、さっきのトレンドに追加しておこう。
この学園では、蛇睨みも最近流行りのトレンドなんだな。
めっきり流行には疎いから知らなかったよ。
そして、僕が聞きたくないセリフが、容赦なく放たれた。

「拒否権なんて無いのよ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・まぁ、あれは事故・・・みたいなものでしたし。

流石にあれは、やり過ぎたでしょうか・・・。
セシリアは教室に戻って、先ほどアルディに自分が取った行動を考えていた。
い、いやでも、あれぐらいは、危機感を持たせるには丁度いいのかも。
アルディは、自分では気が付いていないだろうが
一夏程では無いにしても、唐変木である。
まぁ、察しが良い分下手な事を言わないが、逆にそれがどこかさみしい時もある。
そうですわ、これぐらいなら大丈夫ですわよ！
きっと、しばらくすれば向こうの方から、またアクションがあるはずですし！
グッと拳を握って二度ほど頷くセシリアの耳に、少し気になる話し声が聞こえた。
「ねぇねぇ、専用機持ちがアリーナで自主練してるんだって！」
「マジで！？専用機って言うと・・・」
「何でも、うちのクラスの子と、転校生が一緒に自主練してるらしいよ」
え？
このクラスの？
一組の専用気持ちと言えば、一夏とアルそして自分だ。
初めは一夏が鈴と自主練をしているのかと思ったセシリアだったが、
一夏は今日も箒と・・・。
ま、まさか！
嫌な予感がする。
そう思うが早いかセシリアは、アリーナへ向かって走り出していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あぁ・・・もう。
何だってこんなことに・・・。
アリーナへ入ると、ぶつかり合う音や掛け声の迫力に圧倒される。
「何ボケっと、突っ立ってんのよ」
声の方を見ると、ピンクのＩＳスーツに身を包んだ鈴がそこにいた。
そして腕を組んで自信たっぷりな笑みを、浮かべている。
「ふふん、あそこに一夏達がいるのね」
渋々見やると、一夏達はアリーナの奥の方で打ち合っていた。
「良い自然に、近付くわよ」
「はぁ・・・・」
「あんたも、男ならここまで来たら、諦めなさい」
「諦めるの・・・？」
「とっととＩＳを展開しろぉ！！」
鈴にせかされ僕は？ストライク・バーディ？を起動する。
いつも通り銃弾型のネックレスが光、一瞬の内に装甲が展開される。
「あ、あんたねぇ」
「今度は何！？」
ＩＳを展開しろって言うから展開したのに、怒られる筋合いなど無い。
「なんでそんなに大きいのよ！！」
「そこは、僕の所為じゃないよ、アメリカに文句言って！」
やっぱりみんな言うことは同じ。
？大きい？
もう言われ慣れたが、こんな理不尽な言われ方は初めてで、ちょっと斬新・・・。
「もう、良いわよ。ほら行くわよ！」
鈴もＩＳを展開する。
鈴のＩＳは、赤みがかった黒色で、？ストライク・バーディ？ほどごつくはないものの、
アンロック・ユニットを持ち、肩には大型のスパイクアーマーが取

り付けられている。
ストライク・バーディにその詳細が表示される。
「？甲龍？・・・・だめだ漢字は弱い」
続いてローマ字表記が記されてようやく読むことのできた僕だったが・・・・。
こ、これは・・・。
どうするかな。
「これなんて呼べばいい？」
「シェンロンでもコウリュウでも、どっちでもいいわよ」
こうりゅうか・・・うんそれで行こう。
「で、どうするのさ、展開はしたけど」
「ん～そうね。すぐに行ってもいいんだけど・・・・せっかくだし・・・」
「せっかくだし？」
また嫌な予感がするぞ。
「模擬戦しよう！」
やっぱり・・・、ほんと戦うのが好きだな・・・・・。
だけど、これはこれでいい経験かもしれない。これまでセシリーにばかり、頼って技術を教えてもらったけど、実際その技術がどれほど身についているのかまでは分からなかったし。
それに相手は、見た目からわかる近接型。
一夏との初陣では、接近を許しちゃったしなぁ。
それにＩＳは戦い方や戦闘経験から学んで、自己発達していくものらしい。
こういう経験を積んでいくことは、デメリットにはならないはずだ。
「・・・ふぅ、分かった」
「それじゃあ、準備しなさい」
鈴が一気に浮上する。だが僕はそれを追うことはしない。
このＩＳの基本戦法は、？フレキシブル・ターンを使った固定砲台？なのだから。

しばしの沈黙の後、鈴が一気に間合いを詰めてくる。
「ハァァァァッ！！」
僕は、落ち着いてセシリーの教えを、思い出す。
？あなたのＩＳは細かな射撃には向いていないと言う事ですわね？
僕は、？ファイアーフライ？を構えると、狙いなど定めずその方向へ連射する。
荷電粒子砲は連射には向かないが、一発あたりの攻撃力は高い。
発射間隔があるとはいえ、直撃すれば大きなダメージを避けられない鈴は、一気に高度を下げ、
今度は、ほぼ真下から、こっちに接近する。
「威力は高いの揃ってるみたいでも、やっぱりその大きさ！早さは無いみたいねッ！」
それはどうかな
ハイパーセンサーで位置を瞬時に把握し、？フレキシブル・スラスター？が稼働。
素早く鈴を正面にとらえ同様に弾膜を張っていく。
「っく！なるほど、そう言う戦い方か！！」
「近づかれたら、手も足もでないんだよ！」
また再び、距離を取る鈴。一定の距離を取って言ったん動きを止める。
そしてこちらに、今までで初めて、笑顔を見せた。
「やるじゃない！」
「それはどうも」
と言っても、僕がここまで代表候補生とやりあえているのは、紛れもなくセシリーのおかげだ。
まぁ相手は本機の半分も出していないんだろうけど、それでも、何もレクチャーを受けなかったら、
恐らくはこの攻防などなく、一瞬で終わっていた。
僕は着実に、セシリーの教えが身についていることに喜びを覚えつつ、鈴との模擬戦に再び身を投じた。

◇◆◇◆◇◆

第5話～嵐のチャイニーズ・憂鬱のブリティッシュ～（後書き）

デレリアさんが可愛くて（以下略
こんちゃ！しるくです。
お読みいただいてありがとうございます♪

次回ぐらいで鈴と一夏のクラス対抗戦をかければいいなぁ・・・
そう言えば、明日からバイトですが、いまだに水とかは入ってこない模様。
それに原発は廃炉でしょうね、
間違いなく。
海水も入っちゃいましたしね・・・・
そんな中でプロ野球とか・・・・セ・リーグ舐めすぎだよね・・。
そんな感じ。では皆さま6話でまたお会いしましょう！

第6話～どん底アメリカン・不敵なアンノウン～

全く、踏んだり蹴ったりだ・・・
あれ、この言いだし似たようなのを前回も・・・・まぁいいや。

踏んだり蹴ったりとは鈴の事である。
ドアパンチされて拉致された後、流れで模擬戦に突入。
結局最後は、鈴の？双天牙月？という青龍刀の餌食になって、地面に叩きつけられてしまった。
大型の？ストライク・バーディ？をいとも簡単に・・・・。
なんてパワーだ。
一夏のそれが、スピードだとすれば、鈴のそれは、近接は近接でもかなりのパワータイプだろうか。
アリーナの更衣室を出て、ロビーまで出ると、フラフラと歩くセシリーを見つける。
ん？
な、なんだろう、凄く危なっかしいな。
そう思っていた矢先、段差につまづいて転ぶ。
あぁ、もうなにやってんだか・・・。
「セシリー大丈・・・！？」
セシリーは差し出した手を乱暴にはらうと、これまでにないほどきつい拒絶のまなざしで僕を射抜いた。
とっさの事に、少し茫然としてしまった僕だったが、その態度が気になって既に一人で立ち上がりさっさと歩きはじめていたセシリーを追う。
「ちょ、ちょっとセシリー！」
僕は腕をつかむ。だがそれをセシリーはまたも振り払った。
「触らないでくださいな」
「ひょっとして、怒ってる・・・・よね」

当然のことと思いつつ、そんな言葉しか出てこない僕のボキャブラリーの無さに呆れてしまう。
「怒る、何に対してでしょうか?私、別に怒ってなどおりませんけど」
「いや、あの・・・」
明らかに怒ってるじゃないか・・・・。
この上ないほどに。
やっぱり、あの教室での事を・・・
「あの事でしたら、別にもう何とも」
僕が今想像しようとしたことを先読みされて否定される。
あれ?じゃあ何をそんなに。
「もう良いですわ」
話を切って、再びスタスタと歩いていくセシリー。
待て待て、全然意味がわからないぞ!
「セシリー、一体何なのさ!言ってくれなきゃ分からない!!」
「言ってましたわよ、これまでも!」
「え!?い、言ってないだろ、何がだい?はっきり言わないなんてセシリーらしく・・・ッ!」
言いかけた刹那、僕の右頬に鋭い痛みが走っていた。
状況はすぐにわかった。
セシリーが僕の頬を叩いたのだ。
流石に叩かれることを予想していなかった僕は、困惑のまなざしでセシリーを見る。
え、泣いて・・・・。
「私らしい!?何も知らない、何も気づいて無い、あなたにそんなこと言われる、筋合いありませんわ!!」
ブロンドの髪を振り乱しながら、かぶりを振ってヒステリックに叫ぶとそのまま背を向け走り去る。
「あ・・・・」
僕はなぜか、セシリーの名を呼ぶことも、追いかけることも出来な

かった。

僕は部屋に戻ると、いまだにジンジンする頬をさすりながら、ＰＣの電源を入れる。

・・・はぁ、一体何をしたって言うんだろう。

セシリーは、教室での一件は、どうでもいいって言ってた。

じゃあ、他に何が？

全く訳がわから・・・・・ん？

ＰＣの電源を入れると同時に、画面端に、ネット通話の着信通知が来ていた。

アドレスは・・・姉さんだ。

着信時刻は、もうほんの数分前。

僕はすぐに折り返し発信の準備をする。

僕のＰＣには既にカメラとマイクが内蔵されているので、周辺機器は必要ない。

数秒の呼び出しの後、画面に姉さんが映し出された。

『アル、少し・・待って』

ヘッドホンの調子を確認する姉さんそして、最初少しノイズがかった声が次第に鮮明になっていく。

『あーあー・・・聞こえてるわね？』

「うん、大丈夫だよ、それで何の用？」

『酷い言い方ねぇ、遠く離れた異国での生活に心を痛めてないか、心配で連絡してるのに』

「・・・嘘だね、大方ＩＳの事でしょ」

『ンフフッ、ま、それぐらい察し付くわね・・・・ってその頬どうしたの？』

僕はとっさに右頬を隠す。だが時すでに遅し。

入学一ヶ月で、女の子にひっぱたかれましたなんて、恥ずかしくて言えるわけがない。

「ま、まぁ・・こ、転んじゃってね」
『・・・嘘ね、姉さんに嘘を吐こうなんて、百年早いわよ』
流石は?裏切りのローラ?なんておっかない二つ名をつけられただけの事はある。
嘘やはったりで、姉の右に出る日は、おそらく姉生きている限り無いだろう。
「あぁ・・うん」
『何があったのか、姉さんに話してみなさい、解決にはならないかもしれないけど、
糸口ぐらいなら見つけられるかもよ?』
「・・・実は」
僕は今日、あったことをありのまま話す。
包み隠さずだ。隠してもしょうがない。どうせ見透かされるのだから。
「・・・と、言うわけなんだ」
『セシリア・・・セシリア・・・どこかで聞いたような名前ねぇ』
姉さんも、セシリーの事を微かにだが覚えているようだ。
だが、中々名前と顔が一致しないのか、首をかしげて考えている。
「ほら、昔姉さんを、勧誘に来た女性実業家の人がいたでしょ。あの人と一緒に来た女の子だよ、ブロンド髪の綺麗な・・・」
それでようやく思い出したらしい。ポンっと手を打ち、笑顔になる姉さん。
『あぁ、居たわねぇ。あの子かぁ・・・それで、あなた本当に心当たりないの?』
「教室での一件以外、怒る要素が分からなくて・・・」
『ふ~む・・・いい、アルディ。女の子って言うのは意外と小さいこと、自分が何気にやってることでも気になって、嫉妬とかしちゃうもんなのよ』
「嫉妬って・・・それは、好きな人にやるもんでしょ」
『・・・アルディそれあなた、本気で言ってるの?』

姉さんの顔がい一気にジト目へと変貌する。本気も何もないんだけどな・・・・。
だって事実だし。
『はぁ・・・もう少し物分かりが良いと思ってたけれど・・・』
「どういう意味さ」
『まぁいいわ、そうね・・・もう一度よく、これまでの自分の行動、そして相手の行動や言ったことの意味をしっかり考えなさい。絶対その中に答えは有るはずだから』
言い聞かせるように僕に言う姉さん。
よく考えろって言ったって・・・。う～ん・・・・。
『女の子は、いつでも本当の事を言われると弱いものなのよ。あなたも嘘ばっかり言ってないで本当の事言ってみたら?』
最近は嘘は言ってないし、言う暇もないに等しいんだけどなぁ。
だって最近はセシリーとの訓練に忙し・・・・訓練?
なんだろう、何か引っかかって・・・。
『後は自分で考えなさい。・・・・ハイッこの話はここまで!本題に移るわよ』
パンッとてを叩いて話題を切り替える姉さん。
その後ＩＳの事を色々聞かれたが、僕の頭は?そんな事?など全く考えていなかった。

◇◆◇◆◇◆

「はぁっ！！」
「しまっ！？」
鈴はアルディの射撃の一瞬の隙に間合いに入ると、軽快なフットワークを駆使して？ファイアーフライ？を左右に蹴り飛ばす。
そして無防備になった胴体に蹴りの回転そのままに青龍刀？双天牙月？を叩きこむ。
元々重い？ストライク・バーディ？だったが鈴の突貫の移動エネルギーも相まって威力は充分。
そのまま、地面にたたきつけられた。
「ふんっ！舐めんじゃないわよ、こう見えてもあたしは中国の代表候補生なんだからね！」
高笑いをして、アルディを見下す鈴に、唐突に声が掛かる。
「おぉ、鈴じゃないか、相変わらずやることが派手だなぁ」
しまった・・・。
この時、鈴の顔は多分誰にも見せられないほどに？しまったぁぁぁぁっ？という顔になっていたに違いない。
鈴の頭の中で、小さな鈴たちが自分をパカパカ叩いているのが分かる。
あたしの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！
本来の予定では、アルディのＩＳが長距離戦仕様と言う話は聞いていたので、わざとらしく攻め手にかけるふりをして、距離を離し
「あら、一夏自主練？」
「鈴もか、精がでるな」
「クラス対抗戦負けないわよ！」
「俺だって！」
となって、模擬戦を中断するはずだったのだ。
それが、夢中になった挙句、トドメまで・・・。
当然周囲からも注目されるし、気付かれずに一夏に近づくことも出来なくなってしまったのだ。
今回は、一夏から声をかけてくれたからよかったが、かけてくれな

ければ完全に詰んでいただろう。
だが、何にしてもだ一夏に声をかけられたことには変わりない。
意気消沈するのは、いつでもできるが、一夏と話せるのはこの機会しかないのだ。
そう考えを改め、鈴は更衣室へ消える一夏ともう一人・・・（名前忘れた）を追いかけて行った。

「ふぅ・・・」
一夏達が更衣室へ戻った少し後をつけて鈴が、更衣室へ入る。
あの女も一緒だ。
あの女は既に、着替えを終わっていたが、一夏はまだ着替えておらず、額には汗が滲んでいる。
ふっふっふー・・・鈴は、自分のロッカーから持ってきた、スポーツドリンクとタオルを手に不敵に笑う。
そしてタイミングを見計らって、飛び出した。
「一夏、お疲れ」
出来るだけ、スマートに。一夏と話せる喜びを押し殺して鈴はあたかも、さらりと言う。
そして持っていたスポーツドリンクとタオルを、一夏に投げ渡した。
「お、っと・・・サンキュー鈴、丁度喉が渇いてたんだ」
「いいわよ、別に」
いい、良いねあたし！超自然じゃん！初めっから、こうすればよかったかのかも。
「ぷはッやっぱり、運動した後のスポーツドリンクは格別だな、そういえば鈴お前自分のは無いのか？」
「え！？」
そうだった、一夏にあげることしか考えていなかったから、一本しか用意しなかったが、よく考えれば当然の疑問だ。
ど、どうしよう・・・何か・・何か言わないと・・・。

だがその時、鈴にとってそして後ろで、ジト目睨みをしていた箒にとっても爆弾発言が一夏から発せられる。
「・・・じゃあこれ飲むか、お前も喉乾いてるだろ？」
「「え！？」」
待って待って・・これって・・・これって・・・間接キスなんじゃ・・・・！！
当然鈴に断る理由など無い。むしろ早く欲しいぐらいだ。
だが、それを無言で済ませる箒では無い。
「ば、馬鹿もの！！そ、そんな事が許されると思っているのか！！」
「ちょっと、何勝手なこと言ってんのよ、えーっと・・・なんとかさん。一夏はあたしにくれるって言ったんじゃない、一夏の許可があるんだから、あんたには関係ないでしょ！」
「なんとかさん！？」
箒は名前すら覚えてもらえていないことに、そして鈴のあまりの態度に、いつもの怒りボルテージが二倍早く上がっていくのが自分でもわかった。
それを鋭く察すると、鈴はまた言葉を続ける。
「もー、いい加減引っこんでてよ、そこ通行の邪魔だよ」
「き、貴様いい加減にしろ！！」
箒は声を張り上げ、一夏の手からスポーツドリンクをかっさらうと、鈴の見上げる先で、
スポーツドリンクを一気に飲み干す。
それを見て今度は鈴の怒りが一瞬で沸点に達した。
「あぁぁ、あんたね何やってくれてんのよ、あたしのよ、それ！！」
「ふんっ、そうだ一夏、今から代わりに何か買ってきてやろう」
鈴の夢も希望もすべてを打ち砕いた箒が、勝ち誇った顔で更衣室を出ていく。
それを、悔しさで歪む目で、睨む鈴だった。
・・・くっそぉ・・あの女～～～・・・。
戻ってきたら覚えて・・・・ん？戻ってきたら・・・。

鈴は、急激に冷めていく頭で辺りを見回す。
・・・あたしと、一夏だけじゃん！
そう、さっきのやり取りの間に、ほとんどの利用者は更衣室を去り
今は一課と鈴しかいない。
あのバカ女、やったことは許せないけど、いいタイミングで出て行
ってくれたじゃない。
「全く、箒も・・・悪いな鈴。あいつも悪い奴じゃないんだけど、
ちょっと色々不器用なんだよ」
「別いいわよ、そんなに喉乾いて無かったし」
「でも、結構、欲しそうな・・」
「大丈夫よ！・・・それより・・・さ」
急に打って変わってもじもじと、しおらしくなる鈴。
それに一夏はほんの少しだけ、心を揺さぶり一夏の頬を少し赤く染
めていた。
い、一夏が、その赤くなってる・・・。
一夏が少しなりとあたしを女友達ではなく、
女の子として見てくれているという事が、分かっただけでも鈴はう
れしかった。
だが、鈴はあえて、それよりも少し踏みこんで質問をする。
「その、一夏は・・あたしが居なくなって、さみしかった？」
「そ、そりゃ、遊び相手がいなくなったわけだしな」
う～ん、でもこういう所はやっぱり鈍感だ。まぁそういう所も含め
て好きなわけだが。
「そうじゃなくてさぁ～・・・なんて言ったらいいのかなぁ」
聞き方に困っていると、足早にスポーツドリンクを買いに行った箒
が帰ってくる。
・・・っち、こいつ早い・・。
箒はダンッと、ベンチにスポーツドリンクを叩きつけるように置く
と、チラッと鈴を見て余裕の笑みでこう言った。
「今日は、シャワーは先に使って構わん、ではまた後でな」

それだけを言い残して帰って言ったのだが、鈴には気が気では無い。
し、シャワー!?なに、あの子とどういう関係なの!?
そんな気も知らず一夏は、明るく助かるぜと、手を振っていた。
「い、一夏!!あの子と・・・シャワーって何の話!?」
「え?何のって、シャワーの先か後を決めて・・・」
えぇい、そう言うことじゃないのよ、この朴念仁!!
「だからなんであの子と、どういう関係よ!!」
首をゆさゆさゆすって、問い詰める鈴に一夏は、
ようやく意味を理解した一夏は、鈴を諭し落ち着かせると説明した。
「箒とは、部屋が一緒なんだよ。それでシャワーの順番とか言ってたわけ」
「一緒!?じゃああの子と、寝食を共にしてるってわけ?」
「まぁな、でも箒で良かったよ、幼馴染だし気心も知れてるからな」
そうか・・・・なるほど・・・。
ふーん・・じゃあ
「幼馴染なら良いのね・・・フフフ・・・幼馴染ならいーんだ・・・フフフフッ」
「り、鈴・・・お前怖いぞ・・・」
あの女見てなさいよ!!!
鈴は不敵な笑みを絶やさず、一夏の不安を余所に次なる作戦を考えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

う~ん・・・わからん。

あれからずっと、セシリーの怒った理由を考えていたけどさっぱりだ。

姉さんは、これまでの事を全部考えてみろって言ってたけど、考えても糸口すらつかめない。
あ～～～もう・・・・。
僕は、何か飲み物を飲もうと冷蔵庫を漁る。
「あれ？」
あいにく冷蔵庫には飲み物は全く入っていなかった。
入っていたのは、食べかけのスナック菓子とゼリーのみ。
・・・・そう言えばこの前、全部飲んじゃったんだっけ。
仕方がない、購買に行こう。
僕は財布と、カギを持って部屋を後にした。

丁度、階段を降りる直前だったかに、誰かのどなり声がする。
・・・この鋭い声は・・篝？
気になった僕は、その声がした部屋を探そうと思ったが・・・すぐに見つかった。
なにせドアの前が黒山の人だかりだったのだ。嫌でもわかる。
僕は手近な生徒に声をかけた。
「何の騒ぎだい？」
「あ、アルディ君、よくわかんないけど篠ノ之さんと、今日転校してきた子が騒いでるっぽいよ」
ふむ・・・よくわからないシュチエーションだな・・・。
僕は女の子の間を縫って、部屋にたどり着く。
その間、色々当たるものがあったが、邪神よ去れ、信ずる者は救われるのだの精神で乗りきった。
ドアの前に立つと、扉に耳を当てて中をうかがう女子三名と目が合う。
「アルディ君、中々面白いことになってるよ！」
「・・・君たちもまぁまぁ、面白いと思うけど」
「まぁね～」
褒めてないっていうのに。

「で、何が起きてるの？」
「それがね、あの鈴って子が篠ノ之さんに部屋変わってって言いに来たみたいなのよ！」
あ～なるほど・・・。
そりゃそうだよなぁ、一夏を好きなわけだし自分以外の女の事相部屋なんて聞いたら黙ってられないよね。
僕も、習って耳を当ててみる。
「アルディ君だってやってるじゃん」
「・・・いいの」
耳を澄ませ中の音を聞く。
どうやら鈴と箒が激しく言いあっているようだけど・・・。
一夏は？
・・・あぁ、聞こえた。
箒と鈴から選択肢を突き付けられているみたいだ。
・・・ある意味究極の選択だよな。
と、突然
バッシーン！！！
耳をつんざくような衝撃音が中から。
流石の女子たちも、驚きを隠せない。
僕だってそうだ。
急いで部屋のドアを開ける。
幸い鍵は開いているみたいだ。
「今の音、大丈夫！？」
バッと勢いよく中に入ると、そこには？甲龍？を部分展開した鈴が、箒の一閃を受け止めているという、中々ハードなシーンが展開されていた。
「今の、普通の人が相手だったら本当に危ないよ・・・・」
真剣なまなざしで、鈴にそう告げられる箒。
確か箒は全国大会で優勝したと、一夏は言っていた。
そんな箒の一閃だ。鈴の言うとおり普通の人が相手ならまさに凶器

だろう。
そしてそのことを、指摘されて気まずい顔で竹刀を収める箒。
なんとかなったみたい。
・・・・・っていうか、僕は言った意味無いね。
まぁ、開けてどうするつもりでもなかったけどさ。
箒を退けた鈴は、一夏に詰め寄る。
そう言えばさっき、ドア越しの会話では約束がどうたらこうたら言ってたな。
「で、鈴・・・約束の事なんだが・・・」
あぁ、やっぱり今からその話なんだな。
「うん、一夏！覚えてるよね！！」
期待に満ちた笑顔で一夏の返答を待つ鈴。
そして一夏がゆっくりと、その内容を口にする。
「えーっと・・・確か、鈴の料理の腕が上がったら・・・・」
「そうそう！」
「毎日酢豚を――――おごってくれる・・・だったか？」
「・・・・え？」
鈴の顔が固まる。
どうやら違う見たいっぽいけど・・・？
「だから、料理の腕が上がったら毎日酢豚をごちそうしてくれるって約束だろ？」
腕を組んで、確信の顔でうなずく一夏。
目をつむっているから多分、鈴の変化に気が付いていない。
鈴はわなわなと体を震わせ、その瞳には涙も見える。
・・・なんだかデジャヴだなぁ。
そんな事を思っていた直後・・・。
パァンッ！
乾いた音が、部屋に響く。
僕も、そして箒も、もちろん叩かれた一夏本人も。
みなが唖然とする中、鈴の怒号だけがその場を支配する。

「最っっ低!!!女の事の約束一つ覚えてられないなんて、男の、いや人間の風上にも置けないやつねッ!!今度のクラス対抗戦、覚えてなさいよ・・・・・」

冷たく一夏を睨む鈴。そしてボソッとそれでいて背筋の凍るような声で言い放つ。

「殺す・・・」

僕に言われたわけじゃないのに、この迫力・・・。

鈴はそれから足元にあった、ボストンバックを乱暴に肩にかけると、目を覆って出口へと走る。

・・・・ん?出口。

こっち!?

普段ならすぐに気付くだろう。当然だ。

目で見えるからね。

でも、いま鈴は、涙を一夏や周りの生徒に見せまいと目をふせている。

僕の予想通り、鈴は僕に気付かず、そのまま突っ込んでくる。

「わっ!?」

「とっ!」

僕もそんな事、考えていたのが悪かった。

避けるのが遅れて、鈴に押し倒されてしまう。

「いったぁ・・・あんたねぇ、ボケっと突っ立てんじゃないわよ!!」

「そんなこと言ったって、そっちだって突っ込んできたじゃないか・・・」

ていうかちょっと鈴、暴れないで!

て言うかむしろ早く立って!!

ドアも開いてるし何より、状況が状況だ。

こんなとこ、セシリーにでもみられたら、ますます状況が・・・。

「全く何を騒いでいらっしゃいますの?」

・・・うそぉ・・・。

今一番聞きたくない声が、後ろからする。
・・・終わった。
そして、セシリーが姿を現した。
「・・・・・・」
「あ・・・・・」
それしか、声が出なかった。
向こうは、そんな声すら出ないらしい。
一瞬だがセシリーの顔が、苦虫をかみつぶしたように歪んだのを僕は見逃さなかった。
だが次の瞬間には、いつも通りの調子で、鈴に手を差し伸べ鈴を立たせる。
「何があったのかは知りませんけれど、お気をつけなさいな」
「うぅ・・・まぁ、ありがと」
それだけ言い残し、セシリーはすました顔でドアの視界から消えた。
だめだ、追いかけないと。
でも追いかけて何を言えば・・・
えぇい、そんなの後で良い！
「セシリーッ！」
大声でセシリーを呼ぶ。
そのまま行ってしまうかと思ったが、意外にも足を止めてくれた。
「何でしょう？」
「あ、いやその・・・」
だがその次が出てこない。
頭が真っ白になるっていう言い方は、あながち間違っていないようだ。
「何もないのなら、呼ばないでくださいまし。？アルディさん？」
「え・・・・！？」
あぁ・・・・・くそ・・・。
アルではなくアルディさんと呼んだ。
それはつまり・・・そう言うことだ。

完璧な拒絶。
・・・・これは、大変な事になった。
話するとかしないとかの次元じゃないぞ・・・。

結局、セシリーと話すことができないままクラス対抗戦を迎えてしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「バイパス安定。どう調子は？」
薄暗い部屋。
ＰＣのモニターが発する光だけが、人の表情をかろうじて映し出す。
映し出された表情や、体の形状から判断するに、声の主は女性の様だ。
「大丈夫です・・・ちょっとまだ重いですけど」
「大丈夫、すぐになれるわ。もうすぐ、システムも着床するころだから」
女性の声に、少年の苦笑をはらんだ声が反応する。
闇に浮かぶシルエットは鋭角的で、バックパックに四つの砲をラックしている。
一見するとＩＳの様だが、その姿はどことなく工業的で、ＩＳの様なスタイリッシュさは見受けられない。
「フフ、これを見たら、なんて言うかしらね。皆やっぱりＩＳだって言うのかしら」

「外見そうですもんね」
「でもこれは、そんなものじゃないわ・・・・。
篠ノ之束・・・・。世界を馬鹿にしたツケは大きいわよ・・・私たちが見せてあげるわ・・その大きさを・・」
女性は、いったん言葉を区切り不敵に笑う。

「このＩＳ－Ｎでね」

第6話～どん底アメリカン・不敵なアンノウン～（後書き）

「あーあーあー聞こえなーい」っていう、いじめがアメリカにはあるそうです。
噂ですがｗ
どうもしるくです、こんにちは。
お読みいただきましてありがとうございます。
前回で、鈴の戦闘シーンまで行けたら～とか何がやねんッ！！

次回はまぁ確実に行くと思いますよｗ
それではまだ7話でお目にかかりましょう！
さよならっ！

第7話～あのサクラメントの夕日～

クラス対抗戦だけに、アリーナの観客席は満員御礼だった。
そりゃ当然だろう。
今日戦うのは、中国の代表候補生の鈴と、世界で二人だけＩＳを動かせる男の一夏なのだ。
否が応でも、注目が集まる。
一応リザーブで待機しておけと言われ、ＩＳスーツに着替えて、ピットで待機しているものの、
今日、出番はないだろうね。
僕の祈りが通じたのか、一夏は大きなミスもなく無傷で今日までたどり着いたのだから。
・・・それに今僕はそんな事を心配してる場合じゃないんだよなぁ・・・。
僕は、セシリーの事を思い浮かべる。
今思っても、タイミングの悪さと、運の悪さの二つに頭が痛くなる。
・・・まるでドラマ見たいじゃないか。
流石はセシリー狙いは外さないってか？
・・・冗談じゃないよ。
そんな狙いは外してほしかったなぁ・・・。
僕は、ため息交じりにチラッと時計を見やる。
もうそろそろ、来てもいいことなんだろうけど・・・・。
と思っていた矢先。
「あれ、アルディ準備早いな」
選手がピットへご到着だ。
「まぁ僕の場合、ただＩＳスーツ着て待ってるだけでいいからね、一夏みたく出場選手じゃない僕は気楽でいいよ」
「自分で言うなっての」
ははっと笑いあうが、全然気持ちが晴れません！！

一夏は早速、？白式？を展開し、準備を始める。
「一夏、お前以前アリーナで鈴のＩＳを見ただろう？」
一緒にいた箒が、一夏に聞く。
「あぁ、あの赤っぽい奴だろ、見た見た」
「今回は、どうやら接近戦になりそうだな、セシリアの時とは違って。」
「だな、流石に俺も、毎日お前に鍛えてもらってるんだ。
代表候補生相手とはいえ、女に遅れはとらねぇよ！」
力強い返答に、箒も満足そうにうなずく。
「でも、一夏気を付けなよ。鈴のＩＳのパワーは本物だからね」
「そういや、お前吹っ飛ばされてたな」
地味に恥ずかしい・・・。
「と、とにかく、僕の？ストライク・バーディ？を一撃であの高さからたたき落としたんだ、注意するにこしたことはないだろ？」
「まぁな・・・」
パワータイプは、組み付かれると振りほどけない。
僕のはまだ重さや装甲分の厚さがあったから、ほぼ無傷（痛みはかなりあったけど）で済んだけど、あれが？白式？だったら、流石に無傷とは行かないだろう。
更に鈴には、それなりのスピードがある。
それにあれは、全然本気じゃなかった。
それを思うとやはり代表候補生と、そうでない人との、実力差は月とすっぽん並みに離れているのかもしれない。
言うまでもなく厄介な相手だ。
『聞こえているか織斑？』
スピーカーから織斑先生の声がする。
一夏はそれに、ＩＳのオープンチャンネルで答えた。
「はい、聞こえています」
『そろそろ、時間だ。準備は良いな？』
「・・・大丈夫です」

『よし、サウスバード、篠ノ之お前たちは、管制室に来い。特別に特等席から見せてやる』
特等席だってさ。
まぁ、立ち見やピットのリアルタイムモニターよりは、鮮明に見えるだろう。
「一夏・・・・」
「なんだよ、箒。その顔は」
「前にも行言ったが、負けるなよ？」
「あぁ！」
一夏の力強い肯定の声が聞こえたと同じぐらいのタイミングで、ピットの通路ハッチは閉じられた。
「まぁ、大丈夫だって」
「・・・ふん、し、心配などして・・ないぞ！？」
今さら、言い訳しても遅いよ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

セシリアは、多くの観客が詰めかけた客席の最上段から、アリーナを見降ろしていた。
ただ、そこに明確な理由はない。
ただ、なんとなく。
本当になんとなくそこにいた。
あの時見た光景。
誰がどう見ても、彼は被害者だった。
彼は悪くない。
ただの事故なのだから。
でも、どうしてもセシリアは、その状況を見て事故だから仕方ないと割り切ることができなかった。
相手が鈴だったから？
自分じゃ無かったから？

分からない。
何度考えても・・・。
もう、そんなこと考えても仕方がないというのに。
彼は・・・そう・・・もう私を必要としていない。
初めから誰でもよかったのだ。
でなければ、鈴との模擬戦の時もあんな楽しそうな顔はしない。
自分の時には、あんな顔見せたこと無かったのに。
セシリアは焦点の定まらない目でボーっと、アリーナを見ている。
何も、感じず。
何も考えずに。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「逃げずに来たじゃない！」
鈴の自信と余裕の声が、ＩＳのチャンネルから聞こえてくる。
「誰が逃げるかよ、誰が！」
「覚悟なさい。今日のあたしは、初めっから何もかもが振り切れちゃってるんだから！！」
どうやらその言葉に嘘は無いらしい。
目の色が違うし、何より手に持っている、？双天牙月？が今にもへし折れそうだ。
一夏は、若干冷や汗をかきながらも気合を入れ直す。
目の前にいるのは、代表候補生なんだ。
鈴とはいえそれは変わらない。
「鈴！俺が勝ったら、約束の事説明してもらうからな！！」
「大丈夫よ、その必要はないわ。だって・・・」
鈴は大きく両手の？双天牙月？を振り回すとそれを柄の部分で連結させて一本にする。
そしてそれを大きく振りかぶって、こちらへ投擲してきた。
「あたしが勝つから！！」

高らかな勝利宣言と共に、試合開始のブザーが鳴る。
鈴の攻撃は若干早かったが、到達がブザー後だったため有効だ。
「鈴！頭に血が上って、血迷ったのか？自分の武器放り投げて・・・丸腰だっ！！」
一夏は一気に間合いを詰めると、丸腰の鈴に切りかかる。
「もらった！」
「あんた、馬鹿ね・・・あたしは代表候補生よ！！」
その時、一夏が衝撃音と共にアリーナの側壁へ吹き飛ばされる。
かろうじて、体勢を持ち直せたものの、アリーナ側壁への直撃。
痛いでは済まない激痛が体を走る。
い、一体なんだ！？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一夏が吹き飛んだ映像は、管制室のモニターでも確認できた。
「なんだあれは！」
箒が思わず叫ぶ。そりゃそうだ僕も何が起きたのか分からない。
すぐに、鈴のＩＳのデータを閲覧し山田先生が、答えた。
「？衝撃砲？ですね・・・空間圧縮兵器の一つです」
「空間圧縮・・・？」
聞き返した僕に答えたのは、織斑先生だった。
「空間に圧縮をかけ砲を形成し、その余波で生じる衝撃波を砲弾変わりに打ち出す、第三世代兵器だ。
ウェイトがある分、即対応時の射撃には向かんが・・・」
一度目をつむり、そして勢いよく目を開く。
「その砲弾は目に見えない」
目に見えない、砲撃・・・。
そんなもの積んでいたのか。
やっぱりあの模擬戦、ただ遊ばれただけだったんだ、僕は。
チラッと箒を見やると、手をきつくグッと握っている。

これが安全の考慮された、命の危険の無い模擬戦であってもやっぱり、心配なんだろうね。

「それに、あの?衝撃砲?には砲身傾斜の制限が全くありません・・・」

つまり、見えない砲撃を三六〇度制限なく撃てるということか。

・・・本当に厄介な相手だ。

と、急に一夏の飛び方が変わる。

何かするつもりなのか?

初めの、間合いを詰める方法から一転、鈴から距離を取り始める一夏、

一夏に射撃武器はないし・・・離れて良い事なんて・・・。

「?イグニッション・ブースト?を使うつもりだな・・私が教えた」

「イグニッション・ブースト?」

また聞き慣れない単語が出てきたぞ。

それに人差し指を建てて山田先生が、説明する。

「慣性エネルギーを使用した、特殊加速技術ですね、外部エネルギーを一度取りこんで圧縮。

それを一気に放出する事で、一瞬でトップスピードに到達するテクニックです」

「あの馬鹿でも、出しどころさえ間違わなければ、代表候補生と互角に渡り合えるテクニックだが・・・チャンスは一度きりだ」

一度・・・。

代表候補相手にたった一度の少なすぎるチャンス。

ものに出来るのか・・・。

モニターを見上げる僕の手も箒同様、グッと握られ手汗で、びっしょりだった。

◇◆◇◆◇◆

チャンスは必ずある・・・。
いくら、砲身傾斜が無制限って言ったって、打ち出す所は一つしかないんだ。
ランダム機動を繰り返せば、必ず追いきれない角度ってやつが出てくる。
一夏は、ひたすらその機会を待つ。
鈴の衝撃砲?龍砲?は今も確実に自分をとらえている。
だが、どうやらそれを鈴はオートにしているようだ。
狙いだけ定めてタイミングだけ鈴が指示している。
それなら!
機械は正確だ、驚くほどに。
だがその正確さがアダになることがある。
一夏は方向転換から?イグニッションブースト?の移行を、絶え間ない訓練の成果で完璧にこなす。
一瞬、本当に一瞬だが、?龍砲?が一夏をとらえきれず砲身が一夏からそれた。
今だ!!
それと同時に、圧縮されたエネルギーは一瞬で?白式?を、一夏を、トップスピードまで押し上げる。
「ぜあぁぁぁぁぁぁ!!!」
「ッ!?」
刃がもう一歩で鈴に届く、その時だ。
アリーナは、轟音と巨大なクレーター、そして砂煙に包まれた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

何だ!?
モニターから一夏達が見えなくなって、次に見えた時には何やらク

レーターの中心に機械的な?何か?がいた。
「試合中止!織斑、凰!すぐにピットへ避難しろ!」
織斑先生の、切迫した声が緊急事態だという事を、否が応でも認識させる。
「IS・・・なのか?」
「アリーナにはシールドがある。それを突き破ってきたんだ。少なくとも通常兵器じゃないね」
冷静そうに言う僕だけど、前以上に手汗は凄いし、冷や汗だって止まらない。
その時、耳を疑いたくなるような言葉が一夏の口から飛び出した。
『いや・・・俺達でなんとか抑えよう』
何だって!?
そう思ったのは箒も同じだったようだ、山田先生のインカムをひったくると声を張り上げる。
「一夏!もうすぐ、教師陣が到着する!早くピットへ戻るんだ!!」
『箒・・・でも、それにはまだ時間がかかるんだろ?』
「そうだな・・今三年の精鋭がシステムクラックを実行中だがすぐと言うわけにはいかん」
腕を組んだまま、淡々と述べる織斑先生。
それを聞き、だったらと続けた一夏。
『少なくとも、その時間分稼いでみる・・・・大丈夫さ、こっちには代表候補生もいるしな』
そう言って鈴を見る一夏。
鈴の顔も、今までと比べ物にならないほど真剣だ。
でも・・・相手が相手だし・・・。
「・・・・分かった。その代わり無茶はするな。少しでも身の危険や命の危険を感じたら、すぐにピットに戻れ、良いな?」
『・・・はい』
力強くうなずいて、通信が切れる。
沈黙の訪れた管制室に、次に響いたのは山田先生の声だった。

「織斑先生！」
「大丈夫だ・・・本人たちがやれると言っているんだ・・・・任せてみようじゃないか」
全く弟も、弟なら姉も姉か・・・・。
あれ・・・それはひょっとして、僕が言えない？

そして再びモニターが開くと、そこには一夏・鈴のペアが、アンノウンと戦っている姿をがあった。
アンノウンは、上半身と下半身のバランスが明らかにとれていない、奇妙な形をしていた。
頭部には複数のカメラが動き、動きもどこか？人工的？だった。
それでも、一夏の？一撃必殺？のザンゲキはことごとくかわされ、隙を縫って攻勢に転じる姿は確かに人間っぽい動きのようにも見える。

・・・・なんだろう、この変な感じ。
僕はその違和感の正体をいまだつかめていなかった。
そうこうしているうちに、一夏達が追い込まれていく。
アンノウンの放ったレーザーが、よけきれなかった一夏のスラスターに当たり、体勢を崩す。
それが絶望的な隙を生む。
その時誰もが思った。
・・・・まずいと！
しかし、またもアリーナは、轟音に包まれてしまった。
二度あることは三度あるとはよく言うが、これは一度あることは二度あるだ。
砂煙が晴れると、一夏とアンノウンの間に、入るようにして一機の黒いＩＳが立っていた・・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

なんだ、何か起こったんだ!?
それに、コイツは一体。
俺の目の前に立つ?ソレ?工業的な角ばったフォルムに、
バックパックに二門の荷電粒子砲を背負っている。
顔はバイザーで覆われており表情を確認する事は出来ないが、男と
言う事だけは分かった。
「お、お前は・・・・・」
「・・・・・・」
無言でこちらを、一瞥したあと、両手に構える荷電粒子砲がアンノ
ウンに向けて放たれる。
その威力はすさまじく、?龍砲?の直撃にも耐えたアンノウンが、
いとも簡単に吹き飛ばされる。
体勢を立て直す暇さえ与えず、?ソレ?はアンノウンに砲撃を浴び
せていく。
それはどれも正確で無駄が無い。
もはやそれは、戦闘ではなかった。
あれだけ俺達を苦しめたアンノウンがただの動く的になり下がって
いる。
両腕を吹き飛ばされても尚、攻撃姿勢を取るアンノウン。
だが、両手に多くの兵器を集中させていたアンノウンは、ほとんど
丸腰に近い状態だ。
それに対しても、なんの躊躇なくトリガーを引いていく。
程なく、すべての武装をつぶされただ立っているだけになったアン
ノウンに、とどめの一撃が放たれる。
「・・・・・・鉄クズですね」
冷たくつぶやき、頭部・胴体・脚部のすべてに一瞬で荷電粒子砲の
雨が降り注ぎ、大爆発を起こして吹き飛ぶアンノウン。

そこで一夏はハッとする。
「お前！操縦者は！」
「・・・・大丈夫です、これは無人のＩＳですから・・・それより・・・」
？無人のＩＳ？？
そんなものがあるのか？
普通ＩＳは人間が乗りこまないと動かない。
ＩＳとはそういうものだ。
だがこれは無人・・・。
呆然とする俺に、？ソレ？が近寄ってくる。
助けてくれたはずの相手に対して、嫌な汗が流れる・・・。
コイツは・・・コイツは！！
「君も、鉄クズにしてあげます・・・」
敵だ！！！
「一夏下がって！！！」
「っ！」
鈴が？龍砲で牽制すると、予想外の攻撃だったのか一瞬隙が生まれる。
スラスターがうまく稼働しない？白式？に鞭打ち、無理やり浮上して、追撃の荷電粒子砲を回避する。
まずい・・・これはまずい・・・。
シールドエネルギーは、ほぼ底を尽きかけ、鈴も、アンノウンに片側の？龍砲？を破壊され、
満足に火力を発揮できない状態だ。
そんな中で、あれだけの火力を持つＩＳを相手になど出来るわけもない。
・・・どうする！！

◇◆◇◆◇◆

ぼうっとしていたセシリアだったが、この非常時にまで呆けているような人間では無い。
これでも、腐っても候補生なのだ。
すぐに頭を切り替え、情報を整理する。
進入してきたＩＳは一機・・・。
装備はあの四門の荷電粒子砲ですわね・・・。
荷電粒子砲は、一発単価は高火力だが、その反動の大きさや狙いのつけにくさ、連射速度などは
以前アルディの？ファイアーフライ？を撃った時に分かっていた。
先ほどの戦闘で、セシリアの目は、あの正体不明機が射撃の際に砲身がブレ、わずかに
狙ったところへ撃てなかったことがあったのを見逃していなかった。
一方こちらの装備は、反動の少ないレーザーライフルに自立機動のビット？ブルーティアーズ？がある。
大丈夫だ。やれる。
そこまで考えて、こんな事を考えられたのはアルディのおかげだ、と言う事に気が付く。
アル・・・。
あんなに拒絶反応を見せていたセシリアだったが、正直彼に会うのが怖かった。
本当に今度こそ、彼の口から？もういいよ？と言われてしまうのではないかと。
自分はまた、失ってしまうのか大切なものを・・・。
って、いけませんわ・・今は集中しないと！！
かぶりを振って沈みそうになった気持ちを切り替え、セシリアは？ブルー・ティアーズ？を起動し、
さっきあのＩＳが撃ち抜いたアリーナのシールド破損部へ機体を躍らせた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一体何なんだ、あいつは・・・。
目の前で信じられないものを見ている。
僕は、あのＩＳの介入と同時にロックが解除されたピットへ来ていた。
当然、ロックが解除され田と言う事は教師陣ら制圧部隊も駆けつけるということだ。
ようやく、終わった。そう安堵しかけたが、どうだ？
国家の代表や、代表候補だったこの学園の教師陣がハエのごとく叩き落とされてくる。
既にアリーナの地面には、何十体という？打鋼？が行動不能状態で墜落している。
・・・まずい。
あれは本当に。
「織斑先生！」
「無理だ・・・もう機体が無い・・・」
苦虫をかみつぶしたような顔で、告げる織斑先生。
一夏達も、なんとか逃げ回っているが、もう機体も人間も限界だ。
僕も出ていきたいが、あの実力差では・・・。
諦めかけたその時アリーナの上空で何かが、きらめいた。
それは鋭角的なデザインを持つ、イギリスの専用機。
？ブルー・ティアーズ？・・・セシリー！！
程なく、ブルー・ティアーズの攻撃が始まる。
流石の黒いＩＳも、エネルギーを使い過ぎたのか、攻勢に転じることなくその攻撃の回避に専念している。
その間に一夏達も距離を取って一番近いピットへ避難する。
一夏達の無事に安堵しながら、セシリーの攻撃をことごとく回避する黒いＩＳに恐怖と戦慄を覚えた。

凄い・・・一発も当たらない。
エネルギーが無いにしても、あの機動力は・・・。
だがそのエネルギーが無いのだろうという考えは、黒いＩＳの取った次の行動で疑問に変わる。
黒いＩＳが、地上でまだ動けるＩＳが構えた、銃に向かって荷電粒子砲を撃ったのだ。
なぜだ・・・？
今のは別に撃たなくてもよかったはずだ。
反応できていたのだから・・・・・。
まさか！！
僕は、ＩＳを展開して一気に飛ぶ。
セシリーが・・・セシリーが危ない！！
ハイパーセンサーが射撃に集中するセシリーの後ろから急速に接近する紫色のＩＳをとらえる。
頼む！！間にあってくれ！！！！
必至で重い機体を加速させる。
スラスターも悲鳴を上げるが知ったことじゃない！
むしろ馬鹿でかいんだから、もっと加速しなよ！！
そのＩＳは、手に槍を持っている。
それを構え、今まさにセシリーに切りかかろうとしている。
やめろぉぉぉぉぉっ！！！！！
そして槍は振り下ろされた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あ、当たらない！！
この私を遊んでいらっしゃいますの！？

黒いＩＳは、セシリアの攻撃を、あれよあれよと回避し、エルロンロールやインメルマンターンなど?曲芸飛行?まで入れるほどの余裕ぶりを見せつける。
それは、プライドの高いセシリアにとって耐え難い屈辱だった。
ライフルを持つ手が、怒りで一層強くなる。
絶対に当てて見せますわ・・・・！
ビットのけん制で動きを制限しつつ、ライフルの照準を合わせる。
ハイパーセンサーによる補正で敵ＩＳの操縦者の顔まではっきりと見える。
当てる！！
そう強く念じ、狙いを定めトリガーを引こうとした時、相手がこれまでにないぐらい不敵に笑った。
「・・・・ッ！！」
ハイパーセンサーの警告音と共に顔を上げる。
そしてそこでようやく後方からくるＩＳに気が付いた。
完全に致命的なミス。
?射撃時における周囲の安全確認不良?
こんなところで終わりですの・・・・。
セシリアはそう思った。
せめて彼と、仲直りだけはしたかったですわね・・・。
ゆっくりと目を閉じる。
・・・だが、身を切り裂くような痛みも、何も感じなくなるという死の感覚も、何も訪れない。
セシリアは、疑問に思って目をあける。
そこには、仲直りしたいとたったいま思った少年がいた。
「あ、アル・・・・」
「諦めるなんて・・・らしくない・・・・・・こういう言い方するとまた、叩かれる?」
ハハっと笑う彼だったが、その顔は苦痛にゆがんでいる。
見ると相手の槍が、深く腕のアーマーに突き刺さっていた。

ＩＳは、より操縦者が扱いやすいように手で持った感覚。
つまり柔らかいや固いとかそう言った感覚をフィードバックする。
そしてそれは痛覚も例外ではない。
恐らく今、彼は気が飛びそうなほどの激痛に耐えている。
そう、拒絶を示した、あんなにふうに言ってしまった自分を守って。
その彼が、苦しみながらも声を出した。
「せ、セシリー・・・・正直言って僕はまだ、どうしてセシリーが怒ってるのか・・・・
はぁっ、見当もつかない。でも・・・でもね・・・これだけは言えるんだ。
君は僕にとって必要な存在だから・・・。
怒らせといて、都合のいいこと言ってるかも知れないけど、
これからもさ・・・色々教えてほしいことといっぱいあるんだ」
あぁ・・・自分は本当に馬鹿だ。
あの時もそう思ったが、あのとき以上に自分は大馬鹿ものだ。
初めは変な嫉妬心からだったのかもしれない。
アルが鈴と笑顔で模擬戦をしている所見て、なんで自分じゃないのかと思った。
そして一方的に拒絶して、気付いてくれないことにいら立って、彼を叩いて。
そのまま自分で勝手に、もう私は必要ないんだと決めつけて・・・・。
彼も自分を残してどこかへ行ってしまうのだと。
でも、それは違った。
彼はどこへも行ってなどいない。
彼はそこにいる。
「物分かりの悪い僕だから・・・・何言っても一回じゃ、よく覚えられない僕だから・・・
だからその度に、セシリー、君が・・・・はぁはぁっくぅ・・・君がその度に僕に言ってよ・・・

いつも見たいに笑ってさ、怒ってさ・・・ね・・・」
そう彼は、ここにいる。
私の目の前に！！
セシリアは先程までの動揺など毛ほども見せずに、目にも止まらぬ速さでビットをコントロールして、紫色のＩＳに攻撃を加える。
「てめぇッ！！」
女性の乱暴な口調が聞こえるがセシリアはそんな事気にも留めずに、いつもの気丈な声で言い返す。
「よくも人の殿方に、手を出してくださいましたわね・・・その代償は大きいですわよ！」
ビットの攻撃に、気を取られた一瞬の隙を突いて、
セシリアのレーザーライフル？スターライトＭｋ？？が火を噴く。
「ちいぃっ！！この！！」
その閃光は、またたく間に紫色のＩＳを切り刻む。
主兵装であろう、槍も貫かれて爆散した。
味方の危機を察して、離脱する紫色のＩＳを援護するために黒いＩＳが救援に駆けつけるがそれには、体勢を立て直したアルディのＩＳが迎え撃つ。
「君の火力と、僕の火力・・・どっちが上だろうね？」
息をなんとか整え、いつもの口調で話すアルディにセシリアは安堵した。
あの黒いＩＳの圧倒的な実力を見ても、セシリアにはアルディが、負けることなど想像できなかった。
それは、アルディを信じているから。
それは、アルディを認めているから。
そして何より、
アルディが好きだからである。
「まいりますわよ、アル！」
「蹴散らそう！！」
互いに自信たっぷりに頷くと、黒いＩＳ目掛けてトリガーを引いた。

◇◆◇◆◇◆

爆破させていく。
「これは！？」
不規則な爆発に対応しきれずに、思わず攻撃と機動をやめる黒いＩＳ。
その隙を待ってたんだ！
背部の？ウェポンスクエア？が前にせり出し、小型スラスターが高度を維持する。
爆煙が晴れた時、相手が見たものは、自分の方へ向けられた絶望的な火力だった。
「Ｐｏｗｅｒ　ｉｓ　ｊｕｓｔｉｃｅ！・・・アメリカ人に喧嘩売ったこと後悔するんだね」
「っく、させるかぁ！！」
相手は素早く、機体を立て直し一気に間合いを詰めてくる。
・・・・かかったね。
黒いＩＳの射線上に鮮やかな青色のＩＳが躍り出る。
「なっ！？」
「フィナーレですわ！」
セシリアのビットが僕の行動に気を取られ、完全に無防備となった黒いＩＳの真後ろから
スラスター部を正確に攻撃する。
制御を失った、ＩＳはセシリアの上を通過。そして補助スラスターの点火と
ＰＩＣのおかげでようやくその動きを止めることに成功し、僕の高圧荷電粒子砲に耐えるべく？頭部を中心に防御する？。
「見かけにだまされちゃだめだよ？」
「何といいましても彼は・・・」
「「嘘つきだからね」」
ズガァァァァァァンッ！！！！！
「ぐあぁぁぁっ！！」
敵にとどめを刺したのは、腹部への荷電粒子砲の一撃だった。

この作戦はこんな感じだ。
まずミサイルとセシリアのビットで弾膜と煙幕を貼り、視界を遮った後
僕は？アヴァランチ？の準備をしてセシリアはその影へ。
そして、相手が隙のでかいこの？アヴァランチ？を阻止すべく突貫してくる。
そこでセシリーのビット攻撃が役に立つ。
周囲に気を配れるだけの実力があっても、それは常にと言うわけではない。
追い込まれればそんな余裕など、どこかへ消し飛んでしまうものだ。
そうして、ビットでスラスターを破壊した後は、ご覧のとおりである。
僕は小型スラスターだけで、ゆっくりと旋回。
見た目で大きいのが来ると思わせておいての、ハッタリ攻撃だ。
いやぁにしても、面白いぐらいに旨くいったね。
墜落していく黒いＩＳを紫のＩＳが、再び降下して素早く回収していく姿を見ながら、僕は満足げに笑う。
ふぅ・・・・。
色々あったけど、本当に仲直りできてよかった・・・。
ほんと、記念に花火でも打ちあげたいぐらいだよ。
ボンッ！
そうそう、そんな感じの音でさ。
バンッ！ボンボボンッ！
ん？なんだかやけに近いな。
バゴォォンッ！！
ひと際大きな音にびっくりするのもつかの間、スラスターが炎を吹いて自壊する。
「うぇうそっ！？」
多分あの時だ。
セシリーを助けるために、無理な加速を行ったあの時。

悲鳴上げてたもんなぁ・・・ってそんな事言ってる場合じゃない！
この高さから落ちたら死ぬ！！
って、あれ！
ＩＳ自体も限界だったらしい。エネルギー切れでリミット・ダウンが始まる。
いよいよまずい！！
僕は、目をつむるが、いつまでたっても地表に叩きつけられないし落下感も無い。
むしろ何か、暖かいものに包まれているような感覚を覚えた。
ゆっくりと目をあけると、僕はセシリーに優しく抱きかかえられていた。
しかも・・・その・・・。お、お姫様だっこで・・・助けてもらって言うのもなんだけど、
もの凄く恥ずかしい・・・・。
顔を真っ赤にする僕に、セシリーは悪戯っぽく肩目を閉じて微笑みかける。
「全く、女性にエスコートさせるのはマナー違反でしてよ？」
「き、緊急時はＯＫってことにしよう」
「ま、仕方ありませんわね」
満面の笑みで笑いかけられ、更に僕の顔は熱くそして赤くなったまま、地上へと降りて行くのだった。

ピットへ降り立つと、そこには織斑先生と山田先生そして、先にピットへ避難した一夏達が僕たちを出迎える。
「アルディ！怪我大丈夫なのか！？」
怪我？・・・あ。
今さらになって痛みが、よみがえってくる。
右腕に走った激痛に再び顔をゆがませる。

みると、アーマーを突き抜けた敵の槍は肘のあたりを、深く切り、血で真っ赤に染まっていた。
うわぁ・・・こんなのでさっき、僕は荷電粒子砲を撃ったのか。
「サウスバード、先に治療して来い・・・変に細菌でも入ったら厄介だ」
織斑先生がしれっと、言い放つ。
・・・もう少し心配してくれてもいいのに・・・。
トボトボとセシリーに促されて、治療室へ向かう。
それに一夏達も追随した。
ピットのハッチをでる時、背を向けてだが織斑先生がぶっきらぼうに言い放った。
「まぁ・・・なんにしても、全員無事でよかった」
それを見て、クスクス笑う山田先生が印象的だ。
それにつられて、皆の顔も笑う。
チラッとこちらを一瞥した、織斑先生の顔は照れて少し赤くなっていた。

「はい、これでよし！」
包帯を巻き、患部をポンと叩く保健室の先生。
「いっつ・・・・」
た、叩かないでくださいよ・・・。
痛みで体が、ビクッと反応する。
「これぐらい我慢なさい、男の子でしょう？」
これぐらいって・・・こっち切られてるんですけど。
はぁ・・・。
僕は礼を言って、保健室を後にする。
保健室の前のベンチには、皆が待っていた。
「それで、怪我はどうだったんだ？」
「腕を数針ね・・・ま、逆にそれだけですんだんだから、運が良かったよ」

「あんた意外と頑丈なのね、また吹っ飛ばしてあげようか？」
鈴が前と変わらず、だが前よりもどこか柔らかい言い方で、冗談交じりに言う。
冗談でも怖いよ・・・。
いまやられたら、それこそ体がバキバキになりどうだ・・。
目に見えた外傷はこの腕だけだったけど、見えない所のダメージも結構あるらしい。
保健の先生にも、しばらくは無茶は絶対にだめだと言われた。
・・・できても無茶なんてしたくないよ。
「そうか、よかったな・・・。あぁ～・・なんか安心したら、急に腹が減ってきた・・・着替えて食堂でも行かないか？」
一夏、君って・・・・
本当にずぶとい神経の持ち主だね・・・。
まぁ僕もお腹は減ってたし行こうかな・・・・。
僕も行くと言いかけた時、これまで一度もセシリーが口を開いていないことに気が付く。
見るとセシリーはどことなく、申し訳なさそうな、でも怪我が大したことなくて安心もしているような、そんな複雑な表情を浮かべていた。
・・・ふぅ。
「一夏、ちょっと用事があるから？僕たち？は遠慮するよ」
それを聞き自然に、そうか、それなら仕方無いと流す一夏と、ニヤニヤした目で見る鈴と、
そして、やれやれといった顔をする箒。
三者三様の顔で、僕たちを残して更衣室へと消える。
「セシリー、着替えたら・・・シャワー浴びた後でもいいけど、ロビーで待ってるからね」
「え、あの・・・アル・・」
そう言い残し、僕も更衣室へ消えた。

制服に着替えドカッと、更衣室の椅子に腰を下ろす。
・・・今日のあれは何だったんだろう。
・・うまく撃退できたものの、実力は目に見えて違ったよな。
もっと、強くならないとな。
?ストライク・バーディ?だってまだ完全に使いこなせていない現状で勝てたのは、
やはりセシリーがいたからだろう。
誰かを守るって柄じゃないし、セシリーよりも弱い僕がそんな事思ってもしょうがないんだろうけど、何時か、何かを守れるぐらいには強くなろう。
いつしか、僕の中にはそんな気持ちが芽生え始めていた。
・・・ってわッ!
意外に時間が経っちゃってたのか!!
遅れたら、セシリーに悪いし、急ごう。
僕は手早く荷物をまとめると、足早にロビーへと向かった。

夕焼けが世界を橙色に染め上げる。
僕が、ロビーに着くとそこには既にセシリーが立っていた。
橙色の光に照らされるセシリー。
ブロンズの綺麗な髪を、白い肌を、夕焼けが染め上げる。
・・・綺麗だ・・・。
何か映画の一部分でも切り取ったかのような光景に心を奪われる。
「どうかしましたの?」
「え、あ・・・あはは・・」
セシリーが不思議そうに、訪ねてくる。
笑ってごまかしたが、セシリーにはどうやらお見通しだったようだ。
フフフっと笑って、悪戯っぽく手を差し出してくる。
「それで、私をどちらへエスコートしてくださいますの?」

「・・・こちらですよ、お嬢様」
僕はその手を取ると、ある場所へ向かって歩き出した。
そこは、僕が偶然見つけた、穴場のスポットだ。
見つかりそうで見つからない。
僕は校舎の上へ、どんどん階段を昇っていく。
そして到着したのは、屋上だった。
「ここが、連れてきたかった場所ですの？」
「違うよ、ここからもう一個上るの」
これ以上どこへ登ると言うのか。
疑問符を頭に浮かべたセシリーを、？ストライク・バーディ？の腕部のみを
部分展開させヒョイッと抱き上げる。
「ちょ、ちょっと！？」
「あーはいはい、暴れないでねー・・・」
まるで赤子をあやすように、言いながら、セシリーを屋上の出入口の上に乗せる。
それに続いて僕もフェンスを使って、そこへよじ登る。
「・・・ちょっと汚れてるけど、ここ座って」
セシリーは促されるままにそこへ座る。
背中には給水塔があるが、それが丁度いい背もたれになる。
「セシリーあっちを見て・・・」
僕の指さす方向へ、セシリーが目を向ける。
それでも、イマイチ、ピンと来ていないセシリーに僕は指で枠を作ると、セシリーの目の前に置いた。
「あ・・・・」
「綺麗でしょ・・・まるでサクラメントみたいに・・・」
セシリーが見たものそれは、まさしくあの時見せた、サクラメントの光景だったに違いないと、
僕は確信する。
遠くに見える街並みと、眼前に広がる海と山。

それを、こうして指の枠で切り取ってやると、不思議なもので海は川に、
山は川岸に、そして市街地はサクラメントの摩天楼に見えてくる。
セシリーも僕が手をどけた後も、指で枠を作って、それを懐かしそうに眺めたいた。
「本当に・・・綺麗ですわね・・・」
「君と、どっちが綺麗かな？」
「・・・・・クスッ、そうですわね、今は私ですわ」
「くさいって言わないんだね」
「だって、それアメリカでは、まだ、主流なのでしょう？」
あ、あはは・・。
これは、取られちゃったな。
二人が眺めるその先で、？あのサクラメントの夕日？はゆっくりと沈んでいくのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・どうだ、山田君、解析の方は」
「ダメですね・・・無人機と言うことぐらいしか・・・こうまで破壊されては・・・」
織斑千冬と、山田真耶は薄暗い部屋の中で今日回収された、無人ＩＳと襲撃した二機のＩＳの解析に追われていた。
だが無人機の方は、コアの損傷も激しく、あの黒いＩＳが粉々にしてくれたおかげで、
解析は難航していた。
しかし無人機とは穏やかな話では無い。
現在も、無人機の開発は行われているものの、どの国も開発に成功

したという話も聞かないし、ましてやそれがスタンド・アロンで戦うなど想像も出来ない。
ふむ・・・・。
「あの二機のＩＳはどうだ？」
「アレについての方が、まだ情報はつかめてます」
片方だけですけど・・と続け真耶や千冬に端末を渡す。
そこには、交戦する紫色のＩＳが移っていた。
「紫香楽・・・・か」
紫香楽家《しがらきけ》。つい最近自前のＩＳを一機試作したという、元々武芸の名家だ。
ＩＳを製造するには、莫大な資金や設備が必要だ。
いくら名家とはいえ、単独でそれを実現するのは難しいはずだ。
「しかもこのＩＳは、しっかり国籍を持っています。登録されたコアをもとにして製作された
正規のＩＳですね・・・」
真耶が端末を操作すると、その情報が千冬にも転送される。
・・・・？紫燕《しえん》？か。
黙り込んで、思考する千冬に真耶が声をかける。
「あの・・・織斑先生？」
「まぁ、何にせよ・・・面倒な連中が出てきた事は確かだろう・・」
そう言う千冬の目は、かつて世界一の座に君臨した時の、鋭い眼光だった。

第7話～あのサクラメントの夕日～（後書き）

作者はアメリカ好きですが、行ったことないです。
どうもこんにちは、しるくです。

何か見る人によっては甘ったるかったりそうじゃ無かったりする第7話になってしまいましたｗ
あれ？
この話の主役は鈴たちじゃ・・・

・・・しらね！ｗ
それでは８話でまたお目にかかりましょう！
さよならッ！

第8話～天使のフレンチ・悪魔のジャーマン～

あの一件以来、余計に学園内で目立つ存在になってしまったこの僕。
だが目立つのは嫌いでは無い。
別にそれはどうでもいい。
問題は、あのセシリーへ言った必死の告白が、ＩＳのオープン・チャンネルを通じて
この学園内ほぼすべてに筒抜けだったことだ・・・。
あの時はもう、言葉さえ聞こえれば何でもいいと思って
チャンネルの切り替えなんてやってる暇なかったし、敵の目の前だったから、やってる余裕もなかった。
文字通り必死である。
だが、今になって考えてみると、これは非常に恥ずかしい・・・。
お姫様だっこでの地上帰還なんて、生易しいものだ。
あーーーくそぅ・・・。
すっごいやばい・・。
顔から火が出そうとはまさにこのことである。
更衣室前での鈴のあの笑顔はそういう意味だったのかと、今更ながらに理解する。
僕は、火照る顔を隠そうとうつむきながら、教室へ入った。
「君は僕にとって必要な存在だから・・・」
「きゃーーーー、あたしも言われてみたいなぁ～」
「あたしだったら、それ聞けただけで昇天しちゃいそう・・・」
女子が昨日の一件を、ものまねして騒いでいる。
くぁ～・・・。
やっぱり胴体切断覚悟で、プライベートチャンネルを開けばよかったかな。
・・・死ぬけど。
にしても、本当に朝から皆その話で持ちきりである。

僕がいる、いない関わらずその話だ。
初めその話を聞いた時はもう、窓から飛び降りようかと思った。
僕で、こんなんだから、セシリーもさぞうんざりしているだろうと思ったが・・・
「ねぇねぇ！どんな気分だった！？」
「そうですわねぇ、覆っていたモヤが一気に晴れ、暖かな太陽が私を包み込むような・・そんな暖かい心持でしたわねぇ～」
「いいないいなぁ・・・・・・」
「そうでしょう、そうでしょう～」
・・・うんざりどころか、今にもくるくる回りだしそうな雰囲気だった。
二年生の黛薫子っていう、新聞部のこまで来てたなぁ。
大方、良いネタを見つけたから記事にしようとしてるんだろうけど、それじゃただのワイドショーじゃないかな・・・。
「よう、俺にもばっちり聞こえてたぞ」
ニッと歯を見せて笑う一夏。
その前歯を全部折ってやりたい。
そう・・
「バキボキに・・・・」
「なんだ、どうかしたのか？」
つい本音が口に出てしまったようだ。
別にと手を左右に振って、合図する。
「面白い奴だなぁ・・・まぁ、元気出せって！別に悪い噂じゃないんだからさ」
「恥ずかしさって意味では、史上最悪だよ・・・全僕が涙するぐらいね・・」
現に今にも僕は泣き崩れそうだよ。
必死に小さな僕が、折れそうな心を支えてくれてるから良いけど、
その噂を耳にするたびに、一人ずつ
その、ミニアルディが事故死していくのが分かる。

あ、作業場の足が・・・また一人か。
こんな具合で、僕のテンションは、朝からアメリカ空軍のアクロバットチームも
真っ青なほど超低空飛行だ。
あぁ・・・もう何か障害物があっても避けずに突っ込もう。
砕けた方が、はっちゃけて面白い事になれそうだ。
ランナーズハイじゃないけどさ・・。
「諸君、楽しい授業の時間だ、用意しろ」
ガラッと、教室の扉が開き、織斑先生が登場する。
すると騒がしかった、教室は一瞬にして静寂に包まれた。
今日だけは、この人が僕の救世主に思えた。
・・・もう末期だろうか。
この授業中、五回は叩かれた。
織斑先生はあまり救世主では無かった。

授業が終わり、前の席の一夏が笑いをこらえながら、こちらに顔を向けた。
「くっくくぅ・・・お前・・・・あの間違いはないだろ・・・ッくく・・」
「し、仕方がないだろ!漢字は苦手だ・・・」
不覚だった・・・。
テンションダウンでボケーっとしていた僕に、織斑先生は問題を出した。
それはごく普通のＩＳ関係でも何でもない単語。
？一夏？
答え：ひとなつ
僕の回頭：いちか
言うまでもなく、一夏は噴きだし、クラスにクスクス笑いが広がっていった。

そして、織斑先生には「もう少し日本語を覚えろ」ということと「ボケっとするな」という意味を込めて二発の出席簿が僕の頭を襲った。

っていうか、織斑先生もあんな質問出すかね、普通。

もっと他の単語でもよか・・・くないか。

他の単語なら最悪、読めないっていうのがあるし。

「だいたい日本が、漢字もひらがなもカタカナも使う変な言語だからいけないんだよ！」

「そんなお前に、良い言葉を教えてやろう。？郷に入らば郷に従え？その土地に行ったらその土地の習慣や風土には合わせた方がいい、という意味のことわざだ。やはり昔の人は旨い事を言うな」

気付けば箒が、横で腕を組みながら、日本のことわざとやらを教えてくれる

「郷？ごうってなんだい？」

僕は聞き慣れない日本語に、箒に聞き返す。

「郷とはふる里とか集落とかそういう意味だぞ」

・・・集落？あぁ村の事か。

村に入れば村に従えってことか。

「それなら、君たちにも教えてあげるよ。Ｗｈｅｎ　ｉｎ　Ｒｏｍｅ，ｄｏ　ａｓ　ｔｈｅ　Ｒｏｍａｎｓ　ｄｏ．この意味わかる？」

お、考えてる考えてる。

一課も箒も、首をひねって色々考えているようだ。

でも・・・そろそろ。

「時間切れー」

「え！おい早いぜ」

「も、もう少し時間をくれ」

「ダメダメ、これはアメリカのことわざでね・・・」

「ローマにいる時はローマ人のする様にしろ・・・ま、郷に入らば～のいわば英語版ですわね。厳密に言えばそのまま同じような意味

と言うわけでもないようですが」
僕の説明よりも先にセシリーが人差し指を立て、腰に手を当てながら得意げに説明する。
まぁセシリーは知ってて当然か。イギリスとアメリカ。発音やスペルに多少の違いはあれど同じ言語を使っていることに変わりはないわけだし。
「ところで、皆さん。いつまでこうして、いらっしゃるおつもりですの？」
「どういうことだよ、セシリア」
「いえ、もうお昼ですわよ。早く食堂に行かないと席が無くなってしまいますわよ」
見ると時計の針はもうすぐ正午になろうとしていた。
確かに、それで以前一夏に救われたことを考えても、早く行った方が良いね。
今回は、席が無くても助けてくれそうな人はいなさそうだし。
僕達は立ち上がると、食堂へ向け足を進めた。

あ、そう言えば鈴がいた。
食堂に到着して、思った通り席が無い状態の僕たちを、鈴が助けてくれた時ぼくは、鈴の存在を思い出した。
クラスも違うし、今日はもうあの地獄のような噂の所為で、すっかり存在を忘れてしまっていた。
そんな事を言えば何をされるかわかったもんじゃない僕は下手に口を開かず、ありがとうと礼の言葉だけ鈴に告げて、着席する。
僕のすぐ横にセシリーが座って、そこまではスムーズだった。
だが一夏が座る席で少し今もめている。
「なにやってんのよ。早く座んなさいよあたしの？横？あいてるんだから」
「一夏、出入りしやすいようにお前は一番外側に座るんだ、うんそ

れが良い」
「ちょっと、何勝手なこと言ってるのよ！」
「一夏には・・・そうだ、水汲みという大事な役目があるんだ、ゆえに一位番外側で良いのだ！」
こんな具合だ。
水汲みって・・・・ここが、水も出ないような場所なら確かに重要だけどさ・・・・。
ここは食堂だ。水はサーバーで簡単に出る・・・・・箒流石に苦しいよ。
とりあえず、今の状況を簡単に整理すると・・
〔ソファの端〕セシリー・僕・鈴・〇・〇〔ソファの端〕
この〇のところでもめている形だ。
もう、どうでもいいじゃないか・・・。
この場で織斑先生が来よう物なら逃げようがないな。
まぁまだ僕の織斑先生レーダーに反応はないし大丈夫だろうけど。
・・・・時々誤作動を起こすけどね。
まぁ、感覚なんてそんなもんだろう。
結局一夏は、箒に押し切られ、ソファの端に自分のトレーを置き、それを鈴がもの凄い目で見ていた。

ようやく皆が落ち着いて、ご飯を食べ始めた頃。周囲から何やら噂声が聞こえる。
ほんと、女子って噂が好きだねぇ。
大方今朝の延長線上だろうと思っていたが、聞き耳をたてるとどうも違う。
・・・・ん？一夏がどうたらって言ってないか。
「一夏、君、何か噂になるようなことでも？」
「そりゃ、お前だろ」
その返し、今日はダメだ・・・。
何気ないその一言が凶器になったりするんだよ・・・。

僕は、グサッと刃物が突き刺さった心を必死に支えつつ、一夏に言葉を返した。
ここで折れたら、ダメだ。本当に今日終わっちゃう。
「で、でも、噂になってるのは、現状では君みたいだけど？」
僕はクイッと声のする方向を指さす。
その方向を一夏が見やると確かに、そこでは身をひそめてヒソヒソ話す女子のグループがいた。
そのグループはまだ指を差されたという事を知らず、会話を続けていた。
「・・・でね、・・・らしいのよぉ」
「それ、ほんとなの、あの織斑君が？」
「ほんとだって、あたしの友達が直接聞いたんだから！」

「・・・本当だな、俺の名前が聞こえた」
「だから言ったじゃない・・・おや、どうかしたのかい箒？」
内容のつかめない、一夏に対して箒は明らかに目が泳いで動揺している。
キョロキョロと辺りを見渡したり、その噂が聞こえる度に顔が赤くなっているのが分かった。
「・・・怪しいですわね・・・」
セシリーもその様子を見て疑問に思ったようだ。
食事の手を止め、ナプキンで口を拭きながら言う。
「そうだね・・・箒だけがあの噂で動揺するっていうのはおかしな話だし・・・
あ、セシリー頬に、まだ付いてる・・・動かないでね・・・うん取れたよ」
「ど、どうも・・・」
頬を、箒と同じぐらい赤く染めるセシリー。
・・・頬についてたのが恥ずかしかったのかな。
まぁそれは良いとして。

「多分これ、箒と一夏がらみの噂だね・・・。なるほど一夏鈍感だからなぁ」
「・・・あなたもですわよ」
え？
「何か言った？」
「別に・・」
ボソッと言うからよく聞き取れなかったけど、こういうのがダメなんだろうなぁ。
ちゃんと聞くって言ったばかりなのに。
「セシリー、本当になんて言ったの？」
その追求はセシリーにとってあまりに予想外だったようで、
そっぽ向いて水を口にしていたセシリーが、盛大にむせた。
「ゴホッ・・・ケホケホッ」
「あぁぁ・・大丈夫かい・・・」
トントンと優しくセシリーの背中を叩いてやる。
トントントントントン・・・・
・・・・やけに長いな。
トントントントン・・・・まだ？
トントントントントン
「あー、アルディ。それ演技よ演技。とっくに咳止まってるって」
へ？
「鈴さん・・余計な事を・・・・・・！」
なんで咳の演技なんてしてたのか、分からないけど、とりあえず止まってよかったね。
で、止まったところ早速で悪いんだけど。
「で、さっきなんて言ったの？」
「ケホケホッ！！」
「あんたも、相当なもんだわ・・・」
鈴のため息がやけに大きく響いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・なぜだ。

なぜこんなことに、なってしまったのだ。

箒は、あの女子たちの噂が、昨日、自分が一夏に言った「トーナメントで優勝したら付き合ってもらう」という宣言の事だと言う事にすぐ気が付いた。

さっきキョロキョロ辺りを見回してみたが、アルディの噂にまじって、この噂をしている女子たちが意外に多いことに驚いた。

っく、勝っても付き合えるのは私だけに決まっているだろう！

私は・・・その幼馴染だしな！

鈴はどうあれ、私の方が早いのだ。ファーストだからな。

そんなわけのわからない自信が箒を、奮い立たせる。

要は勝てばよいのだ。

それで万事うまくいく！

いつものように、自己完結するとうんうんと何度もうなずきながら、箒はご飯を口に運んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さて・・・時は過ぎて放課後。

今日からは、鈴も一夏の特訓に参加することになった。

まぁ、おおよそ鈴側から無理やりねじ込んだんだろうけど。

でも幼馴染とはいえ鈴は代表候補生だ。

流石に箒ほど、抽象的な表現はしないだろうと、一夏も期待を寄せていたのだが・・・。

「だからさっきから言ってるでしょ～。なんで分かんないのよもー、気合よ気合！！」

余計に酷かったようだ。

これならまだ、クイッとか言って実演して見せてくれる筈の方が分かりやすい。
「鈴・・・気合いだっていうのは説明じゃないだろ・・・」
「何言ってんのよ一夏！これほど簡単な説明ないじゃない！！」
簡単だよ、そりゃ。
何でもかんでも、気合で説明が付くんだから。
あ、ちなみに今日は僕は見学者だ。
なぜなら・・・。

「はい？」
「だから、あなたのＩＳはしばらく使えません」
「どうして？」
僕は、昨日セシリーと分かれた後、既に夜になっていたが？ウェポンスクエア？の爆散によってダメージを受けた？ストライク・バーディ？の簡易検査を山田先生にお願いしていたのだ。
その結果は今朝明らかになったのだが・・・。
「ダメージレベルがＣを上回っていますからね。使用は許可できません」
ＩＳは良くも悪くも成長する。その過程で多くの経験を積んで進化していくわけだが、当然その間の損傷時稼働もその経験内容に含まれる。
さっき先生の言ったダメージレベルＣと言うのは、ＩＳのダメージとしては相当のもので、そのまま無理に使用を続ければ、不安定なエネルギーバイパスを構築してしまい、後々重大な欠損を生む可能性があるのだ。
でも・・・・
「ただ、リアスラスターが爆発しただけですよ、それだけで堅牢な僕のＩＳがレベルＣの損傷ですか！？」

「はぁ、サウスバードくん。あなたのリアスラスターには何がありますか？」

・・・あ。

そうだった。

？ストライク・バーディ？のリアスラスターの正式名称は？フレキシブル・スラスター？だが兵器名は？ウェポンスクエア？多くの火器を搭載したいわば？ストライク・バーディ？の武器庫だ。

そんなものが、爆発したら確かに流石の？ストライク・バーディ？も耐えられないよね。

「どうやら、引き金はスラスターの高付加によるオーバーブローの様ですが、

それが、他の火器の誘爆を引き起こしてしまったようですね」

だめじゃないっすか・・・。

って言う事があったのだ。

そのため、僕だけ一夏達から少し距離を取って、見学しているというわけだ。

なぜ、一夏達の声が聞こえるかと言うとセシリーのおかげだ。

僕が見学と知ると、なぜかセシリーまで見学と言いだしたのだ。

まぁだがそのおかげで、こうして？ブルー・ティアーズ？のモニターで一夏達の話し声を聞いたり、

こちらから話しかけたりできるわけだから、感謝しないといけない。

「にしても、本当によかったのかな、セシリー」

「何がですの？」

「いや、一夏達と訓練しなくて、良いのかなって。それに最近、全然自分の訓練とかできてないんじゃないの？」

「そう言うことは、一度でも私に当ててから言いなさいな。

一発も当てられていないアルが、心配なさることではありませんわ」

うぅ、まぁそれは本当なんだけど・・・。

事実、様になってきたというだけで、セシリーには今日まで一発の、？い？の字すら当てた試しがない。
それを言われると、言い返せないんだよなぁ。
「とにかく、今日は私も見学しますの！」
強く言いきると、フンッと鼻を鳴らすセシリー。
僕はそれを見て、少し笑みがこぼれた。
アリーナの中で縦横無尽に飛び回る一夏達を見て、体がウズウズしながらも、
まぁ見学もまんざらじゃないかなと、思う僕だった。

翌日、人のうわさも七十五日とか日本では言うらしい。
意味は、世間のうわさも一時の事で、時が過ぎれば忘れられていくものと言う意味だそうだ。
なのに、昨日の噂はどこへやら。
今日の噂の対象はすっかり一夏へと移っていた。
対象になった人物は、昨日の僕と同じように机に突っ伏している。
言っちゃあ悪いけど、ざまぁ見ろだ。
昨日は、散々それで僕に精神的ダメージを与えてくれたんだ、今日は僕の番だよ・・。
「一夏、噂になってるねぇ～」
ニヤニヤしながら、一夏に言う。
だが返答が無い。
ほほぅ。
返事すらできないほど衰弱しているのか。
これは面し・・・・・面白いな。
「一夏聞いてるのかな？皆君の噂してるよ」
それでも返事が無い。
・・・ん？
「一夏？」

僕が呼びかけた時、ようやく一科が体を起こした。
伸びをしながら。
「ふあぁぁぁぁっ・・・あ、おはようアルディ」
「・・・・寝てたの」
「あぁ、ちょっと寝不足でな」
・・・・そうだった。
一夏は超が付くほど自分の事に鈍感で、ずぶとい神経の持ち主だった・・・。
「ところでさ、アルディ。箒どうかしたのか？」
え？
指さす方を見ると、箒が机に突っ伏していた。
どうやら僕の攻撃は、一夏へ行かず、ブーメランのように戻って箒に当たっていたようだ。
・・・・ごめん、悪気はないんだ。
少なくとも君には。
「諸君、今日も元気が良いな。結構結構。それではＳＨＲを始める」
いつもと同じように、織斑先生が山田先生と共に教室部屋やってくる。
今日もいつもの日常が繰り返される。
「さて、山田先生からの話の前に私から一つ言っておくことがある。本日よりＩＳの実習もから授業は本格的な実践訓練に入って行く、各人使用するのは、専用気持ち以外は訓練機だが、ＩＳはＩＳだ。しっかり気を引き締める様に。ここまで言って怪我をしても私は知らんぞ。泣きついてくるなよ」
・・・・教師とは思えないね。いやまぁこれまでだって、教師？って思うぐらい理不尽だったけど、教師って思うぐらい身の危険を感じたけど・・・。
「あぁ、あとＩＳスーツの申し込みも忘れずにやっておくようにな、それでは私からは以上。では山田先生、後は頼もう」
「はい」

そう言って、立ち位置を交換する二人の担当教員。
山田先生は、教壇に立つと第一声。
「えっとですね、おはようございます皆さん。今日は早速なのですが転校生を紹介します」
その瞬間クラス全員が一瞬凍りついたのが分かった。
噂好きの女子の情報網をかいくぐって、急に湧いて出た転校生。
驚かずにはいられないのだろう。そして直後、クラス全体が揺れた
「「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」」」」
「転校生、また！？」
「この前だって二組に、凰さんが来たばっかりなのに？」
「違うクラスじゃない」
「でも、ここまで頻繁にあるのも珍しいとは思うけど・・・」
以前セシリーに聞いた、話は本当だったようだ。
？今こうして私たちが、くつろいでいる間にも、各国ではＩＳ学園入学のために代表候補生やそれを目指す操縦者が切磋琢磨しているはずです？
なるほどね・・・。だとすると今回も、代表候補生か。
「あ、ちなみに二人ですよ今回は！」
「「「えぇぇぇぇっ！！！」」」
再び湧く、教室。一気に二人も代表候補が？
確かにそれは驚きだ。
「うるさいぞ！驚くのは休み時間まで取っておけ」
パンパンッと手を叩いて場をなだめる織斑先生。
それに続くようにして、教室の入り口から転校生二人が姿を現す。
普段、あんまりこういうことじゃ驚かないんだけど、流石の僕も驚いたよ。
だってそのうちの一人が、男の子だったんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。よろしくお願いしますね」
フランス人の貴公子は、ブロンドの髪を後ろで束ね、天使のような微笑みで、教室の女子たちに自己紹介する。
その笑顔は、僕たち男子でも、見とれるぐらいのものだったからその破壊力は相当なものだ。
「男の子男の子男の子男の子男の子男の子男の子・・・」
「やばい・・やばいよぉ・・あの笑顔は反則だって～～～」
「織斑君やサウスバード君とはまた違うタイプだよね！」
なんだ・・・男の子男の子唱えてる女子がいるが・・。
なにかの発作なのか。
そんな騒ぎ立てる生徒たちを余所にもう一人の転校生は、瞳を閉じ静かに佇んでいる。
・・・雰囲気が。
明らかに一線を画するその少女は、左目に黒い眼帯をした、白銀の長い髪の毛をたたえている。
軍人・・・？
姉が元々アメリカ軍関係もあって、昔その仕事を見せてもらったことがあったのだが、
その時基地で見た軍人の鋭い刃物のような、触れたら切れてしまいそうな雰囲気。
彼女がまとっていたものはまさしくそれだった。
「黙り込むな、お前の番だラウラ」
「はい、教官」
・・・教官か・・・。
間違いないあの子は軍人だ。
どんな経緯で織斑先生を教官と呼んでいるのかはわからないが、雰囲気そして今の口調。
僕の中で、仮説が確信へと姿を変えた。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

・・・・以上？
「それだけですか？」
言った山田先生は、中々勇敢だと思う。
ラウラは、山田先生を一睨みする。
その鋭い眼光に、委縮する山田先生だったが、流石のラウラも教師にたてつくことはしない。
「以上だ」
そう言って、なにやら辺りを見回す、ラウラ。そして一人の人物に視線を合わせた。
それは・・・
「貴様か・・・」
「え！？」
一夏だ。
僕は、ひそひそと一夏に声をかけた。
「何？あの子と知り合いのかい、あんなきっつい子と」
「知らねぇよ・・・千冬姉を教官って読んでたからドイツ人って事は、
なんとなく想像はできるんだけどさ」
「うん？織斑先生ドイツで何かやってたのかい？」
「昔、向こうで教官やってたんだ・・・色々あって・・」
ふむ・・・なるほど。その時に何かしら関係のあった人物と言うことか。
僕と声をひそめていた、一夏の前に立つラウラ。
明らかに友好的な目じゃないよね。
ラウラに気が付き一夏も、前を向く。
そして手を振り上げて・・・

パコンッ！
ペットボトルが直撃した。

一夏にではないラウラにだ。
「・・・貴様、どういうつもりだ」
「ごめんね、手が滑っちゃったみたい」
投げたのは僕なんだけどね。
あのまま行けば一夏殴られてたし。
投げたペットボトルは僕が今朝、購買で買ったものだ。
丁度取り出しやすい位置にあって助かった。
「ふざけるなよ・・・」
「わぁ、ほんとごめんね。いや実はペットボトルがちょっと濡れてね、
仕方ないじゃない・・・不慮の事故だよ」
「くぅッ!!!」
ガッと胸倉をつかむラウラに僕は笑って言う。
「だから、謝ったじゃないか」
「どうやら、痛い目を見んと分からんらしいな」
「凄んでも無駄だよ・・僕は、君を舐めてる」
「貴様!!!」
「いい加減にしろ、ラウラ、サウスバード!」
そこへ織斑先生が来て、ラウラを引っぺがす。
「きょ、教官!これは正当防衛で!!」
「いつまで軍人気分だ、貴様は今日から私の生徒だ、黙って従え、不服でも従えいいな」
「しかし!」
「初日から問題を起こすな!」
ピシャリと言い放つ織斑先生に、ラウラは尚も不服そうな顔をするが、渋々それに従う。
ふぅ、作戦成功。
作戦と言うかまぁ、ただ騒ぎを起こせば織斑先生が必ず止めに入るだろうから
それを狙って騒いだだけなんだけど。

「サウスバード」
「はい？」
「教師をコマとして扱うとは、お前もいい度胸だ」
「い、いやですねぇ・・・こ、コマだなんて」
その後、問答無用で一発を貰った。

「はぁ・・・ガキはこれだから・・・まぁ良い、織斑。
早速だがデュノアの面倒を見てやれ、これから実習だからな、まだ右も左も分からんだろう」
「はい、わかりました」
「では、各人はＩＳスーツに着替えてアリーナに集合！今日は二組とお合同で模擬戦闘を行う、急いで準備しろ！」
今日は合同なのか・・・。
・・・・って。
「ボサっとしてる場合じゃなかった！」
「そうだった、シャルル！急ぐぞ」
「え、どうしたの？」
いまだに、要領のつかめないシャルルは、少し戸惑っているが、その手を一夏が引っ張る。
「一時間目、お前も聞いてただろ。これから織斑先生の授業なんだ、遅れたら何やらされるかわかったもんじゃないッ！」
「確かこの間は、遅れた分数×アリーナ十周だったねぇ」
あんな思いはしたくない。
「「悪いけど、慣れて！」」
僕と一夏の声が重なる。
それほどまでに、織斑先生と言うのは恐ろしいのだ。
そんな僕たちを見て、シャルルはクスッと笑うのだった。

にしても、ラウラにシャルルね・・・。
ま、何にしたって人生は楽しくなきゃいけない。

ここ最近はセシリーの件もあって下降気味だったが、その件もなんとか収まったし、
これからは、色々楽しくなるよね。
僕はそんな事を考えながら、女子包囲網をかいくぐってアリーナへと向かうのだった。

◇◆◇◆◇◆

S。
「っう・・！」
「触んじゃねぇよ・・・・」
？紫煙？の操縦者はワインレッドの髪を風になびかせながら、怒り狂ったように赤目で相手の白いＩＳを睨む。
「・・・っ！姉さん、何で分からないの、それは僕じゃない！！」
「うるせぇッ偽物！！総也の顔でぬりぃこと言ってんじゃねぇぞ・・・」
総也と呼ばれた少年は、バイザーで覆われた顔をゆがませる。
「Ｎの技術を奪ってまで、することが本当に正しいの！」
「そのための技術だろうが！！」
一気に？紫煙？は距離を詰めると、戦槍？大蛇？で切りかかる。
それを手に持つ荷電粒子砲でなんとか受け止める。
そして動きが止まったところで、黒いＩＳの援護射撃が入り、その一発は確実に総也をとらえた。
「ぐはっ！！」
その一瞬のすきを突いて、？紫煙？は黒いＩＳを回収し、超高速で離脱する。
次に総也が目を開けた時には、何もないただ青い空が広がっているだけだった。
「あぁ、くそっ！！！！」
やりきれない悔しさが彼を包む。
その時通信が入った。
そこには白衣の女性が写っている。
「すいません、逃げられました・・・」
『仕方ないわ、二対一ですもの』
「また追わないといけませんね」
『もう、やみくもに探しても時間の無駄ね・・・。こうも逃げられては』
自分の失態だ・・。

くそっ、せめてあの黒いほうだけでも落とせれば・・・っ。
『だから、方法を変えましょう。実はあの二機が最近とある施設を襲撃したの』
「え!?」
『その施設名はＩＳ学園』
ＩＳ学園・・・・。
『でね、あなたにはそこへ行ってもらいます!』
「え?」
いきなり何を言って・・・・行く?
誰が??
「僕ですか!?」
『あたしに、ヒラヒラのミニスカートが似合うとでも?』
「それはそうですけど」
『否定しなさい馬鹿!』
性能のいいＩＳの通信機器でもハウリングする程の声で怒鳴られ、頭がキーンとする。
『まぁすぐにじゃないから、それなりに準備ってものもあるし』
「いやでも!」
反論しようとしたがとにかく、これは決定事項よ!
とだけ告げられ一方的に通信を切られてしまった。
「・・・・・ＩＳ学園か」
ボソッとつぶやき。総也はひとまず、帰還の途へついた。
・・・・これからどうなるんだろう、ただただ不安だけが総也の心に積っていった。

第8話～天使のフレンチ・悪魔のジャーマン～（後書き）

シャルロッ党って言うのがあるみたいですが、僕はオルコッ党です。
そこの総裁自負してます。
どうも、しるくです。

この回を書くにあたって色々アメリカのことわざを調べたんですが
結構色々あって面白いですね。

Ｂａｒｋｉｎｇ　ｄｏｇｓ　ｓｅｌｄｏｍ　ｂｉｔｅ
弱い犬ほどよく吠えると言う意味だそうです。
ｂｉｔｅは噛むとか言う意味なので。
直訳はほえる犬ほど噛まぬって言うようですね。

・・・だから何だって感じですが。
それでは皆様第９話でお目にかかりましょう！
さよならっ！！

第9話～思い、君と共に～

「それでは本日より、格闘と射撃を含めた実践訓練を開始する」

結局、色々あって間にあいませんでした。

一夏は更衣室でシャルルと、物理の問題を出したりしていたが、何やってたんだろ。

ちなみに僕の場合は、完璧にルートミスだった・・。

あの角をまっすぐ来たのがダメだったんだよなぁ。

あそこで、包囲網に見つかるの覚悟で曲がっておけば、後は直角だったのに・・・。

で、予想通り、罰はアリーナランニングだったが、遅れた分数＝アリーナ外周という慈悲深いお情けのおかげて、前ほど酷いことにはならず、なんとか皆が準備し終えるまでには合流できた。

なぜか箒と鈴が叩かれてたけど。

「さて・・・そうだな。模擬戦闘でもやってもらうか・・・・。サウスバード、凰、前に出ろ」

名前を呼ばれた鈴は渋々前に出ていくが、あいにく僕のＩＳは使用禁止だ。

僕は挙手して、織斑先生に報告する。

「先生、僕ＩＳ、無いです」

「・・・あ、そうだったな、ではオルコット出てこい」

「わ、私ですの・・・」

これまた渋々と言った感じで前に出ていく。

前にセシリーが言っていたが、こういう授業などでの実演はあまり好きじゃないそうだ。

パンダみたいっていう理由らしい。

別に人気取りってわけじゃなさそうなんだが・・・。

「お前らもう少しやる気ってものは出せんのか」
「いや・・・」
「そう申されましても」
「・・・なんなら、私がお前らにやる気を出させてやろうか・・・
そうだな何発が良い？」
その発言に鈴とセシリーの顔が引きつる。
「何発！？」
「既に複数形ですの！？」
ひきつる両名に、対して、ジリッジリッと近づいていく織斑先生。
「最低は五発からだ。最高はそうだな時間の許す限りでどうだ？」
「で、出た出た！あたし今、すっごいやる気出てます！！」
「わ、私もなんだか、凄くやる気が湧いてきましたわ、何せ代表候補生ですものね私たち！」
り、理不尽だな・・・・。
流石は織斑先生だ。
半ば無理やりやる気の出された（？）二人は早速ＩＳを起動する。
セシリーのはなんとなく青っぽいっていうのは色の濃淡でわかるけど、鈴のは完全に黒だな・・・。
色盲の目では、鮮やかなカラーリングもこの通りだ。
慣れたからこそ、これ赤だねとか青だねとか言えるけど、一度バイザーの色彩調整を目にしてしまうと、一気にこれまで、それがすべてだった白黒映像が味気なくなってしまう。
「それで、私たち誰と戦えばいいんですの？」
「なんなら、あたしとあんたでやる？まぁ結果は目に見えてるけど」
「そうですわね、私の勝ちと言う事は、誰の目から見ても明らかですわ」
そう言えばこの二人って、妙に張り合うよね。
あれか、プライドが高い者同士だからか？
「はぁ・・・やる気を出してくれたのは結構だが、そう張りきられてもな。

まぁ落ち着け。お前たちの相手は・・・・・ん？」
織斑先生が少しとぼけたような顔になる。
これは珍しい・・・。いっつもその表情で固定なんじゃないかと思うぐらい表情が変わらないのに。
織斑先生は、上を見上げて何かを探しているが、一向に見つからないようで、辺りをきょろきょろしている。
「・・・・・む、織斑そこ危ないぞ」
「え？」
一夏を名指しで、注意喚起。
その時風を切り裂くキィィィンと言う音と共に何かが、一夏へ向かって墜落してくる。
「は？え！？えぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」
叫ぶ暇があれば、少しでも避けたら・・・あぁ・・遅かった。
墜落した何かは一夏を巻き込みおおきなクレーターを作って砂煙を巻き上げる。
そのクレーターを、囲むようにして女子が見守る中徐々に砂煙が晴れていき・・・・
そこには、一夏とＩＳを展開した山田先生が転がっていた。
なるほど・・・。
落ちてきたのは山田先生に様だ。
で、一夏はというと。
おぉう、一夏・・・・。
アメリカのスラム街も真っ青だよ。
流石に彼らもだね、人目に付かない所でそういう行為をするからね。
一夏は白昼堂々、山田先生の放漫なバストを揉みしだいていた。
「一夏・・・君、多分スラム街でも力強く生きていけるよ」
「な、何言ってやがる・・・これは・・・事故だ！！」
「一夏！あ、あんたねぇ・事後ですってぇっ・・なぁに言ってるのよ！！！！！」
ＩＳを展開していない一夏に向かって、色々切れた鈴が？双天牙月

?を投げつける。
直撃したら・・死ぬだろうね。
だがそれは一夏に到達することなく、撃ち落とされる。
一夏を助けたのは、さっき墜落した山田先生だった。
いつもとは全く雰囲気が違う山田先生に僕だけではなくこの場にいる誰もが、驚いている。
構えていたライフル?レッドバレット?を下ろすと、山田先生はまたいつものほやっとした顔で
一夏に、笑いかけた。
「大丈夫ですか、織斑君?」
・・・あぁこの顔は山田先生だ。
なぜだろうか、ほっとする。
「山田先生は、代表候補生だったからな。このぐらいの射撃造作もないさ」
織斑先生が、自慢げに話す。
そりゃまぁ、世界一の担任を補佐する副担任だからタダものじゃないだろうなとは予想してたいが、
まさか代表候補生だったとは・・・。
つくづく、この学園は恐ろしい。
そう言えば、あの時事態の収拾に駆けつけた、学園の教師陣も、
そのほとんどが代表や代表候補生の人たちだった。
・・・・でも・・。
あの黒いＩＳは、そんな人たち相手に、全く引けを取らなかった。
いや、圧勝だった。
・・・・何をしに来たんだろう。
一夏達を狙いに?
でもそれなら、あの無人機の攻撃から、一夏を救ったのはなぜなんだ。
・・・わからない。
「おい見学者!」

そんな事を考えていると、いや考えていたからかな。
声と共に出席簿が頭を叩いた。
「ボケっとするな、見学者なら使える奴らを見てもっと学べ」
僕はその一撃で考えを切り替え、早速始まったセシリー・鈴ペア対山田先生の
模擬戦に目を移した。
まぁ・・・今考えても答えは出ないだろうし。
授業に集中しよう。

・・・結局この後セシリーと鈴は山田先生にコテンパンに倒された。

今日の授業も、このＳＨＲを乗り越えれば終わり。
放課後って言ってもなぁ、僕はＩＳを使えないし、訓練って言っても見学だからなぁ。
その後山田先生から聞いた話によると、なんとか一週間ぐらいでＩＳの起動制限は解除されるらしい。
ただ、解除されると言っても、すぐには全部のシステムや武装を使えるわけじゃないらしいけど。
要は人間と同じく、徐々に体を戻していくことが必要なわけだね。
「・・・これで、以上か。それでは今日はここまでだ。何か用事があるものは職員室へ直接会いに来い」
織斑先生が、いつもの調子で、切り上げそれに続く山田先生。
日常が繰り返され、そしてそれは放課後がやって来る事も例外ではない。
さていよいよ本当に、終わってしまった。
後ろの席では女子たちが、今から訓練機を借りに行こうとか、部活なんだとかそういう話をしている。
・・・何しよう。

ＩＳ学園在籍なのにＩＳが使えない。
笑えるね・・・。
ふと後ろを見ると、セシリーもいない。
流石に、昨日僕が言ったことを気にして自主練にでも行ったのか。
まぁ・・・うん。
そうなら、言った甲斐があったというものだろう。
どこか手持無沙汰だった、僕を救ったのはシャルルだった。
いや正確にはシャルルと一夏かな。
「アルディって、ＩＳ持ってないの？」
「持ってないわけじゃないさ、ただ使えないだけでね」
「使えない？」
「コイツのＩＳ、ダメージレベルがＣを超えて起動制限かけられてるんだって。お前が転校してくる前にちょっとあってな」
「あぁ、なるほど」
一夏が捕捉を入れて、一応納得したそぶりを見せたシャルル。
「ま、そう言うことだよ～」
僕は両手を開いて、おどけて見せる。
それを見てクスッと笑うシャルル。
・・・本当に、なんて言うか同じ男かね。
最近日本じゃ、男の娘って言うジャンルがあるみたいだけど、その類に放り込んだら
賞の一つや二つ取れそう・・・いや、賞を総なめに出来そうだよね。
「で、何か用？」
「用ってわけじゃないんだけど、今から時間あるかな？」
「俺達、今から一緒に訓練するんだけどどうだ、お前も」
「だからね、僕はＩＳが使えないの」
僕の話聞いてた？
僕が言えたことじゃないけど、ひょっとして鈍感なだけじゃなく物分かりも悪い方？
「見学ぐらいできるじゃないか、今日丁度、射撃武器についてシャ

ルルに聞こうと思っていたんだ。
剣ならともかく、射撃武器ならお前もセシリアに習ってるし、それに元々結構知ってるらしいじゃんか」
「まぁ、姉さんに色々習ってたからね、基本的なとこは」
「そう言えば、お前の姉さんって、あのローラ・サウスバードなんだろ」
「ローラさんって言えば、モンド・グロッソの射撃部門一位のヴァルキリーだよね、
そんな人がお姉さんなんだったら、射撃の知識は僕よりあるかも」
「ハハっ、買いかぶりすぎだよ」
習ったと言っても、本当に構え方とか、打ち方だけで、それ以降はずっと独学だったし。
それに僕も、別に旨くなりたいっていう向上心というより、姉さんがせっかく教えてくれたものだから、
このままやめてしまうのも、もったいない・・・
ぐらいのあいまいな理由で、やってきたから、別段射撃の腕が良いってわけでもないし、
知識が多分にあるっていうわけでもないのだ。
言ってみれば人より少し旨い程度って言うのが今の立ち位置だろう。
旨いアドバイスも出来ないんじゃ邪魔になるだけだし、断ろうかとも思ったが、じゃあ逆に何するかって話になってくる。
・・・はぁ・・・今日も見学か。
「まぁ、何も気の利いた事なんて言えないよ、それも良いかい？」
「あぁ、気が利くか利かないかはともかく、アドバイス貰えるのはうれしいしな」
そう言って僕は、やたら重く感じる腰を上げた。

アリーナに着くと、早速一夏とシャルルがＩＳを起動する。
一夏のＩＳは、もう何度となく見ているが、シャルルのＩＳを間近

で見るのはこれが初めてだ。
授業中は、ずっと一夏の手伝いだったしね。
シャルルのＩＳは。授業で山田先生が使っていた?ラファール・リヴァイヴ?のカスタム機らしい。
確かに、ベース機の面影が随所にみられる。
だがそこは専用機。ちゃんと汎用機との区別のためにパーソナルカラーにペイントされている。
「シャルルのＩＳ・・・・赤?」
「え?なに冗談言ってるの、オレンジだよ」
「あぁ、オレンジか・・・ごめんね色盲で色が分かんないんだ」
「あ・・そのごめん」
「いや・・・なんで謝るかな・・・」
一夏の時もそうだったが、なんで謝るんだろう。
別にこれは、一夏やシャルルの所為でこうなったわけじゃない。
生まれつきの事だから、誰を責めるわけにもいかないし、
前にも言ったが幸い視力は良いのだ。生活に何の支障もない。
「まぁ、そんなことより、始めないの?」
「そう・・だね!」
既に一夏はスタンバイＯＫの様だ。
シャルルは一夏に自分の武装を手渡す。

あれは・・・?ヴェント?か。
あれと同じようなライフルを、アメリカで見た気がする。
姉さん関係なのは間違いないが、どこで見たのかまでは思い出せない。
・・・思い出す必要なんてないけど。
確かあれはアサルトライフルだったよね。
アサルトライフルは単発・連続射撃の切り替えができる小型軽量の自動小銃の総称だ。
有名どころで言うと、カラシニコフの愛称で有名なＡＫ－４７がそ

れだ。
有効な間合いは、中近距離で、あまり長距離戦には向かないが、威力も高く扱いやすいから各国の軍も、多く配備している。

一夏は、?ヴェント?をシャルルに手ほどきを受けながらしっかりと構える。
そして、シャルルが一夏から離れると、バンッ!という射撃音と共に、
弾丸が発射され、撃たれた弾は的の外側に当たった。
「うぉっ!すげぇ音!」
そうだろうねぇ、僕も始めて撃った時そんな感想を持ったよ。
ただ僕の場合は、ＩＳではなく実際にこの手で拳銃を持ったけどね。
あの時の、もの凄い反動は今でも忘れられないよ。
そして、あの姉さんの顔も。
何が、軽く手を叩くぐらいの衝撃だ。
まだ、小さかった僕には、腕がちぎれるかと思うぐらいの反動だったよ。
「それで、どうだった、初めて撃った感想は?」
「なんて言うか、射撃すげぇよ。音もそうだけど、何より滅茶苦茶速いんだな、弾丸って」
一夏・・今さら?
君、射撃武器持った相手と何回かやりあったことあるよね。
抜けたことを言う一夏に、僕は遠巻きに話しかけた。
距離はあったが叫ぶ必要はない。
?白式?のハイパーセンサーが全部僕の声を拾ってくれるからね。
「速いって、当たり前でしょ、拳銃でも亜音速なのに」
「いや、でもすげぇぞコレ。バンバーンって・・・」
初めての体験は誰だって興奮する。
それは一夏とて例外ではない。
確かにバンバーンって音したけど・・。

「シャルル。これもう少し撃ってもいいか？」
「いいよ、マガジン使いきっちゃって」
持ち主の許可も降り、再び射撃を開始する。
初めて構えるにしては、一夏はうまい。
ほとんど、的の端だがそれでも今まで一発も的からはそれていないからだ。
僕でも、初めのうちは的に当てるのだって苦労した。
あ、その事はＩＳじゃないよ。
中々、射撃の筋も良いようだ。
バンッバンッと、乾いた音が響くアリーナ。
しばらく撃つと、ようやくマガジンが空になったようで一夏がシャルルに？ヴェント？を返した。
「射撃ってこんな感覚なのか、サンキュな」
「うん、どういたしまして。まぁでも全部が全部こんな感覚じゃないよ」
？ヴェント？を粒子化しながらシャルルが話す。
そうなのかと、自分でも色々考えることがあるのであろう一夏は、
？白式？を待機状態へ戻すと
あごに手を当てて、色々考えているようだった。
それにならってシャルルも待機状態に戻す。

「そう言えば、話は変わるけど？白式？って、イコライザーが無いんだって？」
射撃について思考中だった一夏だったが、急な話の方向転換にもしっかり反応する。
「あぁ、この前見てもらったんだけどパススロットが開いてないんだと。だからインストールも無理らしいぜ」
「それって多分ワンオフ・アビリティーに要領を割いてるからじゃないかな、
？白式？って初めから使えるんでしょ？」

ワンオフ・アビリティー。
各ＩＳが操縦者と最高状態になったときにのみ自動発生する能力の事で、絶対にその能力はかぶらない。
だからワンオフってわけ。
一夏で言うと確か？零落白夜？がそれに当たるらしい。僕は見たことないけど、対象のエネルギーを消滅させることのできる能力だそうだ。
・・・・怖いね。
「なるほどなぁ・・・そういえばアルディ。お前はどうなんだよそこらへん」
「僕？　あははっ、？ストライク・バーディ？の性能の半分も使いきってないのに、
そんな話飛びすぎだよ」
「扱いきれるっていうのとも、少し違うんだけどなぁ」
シャルルがう～んと、腕を組む。
だが、言われてみればそうだ。
僕のワンオフ・アビリティーねぇ。
使える日が来るんだろうか、僕のにも。
聞けば、ワンオフアビリティは、発動するよりもしないことの方が圧倒的に多いらしい。
・・・だけどまぁ、使えたら使えたで、使えなかったら使えなかったで、別にどうでもいいや。
どの道、今は？ストライク・バーディ？が使えない。
早く、慣れないといけないのになぁ。
稼働時間も全然足りないし、実戦経験だってほぼ皆無だ。
焦っても仕方が無いとはいえね。
やることはやったしそろそろと思っていると、急にざわめきだす場内。
・・・何かあったの？
「あれ・・・ドイツの・・・」

「第三世代機じゃないアレ」
「うそ、あれってまだトライアル段階だって聞いたけど・・」
ドイツそこから連想させるのは、あの人物しかいなかった。
「ラウラ・ボーデヴィッヒ」
一夏がつぶやく。
今朝僕がペットボトルを投げちゃったからね、それの報復かな?
だがラウラが次に発した言葉は、僕の想像を容易く崩す。
「織斑　一夏・・・私と戦え」
「・・・なんでだよ」
「御託はいい、ＩＳを展開しろ」
有無を言わさぬ声で、命令するラウラ。
その目は完全にこちらを見下している。
「やだね、理由が無い」
「理由だと?」
「あぁ、そうだ俺にはお前と戦う理由が無い。だから俺は戦わない」
「・・・そうか」
ラウラは、そう言ってゆっくりとこちらを向く。
・・・なんだか嫌な予感・・・。
「ならば、理由を作ってやろう!!」
「うぁぁぁぁぁっ!!」
言うが早いか僕に向かって何の躊躇もなく、肩の大型カノンを撃つ。
流石に直撃は相手も避けたようだが、僕は爆風で何度か地面に打ち付けられながら
アリーナの側壁まで吹き飛ばされた。
その衝撃からか右腕から血が流れ出す。
どうやら完治していないあの傷口が、今のでまた少し開いてしまったらしい。
だが今はそれよりも、全身の痛みが凄い。
動かすだけでいろんなところが痛む。
すぐにはまともに立てそうもない。

「てめぇ、何してんだ!!あいつは今ＩＳを展開できないんだぞ!?」
「理由を作ってやったまでだ、貴様が必要だと言ったのでな」あたかも、当然のことをしたかのように言ラウラ。
キッと睨む一夏だが、次のラウラの一言で完璧に切れた。
「それに展開も出来ない雑魚だ、吹き飛ばさただけでも役割ができて良かったじゃないか」
「ふざけんな!!!!」
怒鳴ったのは一夏だったが先に攻撃したのは、シャルルだった。
さっきのアサルトライフルとはまた違う?ガルム?を展開してラウラへ向かい引き金を引く。
目つきも先ほどまでの、優しさはなく、まさに激昂だった。
「ドイツ人って言うのは、やっていいこととやっちゃいけないことの区別が出来ないほど低レベルなんだね!」
「・・・・フランスのアンティークか・・・。話にならんな」
「いまだ量産のめどすら立たない、そんな試作武装だらけのモルモットよりはましなんじゃない?」
睨みあう両者。
そしてしばしの時が流れ、一夏が急に声を上げた。
「お前、なんでそんなに俺に突っかかるんだ!?」
「・・・・貴様があの教官の弟だからだ!」
「何!?」
「貴様、昔ドイツで誘拐事件にあったそうだな。その際教官は貴様を助けに行き、モンド・グロッソ二連覇という偉業を達成できなかった!」
「それは・・・」
「貴様がいなければ、教官よりも劣る低レベルな出場者だ。二連覇出来たことは容易に想像が付く・・・」
・・・待て・・・待てよ・・・・。
今なんて言ったんだい彼女・・・・。

低レベル？
織斑先生が勝つことは容易に想像できる！？
・・・舐めるなよ・・・。
気が付けば僕は、痛みすら忘れて叫んでいた。
「ふざけるんじゃない！低レベル？容易に想像がつく！？
いい加減な事ぬかすなよ、君に何が分かるっていうんだ！！
確かに織斑　千冬は強いさ、でも無敵じゃない。最強なだけだろう！
僕の姉さんをなめるな！！！」
今のは姉さんを侮辱されたに等しい。
姉さんは、あんなおちゃらけた性格だが、日々努力や鍛錬を怠らなかった。
モンド・グロッソ第一回大会で、織斑先生に負けた後、表彰台では笑顔だった姉さんが、
僕の前で笑い続けていた姉さんが、僕の前で初めて泣いた。いや泣き崩れた！
なんで勝てなかったんだと、これまでの努力は何だったんだと。
結局、ああ言う理由で織斑先生が辞退したことで、姉は第二回大会の総合優勝？ブリュンヒルデ？の栄冠に輝いたが、その顔は全然うれしそうではなかったし、
何より姉はその称号を自モンド・グロッソの委員会へ返納している。
プライドが許さなかったのだろう。
だからこそさっきの発言は許せなかった。
何も知らない、彼女が姉さんを侮辱するなど。
「そう言えば、貴様の姉もモンド・グロッソに出場していたのか。
大方、無様に負けたのだろう。そんな負け犬の弟に何を言われようとな・・・」
「流石の僕も、切れたよ・・・・」
「ほう、だったら何だと言うんだ？」
・・・彼女は・・・彼女だけは許せない。
「トーナメントだ、学年別トーナメントが今度ある。僕のＩＳもそ

れには間に合うはずだからそこで決着をつけようじゃないか・・・」
「・・・ふん、決着か。私はその男にしか興味が無いが・・
まぁ良いだろう。作業が一人増えるだけだからな」
そう言うと、ラウラはＩＳを待機状態に戻し、すたすたとピットの
奥へ引っ込んで行ってしまった。

ラウラの退場で、スッと頭の冷えた僕は、また激しい痛みに襲われ
る。
僕は顔をゆがませながら一夏に謝った。
怒ったとはいえ、彼の姉さんを悪く言ってしまったのだ。
「・・・一夏ごめん・・・カッとなって。織斑先生の事・・・」
「へっ、気にすんなよ、誰だって自分の身内を馬鹿にされたら怒る
だろ？」
「・・・あ、でも僕はそれをしたんだけど」
「時と場合によるってな」
どうやら怒ってはいないようで、安心したが、痛みだけは安心でき
るレベルじゃない。
「いっつつ・・・・」
一度は立ったものの、痛みでよろける僕をシャルルが支えてくれた。
「あぁぁ・・・大丈夫？とりあえず、保健室行こう」
「うん、面目ない・・・」
僕はシャルルの肩を借りながら、一夏と一緒に保健室へ向かった。
・・保健室の先生に？また来たの！？？って顔で見られたのは内緒
だ・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アルディが怪我を負ったという話は、すぐに自主練習のため

アリーナに来ていたセシリアと鈴にも伝わった。
アルが怪我を!?
すぐに訓練を中断して、鈴と共に着替えもそこそこに保険室へと急ぐ。
いつもなら、すぐについてしまうのにこんな時にはその道のりが長く感じられてしまう。
ようやく、保険室に到着すると、ノックもせずにその扉を勢いよく開ける。
そこには、今まさに先生の診察が終わったアルディがいた。
「アル!」
「やぁ、セシリー」
こちらの気もしらないで、何ともまぁ軽い挨拶を・・
「先生、大丈夫なんですか!?」
「そうね。アリーナの側壁に叩きつけられたときにだいぶ上半身を強く打ってるみたいだから、しばらくＩＳの実習も自粛した方が良いとは思うわ、その他は特に異常は見られないから大丈夫だと思うけど」
「・・・そうですの」
「・・・あの女やってくれるじゃない」
鈴が憎々しげに言う。
鈴は素直には言わないがそれなりに、アルの事を心配してくれているようだった。
「まぁ、逆に生身でＩＳの攻撃を受けて、これだけで済んだわけだし運が良かったんだね」
「アル!楽観的なのも大概にしておきませんと、後々大けがしますわよ!」
本当に、少しはこっちの身になってほしいものだ。
大体の事を「まぁ、いいや」で済ましてしまうのが彼だが、自分の体の事までそれで済まされては、たまったものではない。
彼に万が一の事かあったら、自分はどうすればいいのだ・・・。

「にしても、一夏に・・・・えーと・・・」
「あぁ、シャルル。シャルル・デュノア」
「そう、デュノアがいてなんてザマなの？」
確かにそれはセシリアも思う。
それに、デュノアは、代表候補生だ。
もう少し、周囲に気を配ってくれれば、アルがこんな怪我をせずに済んだかもしれない。
悪いのはあのラウラという女だと言う事は分かっているのに、セシリアは、アルディの身を案じるあまりそんな事を思ってしまう。
「わ、悪い・・・」
「僕も流石に、生身の人間に向かって攻撃するなんて思わなかったから・・・」
一夏とシャルルが弁解をするが、セシリアの心は一向に晴れなかった。
そしてその、もやもやはやがて、一つの形に集束する。
ＩＳは、今や世界最強の兵器である。
たった一機で一国の軍隊とやりあって勝てるほどのすさまじい力だ。
そんなものを、生身の人間に向かって撃てばどうなるかなど、幼稚園児でもわかる。
・・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・・・許しませんわよ、私は。
そう、ラウラへの怒りだ。
だが静かに闘志を燃やしていた、セシリアにアルディが声をかける。
「セシリー、分かってると思うけど・・・・馬鹿な真似しちゃだめだよ」
「馬鹿な真似？何のことですの」
セシリアには、アルディが何を言わんとしているのか分かっていたが、内にその怒りを押し込め、勤めてクールにふるまう。
「・・・・手、ずっと握りっぱなしだよ」
「あ・・・・・」

あわてて、グッと握っていた手解く。それと同時にアルディのため息も聞こえた。
「セシリー・・・彼女とは僕が、決着をつけるよ」
「え？」
「僕にも色々、譲れない物はある」
譲れないもの？
それは一体・・・。
「彼女は僕の姉さんを馬鹿にした・・・何も知らない癖に負け犬呼ばわりまでして・・・」
一瞬だがセシリアの心にズキンッと痛みが走る。
ローラはアルディのお姉さんで、そのお姉さんを悪く言われてアルディが怒るのは当然の事だ。
だがセシリアはほんの少しだけ、それが自分だったら・・・と思ってしまった。
要はその姉に対する嫉妬心である。
誰よりも、彼の近くにいたいと思うセシリアの正直な気持ちだったが、すぐにその考えを振り払う。
私は何を考えているんですの！
前もそんな嫉妬心から大変な事になったばかりだと言うのに・・・。
ましてや、アルの実の姉に嫉妬するなど失礼極まりないではありませんか！
だがそうは言っても、・・・・何時か。
お姉さんよりもなんてことは言わない。
ただそれと同じぐらい近くで彼を見守ってあげたいと
思わずにはいられない複雑な心境のセシリアだった。
セシリアはアルディを見やる。
そのセシリアを見返すように、アルディもまた決意のこもった眼でこちらを見ていた。
「アル・・・」
「僕は彼女を許さないし、許せない・・・誰が何と言おうと彼女

は僕が「・・・残念だけどそれは無理ねぇ」・・・・・え？」
アルディの発言を遮ってまで発せられた保健の先生の一言に一斉に注目が集まる。
「何が無理なんですか？」
鈴が答えをせかすように、誰よりも早く質問を返した。
それに保健の先生は腕を組みながらこう告げる。
「学年別トーナメントまで、そんなに日は無かったわよね・・・二週間あるかないかぐらい」
先生は、白衣のポケットからスケジュール帳を取りだして日程を確認しながら話を続ける。
「で、今日あなたがその怪我をして・・・完治にこれぐらいだから・・・・うん無理ね」
何か一人で納得して、勝手に無理と結論づけた。
いまいち、内容のつかめないセシリアたちは、首をかしげるばかりだった。
その様子を見て、先生が苦笑してようやく説明らしい説明をしてくれた。
「あぁ、ごめんなさいね。無理って言うのは彼のトーナメント出場の事よ」
「えぇ！？」
誰よりも一番大きな声を上げたのはアルディだった。
それはそうだろう。あれだけ意気込んでいたのだから。
「普通ななら、何の問題もなくエントリー出来るんだけどね。ただあなたも時期が悪かったわ。この学園には、操縦者の健康や身の安全を確保するために、
大きな行事・・・今回で言えば個人戦トーナメントがそれに当たるんだけど、
そういったイベント前に大きな怪我をした生徒は原則、私や医師の診断書が必要なの」
「え、じゃぁ・・・」

「えぇ、あなたの怪我からみて完治はトーナメントの直前ってとこ。それに今回は外側からじゃ分かりにくい怪我だから、なおさらね。そんな状態の生徒に診断書は書けないわ・・・残念だけど出場は諦めて」

「そんなっ！」

グッと拳を握りしめて、やりきれない思いをどうしたらいいのか分からない様子のアルディ。

先ほどの話を聞いていただけに、その悔しさはこの場に居る誰もが共有していた。

皆、なんと声をかけたらいいのか分からず、沈黙が部屋に訪れる。

だがセシリアだけは違った。

セシリアは椅子に座るアルディに目線を合わせる様にかがむと、優しい声で言った。

「アル・・・・私にお任せくださいな。彼女とは、私がその思いと共に闘いますわ」

「セシリー・・・でも、彼女は・・・僕の・・・」

「ですから、お姉さんへのその思いを私に預けてください」

彼が自分を助けてくれたように、今度は自分が彼を助ける番だ。

悔しさの、にじむ目からはうっすらと涙も見える。

本当に・・・本当に忸怩たる思いなのだろう。

こんな表情のアルディを見たことが無かった。

彼が楽しむのなら、自分もそれを楽しもう。

だが、彼が苦しむのなら、自分は進んで苦しみの中へ飛び込もう。

そして、その苦しみを共に分け合おう。

それで、少しでも彼の苦しみが和らぐのならば。

「彼女は、一夏さんを目の敵にしているようですが、そんなの知ったことではありませんわ。私が勝って、証明してみせます」

「・・・・・・セシリー」

アルディが急に自分を呼ぶ。

そしてなにもい言わずに、セシリアの首に?銃弾のネックレス?をかけた。
それは、現在使用できないアルディの?ストライク・バーディ?の待機状態のものだ。
「アル?」
「やっぱりこんな顔は僕には似合わない。僕は年がら年中笑っていたい人間だからね」
アルディは、打って変わって明るいいつもの調子で言うと、椅子から勢いよく立ちあがり、
保健室の扉の前へ歩いていく。
そしてドアノブに手をかけて、静かにこう言った。
「・・・君に預けるよ、僕と姉さんの思い。無茶しろなんて言わないけど・・・一言だけ言わせて」
セシリアは、首に掛けられたネックレスをギュッと握りしめる。
「・・・・・勝って!」
そう言い残し足早に、保健室を後にするアルディ。
残された面々は、その背中をただじっと見送った。
セシリアは預けられたネックレスを首から外すと、それを両手で持つ。
・・・・・重い。
元々重量のあるネックレスだが、これにはアルディとその姉のローラの思いが詰まっている。
今のセシリアには、そのネックレスの重量がとてつもなく重く大きいものに感じられていた。
それと同時に、セシリアの中で決意も固まる。
「・・・・こりゃ、負けられなくなったな、セシリア」
「あんた、ヘマしたら今度こそ捨てられちゃうかもね~」
「彼女も大変だね。こんなところで最高の操縦者が生まれたんだから」
三者三様の言葉を投げかけてくる彼らに、セシリアはふりかえると

改めて決意のこもった眼で宣言した。

「この思いと共に、勝ってみせますわ！！」

言いきったセシリアの表情は、いつも以上に自信に充ち溢れていた。

第9話~思い、君と共に~（後書き）

今日、オルコッ党総裁の私とシャルロッ党党首との間で会談を行いました。
内容は、ｙｏｏｏｏｕｔｕｂｅでご覧いただけません

どうもしるくです。

原作ならこの後セシリアと鈴がやられて出場できないのですが、そこはほら。
原作通りになんてねぇ。
いかないわけですよ、中々（爆

そういえば今日、会談した場所は滋賀県の豊郷小学校です。
寒かった~・・・雪とか降ってましたからね。
３月の末やっちゅーのｗ
そんなこんなで。。
それでは１０話でまた！
さよならっ！

第１０話～僕が嘘をつく理由、彼が彼女である理由～

トーナメント出場禁止が宣告されたその日の夜。
僕は自室で、ボーっとＰＣを眺めていた。
何か特別な意味はない。
画面には世界各国の情勢や事柄が、表示されている。
僕はそれを、特に何の考えもなくカチカチとクリックして開いては閉じまた開いては閉じるを繰り返していた。
あの時、感じていたやり場のない憤りが、全く無くなったと言えば嘘になるが、もうあれはセシリーに任せたのだ。自分自らが選んで。
彼女ならやってくれると思ったから。
だから、僕はもう特に深く考えるのをやめた。
勤めて僕らしくあろうとしたのだ。
深く考えるよりも気楽に事を構えていたい。
それが自分だから。
楽観的は自分の専売特許だと思う。それ以外に、特にこれといった特技もないしね。
「・・・・別に良いんだけどなぁ」
何が良いのかもわからないが、呟いてみる。
一人部屋だ。返事は当然ない。
・・・・・はぁ。
だが、そうは言ってもやはり悔しい。
出場できないことが。
姉さんを馬鹿にしたラウラが。
そして何より、セシリーに思いを託すしか選択できなかった自分自信が。
はぁ。
また一つため息が漏れる。
ダメだ。ネットサーフィンしてたら気も紛れるかと思ったけど・・・

・。
頭に全然内容が入って来ない。
・・・・ふぅ、一度外に出よう。
夜風に当たれば、少しは気分転換になるだろう。

丁度僕が、寮の玄関を出る辺りで、シャルルとすれ違った。
「あ、アルディ・・大丈夫？」
「まぁ、なんとかね」
「大丈夫だよ、セシリアさんすっごく良い顔してたから」
「そう・・・・そういえば一夏は？」
「うん、なんか用事だって。山田先生と一緒に書類書きに行ってるよ」
「ふ～ん」
「それじゃ、僕もシャワー浴びたいから」
「あぁ、じゃあ」
少しの間言葉を交わして、シャルルと分かれる。
心配してくれていることは、何にしてもうれしい事だった。
しっかりしろ！アルディ・サウスバード。
落ち込んで、皆のモチベーションまで下げる気か！
自分に自分で渇をいれ、夜風心地いい、満点の星空のもと近くのベンチに腰を下ろした。

・・・星空かぁ・・・。
これまで、こうやって見上げたこともなかったなぁ・・・。
だって、よく見えないし、真っ黒で。
・・・・どんなんなんだろうね。
？ストライク・バーディ？のバイザー越しにみた青空はそれは綺麗だった。
皆こんなきれいなものを見てるのかって、羨ましくなったぐらいだ。

ふぅ・・・・。
本当に情けない。
こんなことならもう少し、鍛えとくんだったかなぁ。
自慢じゃないが、僕は銃器の扱いには人よりはまぁまぁ上手くできるが、それだけだ。
運動は・・・まぁ嫌いじゃないけど。
一夏や箒みたいに剣道のような、武術を習っていたわけじゃない。
僕のはあくまで趣味の範囲内だ。
そんなこと言ったら、姉さんは怒るかな。
・・・・。
弱っちいなぁ、僕。
僕にあるものと言えば・・・。
しいて言うならこの口か。
子供のころ、今もだが僕はそれはそれは弱かった。
いじめられっ子って言うのかな。
その時姉さんが教えてくれたのが嘘だった。

いつだったかな、いつも見たいにボコボコにされて帰ってきたんだっけ。
そしたら姉さんにこう言われたんだ。
「アルディ・・・やり返せとは言わないけど言い返すぐらいしたらどうなの？」
「・・・だって、言い返すとまた叩かれちゃうし」
「じゃあ、あなたは相手が飽きるまで、叩かれていたいの？」
「いやだよ・・・痛いのも、怖いのも」
多分あの時僕は、半べそ状態だったかな、今思い出すと笑っちゃうけど。
そんな僕に、姉さんは目線を合わせると、頭をなでながらこう言ったんだ。
「アルディ、そんなあなたにいいことを教えてあげる。嘘吐きなさ

い、なんでもいい嘘を吐くの」
「え？でも・・・」
「他の大人たちは、色々言ってくるかもしれないけどそんなの気にしちゃダメ。
この世にはね、吐いてい良い嘘と吐いちゃダメな嘘があるの、わかる？」
僕はよく言葉の意味が理解できなかったから、首を横に振った。
そんな僕に姉さんは、また優しく笑いながら言う。
「ダメな嘘って言うのは、その場に居ない誰かを傷つけてしまう嘘。
これは絶対にだめよ。どんなことがあってもそれはダメ。
反対に良い嘘って言うのは、自分が傷つく嘘の事。
変な言い方かもしれないけれどね」
そう言うと姉さんは第一回大会のモンド・グロッソでの新聞を僕に見せた。
そこには、二位という成績を片方で称賛しながら、もう片方では？
Ｒｏｌａ　ｏｆ　ｂｅｔｒａｙａｌ？
（裏切りのローラ）という文字が一面を飾っていた。
「丁度この記事が良い例だわ、姉さん嘘つきでしょ。
それが招いた記事の見出しなんだけど・・・・
アルディはこんな姉さん誇りに思えない？」
それもノーだ。
僕はさっきと同じように首を横に振る。
どんな理由であれ、姉さんが世界第二位という事実には変わりない。
そしてそんな姉さんを僕は誇りに思っている。
「でしょ、だからそう言う事。たとえ自分の名前や自分自身が傷ついても、
それで誰かに信じてもらえるなら、誰かを助けられるのなら嘘をついても良いの」
「・・・本当に？」
「あら、姉さんを信じられない？あたしは、世界第二位のお姉さん

よ。
それに私はそう言うのを嘘って言わないと思う」
「でも、僕が嘘言ったら、姉さんも悪く言われちゃうよ？」
「フフッ姉さんは良いの、特別よ。姉さんはあなたのためなら喜んで傷ついてあげる」
「・・・姉さんは強いんだね」
「強くなんて無いわ、そうね格好悪く言えば、ずるがしこい、格好良くえば確かに強いのかも…。
私はこう思うの、嘘って言うのは、あたしにとってそれこそが強さなんじゃないかって。
ただ扱いには結構苦労するけどね」
強さ・・・。
僕にもそれがあればいいのかな。
そう言って笑う姉さんの後ろ姿を見てそう思った僕は、その日以来よく姉さんの真似をするようになった。
真似っていっても、何だろう。
身近な物で色々嘘言ったりするだけなんだけど、これがやってみると結構難しかった。
まず、嘘って言うのは結構周到にやらなければ、ばれてしまうものだ。
そのことを姉さんに言ったら
「そりゃそうよ、そんなに簡単に出来たら、あたし、何のためにあんな事まで言ったの？」
だそうだ。

そしてそれから今まで、ずっと。
最近でこそ、それほど嘘吐いてないけど、要所要所で色々吐いてることは吐いてるよね。
にしても、懐かしいなぁ。
こんなにも鮮明に思い出せるのは、今の人格形成に多大な影響を及

ぼしたきっかけだからなのか、それとも何かまた別の事なのか。
だが、何にしても少しは気分転換になった気がする。
僕は、ゆっくり立ちあがって、深呼吸を一回。
そして、もと来た道を戻り始めた。
僕が寮の玄関を入ったあたりで今度は一夏に出会う。
一夏も寮に帰って来た様子で、自然と横並びになって会話が始まった。
「アルディじゃないか、今帰りか？」
「いいや、ちょっとそこら辺を」
「徘徊してたのか？」
「言い方・・・まぁ似たようなもんだけど」
ふうっ、息を吐くと丁度一夏が何か袋を抱えているのが見えた。
「一夏、それ何？」
「ん、あぁこれか、茶っ葉だよ。良いのをネットで見つけてさ、でも距離が遠かったから今着いたんだ」
「アレ？シャルルは書類をかきに行ったって・・・」
「だからその後だよ・・・そうだ、お前もどうだ一杯。これは美味いぜ！」
・・・そもそも、その年でお茶っ葉をネットショッピングするのとは。
中々、一夏って珍しいよね。
でも、せっかくのお誘いだ。
どうせ部屋に帰っても、やる事なんて特に無かったし。
「じゃぁ、いただこうかな」
そう言って僕は、行先を変更し一夏の部屋へと足を向けることにした。

「たっだいまー」
一夏の能天気な声が響くが、返答はない。
そう言えば、今はシャルルと相部屋だっけね。

ふと、今の一夏の行動が僕の日常の寮へ帰宅する風景に重なる。
・・・・時々僕も、誰もいないのにこう言う事言ってるけど・・・
やめよう。
甚だしく馬鹿らしい・・・。
「あれ、シャルルが・・・・ん、あぁシャワー浴びてんのか」
確かにシャワールームからはシャァァァッっという水の音がしている。
いつまでもドア付近に突っ立っていた僕に、一夏が席へと促す。
「あ、適当に座っててくれよ、今からお茶入れるから」
僕は、適当な椅子に腰かけ、少し辺りを見回す。
・・・広いね、当たり前だけど。
よくよく考えてみたら、二人部屋でこれだけの広さがあるのに、どうして一人部屋になるとあそこまで小さくなってしまうのだろうか。
普通に考えれば、これの半分でしょ・・・。
そんな事を考えている間にも、一夏は手早く急須にお茶っ葉を入れてポットのお湯をそそいでいる。
と、急に一夏があっと声を漏らした。
「そう言えば、ボディソープ切れてたんだっけ・・・悪い、ちょっとシャルルにボディソープだけ渡してくる」
「あぁそれぐらいなら僕がしよう。丁度手持無沙汰だったんだ」
僕は一夏がクローゼットから、取りだしたボディソープを受け取るとシャワールームへ。
ガチャリとドアを開けると、中に滞留していた湯けむりが一気に流れ出した。
うっすらとだが奥にシャルルが見える。
「シャルル、一夏から。ボディソープが切れてるんだ・・・・・・・って？」
「え！？あ、アルディ、なんでどうして！？」
・・・・・あれ？
シャルルって男の子・・・だよね？

それとも何、お湯かぶると女の子になっちゃうとか？
そこでは、平均的な胸のふくらみをもった、明らかな女子がシャワーを浴びていた。
「おーい、何あけっぱなしにしてるん・・・・・だ？」
一夏の僕と同じ反応だったが・・・多分今は固まっている場合じゃない気はする。
僕は、ボディーソープをシャルルの、近くに置くと一夏に飛びかかる形でシャワールームから飛び出した。
「おわッ！！おまえいきなり飛んでくるなよ！」
「緊急事態だろう！これぐらい我慢したまえ！」
僕は、一夏寄りかかる形で、先ほど飛び出したシャワールームを振り返る。
ど、どう言う事なんだ？
・・・・これは。

しばらくして、シャルルがシャワールームから出てきた。
格好は、オレンジと紺色の入ったジャージ姿だったが、明らかに胸が膨らんでいる。
そ子に居たのはシャルル君ではなく、シャルルさんだった。
「あー・・・えっと」
「・・・・・」
一夏は何か話題を切りだそうとするが、中々口を開けない。
シャルルもそれは同様なようで、椅子に座ってからもずっとうつむいたままだ。
ほんと、こう言う時自分が軽くて、楽観的主義でよかったと思う。
内心は焦ってはいるものの、平気で嘘がつける人間だ。
なんとか外見は平静を保てるし、何より頭が働いた、まささっきよりは。
「とりあえず・・・・お茶でも淹れたら？」
「そう、だな・・・ちょっと待っててくれ」

一夏が立ち上がり、少しの間シャルルと僕の二人がその場に残された。
シャルルは、うつむきながらもぽつりとつぶやいた。
「・・・驚いた、よね」
「まぁ、そりゃ」
むしろこの場で驚かない人間がいたら見てみたい。
・・・姉さんは楽しみそうな気はするけど。
「・・・・・」
「・・・・・」
再び訪れる沈黙。
流石に僕も、二人きりに慣れると何を言っていいのか困るね。
一夏は数分後に戻ってきたが、その間が僕にはとても長く感じられた。
一夏は、湯呑をシャルル、僕、自分の順番で置いて席に戻った。
シャルルは出されたお茶に、まっ先に口をつけた。
あたかも、自分を落ち着けるかのように。
一夏はシャルル同様に少し口に含んだ後、ふうっと息を一回ついて口を開いた。
「その、なんで男のフリなんかしてたんだ？」
「実家の命令なんだ」
実家・・・デュノア。
・・・あぁ、デュノア。
フランスの大手ＩＳ企業じゃないか。
なるほど、そこのお嬢様だったのか。
「命令？どうしてそんな・・・」
一夏がさらなる疑問を投げかける。
だがシャルルはチラチラと先ほどから僕の方を見てまた黙り込んでしまった。
・・・・・どうやら、複雑な話の様で。
ガタッと僕は立ちあがる。

その行動に、二人とも驚いていたが、僕は構わず言う。
「はぁ、まぁいいや」
それだけ言って僕はきびすを返した。
「おい、まぁいいやってなんだよ、真剣な話してるのに」
当然一夏は僕の行動が癪にさわって、肩を掴んでくる。
だがそれを僕は振り払うと、ふりかえって睨み返した。
「確かに、真剣な話の様だけど、僕はそんな昔話に付き合うつもりはないんだ」
「何!?」
「これからどうせ、お涙ちょうだいな昔話が始まるんでしょ、そう言うの僕は好きじゃないんだ」
「お前!いい加減にしろよ、シャルルはお前の事心配してくれてたじゃないか!!」
「それとこれとは話が別さ、それに僕は心配してなんて頼んだかな?」
「出てけ・・・今すぐに!」
「言われなくてもそうするさ」
僕は、吐き捨てるように言うと乱暴にドアを開けそして、思い切り締めた。
中からは一夏の気にするなよシャルル・・・って声が聞こえる。
・・・・さて、それじゃ改めて聞かせてもらおうかな。
僕はポケットから、受信機付きのイヤホンを取りだすと、片方の耳に取り付ける。
フフフっ、一夏達には後でちゃんと謝らないとね
僕はほくそ笑むと、イヤホンから聞こえる?一夏とシャルルの会話?に耳を傾けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あいつの事なんか気にすんなよ、あんな薄情なやつだとは思わな

かったぜ・・・」
「・・・うん、まぁそれは良いんだけど・・さっきの話の続き」
続き・・・その言葉に急速に冷えていく一夏の頭。
一夏は椅子に座り直すと、シャルルの言葉を待った。
「僕ね、愛人の子なんだよ」
「え・・・・」
つまり、父親と本当に母親の子供じゃないってこと・・・。
「二年前に実家に引き取られてね・・・。色々検査していく内にＩＳの適性が高いことが分かって、非公式ではあるけどデュノア社でテストパイロットをしてたんだ」
一言一言語られていく真実に、一夏は心が締め付けられる思いだった。
特に真実を語っているシャルルはもっとだろう。
「一度だけ、本邸に呼ばれたんだけど・・・本妻の人に殴られちゃったよ。あれはびっくりしたかな」
びっくりしたなんて、生易しいものでは無かっただろうと一夏は思う。
それと同時に、怒りがこみ上げてくるのが自分自身でもわかった。
手は知らず知らずのうちに、グッと握られ震えるほど力が入っている。
「・・まぁそれは僕の事で、それから数年後、デュノア社は第三世代ＩＳ開発の遅れから経営危機に陥ったんだ・・・。もともと遅れていた上に時間も無くて、最終的に今度の政府のトライアルで選ばれなかったら、予算全面カットの上でＩＳの開発許可もはく奪されるって話になって・・」
確かに、デュノア社が大変だと言う事は分かった。だが・・・・それがどうして。
「でも、そこからどう男装につながるんだ?、聞いた限りじゃ何も繋がりが見えないんだが」
その問いにシャルルは、乾いた声で少し笑った後、苛立ちを含んで

言った。
「ＩＳは男の人には使えないって言うのが一般常識でしょ。そんな中でフランスで男のＩＳ操縦者が見つかったってことになれば、広告塔にもなるしその子がＩＳ学園に入学したって何も不思議じゃない・・・・それに」
シャルルは、うつむくと声のトーンを落とす。
「それに、そこでなら日本で発見された特異ケース・・・一夏に接触しやすいでしょ」
そこでようやく合点が言った。
つまり、そう言うことだ。
白式のデータは、一応公開されているもののその奥が謎のまま。
そのＩＳのデータがあれば、デュノア社は再びそれを元に第三世代ＩＳの開発に着手できる。
仮に予算が下りなくても、?白式と特異ケースを含むデータ?を交渉材料に出来る。
一夏は、中々考えたものだと思ったが、それ以上に怒りが沸点を迎えそうだった。
「でも、一夏にもアルディにもばれちゃったし・・・僕は本国に強制帰国させられて・・・
会社はどうなるのか分からないけど、僕にとってはどっちみち良い選択肢はなさそうだね」
一夏はもう我慢が出来なかった。
親なら、何をしてもいいのか?
むしろ親と呼べるのかそんなものが!?
「お前は良いのかよ!?」
気が付けば、シャルルの両肩をつかんでいた。
一瞬の事で驚いたシャルルはグッと身体をこわばらせる。
「い、一夏?」
「確かに親がいなきゃ、子はできないし生まれないさ!だからっていって、そんな事が許されるのかよ?親なら、何をしてもい言って

道理は通らねぇよ！」
なりふり構わず、叫ぶ一夏をシャルルがとりあえずなだめようと、肩をつかむ手に自分の手を重ねる。
それにハッとした一夏は、肩を離すと息を整える。
「・・・大丈夫・・何か変だよ」
「一――――いや、その・・・俺と千冬姉は両親に捨てられて・・・それでお前の親があまりに身勝手で・・・なんか重なってさ」
シャルルも一夏に両親が居ないと言う事は知っていた様で、顔を伏せると小声でごめんと謝った。
「なんで、謝るんだよ・・・今更会いたいなんて思わないし・・・良いんだよ。それより今はお前の事だ」
そうだ、そんな事はどうでもいい。
自分が勝手に重ねて変に熱くなっちまっただけなのだから。
「僕の事？」
「あぁ、お前はそれでいいのかよ」
「良いも悪いもないよ・・・僕には選択肢が無いんだから」
再び顔を下に向けてしまうシャルル。
それを見た一夏は生徒手帳をめくりながら、ある記載を探す。
今のこの状況を、打開できうる策がそこにあるのだから。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・さてねぇ。
僕はここまで聞いてなんだけど、気持ちは軽く沈んでいた。
シャルルもだけど一夏もなのか・・・。
全く、重たい過去だねぇ。ほんと。
ふと自分の両親が頭の中によみがえる。
・・・父さんと母さんか。

・・・ま、ころ合いもいい頃だしそろそろ良いかな。
一発は覚悟しよう。
僕はイヤホンを耳から外すと、一夏の部屋の扉を勢いよく開けた。
「シャルル、アメリカは自由の国だ」
そして僕は、いきなりそんな事を高らかにのたまった。
当然一夏は、僕の登場を歓迎してなどいない。
「お前、何しに来たんだよ、出てけっつったろう！！」
そりゃそうなるよね。
僕は半ばあきらめながら、一夏に胸倉をつかまれる。
そして、それでもニヤつく僕を問答無用で、殴り飛ばした。
「いっつぅ・・・・一夏ねぇ、僕はこれでもけが人だよ？」
「知るか！俺はお前が許せねぇだけだ、人の悩みを真剣に聞こうともせず鼻で笑ったお前が！」
おやおや・・・。
一夏君は大事な事を忘れてる。
僕は、殴られて切れたのであろう口から流れ出た血を、右手でぬぐうと座りこんだ体勢のままいつもの調子で言った。
「一夏・・・僕は嘘つきだよ？」
「それがどうしたっていうんだ？大体嘘吐きなんて最低以外の何物でもないじゃないか」
「それは、昔から延々と言われ続けてることだからねもう慣れたよ」
僕は、怒る一夏を尻目にシャルルに近づく。
「さて・・ちょっと失礼」
僕はテーブル下をまさぐる。そしてそこから出てきたものは・・
「あ、ＩＣレコーダー！？」
シャルルが素っ頓狂な声を上げ、一夏が更に睨む。
「コレ、録音した音声を電波で飛ばせるんだ、これ受信機ね」
「お前、ほんといい加減にしろよ、どこまで人を馬鹿にしたら気が済むんだ！？」
声を荒げる一夏を、僕は睨む。

「だったら、僕がいてシャルルは正直に全部話したかな？」
「・・・何だと？」
「あの時、シャルルは明らかに僕を警戒してたんだ。チラチラこっちを見てたしね。
あいにく信用されなさには自信があってね、おんなじような目で見る人間はごまんといた」
それは本当だ。
この性格。
確かに嘘の強みはあるが、逆にそのことがあらかじめ情報として知れ渡っていたりすると、
総じて僕や姉さんを避けたり、警戒したりする。
「だけど、流石に露骨に話しづらそうだからって出ていくと、余計に気を使わせちゃうと思ってね」
「そのための演技だったの？」
「君ほど上手くは無かったけどね、ま一発は覚悟の上でだから。あ、それと僕のは演技じゃなくて嘘ね
そこ重要だから」
「な、何だよ！お前そんなの・・・もっと早く言えって、殴っちまったじゃないか！」
僕の考えを聞いて、急にあわてる一夏。
いやぁ、こういう姿を見られるから、嘘をつくのって癖になるんだ。
「だから、一発は覚悟の上だって言ったでしょ。それより今はほらシャルルの事だよ」
僕は、混乱する一夏に道を示してやる。
あぁそうかと、我に返ると一夏は生徒手帳をめくっていく。
そして一夏は目当てのページを見つけたようだ。
「これだ」
そのページを開いて、こちらに見せてくる一夏。
ふむ・・・なになに特記事項第二一。確かこれは学園の生徒に関する記載事項だ。

えぇと・・・在学中の生徒はありとあらゆる国家・組織に帰属せず・・・なんだっけ・・。
・・・あぁそうだそうだ。
本人の同意が無ければ、それらの外的介入を一切認めないってやつだ。
全く・・なんでこんなに条例文とかってやつは難しい日本語を使うんだ。
もう簡単に、生徒はどの組織にも属しませんでいいじゃないか。
「・・・よくそんなの見つけたね」
「ふん、俺は勤勉なんだよ」
「織斑先生に頭叩かれる回数一番多いのに？」
「う、うるさいアルディは黙ってろ、お前だって同じぐらいだろ！それに何より今、俺格好良くまとまったじゃないか！」
「一夏も嘘が旨くなったね」
自分でまとまったとか言うのって、大抵外れだよね。
その様子を見て、フフッと笑うとシャルル。
「・・・その条項が当てはまったとして、僕に選べるのかな」
「シャルル、そう言えばさっきの話だけど。アメリカは自由の国なんだ。そこでは誰もが自由。
まぁ法の名のもとにだけどね」
「自由・・・」
「そう、自由。そこでは誰もがみな平等にチャンスを与えられている。それに気が付けないだけで」
そう、シャルルも気が付いていなかっただけだ。
これまでもそのチャンスは絶対にあったはずだ。
「そのチャンスに気がつけた者だけが、そこでようやく選択肢を与えられる。そして気が付くんだ。
選ぶのは他でもない自分だって言う事に」
「僕が・・・」
「そう、そして君はたった今チャンスに気が付いたじゃないか。そ

して一夏が選択肢を与えてくれた」
何が言いたいのか、シャルルにはもう分かってるはずだろうね。
彼女頭良いし。
「そう、だね・・・これまで僕はそのチャンスをただ無理だって自分から放棄してたのかも・・・
僕考えてみるよ、これからの事・・・今度は誰でもない自分で、しっかりと」
その声にはさっき、の様な不安や苦しさは消えていた。
もう、大丈夫だね。
そう思うと、ホッとしたのか急に力が抜けて僕と一夏は椅子にドサッと腰を落とした。
「あ～それにしても・・・覚悟したとはいえ痛い・・・全身も悲鳴あげてるし」
「そんな事言ったってお前仕方ないだろ。あの状況でそんな事どうやって分かれって言うんだよ」
そりゃそうだけど、やっぱり織斑先生の弟の事だけはある。
いや本当に痛い。
弟でこれだから、織斑先生の鉄拳制裁はくらっちゃだめだ。
多分、一撃で即死の可能性がある。
「アハハ、でも僕もびっくりしたよ。確かに警戒はしてたけどあんな事言いだすなんて思わなくて」
「ったく、お前の嘘は姉さん譲りだっけ？はぁ・・・お前の両親も見てみたいよ」
ボソッと言った何気ない一言。
両親。
両親か・・・・。
「そうだね、会いたいね・・・・僕も」
言い方が意味深だっただけに、一夏とシャルルは頭に疑問符を浮かべ首をかしげた。
「僕も？」

「どう言う事？」
僕は、少ししまったと思う。
余計な僕もなんて言葉、言わなきゃよかった。
だが聞かれてしまったものは仕方がない。
僕は諦めたように笑うと、こう続けた。

「・・・・死んだんだ、海難事故でね」

第１０話～僕が嘘をつく理由、彼が彼女である理由～（後書き）

最近この小説を書いてるせいか一夏に嫉妬します。
どうもしるくです。

今日バイト先のセールだったんですが、チラシが
玉ねぎのの所に馬鈴薯、馬鈴薯の所に玉ねぎと記載されていました。
まさかのミス。
値段はあってたんでよかったですけどね。

まだ品名？店長？はありませんでした。

それではまた１１話でお会いしましょう！
さよならっ！

第１１話～水と油～

もう何年前になるのか。
僕は、父さんと母さん、そしてようやく休みの取れた姉さんの四人で旅行に出掛けたんだ。
それは船旅だった。
初めて乗る大きな船に、そして海に、僕の心は躍っていた。
はしゃぐ僕を父さんも母さんもそして、姉さんも笑顔で見守ってくれた。
青空のもと海風気持ちの良い中、客船は出港。
だがそれから数日後、いきなり大しけに見舞われてしまう。
船は揺れ、立っているのも無理なぐらいだった。
しばらくはなんとか、船首を波に垂直に向け乗りきっていた船だったが、ついに最悪の事態が訪れる。
突如、真横から予想だにしない大波にのまれたのだ。
船の窓ガラスは水圧で吹き飛び、一瞬にしてすべての電気が消える。
そして、それからは覚えてない。
気が付いたら僕は病院のベッドの上で、泣きながら姉さんが僕を見つめているだけだったから。
「そうだったんだ」
「・・・あぁ、別にこんな空気にするつもりは無かったんだけど」
シャルルと一夏そして僕の間に流れる、重たい空気。
さっきまでも相当重たい空気だったのに、それにまた僕の話が上乗せしてしまったようだ。
確かに、両親が居ないっていうさみしさが無いと言えば嘘になる。
でもだからといって、同情してほしいとかかわいそうだとか、そう思ってほしいわけじゃない。
こちらからすれば、そうなんだで終わるような話だと思ってたのに・・・。

「・・・なぁ、アルディ。お前は両親の事好きだったのか？」
「当然だね、僕は一夏やシャルルみたいに重い過去なんて無いし・・・あぁ、別に悪く言ってるわけじゃないよ」
「そうか」
一夏は親に捨てられ、シャルルは少し複雑で・・・・。
でも、それでも生きてる。
一夏の親は分からないけど、シャルルの両親は生きてるし。
「一夏、シャルル。僕がこんなこと言うのおかしいけど・・・・どんなに嫌でも、きらいでも・・・
生きてるなら、両親を恨んじゃ駄目だと思う」
「別に俺は、もう何とも思っちゃないけど・・・」
だがそう言う一夏の顔にも少し動揺が見える。
どんなことをしたって、親なのだ。
完全に振りきれるわけがない。
いや、それを振りきっちゃいけないんだ。
血のつながりは、どこまで行っても途切れる事は無いのだから。
僕はパンパンッと織斑先生のように手を叩くと話を切り上げた。
このままもっと空気が重くなっても困る。
いつも言ってるけど、人生は楽しくなくちゃ。
「あ、そういえばさっきの話なんだけど。対象がなんで俺だけだったんだ、アルディも男だろ？」
一夏がそれを悟ったのか、話題を少し方向転換させる。
こういう気づかいはできるのに、どうして鈍感なんだろう・・。
「あぁ、それは優先順位の問題だよ」
「優先順位って言うと・・・あぁ、僕と一夏ならだれでも一夏を選ぶね、正直だし優しいし」
そう言うとシャルルが少し頬を赤らめて、わざとらしく声を張り上げた。
「そ、そう言うことじゃないよ！た、確かに一夏は優しいし正直だけど・・・・ってそうじゃなくて！」

ひょっとして、この子自爆大好き？
頭がいいのと、性格が抜ける抜けていないっていうのとではどうやらイコールではないらしい。
「もぅ、アルディ冗談が過ぎるよぉ・・・で、優先順位って言うのはそのままの意味だよ。？白式？の性能や、一夏のバックグラウンド、そして？ブリュンヒルデ？織斑　千冬・・・これらに勝るものが一つもアルディには無いんだ」
少し傷つく言い方だけど、しょうがない本当の事だ。
？白式？に対して僕の？ストライク・バーディ？は姉さんのお下がりの改良品だし、僕のバックグラウンド？・・・嘘つきになったそれだけ。そして姉さんは織斑先生ほど影響力も無ければ有名でもない。
おまけに、性格でも負け負け。
・・・最後のはいらなかったかな・・・自虐で傷つくのなんて久しぶりだ。
「それらの事を統合的に考えた結果、一夏だけが対象になったんだ。下手に対象を増やすより確実だと思って・・・でも見つかっちゃったけど」
そこで一夏はようやくしまったって顔をした。
そう、話題を変えたつもりだったんだろけど、これ戻っただけだよね。
またズーンと暗くなるシャルル。
「この馬鹿、なに話しぶり返してるのさ・・・」
「す、すまん・・いま俺は自分のリカバリー能力の無さを嘆いている所だ」
声をひそめて一夏の脇をコツく。
あの時ほんの少しでも感心した僕の心を返してもらいたいね。
「・・・やっぱり、僕」
だが、次の行動を見て僕はやっぱり一夏は凄いと思った。
僕はあそこまではっきりと、面と向かって言う自信は無いよ流石に・

・・嘘でもない限りね。
「さっき、選ぶって言っただろ、もう覆しちまうのかよ?
それでも、それでも・・・選べないっていうのんら俺が言ってやる
!」
一夏は立ち上がると叫んだ。さっきまでの静かな雰囲気の中からいきなり大声を出すから、
僕は少し驚いてしまう。それはシャルルも同様だったようで、
びっくりした顔で一夏の顔を、見上げるシャルル。
「いち・・・か?」
不安がまたシャルルを包み込んでいく。
声は先ほどまでとは違い、僕がイヤホンで耳にしていた不安一色のか細いものだった。
だが一夏はその暗雲を一言で、吹き飛ばして見せた。
「ここにいろよ!それで解決だろ!?」
「え・・・・」
呆けた顔だったが、僕にはそれがどこか、嬉しそうにも見えた。
恐らくそんな事、初めて言われたんだろうね・・・。
僕は、興奮気味にまだ何か言葉を探す一夏を諭した。
「一夏、それ以上先はさっきも言ったでしょ、彼女が考えることだよ・・・ね」
僕はシャルルに笑いかける。
シャルルはまだどこか、不安そうな顔はしていたがうつむいてはいない。
「・・・ほんと僕って駄目だなぁ、二回目だね言われるの」
「僕は三回四回言われても、覚えられないけどね」
「自慢じゃねぇだろ・・・」
「自慢とは言ってないけど」
ハハハッと笑いあう。
そうさ、こうじゃなきゃ人生は。
僕は、その後の事を一夏に任せて部屋を後にする。

部屋のドアを閉めると、ふと懐かしい話をしちゃったなと思う。
これまでもまぁ数えるぐらいは、した気がするけど最近は全く自分の事なんて話したこと無かった。
それに聞かれなかったしね・・・。
僕は、足を自分の部屋に向ける。
そこで、腹の虫が鳴いていることに気が付いた。
・・・あ、ご飯まだだったな。
急遽方向転換。
今日はこういう突発的な行き先変更が多いね。
僕は、その足を部屋から食堂へと向き直した。
階段を下りていた時、声をかけられる。
ん?んん?
声はすれど姿は・・・
「ここですわよ!」
声のした方向を見やると、ようやく見えた。
階段の手すりの所為で僕側からはその姿が見えていなかったようだ。
「セシリー?」
「セシリー?じゃありませんわ全く・・・それでその、大丈夫ですの・・・?」
「あぁ、うん。まだ完璧に整理が付いたわけじゃないけどね」
ああ言ったものの不思議なもので、さっきシャルルたちと話しただけで僕の心は
驚くほど整理が付いていた。
姉さんや両親の事を、順序立てて色々話したからかもしれない。
「そうですか・・・あ、ところでこれから一緒に夕食でもいかがかしら?」
おぉ、丁度いい。
・・・向こうにとっても丁度いい。
「・・・はぁ、アル。私そんなにあなたに奢らせてばかりだったでしょうか」

頭を押さえながら、ため息をつくセシリー。
・・・僕も、読まれやすくなったものだ。
「アル、あなた初めて会ったときから、意外と考えダダ漏れですわよ」
「嘘!?」
それは心外だ・・・。
僕はさらりと嘘を言ってのけるクールな嘘つきを目指しているのに。
「はぁ、もういいですわ、でどうですの?ま、無理と言っても無理やり連れて行きますけど」
そう言ってスルッと腕を僕の腕にまわしてくるセシリー。
・・・やれやれ、こうなっては断れない。
まぁ断る気なんてハナから無かったんだけど。
「それじゃぁ、行きましょうかお嬢様?」
「フフフっ、苦しゅうな~い」
僕は、?お嬢様?を食堂という名の、パーティ会場へエスコートした。
・・・流石に言い過ぎかな?

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・なんですのこれ。
アルが出られなくなったことが分かった日から一週間半が経った。
今セシリアの目の前には申込書が一枚。
その申込書には、『今月開催の学年別トーナメントは二人一組での参加を必須とする』という旨の緊急告知文が書き込まれていた。
な、なんてタイミングの悪い・・・。
二人一組ということは当然ペアを探さなければならない。
セシリアは、ペアを組むならアル以外考えられなかった。

だがアルはご承知のとおりである。
・・・・不味いことになりましたわ。
相手が、専用機持ちでなければ正直いって、セシリアは単機でもどうにか相手に出来る算段はあったのだが、この告知文にあるとおりペアは必須だし、何より勝ち進んでいけば必ずどこかで専用気持ちに当たる。
そうなると、いくらまだ実力が伯仲している一年生といえども、?打鉄?や?ラファール・リヴァイヴ?で専用機を相手にするのはあまりにも酷だ。
・・・・勝てるペアがいりますわね。
一夏さんは・・・デュノアさんとでしたわね。
箒さんは剣の腕は立ちますが、専用機を持っていない。
ラウラ・ボーデヴィッヒは論外・・・
消去法で消していくと・・・・・。
一人しか残らなかった。

「・・・なんであたしなのよ」
セシリアは、残った一人に会うべく二組を訪れていた。
鈴は腕を組んで、渋い顔をしている。
「仕方が無いでしょう、勝てるペアが必要なのです」
「勝てるペアをアテにして来たのは良いけど、仕方がないっていうのやめなさいよ」
仕方が無いものは仕方が無いのだ。
実際鈴とは、初対面での?知らない発言?から犬猿の仲であり好きな男子が違うから、
その事でもめごとは起きないが、それでもその他の些細な事で意地を張り合ったする仲だ。
その鈴が、自分の申し出を素直に受け入れるとは考えにくいし、そんな事思ってもいない。
だから、少し交渉をしてみようとセシリアは初めから色々考えてこ

の場に足を運んでいる。
「鈴さんは、もう誰かと?」
「いや、まだだけどさぁ・・・」
鈴は口をとがらせる。
恐らく一夏とペアになれなかったことが、相当尾を引いているようだ。
セシリアはそのことを察すると、不敵な笑みを浮かべる。
「そんなに一夏さんと一緒がよろしかったのでしょうか?」
「だ、誰が!?そんな事一言も言ってないじゃないのよ」
誰に目から見ても明らかに動揺する鈴。
これはもう少しですわね。
「そうですわよね、いつもアピールしているのに一向に振り向いてくれない一夏さん。そのお気持ち分かりますわ、本当に悔しいですわね」
「う、うぅ」
図星をバンバン言い当てられて、気まずそうに小さくなる鈴。
「ですが・・・あのデュノアさんがいなければ、一夏さんは鈴さんに振りむいてくれたかもしれない」
流石に苦しかったかと肩目を開いて、鈴の様子を伺うがどうやら、気まずさとモチベーションの低下から、先ほどの言葉の不自然さには気が付いていないようだった。
ふぅ、危ない・・・。
デュノアさんは男の子でしたわね。
下手言って、ここでばれたら鈴とペアが組めなくなって不利になってしまう。
それだけは避けなければ。
「トーナメントで優秀な成績を残せば、一夏さんはきっと鈴さんに振り向いてくれますわよ!」
「・・・一夏が振り向いてくれる・・・・振り向いてくれる・・・
デュノア邪魔・・・デュノア邪魔・・」

しばらくして、うつろな目でそのフレーズだけを繰り返し始める鈴。
流石に吹っ掛けたセシリアも引くぐらいのシュールさだったが、セシリアはその鈴にとりあえずペンを持たせ、申込書にサインさせると足早に二組を後にした。
何にせよこれで、セシリアと鈴というある意味、最強のそれでいて、磁石の同じ極同士のデコボココンビが誕生した。

◇◆◇◆◇◆

それ言う？」
少なくとも鈴には、丸めこまれたっていう感覚はあるらしい。
だったら素直に納得すればいいのに。
「それに、別に覚悟決めたとか決めてないとか言うつもりないし。
始まったら代表候補生としてその実力を発揮するだけよ」
「その意気ですわ、鈴さん」
どうやらセシリーは、鈴になるだけ逆らわずに持ち上げて、丸め込まれたっていう事で生じるモチベーション低下を最小限に食い止めようとしているようだった。
「はぁ、わざとらしいのよあんた！」
「せっかく、人が褒めているのですから、少しは素直に受け取ったらどうですか！？」
・・・・どうやらそうでもないらしい。
鈴ははぁっと、ため息をつくと僕に質問する。
「まぁ良いわ、で、あたしらの対戦相手ってもう決まったの？」
「今、抽選会やってるんじゃないのかな、もうすぐ出ると・・・・ってえぇ！？」
タイミング良く表示される、トーナメント表。
それを見て僕だけじゃなく鈴やセシリーも同様に驚きの声を上げていた。
セシリーと鈴はＡブロックに振り分けられている。
そしてその一組目がセシリーと鈴だったのだ。
だが驚くべきはそこじゃない。
「一夏さんと、デュノアさんのペアが・・初戦ですのね」
「順当にいけばラウラと二回戦で当たる・・・」
ラウラと・・箒がペアになったのか。
あの二人、絶対に気なんて会うわけ無いよなぁ。
・・・・でも。
ラウラ・ボーデヴィッヒは、平気で生身の人間に向かって攻撃ができるほどの冷徹さを持つ人物だ。

そして、彼女はドイツの軍人。
並の操縦者など一蹴してしまうだろう。
そう考えると、セシリー達は一回戦を落としてしまうと、
仮に三位決定戦に回れてもラウラと戦えないことになる。
答えは簡単だ。
単純にラウラが強いからである。
「セシリー・・・」
「大丈夫ですわ、アル・・・・ほら」
「あんたそれ首にぶら下げて戦うつもり?」
セシリーは首にぶら下げていた?ストライク・バーディ?を掲げて見せる。
そしてそれをギュッと握った。
「アルと、お姉さんの思いは私が必ず証明してみせます」
「・・・ま、良いわ。あたしも友達やられて黙ってられるほど人間出来ちゃないし、あの女の顔面に一発入れてやるためにも、一夏達なんて瞬殺よ!」
セシリーに引っ張られる形で、鈴もどうやらモチベーションが復活してきたようだ。
二人とも、自信に満ち溢れた良い表情をしている。
?これよりAブロック第一回戦を開始します。参加ペアはピットにて準備を行ってください。繰り返します・・・?
場内アナウンスが聞こえ、セシリーと鈴の顔に緊張が走る。
出場しない僕でさえ、ピリピリした雰囲気に当てられて少し身体がこわばってしまうぐらいなのだ。
当の本人たちのそれは、ちょっと僕じゃ計り知れないだろう。
でも、だからこそ。こういう時だからこそ、楽観的に事を構えるのも必要なのだ。
「セシリー、鈴。スマイルスマ~イル。肩の力入りっぱなしじゃいい戦いは出来ないよ」
僕は言いながら、両者の肩を軽く揉む。

初めはやはり、身体が緊張していたが揉んであげるとすぐにほぐれてきた。
「あ、アル・・・私はその・・大丈夫ですわ！」
「あんたねぇ、あたしを誰だと思ってんのよ！」
頬を赤く染めるセシリーと、その手を振りほどこうとする鈴。
そうそう、そうやっていつも通りにね。
僕は肩から手を離すと、笑顔で彼女たちを見送った。

◇◆◇◆◇◆

ふん・・・初戦に雑魚とのつまらん戦闘が入ってしまったが。
まぁ良い。
私のすべきことに、変わりは無い。
織斑一夏を完膚なきまでに倒すことこそが、私のすべきことだ。
他になにも必要無い。
それだけを完遂すればいい。
教官に汚点を残したあの男さえ排除すればな。
ラウラは腕を組みながらチラッとペアになった箒を一瞥する。
「貴様、何やら張り切っているようだが、邪魔だけはするなよ」
「ふん、それはこちらのセリフだ。お前こそ油断して足元をすくわれないように注意しろ」
箒は、いつもの調子でだが少し威圧的にラウラに言い返す。
だがラウラはそれを鼻で笑う。
「はッ、笑わせてくれる。雑魚は雑魚らしくピットでボサっとして居ればいい。私がすべてやる」
「なんだと!!」
ラウラに詰め寄った箒だったが、逆にラウラによって足を払われると無駄のない動きで箒の胸倉をつかんだ。
「・・・・調子にのるなよ?邪魔をするなと言ったらするな。それが出来ないのら撃つだけだ。貴様ごとな」
ラウラは箒をまるでごみを放るかのように払い捨てると、一人ピットの扉へ消えた。
・・・・私は・・・あんな暴力の塊のようなヤツと、本当に失敗を犯さず。もう間違えずに力を振るえるのだろうか。
箒は以前束の開発したＩＳの所為で、家族と別々にされ執拗な監視と事情聴取。
かろうじて続けていた剣道も、本来心身を究め力の本質を見誤らぬ事が剣の道であったにもかかわらずそれを、ただの憂さ晴らしの道

具として考えてしまった時期があった。
今回のトーナメントでは、その間違いを犯さないように自分で自分んをしっかりコントロールするつもりだった。
だがペアがアレである。
箒はラウラを見た時、昔の自分とどこか重なる所を感じていた。
・・・駄目だ駄目だ！考えるな。大丈夫・・・大丈夫だ。
箒は自己暗示のように繰り返しながら立ち上がると、ゆっくりとピットへと足を進めた。
・・・そう、私は絶対に間違わない！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ワァァァァァァッと歓声の響く中、両ピットからそれぞれのＩＳが計四機飛び出してくる。
初戦から専用機持ち同士の対戦とあり、否が応でも注目が集まっていることは容易に想像ができた。
両者が互いに所定の位置へ、ＩＳを移動させる。
対峙するは一夏・シャルルペアとセシリア・鈴ペアだ。
「よく、お前たちが組む気になったな。水と油みたいなのに」
「誰が水よ！！」
「鈴さん、私が油ですの！？」
「アハハ、からかっちゃダメだよ一夏」
四人とも軽口を言いあう。
互いに緊張は程良くほぐれているみたいだった。
・・・絶対に、負けられませんわ。
この思いと共に・・・絶対。
セシリアは瞳を閉じて、またそのネックレスを強く握る。
すると一瞬、本当に一瞬だが何かそのネックレスが光った気がした。

（・・・なんですの、今のは）
セシリアは先ほどの感覚を考えようとしたが、試合開始のブザーがそれを遮った。
？Ａブロック第一回戦・・・・始め！！？
セシリアは頭を切り替え、飛ぶ。
？ブルー・ティアーズ？は射撃特化の支援に適した長距離戦ＩＳだ。
セシリアは、鈴が孤立しないように距離を取りながらもビットを巧みに使いながら
一夏達を牽制する。
「僕も忘れてもらっちゃ、困るな」
そこへ、早々に鈴を一夏に任せたシャルルが両手にアサルトライフルを展開してセシリアへ迫る。
「忘れてなどおりませんわ、むしろ一夏さんよりもあなたの方が厄介ですものね！」
セシリアは四機中二機を一夏側に振り分け、残りの二機と？スターライトＭＫ？？でシャルルを狙う。
ビットの弱点は、一夏に指摘された通り。
？このビットは毎回自分が指示をしないと動かず、更に一番感覚の遠いところを狙う？
これが相手に読まれた弱点だった。
だが・・・それなら。
仮に一度の事をいっぺんに考えることができるのならどうだろうか？
すべてのビットを、隙なく動かし尚且つ自分もしっかりと攻撃と機動、防御を行えたら？
・・・そして、今の自分にはそれができる。
今日の今日まで、じっくりと時間をかけて反復練習を重ねてきた。
練習はうそをつかない。
それにこれぐらいできて当然だ。何せ自分はセシリア・オルコットなのだから。
「なッ！くッ！？動きが・・一夏から聞いてたのと違う！？」

「私は代表候補生ですのよ！立ち止まってなど居られませんの！」
ビットと？スターライトＭＫ？？の驟雨がシャルルを襲う。
だがシャルルは笑っていた。
「・・・なんてね、そのぐらいの事は予測済みだよ」
シャルルは的確な操縦でその攻撃をかわす。
先ほどまでの焦りも、当たりそうな感覚も無くなる。
つまりシャルルは？わざと？焦ったふりをしていたのだ。
という事は、シャルルの実力はセシリアが考えていた以上に高いと言う事になる。
（・・・まいりましたわね）
セシリアに向かって今度は、シャルルがアサルトライフルを撃つ。
っく、私はこんなところで・・負けられませんのに！！
やがて、勢いを殺されたセシリアはシャルルに押され始める。
必死に回避と、隙あらば攻撃を繰り返すセシリアは、焦りながらも程良く冷えた頭で
打開策を考えていた。
必ず勝たねばならない。
自分のためにも。
そして何よりアルのためにも！
セシリアは駆る。
降り注ぐ銃弾の先にある勝利を目指して。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

気付けば鈴は、旨く一夏に分断されてしまった事に気が付く。
っく、このあたしが！
そしてそのことは、代表制ペアよりも相手のペアの方がコンビネーションに長けていると言う事でもある。
「鈴！いつかのリターンマッチになっちまったな！」

「ふん、一夏のくせに偉そうね！あの時見たいにイグニッションブーストで、奇襲するつもりなら無駄よ、二度も同じ手は食わないわ！！」

確かに鈴はあの時、一夏に完全に勝っていた。それは事実だ。

だが最後の最後、油断から招いた一瞬の隙を突かれ、乱入騒動が無ければ負けていたのも事実。

その苦い経験から、鈴は脅威である？イグニッション・ブースト？には細心の注意を払っていた。

流石の鈴のＩＳでも、？イグニッション・ブースト？で迫られてはとっさに避けようがない。

だが、鈴はさらなる懸念事項に襲われた。

（一夏の飛び方が・・・デュノアね！）

そう、あの時とは明らかに飛び方が違う。

ベースは直線的なのだが、所々でスピードに強弱をつけたり高低差を利用したりと、変化が見られた。

恐らく、この日までにデュノアと特訓に励んだのだろうと思われる。

でも・・・

「そのぐらいで勝てるなんて思わないことね！！」

鈴は？双天牙月？を振り上げ、突っ込んでくる一夏の？雪片？を正面から受け止める。

腕の振りに加えて、移動エネルギーも加わっていたのだが、それをもしっかり受け止めきれるだけのパワーが？甲龍？には備わっている。

「くそッ！やっぱパワーじゃ勝てないか！？」

「しっかりしなさいよ、男の子！」

鈴は、瞬間ほんの少し高度を上げ一夏を、？双天牙月？で下方向へ払うと？龍砲？で

一気に地面にたたきつけようとする。

「食らいなさい、流石に避けられないでしょ！！」

しかし鈴の？龍砲？は不発に終わる。

いや、不発というよりは鈴は吹き飛ばされたのだ。
鈴が見やるとそこには、いつのまにかセシリアを振り切り、こちらへ銃を向けるデュノアの姿があった。
（なっ、セシリアは！？）
鈴は素早くハイパーセンサーでセシリアを探す。
まさか、あのセシリアをもう落としたというのか？
「鈴さん勝手に、殺さないでください！」
声のした方を見やると豆粒サイズのセシリアが。
「・・・あんたこの距離をどうやって飛んできたの？」
「どうって、？イグニッション・ブースト？だけど」
さらりと言ってのけるが、鈴やセシリアは事前に出場者の目ぼしいデータには目を通している。
だが、デュノアが？イグニッション・ブースト？を使用できるというデータはどこにもなかった。
この状況で鈴はようやく理解した。
（この子、ヤバイ）
正直、一夏を先に自分が倒せると思っていた鈴は。考えを改める。
無理だ。
一人でこのコンビネーションを抜けるのは。
鈴は、周囲に構わず？龍砲？を振りまくとその隙を縫って、セシリアの元へ移動する。
「体勢を立て直した方がいいわね」
「・・・舐めておりましたわ。ですが・・・負けるわけにはまいりません」
一瞬の険しい顔の後、すぐに自信たっぷりな笑みをこちらへ返すセシリア。
だがそれは、鈴も同じだ。
こんなところで負けるわけにはいかない。
鈴はもう一度セシリアを見る。
「・・・セシリアあんた、これ出来る？」

鈴は手早く、アイ・タッチでデータを?ブルー・ティアーズ?へ転送する。
「これは・・・」
「出来るの?」
セシリアは、一瞬目を見開いて少し考える。
「・・・・・」
「あのコンビネーション。あたしから見ても大したもんだわ。特にあのデュノアが厄介。
一夏も、前に比べれば動きも良い。一人で個別撃破は難しいしリスクもデカイ。
でもこれなら二人が負うリスクは半々よ?」
「私，博打は好きではありませんが・・・良いですわ、やりましょう」
鈴はその返答を待っていたとばかりに、ニヤッと笑う。
「へマるんじゃないわよ、これはスピードとタイミングが命なんだから!」
「誰に言っていますの、私は・・セシリア・オルコットでしてよ!!」
鈴とセシリアが一気に敵へ加速する。
その行動にシャルルと一夏が身構える。
その様子を確認した鈴とセシリアは、不敵に笑いそして同時に高らかに叫んだ。
「「タクティクス?レイ!?」」

第１１話～水と油～（後書き）

日を増すごとに復興しようと頑張る東北地方と、日を増すごとにやばさを増す原発・・・・

どうもしるくです。
最近は若干暖かくなってきましたね。
僕は３月の頭ぐらいに、スタッドレスを外しましたが、夏タイヤがセミスリック状態というなんともまあ、ｄｙｎａｍｉｃな状況で、雨降ったら高速で車浮くんじゃねとか思ったり。

今では安いアジアンでもそこそこの、クオリティがあるので安心ですね。
それでは第１２話でお会いしましょう。
さよならっ！

第１２話～暖かい世界～

モニターで戦闘の様子を見ていた、千冬と真耶は鈴とセシリアの動きが変わった事にすぐに気が付いた。
「何か、するつもりでしょうか・・・」
「この機動は・・・？レイ？だな」
つぶやいた言葉に真耶が首を傾ける。
「レイ？」
「中国語で雷という意味を持つ、マニューバタクティクスの事だ」
機動戦術？雷？。
これは中国ＩＳ軍による機動戦術で、主に二機以上の僚機で行われる機動戦術だ。
高い機動技術と、射撃そして格闘戦闘が求められる高度な戦術だ。
「この戦術には、近接戦闘の技術も必要なんだがな」
「オルコットさんは、苦手としてますね・・・」
「・・・何か考えがあるのか・・・まぁ見せてもらおうじゃないか」
千冬はそう言うと、台の上にあったインスタントコーヒーを取り出しコーヒーを淹れ始める。
粉を入れ、ポットからお湯をカップへそそぐ。
「でも、織斑君たちのコンビネーションも結構な完成度ですよね。
凰さん達の作戦がうまくいっても落としきれるんでしょうか？」
千冬はコーヒーを淹れる作業を中断してモニターを見やった後、麻耶に向き直る。
「山田君、確かにデュノアと織斑は動きは良いが、これがそのまま実戦で使えるかと言えばノーだ。
あくまでこれは、トーナメント用に作った付け焼刃みたいなものだろう。
だが？レイ？は違う。元々実戦の中で考え出された、戦術なのだよ。
だからこの一戦・・・？レイ？を完璧にあの二人がこなせれば、織

斑たちは負ける」
そこまで言い切ると千冬は、コーヒーを作る作業へ戻る。
えぇと・・そうだ砂糖を・・・。
「・・・でもそこまで言っても、やっぱり織斑君の事心配してるんですよね！やっぱりお姉さんだなぁ」
そうだ、塩を入れよう。
千冬は塩を？適量？コーヒーの中へ落とす。
そしていつも以上に笑顔で麻耶に近づいていった。
そこでようやく麻耶は自分の、失言に気が付いた。
千冬が身内の事で弄られる事を嫌っていたのをすっかり忘れていたのだ。
青ざめる麻耶だが、もう遅い。
「山田君、君の好きな塩入りコーヒーだ。ちゃんと適量測って淹れたぞ？」
「い、いや・・その塩適量って言うのは・・・それに私そんな好物」
「飲みたまえ」
「あ、いや、でもあの織斑先生がお飲みになられたら・・わざわざ手を煩わせるのも・・・ッ」
「・・・・・飲め」
「はい」
麻耶は苦みと辛みが混在する、おおよそコーヒーとは呼べない代物を涙目ですすった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「鈴、突っ込んでくるなんてヤケにでもなったのか！」
「一夏、あんた油断してるとマジで怪我するよ？」
さっきまでと明らかに、雰囲気の違う鈴の声を聞き一夏は、身体に

緊張が走る。
鈴はそのままこちらへ突っ込んできていた。
一夏はそれを受け止めるために、?雪片?を構え、シャルルはそれを迎撃すべくコンビネーション機動を開始する。
「凰さん、何をするつもりかは知らないけどやらせない！」
シャルルは瞬時に武装をリアルタイムで変更する。
その速さから鈴にはすぐにあれがシャルルの?ラピッドスイッチ?という特技である事に気が付く。
（・・・なるほどね、ほんと器用だわ・・・でも）
鈴はそのまま?双天牙月?を一本に連結させ一夏に突っ込む。
一夏はそれをなんとか受け止めると、やすやすと後ろを取ったシャルルがそれを狙う。
だがそこへセシリアのビットの一斉射撃が降り注いだ。
「おっと」
シャルルはそれをヒョイッとかわすが次にシャルルが見たものは、一夏を?龍砲?で吹き飛ばした鈴が自分の真正面にいる光景だった。
鈴は再び?双天牙月?を使いシャルルに切りかかる。
「うっくッ！」
シャルルは手に持っていたライフルでなんとか受け止めたが、いかんせんパワーが違う。
鈴はさっきと同じ要領で?龍砲?を発射しシャルルを吹き飛ばすと、また今度は一夏の方へとその衝撃をも加速に使って一気に肉薄。追うシャルルをセシリアのビットが襲う。
マニューバタクティクス?レイ?は、このように、同じ動作同じ攻撃を寸分たがわぬタイミングで行う機動戦略である。
?敵陣を光のごとく駆け抜ける姿、まさに雷のごとく?という事から?レイ?と名付けられた本戦術は、本来なら、一撃離脱のできるＩＳの方がより効果的である。
だがこの場合、セシリアはのＩＳは機動力は一般的だし近接武器をほとんど持っておらず、また苦手としているし、鈴のＩＳもそこま

で高いとは言えない。
だから動き回る約を買って出た鈴はそれを?龍砲?の発射衝撃を反動にして、言ってみれば疑似的なブーストで補っているのだった。
そして援護側にまわったセシリアは、寸分たがわず性格無比な射撃で動きを制限し、こちらもこちらで疑似的な一対一の構図を作り上げていく。
セシリアは縦横無尽に動き回る鈴を見て、改めて感嘆の声を漏らす。
「鈴さん・・・中々やるではありませんか。代表候補生はやはり伊達ではありませんのね」

鈴の動きは非常に速くしかも、正確に相手を旨く払える位置に?双天牙月?を撃ちこんでいる。
これにはシャルルも、手をこまねいて見ているしかなく、かといって攻撃の隙があっても動き回る鈴を旨くとらえきれず、セシリアはセシリアで必ず相手の上、出来るだけ太陽を背負いながら射撃を行ってくる。
いくらハイパーセンサーがあるとはいえ、逆光で正確に射撃を当てるだけの技術はまだ流石のシャルルに備わっていなかった。
「このままじゃ!」
「あぁ、やべぇ!!」
始めて二人の口から、焦りの言葉を聞いたセシリアと鈴はたたみかける。
「鈴さん!」
「あんた、あわせなさいよ!!」
鈴は再び一夏へとその進路を取る。
だが今回はセシリアの援護が無い。
そこへなぜ援護が無いのか、疑問に思いながらも、シャルルが割って入った。
「やらせない!」
それを見て口元を緩めた鈴。

鈴は一気に高度を上げる。そして背後から現れたのは？ブルー・ティアーズ？の一極集中射撃だった。
そう、鈴はギリギリまでセシリアの放った射撃を隠していたのだ。
「しまった！？」
避けるすべなく、その攻撃に直撃するシャルル。
そしてシャルルに一瞬気を取られた一夏に？双天牙月？と？龍砲？
そしてビットの一斉射撃が襲う。
反応して防御でもされれば火力不足だっただろうが、ろくに反応も出来ず一斉掃射を浴びた後、トドメの一撃が鈴によって再度振り下ろされた。
「ぐあぁぁっ！！」
激しく地面にたたきつけられる？白式？と三枚のマルチ・スラスターを欠きマルチウェポンラックは、誘爆を起こしたのか吹き飛んでいる？？ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を尻目に、
悠々とアリーナへと降り立つ二人に、勝利を告げるアナウンスが流れた。
？試合終了！Ａブロック第一回戦勝者セシリア・オルコット、凰鈴音ペア！！？
鈴はセシリアの方を向くと、右手を挙げる。
始めはきょとんとしていたセシリアだったが、すぐにその意味を理解したのか同じように手を挙げた。
「ま、中々だったじゃない」
「そちらこそ、まずまずですわね
軽口を言って互いにニッと笑う。
そして・・・ガシャァンッ！
人間で言う所のパァンッという、ＩＳ同士の無機質な、だがどこか心地のいいハイタッチ音がアリーナにひと際大きく響いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

まさに、水と油の融合ってところかな。
僕は通路のリアルタイムモニターで、観戦してそんな感想を持った。
程なくして、ピットからセシリーと鈴が帰ってくる。
「お疲れ様」
僕は勝っておいたスポーツドリンクを二人に手渡す。
「アル、助かりますわ」
「ん、サンキュ」
二人は、ゴクゴクッとスポーツドリンクを口にする。
そしてセシリーは上品に、口を飲み物から離し口周りに付いた水分をタオルで拭き取る。
一方の鈴は、飲むとくぁ～～やっぱ、動いた後はスポーツドリンクよねぇ～！と言いながら、こぼれるのも気にせず、勢いよく口から離した。
飲み物一つ飲む動作でもこれほど違う二人が、さっきまで寸分たがわないコンビネーションで
相手を圧倒したのだから、面白い。
「あ、そういえばあいつ・・ラウラはどうなったの？」
鈴の質問のセシリーも頷きながら、こちらに無言で質問を投げかけてくる。
気になるよね、やっぱり。
「まさか、負けたとかはありませんわよね」
「そうだね、終わったよ。さっきスタッフの人・・・まぁ教員なんだけど、その人に聞いた」
「で、どうなったのよ！？」
じれったいなぁと言わんばかりに鈴が、こちらに詰め寄ってくる。
それをセシリーが、鈴の首根っこを引っ張って、無理やり引き離した。
「近いですわよ！！！」
「うっさいなぁ、気になるでしょうが。それにあたしはね、あんたみたいに邪な考え持ってないの」

「よ、よよ、よこしまですって！？」
やっぱりこの二人は水と油だ。
仲良く笑いあえる日は来るのだろうかと心配してしまうが、いくらなんでもここで騒ぐのはまずい。
「まぁまぁ、二人とも。ここで騒ぐのは、ね。結果は言うからさ」
鈴はボソッと早く言いなさいよと言い、セシリーとの言い争いを切り上げる。
セシリーは、その後も少しジト目で鈴を見ていたが鼻を鳴らして、そっぽを向く。
・・・大丈夫かなぁ。
また色々考えてしまう僕に鈴がまた迫る。
「だから早く言えってのー！」
「分かった分かったよ！　ラウラの試合は箒の出番なく終了。相手の二人は保健室送りだってさ」
僕は聞いた事を一言一句間違えずに伝える。
そして、結果を聞き鈴とセシリーは首をかしげた。
「あの箒って子が手を出さなかったの？・・・あんな性格の強い子が？」
「確かに妙ですわね・・・。箒さんは言われても脅されても絶対それに従うような性格ではありませんし・・・」
「あぁ、違う違うそうじゃなくて、箒は試合開始早々、ラウラに敵ごと吹っ飛ばされたんだよそれで壁に打ちつけられて、駆動部を破損した？打鉄？を交換しに行ってる間に終わってたらしいんだ」
「・・・・・何よそれ」
「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・・何と言う事を」
二人とも絶句するしかなかった。
だがそれが真実なのだ。
これで二人にも、ラウラの冷徹で非常識だってことは理解してもらえたと思う。
「で、落ち込んでる所悪いけど、策はあるのかい？正攻法で行って

勝てる相手じゃ・・」
言いかけた僕を、鈴が遮った。
「ふふんッ、あんたねあたしたちをなんだと思ってるの？」
「私たちも、代表候補生。彼女に劣っているとは思っておりませんわ」
「でも・・」
「あーもう、あんたは黙って勝つこと祈ってなさい！」
鈴は、大声で早口にまくしたてると、更衣室へと消える。
それを見送り、僕はトーナメント表に目を落とす。
ラウラ・ボーデヴィッヒ。
・・・相手を保健室送りに。
一瞬だがセシリーと鈴が、そうなる映像が頭をよぎりそれをかぶりを振って、かき消す。
だが、そうは言っても心配だ。
「・・・大丈夫ですわよ。私も鈴さんも」
唐突にセシリーがつぶやいた。
「え？」
「だから大丈夫ですわよ、私たちは。それに私に至っては、これがありますもの」
セシリーはそう言って笑いながら、？ストライク・バーディ？を首から外す。
「私は一人で戦ってなどいません。鈴さんもいますし、ここに二人も私を後押ししてくれる人がいる。だから大丈夫ですわ。必ず次も勝ってまいります」
「セシリー・・・」
それだけを言い残し、鈴同様に更衣室へと姿を消すセシリー。
・・・そうだ、
僕は信じて応援するしかない。
心配しても仕方ないんだ。
僕はここで、二人が勝つのをただただ祈る。

それが今僕に出来る唯一の事だから。
その時、ほんの一瞬意識が遠のきかける。
「わわわッ!?」
力の抜けた足がバランスを崩させ、僕はなんとか壁の手すりにつかまって転倒だけは回避する。
・・・な、何だ今の？
僕は、その症状の正体をつかめぬまま、きょとんとした顔でまるで答えでも探すかのようにキョロキョロと辺りを見回していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「お前ッ!!!」
箒はピットでラウラの胸倉をつかんでいた。
だが掴まれているラウラの目は冷めきっている。
怒っている自分が馬鹿らしく思えるほどに。
「味方ごと吹き飛ばすなど、何を考えているッ!」
「言ったはずだ、私は邪魔をするなと」
「邪魔だと!?相手の動きを抑えていたのだ、それが邪魔だと言うのか？」
「誰もそんな事、頼んでなどいないだろう」
さらりとそんな事を言われて、更に逆上する箒。
「いいか、お前と私は今はペアだ！　お前一人で戦っているつもりか!!」
「・・・・あぁ、いつでもそうだが」
箒は絶句する。
それと同時に、するっと手の力が抜けラウラが箒の元を離れる。
・・・こんな、ここまで。
箒はラウラを睨むが、既にその姿は消えようとしていた。
そこへ、次の対戦相手の情報が届く。
箒は、息を整えると口を開く。

「おい、次の対戦相手が決まった様だぞ」
「そんなもの、私の方にも届いている」
「・・・・良かったな、一夏ではなくて」
箒の意味深な言い方に、ラウラは目じりを若干上げながら戻ってきた。
「どういうことだ?それはつまり私が、あの男に負けると言いたいのか?」
箒は、ペアを組んで恐らく初めてではないかと思うラウラの苛立つ声を聞いた。
だがそれに臆することなく箒は、はっきりと言う。
「あぁ、そうだ。お前は一夏には勝てない」
「なんだとッ!」
今度はラウラが箒の胸倉をつかむ。
その目は、鋭く刃物のようだった。
「貴様・・・何を根拠にそんな事を言う?」
「根拠だと、笑わせる。そんな事も分からずに一夏に勝とうとしていたのか。そんな事ではセシリア達にすら勝つことはできないな」
ラウラにはその意味が理解できない。
なぜだ?
ISの性能も、実力も、そして力も。どれ一つとして自分はあの?代表候補生コンビ?に劣ってなどいない。もちろんあの男にだって。
なのになぜそんな、出任せが言える!?
「分からないのか、本当に?」
箒の少し憐みの入った声をラウラは鼻を鳴らして反論する。
「・・・・ふん、そんなもの分かる必要はない」
そうだ、分かる必要などない。
要は勝てばいい。圧勝だ。
それ以外必要はない。
あの男が負けてしまったから、?合法にあの男を始末する手段?は無くなってしまったが、

それでもチャンスはいくらでもある。
ラウラは考えを切り替えると、箒をら手を離し、無言でその場を後にした。
それを箒は、どこかさみしそうな目で見送るのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

予定時刻になり、両ペアがアリーナに姿を現す。
だがそこに第一線の様な、和やかな会話は無い。
「・・・・やはりあの男は雑魚だったか」
ラウラは誰に言うでもなく吐き捨てる。
それに鈴が噛みついた。
「少なくとも、あんたよりは強いわよ、一夏は」
「ほう、だがあの男はお前たちに負けたようだが？」
「別に私たちは、一夏さんに勝った負けたという話をするつもりはありませんわ。だってあなたは既に一夏さんに戦う前から負けているのですから」
セシリアの言葉にラウラは目を細めた。
「またその話か、あの女にも同じことを言われたが、お前たちはよほど現実と言う物が見えていないようだな」
「はん・・・どっちが」
「・・・・はぁ」
鈴はそれを鼻で笑い、セシリアは呆れてものも言えなかった。
試合開始のカウントダウンが始まる。
しばらくの沈黙の後、試合開始のブザーが響いた。
「はあぁぁぁッ！」
鈴は、ラウラへ一気に距離を詰める。
だがラウラはそれを微動だにせず待っている。

そして、?双天牙月?をラウラの首元へ一気に付きつける・・・が。
「なッ!!」
「・・・ふん、こんなものだろう」
?双天牙月?はラウラに到達することなく、見えない何かによって遮られそれから先へは全く動かない。
ラウラは余裕の笑みで鈴を受け止めると、ワイヤーブレードを射出し、鈴の足にそれを巻きつける。
「しまっ!」
「落ちろ」
冷たく言うと同時に鈴を襲ったのは、全身へのすさまじい衝撃だった。
意識が飛びそうになるのを何とか繋ぎとめ、鈴はすぐさま体勢を立て直し一旦下がる。
「あれは・・・」
「ＡＩＣ・・・アクティブ・イナーシャル・キャンセラー・・・・これほどとは」
ＡＩＣは理論上鈴の空間圧縮砲撃?龍砲?の空間圧作用にたエネルギーで運用されていると考えられた。
そうだとするなら、同じ圧縮攻撃の鈴の?龍砲?はあのＡＩＣとかなり相性が悪い事になる。
セシリアにもそのことは分かったようで鈴へ叫ぶ。
「鈴さん!先に箒さんを無効化しましょう、ラウラさんは私が引きつけますわ!!」
鈴には中近距離の武装しかない。
ＡＩＣがある以上、近づくのは得策ではないだろう。
だがこちらには遠距離用の武装が数多く搭載されている。
仕留めきれなくても、牽制で行くばか時間はつなげるはずだ。
「分かった。あんた・・・気をつけなさいよ」
「えぇ、そちらこそ」
それに二つに分けたのにはもう一つ理由がある。

それはこの手の相手には、？レイ？は使えないからだ。
？レイ？は相手が僚機の危機に救援に訪れ、お互いのＩＳの距離が近くなることで
初めて発動できる戦術だ。
だが、今回の相手は、箒はともかくラウラは箒を助けることはしないだろう。
そうなるとどうしても中で動く距離が増えてしまい、
？レイ？の真髄である？素早い攻撃？が間延びしてしまう。
「ふん、イギリスの第三世代機か・・・・。だがいくらＩＳが良かろうと乗り手がクズでは意味が無い！」
ラウラは、腕部からプラズマ手刀を出現させこちらに急接近してくる。
（安い挑発に乗っては命取りですわ・・・しっかりと距離を取る事が最優先ですわね）
セシリアは冷静に判断し、ラウラと一定の距離を保ちながらビットや？スターライトＭＫ？？で牽制しながら、チャンスをうかがう。
どうやら、単純な機動力は相手の？シュヴァルツェア・レーゲン？よりも？ブルー・ティアーズ？の方が高いらしい。
セシリアはチラッと、鈴と箒を見やる。
箒は？打鉄？で、なんとか鈴の攻撃をやり過ごしてはいるようだが、
それでも、もうしばらくすれば決着は付くだろう。
それまで、自分はこの化け物を引きつけなければならないのだ。
セシリアはラウラに視線を戻すと、ラウラのほぼ死角に待機させていたビットに発射の指示を送る。
この角度ならば、いくらハイパーセンサーがあるとはいえ！
・・・だがラウラはそれを難なく回避したばかりかビットをそのプラズマ手刀で切り刻む。
「くぅ、やりますわね・・・」
「つまらんな・・・この程度で第三世代とは」
一言一言がセシリアの神経を逆なでする。だがここで熱くなっては

ダメだとセシリアは
自分に必死で言い聞かせながら、三機のビットと射撃を繰り返す。
だがそのどれもが、難なく回避される。
「・・・・もういい、終わりにしよう」
セシリアの顔に嫌な汗が流れる。
ラウラは、先ほどまでとは全く違う機動で飛び、気が付いた時には目の前にいた。
「まさか・・・！」
「私が初めから本気でやっているとでも思ったか、お気楽な頭だな」
ラウラはセシリアのビットをまたたく間に、プラズマ手刀で破壊すると、ワイヤーとＡＩＣによって動きを止められたセシリアに向かって肩の大型レールカノンを向け間髪いれずにそれを発射した。
ドカァァァァンッ！！
爆風が、熱波がセシリアを覆う。
そしてすぐに、地面にアリーナの側壁に何度も叩きつけられる。
そうして、何度か振り回した後、ラウラは意識の遠のくセシリアにプラズマ手刀を付きたてた。
「・・・・死ね」
そう言えばセシリアはこれに似た感覚を既にどこかで味わっていた気がした。
どこだったかと、記憶を探る。
そう、あれは・・・・黒いＩＳと戦った時だ。
自分のミスで、もうあの時は命は無いと思った。
・・・・でもその時彼が・・・嘘つきな彼が助けてくれたのだ。
そうだ・・・助けられたのだ。
自分は彼に・・・・。
そして今度は・・・自分の番だ。そう彼に言ったではないか！！
こんなところで終っていはずがない！！
終れない！！
セシリアの強い思いが、飛びそうな意識を何とか繋ぎとめる。

セシリアは足に絡みついたワイヤーブレードをビットの攻撃で切り、なんとか脱出する。
「はぁっはぁ・・・ダメージは・・・」
セシリアは一息ついたところで、シールドエネルギーや各部の損傷チェックを手早く行う。
シールドエネルギーはまだ余裕はあるがそれでもイエローゾーン。
武装はビット四機中二機が大破。
残りも中波と中々のボロボロ加減だ。
手持ちの？スターライトＭＫ？？はまだ大丈夫だが、これだけでは火力が圧倒的に足りない。
（・・・きついですが・・・やるしかありませんわね）
セシリアはグッとネックレスをつかもうとして・・。
「あ、あら・・・な、無い！？」
セシリアは何度も見直すがどこにも、アルから託されたネックレスが見当たらない。
そんな、一体どこへ！？
セシリアがキョロキョロとしていると、ラウラが上から声をかけた。
「貴様が探しているのは、ひょっとしてこれか？」
ラウラは右手をかざす。
そこには確かに？銃弾のネックレス？があった。
「なんでそれをあなたが！」
「さぁな、さっき飛んで来たのだ・・・大事な物の様だな？」
ラウラはそれを、ヒョイッと上に投げると――――――――
――――――――プラズマ手刀で真っ二つに切り裂いた。
「すまん、手が滑ってしまった」
真っ二つになって落ちていく、思い――――意志。
そしてその瞬間セシリアの中で何かが振り切れた。
「あなたは・・・・あなたはぁッ！！！！」

もうシールドエネルギーや武装の破損状況などどうでもよかった。
ただ、あの女を、自分のそしてアルの、ローラのその意志を軽々しく放り投げ、切り、笑ったあの女を
セシリアは許せなかった。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」
セシリアは？スターライトＭＫ？？を撃ちまくりながらラウラへ突撃する。
だがそんな攻撃もラウラには簡単に避けられてしまった。
そしてラウラはすれ違いざまに、残っていた武装とスラスターすべてを――――破壊した。
大きな爆煙に包まれた？ブルー・ティアーズ？が落ちていく。
先ほどなんとか繋ぎとめた意識も、もう限界だった。
・・・私、こんな・・・。
終ってしまった。
あっけなく。
薄れゆく意識の中でセシリアは後悔の念にさいなまれていた。
結局何も・・・出来なかった。
無力な自分に涙が出てくる。
セシリアは次に包まれるであろう地面への冷たい衝撃を覚悟する。
だが、次にセシリアを包み込んだのは冷たさではなく、暖かさだった。
身体の奥から、心の奥から、暖かいものに包まれていく感覚。
そしてどこからか声がする。
『セシリー大丈夫だよ』
その声は、とても優しくて。
『僕が、ついてる』
その声は、とても暖かくて。
『あはは、酷い顔だなぁ・・そんな顔似合わないよ』
その声は、とても明るくて。
『ほら笑って』

その声は、とても――――
『うん、その顔がやっぱり一番あってる』
心強かった。
そして次第にその声の主が姿を現す。
彼は自分に対して手を差し伸べていた。
彼はニコッと笑うと、セシリアに向かって優しくささやいた。
「行こう、セシリー」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あれ？
僕は・・・それにここは？
確か僕は、通路でモニタリングしてたはずなのに・・・
僕はキョロキョロと辺りを見渡すが、そこは綺麗な光の世界だった。
そう、光だ。
僕の目は色盲のはずなのに、それが鮮明に見える。
そこは、心地いい暖かさと、優しさに包まれたような世界だった。
・・・一体ここは。
「あは、来ちゃったね、来ちゃったね、ね、ね、ね？」
唐突にその空間に、底抜けに明るい女の子の声が響く。
その女の子は、ブロンドの髪を後ろで束ねて青いパーカーにオレンジのラインの走ったジーパンというラフな格好。
更に顔にはスポーツタイプのサングラスをかけていた。
身長は・・・僕よりも少し低いかな？
「あの、ここは・・・」
「んん？分からずに来ちゃったパターン？うぬぬ・・これは予想が～い」
その女の子は、小さな身体をめいいっぱい使って、とび跳ねたりしゃがんだり・・・とにかく動き回る子だった。

「分からずにって言うか、気が付けばって感じかなぁ」
「ふ～ん・・・・まぁいいや」
いいんだ。
「で、ここは何処なんだい？」
「う～ん・・・・・天国」
「はぁっ！？」
「えへへ～うっそ～」
うっ・・なんだこのキャラは。僕にそっくりじゃないか・・・。
特に嘘を付くところなんて特に。
少女は腕を頭の後ろで組み、二カッと笑う。
「まぁ、細かいことは気にしない。それより心配はあの、ですわ姉ちゃんだよねぇ～」
ですわ姉ちゃん？
・・・・・あ、そうだセシリー！
「セシリーはどうなったの？確かラウラに・・・・あぁ、もうッ！！」
「まぁまぁ、落ち着きんしゃししゃいボーイ」
「これが落ち着いてられるって言うの！？」
僕は思わず少女に詰め寄ってしまうが、少女は笑みを絶やさず僕にこう告げた。
「大丈夫だよ、彼女は」
「・・・本当に？」
「うん、これは本当」
「でも・・・」
それでも心配な顔をする僕を、少女は優しくなでた。
「大丈夫大丈夫、ちゃんと君は彼女の力になってるよん」
「え、力に？」
「そう、時に思いや意志は世界の理を覆すのさぁ！！」
少女はバッと手を勢いよく上にかざした。
それで何が起きるわけでもないのだが。

「ま、大丈夫だよ彼女には?君?が付いてるからね」
「僕?」
「そう、僕。だから大丈夫」
・・・意味はよく理解できないが、だかそれでも感覚では、なんとなくわかってきているようにも思える不思議な感覚が僕を支配していた。
少女はくるりと僕にきびすを返し、二、三歩あるいたところでこちらをニヤッとした顔で振り返る。
「君ってさ、あの子の事好きなの?」
「んなっ!」
いきなりの質問に顔が真っ赤になる。
それを見て少女はまた大きな声で笑うと、最後にこう言った。
「今度は答えを持ってきてね」
その答えというのが一体何を指すのか、考えるひまさえ与えられず急激に僕の意識はホワイトアウトしていく。
そして僕の意識は心地の良い風と暖かな世界に優しく包まれていった。

第１２話～暖かい世界～（後書き）

明日名古屋に出来たリニア鉄道館へ行ってきます。

何気に趣味は車だったりします、しるくです。

最近はやたら家の周りの開発が進んでいるのか整地やら家を建てるやらで、トラックが行き来しており、正直家から出にくいですｗ
そのおかげでセルフヒッキーに（爆ｗ

まぁ、そんな感じ・・・
では１３話でお会いしましょう！
さよならっ！

第１３話～強さと一夏とラウラ・ボーデヴィッヒ～

アリーナでは、鈴が、箒が、観客が、そしてラウラが、信じられない現象を目の当たりにしていた。
ラウラはセシリアを撃破したと思い、その姿を追わなかった。
だが、次の瞬間ラウラを強い衝撃が襲う。
その衝撃は思いのほか強く、ラウラはアリーナの隅の方まで飛ばされてしまった。
初めは、油断していたところへ鈴の？龍砲？が当たってしまっただけかと思ったがそれにしては？あきらかに火力が違い過ぎた。？
少なくともラウラが事前に目を通した？甲龍？のデータでは、確かに？龍砲？の威力は高かったものの、この？シュヴァルツェア・レーゲン？をここまで吹き飛ばす威力は無かったはずだ。
では・・・何が？
とラウラは、センサーで攻撃が来た位置を割り出す。
そして目にした光景に今こうして、驚いているのだ。
「・・・・なんなのだ、それは！？」
そして叫んだ声に呼応するように鈴と箒もそれにつられて視線を移動させ、同じように驚く。
観客も同様だ。
なぜならそこには、先ほどラウラが完膚なきまでに破壊した？ブルー・ティアーズ？がいたからである。
いや、厳密には？ブルー・ティアーズ？がそのままの形でいたわけではない。
かろうじて稼働できるビットが一機に、砲身が切られ短くなった？スターライトＭＫ？？と満身創痍ではあったがたったひとつ、異なる点があった。それは？ブルー・ティアーズ？には無かった、長方形型の大きな火器内臓スラスターが？あたかも、初めからそこに付いていたかのように思えるほど、自然に背部に搭載？されている事

だ。
そしてそれはまさにアルディの？ストライク・バーディ？の？ウェポンスクエア？そのものであった。
「貴様・・・っく、イギリスの第三世代にこんな隠し玉があったとはな」
「隠し玉・・・えぇまぁそうですわね・・・。
ですがそんな考えではやはり私達にはあなたは勝てない」
苦々しく言い放つラウラに、セシリアはニヤッと笑い意味ありげな口調で言い返す。
セシリアは、先ほど拾った？ストライク・バーディ？のネックレスをかざした。
それはラウラに真っ二つにされ痛々しい切断痕をその身に刻みながらも、ほんのりと温かく光っていた。
更にその光に、共鳴吸うかのように？ブルー・ティアーズ？も同じような温かい光を放って・・・・。
いや・・・・。
その光に、包まれていた。
温かい黄金色の光に。
セシリアは、自分の身に何が起こったのか、理屈ではなく感覚で分かっていた。
理屈では説明が付かないと言う事も。
あの時聞こえた優しい声も、温かさも。
そして、今この自分のＩＳの姿も。
そして、自分には？彼が付いていてくれる？ということも。
セシリアは、胸の奥にこの上ない温かさと優しさを感じながらラウラと対峙する。
「・・・あなた、先ほどまでの考えで飛び込んできますと・・・・」
セシリアは、自信に充ちた表情でラウラを睨むと高らかに告げた。
「負けますわよ！」
「黙れ、死に損ないがッ！！」

ラウラは再びセシリアへ急接近する。手には先ほどと同じようにプラズマ手刀を起動させている。
しかし、もうセシリアに焦りは無かった。
セシリアは先ほど撃った？ウェポンスクエア？の高圧荷電粒子砲を格納するとラウラを正面でとらえ、？スターライトＭＫ？？を構える。
砲身長が短くなっている分、威力は半減しまた狙いも定まらない。
「そんなもので！」
ラウラも、一瞬でそのことは見抜いたようで避ける必要もないと言わんばかりに直線コースでセシリアへ突撃してくる。
だがセシリアは構わずにトリガーを引いた。
？スターライトＭＫ？？がマズルフラッシュと共にレーザーを発射する。
だがやはり砲身長の足りなさで、初速が足りずラウラに到達するまでに意地限界を超え霧散するレーザーも少なくなかった。
しかし、それでも尚セシリアは焦りの表情一つ見せない。
「ふぅ・・・やっぱりそのままではまともに射撃ができませんわ」
余裕たっぷりに？スターライトＭＫ？？を持ち直しそんな軽口までたたいた。
ラウラはその行動が癇に障ったのか、更に激昂してセシリアに切りかかる。
気付けばラウラはセシリアの目の前まで接近していた。
「叩き潰してやろう！」
「その前に・・・私を捕まえてごらんなさいな！」
ラウラがプラズマ手刀を振った瞬間、目の前から黄金色の粒子を舞い散らせながらセシリアが消えた。
むなしく空を切る自分の攻撃に、一瞬なにが起きたのか分からないラウラはセシリアと対照的に焦りの表情を浮かべる。
「馬鹿な、今の攻撃に反応しただと！データ上では？ブルー・ティアーズ？にあんな機動性は！？」

キョロキョロと辺りを見回すラウラに真上から?ウェポンスクエア?の高圧荷電粒子砲を再展開したセシリアが笑って声をかける。
「データ、データですわねさっきから!」
「なっ!?」
気が付いた時には、ラウラは地面にたたきつけられていた。
高圧荷電粒子砲。別名?ヘヴィハンマー?。?ウェポンスクエア?の中でも最も高火力な二門の直撃を受けラウラは肩のレールガンが爆散していた。
先ほどセシリアがなぜ、ラウラの攻撃を避けられたのか。
それはこの?ウェポンスクエア?の強大な推進力のたまものだ。
元々重量級の?ストライク・バーディ?用のスラスターだけにそれよりも軽く軽量な?ブルー・ティアーズ?がそれを使用すれば、ラウラがデータで見た機動力を凌駕することなど簡単な事だった。
もちろん既にこれが、データで推し量れない事ではあるのだが。
そしてこの?ウェポンスクエア?はただ機動力のためだけにあるのではない。
「本来は、立つまで待つのがマナーなのでしょうけれど」
セシリアは再び狙いを定める。
「その前に、あなたのマナー違反を正して差し上げますわ!!」
それからは降り注ぐ?ヘヴィハンマー?の雨あられ。
ラウラは防御で手いっぱいになってしまう。
「ぐうッ・・・がはっ!!!」
やがてその攻撃に、他の?ウェポンスクエア?の武装である小型バルカン?ファイアスピード?そして小型ミサイルポット?トーネイド?もその攻撃に加わる。
そしてラウラに、防御シールドを抜けた攻撃が通り始め、苦しむ声が聞こえる。
しかしセシリアは撃つ事をやめない。
当然チャンスだと言う事はある。
だがそれ以上にセシリアは許せなかった。

彼を笑ったラウラが。
彼の意志を笑ったラウラが。
そして何より、一度は彼の意志を粉々にしてしまった自分自身が。
それなのに彼は、自分をまた助けてくれた。
温かな気持ちに自分を包みながら。
だから・・・だから！
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
最後のラッシュが始まる。
もうペース配分もペア戦と言う事も、何も考えてなどいない。
ただその意識はたったひとりの敵へと向けられている。
「フィニッシュです！！」
ズガアアアアアアアアアアアン！！！！！
ひと際大きな爆煙が、アリーナの砂煙を巻き上げ、辺り一面の視界を奪う。
もうすでに、砂煙が晴れる前から誰の目にも明らかだった。
観客も、鈴も、箒も。
――――――セシリアが勝ったと言う事は。

◇◆◇◆◇◆

教官のレベルに対して明らかにここの生徒たちはレベルが低すぎる、次元が違う！」

「だから、私がここで教師をするのは間違っていると？」

「そうです、教官！お願いです、もう一度ドイツでご指導を！」

千冬は肩目を閉じたまま、ラウラを睨み黙ってラウラの言い分を聞いている。

だが次にラウラが言った一言が千冬の逆鱗に触れる。

「大体、こんなところで何を・・・・・・・あ、織斑一夏・・・ですか？」

「何？」

「そうなのですね、やはり・・・あの男が教官を――――――ッ！？」

千冬はラウラの胸倉をつかむと、近場の気に押し付ける。

千冬の鋭い眼光にあてられ、ラウラは今までの勢いを失い小刻みに震えはじめた。

「いいか、小娘。いくらお前が激昂していようと言っていいことと、言ってはならん事がある。

それに私は別にあの馬鹿な弟のためにここで教鞭を振るっているわけじゃない・・・わかるな？」

「で、ですがッ！！」

「いい加減にしろ小娘。世の中何でもかんでも思い通りになるとでも思っているのか！？

見ないうちに随分増長したな」

千冬は胸倉を持つ手をパッと離すと、冷たいまなざしでラウラを射抜く。

「げほげほっけほ・・・」

「とにかく私は、ドイツへは帰らんし指導もしない。分かったらとっとと寮にでも戻れ」

千冬はそれだけ言い残すとラウラを置いて、歩いていってしまう。

ラウラは、それをいまだにせき込んで苦しい身体で見送ることしかできなかった。

だがそこでラウラは気が付く。
そうだ、そうなのだ。
教官は私を試しているのだと。
そうに決まっている。
私がどれほど、成長したのかを確かめようとしているのだと。
それにきっと、教官の事だ。
図星を言い当てられて、照れ隠しにでもあんな事を言ったに違いない。
どこまでも、千冬に憧れるラウラにとって先ほどの千冬の態度は、そう写ってしまっていた。
そして、やはり自分が睨んだ通り、教官は弟である織斑一夏を疎んじているのだ。
・・・それならば。
・・・私がやってみせる。
織斑一夏を完膚なきまでに叩きつぶせば、きっと教官は喜んでドイツへきてくれるはずだ。
・・・そう、はずだ。
それなのに・・・・・

それなのに・・・・!!!
ラウラは一機に現実へと引き戻される。
愛機である?シュヴァルツェア・レーゲン?はシールドエネルギーはおろか武装すらほとんどが使えない状態。
しかも、それをやられたのが織斑一夏なら、まだ負けを受け入れやすかった。
だが自分をこんなのにしたのは、あのイギリスの妙なＩＳだ。
あの女に・・・!!
あの女が!!!
すべてが狂ってしまった。
あの女があの男を倒したから、自分はあの男と戦う事が出来なくな

ってしまった。
あの女も邪魔だ。
そう邪魔だ・・・邪魔なんだ。
私は・・そうだ、私は邪魔な物を倒して、あの男つぶして教官とドイツへ帰るのだ!!
そうだ・・そのための力だＩＳは。
お前たちとは何もかもが違う！
覚悟も、誇りも、意志も!!!
ラウラは身体を動かそうとするが、ＩＳからバチバチッと火花が飛び力が入らない。
えぇい！なにをしているのだ!!!
力なら力らしく、私の欲する力を与えないか!!
その時ラウラの中でドクンッと何かがはじけた。
その直後ラウラの身体へ、すさまじい力の奔流が駆け巡る。
・・・なんだあるのではないか。
そうだ、それでいい!!
力こそが強さだ!!
そうさ、私は!
私は教官と一緒にドイツへ帰るのだ。
力だ、力!!
力を私によこせ!!!
絶対的な力を、私によこすんだ!!!

Ｄａｍａｇｅｌｅｖｅｌ　Ｄ　ｏｖｅｒ
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　Ｕｐｌｉｆｔ
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　ｃｌｅａｒ

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》　ｂｏｏｔ

◇◆◇◆◇◆

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！」

ラウラの咆哮ともいうべき声がアリーナに響き、ゆっくりと立ち上がった？シュヴァルツェア・レーゲン？の周囲を火花とも電撃ともとれる閃光が包む。

「な、なにあれ・・・」

いつしか箒との戦闘を早々に切り上げ、箒と共に近くに、来ていた鈴がつぶやく。

だがセシリアにも答えが見つからない。

次第に？シュヴァルツェア・レーゲン？は黒いドロッとした塊となってラウラを包んでゆく。

セシリアの時は、ＩＳの武装展開と同じように？ウェポン・スクエア？が光に包まれて現れたがそれとは全く違うラウラのＩＳの？異変？。

やがてその黒い何かは、ラウラを包み一つの形へと固定されていく。

顔は、今まで無かったバイザーで覆われ、あれほど無骨な外観は全体的にシャープになり、その手には得物であろう一つの刀が握られている。

そしてその刀は、色こそ真っ黒だったが、どこかで見たことがあるフォルムだった。

「あれは・・・」

「雪・・・片よね」

嫌な汗がセシリアにも、鈴にもそして箒にも流れる。

あれが本当に雪片なら・・・相手は？零落白夜？を使えると言うのか。

仮にそうだったら、これは最悪だ。

セシリアは先ほどのラッシュで、シールドエネルギーまで？ウェポンスクエア？に持って行かれほぼ空。

鈴も箒も、激しく打ち合っていたため残っているといっても、セシ

リアよりも少し残っているかいないかといった程度だった。
そんな心もとない状態で、あんな化け物と戦うなど自殺行為だ。
だが、そんなこちらの気など関係ないと言わんばかりに、
形成を終えた?ソレ?は一瞬でセシリアたちの前に飛び込んできた。
「え!?」
「馬鹿な!」
「ちょ、あんた速すぎ!!!」
箒と鈴を?ソレ?はなぎ払うと中腰に刀を構え、必中の間合いから
鋭く放たれる一閃。
セシリアは、かろうじてそれを回避するものの、攻勢に転じようと
?ヘヴィハンマー?を展開し終える前に?ウェポンスクエア?ごと
武装を真っ二つにされてしまう。
なんとか残った片方のスラスターで間合いは取ったものの、このま
までは負ける・・・いや殺される。
だが、やるしかない。
鈴や箒も立ち上がって、?ソレ?と対峙している。
しかし、そうはいっても皆限界だった。
ことセシリアに至っては自機のほぼすべての武装が満足に展開でき
ないばかりか、
もう後一度接近のためにバーニアでも噴かそうものなら、その時点
でエネルギーが底を尽きる。
それでも相手は止まらない。
箒が切りかかりそれを鈴が?龍砲?で援護する。
箒は相手の刀を旨く下にはらい隙を作ると、そこへ鈴が一本にした
?双天牙月?を叩きこむ。
今しかない。
セシリアは、現在残っているエネルギーを?ヘヴィハンマー?に回
すと最大出力で発射した。
ズガァァァァンッ!!
やはり、出力不足か・・・。

先ほどと同じく舞う砂煙。
それと同時に、リミット・ダウン。
セシリアのＩＳは光となって消滅した。
でも・・・・
「直撃したはず・・・はぁっはぁ・・流石に落ちたでしょ」
当たる瞬間に箒を引っ張って離脱した鈴が、腰に手を当て言う。
「・・・流石にあれで経っていられるはずが・・」
箒も、勝利を薄々感じてはいた。
だが、次の瞬間、我が目を疑いたくなるような光景が目に飛び込んでくる。
砂煙の中から勢いよく？ソレ？が飛び出して来たのだ。
「そんな！！」
誰が叫んだか、三人も分からなかったがそれはどうでもいい。
二人は満身創痍で一人はＩＳを展開すらできない状態。
・・・すなわち・・・絶望。
そしてそんな三人に向かって、死の太刀は振り下ろされた。
皆が、目をつむる。
そんな事をしても、助かるはずなど無いと分かっているのに。
しかし、次に三人が聞いたのは身を割く生々しい音ではなくガッ！！という鉄と鉄がぶつかり合う音だった。
「てめぇ、やらせねぇよ！！！」
バッと顔を上げた先にいたのは半壊状態の？白式？を駆る一夏だった。
「一夏、あんた何やってんのよ！」
「お前どこから入ってきたんだ！？」
「お身体は大丈夫なんですの！？」
三者三様に叫ぶ中、一夏はのんきに返す。
「大丈夫だって、白式のダメージレベルはＢ。起動制限も掛けられてないしな！！」
一夏は敵の刀をはじくと、セシリアを小脇に抱え距離を取る。

そして一定の距離を確認するとセシリアをアリーナの隅へと下ろした。
「一夏さん？」
「お前に何かあったら、アルディになんて言われるか分かんねぇからな。じっとしてろよ」
一夏の言葉にボッと顔が赤くなるセシリア。
「な、何を言ってますの、全く！！」
「ハハハッ・・・それよりもありゃ一体何なんだ？」
冗談めいた笑みから一転、鋭い顔になる一夏。
キッと敵を睨む眼光は、やはり千冬の弟なのだという事を思わせた。
「・・・わかりませんわ、ただ急に叫んで気が付けば」
「・・・そうか」
一夏はチャキリッと雪片を持つ手に力を入れる。
そして一気に敵との間合いを詰める。
「はっ！」
一夏が切りかかるが、？ソレ？は瞬時にスラスターを噴かし距離を取ると再びセシリアを襲ったあの一閃を繰り出す。一夏は構えた？雪片弐型？を弾かれると更に敵は上段の構えへと移る。
一夏はそれをなんとか、かわすが一夏の顔はさっきまでとは違っていた。
かわせて良かったという、安堵の表情では無い。
一夏の顔には、激しい怒りが渦巻いていた。
「お前・・・・！お前ぇぇぇ！！！」
頭に血が上ったのか、何の考えもなくただ突っ込んでいく一夏。
その一夏を前の戦闘で、愛機が破壊されたシャルルが？打鉄？を装備して止める。
「一夏！ダメだよッ！！」
「離せ、シャルル！あいつは・・・あいつはぁッ！！！」
更にそこへ箒も加わる。
「落ち着け一夏！一体何だと言うのだ！！」

「箒まで！いいから離せよ、邪魔するなら箒もシャルルも――――ッ！？」

パッシーーーン！

一夏の頬を強い衝撃が襲う。

それと同時に頭が冷えていくのが分かる。

「ほう・・・・き？」

「私もなんだ？　落ち着け一夏！どういうことなのだ！」

「・・・あれは・・・あの太刀筋はあいつが使った太刀筋は、千冬姉のものなんだ！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――――――――ここはどこだ？

さっきの力の奔流を感じた後、その闇は更に暗くなった用に感じる。

ぼんやりとだが、何かが見える。

これは私の視界か？

白いＩＳが黒いＩＳ二機と何かを言い争っている。

あれは敵だろうか。

・・・敵だな。

そうだ敵だ。

倒さないと。

倒さないと教官と一緒に帰れない。

そうだあれは？織斑一夏？だ。

そうに決まっている。

視界が急激に速くなる。

どうやら私は、白いＩＳに接近しているようだ。

倒せ、倒せ、倒せ、倒せ。
それ ばかりが頭の夏で響く。
だが、次の瞬間白い閃光が私を包んでいった。
そして瞬時に理解する。
私は・・・アレに負けたのだと。
笑ってしまうぐらいにあっけない。
・・・なぜだ。
私は強くなったはずだ。
この力を経て。
なぜなんだ!!!
「なぜ!!!」
そう叫ぶ私に誰かが話しかけてくる。
『お前は強くなってなんていない』
「誰だ?」
『お前が一番よく知ってるだろ』
「織斑一夏・・・」
『あぁ、そうだ。お前さっきなんでって叫んでたよな』
「・・・・」
『その力はお前の力だったのか?』
「なに?」
私の・・・力?
そうではないのか、だって私はその力で・・・・
「私はその力で、強く・・・」
強くなったのではないのか?
『・・・強さってのは、そんなもんじゃない』
私の疑問をあっさりそいつは否定する。
『強さってのは、心の在処。拠り所。自分がどうありたいのかを常に思うことじゃないかって思う』
「――――そう・・なの・・・・・か?」
『少なくとも、俺はな』

「おれ・・・・は？」
『みんな違うと思うぜ、そんなの』
私はこれまで、たったひとつの物だけが強さだと思ってきた。
それこそ？織斑　千冬？であり、その強さの具現である彼女の汚点であるこの男を、
この弱い男をつぶせばいいと思っていた。
だが違う・・・。
この男は・・・・
「お前は強いのだな」
『強くないさ』
「いいや、強い」
『そうか・・・まぁそうだとすれば』
「だとすれば、何だ？」
『強くなりたいから強いのさ』
――――――あぁそうか。
『それにやってみたい事もある』
――――――これが強さか。
『誰かを守ってみたいんだ』
――――――これが力か。
『だから、お前も守ってやるよ、ラウラ・ボーデヴィッヒ』
――――――これが織斑一夏か。
確か昔、教官が言っていた。
この男と対峙する時は気をしっかり持てと。
出なければ惚れてしまうと。

なるほど。
その意味がわかった。
これは確かに・・・・

――――――惚れてしまいそうだ。

◇◆◇◆◇◆

「別名、感応覚醒というが、まぁ知らなくて当然だろうな、私も初めて見た」
「はぁ」
腕を組み、淡々と話す織斑先生に僕は生返事で返す。
僕が倒れたそれが、？トランス？ってやつなんだろうか。
「昔、束に聞いた事がある。ＩＳは人の強い思いや意志をもくみ取って成長するものだと。
そしてその意志が強いと、たまに何かをきっかけにして親しい人間のＩＳと同調する事があるそうだ。まぁＩＳ自体完成されていない技術だからな、定かではないが」
織斑先生は語尾を濁したが、つまり僕の思いがその？トランス？を引き起こしたってことでいいのかな。
「具体的に、どんな感じになるんです？」
「ふむ、見てもらった方が早いかもしれんな、もうそろそろ視界もはっきりしてきたころだろう？」
頷く僕に、織斑先生は、端末を取りだすと僕に映像を見せる。
そこには？ウェポン・スクエア？を駆使して戦うセシリーの姿が映し出されていた。
「な、なんですかこれ・・・・」
「見ての通りだ。さっきの説明通りならば、オルコットのＩＳとお前のＩＳが感応しあった結果、
と言う事になる」
言うと織斑先生は、真っ二つになったネックレスを僕に手渡した。
うわぁ・・・こりゃ酷い。
ちゃんと起動できるのかなこれ・・・。
「オルコットから預かった。お前これをオルコットに預けていたそうだな」
「はい・・」
「多分そのせいだ。オルコットはこれを首から下げて試合に臨んだらしい。その時何かしら作用して？トランス？が起きたようだな」

「・・・・そうですか」
何かしら作用してか・・・・。
ひょっとしたら、あの時。
僕はラウラに完膚なきまでに負けたセシリーを見て、居てもたっても居られなかった。
心配だったのだ。
でも何もできない。
待つことしかできない自分が腹立たしかったし、セシリーは傷だらけで。
その後だ。
僕が意識を失ったのは。
・・・強い思いと意志か。
なるほどね、なんとなくそう考えると納得できたかも。
「さて、納得できた所でお前には色々聞かねばならん事があるな」
ぎくぅッ!!
僕は一瞬で背筋が凍るのが分かった。
「まず一つ目だが、聞いた話ではボーデヴィッヒと、このトーナメントで戦う約束をしていたようだな」
・・・あ、なんだそのことか。
「はい」
「なぜだ?お前は自ら喧嘩を吹っ掛けるようなヤツでは無いだろう」
「姉さんを・・・・馬鹿にされたから」
「・・・・ローラをか」
織斑先生は言うとため息をついた。
その顔からはやれやれと言う感情が読みとれる。
なんだか、また馬鹿にされてるのかな。
ムスッとする僕に織斑先生は、少しあわてた様子で弁解した。
「いや、悪いな、別にローラを馬鹿にしているわけじゃない。
ボーデヴィッヒの事だ。あいつはドイツからの縁でな。
私になついてくれるのはありがたいが、それが行きすぎてしまうこ

ともしばしばなのだ。
そう悪く思わないでやってくれ」
「・・・まぁ、もういいですけど」
僕はそこまで根に持つタイプじゃないし。
「それと、もう一つ。お前自分のＩＳを他人に預けることが何を意味するのか分かっているんだろうな」
やっぱりねぇ。
言われるよねそれ。
僕は今までの良い感じで、ゆったりと流れていた空気が一転するのが分かる。
「その顔は、分かっているという顔だな。なら話が早い。明後日までに反省文とレポートを提出しろ」
織斑先生は、持ってきていた紙袋をベッドの横の台に置く。
ズドン！
・・・何が入ってるんだろうね。
なんだか凄くいやな音が・・・って言うかあれは紙の音か！？
「ではな、私はボーデヴィッヒの様子も見ねばならん」
織斑先生は、きびすを返すといきなりドアに向かって歩き出す。
そして、ドアノブに手をかけ・・・一気に開いた。
「ちょ、っとっと・・・きゃんッ！」
ドシーンっと何かが倒れ込む。
顔から床に打ちつけられてピクピクと痙攣していたのは・・・
「せ、セシリー・・・」
「ろ、ろふほ・・・」
鼻がしらをさすりながらろれつの回らない声で、挨拶をするセシリー
それを見て織斑先生は、フッと笑って部屋を後にした。

「大丈夫？」
「急に開くと思いませんでしたわ・・・」

セシリーはまだ鼻がしらをさすっていたが、ろれつは回るようになってきたらしい。
って言うか・・・
「ドアの前で何してたの？」
「い、いやそれはッ・・・その・・・・。先生方にアルが倒れたと聞いて・・・心配で」
なるほど心配してくれていたのか・・。
ダメだなぁ、僕が心配されちゃうなんてね。
本来ならベッドで寝てなきゃいけないのはセシリーのはずだろうに。
いつも通りの制服を着てはいるが、その下は包帯だらけだろう。
その証拠にさっきこちらへ歩いてくる時も足を少し引きずってたし。
「アハハ、大丈夫だよ。僕は・・・それよりセシリーは良いの？」
「私は、大丈夫ですわこのてい・・・・つつつ・・・」
気丈にガッツポーズを作ろうとしたらしいが、それは激痛によって阻害されてしまったようだ。
苦痛で歪む顔を、ベッドから上半身を起こした状態でなんとか覗き込もうとする。
だが、セシリーは更にうつむいてしまい、顔を伺う事が出来ない。
よほど痛かったのだろうか。
「あの・・・セシリー？」
「大丈夫ですわ、大丈夫・・だからその・・・顔がその近くて」
言われてハッと気が付く。
僕が覗き込もうと躍起になって、セシリーの顔に急接近していた事に。
「あ、ご、ごめん」
「いえ、その嫌だったというわけではありませんのよ・・・ただ・・こちらにも準備と言う物が・・」
最後らへんゴニョゴニョ言って聞こえなかったけど、何にしても大丈夫だったらしい。
ただ、それから少し変に意識してしまい両者無言の時間がしばらく

続く。
な、何か前にもこんなのあった気がするけど、やっぱりこう言うの気まずいよなぁ。
とはいえ、だからと言って言葉が出てくるわけもなく、更に黙りこくってしまう。
どうしようか・・・えぇっと、何か話題・・・話題・・・あぁそうだ。
「その、ごめんね。必死で戦ってくれてたのに僕だけなんかこんな・・・横になっちゃってたみたいで・・・応援すら出来なくて・・・」
ひねり出した話題が、結局トーナメントの事だとは・・。
僕ってひょっとして、ボキャブラリーやコミュニケーション能力が実は低いんじゃないかな。
だが僕のそんな急場しのぎ的な話題に意外にも、セシリーは優しく笑ってこう言った。
「いえ、アルあなたは私と、戦っていましたわ」
「え?」
「声が・・・聞こえましたの。?僕がついてる?って。
その声が私にどれほど勇気を与えてくれたか・・・。
たとえあれが幻だったとしても、私は信じます」
そう言えば織斑先生はこう言っていた。
?オルコットはこれを首から下げて試合に臨んだらしい。
その時何かしら作用して?トランス?が起きたようだな?
と。
当然だが、僕には、セシリーに試合中に声をかけたなんて記憶は無い。
だがセシリーは声が聞こえたと言っていた。
・・・これが?トランス?・・・・。
なかなか神秘的な現象じゃないか。
僕は優しくそれでいて、どこか照れくさい笑みを浮かべるセシリーを見る。

「・・・そう、じゃあ僕は役に立てたんだ？」
「それはもう、温かいものに包まれるような。そんな心地のいい感覚でしたわ
貢献度から言えばペアの鈴さん以上ですわね」
「それ、鈴が聞いたら怒りそうだね」
「フフフっそうですね」
二人で夕暮れの中笑いあう。
とりあえず、何が起きたかは良いや。
今はこの時間を楽しもう。そうだ、それが良い。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うぅッ・・・」
「お前も目が覚めたらしいな」
ラウラが気付いた事を察し千冬は声をかけた。
「教官・・・・？」
千冬は、まだ焦点の合わないラウラに質問する。
「寝起きのところ悪いが、ラウラ。ＶＴシステムの事は知っているか？」
ゆっくり千冬の顔を見るラウラ。
その目はまだどこか、怯えているように千冬には写った。
「・・・怒っているわけではない。まぁその顔を見る限り認識はしているようだな。そのシステムが巧妙に隠されお前のＩＳに積まれていた」
ラウラは下を向く。
どうやら、どこまで言っても自分はあの国にとって実験動物でしかないらしい。
その事が更にラウラを苦しめる。
「・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「はいッ！？」
いきなり名を叫ばれ、ラウラはビクッとなりながらぼんやりする頭を叩き起こすとベッドの上で背筋を伸ばした。
「お前は誰だ？」
「わ、わた・・しは・・・」
誰だ。
私は、ラウラ・ボーデヴィッヒで・・ドイツ人で。
たったそれだけの事が出てこない。
「・・・お前はラウラ・ボーデヴィッヒではないのか？」
「い、いえあの・・私は・・・・」
「ボーデヴィッヒ。私は転校初日にこう言ったな？貴様は今日から私の生徒だ？・・・と」
ラウラは記憶を漁る。
確かに言われた。
確かあれはアルディとかいうアメリカ人にペットボトルを投げつけられた時だ。
「私にとってお前は、どうあれ大事な生徒だ。それは変わらん。では自分ではどうだ？」
「自分・・・」
「・・・それが分からんのなら丁度いい。今日からお前はＩＳ学園の一生徒、ラウラ・ボーデヴィッヒとして新しい自分を始めてみろ」
「新しい・・・自分」
そんな事考えたことも無かった。
そんな事言われるなんて考えたことも無かった。
新しい自分を始められるなど。
これまでもこれからも、ずっと一人で暗い中を歩いていくんだと思い込んでいたラウラには、
まさに青天の霹靂だった。
「出来るでしょうか・・・」

「出来る出来ないは、今考えることじゃない。それにな、出来るか出来ないかではない。これはお前自身が絶対にやらなくてはならないことだ」

・・・・出来る出来ないでは無い。

・・・・・やらなくてはならないこと。

「まぁ、とことん悩め。小娘」

千冬は言い残し、部屋を後にしようとする。

だが、二歩三歩歩いたところで立ち止まる。

疑問に思ったラウラに千冬が、口を開く。

「そう言えば、サウスバードといざこざを起こしたそうだな」

「サウス・・あの男ですか」

「何でもあいつの姉を馬鹿にしたと聞いたが」

そこでようやくラウラはピンっときた。

アリーナで言いあったあの男だ。

「私は話の前後を知らんからな。下手な事は言えんが・・・ローラは強いぞ。

口は軽いし、嘘つきだがな。それに・・・・・」

ラウラは言葉を黙って聞く。

千冬が？ローラは強いぞ？と言った時、ラウラは自責の念と恥ずかしさでいっぱいになった。

あの時は、織斑千冬がすべてだった。

だからあんな事も軽々しく言えた。

しかし、私が馬鹿にした相手は私の恩師も認めるほどの人間だった。

そして逆に私がそれを言われる立場だったら、どうなっていたのだろう。

私があの男の立場なら。

大人しくトーナメント出場を辞退しただろうか。

そんな事を考えてしまう。

・・・・謝らないと・・・・な。

ラウラは、再び千冬の話に耳を傾ける。
そして驚愕の一言を聞いた。

「あいつは、私に一度勝っている」

第１３話～強さと一夏とラウラ・ボーデヴィッヒ～（後書き）

ＩＳの痛車ってこれから増えるのかな。一台も見ないけど。

どうもしるくです。

今回は少しダラダラと書きすぎたような・・・

そんな気がします。

そう言えば、今日ネットニュースで見たんですが水の生産が追い付いていないそうですね・・・・。

そりゃそうでしょうねぇ。

こちらの方にまわってくるには、まだまだ時間がかかりそうです。

・・・そうそう、どこぞのＴＶ局では震災レポートに言ったレポーターがマイクやカメラ入っていないと勘違いして「オモシレー」とか言っちゃったみたいです。

馬鹿ですねぇ・・・。人間性疑います。

・・・そんな感じ。

ではまた１４話でお目にかかりましょう。

さよならっ！

第１４話～姉さんとセシリー＝買い物？～

翌日。
おぉう。
目の前で朝っぱらから。
ここは教室。
現在ＳＨＲ中。
今日は驚く事が朝から多い。
まず、シャルルが意を決したのか、シャルロットとなって再転入してきた。
女子として。
うん、どうやら自分で選択したみたいだね。
良かった良かった。
それは・・・良かったんだけど。
もう一つが問題だ。
・・・・。
あ～・・・・。
どーも目のやり場に困ると言うか。
実はシャルル・・・いやシャルロットが戻ってきて、彼女を女と知らないはずがないって理由で
現在は意外と修羅場だったりする。
一夏がね。
二組からはＩＳを展開した鈴が乱入し、箒は真剣をすらりと抜き放っている。
で、鈴が一夏に？龍砲？をぶっ放したんだっけ。
でもそれを、何を思ったかラウラが止めて・・・・
「んんっ・・・・ん」
「・・・・・・・・！！！！！？？？？」

このあっついキスだ。
アメリカでもまぁ、中学生辺りはもうしてたよ。
僕は経験ないけど。
もう一分はこうしてる。
そしてようやく口を一夏から離すとラウラは、叫んだ。
「織斑一夏！お前を今日から私の嫁とする、異論は認めん！！！」
それは朝っぱらから、地獄の宣告だったよ。

修羅場のＳＨＲが終わり。
・・・今日はすべての一組と二組の授業が自習になった。
理由は簡単だ。
鈴が、箒が、ラウラがそして良識あると思っていたシャルロットまでが、教室を壊しに壊してしまったからである。
さて・・・自習って言っても結局まるっと休みになったのと変わんないんだよなぁ・・・。
ちなみに今僕はひとりだ。
他の人たちは、こってりと織斑先生に絞られ、いま教室の修復作業を手伝っている。
それも人力でだ。
・・・良かった、僕に飛び火しなくて。
それでなくても、レポートと反省文があるっていうのに。
「あら、アル」
「あぁセシリー」
廊下でばったりと遭遇する僕たち。
偶然って言うのは、あれだね凄いね。
「どこへ行かれますの？」
「うん、いや別にぶらぶらしてただけだけど」
本当にぶらぶらしていただけなんだよね。

行くあてもないとはこのことだ。
だからと言って教室には戻れないし、部屋に行っても・・・・部屋？
「セシリーは？どこか行く予定あるのかい？」
「いいえ、私も暇を持て余していたところですわ」
ふむ、だったら丁度いいね。
「セシリー僕の部屋に来るかい？」
「はいぃッ！？」
声を裏返しながら叫ぶ。
そんな驚かなくても・・・。
ん、驚いたのかな。
セシリーの顔がなんかゆでダコ見たいなんだけど。
「あの、セシリー？」
「あ、いや、でもほら、何事にも順序と言う物がですね、あって。
だからその・・・・・」
どんどんなんでかパニックになっていくセシリー。
どこに、パニックになる要素があったのだろうか。
そうして何秒か、矢継ぎ早に言葉を発した後、セシリーの頭がオーバーヒートしたようだった。
「きゅう～～～」
ボンっと言う音が聞こえてきそうなほど真っ赤になった顔でその場で気を失うセシリー。
うわッ！
僕は倒れるセシリーの身体を支える。
・・・と、とりあえず。
保健室・・・・はぁ・・・・。
・・・あの目で見られるのか。
急にあの保健の先生の目が思い浮かぶ。
あの目はいやだなぁ・・・。
よし、部屋に運ぼう。
僕は、セシリーをお姫様だっこで持ち上げると部屋まで急いだ。

途中、何人かの女子に「あーーーー！！！」って言われたけど、
今はそれどころじゃないんだ！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あ、ううん・・・。
額に何か冷たい物がのっている感覚がある。
ゆっくりと、目をあける。
まだ視界はぼやけているが、どうやらどこかのベッドらしい。
そう言えば私は・・・。
アルに部屋に来るかと言われた後の記憶が無い。
えぇと・・・私は・・・一体。
「あ、目が覚めたセシリー」
この声は・・・アル？
・え！・・・アル！？
急速に覚醒していく頭。
それと同時に頭が多くの情報や記憶を整理していく。
・・・・まさかここは！！
ガバッと身を起こす。
それと同時にまた頭がクラッとした。
「あぁ、いきなり起きあがっちゃだめだよ。血が頭までしっかり回らないから貧血症状が出るよ？」
「あぁ、あの私は・・・その」
セシリアは、ポスッとベッドに横になるとアルディが布団をかけながらセシリアの疑問に答えた。
「びっくりしたよ、急に倒れちゃうんだから。放置するわけにもいかなかったし部屋まで運んだんだ」
「そ、そうですの」
平静を装ってはいるが、はっきりってまた頭の中はパニックだった。

運んだ!?
私・・・重くなかったかしら・・・じゃなくて!!
えぇと、そのだから・・・はぁ。
にしても、なんて言うことでしょうか・・・
まさかそんな失態を・・・。
セシリアは恥ずかしさのあまり布団を両手で上に引っ張り、顔半分うずくまる。
ふぅ、でも部屋まで運んで・・・・部屋?
・・・・あれ?
「アル・・・よく私の部屋が分かりましたわね、鍵開いてました?」
「何言ってるさ、よく見てごらんよ。ここは僕の部屋だよ。
セシリーの部屋に無断で入るわけにいかないでしょ、相部屋の人もいるわけだし」
「なっ!?」
で、ではここここ、これはあ、アルの・・・ふ・・布団!?
セシリアはまた顔が真っ赤になる。
今うずくまっている、この布団がアルの布団・・・・。
そう思うと、セシリアは急に恥ずかしさですぐに出なければと思う気持ちと、でももう少しアルの布団にくるまっていたいという気持ちがせめぎ合う。
「まぁ、体調がすぐれるまで横なっててよ、別に今日は二人とも用事ないわけだしね」
その言葉が、セシリアの後者の気持ちを後押しし、セシリアは結局その後しばらくアルディのベッドで布団にくるまり続けることにした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

セシリーがまだ起きないけど、仕方がない。
準備だけは先にやっておこう。
・・・・準備って言ってもね。
繋ぐだけなんだけど。
僕はＰＣを起動させる。
そしてネット通話を起動する呼びだすのは姉さんだ。
程なくして姉さんにつながる・・・・って、おい。
映し出された画面では姉さんが・・・・寝ていた。
・・・・いくら今日が休みだって言ったって、気を抜き過ぎじゃないかなぁ・・・。
僕が言えないけど。
そこに写っていたのは、おおよそ世界二位の座をつかんだＩＳのパイロットとは、
思えないあられもない姿の姉さんだ。
映像の壁紙からして自宅でこれは寝室だろう。
姉さんは、昔から下着姿で寝る。
今回もその例にもれず下着姿でしかも、かぶっていたんであろう布団をまぁ見事に蹴飛ばしていた。
姉さん・・・・。
これは何が何でも起こさねばならない。
少なくとも、起きたてのセシリーが見たら僕は間違いなくまた吹っ飛ばされる。
「・・・・ね、姉さん！」
とりあえず出来る限り大声で姉さんを呼ぶ。
反応が無い。
えぇい、クソ！
「姉さん！！」
今度は少し大きな声。
『ううん・・・・うあ・・？』
あ、少し反応した。

よし、もう少し・・・・。
「起きてよ、姉さんってば！」
『うぬゅう・・・もう少し・・・』
うぬゅうって何！？
いいからもう起きてよ！！
「姉さん、起きてって！！」
くっそーーー起きない・・・・！！！
画面越しだから、何もできないが目の前にいたら叩いてるところだ。
流石にイライラして来た僕は、思わず大声で叫んでしまった。
「起きろーーーーーーっ！！！！！！」
「何をしてますの？」
「いやだから、起きなく・・・・・・・・・せ、セシリー」
しまった・・・。
あまりに起きないから、セシリーが立っている事に気が付かなかった。
そしてセシリーがモニターを確認する。
・・・うわぁ・・・・良い笑顔。
その血管さえなければ、見とれてたところだ。
スッパァァンッ！！！
・・・案の定叩かれた。
『あはは、あなたも大変ねぇ』
誰の所為だい！？
ってか、起きてたのか・・騙された。

「信じられませんわ、私が寝ている間に、そ、そのアルがそのような映像を！」
セシリーは腕を組み、ムスッとした顔で椅子に座っている。
「だから、これには深いわけがあるんだ」
「どんな理由がおありですの？」
うぅ・・・こ、怖い。

下手な事言っちゃだめだな。
って言うか、別に隠すことじゃないよね。
「・・・はぁ、セシリー。これ僕の姉さんなんだ」
「・・・・え？」
一瞬できょとんとした顔になるセシリー。
そして、画面に向かって問いかける。
「お姉さんなんですの？」
『違うわよ』
「・・・・アルゥ～～！？」
何言ってんだよ！！この状況でその嘘はいらないんだってば！！
僕はあわてて、セシリーにフォローする。
「違う違う！本当に姉さんなんだってば！！！」
『私、こんな人、しらない』
知ってるでしょう！！
更に眼光鋭くなるセシリーに半分涙目の僕を見てようやく姉さんが
本当の事を言ってくれた。
『ウフフッ、面白いわねやっぱり。弟弄りって癖になりそう』
「え、じゃあやっぱりあなたは・・・」
『えぇ、私はローラ・サウスバード。アルディの姉のね』
ようやく納得したようなセシリーを見て、僕はホッと息をつき、へ
ナヘナと部屋の床に座り込む。
全く、何だってこんなに疲れなきゃいけないんだ・・・。
っていうか姉さん・・・頼むから上の服ぐらい着てよ。
そんな事を考えいるうちに、察しのいいセシリーが気付いたようだ。
「あの、アル？私を連れてきた理由ってひょっとして・・・・」
そう、彼女を僕の部屋に招待したのは、姉さんと会わせるため。
まぁ連れてきた方法はともかくね。
前にセシリーの話をした時、言われたんだよね。今度紹介してくれ
って。
『あたしがあなたに会いたいって言ったのよ。それであなたがセシ

リアちゃんね』
「は、はい」
『ふぅん・・・・』
姉さんはまじまじとセシリーの顔を見ている。
実のところ姉さんは、セシリーがあの女性実業家についてきた少女と言うことぐらいしか覚えていないらしい。
それも幼いころだから、今の成長したセシリーは初めてみるのだ。
「あ、あの・・・」
『綺麗ね、アルディもそう思わない？』
「え！？」
いきなり話を振られてびっくりしてしまう。
完全に油断していた・・。
『アルディ、失礼よ』
「ご、ごめんなさい・・・」
姉さんはセシリーの方を向くと、なぜかしみじみとした顔で腕を組んだ。
『あなたも、苦労するわね・・・』
「・・えぇ、それはもう」
なんで？
なんであの二人は、そんなところで共感しちゃってるの？
互いにうんうんと頷きながら、話はまたセシリーの事へと戻っていく。
『そう言えば、セシリアちゃんアルディのＩＳコーチしてくれているそうね、どうかしら弟は』
「そうですわね・・・」
これは僕も興味あるね。
顎に手を当ててしばらく考えているセシリーの横顔を僕は、ジッと見つめる。
そしてセシリーコーチの短評が始まった。
「アルは基礎的な事、つまり射撃に対する適正は高いと思いますわ。

ただ、ＩＳの特徴をつかんだり、何かを感じ取ったりという感覚的な部分はまだまだ未熟と言わざるを得ないかと・・・まぁ、このあたりは経験を積んでいくしかないと思いますけど」

・・・・なるほど。

つまり

『応用の効かない鈍感男ってことかしら』

「・・・ま、まぁ簡単言ってしまえば・・・そう・・・ですわね」

姉さんのド直球な物言いに若干濁すセシリー。

あのね、僕だって傷つくんだよ。

『でもまぁ、基礎がそこそこしっかりしているのなら、まぁ良しとしましょう』

一応姉さんから及第点のコメントは出たが、次の発言が僕を焦らせる。

『それと、アルディ。最近?ストライク・バーディ?からデータが送られてこないんだけど・・・・

何かあったのかしら?』

これにはセシリーも僕同様にビクッと身体が反応した。

「あ、いやぁ～・・・その」

「えぇと・・・・」

僕はセシリーと、一旦姉さんのモニタリング出来ない位置へサッと移動すると、声をひそめる。

「どうしよう、セシリー・・・僕のこんなのなんだけど」

「そうした責任は私にありますけど・・・さ、流石に開発者に見せる・・・勇気が出ませんわね・・・」

こんなのとはそう、ラウラによって真っ二つにされているのだ。

実際まだ起動できるかさえ、教師陣でさえわからない状況だ。

確かに開発者の姉さんに見せれば、何かしら分かるかもしれないが、かと言ってこの愛機の惨状を見せるのも気が引ける。

『アルディ、セシリアちゃん?どうしたのかしら。あ、ひょっとしてメンテナンス中とかだった?』

一瞬これは使えるとも思ったが、ダメだ相手はあの姉さん。下手な嘘は簡単にバレるに決まっている。
でも、見せるには・・・・。
あぁ・・・
はぁ・・・・ふぅ・・・。
くそ。
僕は観念して姉さんに、?ストライク・バーディ?をかざしてみせる。
それを見て姉さんは、やはり驚いていた。
『アルディ、それ・・・・真っ二つなのはなぜ?』
「あ、いやこれは・・・・その、ちょっとした事故で・・ねぇ」
「え、えぇそうですわね・・・事故でその・・おほほほほッ」
一気に怪訝そうな顔になる姉さんだったが、僕は次の言葉を言われる前にと、
ほとんど間髪いれずに姉さんに尋ねた。
「姉さんこれ、使えるかな?」
一瞬ジト目で睨むが、姉さんはすぐに頭を切り替え少し考えた後、予想通り難色を示した。
『はっきり言って、分からないっていうのが実際のところね。まぁ下手に起動しないっていうが一番安全でしょうけど』
要するに、どうなるのかは分からないが、出来れば安静に置いておいた方がいいってことか・・・。
『はぁ・・・にしてもねぇ・・。これは予想外だったわ』
「僕だってそうだよ・・」
「申し訳ありませんわ」
実際ＩＳが待機状態で破壊されると言うのはかなり稀なケースらしい。
そりゃそうだろう。
たいてい戦闘ぐらいでしか破壊されない代物だ。
それが展開もせずに、真っ二つ。

見た感じ姉さんも、このケースは初めてっぽいね。
『とにかく、そっちで一度見てもらってこっちにもう一度連絡ちょうだい。対策は考えておくから』
「うん、ありがとう姉さん」
「お願いしますわ」
『さて・・・と。アルディ、あなたはちょっとどこか行ってなさい』
急にそんな事を言い出す姉さん。
どこかって・・・・。
「あの僕の部屋なんだけど・・・」
『良いから、ここからはちょっと、女の子同士の話よ』
女の子って・・・。姉さんもうすぐ・・・
『ん？』
・・・・何でも無いです。
凄い笑顔でこっち見られた。
やめようトラウマになりそうだ。
『ほらほら、変な話はしないから、ね』
姉さんは更に僕をせかす。
こりゃ出てかいかないとアレか。
言いあっても、時間の無駄だね。
僕は渋々立ち上がると、部屋を後にするのだった。

◇◆◇◆◇◆

は自分に当てはまるのではないだろうか。
だがそんな事気にも留めずにローラは言葉を続ける。
『さて・・・ふ～んズバリ聞くわね』
「は、はい・・」
セシリアは少し緊張する。
部屋の主を追い出してまで自分に話とは一体何なのだろうか。
『あなた、アルディの事好きなの？』
「えぇっ！？！？」
思わず大きな声を上げてしまい、すぐに両手で口元を押さえる。
『ウフフッ、どうやら図星っぽいわね』
「うぅ・・・は、はい」
セシリアはゆっくりと、頷くと恥ずかしさのあまりうつむいてしまった。
『あなたって、本当に可愛いわね。外見とのギャップが特に』
外見との？
そんな事初めて言われた。
それにローラは、女性が見ても見とれてしまうぐらい魅力的な女性だ。
そんな女性に可愛いと言われて、嬉しくないはずはないがセシリアの顔はますます赤くなってしまった。
『まぁ・・好きなのはわかったけど。お姉さん気になるのはあの子のどこが好きなのってことなのよね』
「はぁ」
『その人を好きになるってことは、少なくともどこかに魅力を感じたからだと思わない？』
「それは、確かに」
会話しながらセシリアはふと考える。
今まで考えたこともなった。
アルディのどこが好きなのか・・・。
・・・ぜ、全部という答えはアリなのでしょうか・・・。

はっ、いやでもそう答えると節操のない女と思われるかもしれませんわね・・・。
実際セシリアはアルディのここの部分と言う物に惹かれたわけではない。
会った時は忘られていて少しショックだったがすぐに昔の事も思い出してくれて、そしてふたを開けてみれば、彼は昔から何一つ変わっていなかったという事がたまらなくうれしかった。
彼の声、彼のちょっと嘘つきな性格、彼の笑顔、彼が手を握ってくれた時の温もり。
そのすべてがセシリアにとってはアルディ・サウスバードであり、彼女が好きな男の子なのだ。
だからどこが・・と言われても中々困ってしまう。
『う～ん答えられない？・・・魅力ないのかしらあの子』
「い、いえ違います、そうではありません！」
答えに窮していたセシリアにローラがわざとらしくせかした。
セシリアも釣られてしまったと思いながらも、それを必死で否定する。
顔を真っ赤にして声を張り上げる、セシリアの様子を見てローラは笑っていた。
『フフフッ、やっぱりあなた可愛いわ』
「・・あぅ」
セシリアは少しはしたなかったかなと自問自答する。
だが、そんなセシリアの考えとは裏腹にローラは優しく言葉を投げかけた。
『ちゃんとわかってるわ。あの子をちゃんと見てくれてありがとう・・・』
「・・・いえ」
『あの子、あたしの影響とはいえ結構難儀な性格してるでしょ。それが少し心配ではあったのよね』
「大丈夫ですわ。アルは意外と人気者ですのよ」

それが少し、悔しかったりする。
本当なら独り占めしていたいのだが。
『あなたも大変ね、あの子鈍感だし。振り向かせるのは骨が折れるかもよ？』
「大丈夫ですわ、私こう見えて我慢強いんでしてよ」
セシリアは自信ありげにはっきりと言う。
ローラはそれを黙って、それでいて優しそうな目で見つめていた。

◇◆◇◆◇◆

「おっ？」
「む？」
僕はその手の持ち主を、目で追う。
するとそこには、銀髪、眼帯の少女が一人。
「ラウラ？」
「アルディか。すまない、先に開けてくれていいぞ」
その口調に、初めて会った時の刺々しさは無い。
何があったかは知らないが・・・いやって言うかどんな心境の変化なのだろう。
あんなに、嫌っていた一夏に口づけまでして・・・。
でもまぁ・・いいや。
フレンドリーに接してくれてるのに、こちらからそれを壊すこともないだろう。
「そりゃ、どうも・・」
僕は一番上の棚から百パーセントのオレンジジュースをセシリアの分も合わせて二本取ると、
ラウラに場所を譲った。
さて、お会計お会計～。
レジへ行く途中でチラッとラウラを振り返る。
すると・・・
「ん～～ッ・・・んんん～～～！！！」
ラウラは背伸びをして一番高い棚に手を伸ばすが、後少しの所で届かない。
・・・まぁ小さいからね。
最初はまぁ頑張ってとそのままレジへ足を運びかけたが、後ろからするラウラの声に後ろ髪を引かれてしまう。
あぁ・・・っとに・・。
僕は何度か迷った挙句、ジュースコーナーに戻るとラウラに尋ねた。
「何が取れないんだい？」
「べ、別に取れないと言うわけではないぞ・・・その少し高いだけ

で」
「それが取れないっていうんでしょ。ほらこれでいいの？」
僕はヒョイッとリンゴジュースを取るとラウラに手渡した。
「あ、あぁ・・・すまない」
ラウラはそれを戸惑いながら受け取ると、礼を言う。
ほんと、どんな心境の変化だろうね。
また同じような疑問が頭をよぎるが、こんなところで聞くわけにもいかない。
それに、ま、何にせよ大人しくなったならそれでいいじゃないか。
僕は今度こそ、レジへ足を運ぶ。
そしてお金を支払って、購買を出る直前。
「お、おい！待て」
ラウラに呼びとめられた。
僕はふりかえる。
するとそこにはリンゴジュースをこちらに向けてポーズを決めるラウラがいた。
ポーズだけ見れば、結構面白いが顔は真剣そのものだ。
「お前に話がある。今日のそうだな・・二〇時頃に寮の中庭まで来てくれ」
・・・・これは何？
・・・やっぱりあのペットボトルの件許してませんよって遠まわしなアピール？
・・・でも、あの真剣な顔は。
僕は少し考えた後、ラウラに答えを返した。
「二〇時だね」
「あぁ」
「分かったよ」
互いに短く答え、その場を後にした。
・・・にしても、話ねぇ。
ラウラからの話か・・・。

まぁなんか良い話じゃなさそうだよね。
僕は嫌な予感にかられつつ、セシリーの下へと急いだ。
流石にもう、話終わってるだろうし。

ガチャッ
部屋を開けるとそこには、まだ会話を続けるセシリーと姉さんがいた。
・・・本当に女の人ってよく喋るなぁ。
って僕、アメリカから画面越しに出てけって言われたんだっけ？
今考えるとえらい遠距離から言われたんだね。
とりあえず僕は、入ってしまったものは仕方がないから、？二人？におずおずと聞いてみる。
「あの、もう大丈夫だよね？」
「あら、アル、いつ帰ってきましたの？」
『話に夢中になっちゃったわね』
どうやら二人とも、そもそも僕に気が付いていなかったようだ。
・・・なんか、凹むなぁ・・。
「それで、話はもう済んだの？」
「えぇ、ほとんど」
『アルディ、セシリアちゃんの事大事にしなきゃだめよ？』
「・・・え？」
「ああぁぁッ、それは以上はぁ～～！！」
あわてて姉さんの口をふさごうとするセシリー。
ただまぁ、モニター越しだから、姉さんは喋れちゃうけどね。
だが、姉さんも姉さんで、話せるのにニコニコ笑ってそれ以上口をはさまない。
・・・何なんだ？
『あぁ、そう言えばアルディ』
「ん、なに？」
僕はセシリーに場所を変わってもらってＰＣの前に座る。

画面越しの姉さんの顔はいつになく真剣で、一体どんな話が飛び出すのか分からないぶん、
変に背筋が伸びてしまう。
『・・・・あなた・・・もうすぐ臨海学校ですってね』
「え、あ、あぁうん」
そう言えばそんな事書いてあったなぁ。
貰ってからほとんど確認してない、年間計画表をなんとか頭に思い浮かべる。
・・・なんとなく・・書いてあった気がする、うん多分。
『もう、色々買い物には行ったの?』
「買い物?特に必要なものは・・それに色々旅行鞄に詰め込んできたからだいじょう・・」
『甘いわ!!!』
うわ、びっくりした!
多分イヤホンしてたら、鼓膜破れてたね多分。
姉さんは、腕を組んで頭を左右に振って今にも?やれやれ?と言う声が聞こえてきそうだった。
『やれやれ・・・我が弟ながら情けない』
ほら聞こえた。
って言うか、何か必要なものがあったかなぁ。
水着は・・別に良いし・・・。
日焼け止め?
僕そんなの気にしないし。
「別に欲しいものなんて何も」
「・・・・でも、セシリアちゃんはあるわよね?』
唐突に話をセシリーに振る姉さん。
一瞬の戸惑いの後、何かを感じ取ったのかセシリーは勢いよく首を縦に振った。
「はい、はいッ、それはもう!買う物が多すぎて、どなたかの手を借りたいぐらいですわ!」

そ、そんなに・・・！？
女の子って、色々準備が凄いって聞いてたけど臨海学校行くだけでもそんなに買い物するものなのか。
『あらら、それは大変ね』
「はい、大変ですの」
なんとなくわざとらしく感じるのは気のせいだろうか。
まぁ、考えすぎも良くないか。
『と、いう事よ』
「・・・・はぁ、荷物持ち？」
『まぁ、当たらずとも遠からずよ』
姉さんはウィンクすると、そろそろ切るわと言って一方的に電話を切ってしまう。
・・・よくよく考えれば、なんだか色々凄く強引に決まったような決まってないような・・。
僕は、チラッとセシリーの顔を見る。
その顔は、買い物へ行くことへの楽しさからか、凄くニコニコしている。
まぁ、荷物持ちでも何でも・・。
僕は覚悟を決めると、机の片隅に置いてあったスケジュール帳を取りだす。
「えぇと・・・今週末が良いかな？」
「あ、あの、本当に一緒に行ってくれるんですの？」
さっきのニコニコから一転なぜか、微妙に不安そうな顔でこちらを見る。
女心と秋の空って言う言葉が日本にはあるらしいけど、それはそれでとてもうまい例えだと思う。
あ、ちなみにセシリーの母国イギリスでは？Ａｗｏｍａｎ、ｓｍｉｎｄ　ａｎｄ　ｗｉｎｔｅｒ　ｗｉｎｄ　ｃｈａｎｇｅ　ｏｆｔｅｎ？女心と冬の風って言うんだって。
まぁそれはさておき。

「何言ってるのさ、さっき誰かの手も借りたいって言ってたばかりじゃないか、まぁ僕はそんなに力持ちじゃないけど、荷物持ちぐらいなら出来るさ」
「アル・・・・・。フフッそれじゃ、お願いしますわ。日程ですが先ほどので大丈夫です。それと集合は何時にしましょう？」
「ん～～・・どうせ街に行くんなら、他のところも見て回りたいよね・・・、じゃあ十時ぐらいに部屋に迎えに行くよ」
「えぇ、それではお持ちしておりますわ」
セシリーは立ち上がるとドアノブに手をかける。
「あれ、もう行っちゃうのかい？」
「え、ええ。その・・ちょっと用事を思い出しましたの」
「あれ、暇を持て余していたんじゃ・・・」
「と、とにかく、買い物楽しみにしておりますわッ！」
セシリーは叫ぶようにして言うと、足早に部屋を後にした。
・・・・う～ん。
やっぱり女の子って？Ａｗｏｍａｎ、ｓ ｍｉｎｄ ａｎｄ ｗｉｎｔｅｒ ｗｉｎｄ ｃｈａｎｇｅ ｏｆｔｅｎ？だね・・・。

◇◆◇◆◇◆

あ～～～、でもどうしましょう！そ、その、そうですわね。
人生何があるか分かりませんものね・・・じゅ、準備はちゃんとして行かないと！
セシリアは自分の部屋に戻るとベッドの上に滑りこむ、
どうやら相部屋の女子はいないようで部屋には自分ひとり。
それを確認すると、セシリアはさっきまで我慢していた喜びを爆発させる。
「あ～～～～もうどうしましょう！！これは間違いなくデートですわ！！
アルから、誘われたわけではないのがちょっと残念ですが、でもこれは絶好の機会ではありませんか！！」
もうはたから見れば救急車を呼ばれかねない。
だがセシリアはそんな事お構いなしで、右へ左へベッド上を転がる。
「うまく行けば、あんなことや・・・こんな事まで・・・・キャーーーアルそれはダメですわーーー！！」
その時だった。
ガチャッ！
っは！！
セシリアは我に返る。
どうやら相部屋の女子が帰ってきたようだ。
セシリアは周囲を見渡す。
さっきまでの自分の行動の所為で、きちんとベッドメイクされた自慢のシーツはしわくちゃになり、
掛け布団もずれ落ちかかっている。
仮に平静を装っても、このベッドの乱れ具合は明らかにおかしい。
「と、とにかくすぐに直しませんと・・・ってきゃぁッ！」
セシリアは、あわてて起きあがろうとするが、
足にシーツが絡んでそのままベッドから転げ落ちてしまった。
それに引っ張られてシーツが自分の上に覆いかぶさる。
「・・・何やってんの？」

そして丁度そこを相部屋の女子に見られてしまった。
「いえ・・・特に意味はありませんわ」
その女子はシーツから返ってくる返答に、どうしたらいいのか分からずしばらく互いに無言の時間を過ごした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時刻は二〇時。ラウラとの約束の時間だ。
僕は中庭まで流れてくる海の風に心地よさを感じながらラウラを待つ。
しばらくして無音の中庭にドアの開く音が響いた。
「すまないな、遅れた」
「いいや、僕も今来たところだから」
二人とも形式的なあいさつを交わす。
そしてまた沈黙。
・・・にしてもラウラの話ってなんだろう。
やっぱり、あのペットボトル？
・・・だとすれば、相当根に持つタイプだなぁ。
「・・その、今日はお前に謝らなければと思ってな」
ん？
僕は想像していたのと違う答えに思わずキョトンとしてしまう。
どうやら本当に僕は姉さんがセシリーの言うように、想像力とかの感性が欠如してるのかもしれない。
「謝る、なんで？君何か僕にしたかな」
「お前の姉の事だ」
それでようやくピンと来たぞ。
そうだ、ラウラは姉さんの事を馬鹿にしたんだ。
もう踏ん切りもついて、自分の中じゃ片付いた事だっただけに思い出すのに時間が要ったけど。
「本当に、すまなかった」

まっすぐに、素直にラウラは頭を下げる。
その思いに嘘偽りはない。それはいくら鈍感な僕でもすぐにわかった。
「きょうか・・・織斑先生から聞いたのだ。お前の姉の事を」
「織斑先生から？」
思いがけない経路だな。
確かに姉さんの事は知っていて当然だとは思うけど、織斑先生が自ら姉さんの事を話すとは意外だった。
「織斑先生も認めるほどの人物だったのだな」
「・・・そうなんだ」
「ん、お前は何も聞いていないのか？」
「まぁ、聞いてはいたけど、そういう肯定的な意見は久しぶりかな。ほら織斑先生って凄く人気もあるし、聞く事聞く事ほとんどが良い意見ばっかりじゃない。でも、僕の姉さんの事聞くと、大抵は知らなかったり知っていても悪評がほとんどだったから少し驚いちゃってね」
この学園に入ってからと言うもの、織斑先生の凄さや人気は目を見張るものがある。
前にも行ったが、この学園の教師陣は、ちょっとは名の知れた元国家代表なんてごまんといるのだ。
だがその中でも、飛びぬけて高い実力と人気を持ち合わせているのが、織斑先生だった。
まぁ、他国の代表なんて優勝でもしない本国以外じゃ、注目されないんだろうけどそれでももう少しは知ってるかと思ってた。
僕たちは話しながら、中庭にベンチに腰掛ける。
「そうか、でもお前はそんな姉が好きなのだろう？」
「まぁね」「だとしたら、やっぱり私はお前に悪い事をしてしまった」
「もう良いけど、確かにあの時はカッと来たけど・・・もう終わった事だしね。

フフッ、僕は根に持つタイプじゃないんだ」
僕は背もたれと肘かけに身体を預け、ラウラに半身の体勢になる。
リラックスした体勢でラウラに微笑みかけるがラウラの顔は晴れない。
「・・・織斑先生から他にも色々と聞いたんだ。お前があのイギリス人に自分の思いを託してトーナメントを欠場したと言う事も・・・」
「そうなんだ」
「そして、その事を私なりに色々考えてみたんだ。でも、答えはいつも同じだ。私ならトーナメントにも無理やり出場していただろうし、ましてや自分の思いを他人に預けるなんて事出来なかった」
ラウラはうつむきながら、一つ一つ言葉を選んで紡いでいく。
これがあの、初日に騒動を起こした少女だとは到底思えない変わりっぷりだ。
ラウラは僕の方を向き直ると、困惑したような表情を浮かべる。
「なぁ、教えてくれないか？　お前はどうして、そんな事が出来たんだ？」
「どうして・・か。う～ん・・・強いて言えば信じていたから・・かな」
僕は自分の思いを意志をセシリーに預けた。
セシリーを信じていたから。
ひょっとしたら、それが出来たから僕は、今ラウラとこうして話せているのかも知れない。
思いを人に預けるのって一見すると無責任な事かも知れないけど、相手を信じなきゃ出来ない、
意外と大変なことだと思う。
任せた方も。
そして任された方も。
「信じる・・」
「そう、信じる。まぁ嘘つきな僕が言っても説得力は無いけどね」

「ではそれが、お前の強さなのか？」
「どうだろ・・・強さとは違うかなぁ」
うん・・・・強さとは違う気がする。
これはただ単に、ぼくがセシリーを信じていただけだし、僕の力でも何でもない。
「・・・お前は強くないのか？」
唐突にラウラがそんな事を聞いてくる。
僕はそれを全力で否定した。
「強くなんて無いよ、多分主要なメンバーの中じゃ一番弱いんじゃないかな」
実際これまでだって、なんとか戦えてきたのは？ストライク・バーディ？の性能によるところが大きい。
多分イコールコンディションでやりあえば、僕なんて瞬殺だろう。
「そうか」
「っていうか大体なんでそんな話に・・・。さっきの質問はどこに飛んでったのさ」
「いや、実は話したかった事と言うのは。これが本題なのだ」
「え？」
「実は、あのトーナメントの時・・・・」

・・はぁ～なるほどねぇ。
不思議な事もあるもんだ。
ラウラが言うには、どこか暗い空間で一夏と話をしたらしい。
そしてそこで一夏が言った強さの理由。
それがラウラには気になって仕方が無いらしいのだ。
「一夏は、他にも強さは色々あると言っていたのだ。
だからとりあえず・・・謝らねばならんとも思っていたから、丁度いいと思って・・・お前に」
だんだん最後の方は、声がしぼんでいってしまったラウラ。

だが主要な部分は聞き取れたし、大丈夫だ。
「ふ～ん・・・そっか。強さねぇ」
僕もそんな事、考えるのは初めてかもしれない。
何を持って強さと言うんだろう。
力？
意志？
仲間？
それとももっとほかの何かだろうか？
よくわからないが、とりあえず言葉にまとめてみた。
「僕は、強さって言うのはその人自身だと思うな」
人自身？」
「うん、そう。結局強さって言うのは力を使わないといけないでしょ。
でも力は力じゃない？　でもそこへ使う人が出てきて初めて力は強さになるんだと思う」
「よくわからないな」
「わからなくていいのさ、そんなの」
開き直ったような僕の声にラウラは驚いたような顔になる。
「わからなくて・・・いい？」
「あぁ・・えっとだから・・・やっぱり人それぞれな訳だし。答えは無数にあるわけでね・・・
なんて言ったらいいのかなぁ・・・アハハ、ごめんね一夏みたいに旨く説明できないや」
やっぱりそれをしっかり、考えられている一夏は強いんだろうな。
僕は頭をかきながら笑う。
多分僕にも、強さって言うのはこれだ！っていえる時は来るんだろうけど。
それがいつなのか・・。
ふむ、まぁ来る時には来るでしょ。
ラウラは僕の話に耳を傾けた後、ゆっくりと立ち上がり、二歩三歩

歩いたところで止まる。
「そうか・・・そういう考え方もあるのか」
「それに、うだうだ考えていたってね。やっぱりほら、人生は楽しくなくちゃいけないでしょ。たった一度の人生なんだからさ」
「・・・楽しく・・・そうか・・そうだな」
ラウラは振り返らない。
表情はうかがい知ることは出来ないが、声色でなんとなく落ち込んではいないと言う事はわかる。
するとラウラは、そのまま上を見上げ言った。
「フフッ、お前と話せて良かった。そうか、やっぱり一夏の言ったように色々あるのだな・・・。
私はもっと知らねばならんのかもしれないな」
「この手の問題に、答えなんてある意味、一つもないんじゃないかな」
「そうかもしれん・・・。おぉ、そういえば、お前も専用機持ちだと聞いたぞ。
今度暇を見つけて模擬戦でもどうだ?」
模擬戦・・・あぁ・・。
模擬戦ねぇ。
僕は、真っ二つの愛機を思い浮かべて、さっきまでとは一転肩を落とす。
・・・そう言えば、これ直るのかな・・。
「ん?どうした、都合でも悪いのか?」
「いや、都合って言うより・・その・・・・」
どうしようか・・・本人に直接言ってもいいものか・・・。
僕が迷っていると、ラウラが近づいてきて僕がポケットに隠している物を興味深そうに見つめる。
「何を持っている?」
「あ、いや別に・・・何をってほどのもんじゃ・・・」
「見せろ」

「いやだから・・・」
ラウラは半ば強引に僕の腕を引っ張る。
すると僕の手に握られた？ストライク・バーディ？が姿を現した。
「これは・・・」
ラウラはそのネックレスに見覚えがあるようだった。
てかむしろ、見覚えがあってもらわないと困るのも確かなのだが。
「あーえと・・・これが僕のＩＳ・・・・見事に真っ二つでしょ」
僕は観念して、気まずい気分で告げる。
何で僕が気まずい気分かって？
決まってる。
壊した張本人が無理やり引っ張り出した物が、その張本人が壊した物だったら、
誰だって互いに気まずくなるでしょ。
少なくとも僕はなる。
「あ、あぁ・・・かさねがさね・・すまない」
「まぁ・・・良いけど」
ラウラは若干顔をひきつらせながら、謝罪する。
まぁ、確かに気まずいっちゃ気まずいけど、もうそれは良い。
終った事だしね。
僕はあまり根に持つタイプじゃないってのは言ったでしょ。
つまりそう言う事。
だがラウラにとってはそうでは無かったらしい。
ラウラは再び僕の横に腰かけると、しゅんっとなってしまった。
「それにしても、お前のだったのか・・しかもＩＳだったとは」
「そんなに気にしないでって、もうやっちゃったもんは仕方ないよ」
「だが・・・」
「さっきも言ったでしょ、人生は楽しくなきゃ。
まぁＩＳ学園でＩＳが使えないっていうのは笑えないけど、
別にそれだからどうだっていうのもないしね、逆に変に気を使われる方が僕はいやだな」

「そうか・・そう言ってもらえると助かるが」
さてと・・・良い感じかな?
僕は携帯の時計を確認するともう二一時を回っていた。
ラウラとの会話も一区切りついたし。
「それじゃ、そろそろ部屋に戻ろうかな」
「あぁ、そうだな・・・わざわざ呼び出してすまなかった」
「さっきから、謝ってばっかだね」
「フフッ、元々そのつもりで呼びだしたのだ」
僕らは軽く二言三言話して互いに分かれる。
僕は部屋に向かう道中少し考えた。
・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ。
初対面での、イメージは最悪だったけど・・・。
このＩＳ学園にまた一人。
個性的な生徒が?本当の意味?でクラスの仲間になったのは確かだろうね。

さてさて、どうなる事やら・・・。
主に一夏が。

何にせよ、人生は楽しまなきゃね。
誰もいない廊下。
そこに僕の足音だけが軽快に、そしてどこか楽しげに響いていた。

第１４話～姉さんとセシリー＝買い物？～（後書き）

今日ちょっと、バイトの上司に切れかけました。
・・・切れてもゴマするしるくクォリティ。
どうもしるくです。

まだまだ、水は入ってこないようです。
ヨーグルトやガスボンベは入ってきました。

あとベトナムから怪しいクラッカーも入荷です。
明らかに怪しいですが、売れ行きは好調です（ぇ

そんな感じ。
ではまた１５話で！
さよならっ！！

第１５話～疑惑のジャパニーズと白き鳥～

・・・・はぁ。
やっぱり断ればよかったのでしょうか・・。
いやいや、もうここまで来たわけですし・・・。
朝日がＩＳ学園を照らす。まだ時間も早い関係で誰もいない校門前で、
一人の少年はＩＳ学園の制服に身を包み一歩足を出しては、その足を引っこめる。
そしてその後、また何かを考えるという行動を繰り返していた。
これが普通の学校なら、警察を呼ばれても良いレベルの怪しさだった。
それにしても・・・なんでこんな事。
少年は頭の中でひとりごちる。
だがそれで何が変わると言うわけでもない。
少年は息を深く吸い込むと、ゆっくりと吐く。
さて・・・行きますか。
少年は意を決した顔で、ＩＳ学園の門をくぐるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ねぇねぇ、また転校生らしいよ？」
僕はもうその話を聞いても何も驚かないぞ。
だってラウラ以上の転校生なんてそうそう居ない。
それにだ、転校してくると言っても今回は僕たちのクラスじゃない。
それでも・・・
「どんな子だろうね？」

「また代表候補生かなぁ」
「絶対そうだって、どこの国の子かな！」
これだ。
本当に噂話が好きだねぇ。
って言うか毎度思うんだけど、女の子の情報網って言うのは一体どれほどのものなんだろう。
ひょっとしたら、一国家機関の情報網に匹敵するぐらいあるんだろうか・・・・・・
それは言い過ぎ？
いやでも、ねぇ。
「お前、さっきから何ブツブツ言ってんだ？」
「え？　声に出てた？」
一夏に言われてハッとする。
自分じゃ分からないもんだねぇ。
「いやね、転校生の話」
「お前も気になるのか、やっぱり？」
「もう誰が来たって言っても驚かないよ、大体ラウラであの騒ぎでしょ。慣れたよ」
本当に、あれ以上の転校生騒ぎがあってたまるもんか。
・・・まぁ僕からペットボトル投げたんだけど。
「私がどうかしたのか？」
そこへラウラがやってくる。
どうやら聞こえていたらしい。
「いや、一夏がね。ラウラ可愛いって」
「なっ！！お前そんな事一言も・・・・・・ッほ、ほうき」
この手の会話にはすぐに飛んでくる箒。
僕はそれをニヤニヤしながら見つめる。
あ、ちなみに今の箒の顔は、真正面から見ると子犬なら死んでしまいそうなぐらい怖い。
「お前・・・・」

「お、おう・・・」
「その、なんだ。やっぱりききき、キスとかしてほしいのか！？」
「はぁッ！？」
うわぁ、予想外の爆弾発言だね。
これは面白くなりそうだ。
「全く・・・アル、またやってますの」
そこへ小声でセシリーが声をかけてくる。
「だって、ねぇ・・。見る分には楽しいし」
「はぁ・・・やられてる側は地獄でしょうけれど」
僕とセシリーは再び一夏を観察する。
現在一夏は、箒に詰め寄られ変な質問をされた後、ラウラがそれに異を唱え、おまけにシャルロットまでその話に参加してきたから、種をまいた張本人が言えた事じゃないが小規模なカオスだった。
「お、お前、急になんてこと言ってんだよ！！」
「そうだぞ、一夏は私の嫁だ。よって好き勝手にしていいのは私だけに決まっている」
「あぁもう、二人とも何言ってるの！大体一夏とのキスだったら僕だって――――――――――――あ」
え！？
更に予想外のカミングアウトに僕だけじゃないクラス全体が驚きの声を上げた。
「「「「「「「「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？！？！？！？！？」」」」」」」」」」
声でクラスが揺れるのなんて久しぶりだ。
えぇと・・・前に揺れたのは・・・。
あぁシャルロットがシャルルとして転校してきた時だったっけ？
・・・いや違うラウラがキスした時だ。
なんだ、つい最近じゃないか。
などと僕はのんきに構えているが、周辺はもうカオスを通り越して若干暴動である。

「シャルロットあんた抜け駆けしたの!!」
「あぁぁ!そう言えば二人ともしばらく同じ部屋だったし・・・・」
「そ、そんなぁ～」
皆口々にシャルロットを責め立てる。
これには流石のシャルロットもあわてていた。
何せ自分の失言からの暴動だ。
気持ちは分からなくもないけど・・・。
「あ、その・・キスって言うか・・そのうぅ・・なんて言ったらいいのかな」
「む、シャルロット。言い淀むほど凄いキスだったのか?」
その上で更にラウラが火をそそぐ。
今気が付いたけどこの子って戦闘時は恐ろしいけど、普段はこんなにも空気が読めない困ったちゃんだったんだね・・・。
こりゃ一夏は大変だ・・・。
「お前今、他人事みたいに言わなかったか・・・・ってこら、箒引っ張るな!」
「えぇい、黙れ!!　大体なぜ私が最初ではないのだ!!」
「色々意味がおかしい事に気づけ!!」
「離さんか!先に誰が何をしていようとこの男は私の嫁だッ!」あぁ・・・平和って良いね。
今の状況はこんな感じだ。
僕の右側で、シャルロットに詰め寄る女子たち。
そして僕のすぐ目の前で箒、ラウラの主要メンバーを筆頭に一夏を残りの女子たちが取り囲む。
そしてその中で唯一、僕とセシリーがいる所だけぽっかり平和な空間が開いている。
ほんと・・平和って良いなぁ。
「悪いが、その平和はもう終わりそうだ」
へ?
刹那、僕の頭は出席簿の餌食となった。

「朝から元気なのは良いが、クラス全体で何を騒いでいる！とっと席につけＳＨＲを始めるぞ」
織斑先生の声を聞くや、さっきまでの喧騒がうそのように静まり返る。
そしてものの数秒で皆が席についた。
それを確認して何事も無かったかのようにＳＨＲを始めようとする織斑先生。
「ハイ、質問があります」
「なんだ、サウスバード」
「どうして僕は叩かれたんでしょうか？」
「・・・・分からないのか？」
「・・・・すいませんでした」
あー下手な質問はするもんじゃない。

「以上だ。それでは今日もしっかりとな」
今日も特にこれと言った連絡はなし・・。
まぁ、臨海学校について二、三あったけど、そんなに覚えておくような事柄でもなかった。
荷物を手早くまとめると教壇をおりていく。
だがその織斑先生を女子が呼びとめた。
「あの、山田先生は今日どうされたんですか？」
「ん、あぁ。山田先生は臨海学校の下見で現地へ飛んでいる。なに心配するな、今日一日山田先生の仕事は私が担当する。自習だと思って喜んだやつは・・・覚悟しておけ」
一瞬喜びかけた女子のかをがみるみるしぼんでいく。
・・・にしても臨海学校か。
ってことは、やっぱり海があるんだよね。
・・・あんまり海には良い思い出が無いけど。
まぁ、ここから海を見ても大丈夫だし。

海に入らなかったら、大丈夫だよね。
こうして、今日も一日平凡で変わり映えのない一組の日常が始まった。

・・・・始まらなかった。
昼休み。
一組に飛んできた鈴が言った一言がちょっとした問題を起こす。
鈴は僕たち主要なメンバーを集めると声をひそめる。
「ここだけの話なんだけどさ、今朝うちのクラスに転校生が来たんだ」
「どんな方ですの？やっぱり代表候補生でしょうか？」
「いやさ、代表候補生うんぬんよりも・・・男子なのよ」
男子？
はぁ～それでよく今まで騒ぎにならなかったものだ。
・・・流石に慣れたのかな。
だが、その疑問はすぐに晴れた。
鈴が聞かなくても答えてくれたのだ。
「ま、うちのクラス全員で口裏合わせたしね・・・。
一夏やアルディの時みたいになるのはウチの先生も恐れたみたい」
・・・そりゃそうだよね・・・あ、でも。
「もうばれてるんじゃないの？」
「・・・昼休みは、どうしようもないじゃない」
あぁそこら辺は、もう割り切ってるんだね。
だがそうは言っても、男子は男子。
その事について、箒が腕を組んだ。
「しかし、男子か・・。女にしか扱えないＩＳを扱える男子が三人も・・・」
「まぁ特異なケースと言うのは、あながち少なくないのかもしれん

な」
「でも、ねぇ」
確かにラウラの言うとおり、ひょっとしたら世界にはもっと居るんじゃないんだろうか。
って言うかＩＳもなんか、そこらへん適当だなぁ・・・。
「でね、問題はここからなのよ」
騒ぎにならなかっただけで、意外と男子の転校って言うのは重大な問題だと思うんだけど。それをシャルロットも感じたようで、鈴に尋ねる。
「まだ何かあるの？」
「あいつの使ってたＩＳが、あたしたちを襲撃したのにそっくりなのよ・・・」
「「「「え！？」」」」
一夏と僕、そして箒とセシリーの声が重なる。
一方シャルロットとラウラは、あの時は居なかったから、何について話しているのかよく分かっていないようだった。
「ねぇ一夏、何の話なの？」
「あぁ、鈴が転校してきた時にな、ちょっとした事件があって・・・その話なんだけど」
「まぁ詳しい事は大方、かん口令がしかれているのであろう。私たちも詳しくは聞くまいが・・」
ラウラの意見にシャルロットも賛成のようで、それ以上一夏に聞こうとしなかった。
・・・でも。
どういう事だ？
仮に襲撃者だったら・・・わざわざ自らこの学園に入ってくる事なんて。
「ねぇ、鈴。本当にそっくりなの？」
「えぇ、まぁ色は真っ白だったけどね」
「それだと私たちが見たものと、違うな」

「ラウラ。お前ドイツ軍に居たんだろ？　ＩＳの塗装とかって簡単に塗り替えられるもんなのか？」
軍ではよく、パーソナルカラーなどで隊長機を塗り分けたりするし、作戦によって頻繁にカラーリングを変えることもしばしばだ。
ラウラは軍人。その辺の事には詳しいはずだ。
「ふむ、そうだな。まぁ難しくは無いぞ。極端な話、作戦行動中に手持ちの油性ペンキやスプレーで塗装する事もあるぐらいだからな。
以前も、僚機をアグレッサーカラーにして偵察任務をこなした事がある」
なるほど。
体験者は語るじゃないけど、流石は現役軍人・・・。
具体例まで挙げて実に分かりやすい説明だよ。
ふむ・・・。
「鈴、彼に会えるかな？」
「会えるけど・・会ってどうするの？」
「確かめたい事があるんだ」
鈴は一瞬怪訝そうな顔をするが、何も言わずに居場所を教えてくれた。
ありがとう、鈴。
さて・・・それじゃ噂の彼に会いに行くとしよう。

僕は二組のドアの影からひょっこり顔を出して、転校生君を見る。
その転校生は、黒髪に青色の目を持つ少年で恐らく日本人だろうか。
噂の彼は、ごく普通に二組でＩＳの教科書に目を通していた。
そう、ごく普通に。
彼だけ。
多分彼自身意識しないようにはしてるんだろうか。
いくらなんでも、ねぇ・・・。
だってさ。

僕は辺りを見渡す。
そこはもう黒山の人だかりだった。
もちろん女子で、その目的は噂の彼を一目見ようとである。
僕は再び視線を彼に戻す。
・・・ふむ。
まぁ、遠巻きに見てても仕方がない。
僕はスッとドアの陰から立ち上がると、噂の彼のもとへ。
少し・・・いやかなり目立ってしまうがしょうがないね。
「どうも」
気さくに声をかける。
すると相手も若干ぎこちなく、それなりに気さくに応じてくれた。
「ええと、こんにちは」
「あぁ、そんなに固くならないで。とりあえず自己紹介をしよう」
僕は開いていた、椅子を引いて彼の向かいにこしかける。
「僕は、アルディ・サウスバード。君と同じ男のＩＳ操縦者ね」
「はじめまして、アルディ。僕は一条　聡也。よろしくお願いしますね」
「聡也か。良い名前だね」
僕は自己紹介を済ませると、聡也を一組へ呼ぶ。
すると今度はクラス前の軍団が一組へ移り、元々一組にいた女子たちも急な転校生の登場に湧きかえる。
「あれが、転校生!?」
「え、なに!?　男の子だったの?」
「だからみんな見に行ってたんじゃん。気づいてなかったの!?」
一気にざわつく教室の女子たちを、聡也は不思議そうに見つめる。
「皆、何をしてるんですかね?」
「・・・あれ?気が付いていたんじゃないの?」
「そう言えば、廊下にも人がたくさん・・・」
なんだろう、同じ臭いがする。
親近感を覚えると言うか。

「あなたほど、鈍感では無いと思いますが・・・」
唐突ににセシリーの声がする。
あれぇ、僕口に出したかな？
「だから、前にも申したでしょう・・・わかりやすいと」
どうやら、ちょっと本気でポーカーフェイスを学びに行ったほうが良い気がしてきた。
・・・通信教育でも出来るのかな。
「で、そいつが二組の転校生か」
僕がそんな、ばかばかしい事を考えていると転校生に興味を持ったラウラが口を開く。
ラウラってさ、刺々しさは抜けたけどそれでも言葉遣いが・・・。
もう少しフレンドリーにした方が・・。
「はい、二組の一条　聡也です、その・・・よろしくお願いします」
「あぁ、ラウラ・ボーデヴィッヒだ。そしてコイツは織斑　一夏。私の嫁だ、覚えておけ」
サラッと結構凄い事をのたまうラウラに箒たちが噛みつく。
「また、お前は！　別にそれは必要ないだろう！！　それに一夏はお前の嫁では無いッ」
「そーよ、あんたねちょっと美味しい思いしたからってつけ上がらないでよね！　一夏は私のなんだから！」
「ちょ、ちょっと鈴!?　勝手に私物化しないで！」
「・・・どうでもいいが俺は・・・その嫁なのか？」
一夏の疑問は最もだろう。
普通なら婿だね。
アメリカ人の僕でもわかる簡単な日本語な気がするんだけど。
また騒ぎを始める彼らを余所に、今度はセシリーが自己紹介。
「私は、セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。どうぞよろしく」
「ラウラに・・・セシリアですね。で・・・彼女たちは・・・」
指さし確認で名前を繰り返す聡也。

だがまだまだ収まる気配を見せない、騒動に聡也は少し戸惑ってしまう。
そこで僕が残りの四人に代わって名前を挙げていく。
「えぇと、まず彼女が篠ノ之　箒」
「よろしく頼む・・・・あぁ、だから何度言えばっ」
「で、その横が　凰　鈴音」
「って、あたしは知ってんでしょうが！！・・・だからさぁ一夏はあたしの幼馴染でぇ！！」
「そして、そのブロンド髪が、シャルロット・デュノア」
「あはは、よろしくね。・・・・んもう、いい加減にしてってば！」
そして最後に、なぜか騒動の原因の一つであるにも関わらず蚊帳の外状態の彼・・・。
ほんと、気苦労が絶えないねぇ。
「んでもって、彼が僕たちと同じＩＳを使える男子、織斑　一夏」
「よろしくな、聡也」
一夏は、喧騒どこ吹く風で聡也に手を差し出す。
そして聡也もその手をしっかり握り返した。
「あなたの事はよく知ってますよ。ニュースで見ました」
「あー・・やっぱりか。大体のやつに言われるんだ」
世界で初めてＩＳを動かせた男子、織斑一夏。
それにあの織斑先生の弟って言う事もあって、結構大々的に報じられたらしい。
何せアメリカでもやってたぐらいだしね。日本人の彼が知らないわけはないだろう。
さて・・・。
とりあえず全員の自己紹介が済んだところで。
「ところでさ、君今日放課後は開いてるかい？」
「え？　放課後、うん大丈夫ですよ」
「なら放課後さ、アリーナに行かないかい？」
「アリーナですか、良いですけど。何かあるんですか？」

そこへ一夏が、説明に入る。
「実はさ、今放課後、みんなで合同練習してるんだよ。
アルディはちょっとＩＳが今は使えないんだけどな」
そう言えば・・・僕のＩＳ一度見てもらわないとなぁ・・・。
早くなんとかしないと、実戦経験もロクに詰めやしない。
・・・っとと、今はそんなこと言ってる場合じゃなかった。
「ま、確かに僕は見学だけどさ。ほらセシリーとか代表候補生だしラウラに至っては軍人。
学べることは多いと思うよ？」
「そうですわね、まぁ私の理路整然とした完璧な説明があれば、どんな操縦者も一瞬で代表候補ですわ」
凄い自信だけど、正直いって僕はすぐに理解できなかったけど・・・。
そんなセシリーの自信に押されたかどうか分からないが、聡也は少し考えてやがて申し出をを受け入れた。
「・・・まぁ、確かにそうですね。良いですよ、じゃぁ放課後楽しみにしてます」
聡也はチラッと時計に目をやると、それだけを言い残して自分のクラスへと戻っていく。
ありゃりゃ・・・もうこんな時間か。
さて次の授業の用意をしないとな。
僕はまだまだ終わりそうにない、四人を尻目に次の授業の用意を鞄から取り出す。
あ～あ・・知らないぞ～。
次の授業は織斑先生なのになぁ～。
そして案の定、織斑先生に一発づつ出席簿アタックを貰った四人。
だから、言ったのに・・・・。
いや、言ってないか。
ちなみにだが、放課後その四人から僕は理不尽なげんこつを一発づつ貰う羽目になった。

言ってくれればってねぇ・・・。
理不尽すぎでしょ。

さてさて放課後。
僕たちは、アリーナに来ていた。
既に皆ＩＳスーツに身を包んでいる。
僕はＩＳを使えないから、制服のままだけど。
「さて、今日も始めるか」
一夏の掛け声に、ピクっと四人が反応する。
「そうだな、よし一夏今日も軽く打ち合いから始めよう」
「そうね、早速中近の総合機動を始めるわよ」
「一夏、今日はこれを撃ってみようか」
「良い心がけだ。お前にはどうも高度な機動戦術が足りていないようだからな。
わたしがみっちり教えてやろう」
一度に四人が全く別々のメニューを提示する。
そしてその誰もが、？当然自分とやるよね？という無言のメッセージが感じとれるから断りにくい。
差し出される四通りのメニューに一夏が恐る恐る、聞き返す。
「ちなみに・・・誰か一人選んだら怒る・・・よな？」
「「「「当然！」」」」
「どうしろってんだよ！！」
あはは、流石に同情するよ一夏。
ま、向こうは一夏に任せてこっちはこっちで始めちゃおう。
「さて、聡也。こっちはこっちで始めようか」
「はい。それで・・・何をしましょうか？」
「そうですわね、まずあなたのレベルを見たいですわ」
「レベルですか・・・はぁ、まぁ良いですけど」
セシリーいわく、教える側としても現状でどのぐらいのレベルにあ

るのか
知っておくことは重要なことなのだそうだ。
それを知らない事には、どうやって何を教えればいいのかさえ組めないらしい。
既に鈴からの情報で自分のＩＳを持っているという事を知っていた僕たちは、
セシリーが先に?ブルー・ティアーズ?を展開して聡也にもＩＳの展開を促す。
「さ、まいりましょう」
「分かりました、少し待ってくださいね」
聡也は、鉄製の白いカードにキーシリンダーが付いたものを取りだす。
どうやらあれがＩＳの待機状態らしい。
そのシリンダーに聡也がキーを差し込む。
するとキーが霧散して、それと同時に光に包まれ真っ白いＩＳがすがたを現した。
・・・・確かに。
確かにそれはあの時見た黒いＩＳに酷似しているデザインだ。
工業的で角ばったシルエットに、バックパックには四門の砲。
そして顔にはバイザーが備わっている。
だが、色は白い。
黒じゃない。
さっきまで言い争っていた一夏達も、そのＩＳに釘付けになっていた。
聡也はゆっくりとセシリーの高さまで浮上する。
「さて、準備は良いですよ、いつもどうぞ!」
聡也はバックパックから二門の砲を選びそれを手に取り構える。
「・・・・では、行きますわよ」
こうして、セシリーと聡也の模擬戦がスタートした。

◇◆◇◆◇◆

っていた。
この違和感は・・・何でしょうか。
セシリアは頭の片隅で違和感を覚えながら、距離を取りつつ攻撃を続けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「始まったわね」
「あぁ・・・・」
「機動自体は何となく似ている所もあるが、変な違和感があるな…」
地上から見守る僕達は独り言のように、つぶやいていた。
聡也の動きは、確かにあの黒いＩＳににている。だが箒の言うように何か違和感を感じてしまう。
「ふむ・・・あれが襲撃したＩＳに酷似した機体か・・・・私には別段おかしな所は見受けられんが」
「僕もだよ。やっぱり元々の黒いＩＳを見てないからかな？」
そしてどうやらシャルロットとラウラには、特に違和感なく見えているらしい。
・・・・とするならこの違和感はあの時、黒いＩＳを見た人間にしか分からないようなことなのか。
僕は再び聡也を見上げる。
聡也の戦い方は距離の素早い切り替えと上下機動を組合せた耐狙撃機動ベース。
そこに自分の砲撃を組合せた比較的変則的なスタイルだった。
そしてその機動になってから、セシリーの手数が目に見えて減少する。
セシリーは紛いなりにも代表候補生、半端な機動や技術は通用しない。

つまりそのセシリーが攻撃の手数を減らしてまで狙わねばならないほどに、
聡也の実力は高いということになる。
さすがに実際戦っていないから正確な実力はわからないがそれでも、あの黒いＩＳに肉薄するほどの実力に加えて、似たようなＩＳ、似たような戦術・・・・。
細かく見れば疑うべき余地はいくらでもある。
「ねぇ一夏。君はどう思う？」
「・・・確かに、変な違和感はあるんだけど。でもさよく考えてみれば俺たちを襲撃した犯人が本当にあいつだったとして、のこのこと転校なんてしてくるか？」
「それはねぇ・・・・引っかかってるんだ僕も・・・」
そう。
そんなリスキーなことを冒してまで、何かを手に入れたいのなら別だが
これまで少し会話を交わした感じではそんな感じは見受けられないし。
・・・考えすぎなんだろうか。
何度も言うが、似ているだけで全く同じではない。
「まぁ、仮にそうだったらそんときゃそん時だろ？　はなから疑ってかかるのはもうやめないか？」
「一夏・・・最近あんたアルディ化してきたわね」
失礼な鈴。
僕はこんなに神経図太くないよ。
「そうか？　俺は別に金髪じゃないぞ」
「・・・・そういうことじゃないよ、一夏」
さすがのシャルロットも呆れて苦笑いしている。
その奥では、箒とラウラも腕を組んでため息を漏らしていた。
ただ一人、その意味を分かっていない一夏だけがきょとんとした顔でキョロキョロと周囲の顔を見まわしていた。

◇◆◇◆◇◆

発。
そしてそれで吹き飛んだセシリアを、真上から蹴り飛ばす。
「っく、この速さッ！！」
「さて、仕上げと行きましょう」
聡也は一度両手に持っていた荷電粒子砲を背部へ戻す。
そして同時に四門の砲のロックが解除され、聡也はそのまま勢いよく宙を回る。
ロックが外れ自由になった四門の方がくるくると宙を舞う。
「な、何を」
セシリアはようやく体勢を立て直そうかという所で、聡也の行動が目に入る。
セシリアが見たものは、くるくると回りながら綺麗に横一列に並ぶ四門の砲だった。
そして次の瞬間、セシリアへほぼ同時に四発の砲撃が直撃する。
「あぁっ！！」
激しい衝撃を受けながら、アリーナへ叩きつけられるセシリア。
この瞬間、聡也の勝利が決定した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・ま、負けちゃった。
僕は信じられない物を見ている気分だった。
？ブルー・ティアーズ？はセシリーが地面にたたきつけられてからすぐに霧散する。
セシリーは、？ブルー・ティアーズ？が衝撃の大半を受け止めてくれたようで大きな怪我もなく、
すぐに立ち上がった。
僕たちは、セシリーのもとへ急ぐ。

「セシリー大丈夫!?」
「え、えぇ・・・少し腕を強く打ちましたが、問題ありませんわ」
「そう、良かった」
僕は、怪我が無いようだという憶測が、怪我が無いと言う確証に変わった事に安堵の表情を浮かべる。
そこへ、ＩＳを待機状態に戻して不安そうな顔で聡也もやってきた。
「あの・・・大丈夫でしたか・・？」
「えぇ、何ともありません。にしてもまさか私が敗れるとは・・・不覚でしたわ」
「油断するからよ、あんたって大体相手を甘く見て負けるタイプよね」
「それを言うなら鈴さんだって、一夏さんと初めてのクラス代表戦では危なかったようですけど？」
「ばっ、馬鹿言ってんじゃないわよ・・・あれは・・・そう、あそこから始まるあたしのターンだったのよ！」
セシリーの嫌みたっぷりな口調に、顔を真っ赤にして怒る鈴。
だが、他のメンバーはそんな彼女たちよりも聡也のＩＳが気になるようだった。

「でも、すげぇよ聡也。セシリアに勝っちまうんだからな」
「いえ……そんな事は」
一夏の若干興奮気味な声に対して聡也は謙虚に振る舞う。
だがそこへ更にラウラが賞賛した。
「謙遜することはない。練習といえども、勝ちは勝ちだ。胸を張ればいい。
そしてセシリアはもっと精進すればいい。ただそれだけの事だろう」
ラウラは鈴と言い争うセシリーを横目で見て、ため息混じりに言った。
それを見て苦笑する聡也。次に口を開いたのは箒だった。
「そう言えばお前のアレは、どこ製のＩＳなんだ？

どうもどこの国のＩＳにも似つかんフォルムだが」
「専用機だからじゃないの？」
「だがシャルロット。お前のリヴァイヴのカスタム機だって原型を止めていないだろう？
そう考えるとコレもどこかの量産ＩＳのカスタム機ではないのか？」
箒の疑問は当然だった。　黒いＩＳもそうだが、明らかにＩＳと言うには
メカメカしく工業製品のような無骨さがある。
全てのＩＳがそうだとは言わないが、異質な外観であるのは事実だった。
聡也はあたかも、そんな質問を予期していたかのように何の言葉の詰まり無く饒舌に答えた。

「僕のは“ホワイトアウル”」

「世界でたった“二機”の、ＩＳではないＩＳです」

第１５話～疑惑のジャパニーズと白き鳥～（後書き）

三重ではまだまだ桜が咲いてないのに、名古屋とかもう見頃ですもんね。
どうもしるくです。

今回初めて途中執筆を携帯から行ったので、少し文章がおかしかったりするかもしれませんがご愛嬌で。

さて、次はちょっとブレイクで短編を書くつもりです。楽しみな方そうじゃない方も、お楽しみに（ぇ

では１６話か短編か。
どっちかでお会いしましょう！

さよならッ！！

※少し執筆してみてわかったんですが、次は普通に１６話で行きます。
短編はまたどこかで～

第１６話～似て非なるもの～

一号機：起動失敗

二号機：起動失敗

三号機：起動成功も、定格出力で安定せず廃棄

四号機；同様のトラブルにて廃棄

五号機；初の定格出力運用に成功。※機動試験中に空中分解。搭乗者意識不明の重体

六号機：上記のテストを踏まえ安全性を考慮しすべての問題をクリア。

以後本機を甲式と命名

七号機；同様に成功乙式と命名。

※これより以降の試作機の開発の計画は無し。

～中略～

試験運用期間終了。以後両機登録名を

甲式：ホワイトアウル

乙式：ブラックアウル

と命名し、両機を専門研究機関のあるアメリカへ委譲するものとする。

以上、疑似ＩＳプロジェクト『Ｎ－Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ　Ｐｒｏｊｅｃｔ』ｐｐ４５－４７より抜粋。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ＩＳでは・・・無い？」箒が怪訝そうにつぶやく。
いや箒だけではない。
この場にいる誰もが同じ様な顔をしていた。
当然だ。
だってこの世でＩＳに対抗しうるのはＩＳだけであり、現にさっきセシリーを撃墜して見せた。
そんな物がＩＳではないと言われて、はいそうですか・・・と言うわけにはいかない。
「あぁ、いや、厳密に言えば全く異なるってわけじゃないんですよ。ただ・・・そう、似て非なる物というかなんというか」
聡也も聡也で、一斉に怪訝な目を向けられて困惑しているようすで語尾を濁しながら弁解する。
「似て非なるもの・・・か。だがそんな物ドイツに居るときにも聞いたことがないが・・」
「まぁ、開発自体が表には出ませんでしたからね」
「んん？　でも、ならそれをこんな所で話しちゃって良いの？」
シャルロットの質問に聡也は苦笑いを浮かべ、頭をかいた。
「あはは、もう言っちゃいましたし、それに別にコレはもう隠すような事柄じゃありませんから」

どういう事だろう。
通常どの国のＩＳも機密情報って言うのは一つ二つあるもので、詳細は開発した人間や操縦者以外には原則伝えられない。
だが聡也のニュアンスだと、まるで“ホワイトアウル”に

何の機密情報も秘匿性も無いって聞こえてしまう。
「確かに、全くないと言えば嘘になりますけど、
Ｎの技術自体もうこれ以上の進展は望めませんからね。
そんな事を隠した所で何の得もないんですよ」
「あ、ちょっと待って聡也。聞き慣れない言葉が飛び出した。
そのＮの技術っていうのは何だい？」
「あぁ、確かにＩＳでは使いませんよね。
Ｎの技術っていうのはいわゆる“ホワイトアウルの技術”ってことです。
僕のは、ＩＳに似てる物ってことでＩＳ－Ｎっていうんです」
「ＩＳ－Ｎ？何だよ、そのＮってのは」
「ＮｅａｒのＮですよ」
一夏の質問にサラッと答える聡也。
なるほどね。
近いって意味でＮか。
僕も含めて皆ようやく納得した様子で何度か頷くが、
それを聞いて心中穏やかじゃないのもまた事実だった。
「ねぇ、ちょっと待ちなさいよ。聡也、そのＩＳ－Ｎってのは誰でも使えるわけ？」
今までだんまりだった鈴が少し声のトーンを落として口を開いた。
「基本的には、操縦者登録をすれば大抵の人には。ＩＳに近いと言っても駆動システムやそもそも使われている技術が大きく異なりますからね」
「では・・・やはり」
セシリーもそれを聞いて、呟きながら考え込む。
「ん？　皆さんどうかしましたか？」
その様子に疑問を感じ、今度は聡也が怪訝な顔になる。
多分、鈴もセシリーも考えていることは同じだろう。
「聡也、あたし達ね。多分そのもう一機のＩＳ－Ｎと戦ったことあるわよ」

「え！？」
「そのもう一機というのは、黒い同型機ではありません？」
一気に顔つきが険しくなる聡也。
恐らく図星なのだろう。
だが特に、言葉を発することなく聡也は黙って耳を傾ける。
「あたし達、代表候補生でさえ手こずった無人機を、
ものの数分で再起不能にまで、追い込んだ。
その後も？打鉄？を何十機と先頭不能にしてたし。
信じらんない戦闘能力と実力だったわ」
「えぇ・・・調子が悪かったとはいえ私の攻撃が一度も当たりませんでしたものね。
まぁ・・・今回もですけど」
声が最後になるにつれてしぼんでいくことからも、ショックは相当大きかったようだ。
セシリー・・・まだ引きずっていたんだ・・・。
二人の意見を聞いた聡也は、しばらくあごに手を当てて考え込む。
この様子からも、もう間違いなく聡也は何かを知っているとみて間違いないだろう。
むしろ、そのために転校してきたとも考えられるし。
「う～ん・・・おかしいですね」
「何がおかしいって言うの？」
「本当にその黒いＩＳは、無人機を撃墜した後何十機というＩＳ相手に大立ち回りを演じたんですか？」
聡也の疑いに対して、鈴とセシリアが心外の声を上げた。
「何よ、あたしたちの言ってることが信じられないって言うの？」
「そうですわ！　私たちの言っていることにうそ偽りは無くてよ！」
セシリーは目で一夏と僕に同意を求めてくる。
僕たちはそれにうなずくと、鈴もそれを確認してほら見なさいよという顔で聡也をにらみつけた。
「い、いや別に信じて、ないってわけじゃないんですよ・・ただ・・

」
「ただ・・・何よ？」
「普通に考えて、ＩＳ－Ｎのスペックは最大稼動時でもせいぜい通常のＩＳの能力の半分以下ぐらいの出力した出せないはずなんです・・・。
それなのに、いくら日本の量産機とはいってもそんな何十機を相手になんて」
「ちょ、ちょっと、それ本当なんですの！？」
これには僕やセシリーたちあの場にいた人物だけじゃない。
その場にいなかったラウラやシャルロット間でもが驚いていた。
なぜならその事実は、その操縦者がとてつもなく実力が高い人物であるということを
暗に示していたからだった。
・・・そう思うと僕たちよくあれに勝てたよね。
「少し良いか？」
驚きのあまり少しの間、沈黙が流れた後
それまで腕を組んで、ただ聞いているだけだった箒がズイッと前に出た。
「えぇ、何ですか？」
「とりあえず、その黒いＩＳのことはなんとなくわかった。
だが忘れてはいないか？　あの時ＩＳはもう一機いたことを」
あ、そういえば。
確か紫色の戦槍持ったＩＳだったはずだ。
ＩＳ－Ｎの話が、結構大きなことだっただけにポンッと頭の中から飛んでしまっていた。
「それ、紫色のＩＳじゃなかったですか？」
「・・・ということは知っているんだな」
箒の、尋問のような鋭い声に聡也はゆっくりと頷く。
「あのＩＳは、紫香楽製近接強襲型ＩＳ？紫燕？。操縦者は・・・・・」聡也は一呼吸おいて、息を整えると意を決して言った。

「僕の姉さんです・・・」

◇◆◇◆◇◆

あいつら・・・特にあの女、時々訳わかんねぇ事しやがるし」
「大丈夫だって、博士を信じようよ」
少年は屈託のない笑みを少女に向ける。
そんな笑顔を見せられたら、さすがに心配そうな顔は見せられなかった。
「まぁ、何があっても大丈夫だって。
聡也の事はあたしが守るからよ！　この紫香楽　聡華がな」

少女は高らかに宣言して、ニカッと笑う。
それを見た少年も同じ様に笑顔で答えた。
「うん　頼りにしてるよ・・・姉さん」
最後の一瞬だけその笑みが、不適なものだと言うことに、少女は気がつかなかった。

◇◆◇◆◇◆

「ほらほら、箒もセシリアを、いじめないいじめない」
「しゃ、シャルロットさんだけが私の味方ですのね・・・」
「だが事実だぞ？」
「ま・・・まあ、そりゃそうだったけどさ・・・」
「裏切られましたわっ！！」
ラウラの意見に同調したシャルロットを見てセシリーがさらに凹んでしまう。
まぁ仕方ないよね、若干持ち上げて落とされた感じだから。
「アァ～ルゥ～」
最後の手で僕に涙目で、同意を求めてくるセシリー。
その頭をやさしくなでてあげる。
「よしよし・・・お兄さんが飴をあげようね」
「うぅ・・・ありがとうございます～」
包み紙を破り、ポイッと口の中に飴を放り込むセシリー。
それを見て箒が、呆れた目でこちらを見やる。
「おい、アルディ。あんまり甘やかすな。
失敗をうやむやにしてしまっては、セシリアのためにもならんぞ？」
「甘やかされてなどおりませんわ！　アルは、味方のいない私をかわいそうに思って手を差し伸べてくださっただけのこと。
どこぞの誰かみたいに、同じミスをチクチクつつくような方に言われたくありませんわ！」
「・・・そういうことらしいよ」
「ふん」
「まぁまぁ、箒そんな怒るなって。シワになるぞ？」
そして一夏には問答無用で箒のチョップが直撃した。

「そういえば・・・その、アルディ」
ラウラが少し気まずそうにうつむきながら名前を呼んでくる。
「何？」
「お前の・・・ＩＳだが。どうなのだ？」

「ラウラさん、あなたどの顔でそのような」僕は、あの件に関してまだ納得のいっていないセシリーを片手で制する。
不服な顔を向けるセシリーだったが、すぐにそっぽを向いて座りなおした。
それを確認してから僕はラウラへと向き直る。
「それがまだ、何も」
「見てもらってもいないのか？」
「一応姉さんには見せたんだけどね、こういう破損ケースはすごく希らしくてわからないっていわれちゃったよ」
「・・・・そうか」
「まぁ、あの時も言ったけどもう気にしてないんだから、そんなに気を使わなくて良いんだって」
まだラウラは少し顔を伏せている。
多分、ラウラ本人もこのことに対してどうしたら良いのかわからないのだろう。
自分ではどうにか責任を取りたいのだが、その方法が解らない。
加えて僕もこんなスタンスだから余計に。
だけど、前にも言ったが僕は本当にもう何とも思ってない。
やっちゃったことを、責めてもそれで何が変わるわけでもないし何より、自分も不愉快だからね。
と、急に肩を掴まれる。
振り返るとそこには、凄く笑顔の（怒った）セシリーがいた。
えぇと・・・・。
何で怒ってるのかな。
「アル？」
「は、はい・・」
「あの時とは、いつでしょう？」
「あの時？　あ、あぁ。姉さんと話をした夜にラウラに呼び出されてね」
「何故、何も私に教えて下さらなかったのでしょう・・・私、寂し

いですわ、あぁ寂しい寂しい・・・」
ぎゅうううっ！
い、痛い痛いぃッ！！
め り込んでる、セシリーゆ、指がめり込んでるッ！！
「セシリー！　何をそんなに怒ってるのさ！！」
「まだ分かりませんの！！」
何でかな。
・・今肩からボギュッって音がした気がする。

あ～、えらい目にあった。
僕は、皆と別れて織斑先生の下を訪れていた。
と言っても、織斑先生は会議中だから職員室前で待ちぼうけだけど。

ジャラッ。
僕は真っ二つの“ストライク・バーディ”を見やる。
本当に大丈夫なんだろうか。
姉さんでも、現状ではコメントを避けていた。
つまりそれは下手なことは言えない問題が起こり得る可能性があると言うことでもある。
にしても、自爆で使えなくて、ようやくと思ったら身体がアウトで、これだ。
実戦経験どころか、満足にＩＳを起動させた時間が短すぎて不安になってくる。
なるようにしかならないとは言え、時たまそう言う考えが首をもたげるのも事実な訳でね。
そんなことを考えていると、多くの先生たちが職員室へ帰ってくる。
どうやら、会議は終わったらしい。
そして当然その中には織斑先生の姿もあった。

「織斑先生」
「ん？　私に用事か？　すまないな待たせてしまった」
「いえ」
僕は織斑先生に促されて、職員室へ入る。
そして織斑先生は、自分の椅子に腰掛けるとすらりと伸びた足を組んで冷めたコーヒーをすする。
「で、何の用だ？」
「このことで・・・」
僕は織斑先生に？ストライク・バーディ？を差し出す。
織斑先生はそれを受け取ると、渋い顔で目の前で掲げた。
「もう、ローラには連絡したのか？」
「はい、一応」
「で、あいつはなんと言っていた？」
「先に、こっちで調べてもらえって言ってました。その結果をまた連絡してほしいと」
織斑先生は大きくため息をつくと、ジト目で何もない宙を睨んだ。
おそらくそこには、姉さんでも見えているのだろう。
「まったく・・・、面倒事は学園側に全部丸投げか。
アメリカらしいというかローラらしいというか」
その点はアメリカ人の僕も、何も言い返せません。
何気にこのＩＳ学園の設立の際にもまぁ、圧力を掛け捲ったという噂もあるし。
まぁ・・それを、貫いて作らせちゃうあたりがさすがわが母国だとは思うけど。
「あの・・それで・・」
「あぁ、まぁ調べるだけ調べてみよう。簡易検査なら明日には結果が出ると思う」
「そうですか」
とりあえず結果待ちか。
僕は、もう一度頭を下げ職員室を後にした。

◇◆◇◆◇◆

Ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ ｉｎ ｔｈｅ ｓｔａｒｔ ｔｏｌｅｒａｎｃｅ ｌｅｖｅｌ？

「予想ダメージレベルＣ、起動許容範囲内と断定・・・ね」

ふぅっとため息を吐いた後ゆっくりとプラスチックマグカップを口につけるといきなりダンッと乱暴にたたきつけた。

「さっきから、どうしてこうバラけるのよ、腹立つわねっ！！」

ローラは、数値のメモ書きをクシャクシャに丸めると、ゴミ箱へ放り投げた。

紙のボールとなったそれはきれいな放物線を描いて、ゴミ箱に吸い込まれていく。

「ナイスシュートね、鳥さん？」

茶化すような声に、ジロッとローラが反応するとそこにはきれいな金髪をたたえた女性がココアを手にたたずんでいた。

「・・・ナターシャ」

「そんな目しないでよ」

ナターシャは近くの開いていた椅子を引っ張ってくるとそこに腰掛ける。

「荒れてるわねぇ・・・。何をやってたのかしら？」

「なんでもないわ、用がないなら何処か行きなさいよ」

ローラは額を押さえながら、左手でシッシと追い払う。

しかしナターシャはそれに気を悪くすることなく、ニコニコ笑ってローラを見ていた。

「何よ・・？」

「そんなに邪険にすることないじゃない。大方アルのことで頭悩ませてるんでしょ？」

「わかってたんなら・・・聞～く～な～ぁ」

ローラはナターシャの髪をワシャワシャとかき乱す。

「ちょ、ちょっと・・ローラやめて～」

「こうなったら、ナターシャでストレス発散してやる～」
「ちょ、ちょっと痛い痛いっ！！」
「このこの～！！」
その後しばらく、それは続いてナターシャの髪は見るも無残にボッサボサになってしまった。

「もー・・どうしてくれるのこれ・・・」
「クシあるわよ」
ローラは再び、ＰＣに数値を入力しながらナターシャにクシを手渡す。
ナターシャはそれを受け取ると髪をとかし始めた。
「ちょっとぉ・・・絡んじゃってるじゃない、痛んだらどうするつもり・・・」
「いちいちセットするなんて、あたしには理解できないけどね」
「あなた、セットしてないの？」
「そうね、暇があればやってるけど、基本寝起きのままね」
ローラはあごをつきながら、面倒くさそうにポチポチと入力していく。
そして、エンターを押して結果画面を見るたびに
目に見えてイライラが募っていくのがナターシャにはわかった。
「ローラ・・・シワが増えるわよ？」
「朝からずっと、画面とにらめっこしてたらそんな心配どっかに飛ぶわ」
「・・・ローラに憧れてる子も少なくないんだから自覚がほしい所だけどね」
「あなたほど人気じゃないわよ」
「そう言えば、あなた今度試験があるんですってね」
「ハワイ沖でね。まぁ普通の試験稼働だから・・楽に終わると思うけど」

「あたしも、楽に終わりたいわ・・・」
ローラは、ギシッと背もたれに寄りかかると大きく体を伸ばした。
そんなローラを見ながらナターシャはクシを置いてズズッとココアをすする。
解決策はわからないが、ローラのほしい答えは、まだまだ出そうにないということだけは分かった。

◇◆◇◆◇◆

命取りだ。
（ふぅ・・・そう言えば、これオーバーホールの時期でしたっけ）
聡也はこれ以上どうにもならないと判断して、
ため息交じりにパタンとハッチを閉めＩＳ－Ｎを待機状態に戻した。
そこでふと聡也は思い出した。
懸念事項はこれだけではないと言う事に。
（そう言えば・・・今日一回起動させたから・・・キーはあと五本ぐらいですね）
ＩＳ－ＮはもともとＩＳのように自在にオープンやクローズを行う能力を持たない。
待機状態のシリンダーカードに専用のキーを差し込むことで
初めて起動する。
ＩＳに比べるときわめて限定的なパワースーツということになるだろう。
そしてそのキーは一度使うと霧散してしまうので、回数も限られる。
少なくなれば博士のほうからキーが送られてくるようになっていた。
だがまぁそれもこちらから連絡しないといけないのだが。
（残り二本切ってぐらいからでまぁ大丈夫でしょうけど）
聡也は、少し考えてから使っていた工具や器具を所定の位置へ戻す。
基本的に？ホワイトアウル？の整備は出来るだけ聡也がやる事になっていた。
博士いわく、？私が居ない時に壊れたら手も足も出ないじゃＩＳ－Ｎの操縦者としては失格？だそうだ。
実際、今回セシリアに勝てたのはそれも大きい。
自分で整備するからこそ今日は調子がどうなのか、悪いのかそれとも良いのか。
良かったらどこが良いのか。悪いならどこをカバーすればいいのかまで
理解するのではなく身体で感じる事が出来る。
だからピットへ帰ってきてすぐに右側のスラスターの異常に気づけ

たのだ。
ＩＳに比べて性能の劣るＩＳ－Ｎで、ＩＳに勝つと言う事はそう言った見えない所で勝負するしかないのである。
（・・・まぁ、おかげで色々知識も増えて良かったと言えば良かったんだけど）
そう言えば、まだ先の話だが二年生になると整備科というのがあるらしい。
実のところ、聡也は戦闘での実力は高がＩＳ－Ｎの操縦よりも機械の整備の方が好きである。
何より、自分で調整したところが結果となって現れる事が何より楽しい。
二年になったらそっちの道へ進むのも悪くない。
そんな事を考えているうちに機材の片づけが終わる。
すると、ピットのハッチが開き数人の女子が話をしながら入ってきた。
（おっと、そろそろ出よう。邪魔になってもいけませんし）
聡也は足早にピットを去ろうとする。
だが・・・。
入ってきた女子の一人の顔を見てその動きが止まった。
（・・・・・・え）
相手はこちらを見向きもしなかったが、聡也にとってその女子は衝撃を受けるには充分な人物だった。
（ワインレッドの髪に・・・・赤い眼・・・・？）
絶対にそれは間違えることは無い。
（それに・・・・少し聞こえたあの声・・・）
いや間違えられるはずがない。
（どうして・・・・なんで！）
聡也は既にパニックを起こしていると言っても過言では無かった。
どうして、なぜ？　そればかりが聡也の頭を支配する。
あの人はここに居てはいけない。

いやそもそも居るはずがない・・・。
聡也はバッと振り返ってその名を叫んだ。
「姉さん！！」
その声に雑談していた女子全員が振り返った。
その中には確かに、赤い瞳を持つ目じりのつりあがった女子がこちらを怪訝そうに見つめている姿があった。
そしてその女子はそのまま眉ひとつ動かさずこう言った。

「はぁ、姉さん？　誰だよお前？」

第１６話～似て非なるもの～（後書き）

短編書いてたら行き詰ったなんて口が避けてもいえない。
どうもお久しぶりです。
しるくです。

ここらからちょくちょくオリジナル設定が食い込んできますね。
・・・え？
元々食い込んで立って？
・・・しらねｗｗ

そう言えば、本当に関係ないんですが、親父が僕のバイト先の面接を受けるそうです。
。。。びっくりしました・・本当に。

さてさて・・それでは。
１７話でお会いしましょう。
さよならっ！

第17話～もう一人の聡華もう一つの紫燕～

その言葉の意味を聡也は理解できなかった。
誰って？
何を言ってるんだ・・・だって僕は・・・。
「誰と勘違いしてんのか分かんねぇけど、あたしに弟はいねぇぞ？」
その荒っぽい口調だって・・・。
「勘違いで変な事言うんじゃねぇよ」
僕の姉さんそのものじゃないか。
聡也は、冷たくあしらわれても尚も食い下がった。
「でも、あなたは僕の――――！」
「いい加減にしろっての！」
いきなりの怒号にビクッと身体が震え立つ。
その女子は、僕の胸倉をつかむと睨みをきかせ、語気を強めた。
「てめぇ、あたしの言ってる事が分からねぇのか？　あたしに弟はいねぇ！
分かったらこれ以上話しかけんな、いいな？」
吐き捨てるように言うと女子は、そのまま僕の胸倉を乱暴にはらう。
それがあまりに乱暴で、僕は尻もちをついてしまった。
そんな僕を見て、一緒に来た女子が手を貸してくれた。
「大丈夫・・？」
「あ、はい・・ありがとうございます」
僕はその手をつかんで、立ち上がり礼を言う。
「にしても、君も命知らずだね」
「え、どういう事ですか？」
「彼女、今日はこんなぐらいで済んであたしたちもホッとしてるけど、
あんな事言ったら、酷いと殴られちゃうよ」
「はぁ・・」

女子は苦笑交じりにちらりと、？姉さん？を一瞥する。
本当に・・・姉さんじゃないのか？だがあまりにも共通点が多すぎて、
すぐにそんな疑問など消えてなくなってしまう。
でも、また聞けば今度こそ殴られる。
間違いなく。
だから僕は、とりあえず目の前の人に名前を聞く事にした。
「・・・あの、あの人。名前はなんて言うんですか」
「あれ、知らずに声かけてたの？　お姉さんって呼ぶから知ってるものかと」
「はぁ・・・まぁ、その似てるんで・・」
僕はあいまいな返事を返す。
と言うより、そんな返事しかできなかった。
いまだに頭が混乱しているのだ。
仕方がない。
女子は少し驚いた顔を見せたが、すぐに頭を切りかえて名前を教えてくれた。
「彼女は、鳥越　聡華。ＩＳ学園二年一組の風紀委員よ」
「とり・・・こし・・そうか。・・・・名前は同じ・・・」
僕はその名前をゆっくりとつぶやく。
それを不思議そうに見つめながらも、「じゃっ」と軽い挨拶を残して女子は聡華のもとへ走っていく。
・・・あ、そう言えばあの人も先輩だったんだ。
今さらながらそんな事を思うほど、僕は混乱していた。
どうすればいいのか分からないが、だがそれでも呆けているわけにもいかない。
アリーナへと消えた先輩達の後を僕は追いかけていった。
そうだ、確認すべき事はもう一つある。
追いかける僕の手には、シリンダーカードとキーが握られていた。

◇◆◇◆◇◆

写真で見ても境内などとても立派な作りで、建物だけでも名家を思わせる。
そして、そこには剣道の道場もあるらしい。
なるほどね、そりゃ強いわけだ。
実家が剣道の道場ってことは、父親が師範かな。
・・・ふぅん。
僕はまたパラパラとめくっていく。
どうせなら射撃場とか無いのかな・・・無いよね。
自分で思いながら、それをすぐに否定する。
だいたい、銃や刀の取り扱いが特に厳しいこの国でそんなものがあっても問題だ。
あってもせいぜいこの学園ぐらいだろう。
本当にそう思うと、この学園って滅茶苦茶だよね。
どこの国の法にも触れないから、原則この学園内では高校生が何の許可や免許もなく銃器や真剣を扱える。
ある意味色々危ない。
あ、でもＩＳの方が強いから、いくら銃器で暴れまわっても無駄か。
すぐに鎮圧されるだろうし。って、そんなのはどうでもいい。
今は、どこを回るかだ。
ふ～む。
再びパラパラとめくっていくと、見開き四ページも使って特集の組まれたページを発見する。
？買い物ならここで決まり、好きなあの人と共鳴しちゃおう！？
駅前大型ショッピングモール？レゾナンス？か・・・。
特集を見るとそこは、かなり大きくまた駅と繋がっているため利便性も高い。
何よりその品数の豊富さは、アメリカ人のアルディでさえ驚くほどだった。
アメリカにもメガスーパーと呼ばれる広大な敷地面積を持つスーパーが存在する。

だが？レゾナンス？のそれは、メガスーパーに負けずとも劣らないものだった。
いや品質だけなら、？レゾナンス？の圧勝だろう。
確かにここで決まりだな。
・・・・っていうかこれは結構役に立つのではないだろうか。
何気に最後のページには鉄道の路線図なんかも掲載されている。
裏表紙を見て値段を確認すると、そんなに値段も高くないし。
よし、買おう。
僕はそれを、レジに持っていく。
レジの人がやたらニヤニヤしてたけど、一体何だったんだろう。
僕は寮の部屋に帰って、雑誌の表紙を見てようやく分かった。
・・・・なるほど、デートね・・・。
僕は苦笑いしながら、さっき立ち読みで見つけたスポットをメモに列挙し始めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ねぇ、聡華。ほんとに知らない子だったの？」
一緒にいた女子の一人が声をかけてくる。
内容はさっきの訳の分からねぇ一年坊主の事だった。
聡華は、面倒くさそうに頭をかきながらそれに答える。
「あぁ、知らねぇよあんな奴。大体よあたしが一人っ子だってのは皆知ってんだろうが」
「それはそうだけどさぁ・・・あの子結構必死だったし・・」
「必死だったら、何でも許されんなら風紀委員なんていらねぇわな」
聡華はまだ口をとがらせる同級生を軽くあしらうと準備を始める。
起動させる前に、ＩＳの状態をステータス上で確認する。
こう言うのは安全上とても大事なことだ。

いざ起動してみて、ダメでしたじゃ笑いごとにもなりゃしねぇ。
それに風紀委員が事故ってのも更に笑えねぇよな。
聡華はステータス画面で異常が無い事を確認すると、紫色の丸いキーホルダーを取りだす。
これが自分のＩＳの待機状態である。
さて、始めっか！
ＩＳを起動すると聡華は光に包まれそして一瞬で装甲が展開する。
紫を基調とした、そのＩＳは腕や足そして背部に至るまで所せましとスラスターが搭載されている。
それでいて、気品を漂わせる流麗なフォルム。
これが烏越　聡華の専用機。高機動強襲型ＩＳ？紫燕？である。
そして、すべての準備が整い早速自主練と思っていた時、聡華をかすめるようにして高エネルギーの閃光が走った。
反射的に身構える聡華と同級生たち。
聡華が見上げるその先には、白いＩＳが荷電粒子砲を構える姿があった。
「・・・・・・てめぇ、やってくれんじゃねぇか」
「・・・・確かめたい事があります」

「確かめてぇ事だと？」
聡華は目を細める。
聡華は姉ではないと、はっきりと言った。
これ以上他に何を確かめたいと言うのか。
怪訝な顔をする聡華に聡也はまた静かに言う。
「あなたの実力ですよ」
「あんだと？」
「僕の姉さんじゃないと仰るならそれはそれで良いです。
だけど僕はまだ納得まではしていません」
聡也はまるで、何か台本があるかのように冗舌に言葉を紡いでいく。
それを聡華は、所々相槌を打ちながら聞いていたが、その何かを演

じているかのような
話し方はことごとく聡華の神経を逆なでた。
「だから、実力を知りたいんですよ。
僕の姉さんなら・・・僕なんてひとたまりもありませんからね。
僕の姉さんじゃないのなら、良い勝負ができるかもしれませんよ？」
そこでようやく聡華は聡也の言っている本当の意味を理解し、
そして見かけによらず考える事が、えげつないと言う事に更に腹が
立った。
つまりだ。
自分が勝ってしまったらその時点で自分自ら？姉である？と言う事
を宣言したも同じ。
それが嫌なら、無様に自分に倒されろと言う事を遠まわしに言って
いるのだ。
（・・・やろぉ、いい度胸してやがんじゃねぇかほんとに・・・ッ
！！）
だが、聡華はその考えに気が付いたところで冷静に事を判断するよ
うな人間では無い。
相手の策だと言う事が分かっていても、この人物は自らその中へ突
っ込んでいく。
そしてそれを、内側から何もかもをぶち壊す。
それが風紀委員である、鳥越　聡華と言う生徒だった。
「へっ・・・上等だ。その減らず口・・・・黙らせてやる」
「良いんですか？　僕を倒しちゃうと、姉さんってことになっちゃ
いますよ？」
「ならねぇよ」
「・・・・・・？」
聡華は、しれっと言い返す。
そして疑問符を浮かべる聡也に対して、名乗りを上げる様に高らか
に言い放った。

「あたしがそれすらも・・・ぶっ壊す！！！」

◇◆◇◆◇◆

蹴りを入れる。
衝撃で吹き飛んだ聡也が体勢を立て直す前に再び?大蛇?の一撃が襲う。
「ぐあっ!!」
今度は完璧に入った?大蛇?の衝撃がシールドを貫いて聡也に激痛を与える。
そして立て続けに二回三回と“大蛇”を振り回して攻撃を加える聡華。
繰り返し訪れる痛みに顔をゆがませながら、
聡也はなんとか頭の中で打開策を模索する。
この状況、別に聡也が遅いというわけではない。
聡也の想像に反して、そしてあの紫香楽　聡華の?紫燕?に対して、この鳥越　聡華の?紫燕?が速すぎるのである。
?ホワイトアウル?には通常のＩＳの平均的な速度を出せるだけの推力はある。しかしそれは、あくまで?打鉄?の様な汎用機を相手にする事を前提に組まれた出力でありこのような高い機動力をもつＩＳが相手だと、明らかな出力不足だった。
・・・このままじゃ、クロスレンジは一方的になる・・・距離を開けないと!!
聡也は?大蛇?の振りかぶるタイミングを見計らって、?ホワイトアウル?の
全スラスターに最大推力での後退を命じる。
それと同時に、砲を荷電粒子砲から、
バックパックにラックされたもう二門の砲に持ち変えた。
それは荷電粒子砲ではなく、荷電粒子砲よりは連射の効くレールガンだった。聡也はその二門のレールガンで牽制しながら距離を取ると、再び荷電粒子砲に持ちかえて
一撃必殺の威力で聡華を狙う。
だが距離を取られた聡華は、焦り一つ見せずむしろ

こちらを小馬鹿にしているような顔をしていた。
聡也の攻撃をひょいひょいとかわして、ニヤッと口元を釣り上げる。
「なぁ、お前距離を取れば勝てるとか思ったのか？」
そして届く不気味なほどに自信に満ち溢れた聡華の声。
一瞬の疑問の後、聡也は自分が最悪の隙を相手に与えてしまった事に気が付く。
そもそもの間違いは、一方的になると踏んでとっさに開けたこの約三十メートルという？死の間合い《デッドライン》？
聡也の考えに、このスペック表に、そして何より目の前のＩＳが？紫燕？であると言う事に。
そのすべてに間違いが無ければ。
（不味い！　アレが来る！！）
「しまっ！！！」
その声が漏れたのは、？大蛇？が振り下ろされる前だったか後だったかは分からない。
だが、？大蛇？が振り下ろされる直前に聡華は聡也の耳元でこう囁いた。
「あたしに、逆らうな」
その直後聡也は、アリーナの地面にたたきつけられていた。
・・・聡也の完敗である。

聡也はＩＳ－Ｎを待機状態に戻して身体を引きずりながらピットへ戻ると、
そこには聡華が仁王立ちで待っていた。
既に他の女子はいない。
聡華が先に行かせたのか、どうかは定かではないがとにかく今はピットに聡華と聡也の二人だけがいる。

聡華はジッと聡也の顔を睨んでいる。
対して聡也も聡也で、若干混乱していたとはいえ、やっぱり無理やりすぎたかと
気まずそうな顔を聡華に返した。
「気まずそうな顔するってことは、少なからずやっちまった観はあるわけだ」
「・・・・えぇ・・それは」
「まぁ、今回はその顔に免じて許してやる」
聡華は不機嫌そうにつぶやく。
聡也はただうつむくことしかできない。
そんな聡也に聡華は一枚の紙を手渡した。
それは名刺ぐらいのサイズで表に名前、裏にはＩＳ学園の校章が印刷されていた。
「それは、あたしが？風紀委員？として関わった事を
証明するための、まぁ証明書みたいなもんだな」
「どうしてそれを僕に？」
「言ったろうが、許してやるからだよ。一応さっきのは私闘に当たるからな。
仮に教師に何か聞かれたら、そいつを渡しな。にしてもなぁ。
大体あの・・・誰だったっけか。ほらあのドイツ人・・・」
聡華は思い出せない名前に首をひねる。
ドイツ人、ドイツ人・・・・。
とりあえず、聡也は自分の知っている名前を挙げてみた。
「ラウラですか？」
どうやらそれは正解だったようで聡華はバッとそれに食いついてくる。
「おぉ、そうだそうだ。そいつ。
そいつがさ入学当初っからやらかしてけが人まで出しちまってな。
別段、教員の間じゃよくあるもめごとの延長線上ってことで
さほど大きな問題にはならなかったんだが」

ポリポリと頭をかく聡華。
それを見て聡也は少し、姉の面影を重ね合わせていた。
・・・きっと、僕のそばに姉さんがいたらこんな表情するんだろうな
聡也には、そもそもなぜか姉であるという事を特定できても、
姉との思い出や記憶を思い出せないでいた。
それがなぜなのかは分からない。
ただ本当に過去の事を思い出そうとすると、その度に変な頭痛に襲われるのだ。
だから聡也には、きっと姉さんなら・・という想像しかできない。
聡也にはその想像がたまらなく楽しい半面たまらなく切なかった。
しかし今回はその姉に瓜二つな人物が目の前にいる。
その思いも更に強いものだった。
だが、そうは言っても今は聡華の会話中。
当然想像に浸っていては聞き逃してしまう。
そして案の定・・・。
「聞いてんのかッ！」
「・・・すいません」
余計な一発を貰う。
聡也はその一発で我に返るともう一度聞き直す。
「で、えぇと・・・なんでしたっけ？」
「はぁ・・・お前強かなのか馬鹿なのかどっちなんだよ」
流石の聡華もあきれ顔だったが、気を取り直して説明し直す。
「だから、あのラウラって言うドイツ人の暴走を止められなかったっていうんで、
教師陣とも掛けあって風紀委員が独自に私闘に関する規則を設けたんだよ」
「規則ですか？」
「そこでこの名刺だ」
聡華はピッと名刺を指で挟んで掲げる。

「こいつはな、その私闘に風紀委員が立ち会ったっていう証明なんだ。
仮にアリーナでなんかあって教師に聴取されても、そいつ見せれば後は、それを回収した教師から個別に連絡が来るようになってんだ」
言うと、聡華は小型の通信端末を指さす。
それは片耳に装着した状態で使用するハンズフリーの様な物だった。

なるほど。
中々考えられている。
特に私闘のみに規制をかけているのがいやらしい。
この方法だと、模擬戦をしていたという言い訳が通用しづらい。
逆に本当だった時は少し問題がある気もするが。
どっちにしてもこの方式を考えた人は頭のいい人だろう。
得心いった顔の聡也を見て、少し笑うと聡華はきびすを返す。
「じゃ、これ以上面倒事起こすんじゃねぇぞ」
そう言う聡華の背中にやはり自分の姉を重ねてしまう聡也だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

よし、こんなもんかな。
僕はペンを置き書き終えたメモを見やる。
そこには、目印やそのスポットへ行くための道筋などが書かれている。
非常に簡単なものだったが、所詮メモ。
わざわざ、ややこしくする必要もない。
（後はコレを当日までに頭に叩き込んでおくだけか）
何事もそうなのだが、僕は暗記が大の苦手である。
だが苦手とは言え、セシリーとの買い物だ。失敗して変な空気にな

りたくない。
そうして必死にメモの内容を頭に入れていくうちに、気がつけば夜になっていた。

夕飯がまだだった事に、気づいた僕は食堂に来ていた。
時間ももう少しで食堂も閉まると言い事もあり、閑散としている。
僕は食券を渡して今日の日替わり定食を受け取る。
タイの塩焼きと幾つかの惣菜。それに味ご飯がついている。
お盆を持って座る席を探していると、奥の方に一人僕と同じく遅めの夕食を食べる鈴を見つけた。

「や、鈴。隣良いかな?」
「ん? 別に良いけど」
鈴に許可を貰って隣に腰掛ける。
鈴はどこか上の空で、何度かため息を繰り返していた。
鈴のこういう姿は珍しい。いっつも人を嵐のごとく巻き込んでワガママを連発するのに。
「あんたねぇ・・・はぁ、まぁいいわよ」
また考えを読まれてしまったらしい。
よし、今度ポーカーフェイスの通信教材カタログを取り寄せよう。
にしても本当に様子が変だな。
「ねぇ、鈴何かあったの?」
「何かあったから、こんなにテンションがた落ちなんでしょうが・・・」
また鈴は大きなため息を吐く。
う~ん・・・やりにくいなぁ。
ふむ、仕方無い元気付けてあげよう。
「あ、ひょっとして恋煩い、一夏に対する?」

「馬鹿言ってんじゃないわよ!!　何であたしがあいつのことで気を病まなきゃいけないのっ!」
「いや、だって好きなんでしょ?」
「アメリカ人死ねっ!!」
おぉう・・・。
何時もの鈴に戻った（?）ようだがいきなり、アメリカ人に死刑宣告が。
鈴を元気付けようと思っただけだったんだけど。
「そんなもんで元気付くかっ!!」
パッコーンっ!
またも読まれて今度はお盆で僕の頭を叩いた。
どうやら鈴は、体調不良でお盆を武器か何かと勘違いしているようだ。
「鈴、お盆は殴るものじゃないよ」
「そんな真顔で言うなっ、　そこまで重傷じゃないわよ!」
鈴は、お盆を乱暴に置くと鼻を鳴らしてテーブルに肘をついた。
「ごめん、ごめん。ちょっとしたジョークじゃないか。それで、一体何をそんなに落ち込んでるのさ」
僕は鈴にわざとらしく目の前で手を合わせてオーバーアクションの謝罪を行う。
まぁ鈴もそこら辺のことは分かっていたらしく、まぁ良いけどと言ってまたまたため息を漏らした。
「で、あたしがこんなにテンションダウンしてんのは聡也の事よ、そーやの」
聡也の事?
珍しいな。鈴って自分の興味ない事には全く関わろうとしないタイプだよね。
その証拠に初対面ではセシリーの事、全く知らなかったし興味すら持ってなかった。

まぁ、聡也について鈴に全く興味がないかと言えばウソになるが、それでも直接的に鈴がテンションダウンする理由が見つからない。
「聡也がどうかしたの？」
「あいつね、何したかわかる！？　こともあろうに風紀委員に喧嘩売ったのよ！！
まぁあたしも詳しくいろいろ聞いたわけじゃないけど、なに馬鹿やってくれてんのよ・・」
鈴は、フンッと鼻を鳴らすと足を組んで何もない空間を睨む。
聡也が？
あんなにまじめで、優等生っぽい聡也が喧嘩を？
しかも風紀委員に？
「ちょ、ちょっと待って。どういうことさ！？　本当に聡也がやったの！？」
「あたしだってびっくりしたわよ！　あいつまだ会って間もないけどぱっと見おとなしそうだし」
「・・・あぁ、でもなんで聡也がそんな事を
引き起こしたからっていって鈴が落ち込まなきゃいけないのさ？」
「あいつの所為で、風紀委員に二組が目をつけられたからよ。
本当に迷惑だわ！！　これでますます動きにくくなっちゃったじゃない。
もう、どーしてくれんのよっ！」
鈴は言うとゴンッ大きな音が出るほどの勢いで机に突っ伏した。
・・・いや、でもあの聡也が。
・・・・何かありそうだね。
彼、セシリーとの戦闘の時にも思ったけど慎重っぽいし、
何の考えもなくそんな行動をとるとは思えない。
フフっ、これはちょっと面白そうだね。
とにかく、明日の放課後いろいろ情報を集めてみよう。何かわかるかもしれないし。
・・・・って言うか鈴さっき動きにくくって言ったけど。

「やっぱり動きにくいって一夏のこと？」
「はぁ？　そうに決まって・・・」
なるほど。
やっぱりね。
確かに今織斑先生だけでも大きな障害だもんねぇ。
うんうんとうなずく僕の頭にお盆がクリーンヒットし
その音が閑散とした食堂に響いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ふぅ。
お決まりと予想通りの答えをありがとう。
ローラは心の中でつぶやいてＰＣから顔を離して伸びをする。
ローラはあれからずっと、データの打ち込みに追われそのたびに表示される
欲しくもない答えにイラつくという作業を繰り返していた。
そしてそれを家に持ち帰ってまで続けていたのだが、
もう今となってはイライラする気さえ起こらない。
期待もしなければ返ってくる答えに落胆する事もなくなる。
完璧に作業である。
ローラは立ち上がると、傍らの缶コーヒーに口をつける。
一息つくが正直言ってローラは、ほぼ半日を割いて作業をしたというのに
？ストライクバーディ？の現状をまったくといっていいほど把握できていなかった。
ローラはチラリと欲しくない答えを表示するＰＣに目をやる。
・・・こんな事初めてだわ・・・。やっぱりあのＩＳは、？普通じゃない？のかしら？
ローラはあの？ストライク・バーディ？をモンド・グロッソで使用

していた時も
何度か不思議な体験を経験していた。
言っても誰も信用してくれなかったがローラは、
いやローラもまたあの？少女？と邂逅の経験を持つ人物だった。
ローラにはアルディがその経験をしたかどうかまではわからなかったが、
当時のローラは何か得体の知れない物を内包する自分の愛機に若干の怖さと、
それでいてなぜか守られているような不思議な気持ちを感じていた。
しかし、そうはいっても結局はＩＳ。
あの当時だって半日も使えば欲しい答えや、
それに到達するための手がかりは見つかったものだ。
だが今回はそれがまったくと言っていいほど見つからないのである。
あのＩＳは、あたしが一番よく知っているＩＳだから・・・
不測の事態に陥っても、あたしなら何とかなると思って
あの子に預けたんだけど・・甘かったわね。
今更なにをと思いながらもローラは自分の考えの甘さに少し後悔する。
今回は、その事でアルディが怪我をしたというわけでもないが、
いずれにしてもその可能性は捨てきれない。
それにだ。
あの“Ｎ”が出てきている以上最悪のケースも考えるなければならず、ローラは一瞬寒気を覚えた。
そしてローラの中で、とある考えが首をもたげる。
今までは、こちらでの事もあるし責任のある立場だからと敬遠していたその考えだったが
自分の対応の遅れで、アルディを危険にさらす可能性がある以上迷っている場合ではなかった。
ふぅ・・姉馬鹿とか言われるかしらね。でもこうなったら仕方がないわ

行きましょうか、日本へ！

世界第二位は動き出す。

ただただ弟のために。

第１７話～もう一人の聡華もう一つの紫燕～（後書き）

桜が散り始めている、花見もまだなのに・・・・
どうもしるくです。

今回はオリジナルストーリーであまりキャラクターが出てきませんでしたね。
僕のはとにかく時々こういう回が有るのですよ～

つぎからはしっかり出して行こうと思ってるぅ～

ではでは１８話でお会いしましょう。

さよならっ！

第１８話～転校生は見かけによらず～

二組的には結構な騒動に発展した一日が終わり、再び平穏な日々がやってくる。
教壇では、ＩＳ史の授業とあって一組の担任である織斑先生が教鞭を振るっている。
「以上のことから諸君等にもＩＳにおいて、いかにその歴史を知るという事が大切かと言うことが理解できたと思う。
次に、ＩＳを軍事転用の視点から本来の開発目的を見ていく」

別に歴史なんてどうでもいーじゃん。
鈴は千冬の授業を、表面上ビシッと内面気だるく受けていた。
内なる鈴はあくびまでする体たらくだ。
もちろん、それは外には見せない。
見せよう物ならそれこそ出席簿か、最悪小型端末が飛んでくる。
あ～あ、早く終わんないかなぁ・・・。
この後は丁度お昼休み。
鈴は最近一夏と戦ってばかりでまともに食事をしていないことを気にして、お弁当を作ってきていた。
メニューは勿論、酢豚である。
フフンッ、授業が終わったら速攻よ速攻！
箒もシャルロットもラウラも、誰にも邪魔なんてさせないんだから！

先ほどまであくびをしていた内なる鈴だったが、
今はグッと拳を握ってその背後にはメラメラと闘志がたぎっていた。
んでもってぇ、一夏にあたしが食べさせてあげるんだもんね～。
で、で、あたしの料理を食べた一夏が・・・。

『おい、鈴も食べてみろよ』

『い、いいわよ、あたしは』

『いいからほら』

『な、何くわえてんのよ?』

『この方が鈴を近くに感じられるだろ・・・』

『一夏・・』

『鈴・・』

『あん?』

的なことになっちゃってぇ!!

恋する乙女の妄想は止まらない。

たとえそれが千冬の授業中であっても。

「そうだな・・凰、

このアメリカ製のＩＳについてその特徴を述べてみろ」

「真っ白い塔の上に大きな鐘が特徴のチャペルで・・・」

次の瞬間鈴の顔面に小型端末の角がめり込んだ。

「痛ったぁぁ～・・・」

鈴は授業後も顔を押さえて、涙目だった。

ちなみに言っておくと、鈴は小型端末で殴られたわけではない。

文字通り飛んで来たのだ。

すさまじい勢いで。

多分、妄想の世界へトリップしていなくても鈴は反応できなかっただろう。

そして、そのせいで完全に鈴は出遅れた。

顔をさすりながらも、足早に一組に入ると既に一夏は
箒、シャルロット、ラウラという三匹の野良猫（鈴主観）に囲まれた状態だった。
鈴は、身体の後ろにお弁当の入った小袋を隠しながら一夏に近づく。
「お、鈴も来たのか」
「なによ、？も？って！」
あたしは何かのおまけかっての！
ついつい、いつもの調子で返してしまう。
おっといけない。
今日は一夏をお昼に誘わなければいけない。
いつもの調子では当然同じ事の繰り返しだ。
「んんッ！　ねぇ一夏」
「なんだよ、鈴」
鈴は少し声を整えて名前を呼ぶと、二カッと笑う。
「ねぇ、お昼行こ！」
うわッ、今のめっちゃ良い感じじゃん！
いいね、あたし超自然体！
鈴は心の中で自画自賛を繰り返す。
そして、自然体で言えた事が功を奏したか、
一夏はそれに二つ返事で返した。
「あぁ、良いぜ」
その返事を聞けて、鈴の中では小さな鈴がガッツポーズを繰り返している。
心の中はお祭り状態だ。
なんだ、初めっからこうすればよかったんじゃん。
早速一夏を連れだそうとする鈴に当然と言えば当然だが、残りの野良猫が邪魔をする。
「おい、ちょっと待て鈴。一夏は今日私と昼食をともする事になっているのだが？」
「ふん、何を勝手な事を。私の嫁なのだから、私と共に食事をする

のが自然・・いや当然であろう」
「ちょっと、何二人とも勝手に決めてるの！　この前僕も約束してたんだから僕とだよ」
だがこの反撃は鈴にとって予想の範囲内だった。
何せこちらには最終兵器？愛情弁当の酢豚？という最終兵器がある。
鈴は余裕の笑みで三匹の野良猫を見やると鼻を鳴らす。
「ふふん、残念でした。一夏は？あたし？と一緒にご飯を食べるの。だってさっき良いって一夏本人が言ったじゃない？」
「貴様、拡大解釈をするな！　一夏はお前の昼食に行こうという提案に賛同しただけだ！」
「でも肯定は肯定じゃん！」
両者一歩も譲らない。
いや譲れない。
ここを譲ってしまったら、双方ともに一歩リードを許してしまう事になるからだ。
それはラウラもシャルロットも同じ事。
だが、あまりがっついて言い返すのも一夏の心証を悪くすると思い、両者箒への賛同と言う形で、自分の意見をぶつける。
「いい加減にしろ、大体二組の貴様がなぜ優先的に一夏を連れて行けるのだ？
箒の言うとおり一夏は、昼食に行くと言う事に賛同しただけだろう」
「そうだよ、鈴。無理やりすぎるのは嫌われるしね」
それでも鈴は余裕を崩さない。
しばらく三人の意見を聞き流していたが、
ここだっと言うタイミングで最終兵器を持ちだす。
「そう言えば一夏さぁ、酢豚食べたいって言ってたじゃない～？
今日ね、本当に偶然朝作ったのが余ってて持ってきてるんだぁ」
「「「なッ！！」」」
三人の顔が引きつる。
唐変木の一夏は、おぉそうなのかと酢豚の登場に喜ぶが、他の三人

は、
いや恐らく一夏以外の全員は、それは鈴が一夏のために用意したものだと言う事を直観する。
鈴は勝ち誇ったような顔で三人を見下す。
勝った！
やった！！
あたしの独り占め！！
鈴は飛び跳ねて喜びたい衝動を抑えて、改めて一夏を一組から連れだそうとする。
だがそこで、鈴にも予想していなかったひところが一夏の口から飛び出した。
「なぁ、箒たちも来いよ！　鈴の所の酢豚って滅茶苦茶旨いんだぜ？」
なぁッ！！
余裕の笑みが一転、焦りに変わり今度は三人にざまぁみろという視線が注がれる。
鈴もどうやら、一夏の唐変木発言まで完璧に予測する事は不可能だった。
「んんッ、そうだな。では相伴にあずかるとしよう、うん。鈴の料理か、？是非？参考にしよう」
「そうだな、私も中国の料理には？興味？がある」
「僕もすっごく？楽しみ？だよ」
三人の嫌みたっぷりの言葉に鈴は自分の敗北を悟った。

「・・・・鈴、策士、策におぼれたね」
「うるさい」
一部始終を見ていたアルディに肩を叩かれる。
鈴はそれに力なく返すのが精いっぱいだった。
その後ろでは呆れた様子でセシリアがため息をついていた。
あたしが吐きたいわよ、ため息・・・。

◇◆◇◆◇◆

あぁ、なるほど。
つまり恥ずかしかったんだね。
確かにお箸って、アジア圏中心の文化だよね。
最近ではアメリカでもつかわれるけど
棒二本で挟んで食べるっていうのが中々やってみると出来ないんだよなぁ。
それに、作法で箸の身を使って食事をする文化が確立しているのは日本だけとも言われているらしい。
それぐらい、文化に根づいているのは分かるがそれでも難しいものは難しい。
僕も姉さんに教わってやっとできたぐらいだし。
「まぁ、私もこの箸と言う物は苦手ですわね」
セシリーが少し困った顔で酢豚を見つめる。
確かにイギリスも、基本的にお箸は使わない文化だもんね。
僕は、ヒョイッと箸で豚肉を取るとセシリーの口元に持っていく。
「はい、食べる？」
「え！？」
少し顔が赤いけど・・・。
「あぁ、ごめん。やっぱり恥ずかしいよね」
僕はスッと、箸を下げようとするとセシリーがあ、ああと名残惜しそうに
その箸を追いかけてくる。
「何？　あ、やっぱり食べたかった？」
「あ、いや・・・そ、そうですわね・・・せっかくですしいただきましょうか」
僕はセシリーの口元にもう一度箸を近づける。
するとセシリーは更に頬を赤らめながらも上品にゆっくり小さく口を開く。
「良い？　セシリーあ～ん・・・・」
「・・・んむ」

そしてゆっくり味わうように何度も咀嚼しながら酢豚を味わう。
「ね、美味しいでしょ？」
「・・えぇ、とても！」
セシリーは満面の笑みを浮かべてうれしそうに答える。
そんなに酢豚が食べたかったんだね。
それは良かった。
と、そこで皆の注目が集まっている事に気が付く。
そしてそれを見ていたシャルロットがハッと何かに気が付き
一夏に懇願のまなざしを送った。
「ね、ねぇ一夏！　僕も・・その食べたいなぁ～」
「ん？　酢豚か？　いいぜ」
一夏が酢豚へ箸を伸ばしかけてようやく残りの三人は
シャルロットがしようとしている事に気が付きそれを必死に阻止しようとする。
「しゃ、シャルロットあんたにはね、あたしが食べさせてあげるわよ！」
「よし、鈴そのまま抑えていろ！」
「酢豚の確保成功。続いてシャルロットへの投下を開始する！」
「わわわわッ！！」
ほんと、こういうときのチームプレーは凄いと思う。
「ねぇ、セシリー。こういうときの連携って凄いよね・・・・・ってセシリー？」
「・・・・アルにあ～ん・・・アルにあ～ん・・・」
・・・・呪文？
そんな感じで昼休みは過ぎて行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

えぇと・・・二年一組・・・二年一組。
聡也は、名刺を持って二年一組に足を進めていた。

目的は言うまでもなく、鳥越　聡華である。
えぇと・・・ここか。
当然だが、二年生に男子は居ない。
全員女子だらけの中に、ポツンと聡也が現れた事で
一気静かになり、女子の注目が否応なしに聡也に集まる。
ただ一人を除いては。
聡也は、これ以上の騒ぎになる事を警戒してあえて名字で聡華を呼ぶ。
「鳥越・・・先輩」
名前をつぶやくと今度は女子の注目が聡華に集まった。
聡華は、ため息をついて面倒くさそうにこちらを睨むとガタッと立ち上がる。
そして、ズンズンと近づいてきてすれ違いざまに首根っこを引っ張った。
「ちょっと来い」
「わ、っちょ！」
そのまま聡華は、聡也を階段の踊り場まで引っ張っていく。
そして他の生徒の目が、亡くなった事を確認してから声を荒げた。
「てめぇな、何しにきたんだ！？」
「い、いやその・・・用ってほどでもないんですけど」
「あのなぁ、お前は目立ちすぎるんだよ。
大体ああなる事ってのは想像できたろ」
聡華は聡也の頭をコンコンと二、三回軽くコツく。
「それはそうですけど・・・」
「用が無いなら来るな、分かったな。こっちも迷惑なんだよ、色々騒がれると」
聡華はそれだけを言い残して聡也のもとを去ろうとする。
実のところ聡也の行動に明確な意図はない。
ただ、聡華に会いたかったそれだけだった。
あの、姉に瓜二つの聡華に。

でも確かに、聡華の言うとおり。
自分は男子で、良く目立ってしまう。
用が無いのにうろちょろされれば確かに迷惑になる。
だが・・・・。
ふと、聡也に一つのアイデアがひらめいた。
そうだ。
用があればいいんだ。
聡也は聡華の後ろ姿を見やる。
そして声を張り上げた。
「用があれば、本当に良いんですね！？」
それに聡華はこちらを振り返り、怪訝そうな顔を向けたがいつもの調子でぶっきらぼうに答えた。
「・・・・あぁ、用があればな」
フフフっ、なるほど。
用があればいいんだ・・・用が！
心の中でつぶやくが早いか、聡也は自分の教室へ向かって走り始めた。
作ってやろうじゃないか！
ちゃんとした理由を！

聡也は、二組に戻るなりこのクラスの風紀委員である
代表候補生のロッソ・ミオネッティに話しかけた
ロッソは綺麗な赤い髪を持ち、半眼の一見やる気のないような目が特徴の少し無口なイタリア人だ。
「ロッソさん」
「・・・何？」
ロッソはそっけなく返事をする。
ロッソは特に何をしているでもなく、

空中投影型のディスプレイに表示されている
自分のＩＳのものであろう情報に目を通していた。
そんなロッソの机をわざとバンっと叩く。
ゆっくりと目を細め睨むロッソに聡也は言った。

「風紀委員を僕に譲ってください」
「君・・何言ってるの？」
当たり前と言えば当たり前の返答だ。
既に決まっている委員会を代われと言っているのだから。
ロッソは冷めた目で聡也を一瞥してから、
何事も無かったかのようにディスプレイに目を戻した。
聡也のアイデア。
それはずばり、風紀委員になることであった。
それなら聡華に会うのに用も何も関係ない。
同じ委員会なのだから、用が有ろうが無かろうが嫌でも顔を合わせられる。
そのためにも聡也には軽くあしらわれた程度で、
引き下がるわけにはいかないし何よりも聡也には考えがあった。
「ちょっと話を聞いて下さいよ、ロッソさん」
「だから・・・聞いてるじゃない。
それについて・・返答もしたわ。
これ以上何か必要？」
ロッソは既に目線すら動かそうとしない。
だが聡也は構わず言葉を続けていく。
「僕は、風紀委員を譲ってくれって言ったんです」
「・・・だから、何故？」
「僕がやりたいだけです。わかりやすいでしょう」
「・・・・いや」
来た！
その言葉を待っていたんだ。

明確な拒否。
それがあってようやく聡也の策は動き出すのだ。
「そこを、何とかお願いしますよ。それに風紀委員って結構物騒な連中も相手にしないといけませんし」
「・・・大丈夫。私、こう見えても代表候補生。」
「僕は、心配してあげているんですよ？」
少し挑発的な台詞でロッソを煽る。
ここまでこれば、もうロッソの無視は来ない。
なぜならその口から“代表候補生”と言う言葉が飛び出したからだ。
少なくともロッソは今少しずつ苛立ち始めているはずである。
代表候補生が、いくらＩＳを使えるとはいえ男に心配されるというのは女尊男卑のご時世。
プライドが許さないだろう。
「・・・あなたいちいち、感に障るわ」
「そうですかね？　でも本当に心配しているんですよ」
「・・・余計な心配はいらない」
あともう一押しだろうか。
何にしてもロッソは、初めのポーカーフェイスから今では、こちらを再び睨みつけて目に見えて怒っているのは分かる。

「でも、本当に僕風紀委員がやりたいんですよ。大体僕にだって選択権があると思いませんか？」
「・・・選択権？」
「そう。元々転校生の僕は、皆さんが委員会役員を決めた時期には居られなかった。
いくら女尊男卑と言っても学生生活ぐらい平等にチャンスがあっても良いと思いませんか？」
ロッソはしばらく考えて、コクンと頷いた。
「・・・それはそうね」
「だから・・・あ、そうですね。良いことを思いつきましたよ」

聡也はあたかも今思いついたかのような素振りで、
ロッソに話すが当然これは初めから聡也が考えていた事だ。
それは・・・
「わかりやすく、模擬戦で白黒つけましょうよ」
「・・・良いの？　あなた無様に地面に這い蹲ることになるよ」
「それは、どうでしょうね？」
「・・・ッ！！」
この場合ロッソが聡也を挑発するより、聡也がロッソを挑発した方
がより効果的だ。
聡也は、今だけは女尊男卑の社会に感謝したいと思った。
「・・・その言葉忘れないでね」
ロッソはガタッと立ち上がると、足早にその場を後にしようとする。
その後ろ姿へ聡也は、大事な確認事である日時を尋ねた。
「試合は何時にしますか？」
「・・・いつでも良い」
「では、早速なのですが今日の放課後でどうです？」
聡也の提案に無言で頭を縦に振り、聡也もそれに頭を振り替えした。
そしてロッソは今度こそ本当に教室を後にする。
その後ろ姿を見送りながら聡也の頭にふと疑問が浮かんだ。
・・・はて、彼女どこへ行ったんでしょうか。
もうすぐ授業なんですけどね。
そして、少し考えてサーッと青ざめた。
しまった、次は実習じゃないか！
聡也はロッソの後を追いかけるように教室を飛び出す。
聡也とロッソ。
二人の内に秘める闘志を現すかのように、頭上にはもうすぐ夏の訪
れを
予感させる暑い太陽がこうこうと照りつけていた。

◇◆◇◆◇◆

理由は全くわからなかったが、どうやら聡也がもめごとを起こしたのは
一年生以外だと言う事は確定した。
それでもまだ二年か三年か。
そこが問題だよね。
「何をしてますの？」
聡也の事についてあれこれ顎に手を当て考えていると、
それを不思議に思ったセシリーが声をかけてきた。
「いや、ちょっとね」
「ちょっと、なんですの？」
流石に今回は二人だと動きにくいから、
旨くかわしたいところなんだけど・・。
「だから、ちょっと」
「むむ・・・なんだか怪しいですわね」
「あ、怪しくないよ」
なんでこういうときだけ変に疑り深いんのさ。
僕は苦笑いを浮かべながら、何か良い言い訳は無いものかと頭をひねる。
しかし、僕もこう言う時に限っていい案が浮かんでこなかった。
「あぁ・・えぇと」
「何か隠してますわね」
「いや、隠してと言うか人を探して・・」
――――――――――あ。
言っちゃった。
「人探しですの？」
なに口滑らせてるのさ僕。
そんな事言ったら確実にセシリーは・・・。
「なら、私もお手伝いしますわ」
・・・だよね。
あぁ、もう。仕方ないや。

僕は諦めの表情でため息をつくとセシリーに人探しの内容を説明した。
「なるほど。聡也さんの・・・」
「まぁね、聡也って真面目そうだし、何か問題を起こしそうには見えないからね。少し気になっちゃってさ」
「確かに、中々大人しそうな方ではありましたけれど・・・。でもそういう方って案外そうでもないのかもしれませんわよ?」
まぁ、誰にでも裏があるとは言うけど・・・。
あの聡也が?
僕は頭の中でオラオラと幅を利かせて、そこらじゅうに喧嘩を吹っ掛ける聡也を想像する。
そしてそれを苦笑いで否定した。
いや、ないない。
流石にそれは。
「ま、まぁどっちにしても、気になるでしょ」
「確かに。でもまだまだ情報が少なすぎますわねぇ」
「とにかく、他のクラスの人たちにも聞いてみようよ」
僕はそう言うと、二組へ向かう。
二組の風紀委員が聡也と面識があるかどうかは分からないが、多分、一組の風紀委員よりは情報を持っているだろう。
ガラッ
二組の教室のドアを開け、中に入る。
僕はグルッと、教室内を見渡した後、手近にいた子に声をかけた。
「ねぇ、ここのクラスの風紀委員の子どこにいるかしらない?」
「え?　あ、ロッソ。え~っと・・あれ、居ない」
「いませんの?」
「おかしいな、さっきまで座ってたんだけど」
ポリポリと頭をかいて首をひねる女子。
僕はその子に、ここのクラスの風紀委員の子の特徴を聞いて二組を

後にする。
その特徴って言うのが。
・赤い髪
・イタリア人
・無口
・・・・・どうしろって言うんだいこれ・・。
これでどう人物を特定しろと？
聞く人間違えたかな。
ふぅ、とりあえず他のクラスも回ってみよう。
僕たちは、次の教室に足を進める事にした。

一通りクラスを回り終え自分のクラスに戻ってきた僕たちだったが、結局分かったのは、「上級生」「風紀委員」というたったのこれだけ。
しかも二組の風紀委員に至ってはまだ見つかっていない。
「はぁ・・・中々人探しって大変だねぇ」
「これだけ人数のいる学園ですし・・・
まぁ、そこまで簡単に行くとは思っていませんでしたけれど」
セシリーも腕を組んでうーんと唸る。
せめて二組の風紀委員の子が見つかれば何か分かると思うんだけどなぁ・・・。
二人して頭を悩ませていると、不意に教室の扉が開いてさっき二組で僕たちにロッソという風紀委員の子を教えてくれた女子が駆け込んできた。
「ねぇねぇ、大変大変！」
息を荒げて声を張り上げるその様子に、
ただならぬ事態を予想した僕たちに一瞬緊張がはしる。
僕たちの近くにいた別の女子になだめられながら、
その子は言葉をまくしたてた。

「ロッソと一条君が・・・・！」
「「え！？」」
思わず声が重なる。
聡也が！？
それにロッソ！？
「お、落ちつてください。一体何がありましたの？」
「一条君とロッソが・・・第三アリーナで！」
僕とセシリーは顔を見合わせると、弾かれたように教室を飛び出した。
まさか、あの聡也が本当に？
何のために。
それに相手はまた風紀委員。
・・・なんで風紀委員にこだわってるんだ？
僕はぐるぐると頭の中で、答えの出ない同じ事を考えながら第三アリーナへ急いだ。

僕たちが第三アリーナへ到着すると既に多くの人だかりができていた。
人ごみを掻き分け、アリーナの中が見える位置まで移動する。
今いる場所は観客席ではなく、強化ガラスで守られた通路の一角。
そこからアリーナを見下ろすとアリーナの中央で対峙する
聡也とロッソの姿があった。
まだ両者共にＩＳを起動させていなかったが、二人からは窓越しにも分かるぐらい
凄い闘志がビリビリ伝わってくる。
一体全体何があってこんなに睨みあってるんだ？
あまりの両者の雰囲気に若干、気おされていると聞きなれた声が聞こえる。
「あーーーー！　あいつまた何騒ぎ起こしてくれてんのよ！！！」

鈴・・・。
しかもかなりご立腹のご様子。
そりゃそうか。
二組が目つけられたってあれほど怒ってたもんね。
「鈴、まぁまぁ落ち着いて・・」
「アルディ、それに・・・えーっと」
「鈴さんわざとやってますでしょ・・」
「アセロラだっけ？」
「セシリアですわッ！！」
すごい！　文字数しかあってないミスなんで初めてだ。
でも、アセロラか・・・ふむ。
そう言えば最近セシリー肌荒れがどうとかって・・・。
「ア～ルゥ～～、何かおかしなこと考えていません？」
セシリーにジト目で睨まれ、僕はすぐさま考えを切り上げる。
・・・全く本当に読まれやすいね、僕。
頼んだポーカーフェイスのテキスト全然届かないし・・。
「あんたらねぇ・・・いちゃつくのは良いけど今それどころじゃないっつーの！！」
「別に、いちゃついては無いでしょ！」
「あ、・・・そうですわね」
ん？
セシリーがなんだか不満そうに・・。
って、確かに鈴の言うとおり今はそれどころじゃない。
僕は視線を聡也たちに向ける。
二人はまだ全然動いていない。
・・・聡也。
本当に、どうしたって言うんだい？
その問いかけを心の中で叫びつつ、
僕たちは両者をジッと見守った。

◇◆◇◆◇◆

真っ赤な鋭角的なフォルムに、右手に蛇腹剣。
そして左手には武装とシールドバリア発生装置が
組み込まれた攻防複合兵装防盾を備えている。
あれが・・・ロッソさんの。
データ上では見ていたが、やはり実物はいつ見ても迫力が違う。
そのＩＳを注意深く観察していた聡也だったが、ふとロッソの様子
がおかしい事に気が付く。
ＩＳを展開したと言うのに、だらりと腕を垂らして下を向いている。
・・・なんだ？
・・・早速何か仕掛けてくるつもりか？
聡也は警戒しながらも観察を続ける。
すると突然、不敵な笑い声が聞こえた。
「フ、フフッ・・フフフッ・・・ハハッ！　ハハハハハハハッハァッ！！」
それは、紛れもなくロッソのＩＳから聞こえてきたものだ。
でも・・明らかにロッソさんが出すよな声じゃ・・。
声に焦る聡也を尻目にロッソがゆっくりと顔を上げる。
その顔を見て聡也は驚いた。
無表情だった顔は、不敵にニヤッと笑う口元に
目じりはつり上がって、その瞳には確固とした意志が見える。
「あ、あなたは・・！？」
「へぇお前、楽にあたしを倒せるんだってなぁ・・・えぇ？」
あまりの豹変ぶりに聡也の顔に冷や汗が流れる。
それでもなんとか睨み返すが、いやな汗が止まらない。
「お前も焼いてやるよ・・・・情熱の炎で・・・たっぷりとなぁ！！！」
その声が合図だったのかは分からないが、
風紀委員の座をかけた、真剣勝負の火ぶたが切って落とされたのは
間違いなかった。

第１８話～転校生は見かけによらず～（後書き）

今日桜見てきました。
もう満開だったので・・・

雨でも降ったらこっちも散りそうです。

どうもしるくです。

おかしいですね。
最近セシリーの出番が減りつつあるような・・・。
オルコッ党としては、なんとか無い知恵絞りたいんですけどね・・・。

あ、無い知恵は絞れないですね（爆

それでは１９話でまた！
失礼します。
さよならッ！

第１９話～それがお前の強さだな？～

聡也とロッソの騒ぎを聞きつけた教師陣が、緊急で正式な模擬戦と定めたため
先ほどの様な混乱は解消し生徒も皆アリーナの観客席に座って観戦している。
そして僕とセシリー、鈴の三人は織斑先生に無理を言って管制室に入れてもらった。
管制室では山田先生の代わりに、榊原先生がコンソールの前に座ってヘッドギアをつけている。
織斑先生は相変わらず、腕を組んで仁王立ちだ。
「・・・全く、やっぱりガギの扱いは疲れる」
「まぁまぁ、織斑先生ぼやかないぼやかない。
それに、一条君とロッソさんのＩＳの稼働データも取れるじゃないですか」
榊原先生は、カタカタと送られてくるデータを処理しながら織斑先生をなだめる。
織斑先生はフンっと鼻を鳴らすとモニターに目をやる。
それにつられるように僕たちもモニターに目を移した。
そこには激しい攻防を繰り広げる二機のＩＳの姿。
・・あ、片方はＩＳじゃないんだっけ。
織斑先生は聡也を目を細めてじっくりと見た後、僕たちに声をかけた。
「お前たち」
「はい？」
代表するかのように僕が答える。
セシリーも鈴も急に呼ばれた事に少し驚いたのかキョトンとした顔をしている。
「一条のＩＳ・・・似ているな」

流石は織斑先生。
すぐに分かちゃったね。
僕はそれに静かに首を縦に振る。
「何かあいつから、あのＩＳについて聞いているか？」
「「「・・・・・・」」」
一同気まずく下を向く。
いくら織斑先生にとはいっても、ＩＳ－Ｎの事をすんなり話す気になれなかった。
確かにまだ聡也を疑っていないかと言われればそれはＮＯだ。
多少なりとまだ警戒している部分はある。
それに今回の事だってそうである。
何の理由で風紀委員ともめごとを起こしているのかもわからない。
？はなから疑ってかかるのはもうやめないか？一夏の声が頭の中で響く。
・・・・。
だから僕はまだこの事を話すときじゃないと判断して、勤めて明るく織斑先生に答えを返した。
「あはは、それが僕たちは何も。それに聡也のＩＳだって初めてみましたし」
「・・・・ん、そうか」
織斑先生は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに視線をモニターに戻した。
・・・なんとかなったかな。
チラッとセシリーと鈴を見やると、二人揃って小さくグッと指を立てていた。
う～ん・・・なんて見事なポーズの一致。
「ねぇセシリー、鈴。前の大会の時にふと思ったんだけど君たちって仲良いの？」
「何を言いますの、それはつまりこの私の事を知らないような無知な方と同じレベルに見られてるってことですの！？」
「そーよ、こんな腹黒いのと一緒にしないでよねッ！」

「黙って見てろ！！」
二人同時に殴られて、二人同時に頭を抱える。
・・・・仲良いじゃん。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

っく、予想以上に！
聡也は汗とそして冷や汗を一緒にかきながら、必死にロッソの攻撃を避け続けていた。
ロッソのＩＳは？ペルフェッド・エスダーテ？。
日本語訳は？完璧な夏？
その名の通り、一撃は軽いものの総合的な火力という面では中々のものだ。
搭載火砲はさほどでもないが連射力が半端じゃない。
それに加えて、伸縮自在の蛇腹剣？テンポラーレ？の不規則かつ変則的な攻撃に
聡也は攻めあぐねていた。
？ホワイトアウル？の搭載されている武装はすべてが射撃武器。
近接戦闘では？打鉄？にすら勝てない出力では使えない近接武器を搭載するよりも
使える射撃武器をという考えだが、いかんせん連射力に圧倒的な差があった。
構える前に、左腕に搭載された攻防複合兵装防盾？パーチェ・ディフェーサ？の
内臓バルカンによって荷電粒子砲が反らされてしまう。
「ほらほらぁ、もっとあたしを興奮させてくれよ！！」
ロッソの？テンポラーレ？が聡也を襲う。

蛇腹剣は、通常の剣とは違いその機動がきわめて不規則。
言ってみれば鞭に刃が取り付けられているようなものだ。
・・でも、いくら蛇腹って言ったって、振り下ろしてくる方向だけは絶対に一方だ。
しっかり見切れば！
聡也は刃の動きを凝視し、それをなんとかかわすがロッソはニヤリと笑うとその方向へ
？テンポラーレ？を払う。
「何！？」
「甘めぇよ、プロセッコより甘々だぜ！！」
「っと、うわっ！　ぷ、プロセッコは特に甘いお菓子じゃないでしょ！」
ちなみにプロセッコとはイタリアの伝統的な菓子パン、パネトーネの一種。
生地に練り込む干しブドウを「プロセッコ」というワインに漬け込んだ風味豊かな逸品だ。
ちなみに、パネトーネとはイタリア語で？大きなパン？って意味らしい。
――――――――って、そんな事言ってる場合じゃなかった！
ロッソの払った？テンポラーレ？は、腕の動きに機敏に反応して向きを変える。
その動きはまさに、獲物の喉に食らいつく獰猛な蛇そのものだ。
とっさの事に反応しきれず、完全に避ける事の出来ない聡也は？テンポラーレ？が
直撃する瞬間、荷電粒子砲を自分の前に付きだす。
突き出した荷電粒子砲を？テンポラーレ？が切り刻み残っていたエネルギーが大きな爆発を起こす。
そして爆風で一瞬両者が見えなくなった。
「あんだと！？」
聡也はその、素っ頓狂な声を聞き洩らさなかった。

素早くバックパックからレールガンを取り出すと、
声のした方向へ迷わず引き金を引く。
「ちっ！」
「離すのが好きなのは良いですけど、おしゃべりしすぎるのも考えものですね！」
反撃らしい反撃には出れたものの依然として、距離がある。
本来なら射撃武器オンリーの？ホワイトアウル？は、
このぐらいの間合いが一番戦いやすいのだが・・。
思った以上にあの蛇腹剣が厄介ですね。
しかも長さの割に、かなり手元の操作に機敏に反応してくる・・。
まさか振り下ろした後に軌道を変えられるとは。
それに・・。
聡也は撃ちながらチラッとバックパックを見やる。
とっさの判断でなんとか直撃は待逃れたが、
一番威力のある武器の一つを失った事は痛い損失でもある。
仕方がない・・・。
下手に間合いを取って蛇腹剣に苦戦するぐらいなら、こっちから間合いを詰めてやる！
聡也は、レールガンをそのまま撃ちながら、一気に間合いを詰める。
しかし、それをさせまいとロッソはバルカン砲を掃射し、聡也を牽制する。
「おしゃべりがなんだってぇッ！」
「こんなもので！」
「ッはぁ！　良いね良いね、その面ぁ、ゾクゾクしちまうだろうがぁ！！」
ロッソは頬を赤く染めながら興奮気味に、バルカン砲と小型の荷電粒子砲を撃ち続ける。
聡也は、削られていくシールドエネルギーとにらめっこしながら、
最適なルートで被弾を最小限にとどめ、間合いを詰めながらチャンスをうかがう。

・・・流石に今の火力じゃ落としきれないけど・・。
至近距離の一撃なら追撃の足がかりにはなるはず。
それには、あの蛇腹剣を相手に振らせる必要がある。
距離が離れているから、動きが読みづらいんだ。
近くならその動きもまだ単調なはず。
そしてロッソが蛇腹剣を振り下ろしたその時
聡也にとって最大のチャンスが訪れるのだ。
「ほらぁ、次はコイツだぜ！！」
よし、貰った！
ロッソは？テンポラーレ？を振りかぶるとそれを素早く振り下ろす。
聡也はその刃に沿うように飛び、一気に正面に躍り出た。
その流れでロッソにレールガンと荷電粒子砲を向ける。
「この距離ならはずしませんよ？」
「てめっ！？」
未だに？テンポラーレ？を振り切った状態でとっさに反応できずに、
ロッソは焦りの声を挙げる。
・・・・わざと。
ロッソは口角を釣り上げ不気味に笑う。
「・・・なーんてなぁッ！蛇腹剣ってのは、
こういうこともできんだよ、馬鹿がッ！！」
叫び、手を素早く払うと先ほどまで伸びていた？テンポラーレ？が
瞬時に収縮し
、日本刀程のサイズに変わる。
このサイズなら、敵が至近距離に居ようと関係ない。
いやむしろその距離こそ間合いだった。
聡也は、無理やり右側のスラスターを噴かして
機体を正面から逸らそうとするがそれよりも、ロッソの？テンポラ
ーレ？の方が早かった。
「ぐうッ！」
ほぼ真正面から、？テンポラーレ？を食らった聡也は衝撃で真下へ

飛ばされる。
そこへ再び、蛇と化した？テンポラーレ？が襲いかかる。
体勢すらままならない聡也はまともに反応することすら出来ず、蛇の猛攻に捕らわれてしまった。
繰り返し訪れる身を切り刻む痛み。
衝撃に耐えられない？ホワイトアウル？の装甲が次々に破壊されていく。
こ、このままじゃ、負ける！
負けたら意味がない。
ここで負けたら、全てが水の泡だ。
勝たなきゃ。
・・勝つんだ！！
聡也は、？テンポラーレ？で弾かれたボロボロの機体を次に襲い来る？テンポラーレ？の軌道に合わせて反転させる。
「はッ！　だから無駄なんだって、こいつの反応速度はもう見て知ってんだろーが！」
ロッソは聡也に合わせて“？テンポラーレ？の軌道を修正する。
「こんな物ぉ！！」
聡也は当たること覚悟で？テンポラーレ？へ向かって跳躍する。
そこは本来なら直撃コースだったが、？ロッソが軌道を変えたおかげでできた？一瞬だけ開く突破口。
聡也は右足の先を持っていかれながら、そこから脱出して持っていた砲を一度バックパックへ戻す。
・・・砲は三門。
しかも機体はパワーアシストが弱まってきてる。
？アレ？の直撃後に装弾数全部を当てきれば・・ギリギリ何とかなるか！？
聡也はバックパックのロックをリリースし、軋みを上げる機体と身体で宙を回る。
フリーになった砲が全てバックパックを離れて、くるくると宙を舞

う。
それを見て何かを感じたロッソが今度こそ本当に焦りの声を上げた。
「な、何しようって・・！？」
「すいませんね。少し火力不足かもしれません」
「訳分からねぇことを！
何するか知らねぇが、させっかよ！」
聡也は一度ゆっくりと瞳を閉じて、集中した後カッと目を見開いて叫んだ。
「獅哮閃！」
ロッソは？テンポラーレ？を振るうが、
それが聡也に直撃する前に身体に強烈な痛みが走った。
？獅哮閃《しこうせん》？
本来は？ホワイトアウル？の四門の砲を使って行う
瞬時多目的射撃《マルチロックシュート》で、最大八機まで一度に攻撃ができる。
バックパックのロックを全て解除し、
ラックしていた砲を急速な旋回によって目標方向へリリース。
それを聡也が落下する前に“アブソリュート・ターン？を
駆使して全ての引き金を引くという曲芸のような技だ。
ちなみに目標の数によって旋回の仕方は異なるが、
目標が一つの場合は一般的に宙返りを行う。
セシリアの時のように。
いくら、万全の状態では無いとはいえ三門でも威力は低くない。
直撃を受けたロッソはこの試合初めて、後方へ吹き飛ばされた。
「くっそ、この！」
「まだまだいきますよ！！」
そこからはもう聡也のターンだった。
レールガンと荷電粒子砲の残弾数すべてをロッソに向かって撃ちまくる。
ロッソは、すばやく反応して？パーチェ・ディフェーサ？のシール

ドを展開するがそれよりも早く
聡也のレールガンが、展開装置ごと?バーチェ・ディフェーサ?を
切り刻む。
それと同時に?バーチェ・ディフェーサ?が装着されていた左腕が
爆散した。
「うあッ!!」
苦悶に表情をゆがませるロッソ。
だがそれでも聡也は射撃をやめない。
ガキンッ!
レールガンから残弾の尽きた音がすると聡也はレールガンを投げ捨て
もう一門のレールガンに取替えまたトリガーを引く。
それからすぐに荷電粒子砲のエネルギーが底をつくと、
レールガンを乱射しながらロッソに肉薄する。
その一発一発がロッソの機体の、腕を、脚を、スラスターをそして
武装を、
そのすべてを破壊していく。
そして聡也が肉薄したころには、すでに?ペルフェッド・エスダー
テ?は
戦闘はおろかＰＩＣで空中に浮かんでいることすらままならないほ
どボロボロになっていた。
「これで、終わりです!!」
「う・・・あっ・・」
勢いの死んだ虚ろな目でこちらを見やるロッソに向かって聡也は、
肩を一発レールガンで弾き仰向けになった所へ、残っている左足の
踵を振り下ろした。
ズガァァァァンッ!!
大きな砂煙を巻き上げ、アリーナの地面へ叩き落されるロッソと?
ベルフェット・エスダーテ?。
ロッソはまだ、かすかに残る意識で地に伏したまま片手を伸ばすが、
すぐに力なくその腕を地にたらした。

それを確認して聡也は、勝利を確信してホッと胸をなでおろす。
しかし、次の瞬間先ほどとは比べ物にならないほどの大きな砂煙と共にアリーナが揺れた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

管制室へも、アリーナの異常はすぐに伝わった。
何が起こったのかわからず唖然として砂煙で一時ブラックアウトしたモニターを見つめる僕たちと
対照的に織斑先生は、険しい表情で榊原先生に指示を飛ばしている。
「何だ、何があった？」
「まだ、モニターが回復してませんからわかりませんよ！」
そこへ、真っ先にわれに帰ったセシリーが声を挟んだ。
ここら辺の頭の切り替えの早さはやはり代表候補生だろう。
「生徒の、避難状況はどうなっていますの！？」
「それは大丈夫みたい、今のところシステムへのハッキングは無し。ロックも何もかけられていないわ」
「よし、榊原先生。現場の教師陣に生徒の避難誘導の指示を！」
「わかりました」
織斑先生は言い終わるとチラッとセシリーと鈴を見やる。
「凰、オルコット。事と次第によってはお前たちに、対処に当たってもらうことになるかもしれん。ピットへ行って準備しておけ」
「はい！」
「わかりましたわ！」
力強くうなずいて管制室を後にするセシリーと鈴。

僕は、自分自身が出て行けない悔しさと不安を押し殺しながらセシリーを呼び止める。
「セシリー・・その」
「大丈夫ですわ、こう見えて私・・」
「強いんですのよ?だっけ」
僕は、茶化すように言う。
それにつられてセシリーの顔にも笑みが浮かぶ。
「ウフフフッ、えぇ私は代表候補生ですもの」
「あぁそうだね。・・・・・本当は、
僕も・・・出られれば良いんだけどね」
そんなセシリーの笑顔を見ていると思わずポロッと本音が零れ落ちてしまう。
あの時みたいに、セシリーを信じていればいいだけなのに。
それがたまらなくもどかしい。
それに何より、ラウラの時セシリーは勝ちはしたがボロボロになった。
そしてもしかしたら今回も。
そんな不安が頭を離れない。
どうやら、みんなが言うように僕にはポーカーフェイスは無理らしい。
だってついさっき、悔しさと不安を押し殺そうって決めたばかりなのに、
もう恐らく表情に表れてしまっている。
「・・・フフッ、アル?」
「ん?」
名前を呼ばれて、顔を上げると指をピストル型にしたセシリーの人差し指が
僕の眉間に狙いを定めていた。
「バーン!」
「え?　せ、セシリー?」

セシリーの行動の意味を理解できず、頭に疑問符を浮かべる僕にセシリーは優しく語りかけた。
「今ので、アルは死にましたわ」
「はい？」
「だから、今ので不安そうなアルを殺したんですわ。だから今、目の前にはいつもどおりのアルが居る。私を信じてくださるアルが・・」
一瞬きょとんとしてしまうが、その後すぐになぜだか笑いがこみ上げてきた。
「何を笑っていますの！　け、結構その・・・本気でやりましたのに」
「いやいや、あはは、なるほどセシリーからそんな言葉が飛び出すと思わなかったから」
「もう、失礼ですわね！」
プイッと顔を背けて足早に部屋を出て伊湖とするセシリーをあわてて呼び止めた。
「あぁ、ごめんごめん。いや・・そのちょっと驚いちゃって・・。でもありがとう。そうだね、僕にこんな顔は似合わない」
セシリーはこちらを振り返ってクスリと笑う。
「えぇ、そうですわ。あなたは笑っていませんと・・・ね？」
ハハハッ、セシリーに励まされるとは思わなかったなぁ。
・・・そう、そうだ。
人生は楽しくなくちゃいけない。
変に不安がるのは楽しんでるとはいえないしね。
フフフッと笑うセシリーを織斑先生がせかし、セシリーは今度こそ管制室を後にする。
僕はその後姿を、信頼のまなざしで見つめていた。
その後ろでは、織斑先生と榊原先生がヒソヒソと声をひそめて話をしていた。
「・・・まったく、行けといったらすばやく行かんか。ばか者が」

「織斑先生、まぁまぁ。おかげでいいもの見れたじゃないですか」
「ガキ共のノロケを良いものというのか、榊原先生？」
「本当は、織斑先生も織斑君にああいうこと、したいんじゃないんですか？」
ニヤニヤと笑う榊原先生に、織斑先生は無言でコーヒーを淹れ始める。
もちろん塩を大匙で三杯ほど入れた、ある意味スペシャルブレンドだ。
それを榊原先生の前にこれまた無言で置く。
山田先生なら引きつっていただろうが、榊原先生は別段いやな顔ひとつせずに受け取り
静かに黒い液体に目を落とす。
そして。
「ほっ！」
「むぐっ！？」
おぉ、すばやい手つきで織斑先生の口にコーヒーを流し込んだ！？
・・・この人、すごい。
その後榊原先生が、正当な理由で織斑先生に殴られたのは言うまでもなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

砂煙が時間と共に晴れていく。
聡也は、ボロボロのハイパーセンサーで砂煙の奥を凝視する。
なんだ・・・。一体何が降りて・・・・！？
聡也は、ハイパーセンサーが送ってきたその映像を
見なければよかったと後悔し、そしてその状況に絶望した。
そこにいたものそれは・・・。

「・・・・失礼します」
聡也と?ホワイトアウル?とほぼ同じ形スペックを誇る黒い翼。
「ブラック・・・・アウル・・・」
驚きに呆然としながらも、聡也は静かにその名を口走る。
?ブラックアウル?はこちらに砲を向けバイザーで隠され目は見えなかったが
口元は不気味に笑っていた。
「・・・何をしに来たんです?」
聡也は、声のトーンを落としてたずねる。
?ブラックアウル?は砲をおろさずにその問いに答えた。
「・・・ちょっと、鉄くずを作りに・・・ですかね?」
その瞬間、?ブラックアウル?の荷電粒子砲が火を噴いた。
聡也は、それをスラスターを噴かして回避するが、
はっきり言ってただ飛び上がるだけでもかなり厳しい。
ＰＩＣがかろうじて生きているとはいえ、右足を失ってバランスをとるのが困難だ。
それに今、スラスターを噴かしてわかったことがある。
それは感覚的なものだったが、次にモニターに表示された文字が
感覚という不確かなものに、証拠という確かなものを上乗せする。
「右スラスターの内圧弁制御不良!?　・・・・・あのときのか!」
そこは聡也が、前に修理していたところだった。
結局直しきれずに、そのままにしていた箇所がこんな時に泣きを入れてきたのだ。
故障箇所は内圧弁。
つまり今右スラスターは、全開か停止そのどちらかしかできない。
細かな調整が不可能ということ。
「これぐらいなら通常飛行に問題はないけど・・・・もっと最悪なのは・・」
聡也は自分の背後のバックパックを一瞥して舌打ちをする。

そう、いまの聡也には武装が何ひとつ残っていないのである。
さらに全ての火力を最大稼動の状態で打ち続けたため、シールドエネルギーよりも
本体のエネルギーは残っていない。
こうして逃げ続けてはいるがいつまで耐つかは、正直わからない。
ただ、どっちにしても長くは持たないだろう。
「フフフッ、今の君はもうすでに鉄くず同然だから・・・
スクラップのほうが似合ってるかな！」
？ブラックアウル？の砲はは正確に聡也を捕らえ、
そのうちの一発が聡也のメインスラスターを直撃する。
大きな黒煙を上げ、爆散するスラスターユニット。
推力を失い、そしてその衝撃で完全にＰＩＣが死に、アリーナへ墜落する。
ドシャアァァァッ！！
「うわあぁぁっ！！」
「・・・もう少し抵抗があれば、よかったですけどね」
うつぶせに、アリーナの地面に横たわる白き翼を黒き翼が狙う。
？ブラックアウル？はすでに勝ち誇ったような口元の笑みを浮かべていた。
もう、パワーアシストすら切れ身体に？ホワイトアウル？の装甲の重さが
あたかも今、身に降りかかっている絶望のようにのしかかってくる。
？ブラックアウル？が今まさに、トリガーを引こうとしたとき、
不意に何かに気がついてある方向を振り返る。
「そんなに抵抗してほしいなら、あたしたちがしてあげるわよっ！
！」一本に連結した？双天牙月？が？ブラックアウル？を襲い、それを下へかわしたところに
？ブルー・ティアーズ？のビットと？スターライトｍｋ？？が狙う。
「弱いものいじめは関心いたしませんわね・・・。あ、すいません。

今私たちがやっていることでしたわッ！」
セシリアは軽口をたたいて？スターライトＭＫ？？
で荷電粒子砲を弾くと続けざまにビットで追撃する。
「セ、セシリア、それに鈴・・」
何とか重い身体を引き起こし、二人を見上げる聡也へ両者が語気を強めた。
「あんたねぇ、ボケッとしてないでとっとと避難しなさいよ！」

「あのＩＳのお相手は私達が引き受けますわ！」

聡也はそれを聞いて、軋む機体を引きずりながら立ち上がる。
どうやら、クローズ機構まで壊れたようでこの場で待機状態に戻すことは不可能のようだった。
キシキシと軋む音が、身体なのか機体なのか分からないが聡也はとりあえずアリーナのピットの死角へ移動することにした。
移動しながら空を見上げると、“ブラックアウル？がセシリアと鈴を相手に大立ち回りを演じている。
・・・せめてもう少し、僕に実力があれば。
そんな後悔が頭をよぎる。
でもまぁ大丈夫だろう。
直に増援もやってくるだろうし、それまでセシリアや鈴が落とされるとは考えにくい。
そう大丈・・・・え！？
安堵し、セシリア達から視線を逸らしかけた時、
？ブラックアウル？の片方の砲が明らかにセシリア達とは違う方向を向いていることに気がつく。
そしてその先を、目で追うとそこには未だに気を失って倒れているロッソがいた。
まだ？ペルフェット・エスダーテ？を展開しては居るが、
聡也の攻撃によってシールドエネルギーはゼロだ。

あんな無防備な状態で、？ブラックアウル？の荷電粒子砲を食らったら本当に不味い！

『あ・・ね！　笑って・・・ザッザザ・余裕じゃ・・い！』

ギリギリ生きているオープンチャネルから、ノイズ混じりに鈴の声が聞こえる。

どうやら笑っているらしかった。

これは、いよいよ不味い！

聡也の目が？ブラックアウル？の荷電粒子砲に光が集まるのを確認する。

このままでは、目の前でロッソが！！

聡也は、機体のステータスをモニターで確認する。

モニターもノイズ混じりで見にくかったが、たった一度分のスラスター噴射は可能のようだ。

だがそれをしてしまうと、いくらロッソの前に入れてもシールドすら展開できない。

しかし聡也はそんな考えをかぶりを振って消し去ると、迷い無くスラスターに火を入れた。

僕の都合で巻き込んで、僕の都合で怪我をさせて、そして今度は僕の所為で死ぬなんて絶対にダメだ！！

聡也がロッソの前に両手を広げて躍り出たのと、？ブラックアウル？が砲を撃ったのはほぼ同時。

「しまった！？　ってあんた何してんのよッ！！」

「下がりなさい！　無茶ですわ！！」

鈴とセシリアの叫び声が聞こえたすぐ後に、聡也は光と超高温の粒子にその体を包まれていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

唐突ではあるが、ロッソ・ミオネッティとはどんな人物なのだろうか。

イタリア生まれ。
代表候補生。
性格は無関心。
無表情で無口。
ＩＳを展開すると性格が変貌する。
・・・本当にそうだろうか？

ロッソは、イタリアの小さな町の出身だ。
幼いころから非常にＩＳとの敵性が高かった彼女は、
早くから親と引き離され、次期代表候補生として
政府の保護観察のもとに置かれていた。
そのため、これと言った友人もおらず、
来る日も来る日も監視と検査の日々。
そんな生活の所為でロッソはどんどんふさぎこんでいってしまい
日常生活では、ほとんど話さなくなってしまったのだ。
そんな彼女が唯一自分を表現出来る場だったのが、ＩＳを操縦している時であった。
そう、聡也との戦いのときに見せた気性の荒さこそ本来の彼女の姿なのである。
だが当時の政府はそれを精神異常と断定して次期候補から外し、
友人の居ない彼女を一方的に地元の学校へ強制編入させてしまう。
ＩＳを使っていない時の彼女は、無口であるため結局卒業時までまったく友人ができなかった。
彼女にとって友人が出来ない事は既にもう苦ではなくなっていたが
自分の本当の姿を表現できるＩＳをどうしても諦める事が出来ず、
彼女はその年にイタリアで行われたトーナメント形式の
代表候補選抜試験を受ける事にした。

結果は、断トツで優勝。
しかも中には専用気持ちも含まれていたにも関わらず、
当時のイタリア量産機テンペスタ?型を使用しての圧勝。
そのニュースはその日のうちにイタリア全土を駆け巡った。
政府もこの結果を受けて精神異常の断定を取り消し、
彼女を正式に次期代表候補として認定した。
そこからは、日常生活や交友関係に若干の問題を残しつつも
ＩＳの成績は負け知らず。
それなりに順風満帆な生活を送っていた。
だが、ふと彼女は思う。
・・・つまらないと。
いつもいつも、自分は勝ってしまう。
既に当時のイタリアには彼女以上に強いＩＳ操縦者は、
候補生の中にいない状況だったのだ。
だからこそ知りたい。
自分より強い相手を。
自分をより高めてくれる存在を!
彼女はそんな人物に憧れた。
そしてそのモヤモヤした気持ちを抱えながら
ＩＳ学園に、ほぼ強制的に入学させられる。
しかし彼女にとっては都合がいいことだらけだった。
周りにはごまんと、世界各国のＩＳ操縦者がいた。
・・・だが。
そのどれもが、期待はずれだった。
またも彼女は、つまらなさにその身をうずめる。
一体どこにいると言うのか。
自分よりも強い者は。
あたしはそれまで勝ち続けなければならない。
そう・・・勝ち続けなければ。
だってあたしは、強いのだから。

誰よりも。

それが・・・このザマとはね。
ロッソは、焦点の合わない目をゆっくりと開く。
身体が重たい。
へへっ、パワーアシスト切れ、おまけにシールドエネルギー切れでガスも無ぇとは・・。
情けねぇ。
本当に情けねぇ。
しかも負けたの男だぜ?
ロッソは動かない身体で、上空の景色を眼だけ動かしてチラッと見やる。
あれ、なんで誰か闘ってやがんだ?
良く見えないが上空で三機ＩＳが闘っているようだ。
その時一機のＩＳが、こちらに向かって何かを撃った。
なんだ・・・何を撃って。
視覚ではとらえきれずとも、撃ったと言う事は何かしらこちらに攻撃を仕掛けてきたという事だ。
対処したいが、どの道身体は動かない。
くっそ・・・こんな終わり方ってあるか?
ははっ、せっかく自分より強いかもしれないヤツ・・・見つけられたと思ったのにな。
ロッソが諦めて、力なく笑った時、目の前に真っ白い何かが躍り出た。
ドオォォォォォォォォンッ!!!
地に伏していたロッソにはそれが、まるで地震のように感じた。
その大きな音と、同時に顔に何か生温かい液体がかかる。
ん?　んだこれ・・・。オイル?
ロッソはそれを手でぬぐい視線を向ける。

顔にかかった液体は、生温かくそして・・・・赤かった。
その色が感覚が、一気にロッソの頭を起こしていく。
同時に視力も回復して、ロッソはようやく状況を理解した。
「お前！　何やってんだ！？」
彼女が見たもの、それは彼女の前に前に立ちふさがって
迫りくる閃光から自分を守る一条　聡也の姿だった。
見ると、聡也のＩＳはもう原形をとどめていない。
特徴的な四門の砲をラック出来るバックパックや、手、足、そして
顔のバイザーまで
ほとんどが吹き飛びながら、彼はロッソを守っていたのだ。
「・・・なんで、お前」
なんで、あたしを守ってるんだ？
今日知り合ったばかりで、物の数十分模擬戦鹿してない相手を。
なんでお前は、守れるんだよ！
「僕の都合で・・・すいません・・」
聡也は全身の痛みに耐えながら力ない笑みを浮かべる。
「なんだよ、お前の都合って」
「それ、全部話してると・・・流石にきつ・・・いっ・・。
でもっ、一つだけ言えるとすれば・・」
すぐに聡也からその笑みが消え、苦痛に顔がゆがむ。
どうして・・・。
なんで。
ふと、その時。
その答えが分かった気がした。
あぁ、そうか。
そうなんだ。
？コイツは、あたしよりも強いんだ？
それが、答えだった。
見つけられたとか、強いかもじゃない。
そして予想は、聡也のたった一言で確信に変わった。

「僕にはっ・・・・くぅッ・・・・・責任があります・・からッ」
・・・・責任ね。
そいつがお前の強さってわけかな。
ハハハ、オーケオーケ。
上等だ。
ロッソは、ゆっくりと痛みをこらえて身体を起こす。
そして、言う。
「少し、気張ってろ・・・・。お前は死んじゃいけねぇ」
そう、コイツは死なせるわけにいかない。
やっと見つけた、自分よりも強いやつだ。
それに、ロッソはなぜだかわからないが
それ以外にも彼を守りたいとおもう気持ちが芽生え始めていた。
・・・なんなんだ、この気持ち。
なんか・・初めて感じる。
不思議な感じだな、なんか妙に暖けぇし・・・。
・・・・・あーもう!
今はそれどこじゃねぇだろ!
ロッソは、一時その気持ちを考えるのをやめ、ズタボロの愛機に視線を落とす。
息をひとつ吐くと、ロッソは心の中で愛機に語りかけた。
さぁて・・・もう少し頑張ってもらうぜ、?エスダーテ??
「――――――――――――――――――――モード?スフィーダ?起動!」

第１９話～それがお前の強さだな？～（後書き）

あーあーあー。

ちょっと、アンケートってわけでもないのですが、お伺いしたいんですけど。

皆さんはやっぱりセシリーとか鈴とか一夏とかが活躍するような二次創作が良いですかね。

いやまぁ変な事聞いてるとは思うんですけど、僕ってどうもオリキャラ大好きな性分でして。

物語が滅茶苦茶にならない程度に入れていきたいと思うんですが、どうでしょうか？

今後の参考にしたいので、よろしかったらご感想の砲でご意見いただければ幸いです。

・・・まぁ結構もう出しちゃってるんですが（爆

それでは、おぉ、次はいよいよ２０話なんですね。

それでは２０話でお会いしましょう！

さよならッ！

第２０話～情熱の赤き闘士？ロッソ・ミオネッティ？～

モード・スフィーダ。
ロッソが叫んだその声は管制室にも届いていた。
ただそれが何なのか分からず僕は首をひねった。
「スフィーダ・・・？」
イタリア語だろうか。
意味は分からないけど。
つぶやいた声を織斑先生が拾い、腕を組みながら説明してくれた。
「スフィーダ。挑戦を意味するイタリア語だ」
「挑戦？」
何に挑戦するって・・。
そこへ榊原先生がコンソールに“ペルフェット・エスダーテ”のスペック表を表示させながら会話に入ってくる。
「どうやら、スフィーダとはオーバードライブシステムの一種のようですね。
織斑先生、サウスバード君これを」
榊原先生は、画面を指差して僕たちをコンソール前に呼ぶ。
各種兵装一覧の中に、特殊兵装のタグをつけられて分類される？スフィーダ？の文字を見つける。
更に続けて、榊原先生がコンソールのキーを操作するとそのシステムの詳細が表示される。
「イタリアは、このシステムを情報開示してるんですね」
原則、ＩＳ学園には新技術の情報開示義務は無い。
だがイタリア製のこのＩＳはご丁寧にも、機構まで図入りで説明がなされている。
気持ち良いぐらいの潔さだ。
それは織斑先生も同じ考えだったようで少し怪訝そうな顔を浮かべる。

「ふむ・・隠す必要がないのか、それとも他に隠したいシステムが有るのか・・・
まぁいずれにしても今はこのシステムだな」
「はい、コレによると“スフィーダ”はシールドエネルギー、そして本体のエネルギーの二つの残量がゼロになって初めて起動できるシステムのようですね」
「あぁ、通常のエネルギー回路とは別にもうひとつ独立したエネルギー回路を持つようだな」
織斑先生は言いながら、画面に表示される?ペルフェット・エスダーテ?の
左右スカート部に取り付けられた円柱状のパーツを指さす。
話の流れからして、おそらくそれが?ペルフェット・エスダーテ?の予備タンクなのだろう。
そしてそれを証拠づけるかのように、アリーナを映すモニターにはその左右のタンクを
スカート内部へ格納する姿が映っていた。
そしてその後すぐに、脚部や腕部ユニットの装甲の一部がはじけ飛び、
?ペルフェット・エスダーテ?から凄まじい量の排熱煙が上がる。
「そして・・・あの熱量はおそらく・・」
「ふむ、機体の限界値を一時的に高めているためにおこる各部の熱暴走を
ああして強制冷却しているんだろう」
なるほど。
そういうシステムなのか。
限界を超えて動けなくなったところでさらにその限界を引き上げて無理やり稼働させるシステム。
確かにその名の通り、自分の限界への?挑戦《スフィーダ》?ってわけね。
最後の切り札というわけか。

・・・・でも。
僕はふと不安になる。
あの黒いＩＳ。
前のときもそうだったように、紫色のＩＳ？紫燕？と行動を共にしているはず。
なら今回も、タイミングを見計らって介入してくる可能性は大いにありうる。
いくらセシリーと鈴がいるとはいえ、切り札を今切ることに少し危なさを感じた。
まぁたぶんロッソの方は、そういう情報を知らないだけなのだろうけど。
僕はその旨を織斑先生に伝える。
そして織斑先生は頷くとそれをセシリーと鈴に伝えた。
「オルコット、凰」
『はい』
『なんでしょう？』
「前回のように？紫燕？の介入も予想される事態だ。
周辺警戒を怠らずに事態に当たれ。いいな？」
鋭い声にセシリーと鈴が、そろって了解と返す。
僕はその声を聞きながら、モニターを睨みつけていた。

◇◆◇◆◇◆

もたれ掛けさせた。
・・・あんがとよ。おかげで助かったぜ、少し待っててくれよな。
ロッソは聡也に向かって心の中でつぶやくと、?ブラックアウル?をゆっくりと睨みつける。
そして表情を変えず答えた。
「まぁな・・・」
「まぁ・・・いいですけどね。どうせ鉄クズどうぜ・・・・・・ッ!!」
?ブラックアウル?が、言葉を言い終わる前に、何かに吹き飛ばされる。
「な、何、今の!?」
「ハイパーセンサーですら捕らえきれない攻撃なんて・・・」
鈴とセシリアもいまいち何が起こったのかを、理解できていない。
何せ弾丸の軌道ですら、確認できるハイパーセンサーで何が起きたのか確認できなかったのだ。
とっさに何が起きたのかを理解しろというほうが難しい。
皆が困惑するなか、たった一人。
その攻撃を行ったロッソだけが、不適に笑っている。
ロッソの手には、蛇腹剣“テンポラーレ”が握られていた。
それを見た?ブラックアウル?が苛立ちの混ざった声でロッソに叫んだ。
「くぅッ・・・それか!
でも、どうして反応がッ!?」
ロッソは?ブラックアウル?と同じ高度に飛び上がると言い返す。
「何をしたかをわかる必要は無ぇぜ・・四分後てめぇはアリーナの地に伏してやがるからなぁ!!」
「っく!」
ロッソは一瞬で間合いをつめると、ブラックアウルに拳を突き出す。
その拳を?ブラックアウル?は何とか受け止め一瞬安堵するが、
刹那機体もろとも吹き飛ばされてしまう。

「ありゃ、言ってなかったか？　スフィーダにはスフィーダ専用の武器とかがあるんだよ！」
？ブラックアウル？を吹き飛ばしたものは、左手に内蔵されている？ウラガーノ？と呼ばれる
圧縮した空気を一気に打ち出す近接戦闘用の武装。
ちなみに名前は日本語で暴風を意味するイタリア語である。
急激なGと真正面からの強烈な衝撃に顔をゆがませながら、体勢を立て直そうとするがそこへさらに
ロッソが？テンポラーレ？で追い討ちをかける。
？テンポラーレ？は？ブラックアウル？のバックパックを砲ごと切り裂くとさらに返しの刀で
左側のスラスターをもぎ取る。
「馬鹿な！？」
信じられないという顔と声を上げロッソを見やるが、ロッソは追撃をやめない。
スラスターをもぎ取られ、バランスを崩した？ブラックアウル？を？テンポラーレ？で払い上げ
一瞬機体が浮いたところへ、回転の遠心力を利用した強烈な回し蹴りが襲う。
「おいおい、歯ごたえなくて困っちまうぜ！！」
こうして軽口をたたいているロッソだが、
その目はしっかり？スフィーダ？の残り稼働時間を確認している。
このシステムは、一時的に機体の限界値を無理やり引き上げ、
通常よりもはるかに高い機動力とパワーを引き出しているため
各部に尋常ではない負荷がかかっている。
つまり最大稼動時の、さらに上の出力を多くのパーツに負荷をかけながら
搾り出しているということだ。
そのため、最大稼働時間は戦い方にもよるが四分。
それを過ぎると本当の意味で活動限界を向かえ、今度こそ動けなく

なる。
つまりその時間内にこのＩＳを倒さないと、必然的に負ける。
相手が少しでも動けてもだめだ。
完膚なきまでに叩き潰す！
タイムリミットはあと百二十秒余。
まだ少し余裕はあるが、だからといって悠長に構えている時間はない。
「・・・ふざけるなっ！！！」
？ブラックアウル？もやられっぱなしというのは気分が悪いようで、
まだ残っている両手の荷電粒子砲でロッソを狙うが
トリガー引く直前思わぬ方向から砲を真っ二つに切断されてしまう。
驚愕の表情で、刃が振り下ろされた方向を見やるとそこには？双天牙月？を構えた鈴がいた。
「あたしたちも忘れてもらっちゃ困るわ！」
「この、お前も！！」
自信たっぷりに言う鈴に神経を逆なでされて、いよいよ頭に血が上った？ブラックアウル？が
鈴のほうへ、もう片方の荷電粒子砲を向けようとする。
だがそれは、与えてはならない隙を敵に与えてしまう行為でもあった。
「もらいましたわ！」
正確な二発の射撃が、構えかけた荷電粒子砲と残っていたスラスターを吹き飛ばす。
それに重ねるように四機のビットが？ブラックアウル？に驟雨のごとく射撃を浴びせ続ける。
「へぇ・・・やるじゃねぇか。どこの誰だかは知らねぇがね」
思わず感嘆の声を上げるロッソ。
どうやらその声は、二人に聞こえていたらしく
耳がキーンとなるほどおおきな声で通信が飛び込んできた。
「あんたね、あたしを知らないっての！！」

「そうですわ！！鈴さんなどは知らなくても、よろしいですけど私ぐらいは知っていませんと、お話になりませんわよ！！！」
「なんですってー！」
「なんですの！」
鈴とセシリアは、互いに罵り合いながらも？ブラックアウル？に攻撃を加えていく。
まぁなんとも、器用だなとロッソは苦笑いする。
そして残り時間がいつの間にか三十秒を切っていることに気がついた。
「そろそろ、決めるか・・・・！」
ロッソは？テンポラーレ？を元の一本の剣に戻す。
そして、？外部に放出したエネルギーを内部へ取り込みなおした？。
・・・そう。
これは？イグニッション・ブースト？の手順だ。
ロッソは体勢を低くして、？テンポラーレ？を構え、
内部で圧縮されたエネルギーを一気に後方へ打ち出した。
ドンッ！！
何かが炸裂したかのような大きな音の後、
爆発的なエネルギーは？ペルフェット・エスダーテ？を
一気にトップスピードまで持っていく。
？ブラックアウル？に肉薄したとき、ＩＳのパラメータ画面が残り時間を告げた。
Ｌｉｑｕｉｄａ　ｄｉｅｃｉ　ｓｅｃｏｎｄｉ．
Ｉｏ　ｃｏｍｉｎｃｉｏ　ａ　ｃｏｎｔａｒｅ．
９　８　７　６．．．
（残り１０秒。
カウントを開始します。
９　８　７　６・・・）
Ｌｉｑｕｉｄａ　ｃｉｎｑｕｅ　ｓｅｃｏｎｄｉ（残り五秒）

「はあぁぁぁぁぁぁっ！！！」
ロッソは？テンポラーレ？を？ブラックアウル？の腕部にたたきつける。
手に鋼鉄を切る確かな手ごたえが伝わってきた。
その後ロッソは“ブラックアウル”を宙返りしながら蹴り飛ばす。
回転しながら吹き飛ぶ先に鈴が？双天牙月？をもって待ち構えていた。

Ｌｉｑｕｉｄａ　ｑｕａｔｔｒｏ　ｓｅｃｏｎｄｉ（残り四秒）
「カモーン♪」
鈴は？双天牙月？を両手に構え？ブラックアウル？の背面に一撃。
回転と逆方向への衝撃で回転の止まった？ブラックアウル？にもう片方の刃で別方向へ弾き飛ばす。
「セシリアッ！」

Ｌｉｑｕｉｄａ　ｔｒｅ　ｓｅｃｏｎｄｉ（残り三秒）
「お任せくださいな！」
セシリアは弾き飛ばされた？ブラックアウル？へ正確無比な射撃をビットで行う。
「人に挨拶するときは、被り物は脱ぐのがマナーでしてよ！」
セシリアはビットの攻撃で正面を向いた、
？ブラックアウル？のバイザーを？スターライトＭＫ？？で吹き飛ばす。
バイザーの片方を失った？ブラックアウル？の目にはまだ微かに、反抗の意思を感じる。

Ｌｉｑｕｉｄａ　ｄｕｅ　ｓｅｃｏｎｄｉ（残り二秒）
生きているスラスターで何とか体勢を立て直そうとする？ブラックアウル。
だがそこへ、両手で？テンポラーレ？を構えた？ペルフェット・エ

スダーテ?が突っ込む。
何とか片腕でその突撃を防ぐ?ブラックアウル?だったが推力が違いすぎた。
赤き弾丸と化した?ペルフェット・エスダーテ?に?ブラックアウル?はなすすべなく押し返されていく。
「おおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!!!!!」
「ぐぅッ!!!」
そのままロッソは?ブラックアウル?の腕をつかむと急降下して地面を引きずりながらアリーナの側壁へ一直線に加速していく。

Ｌｉｑｕｉｄａ　ｕｎ　ｓｅｃｏｎｄｏ（残り一秒）
そして、側壁へブラックアウルを叩きつけると至近距離から?ウラガーノ?を
時間の許す限り撃ちまくる。
周囲は砂煙で何も見えなくなっていくがそんなことは気にしない。
「これで、終わりだぁッ!!!」
ロッソは一度?ウラガーノ?に空気を収縮させてから左手を振り上げると、
一気に腹部めがけて振り下ろす。
バガァァンッ!!!!!!!
地鳴りのような音。それが決着の合図だった。
?ブラックアウル?はすでにピクリとも動かない。
そして・・・

Ｃｏｎｔａｎｄｏ　？　ｅｓａｇｅｒａｔｏ
Ｉｏ　ｓｐｏｓｔｏ　ａｄ　ｕｎａ　ｍａｎｉｅｒａ　ｄｉ　ｆｅｒｍａｔａ　ｄａ　ｕｎ
ｓｉｓｔｅｍａ　ｄｏｐｏ　ｒａｆｆｒｅｄｄａｍｅｎｔｏ　ｕｒｇｅｎｔｅ.

Una funzione di Perfetta·Estate completamente le fermate.
（カウントオーバー。緊急冷却後システムを停止モードへ移行。
ペルフェット・エスダーテ機能を完全停止します。）

機能停止と共に一気にやってくる疲労感と、完全にパワーアシストの？死んだ？ＩＳのズシリと重さ。
ロッソは勝利を確信してＩＳの装甲の重さに任せてゴロンッと、仰向けに倒れこむ。
へへっ・・・やっぱあたしは強ぇ！
それに・・・あいつも守れた・・・よな？
ロッソは頭だけを動かして聡也の方向を見やる。
聡也はまだアリーナの側壁にもたれかかったまま気を失っていた。
機体も身体もボロボロだったが、さっき抱き上げたときに確認した外傷以外真新しい怪我は見られなかった。
よかった・・・無事だ。
にしてもなんで、あたしはこんなに嬉しいんだろう・・・。
・・・あたし・・。
ロッソは聡也から目をそらすと、ふと顔が赤くなっていることに気がついた。
うわわわわッ！　なんで顔赤くなってんだよ！？
何で顔が赤いのかはわからなかったが、誰が見ているわけでもないのに
とっさに顔を隠したくなった。
なんで？
・・・・なぜだろう？
・・・・あいつに・・・・見られたくないから？
・・・なんで？
そんな考えがグルグルと頭の中で回っているが、当然急な眠気に襲われる。

実際、極度の緊張状態の中、オーバードライブシステムを使用した無茶の影響で、既にロッソは限界を超えていた。
・・あぁ、まだ・・・答え、出てな・・・。
ゆっくりと薄れていく意識の中。
ロッソは、守りきれたという達成感と
不思議でわけがわからないが、それでいて何処か
あたたかい気持ちを抱きながら深いまどろみの中へ落ちていくのであった。
ここに?完璧な夏?と言う名を与えられた情熱の赤き闘士の勝利が確定した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「敵機完全に沈黙!」
「よし、凰、オルコット。先に一条とミオネッティを回収しろ!」
織斑先生が素早く榊原先生に指示を送る。
・・・・終わったのか?
僕は少し拍子抜けしてしまった。
何故なら、何時“紫燕”が介入してくるのか分からなかったからだ。
しかし紫燕は来なかった。
タイミングを逃したのか?いや、入ろうと思えばいくらでも隙はあったはず・・・。
何か、介入できない理由があったのだろうか。
そういえば、彼らとの初邂逅の時。
結局何をしにきたんだろうか。
その時ふと、無人機の存在が頭を過ぎった。
まてよ。
ひょっとして、あの二機はあの無人機を追いかけてきたんじゃ。

確か無人機はこの学園が回収したと言っていた。
――――――――――――ッは！！
「織斑先生！！」
管制室に榊原先生の悲鳴のような声が響く。
「どうした？」
コンソールを覗き込んだ織斑先生の顔が途端に険しくなる。
「第三アリーナへ、急速接近する反応がッ！六・三秒後来ます！！」
もう何が接近しているのか、織斑先生には分かっているようだ。
勿論僕もね・・。
「凰、オルコット、何処でも良い。ピットへ飛び込めッ！！」
織斑先生が怒鳴るように言う。
声に戸惑いながらもセシリーと鈴は一番近いピットへ飛び込んだ。
「榊原先生、第三ピットメインゲートを閉鎖！」
続いてセシリー達が飛び込んだピットのゲートが閉じられる。
これでとりあえず、聡也達を連れたセシリー達の安全は確保された。
「織斑先生！　第三ピットへ行ってきます」
「あ、おい！」
僕は織斑先生の返事を待たずに、管制室を飛び出した。

第三ピットでは既にストレッチャーに乗せられて
聡也とロッソが今まさに運び出されていく所だった。
僕はそれを通路わきに避けて見送ると、二人の元へ急ぐ。
「セシリー」
「アル」
「へへん、どーよ。あたしの華麗な活躍は」
セシリーはほっとしたように笑い、鈴は自慢げに笑う。
ほんと、二人とも全く違う性格なのに、どうしてこうコンビネーションとかが旨く行くんだろうね。

「あぁ、僕が心配する事なんて何もなかったね」
「いえ、そのお気持ちだけでうれしいですわ」
「ってか、何よあんた心配なんてしてたの？」
ほんっと・・・どうしてねぇ。
僕は二人の性格の違いに少し苦笑いを浮かべつつ、
僕は話を先ほどの戦闘の事に切り替えた。
「いや、まぁね。で、さっきの戦闘の事なんだけど」
「あぁ、って言うかなんであたしたち怒鳴られたわけ？」
「そうですわね、別段ハイパーセンサーにも反応はありませんでしたけれど」
・・・・え？
いやいやいや、何を言ってるんだい。
管制室のレーダーだって捉えてたんだよ。
それが更に高性能なＩＳのハイパーセンサーでとらえられないわけないじゃないか。
「まさか、何か来てたとか？」
「それなら、反応があるはずですわよ」
キョトンとした顔で、会話を続ける二人。
あぁ、なるほど。
多分これは、余裕を見せつけるために
僕を引っかけようとしてるんだね。
やっぱり、仲良いじゃないか。
「もう、冗談はやめてよ。管制室は大変なんだよ、今」
「だから、何の話だっつーの！」
「あ、アル、本当に私たちのセンサーには何も・・」
鈴とセシリーの困惑する様子を見て、僕は嫌な汗が流れる。
・・・本当に反応が無かったのか！？
でも、榊原先生はあと六・三秒でって・・・。
その時爆発音とともに大きく建物が揺れた。
「きゃっ！」

「うわっと！」
「セシリー、鈴！」
バランスを崩した二人を抱きとめる。
揺れはすぐに収まったが、今の爆発音は一体・・・。
まさか・・。
やっぱりどこかに無人機関係のパーツが保管されて。
考え込む僕に、抱きとめた二人から声をかけられる。
「ちょっ、ちょっと・・・いい加減・・・」
「そ、そのアル・・えぇと・・・」
ん？
そこでようやく二人を抱きかかえるようにしている
自分の姿に気がついてあわてて手を離した。
「あぁぁ、ご、ごめん！」
「ふん、ま、礼ぐらい言っといてあげるわよ」
「いや・・・私は・・そのもう少し・・」
「え？　セシリー何か・・」
「いえいえいえ、な、何でもありませんわ！」顔を真っ赤にして、
大きなアクションで手を振るセシリー。
なんだろ、今何か言ったような・・・。
「あんたたちねぇ、二人して見つめあってる場合じゃないでしょうが！」
「別に見つめあってなんて無いよ！？」
「そ、そうですわ、いやですわねぇ鈴さん！？」
そ、そうだ。
確かにそうだね。
いまだに状況がつかめない僕たちへ、織斑先生から通信が入る。
その通信を受けたのは鈴だった。
『そこに全員居るか？』
「はい。セシリアとアルディも」
織斑先生がチラッと僕たちを一瞥し、それにこたえる様に僕たちは

頷き返した。
「先ほどの爆発は一体なんですの？」
『ふむ・・・少々厄介な事態になった』
「というと」
『保管してあった、無人機のコアを盗まれた』
やっぱり・・・・。
目的は無人機だった。
でも、じゃあさっきの反応は一体・・・。
デマ情報だとしても、何が目的でそんな事。
織斑先生は頭を数回かきながら、いつも通り淡々とした口調で話す。
『まぁ幸い盗まれたとは言っても、あのコアは既に束でも直せないぐらい壊れていたから、まぁ盗られてどうだと言うわけではないが・・・』
「とにかく私たちも、もう一度出ますわ！　場所はどこですの！？」
『いや、その必要はない』
言葉をまくしたてるセシリーに織斑先生はピシャリと言った。
その言葉は、鈴にも意外だったようで眼を見開く。
「必要無いってどういう意味ですか！？」
『そう、熱くなるな』
「いやでも！」
『なら凰、聞くがお前のＩＳはすぐに出られるのか？』
「うぐッ」
鈴は思わず口ごもる。
セシリーも同様に下を向いてしまった。
『燃料の補給、各部損傷のチェック、オルコットもあれだけビットを使った後だ。身体への負担もある』
「で、ですが！」
『それに・・・』
織斑先生は、今の空気に少し不釣り合いな笑みをこぼす。
意図が分からない僕たちに構わず、織斑先生は言葉をつづけた。

『もう、別動隊が対処に当たっている』
「別動隊!?」
鈴が素っ頓狂な声を挙げるが、それは仕方のない事だ。
そんなのいつの間に組織したんだろう。
気になった僕は織斑先生に尋ねる。
「その、別動隊って言うのは・・・」
尋ねた直後、別枠でウィンドウが表示される。
そこには、白式を駆る一夏の姿があった。
他にもラウラとシャルロット達もいる。
その映像に、一同がようやく納得した。
モニター越しの織斑先生も肩目をつむり、こういうことだと言わんばかりの顔をしている。
まぁ、確かにこれならセシリーと鈴が行く必要はなさそうだ。
それはセシリー達も分かったようで、何度か頷いて一つ息を吐いていた。
『お前たちは、お前たちで出来る事をしろ、分かったな』
それだけを言い残し一方的に通信を着る織斑先生。
・・・やれることね。
僕たちが今やれることは、一つしかない。
「それじゃ、聡也達を見に行こうか」
「ま、仕方ないわ」
「ですわね」
二人の賛同を得られたところで、僕たちは早速医務室へ足を進めた。
まだまだ、今回の事は謎だらけだけど。
それを考えるのは今の僕たちの仕事じゃない。
僕は頭を切り替え、二人と共に足早にピットを後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さて・・・・。
向こうが本当の紫燕と言うわけか。
千冬は、顎に手を当てて考えていた。
紫燕は、無人機が保管されていた、学園の地下施設付近から姿を現した。
恐らく、今回あの黒いＩＳを助けに来なかったのはあちらを優先していたからだろう。
・・・・なら。
先ほどの反応は一体なんだと言う？
ＩＳのハイパーセンサーに引っかからず、
こちらのセンサーだけに反応したと言うのもおかしな話だ。
無人機が狙いで、戦力を二分させた事は理解できるが、
どうにも先ほどの反応が腑に落ちない。
その時一夏から、通信が入った。
『織斑先生！』
「どうした、何かあったのか？」
『いや、何も・・・無いんですけど』
「何！？」
「確かに、煙は上がってて建物とか
一部壊れてるところはありますけどＩＳの姿は・・」
どういう事だ。
先ほどモニターに入ってきた映像はなんだと。
――――――しまった、そうか！
くそッ！　また出し抜かれたと言うのか！！
「織斑！第三アリーナへ向かえ！　デュノアとボーデヴィッヒもだ！」
『え！？　あ、千冬姉！？』
『ほら、行こう一夏！』
『教官、了解しました！』
シャルロットとラウラがが困惑する一夏を、引っ張って第三アリー

ナへ向かう。
千冬はその映像を切ると、ダンッと机をたたいた。
やってくれる。
つまりこう言う事だ。
まずはじめに、？ブラックアウル？が第三アリーナを襲撃。
それと同時に、学園地下へ紫燕のパイロットが向かう。
そう間違いなく地下施設には入られたのだ。
あの時、センサーに移ったＩＳの影は偽物。フェイク。
あのタイミングで第三アリーナへＩＳが向かっていると言う嘘の事実を作るための。
そして無人機のコア奪取後いまだに周囲の目が向く第三アリーナから眼をそらすために、地下施設周辺で爆弾か何かで爆発を起こす。
周囲の眼が今度はそちらに向く隙を狙って、本当の？紫燕？が第三アリーナへ
進入すると言うわけだ。
管制室に届いた、あの？紫燕？と一夏達の戦闘シーンも
恐らくは巧妙に作られた合成映像だろう。
それにしてもなんて回りくどい手を使うんだ。
千冬は舌打ちをする。
だがそんな回りくどい手にまんまと載せられた自分にも腹が立った。
とにかくだ。
もう相手は逃げるだけなので、これ以上回りくどい策を取る必要もないだろう。
今度こそ。大丈夫だ。
大丈夫・・・だな？
千冬は、これまでに見た事のが無い、何とも自信の無いしぐさでうんうんと頷くのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ふ～ん。
こうなってんのね。
鳥越　聡華はつまらなさそうに、？ブラック・アウル？の
破片をつまみ上げると、まじまじと見た後ぽいっと後ろへ放る。
後ろでガシャンっと音がして装甲が砕ける音がするが気にしない。
聡華は今、風紀委員として正式に事後処理をしている所。
人手が足りないっつってもな・・・。
普通生徒一人で行かせるかっての・・・
心の夏中でごちりながら、聡華は目ぼしいものを探す。
ちなみに現在このアリーナには人っ子ひとりいない。
一応千冬達教師陣は監視しているらしいがアリーナ上は聡華一人で
ある。
聡華はまた一つ残骸を拾い上げようとして視線を動かすと、視界の
端に何か動く物を発見する。
その人物は誰かに肩を貸して、今まさにアリーナを出ていこうとす
る所だった。
あん？　・・・けが人・・？
聡華はその人物を不審になって呼びとめる。
けが人は全員既に医務室へ運ばれたという情報を事前に聞いていた
からだ。
「おい、けが人か？」
聡華の呼び掛けに、一瞬ピクリと反応すると顔を少し動かしてこち
らを一瞥する。
顔は見えないが目つきは相当鋭いようだ。
聡華は頭をポリポリとかくと、そんなに睨まなくていいだろとぼや
いて二人に近づいていく。
「あ～まぁ、睨むのは良いけどな？　医務室はそっちじゃね・・・・
・・ッく！？」
気だるそうな聡華の目つきが変わる。

肩を貸していた方の人物が、いきなり飛びかかって来たのだ。
「てめぇ・・・・・・・！？」
聡華は難なく？紫燕？の右腕を部分展開させそれを防ぐ。
だが聡華は驚愕していた。
相手もＩＳを部分展開して飛びかかって来たのだが
相手が部分展開した装甲の形状や色が聡華のソレと全く一緒だったからだ。
しかし、それは相手にとっても同じ事だったようで疑問と苛立ちのまじった声が返ってくる。
「・・・・・何もんだお前？」
「そりゃこっちが聞きたいね、いきなり何しやがる」
聡華側からは逆光で顔が良く見えないが、
相手からは自分の顔が確認できているだろう。
聡華は目を凝らすがそれでもその顔を確認する事は出来ない。
ただ、自分以上に驚いた顔をしていると言う事はなんとなくわかった。
「聡也に手ぇ出そうってんなら容赦はしねぇぞ・・・」
ん、聡也？
聡華は、チラッとアリーナの隅で壁に身体を預けている人影を見る。
聡也ってのか・・・。
そういえば、さっきの模擬戦。
一年のヤツが騒いでたな・・・。
確か聡也とロッソが・・・って。
聡也。
聡華の頭の中に、先ほど戦闘を繰り広げていた白いＩＳの操縦者が思い浮かぶ。
あいつも聡也って言うのか。
名前の同意に違和感を覚えながら聡華はキッと相手を睨み返す。
しばらく無言のにらみ合いが続いたが、不意に太陽の光が何かにさえぎられる。

「そこまでだ！」
「大人しくした方が良いよ。いくらなんでも三対一・・・いや四対一は分が悪いでしょ」
「お前、その人から手を離せ！」
どうやら、噂の織斑　一夏ご一行のようだ。
まぁ、でも光を遮ってくれたおかげで、ようやく顔を拝め・・・・・・え？
聡華はどうして、相手が自分よりも驚いていたのかその意味をようやく知った。

ワインレッドに赤くつり上がった眼。

眼の前には、憮然とした顔の自分自信が立っていた。

第２０話～情熱の赤き闘士？ロッソ・ミオネッティ？～（後書き）

イタリア語って分からないけど、発音は格好いい。

どもしるくです。

感想くださった方ありがとうございました。
少し考えて、話の筋を再考してみます。

あー、でもなんでオリキャラの女の子ってこんな口悪いんでしょｗ
ボーイッシュなのは好きですが、これは既に男勝りなような気もし
なくもないですね。

では２１話でお会いしましょう！
さよならっ！

第２１話～傷だらけの二人～

「っち！」

聡華は舌打ちをして、相手の攻撃を回避する。

一夏たちの到着によって、相手の顔が見れた事は良かったがなし崩し的に戦闘に発展してしまった事態は聡華自身いただけなかった。

・・・やべぇな。

下手に攻撃してめぼしい物を破壊してしまっても最悪だが、だからといってこのまま手を出さなければ、こちらが落とされる。

それでは元も子もない。

それに相手は、あの乱入してきたＩＳの関係者であることは間違いないのだ。

ＩＳの残骸を破壊せずに確保出来れば言う事は無いのだが、言うは易し行うは難しという言葉通り

そこまで中々旨くいくものではない。

聡華は目の前に迫り来る？紫燕？の？大蛇？をかわしながら考える。

それになんであたしと同じ顔、同じ声、で同じＩＳなんだ？

ドッペルゲンガーってのは最近じゃＩＳで襲い掛かってくる物なのか？混乱する頭を、少しずつ整理しようと思うのだが次々に沸き起こる疑問に

自分の頭の中で書類整理している小さな自分が次々に忙殺されていくのが分かる。

あぁ、くそっ！

今は切り替えろ、出ないと落とされる――――――っ！？

聡華がかぶりを振って、頭を切り変えようとしたその一瞬の隙に

相手の？紫燕？が？大蛇？を振りおろす。

それに反応して聡華もとっさに？大蛇？を前に出すがワンテンポ遅れ？大蛇？を抑えられると、腹部に強烈な蹴りを入れられ後ろに大き

くはじかれてしまった。
「ぐあっ！！」
「――――――今しかねぇっ」
敵の？聡華？は焦った風につぶやくと、全スラスターを噴かして側壁に
もたれかかっていた聡也をすばやく回収して離脱を試みる。
聡華が体勢を立て直したころには既に、相手のＩＳのスラスターには
完全に火がともった状態だった。
今は一夏達が頭を抑えてはいるが、一本でも直線コースで抜けられる道があれば
？紫燕？は抜けられる。
自分と同じＩＳということはできることも同じ。
特徴は良く分かっていた。
やっべ、逃げられる！
聡華は焦りを覚えながら、リアスラスター全部からエネルギーを放出する。
その量は一夏の？白式？の比ではない。
そして放出したエネルギーを全スラスター内部に取り込み、一気に爆発させた。「一年坊主共・・・道を開けろぉッ！！！」
聡華の声が一夏に耳に届いた時には、聡華は敵のＩＳの正面で？大蛇？を構えていた。

「何！？」
「これは・・・？イグニッション・ブースト？・・なのか？」
ラウラと一夏が急に目の前に現れた聡華に驚きを隠せない中、
シャルロットだけがなるほどとうなずいている。
「・・・てめぇ」
一方いけると思った道を、つぶされた敵の？聡華？は聡華を睨む。
聡華が行ったのは、？イグニッション・ブースト？のひとつの究極体である？バニッシング・ブースト？と呼ばれるもので

原理は同じだが圧縮するエネルギーの量が桁違いに多い。
また所狭しと設置されたスラスターの推力も相まって
その速さはハイパーセンサーが？まったく反応できない領域？の速さを生み出す。
最低三十メートルの距離を必要とするが、間合いをつめるなどの行為に限定すれば
ほぼ最強レベルの瞬発加速技術である。
なので相手からすれば聡華があたかも、消えたかのような錯覚に陥ってしまう。
そう、聡華があの聡也戦の時に見せたトドメへの足がかりはこの技だったのだ。
「自分の使ってるＩＳだ、何ができるのかぐらいお前にだって分かるはずだろうが。えぇ？」
聡華は、高圧的に相手を威嚇する。
敵の？聡華？は見るからに焦っているが、それでも冷静に打開策を考えようとしている様だった。
「とにかく、そいつを医務室へ運べ。話はそれからだろ」
聡華は構えを解くと、ゆっくりと？紫燕？に近づき手を差し伸べる。
そしてもう少しで、気を失っているであろう聡也に手が触れるところまで近づいた瞬間。
ピクリと聡也が反応した。
聡也は、気を失っていたとは思えない状況判断の早さで手にボロボロの荷電粒子砲を呼び出す。
「何！？」
「先輩！」
何の躊躇なく打たれる荷電粒子砲の一撃。
本来なら直撃コースだったが、そこへシャルロットが飛びつき間一髪直撃を間逃れる。
しかしそれでシャルロットが守っていたラインが崩れ？紫燕？が消えた。

?バニッシング・ブースト?か・・・・・・くそ!
聡華はシャルロットに、抱えられながらハイパーセンサーで消えた?紫燕?の航跡をたどろうとする。
だが次にハイパーセンサーが反応を感知したときには既にアリーナからは離れすぎており
追跡は不可能となっていた。
「あぁぁっ、くそったれ!!」
聡華の吐き捨てた言葉が、一際大きくアリーナに響いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『すいません・・・・逃げられました』
聡華の報告を聞き、千冬は大きく息をついた。
「お前、は何について残念がっている。お前は戦うために出て行ったのか?」
『それは・・・・そうですけど』
「怪我は無いのか?」
『あぁ、はい残りの一年も全員無事です』
聡華はカメラアングルを切り替えて一夏たちを写す。
映像には、怪我も傷も無くピンピンしている一夏達が写っていた。
「そうか・・鳥越は引き続き事後処理を続けろ」
『俺たちはどうしたら・・・?』
「お前たちも、鳥越の指示で事後処理を手伝ってやれ。難しいことは無理でも
残骸処理ぐらいはできるだろう」
千冬は了解の声を聞き、通信をきる。
にしても、問題が次から次へと・・・。
本当に頭が痛くなる。

せめて臨海学校ぐらいは、静かに普通に過ごせることを願わずにはいられない。
「ため息つくと、幸せが逃げますよ？」
「お前みたいに、分かりやすい不幸に自ら飛び込んでいくよりはましじゃないか？」
「ひどいですよ、それ！　私だって本気なのに・・・」
「はぁ・・・本気だったらもう少し男を見る目を養え」
「その年になって、彼氏の一人もいない織斑先生には言われたくないですよ・・・」
・・・ほぅ。
なかなか言ってくれる。
だいたい私だって、あの馬鹿な弟の気苦労さえなければすぐにでも・・・な。
まぁ特に誰かいるわけではないが、私だって女だ。
収まるところに収まるだろう。
・・・・・多分。
千冬はまた大きなため息をつくと、ゆっくりと菜月の横にあるコーヒーを
塩入のコーヒーに入れ替える。
「それにですね、織斑先生は・・・ずずっ」
その後盛大にコーヒーを吹く菜月を、少しいたずらっぽい笑みで千冬は見つめていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

太陽の光が届かない海の中を、一頭の鋼鉄の鯨が優雅に泳ぐ。
その鋼鉄の鯨は黒い船体の側面に大きく行書体の白文字で？戦（おののき）？と書かれており、潜舵翼は艦橋側面に持つセイル・プレーン方式、

そして船尾は水中での機動力向上のためにX型の操舵翼を持っている。
さらに特徴的なのは艦橋の前に大きくせり出した格納ブロック。
そこには一基のカタパルトが設置されていた。
非常に大きな船体を持つこの潜水艦は内部も、かなり広く作られており
そこでは技術者達がせわしなくデータ取りを行っていた。
その中に、少し小柄で黒髪ショートヘアーに綺麗な緑眼を持つメガネをかけた白衣の女性がいた。
彼女の名前は一条(いちじょう)　希(のぞみ)。
このなりで、この潜水空母?戦?の実質的な艦長兼ＩＳ－Ｎ技術責任者である。
希は送られてきたデータに目を通して、大きくため息をつき天を仰いだ。
と言ってもあるのは、鋼鉄の天井なのだが。
「はぁ・・・まーさーか・・・ここまで逝くとは・・・」
希が見ていたもの、それは聡也の?ホワイトアウル?の最後に送られてきた破損状況だ。
幸いコアは無事で予備パーツさえあればすぐにで組み直せるが、
そのためには?予備パーツをＩＳ学園まで輸送しなければならない。
?
この?戦?は最大速力こそ二十四ノットとまぁ潜水艦ではそこそこの速さを誇るが、
それは機関最大をした場合の話で通常航行はその半分以下の速度での移動となる。
燃料電池式のＡＩＰ機構を持つため、いちいち浮上する必要は無いがその手間を差し引いても
あまりに時間がかかってしまうのは確実。
更に言えば、学園に潜水艦で乗り付けるなど前代未聞。
さすがの希も気が引ける。

そこへ、別の女性技術者が声をかける。
彼女は、きれいな黒髪だったが碧眼を持つアメリカ人。
名前をリリス・カールストンという。
ちなみに、ここの技術者はその多くが女性である。
操舵など一部は男性が行っているが基本女性が多い。
それは希がこのプロジェクトであるプロジェクトNを立ち上げる際に優秀なIS技術者を引き抜いたから。
「まぁまぁ、彼も好きでそうしたわけじゃないですし」

「当たり前よ・・・あの子、好きでやってたらもうイグニションキーを送ってあげないんだから」
希は額に手を当て、渋い顔をする。
そんな希を見て、リリスはクスッと笑うと希の横にあった“ホワイトアウル”のデータに目を通す。
「なんだ、そんなに言うほどひどく無いじゃないですか」
「・・・前面装甲は粉々、火砲は四門中一門が破損消失。残りの三門も銃身の焼き付きでオーバーホール必須でスラスターは右側が内圧弁不良に加えて、メインスラスターへのエネルギーバイパスは完全に沈黙」
「あ、いや・・・その」

「PIC再設定に、ファイアリングロックの調整と各種フィードバックシステムの再構築それに・・・」
「わーッ！　わかりましたわかりましたぁッ！　私が悪かったですぅ～」

まくし立てるような希の現状列挙を、リリスは涙目で遮る。
リリスにとって、放っておくと淡々とした口調で延々と続きかねない希の話は苦痛でしかなかった。
まぁ、この場合はリリスが適当な事を言ったのがそもそも悪いのだ

か。
「はぁ～、下手なことは言うもんじゃないなぁ」
「ため息はこっちがつきたいわ・・・予備パーツを運ばなきゃいけないのにその方法が見つからないんですもの」
「え？　乗り付けたらいいじゃないですか」
先ほどと打って変わりあっけらかんとのたまうリリス。
喜怒哀楽の変わりやすさに呆れながらも、希は言い返す。
「あのねぇ、何処の世界に学園へ潜水艦で乗り付ける馬鹿が居るのよ」
「でも届けなきゃいけないんですよね」
「まぁ、それはそうだけど・・・
あ～ぁ、誰か持って行ってくれないかしらねぇ・・」
持って行くと言う単語にリリスがピクッと反応する。
そして少し考えてから、ニッと笑う。
「主任、良い手が有りますよ」
「え、ホントに!?　どんな方法かしら？」
「文字通り、予備パーツを運んで貰いましょう」
「・・・？」
希はよく内容がつかめず怪訝な顔をするがリリスは構わない。
「だから運んで貰うんですよ」
「・・・誰に？」
リリスはコホンと一つ咳払いを入れてピンッと人差し指を立てる。

「世界第二位の先輩です」

◇◆◇◆◇◆

「本当にすまないわね・・乗せてもらっちゃって」
どこまで続く大海原。
その青い世界を白波を立てて進む一隻の空母の姿があった。
アメリカ海軍ミニッツ級原子力空母？スタン・フレイリー？
最大艦載機搭載数九十機。
三機の蒸気カタパルトを持ち、着艦用に計四本のアレスティングワイヤーを備えている。
名前の由来は、アメリカ軍増強に尽力したとある議員の名前らしいが詳しくは知らない。
その飛行甲板で、ローラはナターシャと海風に髪をなびかせていた。
「いいわ、別に。今日は下見だもの」
「それでもねぇ・・・一応作戦行動でしょう」
「別にいいじゃない、ハワイ近海までは行くんだからそこから飛行機で日本に飛べば」
「そういう問題かしら」
ローラは苦笑いでナターシャに返すとナターシャはフフッと笑って海を見る。
ローラもそれに釣られて海を見るが、どうも素直にきれいだと喜べない。
両親の死が海だったからだ。
今でも時々思い出してしまう。
両親が目の前で波にさらわれていく所が。
これでもローラは、ましになったほうである。
当時はもう海など見るのもいやだった。
だがそういっていては、ＩＳの操縦者は務まらない。
カウンセリングなどの心のケアもあいまって今では、？それなり？には海を間近で見られるようになった。
だが、アルディは・・・。
「ほ～ら、なに暗い顔してるの」

ナターシャにいわれ、ハッとして顔を上げる。
どうもこの手の考えは、どれだけ年月が過ぎようと心に暗い影を落とすようだった。
ローラは取り繕うように、笑顔を浮かべてナターシャに返す。
「いや、なんでもないわ、なんでも」
「・・・・まぁ、わからなくもないけどね。
余計なお節介かもしれないけど、アルの前でその顔しちゃだめよ」
「えぇ、わかってるわ、大丈夫」
ナターシャは軽く息を漏らすと、再び海へと目を戻す。
すると海の中からニョキっと黒いもやしが生えているのを見つけた。
「ねぇ、ローラ。海からもやしが生えてるんだけど」
「・・・ナターシャいきなり何？　熱にやられた？」
「いやだってあれ・・・」
「なんだ、潜望鏡じゃない」
ローラはさらっと言った後、両者にしばしの沈黙が流れて・・・。
「「潜望鏡！！？？」」
きれいにハモッた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「よっしゃ、つっかまえたー」
リリスのお気楽な声が響く艦内。
それを聞いて希は、操舵士に指示を飛ばす。
「ソナーは？　この上に何かいる？」
「反応なし、本艦上部艦影ありません」
「よし、浮上よ！　バラストタンクの排水開始」
「了解！」
各座に着いた操舵士のクルーが機器を操作して、浮上体制を整える。

「艦首上げピッチ十」
「艦首上げピッチ十、完全浮上までおよそ三十秒」
希の支持を復唱しながら、操舵をしていくクルーの面々。
そして・・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ザバァァァァァァァァン！

海面がゆっくりと盛り上がり、その中から鋼鉄の鯨が浮上する。
大型潜水艦の浮上ということもありものすごい量の水しぶきが？ス
タン・フレイリー？を襲う。
しかしナターシャもローラも急な潜水艦の登場に呆気に取られ、
その水しぶきをモロもかぶってしまった。
「ねぇ・・・ローラ」
「なに、ナターシャ」
「これ敵かしら？」
ナターシャはすでにチラッと手に自分のＩＳを握っている。
正直な話、ナターシャはやろうと思えばこの空母と潜水艦を敵に回
しても
ものの数分で無力化できるだけの力を持っている。
だがローラはそんなナターシャを呆れ顔で制する。
「待って、ナターシャ。仮にこれが敵だったら相当馬鹿よ？」
「いや、それはあたしもそう思うんだけど・・」
ローラはとりあえずナターシャにＩＳをしまうように言って潜水艦
を見やる。
その潜水艦の側面には達筆な文字で白く？戦？という文字が躍る。
日本語？　ということはこれは日本船籍の潜水艦・・。
ひとまずそれだけがわかっただけでもよかった。

どこの国とも知れない潜水艦だったら、何をしてくるかわかったものではない。
そしてローラとナターシャは、いやこの空母にいる誰もがこれが敵でないということを感づいていた。
潜水艦の最大の長所は隠密行動にある。
本気でこの空母を落とす気ならわざわざ、真横に隙だらけで浮上してきたりはしない。
いつの間にか集まってきた空母のクルーが怪訝そうに見つめる中、ゆっくりと艦橋のハッチが開く。
ガゴンッ！
「・・・ふぇぇ・・・酔ったぁ・・」
「あなたね、何回浮上経験したら慣れるの？」
潜水艦の中から現れた白衣の女性二人を、クルーはいよいよ理解が追いつかなくなり
一同唖然としてその潜水艦を注視するのだった。

「はじめまして、私一条　希と申します、で、こちらが」
「せーんーぱーい♪」
「きゃっちょと・・とっと・・！」
いきなりもう一人に抱きつかれて、押し倒されてしまうローラ。
倒れた衝撃と何が起きたのかスッと理解出来ずに背中をさすりながら呆気にとられるローラ。
「痛たた・・・。一体何が」
しかし抱きついてきた人物を見て、顔をひきつらせた。
「り、リリス・・・」
「お久しぶりですねぇ、先輩！」
「あら、ローラ。知り合いなの？」
ナターシャが、キョトンとした顔でローラに尋ねる。
ローラはチラッとリリスの顔を一瞥した後苦笑いを浮かべた。

「知り合いも何も、訓練校の後輩よ・・・技術者への道を選んだとは聞いていたけど」
「はい！だからこのとーりです」
リリスは立ち上がるとくるくると回る。
その回転にあわせて、白衣の裾がフワリと舞った。
「彼女には、主にあの“戦”で運用されている機体のデータを整理してデータベース化してもらっています。結構優秀ですよ」
希が誉めると、リリスは更にくるくると回りだした。
「わー、誉められたぁ～」
「ま、まぁとても外見そうは見えないでしょうけどね・・・」
希はやれやれという眼差しを向ける。
それはローラも同じだった。
リリスは訓練校時代から何一つ変わっていない。
・・・あたしはどうかしら。
変わった？
「少なくとも、あなたは変わってないわよ。・・・まぁ訓練校時代は知らないけどね」
あら、読まれちゃった。
私ってそんなに顔に出やすいのかなぁ。
ローラはグニグニと両頬を両手でこねる。
「あ、先輩！　何やってるんですか！？」
すると、いつの間にか回るのを止めたリリスがローラの行動を不思議に思い近づいてくる。
「ん～・・・あ、わかりました。マッサージですか？　マッサージですね？　マッサージですよね！」
リリス変な三段活用をしながら唐突にローラの両頬を両手でグニッと掴んだ。
「ひょっ、ひょっほぉ！？」
「私、良いマッサージ知ってるんですよ～。た～てたて、よ～こよこ、丸描いて・・・・チョンっと！」

リリスは最後勢いよくローラの頬を引っ張り上げて離す。
もちろんだがこれはマッサージではない。
ローラ自身も聞いたことのある、じゃんけんの罰ゲームみたいなやつだ。
「えへへ～。気持ちよかったですかぁ？」
「・・・リリス、それマッサージじゃないわよ」
希の静かな突っ込みのすぐ後に、リリスはローラの鉄拳制裁をもらう。
それを見て、希は大きなため息を吐くのだった。

艦長に事の次第を説明して、？スタン・フレイリー？内の応接室に通された希とリリス。
そして希は、腰掛けるなり単刀直入にローラへ切り出した。
「日本のＩＳ学園にＩＳ－Ｎの予備パーツを運んでもらいたいんです」
言うと希は、一枚のメモリーカードを差し出した。
何の変哲もない、ＳＤカードのような物だが、中には？ホワイトアウル？の
予備パーツが量子化されて収められている。
ローラとナターシャはそれを受け取ってまじまじと見た後、ナターシャが少しムッとして言い返す。
「つまりあなたたちは、アメリカ軍人に宅配便みたいなことをしろって言うの？」
「はい、簡単に言ってしまえば」
何の臆面もなく、希はナターシャをまっすぐ見据え言い返す。
「我々の？戦？では速度に限界があります。どれだけ急いでも数日はかかってしまう。
でもそれでは、間に合わないんですよ」
「間に合わないって言うと・・・？」

「ＩＳ学園の授業にです。まだ明日は平常授業ですから、実習もある」
「だからって・・・・ねぇローラ？」
急に話題を振られたローラだったが、焦ることもなく逆に静かに何かを考える。
そして、フッと笑うと口を開いた。
「わかったわ・・・・持っていけばいいのね」
「ローラ！」
「まぁまぁ、ナターシャ落ち着いて・・・」
ナターシャを片手で制してローラは希方を向き直る。
希のほうも、意外にあっさりと承諾されたことに若干戸惑っているようだった。
そんな希を尻目に、ローラはメモリーカードを懐にしまう。
「それで、受取人さまのお名前は？」
「え、あぁ一条　聡也よ。私の息子なの」
ローラはその言葉を聞いてさらにクスッと笑う。
要はこの人も私と同じだ。
まぁ弟と息子という違いはあるが、その子が心配でしょうがない。
その気持ちがローラにはよくわかる。
自分だって、ナターシャに無理を言って乗艦させて貰っているのだから。
そう、弟のために。
・・・・・でも。
と、そこでローラはふと思う。
どうしてこの人はあたしがこの艦に乗っているってことを知っていたのかしら。
・・・別にあたしはこのことを誰にも・・・・・・・あ。
考えている途中にチラッと視界にリリスが写った。
そしてピンッときた。
そうか、コイツか。

「リリス・・・今言ったら鉄拳制裁一発で許してあげる」
「は、え!?　いやいやいや、何言ってるんですか先輩!?」
「言わないの？」
「だから何のことだか・・・」
「次は船尾からスクリューに向かって投げるわよ」
「プライベートネットワークにハッキングしました」
バッチーン！
リリスの顔面を張り手が襲う。
それを見て思わずナターシャがつぶやいた。
「・・・あなたグーで殴るんじゃなかったの」
「あら、あたしは嘘つきなのよ？」
ローラは髪をかき上げながら答え、ふきゅ～っと伸びるリリスを一瞥した。
リリスはこう見えて情報のスペシャリストで高いハッキング技術を持ち合わせる。
つまり、ローラ個人のスケジュールなど、リリスにとっては簡単に把握できてしまうということだ。
そしてスケジュールを確認した後、乗艦名簿にハッキングして搭乗艦を特定し
あとはＧＰＳでここまで追ってきたのだろう。
はぁ・・・もっとその技術を全体の有益なことに使えばいいのに・・。
ローラはため息とともに頭を抱えるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

う、ううん・・・。
ゆっくりと目を開けるとそこには白い天井が見えた。
すでに夕暮れ時で橙色に部屋が照らされている。

ゆっくりと体を起こそうとした聡也にアルディが声をかけた。
「あぁ、まだ寝てなきゃだめだよ。君相当ボロボロだからね？」
「あ、・・・うん」
聡也は再びベッドに身を預けようとして、
ハッと思い出したかのように痛みに耐えながらガバッと
アルディの肩をつかんだ。
「ロッソは！？　彼女は大丈夫なんですか！？」
「ちょっちょっと、声が大きいよ！」
そこでようやく聡也はここが医務室だということを再認識して声を
潜める。
「で、その・・・彼女は・・・」
「今はセシリー達が見てるよ。大丈夫気を失ってるだけみたいだから」
アルディはカーテンで仕切られた後ろのベッドを親指で指差しながら答えた。
アルディの言った事実に聡也はホッと肩をなでおろす。
よかった、守れたんだ。
責任は・・・果せたかな。
懸念事項が消え、また全身を激痛が襲う。
顔をゆがませる聡也にアルディが、手を貸しベッドへ横たわらせる。
「ま、ゆっくりお休みよ」
いつもどおり気さくな声でさらりとアルディが言った後、
鈴とセシリアがカーテンを開けてこちらに入ってくる。
二人ともうすでに制服姿だった。
「ロッソが目を覚ましたわよ」
「う～ん・・・ですけどロッソさんってあんな方でしたかしら。
戦闘中もっと言葉使いが荒っぽかった気がするのですけれど」
「あぁ、あの子は二重人格みたいなもんだからね。ＩＳ使ってないと根暗よ、根暗」
鈴の何気ない一言にムッときた聡也が、横になったまま語気を強め

た。
「根暗ってそんな言い方しなくてもいいでしょ！」
「うぇ、な、なんであんたが怒るのよ！？」
「え！？・・・・あ、えと」
鈴に言われて気がつく。
なんで僕怒ったんだろう。
ただ唐突に、彼女を悪く言った鈴にカチンッときて。
・・・・あれれ？
なんでかな。
「ははーん・・・・わかったわかった・・あーそう。そういう好みなんだぁ」
「フフフッ、なかなか玄人好みですわね。聡也さんは」
いまだなぜだが理解できていない聡也をジト目の鈴と、
いたずらっぽい笑みを浮かべたセシリアが茶化すように言う。
「あ、あの・・どういう意味です？」
「ま、あんたならすぐにわかるんじゃない？」
「そうですわね、少なくともどこかのアメリカ人さんよりは・・・ね」
「ん？　僕がどうかしたのかい？」
・・・・一体何の話をしてるんだ？
話の内容がわからない聡也とアルディは、きょとんとした顔を浮かべるだけだった。

「へぇ、じゃあ後日取調べなんですね・・・」
「そうらしいよ。君が寝てる間に織斑先生が来てね。目が覚めたら言っておけってさ」
まぁ、あたしたちもだけどねと鈴がそれに付け足した。
正直、聞かれることは大体予想がついていた。
襲撃した？ブラックアウル？と酷似するＩＳ。そしてＮの技術。さ

らにはあの？聡也？
聡也自身、あまりよくわかっていないのだ。
あれが一体何者なのか。
聡也はただ、相手が執拗に狙ってくるようになってやむなく相手をしているに過ぎない。
まぁそれでも、Ｎの技術よっ作られた二機だ。
無視しようにもできるはずもないし、それにまだ聡華のこともある。
今だって結構考え出すと混乱してくるほど複雑なのだ。
はぁっとため息をつく聡也。
そこに痛む身体を引きずってロッソが姿を現した。
それを見て、何かを感じた鈴がわざとらしく声を張り上げる。
「それじゃぁ、あたしたちはこの辺で失礼しようかしらねぇ～」
「え、鈴さんなにを・・・・あ、あぁそういうことですのね。わかりましたわ。ほらアル？」
「もういくのかい？　せっかくだしもう少し・・」
「アル！」
「・・・・・・・・・ハイ」
ものすごい剣幕でセシリアに押されて顔を引きつらせながらアルディは立ち上がると、最後カーテンを閉める前に、お大事にねっと残して部屋を後にした。
先ほどまでの騒がしい雰囲気が一転して一気に静かになる。
そこは聡也とロッソの二人だけ。
・・・・な、なんだか気まずい。
初対面があれだっただけに、声をかけづらい。
とりあえず聡也はゆっくりと身体を起こすと目の前に椅子にロッソを促した。
コクリと、うなずいて椅子に座るロッソ。
見た感じ怪我は聡也と同じかそれよりは少ないぐらいだ。
また少し沈黙が続いた後ロッソのほうから先に口を開いた。
「・・・・その・・・助かったわ・・ありがとう」

「いや、あの時は・・・必死だったし・・・。
僕が巻き込んじゃった訳だし・・・・・ね。それに助かったといえば僕のほうだよ」
「・・・・私は・・・・何もしてないよ」
「いやいや、だって敵を倒してくれたんでしょ・・・お恥ずかしい話僕は気を失っちゃったから」
聡也は、恥ずかしそうに頭をかく。
敵の攻撃から身を挺して助けたとはいえ、
その後気を失ってしまうとはさすがに格好悪い。
「・・・・でも、それで私は助かった」
「あぁ、そういってもらえると・・・ありがたいかな」
聡也はハハッと笑う。
その顔をロッソは少し頬を赤らめながら見つめた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

聡也、笑うとこんな顔なんだ。
ロッソは、聡也の笑顔に見とれてしまう。
そしてそのたびに、胸の奥でチクチクと何かが痛む。
それと同時に、気を失う直前に感じた暖かい気持ちが広がっていくのがわかる。
・・・これは、何なの？
自問自答するがわからない。
初めての感覚なのだ。
痛いが心地よいなどという感覚、今まで味わったこともない。
だが、聡也の顔を見ていると自然とそんな気持ちが湧き上がってくる。
そういえば、昔誰かが言っていた気がする。
えぇと・・・なんだっけ。
誰だかは思い出せないが、おぼろげながらその言葉の一部を思い出

した。
?それが、人を好きになるってことだよ?
・・・・好き?
私は、この人が好きなの?
その考えに至るや、急に聡也のいろいろな顔がフラッシュバックしてくる。
さっきの笑顔、戦闘中の真剣な眼差し、そして自分を守ってくれたときのあの優しい目。
あぁ、そうなんだ。
私はこの人を好きになってしまったんだ。
初めての感覚に戸惑いながらも、考えがまとまったことでチクチクとした痛みも消え、暖かな心地よい気持ちだけが残る。
でも・・・・。
そこまで考えてロッソはふっと表情を曇らせた。
私・・・・変だし。
変とは、言わずもがな二重人格のことだ。
ロッソはこの二重人格のせいで、本国では一度精神異常の烙印を押され
、戻った地元の学校でもいじめや差別を受けた経験がある。
自分の真実を話して、態度が豹変した知り合いを
嫌と言うほど見てきたロッソは、知らず知らずのうちに
コンプレックスみたいな物を抱いてしまっていたのだ。
多分、“元の私”なら気にせずズバッと言えたのだろうが、
今のこの自分ではそれがどうしても言い出しづらい。
ダメだなぁ。
時々こっちの自分なんて消えてしまえと本気で思う。
こんなの・・・私じゃない。
こんなの嫌だ。
こんな二重人格が嫌だ。
真実を確かめるのが嫌だ。

こんな自分が嫌だ。

そして。

嫌われてしまうのが嫌だ。

これまで特に気にしてなどいなかったが・・・いや違う。

気にしていない振りをしていたのだ。

これまでならそれでよかった。

でもその振りは今、目の前の少年の登場によって無視できない物となってロッソを襲う。

ロッソは顔を恐る恐る上げる。

そこには、ずっとうつむきっぱなしだった自分を心配そうに見つめる聡也がいた。

聡也の顔を見ているうちにロッソの中で、一つの思いが生まれる。

・・・多分、私ここで聞かないと・・・一生後悔するかもしれない。

自分が初めて人を好きになった。

その相手だからこそ聞きたい。

聞いてみたい。

もう、そのように思ったと気がついた時には、既に口に出してしまっていた。

「あ、あの・・・・私・・・」

「はい？」

と、勢いで口を開いてしまったは良いが後が続かない。

それでもロッソはなんとか言葉を紡ぎ出す。

「私・・・・変じゃない・・・？」

「変・・・・・？」

「うん・・・その。ＩＳ使うと途端に・・・性格変わっちゃうし」

「あぁ、その事ですか」

聡也は変わらない笑みを浮かべているが、
ロッソにとっては心臓が張り裂けそうな、緊張感に包まれていた。
もし変だとか言われたらどうしよう、避けられたら？
マイナスでネガティブなイメージばかりが頭を支配していく。
しかしロッソのそんな考えを知らない聡也は、
ロッソが心の準備を整える間も与えないぐらい直ぐに、答えを返した。
「確かに少し驚きましたけど、それだけですよ」
「・・・驚いただけ？　変とは思わなかったの？」
「変でしょうか？」
「え？」
「自分の中に別の自分が居ることが、そんなに変でしょうか？」
ロッソは固まってしまった。
これまでそんな風に考えたことなどなかった。
ただひたすらに、自分は変だからと思い続けてきた。
「良いじゃないですか。それを含めてロッソなんでしょ。
どっちがロッソでどっちが違うってそうじゃないですよね」
「そう・・・なのかな」
まだ、いまいち自信が持てない。
本当にそれで良いのだろうか？
だって自分は・・自分は。
「それを含めて、イタリア代表候補生ロッソ・ミオネッティなんですよね？」
含めて・・・？
消えてなくなってしまえと思った今の自分も、含めて・・・私。
聡也はそっとロッソの頭に手を置いた。
そして自信なく縮こまってしまったロッソの頭を優しく撫でた。
「だから、自分をもっと大事に考えて下さい。
変だからって気にして、どちらかを嫌っちゃ絶対に駄目ですよ」
・・・・言われてしまった。

こうもあっさり、言い当てられてしまった。
そして初めて好きになった人に初めてそんな事を言われた。
自分を変だと思わずに真っすぐ見てくれて・・・・。
そのままで良いと言ってくれた。
急に目の前がジワッと滲む。
「ふぇ・・・・ふっ・・・・くっ・・」
これまで数十年間ずっと我慢してきた思いが溢れ出す。
一度堰を切って溢れ出した思いは、もう止まらない。
「ずっと耐えてきたんですね。ロッソ自身が気がつかなくなる程長い間」
聡也の言葉が引き金だった。
「うぅ・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」
ロッソはその場に泣き崩れる。
それを聡也は痛みに耐えながら、優しく抱きしめた。

もうすぐ沈みきってしまう窓からの夕日が、
傷だらけの二人をまるでスポットライトのように照らしていた。

第２１話～傷だらけの二人～（後書き）

大学め。
中部電力に違約金払わされたとかで電力絞りやがったな。

どうもしるくです。

ここでようやく一段落。
次回あたりホントに短編でも入れたいと思います。

それでは短編ｏｒ２２話で（ぉ　お会いしましょう！

さよならッ！

ＩＩＳ短編　偽りの羽根～そのいち：これは嘘でもなんでもない！～

今日は休みだというのに、僕は職員室にいた。
何もしていないはずなのに織斑先生に呼び出されたのだ。

「あの、それで僕は何故呼ばれたのでしょうか？」
「……そんなに警戒するな。別に取って食おうなどと言うつもりはないんだからな」
じゃあ叩いて食べるつもりなんじゃ……。
「それにお前を食ったら、腹を壊しそうだ」
食われる事は嫌だが、そう言われるのもなんか嫌だな。
織斑先生は、一つ息を吐くとドンッと自分の机にダンボールの箱を置いた。
大きさは三〇センチ四方とまぁまぁな大きさだ。
「何です、コレ？」
「知らん。今朝ドカッと私の机の上に置いてあったんだ」
知らんって……。
何でそんな得体の知れない物がピンポイントで織斑先生に・・・。
っていうか。
「それは分かりました。で、何で僕なんですか？」織斑先生は黙って、僕側からは見えないダンボール箱の側面をトントンと叩いた。
それを覗き込む。
それだけでもう何も説明は不要だった。

「これ、星条旗……」
「そういう事だ」
ははぁ、なるほどなるほど。僕がアメリカ人だからアメリカから、来たであろうこの謎アイテムを僕に押しつけようと言う魂胆ね……。
全っ然納得できません！

「どうして、僕ですか!?ティナとかクラスにアメリカ人いるでしょう!」
「バカを言え、生徒が怪我をしたらどうする」
「お前は、怪我にも慣れているだろう。既に保健室の常連だそうじゃないか」
うぐっ……は、反論できない。僕の頭にまたあの、保健の先生の目が浮かぶ。
また来たの!?という驚きの目と、怪我ばかりでかわいそうねぇという憐れみの混ざったあの目……。
出来ればあんな目は見たくないんだけど。
「まぁ、そういうことだ、これはお前に預ける。コレの正体がわかったら連絡しろ、いいな?」
「あ、いやでもっ!」
「い・い・な?」
「……はい」
保健の先生の目も嫌だが、織斑先生の目も嫌だ。

さて。
貰ったのは(半ば押し付けられた)いいが・・・・

これ何?
僕はそれをとりあえず寮の部屋まで運び、ノートPCをどけると机の上に置いた。
箱の側面には、アメリカの国旗が描かれ上蓋はガムテープ止めでその上に差出人不明の伝票が貼り付けられている。
う~ん。
ひとまず箱からだそう。
僕は、ペン立てに入っていたカッターナイフでガムテープを切り上

蓋を開ける。
中を恐る恐るのぞき込むと、箱の中には衝撃緩和材の発泡スチロールに包まれた丸い球体が一つ。
ゴトリ。
箱からそれを取り出し再び机に置いた。
「ただのボールでした・・・っていうオチなら良いのに」
僕はごちりながら、改めて球体を観察する。
球体には、付属で足がついていてそれに固定する形で置いておく物のようだった。
そして球体の上部には、プロジェクターのようなレンズが埋め込まれ、その脇に怪しいスイッチがあった。

「押すとドガーンとか無いよね・・・」
僕は球体を持ち上げたりまじまじと見つめたりしながら、正体を探る。
ふむ、やっぱりこのスイッチ押さないとダメなパターン、これって。
あんまり押したくないけど・・・・。
でもなぁ。
下手にビクつきすぎでもってそれはそれで、時間の無駄なような。
ゴクリ
僕は生唾を飲み込む。
大丈夫・・・大丈夫・・・。
自分を鼓舞するように心の中で唱えて、スイッチへゆっくりと指を伸ばす。
よ、よし・・・っ！
そして意を決して、思い切ってスイッチを押す。
キュィィィン・・・
なにかの起動音の直後、　部屋を一瞬で真っ白い光が包み込む。
僕はその光に包まれて、やがて意識を失った。

う、うぅっ・・・。
ええぇっと、僕はどうなったんだっけ・・・。
確か、球体が光ってその後は・・・ダメだ、思い出せない。
僕はどうやらうつ伏せの状態で床に倒れたらしい。
とりあえず、立とう。
僕は体を起こそうとするが中々うまくいかない。
なんか、手足に引っかかってるような感覚が・・・。
僕は、顔を腕の方向へ。
あれ?
僕ってこんなに制服ダボついてたっけ。
それになんだか、力も上手く入らないような。
僕はうつ伏せのまま、手足をパタパタさせる。
・・・・・え?
だんだん冴えてくる頭が、否が応でも真実を僕に突きつける。
え!?
はっ!?
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!!!!!!!!」

僕は・・・・・・・・・

小さな女の子になっていた。

・・・・ちょっと落ち着こう。
僕はなんとか椅子に座り直すと腕を組んで頭の中でこれまでの事をザーッと整理する。
簡単に言えば、僕がこうなったのは間違いなくあの織斑先生宛てに届いたと言う謎の球体だ。
それが光って、気付けばこれ・・・。
なぁんだ、整理するほどの事じゃないじゃないかぁ～ハハハハハハッ・・・・。
・・・・ってふざけんな!!
事は簡単だけど、身に起きた事件はそんなに簡単じゃない!
コレ一体いつになったら戻るんだ。
まさか一生このままとか無いよね・・・。
そう考えるとサーッと血の気が引いていく。
と、とにかくそんな先の事はイイとしてこれからを考えよう。
ん?
・・・・これから。
待てよ。
僕はバット時計に目をやる。
・・あーーーーッ!!昼前じゃないか!!
確か今日は・・・・。
コンコンコンッ
唐突に部屋に響くドアのノック音。
その音と同時に声が聞こえた。
「アルー? ランチの約束お忘れでは無くてー?」
セシリー。
ど、どうしよう。
これは・・・。
不味い。
「何、あいついないの?」
鈴もいるのかぁ!?

セシリーだけならなんとか頼みこんで、
口裏を合わせてもらえるっていう算段があったんだけど鈴は無理だよ・・。
あの嵐みたいな性格でひっかきまわすにきまってる。
あぁ・・・絶体絶命ってやつでしょコレ・・。
・・まぁでもいいや、セシリーと鈴ならまだなんとか・・。
「ふん、大方寝ているのであろう。不規則そうだからなあいつは」
箒・・・
「全く、友としてはいささかその体たらくはいただけんな」
・・ら、ラウラ・・・。
「まぁ寝てるなら仕方が無いよ」
シャルロットまで。
「仕方が無いって言ってもなぁ。あいつ来てないのに俺たちだけで飯食うわけにもいかねぇだろ？」
って一夏！！！
全員集合してるじゃないか！！
絶体絶命どころかピンチすぎる！
ま、まぁ・・鍵は・・・・え！？
掛かってないぃ～～！！！
そう言えばこの球体持って入ったから鍵をかけ忘れたんだ。
完璧パニックな僕を余所に、ドアの向こうではどんどん話が進んでいって・・。
ガチャ
ドアノブの回る音がする。
「なんだ、鍵がかかって無いじゃん」
鈴・・・いつもながらその強引さ恨むよ。
鈴はそのままドアを開ける。
えぇと・・・あ、そうだ。ベッド！！
僕は素早くベッドにもぐりこんで身を丸くする。
寮のベッドは元々ふかふかだから、

僕の今のサイズだったら変な膨らみも出ないから怪しまれないはず・・・。

布団越しに皆の足音が聞こえる。

「あん、誰もいないじゃないか」

「おかしいですわねぇ、確かに部屋に入っていくのを見たんですけれど」

セシリーに見られたのか・・・。

とと、ベッドに誰かが近づいてくる。

「ふむ、寝ているというわけでもなさそうだな」

「そうだね、布団も膨らんでないし」

「・・・・・」

「あれ？　どうかしたのラウラそんな難しそうな顔して」

どうやらラウラは、何かを考えているらしい。

何を考えているかは分からないが、正直言って怖い。

何せ彼女は現役軍人だ。

隠れている敵を見つけ出すなんて日常茶飯事だっただろうし、

そう言った観察眼にも優れているはずだ。

「いや、不自然だと思ってな」

「何が不自然なのよ」

「見ろ」

ラウラはベッドの端を指さす。

「なぜここだけこんなにシーツにシワが寄っている？」

しまった！

「そんなの、ただのベッドメイクの時に出来たヤツじゃないのか？」

「確かに、そうとも取れるが・・・特にここのシワ」

ラウラはかがみこむと、次にベッド側面の皺を指さした。

そこへ皆の注目が集まる。

「明らかに中へ引っ張られている。通常ベッドメイクと言う物はこう言った皺が出来ないようにマットの下へシーツを引っ張りこみ皺を伸ばすものだ」

「だから、さっき一夏が言ったみたいにベッドメイクの・・・・」
「いや、これはベッドメイクされた後に出来た皺だろう。その証拠に前の方は
しっかりとシーツが織り込まれている」
・・・・なんか色々もう終わりそう。
「つまり・・・それは」
セシリーの言葉に対してラウラは不敵に笑うと布団をグッと掴む。
僕はそれに抵抗しようとするが小さくなった影響でまず手が制服の外に出ていない。
そしてラウラが、僕にとっての死の宣告を高らかに告げた。
「ヤツはここにいると言う事だ！！」
バサッ！！
勢いよくシーツが払われる。
そして一同の目は・・・・。
点になった。

「・・・・と言うわけなんだよ」
一同説明を聞くも理解できず・・・・って感じだなぁ・・。
まぁ当たり前か。
僕だって信じられないんだし。
「お前・・・・ほんとにアルディなのか？」
「一夏、僕もねいくら嘘つきだからってここまで身体は張らないよ・・」
「いや、でも・・・なんか可愛いぞお前」
か、か、可愛い・・・？
あぁ今・・・なんか元からそんなに無かったけど僕の男としての尊

厳が音を立てて崩れて・・
「・・・・ふぇ・・」
「あーーー！　一夏なに泣かせてんのよ！」
「そうですわ、小さい子にはもっと優しくして差し上げませんと！」
「・・・・お前らな、これはアルディなのだぞ」
ラウラの正確な突っ込みが入る。
何だろう、今日はラウラが頼もしく見え・・・。
「そう言えば日本の幼子には飴を挙げると喜ぶときいたな」
無かった。
うん大丈夫いつものラウラだ。
「まぁ～でも・・・アルディってことを考えても考えなくても可愛いよね」
ヒョイッとシャルロットに抱き上げられる僕。
真正面から満面の笑みを見せられたら、いくら女の子になってる僕でも赤面してしまう。
「えぇと・・・」
「あー、コホンんッんんッ！　シャルロットさん？」
言葉に窮していた僕に、セシリーがわざとらしく咳払いをして入ってくる。
そしてシャルロットから素早く僕を、奪い取ると自分の膝の上に置いた。
「あー、セシリアもう少しだけ抱っこさせてよ」
「ダメですわ。それにアルにはそんな事している余裕などありませんわよ。一刻も早く
元に戻る方法を考えませんと・・・」
「とか何とか言ってぇ・・あんたが抱っこしたいだけでしょ？」
「な、り、鈴さん何を馬鹿な事を！」
あー、なるほどこれが珍獣扱いと言うやつね。
しかも特別な。
はぁ・・・。

「だが、その球体とやら中々厄介な代物のようだな。説明書も無いとは」
「うん、だから困っちゃってさ・・・」
「ってか、普通明らかに怪しげなボタンを押すかよ」
一夏君は何もわかってないよ・・・。
特にあの時の僕の覚悟その他諸々をね。
と言うか。
「大体ね、君のお姉さんが僕にこんなの渡すからこうなってんだよ？　一夏も浴びせてあげようか！？」
一夏は織斑先生の事を出され流石に言葉に詰まったが、苦笑いでその後の事に答える。
「千冬姉の事は、まぁ弟としては複雑だけど。
流石に俺の女の子バージョンなんて変なだけだろ？」
ふと何気なく言ったその一言だったが、
他の四名の女子たちにはかなり魅力的に聞こえたようだ。
「一夏の・・・」
「女の子バージョンか・・・」
「あ、何かいいかも」
「僕も、少し興味あるなぁ・・」
「お、おい！？　お前ら変な事言うんじゃない！」
・・・・これは使える。

とりあえず、部屋に居ても進展しないと言う事で、僕たちは食堂へ移動する事に。
出来れば外を出歩きたくなかったんだけどね・・・。
部屋にいるって言ったのにセシリーが無理やり抱き上げて僕を連れだしてしまったのだ。
当然、いくら女子って言っても小さすぎる僕は注目の的だ。
食堂に着くまでに既に二桁の女子から質問攻めにあってその度にセシリーが、なんでか少し自慢げに

話すんだよねぇ・・・。
まぁその・・・旨く誤魔化してくれてるのはありがたいんだけど・・・。
「セシリー・・・その僕の歳の離れた妹って言うのはちょっと厳しくないかい？」
「そうかしら・・・？　まぁ居ても良いじゃありませんか。ばれたらお得意の嘘でしたーで、なんとかなりますわよ」
ハハハ・・・ほんと自分が嘘つきで良かったよ。

僕はセシリーに抱っこされたまま食堂の席に座る。
正直恥ずかしさは最高点だが、セシリーの膝の上から下りると机に手が届かない。
・・・まぁ、やむなしというやつだ。
そして僕の目の前には、定食セットが。
「ほら、アルあ～ん・・・」
にこやかに、僕の口元にご飯を持ってきてくれるセシリー。
「せ、セシリー自分で食べられるから・・・」
「・・・なんかさセシリアって、
アルディが女の子になってからやりたい放題やってない？」
「うむ、確かにそうだな・・・。流石にアルディもあの体躯ではセシリアを振りほどくのは難しいか」
「ひょっとして、今までやりたかった事、をやってるのかも？」
「まぁ、その可能性はあるだろう」
セシリーと僕を尻目に声をひそめて何やら話す四人。
そして一斉に一夏を見て・・・。
「「「「はぁ～～・・・」」」」
大きなため息をついた。
「なんだなんだ？　ため息は幸せが逃げるぞ？」
自分に向かってため息が突かれている事にすら気がつかない唐変木がのんきに四人に向かって言う。

そこで試しにシャルロットが一夏に質問をしてみた。
「ねぇ一夏、セシリアとアルディを見てどう思う？」「どうって、セシリアって子供好きなんだな。面倒見も良いし、良いお母さんになるんじゃないか？」

「げほッけほッ・・・お、お母さん！？」
セシリーが盛大にむせるのを横目で見ながらシャルロットはまた大きなため息を吐いてしまった。

ところ変わってアリーナ。
今日は休みってこともあって元々ＩＳの自主トレを組んでいた。
・・・・・・まぁ、僕がこんなことになってなけりゃ参加できたんだけどね。
今、セシリーが鈴と模擬戦をしているのだが、なるほどなかなか迫力がある。
目線が低いと何もかもが巨大に見えてくるがＩＳもその例にもれず相当の大きさだった。
しかも体が小さくなっているおかげで、セシリーが飛び立つ直後スラスターの
風圧で吹き飛ばされそうになってしまった。
その時はシャルロットが、支えてくれたけどたぶん誰もいなかったらアリーナの壁までコロコロと
転がってしまっていたことだろう。
ほえー・・・すごいね。
この迫力はちょっと元の身長じゃ味わえないだろうし・・・・。
いっそこのままでも・・・・。
――――――――――って、今何考えた僕！
何言ってるんだよく考えなよ自分！！
この身体のままだったら毎日毎日セシリーの膝の上でご飯食べたり、

抱っこされたりして恥ずかしさＭＡＸで日々を過ごさなきゃいけないんだよ！？
それだけは勘弁だ勘弁ッ！
僕はかぶりを振って、邪な考えを振り払うと急に体がふわりと軽くなる。
「え？」
「ほら、高い高い～」
「シャ、シャルロット！？」
どうやら彼女が僕を抱き上げたらしい。
そして僕をヒョイヒョイと放り投げる。
「ちょ、ちょっとシャルロット！　やめてよ！」
「えー、いいでしょ～これぐらい」
それからも二度三度、高い高いされてポスッとシャルロットの腕の中に納まる。
「おい、シャルロット私にもやらせてくれ」
次に言い出したのはラウラだ。
ラウラも同様に、高い高いをするのだが・・・・。
「・・・全然高くないんだけど」
あ、つい本音が。
ラウラはポスッと、僕を抱き留める。
だがその眼は全くと言っていいほど笑っていなかった。
「ほ～う・・・・それはつまりあれか・・・。
私が小さいといいたいのだな・・・・？」
「あ、い、いや・・・別にそこまでは言って・・・」
「わかった・・・そうか高ければよいのだな」
ラウラはいきなり？シュヴァルツェア・レーゲン？を起動すると僕を思いっきり高く放り投げた。
もうそれは、高い高いのレベルじゃない。
言い表すならそれは・・・・・そう。
投擲だ投擲。

「うわわわわぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」
両手をじたばたさせるが、そんなの無駄だ。
ＩＳを起動しようにも、今の僕じゃ小さすぎるし・・・。
あぁ・・そうか・・・・これが死ぬってことなんだね・・・・。
なんてこんな死に方は嫌すぎる！
死因・・・・投擲
こんなアホな死に方はさすがの僕でも御免こうむりたい。
すると、そこへちょうど黒い影が横切り。
ポスンッ！
うまい具合に腋の間に挟まった。
「ちょ、あんたこんなところで何してんのよ！？」
「や、やあ鈴・・・その投げられちゃって・・」
「はぁ！？」
「り、鈴さん！！！」
そこへ血相を変えてセシリーが突っ込んでくる。
うわぁ・・・ここでも修羅場な予感・・・。
「鈴さん、な、何をやっておりますの？」
「何って、こいつが勝手に飛び込んで・・・」
務めて冷静を装うとするセシリーに鈴はそこまで言って言葉を区切ると
少し考えて、なにやら不敵な笑みをこぼした。
・・・・まずい。
また何か企んでる・・。
「そーね、ごめんなさいセシリア。アルディね、
どうやらあたしに抱っこされたいみたいで？わざわざ？ラウラにここまで飛ばしてもらったんですって」
「なっ！？」
「さすがラウラね・・・。ピッタリじゃない」
「ななッ！！」
「ん～、アルディったら初めからそうだって言ってくれればいいの

にぃ～」
鈴がわざとらしく頬ずりする。
明らかに。
誰が見てもわざとだということが見え見えなのにセシリーはそれに気が付かない。
・・・・違うね。
気が付かないんじゃなくて、気が付かないほど頭に血が上ってるんだよ。
・・・・死ぬ。
「アーーーーーーーーーールーーーーーーーーーッ!!!!!!!!!!」
うわッ、ちょ今のはダメだって!!
ピンポイントで?僕?を狙ってたよ今の!?
「あら、た～いへん。避けなきゃ避けなきゃ～」
鈴は巧みなＩＳ操作で、?僕にだけ攻撃が当たるように避けた?
いだだだっ!!
ちょ、ちょっと鈴!!
「あらあぶな～い」
痛い!
それからしばらく、地獄は続いた。

自主トレが終わり、みな思い思いに時間を過ごしていると気が付けば日は暮れていた。
僕は一度織斑先生の所へ行こうと、寮の廊下を歩いていると、セシリーに出会った。
「あら、アル」
「やぁ」
「どこか行かれますの?」

「うん、ちょっと織斑先生の所にね」
セシリーは何やら考えるとヒョイッと僕を抱き上げる。
「セシリー？」
僕は上目で顔を見上げるとセシリーは笑っていた。
「フフフッ、こんな時間に子供が一人歩きは危険ですわよ？」
「セシリー、僕は君たちと同い年だよ・・」
少なくとも外見以外はね。
しかしセシリーはまるで子供をしかる母親のように頬を膨らませて怒った。
「ダメです。どうして行きたいのなら私も一緒に参りますわ」
いうが早いか、セシリーはスタスタと歩き出してしまう。
振りほどこうにも、ギュッと両手でホールドされては動きようもない。
僕は、はぁっと一つあきらめの溜息をつくと
そのままセシリーに抱っこされて織斑先生を目指すのだった。

この時間になっても数人の教師はまだ学園内にいるようで職員室には明かりがともっている。
「失礼しますわ」
セシリーは言いながらゆっくりと扉を開ける。
扉が開くと皆が注目するというのは別に学生に限って言えるものではないらしく先生たちも
一斉にセシリーを見やる。そして固まる。
当然だ。
こんな時間に小さな子供を抱いて職員室に来たのだから。
注目が集まる中、セシリーは少しおどおどしながら織斑先生のもとへ。
「・・・なんだオルコット。その子供は」
「あのですね・・・えーっと」

「迷子か何かか？」
「ちょ、ちょっと来ていただけます？」
「お、おい！？」
セシリーは、怪訝な顔をする織斑先生を出席簿覚悟で強引に手を引き職員室から連れ出した。

「ここらへんなら大丈夫ですわね・・・」
「全く、なんだというのだ・・」
「織斑先生・・・この子」
「だから、この子供は一体なんだ？」
「アルディです・・・織斑先生」
「なんだ、アルデ・・・・何！？」
おぉ、織斑先生お驚いた顔を初めて見たかもしれない。
織斑先生はまじまじと僕の顔を見ると首をかしげながら問う。
「・・・本当なのか？」
「本当ですよ」
「何故こうなった」
「あの球体の所為です」
「あぁ、アレか・・・」
織斑先生は再び思案する。
何を考えているのやら・・・。
にしても、本当にどうしようか・・・これ。
ってかあれはいったい何なの？
すると考え終わった織斑先生が、少し気まずそうな表情を浮かべる。
それに疑問を持ったセシリーが、尋ねる。
「どうかされましたの？」
「い、いや実はな・・・お前にあれを渡した後個人的にローラと話をしたんだ」
姉さんと？
まぁあの箱にはアメリカの国旗が描かれていたし・・・。

それで？
「詳しくは知らないそうなんだが・・・どうもあれはＩＳを使えない者がＩＳを使えるようにするために開発されたものらしい」
「と、いうと・・？」
「まぁつまり・・・女性になるための機械ということだな」
なんだってーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！
待てよ待てよわが母国ながらなんてくだらない発明を！！
そして次の一言が僕をどん底へ陥れた。
「ちなみに、戻し方は・・・・まだわからないそうだ」
それってつまり・・・・。
「しばらくはそのままということだな」
それは誰の声だったか・・・たぶん織斑先生？
アルディは目の前が真っ黒になった。
・・・・もとから白黒だけどね。

うぅ・・・・。
ゆっくりと目を開けると僕はベッドの上だった。
ただし何故だか背後に気配を感じる。
なんだろう・・・？
振り返るとそこにはネグリジェ姿のセシリーが一緒に横になっている。
・・・・は？
え？は？
な、何があって・・・・。
「うぅん、アルぅ？　目が覚めましたのぉ？」
目をこすりながらセシリーがむくっと起き上がる。

「あ、あのあのあああのさ、セセセセシリー？　いったい何があったのかな？？」
「何って・・・私の部屋で一緒に寝ているだけですわよぉ？」
「だからなんで！？」
わけが分からないぞ？どうして僕とセシリーが一緒に！？
「フフフッ、子供が一人で部屋にいるのは危険ですから。こうしていれば安心でしょう？」
「いやだからって僕は、男で・・」
「今は女の子じゃありませんこと？」
「それはそうだけど・・・」
「でしたら大丈夫ですわ～」
むぎゅぅッ！
セシリーがいっぱい僕を抱きしめる。
ちょっとセシリー！！
「さ、お眠りなさいな」
ぱっと手を放して優しく頭を撫でるセシリー。
実に情けない話だが、それが何とも言えない気持ちよさで僕は急激な睡魔に襲われる。
「セシ・・・リー？」
「フフッ、おやすみなさいアル・・・」
そうして僕の意識はゆっくりと落ちていく。
・・・これからどうしようか。
まるで、そんな漠然とした不安から逃げるかのように・・・。

こうして僕の少女としての生活が幕を開けた。

ＩＩＳ短編　偽りの羽根～そのいち：これは嘘でもなんでもない！～（後書き）

はいってことで短編です。

しるくですどうも！

勢いで書いちゃったので誤字脱字もあるかと（ぉ

ちなみにそのいちなのにで、そのに、そのさんと少しづつ別次元で進んでいきますのでよろしく願します年ねん～

では２２話でお会いしましょう！

さよならッ！！

第２２話～姉、突如として～

さてと。
僕は勉強用具の入った鞄を担ぐと、寮を後にする。
時間はまだ余裕はあるが、だからといって油断すると織斑先生の出席簿アタックが怖い。
まぁ最近は叩かれなくなったよね？
……ホントはたたかれない方が一番良いんだけどなぁ。
部屋のドアの鍵を閉めて溜め息混じりに振り返ると、そこには一夏がいた。
「よっ！」
「あぁ、おはよう」
「なぁなぁ、アルディ」
「ん？」
一夏が挨拶もそこそこに僕の小脇をつつく。
「知ってるか？　なんか今滅茶苦茶、美人さんが職員室に居るらしいぜ」
「美人さん？　一夏興味有るの？」
「まぁな、俺だって男だぜ？」
うんまぁ。
逆に男の方が良いなんて言ったら、僕はどん引きだったけど。
「おはよう御座います、一夏、アルディ」
そこへ聡也が合流してくる。
僕達はさっきと同じように軽く挨拶を交わすと、
聡也の影に隠れる様に歩くロッソを見つけた。
二人とも、制服でその多くは隠れているが
それでも身体のいたるところに包帯やガーゼが巻かれてとても痛々しい。
それでも、まぁ登校してるし大丈夫なんだろう。

「や、おはよう」
「・・・誰？」
僕があいさつすると、ロッソは僕を一瞥してボソッと答えた。
あれ？
確か会ったことあるよね・・・保健室のベッドで。
あ、そうか名のってないんだあの時は。
にしたって本当に、冷たい言い方。
僕は苦笑いを浮かべながら、自己紹介する。
「僕はアルディ・サウスバードで、こっちが・・」
「・・・そっちは、知ってる。一村織夏でしょ」
なに！？
こないだの鈴のアセロラ発言も驚いたけど、この間違いも聞いたこと無いぞ！？
この間違いには流石に聡也も同様に苦笑い。
「ち、違いますよ・・・ロッソ。織斑一夏です、名前と名字が混ざっちゃってますから、それ」
「・・・あ、うん、間違えた」
「どんな間違いだよ。そりゃ・・・」
一夏も頭を抱えているが聡也が話題を振ったことで、一夏はすぐに頭を切り替える。
「で、何の話をしていたんです？」
「あぁ、職員室にな凄ぇ美人さんが居るんだって」
「一夏は、その美人さんが気になるんだってさ」
僕がそういい終わった後、ゾクッと背筋に悪寒が走った。
な、なんだ！？
寮にいてまさかの命を狙われます展開が始まるのかい！？
僕はキョロキョロと当たりを見渡す。
そして、見つけたッ！！
そこかっ――――ってうわッ！？
殺気がする方向をバッと振り返るとそこには・・

「へぇ～・・・一夏、気になるんだぁ・・・・」
り、鈴・・・。
ケタケタと目に光なく笑うその顔は鬼というか、もうなんかの妖怪のようだ。
そしてズズッズズッっと廊下の床に“双天牙月”を引きずりながら、ゆらぁゆらぁと近づいてくる。

アメリカのハリウッドホラーよりも数倍怖い。
まさに正真正銘のリアルホラーだった。

「ねぇ、一夏ぁ～あたしねぇ、お話しがあるのぉ」
「り、りりり・・鈴ッ!?おお、落ち着け、とりあえずその物騒な物をしまえ!　なっなっ!?」
必死に鈴を説得しようとするが、鈴には何も聞こえていないようだった。
・・・まぁ、うん仕方がないよ。
「一夏ぁ～、土葬、鳥葬、放置、どれが良い～?」
「全部ひどい!?」
「死ねぇぇぇ!!　あんたなんか放置で充分よ、この産業廃棄物いや、廃棄物め!!」
「もう、それゴミじゃねえかって、ぎゃぁぁぁぁぁぁッ!!」
はぁ今日は一夏の断末魔が一日の始まりか・・・。
って、ん?
僕はまた振り返ると、今度は聡也がロッソに制服の裾を掴まれていた。
「な、何?」
「・・・・聡也も気になるの?　その美人」
「え、ま、まぁ・・・全く興味が無いと言えば嘘になりますけど・・・」

「・・・・・・・そう」
あ、聡也を引っ張って物陰に行っちゃったけど・・・・。
「死ね、てめぇこの野郎がッ！！」
「え、わ、あのちょっ、わあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」
一夏と聡也の断末魔二重奏《デュエット》か・・・。
ははは、朝から賑やかな事で・・・。
・・・・ってん？
僕はまたまた顔を動かす。
そして青ざめる。
「せ、セシリー・・・・」
「ウフフフフフッ・・・」
わー良い笑顔・・・。
ごめんデュエットじゃなくてトリオだったみたい。

とりあえず教室に荷物を置いて、セシリーに痛めつけられた身体を引きずりながら職員室へ向かう。
うー、いて・・。
僕は患部をさすりながら歩いていると職員室前で張り込む一つの影を発見する。
「黛先輩？」
「ん？　やっほー久しぶりだね」
「何やってるんです？」
「見て分かんない？　謎の美女が職員室から出てくるところを待ってるのよ」
ちなみに黛先輩は、噂の謎の美女とやらが職員室から出てきたところを
カメラに収めようとしているのか職員室近くの柱の陰に隠れていた。
いや、僕程度に見つかっているんだから

もはや隠れているとは言えないのかもしれないが・・。
「はぁ・・」
「む、何よその生返事・・・。アルディ君は気にならないの？」
「まぁ、気にならないわけじゃないですけど・・・」
「なんだか、連れないなぁ」
いやまぁ・・・だってね。
なんで僕まで一緒に隠れなきゃいかないのかな・・・？
それにさっき黛先輩は連れないと表現したが、それは違う。
どっちかと言えば、なんで隠れなきゃいけないのっていう
少しの困惑が先ほどの発言に入ってしまったからそういうふうに聞こえただけで。
むしろ僕は、その謎の美女って言うのには興味があるぐらいだ。
中々、面白そうだしね。
僕は、そーっと柱の影から、職員室の入り口を伺う。
「どう？」
後ろから声をひそめて黛先輩が、職員室前の状況を尋ねてくる。
それに僕は無言で首を左右に振りかけて・・・あ。
「出てきましたよ」
「おぉう、シャッターチャーンス！」
黛先輩は覗き込む僕の頭の上にカメラを構えてシャッターボタンに手をかける。
・・・この体勢意外ときついんですけど・・・。
職員室から現れた謎の美女は、綺麗なブロンドのロングヘアで整った顔立ち。
濃いめの青いスーツに身を包んでいる女性はまさに、美女と言う名がふさわしい。
・・・うん。
ふさわしいんだけど。
おかしいな、凄くどこかで見た事がある顔だ。
「全く、お前はなぜ連絡一つよこさない・・・」

「あら、ここって予約制か何か？」
それにこの声も凄く聞き覚えがある。
「そう言う意味じゃない！」
「ま、良いけどね。あたしはあたしの好きなようにやるから」
間違いない・・・
これは。
って、こっち来た！？
僕はあわてて、まだシャッターを切り続ける黛先輩を制しようと片手を伸ばす。
「ちょ、ちょっと黛先輩いい加減カメラ下ろしてくださいよ！」
「わわっと、急に動かさないでってば！？」
「えっ、あ、体勢がくずれ――――――ッ！？」
ドッシャーーーンッ！
だがその伸ばした手がいけなかった。
僕たちは体勢を崩して盛大に倒れてしまう。
そして当然それは、織斑先生たちの前なわけで・・・。
「「あ・・・・」」
思わず声が重なる。
なぜなら織斑先生と目があってしまったから。
そして隣の美女は、ただただそれを見て満面の笑みを浮かべるだけだった。

・・・いや、そこは少し助けてくれるとうれしいなぁ・・・

姉さん。

さて、ここは教室現在ＨＲ中。
教壇に立つのは織斑先生と山田先生。
ここまではいいだろう。

うん、別に普通の光景だ。
しかし。
僕には教室の端で、腕を組む一人の女性――――まぁ姉さんなんだけど――――に目が言って仕方が無い。
なんで教室に居るのあの人・・・。
周囲の女子たちもいつもと違う、自分たちの全く知らない人物の登場に少し浮足立っている。
何せ連絡事項を話す織斑先生の前で、声をひそめての噂話までする始末だ。
当然出席簿で殴られていたが、要はそれだけ色々と注目されているんだろう。
聞き耳を立てると、まだどこからか数人の声が聞こえる。
「ねぇねぇ、あの女の人誰かな？」
「間違いなく転校生じゃないわよね・・・」
「あの髪さらさらして綺麗だなぁ～」
全く、命が惜しくないのかねぇ。
織斑先生は一通り、連絡事項を言い終えるとチラッと姉さんを一瞥する。
その視線を受けて姉さんが頷くと、織斑先生は僕たちに向き直る。
「さて、ひと段落ついたところで本日は諸君らに紹介しなければならん人物がいる」
まぁ姉さんだけど。
・・・ってか何し来たの？
「彼女が今日からこの学年のＩＳ全般の技術・整備などにおいて諸君らをサポートしてくれる、
まぁアドバイザーみたいなものだな。では自己紹介を頼む」
姉さんは織斑先生にすれ違い様、軽く手を挙げ挨拶ををかわすとスッと教壇に立つ。
一瞬こっちを見て微笑んだ後、口を開いた。
「どうも、初めまして。あー、ちなみだけど・・・・

あたしの事知ってるわって人、手あげてくれる？」
これは、挙げるべきか挙げざるべきか・・・。
って言うか普通に自己紹介しなよ。
しかし姉さんはそんな僕の気持をなどお構いなし。
自分のペースで自己紹介を進めていく。
「ん～・・・・誰もいないの？　・・・・ほんとに？」
わざとらしく顎に指を当ててん～っと怪訝そうな顔を浮かべる。
そして。
「例えば・・・そこの前から二列目の男の子！」
「は！？」
なんで僕を当てるんだよ！！
・・・・って待てよ。
さっき微笑んだのってまさか。
僕がひきつった笑みで顔を上げると、姉さんの顔が悪戯っぽい笑みに変わっている。
あーー・・・くそぅ・・。
僕は、諦めてゆっくりと立ち上がる。
「あー・・・えーっと、知りません」
「・・・・本当に？」
「ほんとに」
「あらそう・・・じゃあ、そんなあなたに一つ問題を出しまーす」
問題？
はぁ・・とことんひっかきまわしてくれるなぁ。
ほら見てよ。
クラスの生徒目が点になっちゃてるじゃないか。
「問題モンドグロッソで総合二位に輝いた人物は誰でしょう？」
はぁ、そんなの決まってるじゃないか。
僕は、ジト目で姉さんをにらみつつボソリと答えた。
「ローラ・サウスバード」
「ブッブー間違い。答えはソニア・クレンディでした」

ソニア・クレンディ・・・・って。
「それ、第二回大会の問題じゃないか！」
「だってあたし、第何回なんて言ってないわよ？」
「いや、だってこの流れなら第一回の問題を出すでしょ、姉さん・・・・・・・あ」
行ってから口を両手でふさぐが、もう遅い。
皆の注目が僕に集まる。
皆しっかりと聞いていたのだ。
さっき僕が思わず口を滑らせた？姉さん？という単語を。
しばしの沈黙の後・・・。
「えええええぇぇぇぇぇぇぇ！？　あの人アルディ君のお姉さんなの！？」
「あ、お思い出した！　あの人モンドグロッソで織斑先生と戦ったアメリカ代表だよ！」
「なになに、織斑先生に続いて世界第二位の人からも色々教えてもらえるなんて、あたしらの代超ラッキーじゃん！」
なんだか、凄く懐かしいよ。
恒例になりつつあるなんていったら怒られるかな？
「あの、ローラ先生は基本的に何を教えてくださるんですか？」
「え？　先生？」
一人の生徒が姉さんを呼ぶ。
それに対して姉さんは少し驚いた顔をした。
そりゃそうだ。
これまで先生なんて呼ばれた事無かったからね・・。
そんな顔を見て女子は不思議そうに聞き返す。
「え？　先生じゃないんですか？」
「いや、まぁ立場的にはそうかもね。
でもあたしは先生って柄じゃぁないから普通にローラさんでいいわ」
「はぁ・・・はい」
生返事を返す女子にニコッと笑いかけると、姉さんは更に言葉をつ

づけた。
「それで、さっきの質問の答えだけど。それはこれから分かるわ」
姉さんは言いながら、時間割を指さす。
そこには一時間目：ＩＳ実習の文字が躍る。
そして姉さんは、パンパンっと手を叩くと織斑先生のお株を奪うように号令をかけた。
「さ、一時間目はＩＳ実習よ。皆第三アリーナへ集合！」
その声が合図となり、僕は女子たちが服を脱ぎ始める前に、一夏と一緒にアリーナの更衣室へ急いだ。

「なぁ、アルディ」
「うん、なんだい？」
更衣室で着替えながら一夏が、僕に声をかける。
まぁ、大方姉さんの事を聞いてくるんだろうなぁ。
「お前の姉さんってさ、一体どんな人なんだ？」
「あれ？　話した事無かったっけ？」
「あぁ、お前から一度も聞いてないんだけど」
あぁそっか、そう言えばそうだ。
あの時は自分の中だけで考えちゃってたからね。
確かに誰にも言ってないや。
「う～ん・・・そうだね。一言で言えば・・・・嘘つき？」
「つまり、お前と一緒ってことか」
「ま、厳密に言えば姉さんと僕が一緒って言う事かな」
だって僕は姉さんを真似して今の自分があるわけだからね。
そこは間違っちゃいけないでしょ。流石に。
「それで、他には？」
「う～ん・・・まぁ射撃は得意だね。一応モンドグロッソで優勝してるし」
「そうなのか！　凄いじゃないか」

「織斑先生ほどじゃないよ」
結局、姉さんは決勝で織斑先生に負けた。
まぁでも、凄い事には変わりないけど。
一夏は、素直に称賛してくれたけどはたして姉さんがそれを聞いてまぁ表面上は素直に受け取るだろうけど、内心どうなのかは分からないね。
「さて、着替え終わり！　先に言ってるぜアルディ！」
「あ、ちょっと待ちなよ！　元々君が話しかけるからってやっぱ、もうこんな時間！？」
僕は一夏から遅れる事数分、急いでアリーナへ走ったが、姉さんの目の前で久しぶりの主席簿アタックを貰った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あ～あ～あ～、全く姉さんに恥かかせてくれちゃって。
ローラは出席簿でたたかれる自分の弟を見て、やれやれと笑みを漏らす。
そう言えば、アルディのＩＳはどうなったのだろうか・・・。
ま、後で聞いてみましょ。
生徒が整列した事を確認して千冬が授業を始める。
「これまでは主に近接戦闘に主眼を置いてやってきたが、今日行う実習は射撃訓練だ」
お、得意分野。
ローラは射撃と聞き、少し気分が高揚する。
何せ自分が一番誇れる分野なのだ。
高揚しない方が逆におかしいだろう。
「射撃と言っても色々あるが・・・
そのあたりは私よりもローラの方が詳しい。ローラ頼む」
千冬が譲った場所へ立つとローラはコホンっと咳払いを挟んだ後、

今日の授業内容について話し始める。
「まず、大まかに射撃武器と言っても色々あるわね・・・。ん～・・・織斑君だったかしら？　あなた、思いつく限り言ってみて」
ローラは指をさして一夏を指名する。
一夏は少し考えた後、ポツリポツリと武器名を挙げていく。
「えぇと、荷電粒子砲、アサルトライフルに拳銃とかですか？」
「う～ん・・・ま良いでしょ。さっき織斑君が挙げてくれた中に荷電粒子砲と言う物があったわね」
ローラは手元の端末に、アメリカ製の荷電粒子砲？ヘヴィハンマー？を表示させる。
これはアルディのストライクバーディの？ウェポンスクエア？に搭載されるような比較的
大型のもので、精密射撃には向かないが威力は非常に高い。
「これは少しおおきな部類だけど、これの用途をあなた言ってみて」
ローラは次々に生徒を指名して答えさせていく。
千冬とは少しスタイルの異なる説明に初めは戸惑っていた生徒たちだったが、
次第に慣れていき、最後辺りではかなりスッと、自然に答えられるようになっていた。
「・・・と、言う具合に射撃武器というのは、
色々使う場面場面で適切に判断して使用する武器を選ぶ必要があるの。
そう言う意味では、ある意味近接武器よりも難しい兵器ともいえるわね」
ローラは、最後に旨くまとめると千冬へとバトンタッチする。
なるほど、中々優秀な生徒たちばかりね。
流石千冬の生徒だわ。
ローラは腕を組んで、うんうんと頷く。
千冬は相変わらずテキパキとした物言いで生徒たちに指示を飛ばし、

それに従って生徒も素早く動く。
やっぱり、あの子をこの学園に転校させたのは間違いじゃなかったみたいね。
ローラは横目で自分の弟を見ながら、優しく微笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「よし！　そこまでだ。一度集合しろ」
射撃訓練を行っていた、生徒が手を休め織斑先生の所へ集まってくる。
もちろん専用機持ちはそれを待機状態にして、
一般の生徒は？打鉄？や？リヴァイヴ？から降りての集合だ。
にしても少し早いな。
まだチャイムまでには時間があるし。
「さて、まぁ今日は射撃武器に慣れるまでで充分だろう。感覚を忘れない事だな。
でだ、少し時間が余っていると思っている者も多いだろうが、
せっかくのローラの初授業。
いまだにローラがどんな人物なのかが分かっていない者もいると思う」
織斑先生は一度目を閉じ、そしてすぐに見開くと不敵に笑ってこう言った。
「お前たちに、国家代表の実力を見せてやろう、ローラいいな？」
「強引ね、ま良いけど」
あれ、姉さん今ＩＳなんて持ってたっけ・・・。
少なくとも僕は見た事が無い。
その疑問は僕以外の人間も同様のようで一夏が僕に声をひそめて聞いてくる。

「ローラさんのＩＳってどんなんなんだ？」
「僕も、見たことないよ・・。ってか持ってたかな」
ふ～んと怪訝そうな顔をする一夏。
いやほんとに知らないんだってば・・。
僕たちがそんな会話をしていても、話はどんどん進んでいく。
「で、誰があたしのお相手？」
「そう焦るな。これから名前を呼ぶものは前に出てこい。
オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、そして織斑」
呼ばれた面々が前に出ていく。
これから、国家代表と戦うとあって皆の顔つきも険しいが
特にラウラは呼ばれた時、一瞬だけ本当に鋭い目つきになった。
というかこれ、二組がいないからアレだけど、全員専用機持ちじゃないか。
「彼女たちが、お前の相手をする」
「あら、四対一？　それって流石に卑怯なんじゃないの？」
姉さんが冗談半分に言うが、セシリーはそれに同調した。
「確かに、四対一と言うのはいくら、お相手がローラさんでも・・・」
だがそれを織斑先生は鼻で笑う。
「オルコット、そういう心配はまだ早い。安心しろ気がつけば終わっているさ」
流石にそこまで言われてムッとならない専用機持ちのメンバーでは無い。
当然言われたセシリーに至っては、相当カチンと来たようだ。
まぁ、プライド高いしなぁ・・。
その証拠にまだ、織斑先生が何も言ってないのにまっ先にＩＳを起動させて空へと上がって行く。
それにつられるように、他の三人も自分のＩＳを起動して空で姉さんを待つ。
姉さんはそれを見上げて、フッと笑うと右手の人差指にはめた指輪

にそっと口づけをした。
どうやらそれが起動のトリガーだったようで、姉さんが光に包まれる。
そして光が収まるとそこにはＩＳをまとった姉さんの姿があった。
色は僕の？ストライクバーディ？同様に青を基調に縁どりにオレンジのライン。
全体的にシャープなフォルムで、左右一枚づつアンロックユニットのシールドを持っていた。
腰部にはスカートが伸び、そこに姿勢制御用の小型スラスターを複数備えている。
大きさは鈴の？甲龍？程だがそれに比べて背部の大型スラスターが目を引く。
かなりの高機動型のＩＳか。
まぁ姉さんらしいけど。
僕は飛び立つ姉さんを見上げながら、織斑先生の横に移動する。
「姉さんＩＳ持ってたんですね」
「あぁ、私も朝聞いた。ま、よくよく考えればローラ程の腕のある操縦者をみすみす遊ばせておくほどアメリカも馬鹿じゃないと言う事だろう」
「ははは、確かに・・。それであのＩＳは・・」
「名前を？ストライクミラージュ？と言うらしい」
「？ストライク・ミラージュ？・・・」
僕はその名前を復唱する。
ストライクってついてるから、ひょっとして僕の？ストライクバーディ？の後継機か何かだろうか。
それとも名前が似ているだけか・・・。
どっちにしても、何か僕のＩＳと関係はありそうな気がするけど。
「はぁ・・・だが名前を聞いてまさかと思ったが。
また骨董品を引っ張り出してきたものだな」
「え？」

骨董品!?
僕は織斑先生のため息交じりの言動を聞き、バッと織斑先生の顔を見た。
あれは・・・そんなに古いのか?
でも見たところそんなに、古さは感じないけど・・。
織斑先生は、僕のその反応を見てゆっくりと頷く。
「あれは、第一回大会でアメリカが持ち込んだ、予備機≪リザーブ≫だ」
「え!?」
さっきよりも大きな声で、驚く僕。
それは聞いていた他の生徒も同様で、目を丸くしている生徒もいた。
だって当然だろう。
目の前にあるのは正真正銘、姉さんが?モンド・グロッソ?で使っていた機体なのだから。
「まぁ、あくまで予備だからな。私も本戦で一、二回見た程度だったが・・・。
まさかそこから解体されずに残っていたとは」
・・・マジ?
ってことはあれ、コアがどうなってんのかは知らないけど
まるっきり第一世代型のＩＳってことだよね。
・・・まぁそれ言っちゃったら僕のＩＳも大本は第一世代なんだよね。
さてさて、どうなることやら。
でも、気を付けなよ一夏達・・・。
姉さんは僕以上に嘘つきだよ?
僕は一つ息を吐きながら、空を舞う五機のＩＳをジッと見つめていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ローラが皆に遅れて、空へ上がると既に臨戦態勢の四名がそれぞれ武器を構えていた。
ローラはそれを、一瞥しながら大げさなアクションで声を張り上げた。
「さて、それじゃあ始めましょうか・・・そうね・・どうする？一人づつ相手をしてあげても良いし全員でかかってきても良いけど・・・」
だがそれには誰も反応しない。
相手がアルディの姉で嘘つきであると言う事は、ある程度予測がついていたし何より
彼女たちが今相手にしているのはアメリカの国家代表なのだ。
下手に誘いに乗ればそれだけで命取りになる。
誰も動かなかった事に対してローラがまたわざとらしく残念そうな表情で言う。
「あら、独り言になっちゃったわね・・・。
誰か反応してくれないとお姉さんさみしいわ」
ローラが言い終わって、フフッと笑った時だった。
突如シャルロットのスラスターが爆発した。
「何！？　一体どこからの！？」
シャルロットは辺りを見回すが、周囲に機影は見られない。
シャルロットの身に起こった出来事に、周囲にも緊張が走る。
その時、ハイパーセンサーでいち早く長距離サーチを行っていたラウラが叫んだ。
「あそこだ！」
ラウラが指さした場所。
それは今いる場所から、一番離れたアリーナの屋根の上。
そこでローラは既に、その手にスナイパーライフルを構えこちらを狙っている。

さっき?リヴァイヴ?のスラスターを撃ち抜いたのはこの狙撃である。
「く、いつの間にあんな場所へ！　ですがこの距離ならばお任せを！」
素早くそれにセシリアが反応する。
?スターライトｍｋ??の狙いを素早く付けると、ローラに向かってトリガーを引く。
しかし、ローラはその一撃を避けると、対抗してスナイパーライフルを撃ち返した。
パリンッ！
ガラスが割れる音がしたと同時にセシリアの?スターライトｍｋ??のスコープが吹き飛んだ。
「あの距離からしかも動きながら、スコープだけを!?」
驚愕するセシリア。
この一連の攻防で、分かった事それはローラがとてつもなく強いと言う事実だった。
特に、こと射撃戦闘においては。
「にしても、いつの間にあんなところへ・・!?」
一夏が声を漏らす。
それをローラのハイパーセンサーが拾い、皆に聞こえる様にオープンチャネルで返答した。
その声は実に楽しそうで、表情も無邪気な悪戯っぽい笑みを浮かべている。
だが今の四人にはその無邪気な笑みが、一層不気味に映っていた。
「目に見えている物だけが、本物とは限らない・・・。
なぜこの機体に?ミラージュ?って付いているのか良く考えてみなさいな」
「っく、考えろと言われて、のこのこ隙だらけで考えるやつがいるものか!」
ラウラは肩の大型レールカノンを放つ。

その攻撃に連動して、シャルロットが得意の?ラピッド・スイッチ?で素早く武装を
アサルトライフル?ガルム?に持ちかえ攻撃を開始した。
いまだに残りの二人に動きは無いが、織斑一夏には、少し警戒が必要だ。
・・・確か、彼シールドバリアを無効化できるのよね。
全く、姉弟そろって面倒な・・。
ローラは心の中でごちりながらまず突っ込んできたシャルロットの相手をする。
当然だがラウラの撃った弾を避けるのも忘れない。
ローラは回避行動を取りつつ、シャルロットに接近して両腕に構えたライフルを足で払う。
「君、器用なんだってね」
「え?」
「確か?ラピッド・スイッチ?って言ったかしら?」
ローラはシャルロットを蹴ると、少し間合いの出来た所でスナイパーライフルを放つ。
本来の使い方とはかけ離れているものの、この距離でしかも
蹴った直後で、体勢の崩れている相手にならローラは目をつむっても当てられる。
「うっ!」
直撃した衝撃に顔をゆがませ、大きく体勢を崩しながらも
いち早く姿勢を安定させたその技術は、流石代表候補生だろう。
でも・・・いくら至近距離と言ったって、あんなに体勢が崩れるものじゃ・・・。
っは!
「はぁぁぁぁっ!!」
ローラが何かに気が付き声のした方向を見やると、シャルロットの陰からラウラの
?シュヴァルツェア・レーゲン?がプラズマ手刀を振りかぶり踊り

出た。
そう、シャルロットがオーバーアクションなまでに体勢を崩したのは
接近するラウラを自分の身体で隠すため。
中々やるじゃない！
ローラはその手刀を、宙返りしながら後退してかわすと
シャルロットに顔だけ向けてウィンクした。
「あぁでね、シャルロットちゃん、あたしも出来るのよ」
「出来るって、何をですか？」
「？ラピッド・スイッチ？♪」
言うとローラは、戦闘と同時進行で武装を呼びだす。
それはまさにシャルロットが得意としている
？ラピッド・スイッチ？そのものだった。
驚くシャルロットを尻目にローラは呼びだした
サブマシンガンとアサルトライフルでシャルロットとラウラを狙う。
だがそのまま撃たれてやるほどラウラも甘くは無い。
ラウラが比較的銃身の長いアサルトライフルを、懐に入り込み腕で
払い
更にシャルロットを狙っていたサブマシンガンをもう片方の手で鷲
掴みしようとする。
だが、掴んだと思ったはずの手はむなしく宙をかいた。
「馬鹿な、しっかりとつかんだはずだ！？
私がこの目で距離感を間違えるなど！」
ラウラは既に片方の眼帯を外している。
？ヴォーダン・オージェ？ラウラの左目に移植された疑似ハイパー
センサーで、
この目は裸眼でも数キロ先の標的も目視できるほどの視力を持つ。
そんな眼を使っていながら、ほんの数十センチ先のサブマシンガン
をつかみ損ねるなど
ラウラだけでは無い、他のメンバーも驚きを隠せなかった。
「だから言ったでしょ、目に見える物だけが本物とは懐疑らないっ

てね！」
ローラはラウラを振りほどくと、アサルトライフルとサブマシンガンの一斉掃射を開始する。
サークルロンドを行いながら、ラウラに射撃を浴びせシャルロットへの警戒も怠らない。
こうまで完璧に相手の策にハマると、いくら外側に居るとはいえ一夏達もラウラを下手に助けに行く事が出来ない。
だからと言って一夏はそれを黙って見ているような真似は出来ない性格だ。
一夏は、自分も被弾覚悟で？
イグニッション・ブースト？を使い無理やりラウラとローラの間に入るとそのまま？雪片弐型？を振るう。
「おっと！？」
「っく、大丈夫かラウラ！？」
「あぁ、大丈夫だ。数はくらったが威力はさほどでもないらいし・・それよりも・・」
ラウラは、余裕の表情のローラを見上げる。
「思った以上に、強い、それに厄介だ」
二人が、会話をする所へセシリアシャルロットをかばいながら、ビットでローラを牽制して、合流してくる。
ローラはそのビットを、あたかも作戦を練る時間を与えるかのごとく大きく後ろへ飛びのいた。
ふふん・・・さて、どんな作戦で来るのかしら？
ローラはその四人の姿を、不敵な笑みで見つめていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ふん・・・あいつらしくない戦い方だな」

織斑先生はつぶやくと、姉さんをにらんだ。
そう言えば、織斑先生は姉さんの戦い肩をどう思っているんだろうか・・・。
気になるな。
「あの、織斑先生」
「ん、何だ」
「先生は、姉さんとモンド・グロッソで戦ったんですよね」
「あぁ、決勝戦でな・・・。自分で言うのも何だがな、あの戦いは今でも思い出せるほど良い戦いだった」
へぇ・・・。
良くアスリートの人って何月何日に何があったかって聞かれるとパッと答えられるって話を聞いた事があるけど。
ふぅん・・やっぱりいくら国家代表のＩＳ操縦者と言ってもそれはどこかアスリートと似たような部分があるのかもしれないね。
「先生はどう思いました、姉さんの戦い方を」
「どう・・・か」
織斑先生はふ～むと静かに唸りながら顎に手をやる。
そしてゆっくりと姉さんを見上げて答えた。
「一言で言えば、やかましかったな」
「やかましい？」
はぁ、なんだいそれ。
あぁ、あれ。
宇宙飛行士とかがコメント求められたときにユーモアに富んだ発言をするっていうやつ？
となるとやかましいは何かにたとえて言ってるのかな。
そこへ、先ほどの織斑先生の発言を僕同様に疑問に思った他の生徒が僕より先に口をはさんだ。
「先生、そのやかましいっていうのは？」
「文字通りだ。うるさく仕方が無かった」
・・・なるほど隠語何でもなかった。

素直にうるさかったのか。
でもそれって何か答えになっていような・・。
ほら何か。・・・例えば距離を取るのが旨いとか、アレが下手だとか・・
僕はそう言う返しを期待していたんだけどなぁ。
僕は、まだ頭に疑問符を浮かべながら織斑先生に尋ねる。
「まだ・・・よくわからないんですけど・・」
「お前、あいつの戦闘を見た経験は？」
「訓練は何度か」
「訓練か・・・あぁ、それにお前はＩＳに触れたのがごく最近だったな
それなら、知らなくても仕方あるまい。
ローラはな戦闘の時ほとんどしゃべりっぱなしなんだ」
喋りっぱなし・・・？
戦闘で？
別に何かを教える状況でもないし・・・・。
戦闘中に話すことと言ったら・・・。
・・・あ。
ひょっとして。
「錯乱戦術・・・」
「まぁ、格好良く言えばな。それにだ、お前だってそうだろう」
ま、まぁ・・確かに口数は多い方だとは思うけど・・・。
ふ～ん・・・やっぱり姉弟だね。
人に言われて改めて思うけど僕たちって本当に似てるなぁ。
「ローラは特に、人の心理的な部分を突くのが旨い。それに嘘もな。
更に言えばローラの情報を知れば知るほどに相手はその情報を信じられなくなる・・・。
要はローラ本人以上に情報への懐疑心が強くなってしまうんだ」
そもそも、嘘つきが最大の長所な姉さんだ。
それを警戒するのは、戦う相手としては当然の事。

でもその警戒心が過敏になりすぎると今度は姉さんが
公表している情報まで信じられなくなってしまう。
この情報は真実なのだろうか、でもこれは正式な情報だから大丈夫・・・。
いやでも相手はあのローラ・サウスバードだし・・・といった具合だ。
「ローラの実力は確かに本物だが、
どちらかと言えばそう言う心理戦で勝っている要素も多い。
それで私も少々苦しめられた」
織斑先生が、フッと苦笑交じりに下を向く。
苦しめられたか。
でも世界一ってことは、勝ったってことだよね。
どうにも僕には織斑先生が焦っている所など想像ができなかったがそう考えているうちに、一つの疑問がわいてくる。
それは、織斑先生は負けた事があるのかと言う事だ。
公式戦負けなしとはいえ、それ以外ではどうだったんだろう。
一度気になると、人間と言う物は確かめずにはいられない。
「あのすいません、ちょっと話は変わるんですけど」
「今度はなんだ」
「織斑先生って負けたことあるんですか？」
その僕の問いに他の生徒が笑って答える。
「アハハハハ、そんなのあるわけないよ。織斑先生に勝てる人なんてねぇ？」
「そうそう、そんな事聞いたら織斑先生に失れ「あぁ、ある」・・・・・え？」
ひと際大きな声に聞こえたその答えに、皆が固まる。
え、あるの？
注目を集める織斑先生は、あえてその注目を、
気にしないようにしてふうっとため息をひとつ吐く。
今、上空とは違う変な緊張感があたりを支配している。

そして織斑先生は、ボーデヴィッヒには言ったんだがなと前置きしてから、
いつもと同じように淡々とだが僕たちにとっては、驚愕の一言を発した。

「私は一度、あのローラ・サウスバードに負けている」

第２２話～姉、突如として～（後書き）

閉店時間ギリで、レンチとドライバーで文字通り、売台作ってました。

どうもしるくです。

ようやくお姉さんの愛機が姿を現しましたね～。
さて、一度はサラッと流してしまった千冬がローラに前ｋた件。
これは次回以降今度は確実に触れていこうともういます。
さてさて、それでは２３話でお会いしましょう

さよならッ！

第２３話～姉の実力と憂鬱～

千冬の周りの生徒が、固まるのをローラは上から眺めていた。
あら、何を言ったのかしら・・・・。
ローラは少し不思議に思うが直ぐに考えを切り替える。
まぁ、そんなの後で良い。今はあの子達の相手が最優先だ。
ローラはふよふよと浮かびながら、ジッと一夏達を見据える。
どうやら作戦はラウラが主導で立てているようだった。
確かあの子はドイツの現役軍人だったわね。
あの年で、あの実力そして作戦立案。
はぁ～末恐ろしいわね。
ローラは次にシャルロットを見る。
あの子は、フランスのデュノア社のご令嬢。
中々複雑なバックグラウンドがあるらしいけど、実力は多分ラウラちゃんの次ぐらいかしら。
で、あの子がセシリアちゃんね。
なるほど、確かに言われてみれば昔あたしの所へ交渉に来た女性が連れていた女の子だ。
セシリアの漂う気品の高さは、ローラにも覚えがあった。
そして、弟にご執心と。
フフッ、いい子そうじゃないの。
アルディにはもったいないわね。
ローラはクスッと笑うと残った最後の一人へと目を向ける。
織斑一夏。あの織斑千冬の実弟。
さっきちょろっと交戦したがまだ色々と荒削りながら内包する強さは、他の誰よりも高く感じられた。
アルディとは全く違うタイプね。
ローラは当然といえば当然の事を思う。
アルディは良くも悪くもあたしの真似事で、ここまで生きてきた。

まぁ、それはそれで良い。別に悪いことでは無いのだろう。
弟が姉に似るのは、当たり前と言えば当たり前だ。
だが、それは何処まで行っても“真似事”なのだ。
ローラはアルディに、嘘を吐く大切さを説いた後
アルディがローラの真似をし始めたことを実際少し心配していた。

ローラ自身はアルディにそのローラの持論を元に、
自分らしさに気がついて成長していく事を僅かながら期待していたのだ。
しかし結果は、ローラにとっては少し残念な物だった。
アルディは、“姉の様になること”がイコール“自分にとっての力になる”
と考えてしまったのである。
まだそれを力と考え、使う自分が強さと思っている事が
救いだがそれでもローラからすれば不十分だった。
でもあの織斑一夏は違う。
これはローラの個人的な考えだが、彼はすでに確固たる強さの考えを確立し始めている。
往々にしてそういう考えがしっかりしていればしているほど、人は強くなれる。
今全力でやりあったら、アルディは彼に勝てない。
そう断言できた。
ローラは自分の弟が早く、本当の強さに気が付いてくれることを願いつつ
いまだに話し続ける一夏達を、注意深く観察するのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ローラがわざと自分たちに時間をくれたということは、
ラウラにもそしてほかの皆にもわかっていた。
これが実戦だったらと思うと、ラウラにとっては癪に障るがそれでも今回ばかりは
与えてくれた時間を有効に使うべく一夏達と議論を交わしていた。
それにラウラには、一つだけどうしても確かめたいことがある。
それは、依然千冬が言ったあの言葉
?あいつは、私に一度勝っている?
勝っている・・・・・か。
ラウラはじっとローラを見て少し考える。
確かにローラ・サウスバードは強い。
伊達にアメリカ代表を名乗っているわけでも
?モンド・グロッソ?で千冬に次ぐ世界第二位に輝いたわけでもないだろう。
・・・しかしだ。
ローラは千冬に負けたから世界第二位なわけだ。
ならいったいどこでどのように千冬に勝ったのか。
それがラウラには気になる。
千冬も一目置くあの、ローラ・サウスバードが・・・。
ラウラは再び、ローラを見ようとして一夏が自分を呼んでいることにようやく気が付いた。
「おい、ラウラ聞いてるのか!?」
「あ、あぁなんだ、聞いているぞ。それで・・・何の話だったか・・・?」
「もう、しっかりしてくださいな、あなたが今作戦立案を担っているのですわよ!?」
セシリアに語気を強められ、ラウラはすまないと短く謝ると
一夏が改めてラウラに質問を繰り返した。
「だから、お前から見てローラさんはどうだったっていう話だよ」
「うん?　私から見てだと?」

「ほら、ラウラは軍人でしょ。いくら代表候補性って言ったって僕たちとは目の付け所も受ける印象も違うはずだから、作戦の参考にしようと思ってさ」
なるほど、まぁ確かに先ほどの数回の交戦で私なりにわかったこともある。
情報を共有するのは、作戦行動を共にする仲間にとって非常に重要なことだな。
「ふむ、まず彼女は火器全般に広くそして深い知識がある。さらにそれを扱う相応の技術もな」
「それに・・・?ラピッド・スイッチ?も、使われちゃったしね」
シャルロットがぼそりとつぶやくがラウラはそれを首を振って否定する。
「いや、あれは多分?ラピッド・スイッチ?ではない」
「え?だけどあれは完璧にシャルの技術だったじゃないか、なぁ」
「うん、僕から見ても完璧な?ラピッド・スイッチ?だったけど・・・」
疑問顔の二人にセシリアが鋭い目つきで静かにつぶやいた。
「?スピード・リーダー?・・・・」
ラウラは静かにそれに肯定すると?シュヴァルツェア・レーゲン?のモニターを切り替えてほかの面々に見せる。
そこには一つの小さなパーツが表示されている。
「何なんだよ、その?スピード・リーダー?っていうのは」
「ＩＳの瞬間武装展開システムのいわば増幅装置のようなものだ。これを使えば確かに、特殊な技能がなくても?ラピッド・スイッチ?をと同じことを再現できる・・」
もともとこれはＩＳの技能が未熟なルーキー用に、開発されたアメリカの補助システムである。
あらかじめ、次に呼び出したい武装をこのリーダーに設定しておくとリーダー内部で実体化と量子化のギリギリのところで武装が固定される。

そして使用時になるとすでにほぼ半実体化している武装なので、
通常よりも早い速度で展開が可能となるわけだ。
しかしこのシステムは、本来多くの武装を持つＩＳを想定してはいない。
なぜならリーダーの要領には限界あり、さらにＩＳという限られたスペースを
有効活用しなければならない物にはせいぜい切り替えは一つのリーダーに二つが限界。
量産機ならそれでも十分だろうが国家代表の機体へ搭載するような代物ではないのだ。
しかしローラはおそらくこのシステムを積んでいる。
そう、相手をかく乱するそのためだけに。
「それじゃあ僕の目の前でやった、あの？ラピッド・スイッチ？は・・・」
「おそらくローラ・サウスバードはあそこでどちらかを完全に落としたかったのだろう。
特にシャルロットお前はスラスターを負傷していたからな」
そこまで言い終わってラウラもそしてほかのメンバーも、
改めてローラ・サウスバードの懐の大きさに驚かされた。
しかしだ、ここまでわかっているのなら対策は立てられるのではないか。
そう考えたのか一夏はラウラに、期待のまなざしを向けた。
「なぁ、ラウラ。そこまでわかっているんなら俺達でもなんとかなるんじゃないのか？」
「いや、一概にそうとも言えない。むしろ今となっても私たちにほぼ勝つチャンスはない」
「そうですわね・・・。何しろ我々が得た情報も多いですけれどそれと同じだけ・・・いやそれ以上にわたくしたちがローラさんに与えた情報も大きいですわ」
二人に否定されては、一夏もうつむくしかない。

「それにだ、まだシャルロットが撃たれ、私が彼女のマシンガンをつかみ損ねた理由がわかっていない」
いったい何をしたというのか・・・。
考えても考えてもわからないことだらけだ。
ラウラは、ローラ・サウスバードと戦うという、意味を今更ながらに理解した。
厄介かつ高い実力に裏打ちされた高度な戦術と技術。
自分に不利でも相手をそれ以上に、
不利な状況に追い込めるのならその不利を自ら進んでとりいれるストイックな姿勢。
そして何より、相手の心理を揺さぶる巧妙な話術と振る舞い。
ラウラはおそらく初めて戦っている最中にこう思った。
――――――勝てないと。
結局その後もいくつか案は出たものの有効な作戦を具体的には決められないまま、
ラウラ達に作戦立案時間終了の合図と言わんばかりにローラの声が響いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「さてそれじゃあ、見せておらいましょうかしら！」
ローラはスラスターに火を入れ一気に加速する。
その手にはさっきと同様にアサルトライフルとサブマシンガンが握られている。
「ぜらぁぁぁぁぁぁぁ！！」
まず最初にローラに突っ込んできたのは一夏だった。
？雪片弐型？を上段で構え真正面から突っ込んでくる。
「あら、まっすぐな男の子。あたしはタイプじゃないわね」

「だったら、せめて好かれるようにちょっと回り道でもしますよ！」
一夏はニヤッと笑うとそこで大きく進路を変えた。
そしてそこにいたのは。
「僕はまっすぐな、男の子のほうが好きですけどね」
両手にアサルトライフルを構えたシャルロットだった。
シャルロットは、両手のアサルトライフルを狙いかまわずに撃ちまくる。
「あらやだ！？」
ローラの動きが止まったところに、先ほど迂回した一夏が？イグニッション・ブースト？で一気に飛び込んだ。
しかし、そんなことであわてるローラではない。
ローラはその？雪片弐型？を左側のアンロックユニットのシールドで受け止める。
だがいくら受け止めたとはいえ、
止まっていたローラに対して勢いをつけて鋭く振るわれた一夏の？雪片弐型？は
ローラのシールドの側面をスパッと切り取ってしまう。
だがローラはそのあとでも笑っていた。
ローラが行ったのは、言ってみれば防御。
そして一夏は切り取ったとはいえそれを？防がれた？のだ。
「あらあら、隙だらけね」
切断したという感触が一夏に一瞬のすきを作らせる。
「しまっ！」
「まず一機目は、あなたね。千冬によろしく♪」
ローラは微笑むと至近距離から両手の武装を弾切れになるまで撃ちこんだ。
もともと二度の？イグニッション・ブースト？によってエネルギーを消費していた？白式？はその集中攻撃に耐えきれず、シールドエネルギーは簡単にゼロになってしまった。

ガシャァァン！
大きな砂煙とともにまず一夏が脱落する。
そこへ、一夏の確認もそこそこに、？ブレッド・スライサー？を展開したシャルロットが飛び込んだ。
それをアサルトライフルの銃身で受け止め、シャルロットとローラがしばしにらみ合う。
「あらどうしましょうか、あたしには近接武器がないのに・・・」
「それも嘘ですか？」
「嘘を嘘という人間がいないように真実を真実という人間もいないわよ？」
ローラの意味深な発言に、首を少しかしげながらもシャルロットは破損したスラスターを必死に修正しながらローラを抑え込む。
「そういえば、あたし忘れ物してきちゃった」
唐突に思い出したかのように全く関係のないことをいうローラ。
警戒しながらもシャルロットはそれに反応した。
「今度はなんですか！　また何かの作戦ですか？」
「やーねぇ、シャルロットちゃん・・・後ろに気をつけなきゃ」
ローラの声とともに、シャルロットのハイパーセンサーが背後に機影をキャッチした。
「え！？」
思わずバッと振り返る。
そこには確かに、？ストライク・ミラージュ？の姿があった。
その？ストライク・ミラージュ？はこちらにスナイパーライフルを向けて今にもトリガーを引こうとしている。
「しまった、こっちが本体か！？」
シャルロットはその機影に向かって素早く武装を切り替える。
そして自身もトリガーを引こうとしたその時。その影が掻き消えた。
「ウフフッ、だから言ったのに・・・後ろに気をつけなさいってね」

その声が聞こえたのは、また後ろ。
いやさっきまでシャルロットが、ローラを抑え込んでいた場所。
シャルロットはサーッと血の気が引くのがわかる。
だがローラはいたってにこやかに、？リヴァイヴ？のスラスターのすべてを一瞬で？切り裂いた？
「やっぱり嘘だったぁ～！！」
変わった断末魔だと思いながら、ローラは落ちていくシャルロットを眺める。
シャルロットのスラスターを切り裂いたのは、右腕に取り付けられた小型の近接ブレード？ランディング・スパイク？。
高機動時に空気の抵抗を受けづらくするために長さは小太刀程度しかないが、取り回しが非常によくコンパクトに振るえるのが最大の魅力だ。
「ふ～ん・・・久しぶりに使ったわねこんなの」
ローラはそれを格納すると、残った二機を見やる。
ラウラとセシリアは、まだ動こうとはせずに、こちらを警戒しながら距離をとっている。
当然だろう。
目の前でいとも簡単に二人を片づけてしまったのだから。
しばしの沈黙のあとラウラが叫んだ。
「セシリア！　援護しろ！」
「わかりましたわ！」
ラウラに連動してセシリアのビットが舞う。
ローラはそのビットにあえて誘導され、ラウラを正面から受け止めた。
「ドイツの量産機ね・・・」
「そちらこそ、なかなか面白い機能満載なようですね！」
ラウラはプラズマ手刀で、ローラを払うと続けざまにワイヤーブレードを射出する。
そしてその一本がローラの足に・・・絡まなかった。

ラウラはそれを見て、舌打ちをする。
「っちぃ、またか・・・！」
ローラはその顔を見て、微笑むとラウラのワイヤーブレードを切り裂いていく。
でもあの子、やっぱりさすがね。
？ミラージュ？の能力に気づき始めている・・・。
？ストライク・ミラージュ？にはほかのＩＳとは違う特殊な装甲とシステムが備わっている。
一つは特殊偏光装甲？ステルスミラージュ？
そしてもう一つが光学投影システム？フェイク・シルエット？である。
この？ステルス・ミラージュ？は装甲表面を鏡面化し光の屈折反射によって、
焦点距離を狂わせ相手の距離感をずらすことができる。
ラウラがローラのサブマシンガンをつかみ損ねたり、ワイヤーブレードを絡み損ねたりしたのは
そのためである。
もう一つの、？フェイク・シルエット？は空中投影ディスプレイの応用のようなもので、
ウィングスラスターに取り付けられた特殊プロジェクターによってあたかもそこに
ローラがいるかのようなリアルなスリーディー映像を投影することができる。
先ほどシャルロットに行った攻撃がそれだ。
この二つにローラの話術と実力が合わされば、はっきり言ってほぼ無敵ともいえる性能を発揮する。
この二つのどちらかをラウラは感づいている可能性が高い。
ネタバレする前に落としちゃったほうが賢明ね・・。二人一緒に行きますか！
ローラはその手に同様にサブマシンガン、アサルトライフルを構え

ラウラを狙う。
ラウラは一度ワイヤーブレードをひっこめ、その弾丸をＡＩＣによって防いだ。
そのタイミングで、ローラは?フェイク・シルエット?を起動し?セシリアを背後から狙う?
一瞬セシリアの意識が背後の偽物に向いたところで片っ端からセシリアのビットを爆散させる。
周囲に浮かんでいたビットの爆発はラウラの視界を奪うには十分な爆発を生む。
「もらったわ!」
「っく、させん!」
ローラはラウラへ?ランディング・スパイク?で襲い掛かる。
ラウラはそれをＡＩＣで防ごうとして、とっさに腕を出すが瞬間その機影が消えた。
「な、なに、これは!?」
ラウラが確認した時にはセシリアはすでにローラの銃によって刻まれ落下するところで
バッとその方向を向くとそこには笑顔で額に銃を突きつけるローラの姿があった。
ローラの最初の狙いは実はセシリアだったのだ。
そこでまず?フェイク・シルエット?でセシリアの注意をそらし
ラウラ周辺に漂うビットの動きを止めて爆発させ、一瞬視界を奪う。
その後本体と?フェイク・シルエット?の位置を入れ替えるように素早く移動してローラ本人はセシリアを撃墜。
その後フェイクの機影にラウラがとっさに反応するのを見て
自慢の強大な推進力で素早くラウラの背後に移動し、余裕で銃を構えればそれで一丁上がりである。
機体の特殊装備と強大な推進力という、もともと持つ?ストライク・ミラージュ?のポテンシャル。
そして自分の特技を高いレベルでまとめ上げた国家代表としての完

璧な作戦。
「あたしの勝ちかしらね？」
勝ち誇り余裕という名の自信に満ち溢れたローラにラウラは、
一瞬顔をひきつらせそして静かにうなずいた。
「勝っちゃった♪」
オープンチャネルで発せられたローラの明るい言葉は、
この試合を終わらせる終了のブザーだった。

ローラは敗北を認めたラウラと共に降下する。
するとふとラウラがローラに尋ねた。
「あの、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」
「えぇ、何なりと」
ローラはいつも通りの、気さくな態度でラウラに答える。
ラウラは返答を聞き、少しうつむいて何かを考えた後意を決したようにバッとこちらを見やり口を開いた。
「ローラさんは・・・その、織斑先生に・・・勝ったことがあるというのは本当なのでしょうか？」
それを聞いた途端ローラの目つきが変わる。
ローラは声のトーンを低くしてラウラに質問で返した。
「それは、誰に聞いたの？」
急なことに戸惑うラウラだったが、そうなりながらも言葉を紡いだ。
「お、織斑先生です・・」
「そう千冬が・・・」
それだけを言い残すと、ローラは急にスラスターを噴かし千冬へと一直線に急降下する。
そして地上五センチという見事な完全停止を行い続けて“ストライク・ミラージュ”を待機状態に戻すと、千冬へと詰め寄った。
「あなた、あの事を話したの！？」
胸ぐらを捕まれても、千冬は何食わぬ顔で淡々とそれに反論する。

「あぁ言った。別に悪いことではあるまい。あれはお前の勝ちだったのだからな」
「ふざけないでッ！！」
ローラはものすごい剣幕で千冬を睨む。
今はこの千冬のいつも通りの淡々とした受け答えがローラを逆なでする。
千冬は胸ぐらを掴んでいるローラの手をふりほどくと、ローラに言った。
「ローラ、話は後にしろ。今は生徒の前だぞ？」
「あ」
ローラは今更に生徒全員が目を丸くしていることに気がついてばつの悪そうな表情を浮かべた。
千冬はそれを一瞥して、乱れたジャージを正すと授業終了の号令をかけた。
何が起きたのか、クラス全体がきょとんとしていたがただ一つローラにとって、初めての授業は何とも後味の悪い物になってしまったと言う事は皆理解できたようだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あ～あ・・・。
なんで姉さんあんなことしちゃったんだろ・・・。
今は昼休みで、あれから三つもの授業を受けたと言うのに今朝の一件がまだ尾を引いていた。
おかげで、今日の授業全くと言っていいほど頭に入っていない。
・・・いつも以上にね。

はぁ・・・。
でもどうしてあんなに怒ったんだろう・・。
それに姉さんが織斑先生に勝ったっていう話も、聞いた事が無かった。
どうなってんだろ・・・ねぇ？
僕が机に突っ伏していると、そこへいつものメンバーが集まってきた。
「ねぇ、一夏。アルディどうかしたの？」
「あぁ、まぁ。今朝の授業でちょっとな」
「ちょっと？」
語尾を濁す一夏に鈴は怪訝な顔をするが最終的には「ま、いいか」で終わるのが鈴らしい。
「にしても、まだ引きずっているのかお前は」
「そうは言ってもねぇ、箒・・・」
そうそう簡単に忘れられることじゃない、それが身内ならなおさらに。
「でも、本当に何も聞いてないの？」
「聞いてないよ、一度もね。それにさ、皆も知ってるんでしょ。織斑先生が公式戦負けなしだったっていうのは」
「ん～。でしたら非公式の試合だったのではなくて？
それなら記録にも残りませんし、皆さんが知らないと言うのもうなずける話ですわ」
「でも、そうだとするなら今度は姉さんの態度に疑問が残るよ」
姉さんはあの時織斑先生に勝ったと言われた事に対して怒っていた。
仮に姉さんが、非公式とはいえ？あの？織斑先生に勝ったと言うのであれば
あそこまで怒る必要があるだろうか。
多分何かあったんだ・・・。
姉さんと織斑先生が戦った時に。
でも、それを確かめるには、当事者に聞くしかない。

今はどうかわからないけど姉さんには聞きづらいし、織斑先生には・・・。
僕はチラッといつものメンバーをみる。
他の面々も、僕の視線に含まれる意味を理解したようで、全力で首を横に振った。
・・・・だよねぇ。
僕だって嫌だ。
・・・とそう言えば、さっきから声が聞こえないけど。
「ラウラはどうしたの？」
「え、居るよここに」
そう言ってシャルロットが一歩ずれるとその後ろでずっとうつむいて難しい顔で何かを考えるラウラがいた。
「ラウラどうかしたのか？」
「ん、い、いや・・・何でもない少し考え事をしていただけだ」
「それって、ローラさんの事？」
「・・・・まぁ、な」
ラウラは、決まりの悪い顔だったが小さく頷く。
そう言えば、織斑先生はラウラには言ったんだがとか言ってたな。
「ねぇラウラは姉さんの事、何か織斑先生から聞いてない？」
「私も、あの学年別トーナメントの後に医務室で少し話しただけだからな。詳しくは聞いていない」
ラウラもダメか。
こりゃいよいよ当事者に話を聞くしかなくなってきたなぁ・・・。
ん？　当事者。
そう言えば何か大切な事を忘れているような気がする。
「あのさ、セシリー。僕たち何か忘れてるような気がするんだけど」
「何か、ですか？」
セシリーはう～んと首をかしげ腕を組む。
何だったかな。
確か、あの模擬戦の前あたりに何か僕たちは調べていたような。

う〜ん・・・・。
あぁ！思い出したッ！
「セシリー、そうだ僕たち聡也の事を！」
「あ、そうでしたわッ！」
セシリーはポンと手を合わせ、何度もうなずく。
そうだ、僕たちは聡也の事を調べてたんだ。
あの、聡也が起こしたもめごとについて。
とりあえず、そっちを先に片しちゃわないと。
このまま問題を積んでいくのは、いささか面倒だしね。
「おい、アルディ、セシリア一体何の話をしてるんだ？」
「そーよ、聡也がどうかしたの？」
一夏や鈴が、いやここにいるメンバー全員が僕たちに疑問を投げかけてきているが
流石にこれだけの大所帯では、動きづらくなるというのは目に見えていた。
何か、ごまかせるような物は・・・ああぁそうだ。
「一夏達は、姉さんの事について調べてみてよ！
僕たちは僕たちでちょっと調べなきゃいけない事があるからさ」
「え？　あ、おい！」
「そ、それじゃ！」
僕はセシリーの手を引いて足早に教室を後にする。
残された一夏達はただ茫然と、その後ろ姿を見送るだけしかできなかった。
「なぁ鈴」
「何よ」
「あいつらどうしたんだ？」
「あたしが知るわけないでしょ！」
一夏が箒たちを見ても、さっきと同様に皆そろって首を横に振るだけだった。

◇◆◇◆◇◆

。

だからと言ってあんなものを勝ち星に勘定するほど腐ってもいない。

あたしにだってプライドはある。

アレはあたしの負け。

誰が何と言おうとね・・・。

ローラは、何もない宙をにらみ、フンと鼻を鳴らした。

今はまだ、その真実は彼女たちのみぞ知る。

第２３話～姉の実力と憂鬱～（後書き）

しまったとか思ってももう遅い。

どうもしるくです。

ここだけの話ロッソの事をすっかり忘れていた僕は馬鹿ですね
も本当にばかばかｗ

なので、少しづつ両方の問題に触れていくという何とも難しい事を
しなければならなくなりました（汗。

ちぃとまだまだ読みづらい文章ですが、お付き合いくださいね。

それでは２４話でまたお会いしましょう！
さよならッ！

第２４話～探偵アルディ・サウスバード～

一夏達から逃げるように僕たちは二組へとやってきた。
今回はすぐにロッソと総也を見つける事が出来た。
これはラッキーだ。
前は二人ともいなかったばかりか、その後にたいへんな事になっちゃったからね。
「ロッソ、聡也！」
「アルディ」
「・・・・どうも」
セシリーも言葉は発しなかったが、ペコリと頭を下げる。
一通りの挨拶がすむと僕は単刀直入に総也に切りだした。
「ねぇ、聡也。実はこの前の風紀委員とのもめ事について少し聞きたい事があるんだけど」
「え、あぁ・・・あれは・・」
急に顔が曇る聡也。
だがその質問はロッソも同様に思っていた事だったらしい。
「・・・そういえば・・・まだちゃんとした理由を・・・聞いてなかったわね」
「いやだから、あれは僕が風紀委員になりたかったからって言うただそれだけで・・」
「ですけど、あなたまだ風紀委員じゃありませんわよね？」
セシリーの一言にうッと言葉を詰まらせる聡也。
っていうかそうなの？
てっきり勝ったもんだから、風紀委員になったもんだとばかり。
「え？　聡也って風紀委員になってなかったの？」
「・・・えぇ、まぁ」
「・・・担任に話したら・・委員の選定期間以外での変更は・・・原則認められていないんだって」

なるほど。
まぁ確かにそれは当然と言えば当然だろうね。
学校側もそんなのを認めていたら、コロコロと変わられた時の対処が大変だし。
ん、待てよ・・。
確か、勝ったら風紀委員を変わってもらうって言う約束をしていたんだよね。
でもそういう規則の所為で、風紀委員が変わらなかったっていう事は・・。
僕はチラッとロッソの目をみる。
そしてロッソはコクリと頷くと、ボソリと言った。
「・・・完璧に私の戦い損」
「うぅっ・・・」
流石にグサリと来たのか聡也が、うずくまる。
ははは、まぁ自業自得ってことで・・。
でだ。
「で、まぁその話は置いといてさ。僕たちが気になっているのはどうして君が上級生の風紀委員と揉めたかって言う事なんだよね」
「何か、わけがあるのでしょう、話してくださいません？」
聡也は、また決まりの悪そうな顔で少し目を泳がせていたがやがて、諦めたように息を吐くと、僕たちにゆっくりと背を向けた。
「分かりました・・。ついてきてください」
聡也は僕たちの答えも聞かぬまま歩きはじめた。
僕たちもあわててそれに続く。
聡也は、階段を上がり一学年上の二年生のクラスへ僕たちを案内する。
その教室には二年一組の札が掛かっていた。
聡也は、後ろの空いている扉から遠巻きに中を除いて一人の女子を指さした。
「あれ、見えますか？」

「あれって・・あの赤い髪の人？」
聡也が指さした人物は、丁度この扉からまっすぐ見える位置、つまり教室の一番前の窓側の席に足を組んで座っていた。
あれ、あの人・・・どこかで。
「まぁあの人が理由と言えば理由なんですけど」
「・・・あの人が？　聡也・・こっちおいで」
「いやいやいやいや、違いますからね！？　ロッソあなたが思っているのと
僕が思っているのとでは、マリアナ海溝ぐらいの差がありますよッ！？」
おいでなんてかわいらしい事言っているが、行けば間違いなくフルボッコは確定だろう。
もう少し仲良くしたらい良いのにねぇ。
「あなたはもう少し、鋭くなった方がよろしいですわよ」
なぜかセシリーにジト目で睨まれた。
ちなみに聡也は、既にロッソに首根っこ掴まれて退場。
今回は、聞こえてこなかったが一応手だけは合わせてあげよう。
と、そんな事を考えている場合じゃなかった。
もう一度僕たちは、聡也が指さした人物を見やる。
顔は見えないがあの髪の色や雰囲気がどこか引っかかる。
「・・・ねぇ、セシリーあの人さ・・僕どこかで会った気がするんだ」
「えぇ、私もですわ・・・むしろ・・・戦った」
そう、その人物は無人機を追って黒いＩＳが襲撃してきた時にセシリーを狙ったあの？紫燕？の操縦者に非常に酷似している。
そしてそれは、ふと女子が振り返り顔が見えた時確信へと変わった。
間違いない、あの顔は！
でも、なんで・・・。
この学園の生徒だったとでも言うのか？
いやでも・・・。そんなバカな。

僕は、一度深呼吸して自分を落ち着かせるとセシリーを見て一回頷く。
セシリーも同様に、僕へ頷き返してくる。
そして僕たちは二年一組へと足を踏み入れたのだった。

踏み入れたと言っても、中に入ったわけではない。
まず手短な先輩にあの人の名前を聞かないとね。
「すいません、ちょっといいですかね？」
「うん、なんだい？」
「あの先輩の名前、教えてもらってもいいですか？」
尋ねた先輩は僕が指をさした方向を追う。
そして対象に気付いて、ハハッと笑いながら気さくに教えてくれた。
「あぁ、彼女？　彼女は烏越　聡華って言うんだけど・・何か用？　何だったら呼んであげるけど・・？」
おぉ、これはラッキー。
流石に僕たちが呼んだんじゃ変に注目されてしまう。
僕はとりあえず廊下にいるからとその先輩に告げて、
烏越先輩を呼んできてもらう事にした。
「にしても、あの方・・・似すぎですわよね」
「うん・・そうだね。まさか本人では無いと思うけど・・それにしたってねぇ」
二人でそんな会話を交わしていると、荒い口調が僕たちを呼ぶ。
そこには、実に面倒くさそうに片目を閉じて口をとがらせる烏越先輩がいた。
「お前らか？　あたしを呼んだのは」
「えぇ、まぁ・・。とりあえず僕はアルディ・サウスバードって言います」
「私は、セシリア・オルコットですわ、よろしくお願いします」
「あぁ、あたしは烏越聡華ってんだが・・・で、一体何の用だよ。

まさか自己紹介のためだけに呼んだんじゃねぇだろうな」
「もちろん、違いますよ。流石にそれだけで呼びだすのは失礼でしょ？」
「フン、ま、いいけどよ」
鳥越先輩はそっぽを向いて不機嫌そうに鼻を鳴らす。
・・・って言うかなんで、こんなに機嫌悪いんだろう・・。
まだ僕たち、特に神経を逆なでするようなことは言ってないしやっても無いと思うんだけど・・。
「気をつけなよ、君達～。聡華は呆れるぐらい気性が荒いから」
横槍を入れたのはさっき鳥越先輩を呼んでくれた同じクラスの先輩だった。
その人に向かって鳥越先輩は睨みを利かすと「うっせぇよ」と吐き捨てる。
ひょっとしてこの先輩から聡也へ喧嘩ふっかけたのではないかと思うぐらいきつい性格のようだ。
鳥越先輩は腕を組んでまた、鼻をならすと再度苛立ちを含んだ声で尋ねる。
「で、その失礼に値しねぇ用事ってのは？」
「あぁ、えと。数日前に先輩と揉め事を起こした一条　聡也についてです」
ヒククっと鳥越先輩の顔が引きつり、その目のままこちらを睨む。
「知ってますよね？」
「・・・・あぁ」
鳥越先輩が静かに肯定するのを確認して、僕は言葉を続ける。
「何があったか、ちょっと話していただけませんか？」
僕はあえて、少し挑発的な声で先輩に言う。
するとそれに少々神経を逆なでされたのか目を細め更に鋭くこちらを見やる。
うぅ～・・怖い。
「・・・・てめぇ、中々良い度胸してやがんな」

「まぁ、色々と面白そうなことに首突っ込むのは嫌いじゃないんですよ？」
とかいいつつ、内心もう逃げたかった。
多分セシリー居なかったら全速力でこの場を後にしていたことだろう。

鳥越先輩は僕の顔を見て少し考えた後、やれやれと笑うと腰に手を当て顎で僕達を促した。
「ついてこい」
鳥越先輩は僕達が、歩き出すことを確認すらせずに一人歩いていってしまう。
まぁでも、これで話が聞けそうだぞ・・。
「フフッ、アルやりましたわね」
「ハハハ。かなり怖かったけどね」
セシリーに小脇突かれながら僕は、苦笑いを返す。
「おい。ついてこいっての！！」
「あ、はい！　すいませんッ」
僕達は先輩の後を追いかける。
これから聞けるであろう話に少しの期待と不安を感じながら。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ローラはあの授業の後も他のクラスのＩＳ実習を二つ程こなすうちに、
どうにか気持ちに整理がつきこの昼休みに千冬の元を　訪れている。
二人は気分転換にと今は屋上にいた。
「はぁ、にしてもダメねぇ。あの事になるとついカッとなっちゃう・・・」

「まぁ、良いさ。私は気にしていない」
本当に何も気にしていない風な口振りにまた少しカチンとしてしまうが、
流石にローラもここはこらえた。
ここでまた怒ったら、同じ事の繰り返しだからだ。
千冬は柵にもたれかかり腕を組み、ローラは腰に手を当て千冬の正面に佇んでいる。
そんなローラをチラリと見て、千冬はゆっくり目を細める。
「それで、何をしにきた?」
「あら、どういう意味?」
「とぼけるな。お前がただ謝るだけでわざわざ私を訪ねるはずかないだろう?」
ローラはフッ笑うと、息を一つ吐いた。
「何でもかんでも、お見通しね」
「で、何だ?」
「あなた、アルディから“ストライク・バーディ”を預かってるわね?」
千冬は一瞬目を見開き、そして懐から真っ二つに切断された弾丸のネックレスを取り出した。
「お前こそ、お見通しというわけか・・・・」
「さて、どうかしらね」
ローラは千冬から、?ストライク・バーディ?を受け取るとそれを掌の上で転がしてまじまじと見る。
実際こうなってからの?ストライク・バーディ?を初めてみたが思った以上にこれは酷そうだということは分かった。
「千冬、これの簡易検査の結果。もう出てるんでしょ。どうだったの?」
「簡易検査・・・・か。あぁ・・まぁ出るには、出たが・・・」
千冬は、大きくはぁっと息を吐く。

それだけでローラは、良い答えはないということを直感した。
「よく・・・わからなかった」
「わからない？　この学園の設備をもってしても？」
案の定回答だったが、それでもわからないという答えは予想外だ。
検査というものは、簡易であれ何であれそれなりに白黒がつくものの
のはずである。
せめて壊れているのか壊れていないのか、それだけでもローラにとっては
大きな収穫だというのに答えは分からない。
正味、ローラはここの設備に期待していた部分があった。
一国の開発機関以上の設備を有するこの学園ならばと。
・・・まったく手間のかかるＩＳである。
「あぁ、基本的な情報は抽出できるんだがな。肝心なコアシステムへの
アクセスをすべて拒否しているんだ。今のところ手の打ちようがない」
「基本的な情報というのは？」
「簡単な、破損チェックなどだな。だがそれも装甲表面や武装といったコアシステムに
あまり関係しないところの情報だけで、一度そこからクラックを入れて入り込もうとしたんだがな
駄目だった」
なんてこと・・。
これじゃ、現状自分が手伝えることなんてほとんどないじゃない。
ローラはため息を漏らすと、困り顔で千冬を見た。
まぁ千冬も困り顔なのだが。
「・・・なぁローラ。お前が使っていた時もこれほど面倒なＩＳだったのか？」
「まぁね・・・それでも半日調べりゃ反応があったわよ。アクセス拒否なんて聞いたこともないし」

「・・・そうか。まぁ、うむ。・・・それはお前に預けておこう。お前からサウスバードに返してやってくれ」
千冬は言い残し、屋上を一人後にする。
残されたローラは、空を見上げて？ストライク・バーディ？を掲げた。
「まーーーったく、世話のかかる子ねぇっ！」
それは独り言なのか、はたまた？ストライク・バーディ？へ向けられたものなのかは
わからないが、その大きな声はきれいな青空に響いていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

鳥越先輩はドカッとラウンジの椅子に腰かけると、足を組み肘をついた。
っていうかその。
そういう足の組み方だと・・・。
「あん、何赤くなってやがんだよ」
「あ、い、いや・・その・・」
「あ！？　ちょ、ちょっと先輩！　し、下着が見えてますわよ！？」
セシリーがなるだけ声を低くして、あわてて指摘するが鳥越先輩は気にしない。
「あ？　別にいいだろ減るもんじゃねぇし・・・
ま、つってもてめぇが落ち着かねえか？」
ハハッと笑って足をほどくと、改めてこちらを見やる。
「で、あの一年坊主のことについて聞きてぇんだってな」
一年坊主とは間違いなく聡也のことだが、僕は今それ以上に気になっていることがあった。

それは彼女の話し方から容姿に至るまでそのほとんどが、あの襲撃者に酷似していることだ。
確かに、よく芸能人や有名人に似た顔をもつ人はいる。
だがこれはそのレベルではなかった。
まるっきり同じなのだ。
性格まで。
何かやっぱり関係あるんだろうけど・・・。
「聞かせてくださいますの？」
セシリーが先輩の発言に反応する。
いわれてみれば、あれだけ人を睨んでいたのにいやにあっさり話す気になったよね。
「後で、ごちゃごちゃ聞きに来られていちいち相手するぐらいなら誰かに話して、それで終わりにしたほうがよくねぇか？」
「はぁ、まぁ確かに」
「じゃぁそういうことだ」
鳥越先輩は、背もたれに寄りかかって両手を頭の後ろで組み天井を見上げながら話し始めた。
「あの野郎と、初めてあったのはアリーナのピットだったかな。
いきなり声かけられたんだよ」
「向こうからですか？」
「あぁ、そうだぜ。しかも何を思ったかあたしのことを？姉さん？って呼びやがってよ」
「「えぇ！？」」
僕とセシリーは声が見事に重なった。
そして音量もまぁ同じぐらいだったと思う。
どういうことなんだ・・・。
「あの、ちなみに先輩にご兄弟はおられますの？」
「うんにゃ、あたしは一人っ子だ」
と、いうことはつまりだ。
えぇと・・・。

そこまで考えて、セシリーが僕の肩を引っ張り顔を近づけて声を潜めて話しかけてきた。
「ねぇ、アル・・・どう思われます？」
「・・・まぁ一つの仮説はあるけどね。ただ・・まだ確証は持てないかな」
「ですけれど、おそらくあの・・」
「うん・・そうだね」
僕たちはちらっと鳥越先輩を一瞥すると、偶然にも目があって語気を強められた、
「おい、もういいならあたし教室に戻るぜ？」
「あぁぁ、いやいや、少し質問の確認をしてただけですから・・・」
僕たちはあわてて離れると、再び鳥越先輩の話に耳を傾けた。
それからの話は、聡也と先輩の模擬戦やそれから聡也が訪ねてきて・・といったような話。
聞く分には特にこれといった重要な情報はなかった。
むしろ、前半部分のほうに重要な要素が入りすぎていたのだ。
鳥越先輩は、てわけよと話を切り上げて息をついた。
僕たちは、いま話してくれたことを頭の中で整理しながらいろいろと考える。
だがさっきも言ったが、まだそうだと決めつけるには早すぎる。
だからこそ、僕はこう尋ねてみた。
「先輩、あのですね。？紫燕？というＩＳをご存知ですか？」
おそらくこれを知っていれば、この人は・・・。
「あぁ、知ってるも何も？紫燕？はあたしのＩＳだけど・・」
これで決まりだ・・。
この人は間違いなく、あの襲撃――――――「そういえば、あん時おんなじＩＳと戦ったな・・」
――――――――――――――――――――え？
な、何？
「同じＩＳと戦った！？」

「あぁ、間違いなく同じＩＳだったぜ？」
ＩＳのコアの絶対数が決まっている以上、同じＩＳを二機作るメリットはない。
そうなると・・・・・・。
あぁもうわけわかんなくなってきたぞ？
「それは、間違いなくＩＳでしたの？」
「あのよぉ、人が乗ってて装甲がついてたんだぜ？
これをＩＳと呼ばずしてなんていうんだ？」
た、確かに・・。
僕とセシリーは今間違いなく混乱の渦中にある。
えーとだから・・どういうことなんだよ・・。
お互い顔を見合わせるしかない僕たちに向かって先輩は軽く息を吐くとガタリッと立ち上がる。
「とりあえず、あたしが話せるのはこんなもんだな。それじゃ、失礼するぜ？
もうすぐ午後の授業なんでね」
軽く一瞥してから踵を返す先輩。
いまだによく内容を理解できていない僕たちが呆然と顔を見合わせる。
それからしばらくして、午後の授業開始のチャイムが高らかに鳴り響いた。
ちなみにこの後の授業の担当は織斑先生。
僕たちは、？特別？に情報端末の角で頭をたたかれた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

うぅ、ひどい目に会いました。
聡也は昼休みにロッソにボッコボコにされて痛む体をさすりながら、放課後の学園内を歩いていた。

本当に明日が土曜日で休みなのはよかったと思う。
ほんとにもう・・。
大体何で僕がこんなことされなくちゃいけないんでしょう・・。
聡也は心の中で愚痴りながら、角を曲がるとドンッと誰かにぶつかってしまった。
「あ、大丈夫ですか？」
「えぇ、ごめんなさ・・・あら？」
それは背の高い女性だった。
ちなみん僕はこの人を知らない。
だがその女性は僕を見て、クスリと笑うといきなり名前を呼びあてられた。
「あなた、一条　聡也君じゃないかしら？」
「え！？」
やっぱりと気さくに笑うその女性。
だが一方の僕は目を丸くして驚いた。
初対面で、あったこともないのに・・・。
待てよ・・。
まさか。
「あなた、まさかＮの技術を・・・」
「Ｎ？　何のことかしら？」
あれ？
・・・うん？
「あの、あなたは・・・その」
「多分聡也君、あたしのことを色々と誤解してないかしら」
「誤解・・ですか？」
「えぇ、あたしはね・・・・・こういうものよ！」
女性は聡也の腕をとるとそのまま背中でねじ上げ
後頭部にはカチャリと冷たいものがを押し付ける。
それは、冷たく黒光りする、トリガーを引くだけで簡単に人を殺せてしまう代物。

っく、軽率だったか！？
聡也は周囲を確認するが見計らったように誰もいない。
つまり大声を出しても誰も気が付かないということだ。
くそっ！　・・・・仕方ない。
？ホワイトアウル？で・・。
とそこまで考えて、聡也は？ホワイトアウル？の
起動キー（イグニッションキー）を切らしている事に気が付く。
・・・最悪だ。
聡也はあきらめたように目を閉じる。
しかし、その直後聞こえてきたのはその女性の笑い声だった。
「アハハハハッ、あなた結構面白いわね」
女性は聡也から手を放す。
「面白いって、あなたはいったい！」
「やぁねぇ、ちょっとした冗談じゃない」
「冗談であなたは銃を取り出すんですか？」
聡也はまだその女性が手に持っている銃をにらみつけた。
しかし、言われた本人は実にあっけらかんとして言い返した。
「あぁ、これ？　フフッ、ライターよ。アメリカのちょっとしたお土産なのよ？」
カチッとトリガーを引くと、銃口からボッと青白い炎が上がる。
それを見て今度こそ、警戒を解いた聡也が一つ大きなため息をついた。
「それで、あなたはいったいどなたなんですか？」
「・・・・実は実弾も発射可能！」
「嘘っ！？」
また身構える聡也を女性はうっそ～と言いながら、明るく笑い飛ばした。
なんなんだこの人・・・。

聡也はその女性に言われるままに、屋上へと連れてこられた。
そして女性は気さくな笑みはそのままに無言で聡也にメモリーカードと起動キー(イグニッションキー)を手渡した。
「・・・・これ、博士の！」
「やっぱりねぇ、あたしは間違ってなかったみたい」
女性は聡也に笑いかける。
受け取ったメモリーカードは間違いなく一条　希が作ったものだ。
「でも・・どうしてこれをあなたが？」
「渡されたのよ、彼女にね。ここに来る前に」
「渡された・・・・って、博士に会ったんですか？」
「えぇ、とても優しい人ねあの人」
女性はフッと笑うと策に寄りかかって向こうに見える海を見た。
聡也もそれにならって、策へ寄りかかる。
それから少しの時間が流れただろうか。
聡也はもう一度女性に尋ねた。
「そろそろ、お名前聞かせてくれません？」
「あら、知らないの？　・・やっぱり千冬のほうが有名なのねぇ・・世界第二位なのにひどい扱い・・」
女性はわざとらしく肩を落として悔しがるがすぐに表情を切り替えこう答えた。
「あたしは、ローラ・サウスバード。アルディがお世話になってるわね」
「あ、アルディのお姉さんでしたか・・・。なるほど・・・納得しました」
もちろん納得とは、初対面で腕をねじ上げられて、銃型ライターを頭に押し付けられたことに対してである。
まったく、姉弟そろって・・・。
いや、アルディ以上かな。
聡也はそんなことを考えつつ、ちらっとローラを見やる。
するとローラが唐突に質問を投げかけてきた。

「ねぇ、あなた・・・あの希の息子なのよね？」
「え、いきなりなんです？」
「いや、さっき希のことを博士って呼んでたから・・・・」
あぁ・・・と思う。
よく考えれば不自然ですよね。
そういえば、あの人を母さんと母親と呼んだことがあっただろうか。
別に嫌いというわけではない。
むしろ色々サポートもしてくれるし相談にも乗ってくれる。
ありがたい存在だ。
ただ・・・。
「僕は・・・その、養子ですから」
聡也の？本当の？両親はこのＮの技術の開発にかかわっていた。
ちなみに旧姓は誉（ほまれ）という。
しかし誉夫妻は、ある実験の際に起きた事故に巻き込まれて亡くなってしまった。
もともと誉家は紫香楽家の分家的な立場であったこともあって、
幼いころからＩＳの適正が高かった姉、つまり聡華が紫香楽の家に引き取られてしまっていた。
そのため聡也は家で、たった一人でその報告を聞いた。
報告といってもただ電話がかかってきただけだが。
？あなたの両親が亡くなりました？と。
冷たく淡々と言われたその言葉を、当時の聡也はよく理解ができなかった。
そしてそれを時間をかけて頭が理解していくにつれて、
聡也の中で何もない無だけが広がっていった。
何もする気が起らない。
そんな日々を、しばらく過ごしていた。
その時だ、あの一条希に出会ったのは。
それからのことを、実はあまりよく覚えていない。
気が付けば聡也は？ホワイトアウル？の操縦者になっていて。

で、あの人の養子になっていたというわけだ。
さっきも言ったが、別に博士のことは嫌いじゃない。
でも、だが。
なぜだか聡也はあの人を母さんと呼ぶことにためらいがあった。
あの人を母さんと呼んでしまったら、本当の母さんはどうなってしまうのだろうか。
あの人を母さんと呼ぶことで、じきに本当の母さんの存在を忘れて行ってしまうのではないだろうか。
そんなことを考えてしまうと、どうしても躊躇してしまう自分がいたのだ。
「・・・ふぅん・・・養子ね」
「はい・・・」
聡也は視線を落とす。
今聡也の中で、色々複雑な感情がグルグルと渦を巻いていた。
自分でもどんな表情をしたらいいのかわからなかったのだ。
だがそんな聡也へローラは実にあっさりと自分の考えを述べた。
「そんなに気にするものかしらね。
少なくともあの人は今あなたのお母さんじゃない。
もしあなたに、希を母と呼んで本当の母親の存在がどうにかなっちゃうとか思っているのなら、それは多分間違ってると思うわよ」
ローラはそこまで言い切ってから、ま、あたしの想像だけどねんと茶化していうと
踵を返して、屋上を後にする。
ただ一人残された聡也は、渡されたメモリーカードと起動キー(イグニッションキー)にゆっくりと目を落として呟いた。
「・・・母さんか」

◇◆◇◆◇◆

広大な海。
その中を進むのが潜水艦である。
そしてここにも、その海の中を突き進む黒い影があった。
色形そのほとんどが？戦（おののき）？に似ているが微妙に
艦橋の形と上部カタパルトハッチの形が異なっているそれは、
艦の側面に白く達筆な文字で？守（もり）？　と書かれている。
その内部では、これまた一人の若い白衣の女性が腕を組んで不敵に
笑っている。
真っ黒い髪に、吸い込まれそうになるほど不敵に光る緑色の目が特
徴的だ。
そこへ近づいてくる二つの影。
それはあの聡也と聡華姉弟だった。
「おや、もう帰ってきたのかい？」
「帰ってきたもクソも、何もなかったじゃねぇかよ！」
「まぁまぁ、姉さん落ち着いて・・・」
「ふん」
聡華は鼻を鳴らすと腕を組んでそっぽを向く。
それを白衣の女性は笑って一瞥すると聡也に向き直った。
「で、帰ってきてすぐで悪いんだけど、今度はハワイに飛んでくれ
るかな？」
「ハワイィッ！？」
聡華は素っ頓狂な声を上げて、白衣の女性をにらむ。
だがそれに構わず女性は言葉をつづけた。
「アメリカの軍用ＩＳの試験が行われるらしいんだけど
・・それに？あの女？も噛んでいそうなんだ」
「あの女・・・篠ノ之束ですね・・」
聡也が目を細め言う。
それに対して女性はニイッと口角を釣り上げた。

「あぁ、そうさ。もともとのNの技術は?そのため?に開発されたのだから・・・
そのために使わないとだめだろう?」
女性はピッピとキーをたたきながら、踵を返すとモニターにデータを表示させる。
そこには米原子力空母?スタン・フレイリー?の現在の位置が表示されている。
またにやっと笑うと振り返って呟いた。
「やってくれるね?」
「・・・はい・・もちろん」
「お、おい聡也・・いくらなんでもさぁ・・」
渋る聡華にその白衣の女性は、目を細めて声のトーンを落とした。
「・・・・・やってくれるよね?」
「・・・わ、わあったよ・・・やりゃあいいんだろ・・やりゃあよ・・・クソッ」
聡華は舌打ちすると女性に踵を返してその場を後にする。
聡也も女性に一礼してから、その場を後にした。
そうだ・・それでいい。
女性は再びデータに目をやる。
フフフッNの技術は正しく使わなきゃね?
使ってあげるよ、この・・・。

五条(ごじょう)　叶(かなえ)がね。

第２４話～探偵アルディ・サウスバード～（後書き）

なんだか、解決したのかしてないのか。
いやしてないんだろうねぇ。

どうもしるくです。

これもはや２４話遠くへ来たものと思いつつも、いまだにセシリーとの買い物や何より？オーシャンズ・イレブン？に到達すらしていないありさまとはｗ

まぁこうやって長々書いていくのも私の仕様だと思って大目に見てくださいね。

それではこの辺で。
２５話でお会いしましょう！
さよならっ！

アルディ・セシリーの人物考察！（前書き）

これは、オリジナルキャラクターの設定をまとめた物です。
※初期設定のため少し小説版では、異なっている部分があるかもしれません。

アルディ・セシリーの人物考察！

「アル！」
僕の名前を叫びながら、誰かが僕の部屋のドアをバンっとぶち開ける。
僕はあわててその人物を確認すると・・・。
「セシリー・・？　どうしたの、そんなに息を切らして・・」
「はぁ、はぁっ、た、大変ですわ・・はあッ・・これをご覧になって」
息も絶え絶えに、セシリーは僕に一枚の紙切れを見せた。
こ、これは・・・。
？今から、あなたの周りの人物について説明してください。そしてそれが終わったら
最低一人以上の人物にこの紙を回してください。さもなければ悪い事が起こります？
・・・・・・紛れもないチェーンメール・・・。
「せ、セシリーこれチェーンめー・・・」
「アル急ぎませんと悪い事が起きますわよ！！」
僕はその事をセシリーに言おうとしたが、セシリーは
少々混乱しているのか冷静な判断を下せないようだった。
僕はもう一度チラッと、紙を見やる。
・・・ま、まぁ自己紹介も兼ねて、一度整理しなきゃなぁとは思ってたし・・・。
それにまぁこう言うのは悪戯だから・・・まぁ良いか。
「そ、そうだね。じゃあ早速始めようか」
きっかけはなんであれ、僕とセシリーの人物紹介の幕が切って落とされた。

「コホンッ、それでは改めて・・・・アルディ！」
「セシリアの！」
「「周辺人物紹介～～～♪」」
「さて、ね・・・、まぁきっかけはどうあれこう・・・始まったんですけど」
「はい！　はりきってまいりましょう！」
「・・・はぁ。じゃまとりあえず一人目～」

●アルディ・サウスバード
一人称：僕
三人称：君

アメリカ、カリフォルニアはサクラメント出身の少年。
金髪蒼眼の持ち主で、色盲を患っている。
モンド・グロッソで千冬に次ぐ世界第二位に輝いた
ローラ・サウスバードを姉に持つ。
幼い事に両親を海難事故によって亡くし姉に育てられた。
姉の影響を多分に受けて育っているため、嘘を好み、
特に戦闘においては姉ほどではない物の
よく喋り、相手を惑わせる戦法を好む。
射撃は姉から手ほどきを受けたが、自身にあまり向上心が無く
ただなんとなくと言う理由で続けているため、
普通の人より旨く扱える程度にとどまっている。

仕様ＩＳ
●ストライク・バーディ
ローラが、モンド・グロッソで使用していた同名のＩＳがベースとなっている。
コア自体は異なる物を使用しているようだがベースは完璧な第一世代である。

一応便宜上の分類としてアメリカでは第二世代ＩＳに分類されている。
元が強大な推進力を武器にした強襲型のＩＳだったのに対して、本機は、重装甲銃火力にお重きを置く？広域せん滅型？のＩＳに生まれ変わっている。
その火力は相当なもので、背部火器内臓スラスター？ウェポンスクエア？内部には
高圧荷電粒子砲？ヘヴィハンマー？小型バルカン砲？ファイアスピード？三連想ミサイルポット？トーネイド？そして出持ちの荷電粒子砲？ファイアーフライ？を合わせた全砲門射撃？アヴァランチ？はすべての攻撃が直撃したと仮定するならば、小型気化爆弾九つ分に相当するすさまじいものである。
（大抵の場合、高火力高反動の武器が多く非常に散布域が広いため、全弾が直撃する事はほとんどない）
尚ウェポンスクエアは、別名？フレキシブル・スラスター？ともよばれ、三六〇度どの方向にも動くためこれを使用して、相手に狙いを定める？固定砲台？として運用するのが一般的。
また試作音響兵器？ハウリングエコー？と言う物を搭載しているが、現在はＩＳのとある理由のため
仕様が出来ない。

「ほえ～・・・」
「セシリー顔顔・・」
「はっ！」
「とまぁ見てきたわけだけど・・そう言えば最近嘘ついてないなぁ・・」
「良いじゃなりませんか、それはそれで」
「・・・でもねぇせっかくこう言う性格なんだから・・」
「わ、私はその・・そういうアルも・・・ゴニョゴニョ」

「？」
「な、何でもありませんわ！さぁさ、次ですわよ！」
「う、うん・・・まぁ、いいか」

●ローラ・サウスバード
一人称：あたし
三人称：あなた

アメリカの国家代表で第１回モンドグロッソ準優勝で、射撃部門では優勝している実力者。
金髪のロングヘアーに、深緑の瞳を持つ。
だが性格が災いして、新聞各社？Ｒｏｌａ　ｏｆ　ｂｅｔｒａｙａｌ？（裏切りのローラ）とまで酷評された。
弟以上に嘘をついて人を騙すことを好み、周囲の人間を手玉に取る詐欺師のような性格も持ち合わせる。
ひょうひょうとして居るが、弟同様明るくどこか人を食ったような癖っけのある性格。
近接戦闘はてんでダメだが、非常に高い射撃戦闘能力の実力を持ち、それによって圧倒する。
実は非公式でたったの一度だけ、織斑千冬に勝っている。
だがローラ曰く、？あれはあたしの負け？
口癖は？世界で２番目のお姉さん？
現在も引き続き国家代表をしながら研究開発局でアドバイザーとして働き
？ストライク・バーディ？の開発にも尽力した。

仕様ＩＳ
●ストライク・ミラージュ
第１回モンドグロッソで万が一、ストライクバーディが

破損し次戦への参戦が難しくなる事に備え準備していたリザーブＩＳで第２世代ＩＳ
当時は貴重なＩＳを遊ばせておくのはという批判もあったため
大会終了後に外部装甲を残してコアは別のＩＳに移されていた。
その後アルディにＩＳの適性がある事が判明。
新しい機体を急きょデータ取りのため用意することになったのだが、
現状手一杯で、許可申請に時間がかかる事等からローラの
？ストライクバーディ？にコアだけ新調する形で開発が進められ、
必然的に専用機を失ったローラが倉庫の片隅で埃をかぶっていた
本機を引っ張り出したのが本機とローラの馴れ初めである。
多少コア定着に時間はかかったものの、
現在では問題無く稼働しており、世界第２位の実力を遺憾なく発揮している。
背部の大型スラスターに比べ全体的にシャープであり非常に機動性に長けるＩＳで
武装もストライクバーディに比べれば簡素なものだが、
動きながらでも弾膜の驟雨を浴びせられるよう連射性に
優れた武装を持っている他、スナイパーライフルもバススロットに入っている。
また固定武装として特殊偏光装甲？ステルスミラージュ？と
そしてもう一つが光学投影システム？フェイク・シルエット？を搭載する。
この？ステルス・ミラージュ？は装甲表面を鏡面化し光の屈折反射によって、
焦点距離を狂わせ相手の距離感をずらすことができ、
？フェイク・シルエット？は空中投影ディスプレイの応用のようなもので、
ウィングスラスターに取り付けられた特殊プロジェクターによってあたかもそこに
ローラがいるかのようなリアルなスリーディー映像を投影すること

ができる。
この二つがこの機体の大きな特徴であり、これにローラの話術が加わる事でほぼ無敵の性能を発揮する。

「さすが姉さんだねぇ・・」
「まぁ国家代表ですからね・・と言ってもやはり悔しいですわ、負けると言うのは」
「セイシリちゃん危ない！」
「え！？」
「な～んてね、うっそ～。あわてるセシリアちゃん可愛かったわ～」
「・・・・姉さん・・。まぁじゃ次・・」

●一条　聡也
一人称：僕
三人称：あなた・君
ＩＳの似て非なる物である実験機ＩＳ－Ｎの操縦者で、黒髪に青色の目を持つ少年。
幼少時は誉（ほまれ）という名字だったが、両親と死別。
ＩＳ－Ｎの開発者である一条　恵博士が養子として引き取った。
非常に物静かな性格だが、若干目的のためには回りを巻きこんでいく所がある。
しかし巻き込んだ責任はしっかりととる義理堅い一面も持つ。
アルディを超える高い射撃センスを持ちＩＳの操縦技術もかなりのものだがＩＳ－Ｎの性能が
圧倒的にＩＳに劣っているために勝てる戦いもあるがその場合もかなり
ギリギリの状態で勝利を物にする事が多い。
希の計らいでＩＳ学園へ転校する。

仕様ＩＳ
使用ＩＳ　疑似ＩＳ　？ＩＳ－Ｎ　ホワイトアウル？（白き鷲）

一条　恵率いる技術者が完成させた、世界でたった2機のＩＳでは無いＩＳ。
通称？似て非なる者？ＩＳのコアを使用せずＩＳに近い性能を保持している。
ＮとはｎｅａｒのＮで、そのまま訳すとＩＳっぽいものと言うことになる。
シールドエネルギーに変えてバッテリー駆動で稼働し、
基本男女だれでも使用が可能なＩＳに近い代物であるが
開発コストが高すぎで現在では二機のみで開発は中断している。
ＩＳに比べて格段に劣る戦闘能力を火力で補っているため、総合火力は高い。
４門の砲を背負っており、二本は手に保持している。
２門が荷電粒子砲、２門が実弾武装のアサルトライフルである。
機動性能は、ストライクバーディーよりも若干高めだが、
ＩＳの通常戦闘機動は行えるだけのスラスター余力は持ち合わせている。
起動には専用のキーが必要であり、１回起動するごとに1本のキーを消費し、
キーは一条　恵から定期的に送られてくる。
ＩＳと近い能力を保有するがＩＳでは無いので、国籍を持つ必要が無い。

「彼も、まぁ謎っちゃあ謎だよね」
「そうですわね・・。まぁでもそれはこれから分かっていくのではなくて？」

「ま、それもそうだね、じゃあ次行こうか」
「はい」

●紫香楽（しがらき）　聡華（そうか）
一人称：あたし
三人称：お前・てめぇ

聡也の姉。旧姓は誉。
濃いワインレッド長髪に、赤い目を持つ少女。
両親と死別後、紫香楽家という名家に養子として迎えられた。
彼女を引き取った紫香楽家は、彼女に紫香楽家製のＩＳを与え、
功績を上げることでＩＳ界での地位を確立するのが狙いであり、
彼女自身の意思はほとんど無視されており、非常に厳しく育てられた。
だがそれに反して、性格はその厳しさに反抗するようにかなり荒っぽくなってしまい、
おおよそ名家の人間とは思えない荒い言動が目につく。
幼いころから、ＩＳへの適応能力は非常に高かったため実力は折り紙つきである。
現在はＩＳ学園を襲撃した犯人として身柄を捜索中である。

使用ＩＳ　紫燕（しえん）
紫を基調とした、鋭角的なデザインを持ち、肩部に大型のスラスターと
背部そして腕部にも大型スラスターを持つ。
このスラスターは必要最低限しか動かないため、可動部への負荷が少なくまた
瞬発力が絶大で一気に超高速の世界へとＩＳを押しやり
特にその直線機動力は群を抜いている。
ＩＳで近接戦闘型の武装を持ち機動力に富む、強襲型のＩＳといえ

る。

メイン武装は、？大蛇？と呼ばれる大きな槍。
オプション武装として中距離をカバーする小型のレールガン？瞬燕？があるが、
基本的な装備はこの大蛇と近接バルカンだけである。第２世代ＩＳ

※バニッシング・ブースト
強大な紫燕の推力が可能にした、？消えるイグニッション・ブースト？
実際は消えていないのだが、ハイパーセンサーでさえ捉えきれないほどの速さを持ち
ほぼ人間が反応するのは不可能な速度である。
ちなみに射程距離はほぼ無いが約３０ｍ以上の直線距離を確保しなければ、使えないという弱点がある。

「この方・・・学園にも居られましたわね・・」
「うん、話を聞いたけど同一人物じゃなさそうだし」
「はぁ、ここら辺は結構複雑ですのね」
「まぁね。これからここら辺がどうなるのかも楽しみだけど」
「では、次の方へ移りましょう」

●一条　聡也（もう一人の聡也）
一人称三人称共に聡也と同じ
聡也に瓜二つの謎の少年。
初めてのＩＳ学園襲撃の際は、無人のＩＳを撃破後、一夏の白式と戦闘。
その後割って入った、ブルー・ティアーズと流れで戦闘に入る。
紫燕と共に、ブルー・ティアーズを落とそうと画策したが救援に入ったストライクバーディに阻止され、
その後このニ機のコンビネーションによって撃退された。

使用ＩＳ－Ｎ　ブラックアウル
ＩＳ－Ｎの技術を使用して、作られたもう一機のＮ。
ホワイトアウルと基本的には変わらないが、武装が充電式の荷電粒子砲４門になっている。

「そう言えば、彼も謎起き人物だけど・・」
「もうここら辺を紹介するのがつかれてきましたわ・・・」
「せ、セシリーが壊れそうなので、さっさと次へ行くとしようか・・」

●一条　希
一人称：私
三人称：あなた

少し小柄で黒髪ショートヘアーに綺麗な緑眼を持つメガネをかけた白衣の女性。
ＩＳ－Ｎの開発者であり、定期的に送られてくる？ホワイトアウル？の研究開発を行っている。
非常に常識人であり、養子である聡也を第一に考える心やさしい人物だが、時々
悪戯をする茶目っけあふれる人物である。
今はＩＳ－Ｎ専用運用艦？戦（おののき）？の艦長としても活躍している。

ＩＳ‐Ｎ運用機動研究艦？戦？（おののき）
ホワイトアウルを運用・研究するための専用艦で大型の潜水艦研究空母。
船籍はアメリカ合衆国。
上部に一基のＩＳカタパルトを持っている。
燃料電池式のＡＩＰを持ち短時間モーターでの航行も可能なため大

きさの割に
隠密行動に長ける。
内部は、長期滞在が出来るように食堂や、風呂場寝室などが完備されており
希をはじめとする技術スタッフは全員この船の中で寝泊まりしている。

「そう言えばこの人、聡也のお母さんなんだってね」
「誰から聞きましたの？」
「あたしよ、セシリアちゃん♪」
「きゅ、急に降って湧いて出ないでくださいな・・・」
「あたしを泡か何かと間違えてない？」
「・・・・・はぁ次行こう」

●リリス・カールストン
一人称：私
三人称：あなた
？戦（おののき）？のクルー兼情報担当の研究員
アメリカ人ながら黒髪で、碧眼を持つ非常に明るい女性で
ローラの訓練校時代の後輩。
運動はてんでだめだが情報関係にはめっぽう強く
高度なハッキング技術を有する。

「ねぇ姉さん、この人は？」
「彼女はリリスね。まぁあたしの後輩かしら」
「と言う事はＩＳの操縦も結構な腕前ですの？」
「・・・・・えぇ・・・まぁ・・ね」
「セシリー世の中には聞いちゃいけない事もあるんだよ」
「・・・なんだかすみません」

●ロッソ・ミオネッティ
ＩＳ非展開時
一人称：私
三人称：あなた

ＩＳ展開時
一人称：あたし
三人称：お前、てめぇ

赤色のショートヘアーに赤い目を持つイタリア人の代表候補生で二組の風紀委員を務める。
普段は無口であまり話さないが、ＩＳを起動すると性格が一変し、苛烈で気性も激しくなる。
そのため力押しで闘うスタイルを好み接近戦を得意とする。
更に候補生の名に恥じない間合いを苦にしない実力も兼ね備えている。
代表候補生としてイタリアで政府監察下におかれて生活してきたため友人も少なく、また本国では自分より強い相手がいなかったため自分よりも強い相手に憧れをもつ。

使用ＩＳ
ペルフェッド・エスダーテ（完璧な夏）

ロッソの専用機でイタリアの第三世代型で、ロッソの名にちなんで赤を基調とした
鋭角的なデザイン。
リアスラスター部は、アルディ程大型ではないが、

左右独立して動くようになっておりアルディの様に
フレキシブルターンが可能となっている。
主な武装は蛇腹剣の？テンポラーレ（嵐）？と左腕には攻防複合兵装防盾
？パーチェ・ディフェーサ（平和の盾）？
この盾には、シールドバリアの発生装置に加え、ニ連装のバルカン砲と
威力は低いが小型の荷電粒子砲が内蔵されている。
機動力は、やや高いものの標準的なＩＳとほとんど変わらないが、
？イグニッション・ブースト？
の使用が可能となっている。
近中に非常に高い性能を発揮する他、中国の？甲龍？同様に
長期戦にも耐えるために、パーチェ・ディフェーサの様に
武装を１つにまとめるなどして高い燃費を実現している。

モード？スフィーダ？
ペルフェッド・エスダーテに搭載されている、緊急オーバードライブシステム。
本機には、肩と脚のユニットの内部に別系統のエネルギー回路を持ちそれを使用して駆動するため、
シールドエネルギーが零になっても発動可能な代物である。
一時的に機体の限界値を引き上げるという物で起動したら、各部冷却のため一部の装甲をパージさせる必要がある。
圧倒的な機動性能を得られる半面、使用時間は４分が限界である。

「ロッソかぁ・・中々個性的だよねこの子」
「ＩＳを起動させたら性格が変わる・・・よく運転したら変わるって言いますわよね」
「あ、うちの姉さん変わるよ？」

「え？」
「・・・・仕掛けるのはこの先の五連続ヘアピンカーブッ！」
「・・・・ネタが・・・」
「セシリーそんな目で僕たち姉弟を見ないでッ！！」

「と、一通り済んだんじゃないの？」
僕は資料に目を落としてセシリーをみる。
セシリーも顎に手を当てて考えているが、どうやら思い当たる節も無いらしい。
「じゃあ、こんな感じで良いのかな？」
「あ、でもアルこの紙を他の人に送りませんと悪い事がって・・・」
セシリーは本気で心配そうな顔を浮かべ僕に詰め寄ってくる。
それを僕は、鼻で笑い飛ばした。
「アハハ、いやだなぁセシリーこれはねチェーンメールだよ。要は悪戯悪戯」
僕は笑いながら、その紙をビリビリに屋アブいてゴミ箱へ捨てる。
「あ！！」
「だから悪戯なんだって、セシリーは心配しょ「おいサウスバード」
・・・・だな？」
背後にもの凄い殺気を感じ僕は思わず固まる。
多分振り返ってその目を見ただけで死ぬんじゃなかろうか。
っていうか、なんでこんなに怒ってるの？
「いまお前何を破いた？」
「何って・・・チェーンメールの・・・」
僕は質問の意図が分からずに、キョトンとした顔で織斑先生に言い返す。
しかし、セシリーの次の言葉を聞いた時僕は戦慄した。
「あぁ、あのアル？　その紙はここにありますけれど・・・」
え？

僕は慌てて、ごみ箱を漁りさっきの紙を取り出す。
こ、これは・・・・！
「良くもまぁ、破いてくれたものだな。？重要機密書類？を」
「あ、いや・・・これはその・・・」
「・・・・・・ただで済むと思うな」
やっぱりこれって、本当に悪い事が起こるのかもネ・・・。
首根っこを掴まれて引きずられる僕をみるセシリーの呆れた顔がどうにも印象深く心に残っていた。

「・・・さて、まぁアルは連れ去られてしまいましたが、
この物語はまだまだ続きますわ。
多分こう言った方々も更に増えてくことも考えられますが・・・。
どうぞ皆様、この私セシリア・オルコットに免じて、
そのあたりご理解いただけると嬉しいですわね♪
それでは作者に変わりまして、またお会いしましょう！」

「ふふふっ？　これで終わりと思ったかい？」
白衣の女性が薄暗い空間で不気味に笑う。
「残念だなぁ・・・まだ私がいるのにね」
女性はまるで何かを演じているかのように
大きく身ぶり手ぶりを加えてゆっくりと足を前に進めた。
小さな隙間から洩れる光で、彼女が
真っ黒い髪に、吸い込まれそうになるほど不敵に光る緑色の目を持っている事は確認できた。
そして静かに目を閉じ、ゆっくりとその目を開きながら名前を名乗る。
「初めまして私は五条（ごじょう）　叶（かなえ）。
Ｎの技術を誰よりも正しく使おうとする者だよ」
叶は不気味に笑いながら、きびすを返すと目だけでとこちらを一瞥する
「まぁ、見ていると良いよ・・Ｎの技術は私が正しく使ってあげるから」
そう呟いてまた闇へと消えていく。
そしてその姿が完全に闇に包まれようとした時、最後の言葉を発した。
「・・・まだ物語は始まったばかりさ・・・じゃあ、またどこかでね」
それを言い残して無音になったその薄暗い空間には、
しばらく叶の足音だけが響いていた。

アルディ・セシリーの人物考察！（後書き）

ご感想で「オリキャラが多すぎて名前が覚えられません」というコメントをいただきましたので、今回このような回をもうけさせていただきました。

皆さまがどう思われるかは、分かりませんが度のキャラクターも私が魂を込めて生み出した可愛い子供たちの様な存在です。
これからも、彼らをよろしくお願いしますね！

第２５話～深まる謎、それでも日は進んでく～

放課後、僕は姉さんに呼びだされた。
う～ん・・・呼びだされる理由が見当たらないんだけどなぁ・・・。
僕は、受付で貰った姉さんの部屋の場所が書かれたメモを頼りにその部屋へ向かう。
えぇと・・・あ、ここだ。
僕は一つの部屋の前で足を止める。
そこには、カタカナで？ローラ・サウスバード？と書かれたプレートが部屋番号の下に入れられている。
・・・・いやてかさぁ。
ここ、学生寮の一角だよね？
辺りを見渡しても、普通に女子が歩いたり廊下で談笑したりしている。
まぁ、姉さんも急に学園に来たらしいし、部屋が充分に準備出来なかったんだろうけど、学生寮って・・・。
僕は、苦笑いしながら部屋のドアをコンコンと叩く。
・・・・・・・・・・・・・・。
あれ？
反応が無い。
もう、何だよ。呼んでおいていないの？
もう一度強めにドアをたたく。
すると、中で物音がした。
何か用事でもしてたんだろうかね。
「姉さーん！　僕だよ、アルディ・サウスバード」
しかし返ってくるのは、声ではなくドタドタと言った生活音。
音がするから中にはいるんだろうけど・・・。
「姉さん？　居るんでしょ？」
何やってんのかなぁ・・・。

音はしてるのに・・・・。
「ちょっと、姉さん！　何してるのさ！」
「あなたこそ、何してるのさ」
「うわっ！？」
いきなり真横から声を掛けられて思わずのけぞってしまい、案の定そのまま尻もちをついた。
僕が腰をさすってゆっくりと顔を上げるとそこには、満面の笑みの姉さんがいた。
姉さんはドアを開けドアの内側から何かを剥がして悪戯っぽく笑う。
あーそう、そう言う事・・・。
姉さんが手に持っていたのは、緩衝材のスポンジシートにくるまれたスピーカー。
そこからは確かに先ほどまで僕が耳にしていた
ドタドタやカタカタと言った生活音が鳴り続けていた。
その先にはＩＣレコーダー。
これ、もはや嘘と言うよりは手の込んだ悪戯なんじゃ・・・。
僕はため息をつきながら、姉さんに促されつつ部屋に入った。

「ま、そこらへんのソファに座って・・・飲み物は・・・」
「あぁ、オレンジジュースで良いよ」
「オーケー。あたしはコーヒーでも淹れるわね」
姉さんは戸棚の中からインスタントコーヒーを取りだしてマグカップへと適量を落とす。
僕は姉さんを待ちながら、一体何の用事なのだろうかと考えを巡らせつつ
久しぶりに姉さんと二人きりで話ができる事にうれしさを覚えていた。
両親を亡くした僕にとって唯一の肉親だ。
僕は、チラッと姉さんの後ろ姿を見る。

スラっとしたボディラインは昔から変わらない。
一見どこにでもいそうなすこし茶目っ毛のある女性だが、
その背中が、時折見せる鋭い眼光が、
数多くの死線や修羅場をくぐりぬけてきた事を感じさせる。
威厳があるっていうのかね。
いや・・・ちょっと違うかな？
全く日本語は難しい。
「あら、何笑ってるの？　はいオレンジジュースね」
「いや、何でも・・」
姉さんはソファの前の机にオレンジジュースと自分のコーヒーを置いて隣に座る。
僕は姉さんの質問を、サラッとかわした。
本当の事言ったらまた弄られるに決まっている。
流石にその事で弄られるのは、僕でも恥ずかしい。
僕は、その事から話題をそらすように尋ねた。
「それで、なんで僕を呼んだの？」
「あぁ、そうだったわね。まず・・これ返しておくわ」
姉さんは服のポケットから？ストライク・バーディ？を取りだす。
？ストライク・バーディ？はこの前織斑先生に渡したときと同じく真っ二つだ。
「それ、千冬から渡されたのよ。簡易検査の結果報告と一緒にね」
「で、・・簡易検査はどうだったの？　何か分かった？」
姉さんは静かに首を振る。
駄目だったか・・・。まぁ、僕も薄々感じてはいたけどね。
あ、でも姉さんがいれば。
僕は少し期待のこもった目で姉さんを見たが、姉さんはまたも首を横に振った。
「どうもね、アクセスを拒否し続けてるらしいのその子。
そんな状態じゃ、流石のあたしでも手の出しようが無いわ
下手に弄って、根幹のデータでも消失しようものなら最悪コアが使

えなくなっちゃうかもよ？」
・・・それは困るね。
でもこれで完全に詰んでしまった。
正直、姉さんがこの学園に来て驚いたのもあったがこれで
？ストライク・バーディ？の事が何か分かるかもしれないと言う期
待もあった。
だがその期待はここでもろくも崩れ去る。
「まぁまぁ、そんな落ち込まないで。
一応基本的なデータの抽出だけは出来たみたいだから
まぁ、ほとんどダメ元だけどあたしの方でも色々と調べてみるから」
「そうは言うけどさ・・・流石にそろそろ本気で笑えない状況だよ？
今日も見たでしょ、ＩＳ実習でほとんどやる事の無かった僕の姿」
「あぁ、見た見た。機材用のカート持って走り回ってたわね」
姉さんは笑って言うが、あれはあれで結構な重労働である。
何せ運んでいたのがＩＳ用の銃器なのだからいくらカートでも重い
者は重い。
タイヤが付いていれば物を動かす力は十分の一になるとはいえ、元
が重たいのだ。
そんなのが十分の一になったところで・・。
「笑いごとじゃないよ・・。僕には？打鋼？も
？ラファール・リヴァイヴ？も反応しないんだから・・」
「・・・そういえばそうね」
「何が？」
急に声のトーンが変わる姉さんを不思議に思い
僕まで別の意味で声のトーンが変わる。
「何がって、だからその事よ」
「・・・その事って？」
「だから、あなたが？ストライク・バーディ？しか使えないって事」
「んん？？」
頭をひねる僕に、姉さんがため息交じりに言う。

「あなたね・・・。さっき自分で言った事に何の疑問も無いの？」
「さっき、言った事・・・・・何が？」
「その前よ！」
うぅん！？
その前・・。
その前って言うと・・・・
僕は頭の中で数話前の会話を思い出す。
？僕には？打鋼？も？ラファール・リヴァイヴ？も反応しないんだから？
・・・・・・あぁ。
ポンっと手を叩く僕を見てより一層大きなため息をつく姉さんだった。

以前、流石に実習ができないのでは、授業に出ている意味が無いと織斑先生が射撃武器の使える？ラファール・リヴァイヴ？を僕に貸与してくれた事があった。
でも結果は・・・。
動かなかった。
うんともすんとも。
ハイパーセンサーすら起動しない。
その後物は試しと？打鉄？にも搭乗してみたが結果は同様だった。
そう考えると確かに姉さんの言うとおり妙である。
どうして本来、ＩＳを動かせるものなら誰でも扱えるはずである量産機の二機を動かせないのに
専用機とはいえ基本同じ仕組みであるはずのＩＳコアを使用する？ストライク・バーディ？だけが
僕に反応するのか。
正直今までそんな事、難にも考えた事無かったな。
動くし良いかってぐらいの勢いでここまで来たから・・。

細かい事考えるのは得意じゃないんだよね。
「まぁ、あれじゃないの姉弟だからとかそういうのじゃないの？」
「と言うより、そもそも男のあなたがＩＳを使えてる事実に少しは疑問を持ちなさいよね」
「あははは・・・そうだね」
「全く、お気楽ね」
・・・この性格は姉さんに似たと思うんだ。
うん。
子が親に似る様に、弟は姉に似るんだよきっと。
「まぁ・・この話は別に今じゃなくてもいいわね。さて本題に入りましょうか！」
姉さんはなぜか立ち上がると、グッと両手を胸の前で握る。
しかもその目は、今まで以上に輝いていた。
・・・・ていうか、本題？
てっきり本題って、ＩＳの事だと思ってたんだけど・・・？
不思議そうに見上げる僕に姉さんは、ニヤっと笑って前かがみに自分の顔を僕の顔に近づける。
その距離はもう少しで鼻と鼻が接触するぐらいに近かった。
「あなた・・・明後日セシリアちゃんとデートよね？」
「で、デトデ、デート！？　ち、違うよ・・全くただの買い物じゃないか！」
「女の子が、男の子と二人で買い物するのをデートって言わないのかしら？」
「・・・いや、買い物でしょ？」
「・・・・わ、我が弟ながらどうしてこうも感性に乏しく成長してしまったのかしら・・」
今度は僕に背を向け頭を抱えて、ボソボソとつぶやいている。
ほんとに小さい声で、聞き取れないが何を言ってるんだろうか。
「姉さん？」
「あ、いやいや、こっちの話・・」

姉さんは僕に向き直るとコホンッと、声を整え人差し指をピンっと立てた。
「いい、アルディ。あなたが普通の買い物だと思っていても、セシリアちゃんからすればそれはただ単なる買い物じゃないかもしれない」
「はぁ・・・うん？」
いまだ生返事な僕に、姉さんは少々顔をヒクつかせながら言う。
「と、とにかく。ただでさえあなたは鈍いんだから、こう言う時ぐらいビシッと決めていきなさいよ？」
「に、鈍いって・・・」
「違うの？」
姉さんの鋭い眼光と言葉に、言葉を詰まらせる。
でもねぇ・・・。
いやだって、本当に買い物の約束をしただけだし・・・。
「はぁ、まぁいいわ。とにかくあなたみたいなのは行き当たりばったりが昔からのパターンなんだからこう言う時ぐらい計画をたてて――――」
「計画なら、まぁ立ててるけど」
「――――――え？」
姉さんと二人きりで話すのも久しぶりだが、ここまで抜けた表情の姉さんも久しぶりかもしれない。
「た、立ててるの？　計画を、あなたが？」
姉さんは信じられないという目で僕を見て、「まさか」「いやそんな・・」
といった事をブツブツとつぶやいている。
ちょっと酷くないかな。
僕ってそこまで行き当たりばったりでも・・・・
頭の中でこれまでのことを思い返してみる。
少し前のことは何の計画もなく飛び出して、
結果セシリーを守れたのはいいけど怪我した自分。

最近では何の計画もなく聡也が揉め事を起こしたことを無計画に聞きまくったっけ。
一度そういうことが頭に浮かんでくると、出てくる出てくる。
無計画行き当たりばったりの嵐。
・・・・あるな。僕そういうところ。
よくよく考えれば、まともに計画を立てたのってこれが初めてかもしれない。
もちろん旅行の計画とか大きい行事は別だけど、一個人としてこうやって小さい行事計画を立てたの事は記憶になかった。
「あのちなみに言うけど、計画って言うのは思い付きとは違うのよ？」
「いや、そんなまじめな顔で言われなくてもわかってるよ！？」
「あ、いやわかってないと思って・・・」
「まぁ、計画を立てたって言ってもめぼしいところをガイドブックとか読みながらピックアップしただけだけどさ・・」
僕は結構簡単に言っているが基本あの駅前の？レゾナンス？でまかなえると知ったとき地味に焦った。
せっかくいろいろ見て回りたいとセシリーに言ったのにあの建物だけで
行こうと思っていた喫茶店やお店などほぼすべての候補が消え去ったといっても過言ではない。
実際あのメモを作り上げるのに半日以上かかっているのだ。
途中何回挫折しかけたことか・・。
姉さんは僕の話を聞いて、目を丸くして本当に驚いているようだった。
「そ、そうなの・・・意外とあなたにしてはしっかり考えてたのね・・・」
もう、ほんとに一回この人叩いていい？
むしろアメリカなら名誉毀損罪で訴えられるレベルだよね？
僕は姉さんをジト目でにらむとオレンジジュースを一気に口に流し

込む。
口に広がる風味豊かなオレンジの酸味・・・・ではなく。
「けほけほっ!!　ね、姉さん!?　これ何!!」
な、なんか今ドロっとした苦味のある何かが口の中に入ったよ!?
姉さんを見ると、さっきの表情はどこへやら。
必死で笑いをこらえているようで口元をてで隠しながら顔を伏せている。
「ちょ、ちょっと何入れたのさ!」
口の中がオレンジジュースの甘みとわけのわからない苦味ですごく気持ち悪いんだけど・・・。
姉さんは必死に笑いをこらえながら震える手で、懐からコトリと何かのビンを取り出す。
これは・・・・。
そのビンのラベルにはこうあった。
?マーマレード?
しかも苦味の強いユズで作ったものだ。
そんなものをオレンジジュースの中に入れたのかあんたは!
「い、いや、まさか・・くくうっ、一気に行くとは思わなくてっ・・・くふふふッ」
「あーもう、言いたいことたくさんあるけど、とりあえず水は、水はどこにあるの!?」
「そ、そこの・・・ふふふッ・・テーブルの上にぃッ朝買ってきたペットボトルがあるわよ・・・っ」
僕は姉さんが、言い終わる前にここから少し離れた場所においてあったペットボトルに
飛びつくとキャップを乱暴に開けて、口に含む。
「ブーーーーーーーーーーッ!!!!」
「あはははははッ!!　ごめんなさい塩水だったわ!!
もう、だめ・・ふぅ・・お腹痛いッ!!」
・・・・もう頭きた・・。

僕は塩水の入ったペットボトルを持ったまま、ゆっくりと姉さんに近づく。
姉さんはまだそれに気がつかず、腹を抱えてバンバンとソファを叩いて笑い転げている。
僕は姉さんを見てにやぁっと笑うと姉さんが息を吸おうと顔を上げたところを見計らってペットボトルの塩水をその口に流し込んだ。
「んむぅ!?」
「ほらおいしいだろ、姉さん!!」
声は明るいが、僕はぜんぜん笑っていない。
むしろ怒りに燃えている。
大体初めっから、スピーカー使って驚かされーの入ってから散々ボロッカスに無計画だのをこれでもかといわれオレンジジュースにはマーマレードを入れられて口直しの水には塩。
これはもう、キレて良いレベルでしょ?
だが姉さんも伊達に世界第二位。、そしてアメリカの現役軍人をやっているわけではない。1
僕のペットボトルを持つ手を、グッと握力全開で握る。
いったいその細い腕からどうやってそんな力が出てくるのかわからないが、
とにもかくにも・・
「痛ったぁぁぁぁっ!!!!」
「ゴホッ、ゴホケホッ!　よくもやってくれたわね!?
どうしてくれるのよ塩水でベッチャベチャじゃない!
あ~あ~ぁぁ・・中のシャツまで・・下着が透けちゃってるじゃない!」
「いいだろ、そのぐらい!　そんなの見て欲情するのなんて猿かチンパンジーぐらいだよ!」
「なんですってぇッ!!」
そこからは、まぁひどいものだった。

武器はペットボトルと塩水と、姉さんがどこからともなくスッと取り出した
ライター型の拳銃のグリップエンド。
それで、叩く殴るかける蹴る。
そして気がつけば、二人とも床に仰向けに床に寝転がっていた。
あたりにはものが散乱して、お互いに服ははだけたり、濡れたり。
ただ、なぜだかすごく・・・そう楽しかった。
「ハハッ・・・」
そしてどちらからともなく笑い声が上がる。
それを皮切りに、互いに笑いあった。
理由はきっとお互いに同じ。
楽しかったからだ。
僕は久しぶりに姉さんと話して、久しぶりに姉さんの抜けた顔を見て
久しぶりにだまされて・・・そして久しぶりに姉弟喧嘩をした。

「それじゃ、また何かあったらいつでも来なさいな。授業以外だったら職員室よりも
こっちに戻ってきてるはずだから」
「うん・・・」
僕はうなずくと、改めて姉さんの顔を正面から見る。
姉さんはその意図がわからずに少し首をかしげた。
「ん、どうかした?」
「いや・・・なんでもないよ、それじゃ」
僕は、姉さんにきびすを返して自分の部屋に向かって歩く。
そして姉さんが自分の部屋のドアを閉めた音を確認して、
ゆっくりとその部屋を一瞥してつぶやいた。
「ありがとう、姉さん」
それは何に対するありがとうなのか・・・。

学園にきてくれてありがとう？
無計画な僕を心配してくれてありがとう？
いや、喧嘩してくれてありがとう？
それとも、単純に僕の近くに来てくれてありがとう？
・・・フフッ、あながち全部間違いじゃなかったりしてね。
僕は姉さんの部屋に向かって軽く頭を下げてから自分の部屋へ足を進めるのだった。

僕が、ちょうど自分の部屋の階の角を曲がったときだった。
どこからか、二人組みの話し声が聞こえる。
僕は、それが気になりあたりを見渡すが・・・。
声はすれど姿は見えず・・・か。
この寮にはそういう怪談でもあるんだろうかね。
ただこれが、夜や深夜で消灯されていたらそれなりに怖かったがまだ放課後で日も落ちきっていないしなにより明かりは煌々とついている。
ふむ・・・怪談じゃないってなると・・・どこにいるのか・・ん？
僕は階段の前で話し込む二人の影を見つけ、素早く物陰に身を隠す。
そこからそっと、のぞくとそれは結構意外な組合せだった。
・・・鳥越先輩と・・・聡也？
確か昼休みのとき先輩は後でいろいろ聞かれるのがいやだとか言ってたけど・・。
なんだ、結局聞かれてるんじゃないか・・。
でも・・・何の話をしてるんだ？
僕は二人の会話に耳を傾けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・本当なんだな？」
「はい、うそなんてついてませんよ」
聡華は聡也の言葉を聞いて、納得いかない顔で頭をかいた。
聡華が聡也に問いただしていたことそれは、他でもない。
あの襲撃者についてである。
聡華はアルディ達にああは言ったものの、やはり自分とそっくりな人物が全く同じＩＳに乗っているという事は気分がいいものではなかった。
だから、聡也を呼び出したのだ。
あの襲撃者と同じ顔の自分を姉と呼んだのだ。
知らないとは言わせない。
しかし聡華が聡也から聞き出せた情報は期待していたほど多くはなかった。
特に聡華が聞きたかったのはあの“紫燕”の事だ。
絶対数が決まっているコア。
そんな貴重な物を使ってわざわざ同じ機体を作る意味がわからない。
聡也に聞けば、そのあたりも分かるはずだと踏んでいた聡華は完全に当てが外れた格好だった。
「いや、でもよ・・・だったらおかしいじゃねぇか。
あれは完璧に“紫燕”だったんだぜ？」
「そんなこと仰られても・・・僕だってもう何がな何やら・・・」
「なぁ、ほんっとに何にもしらねぇのか！？」
聡華は同じような返答に苛立ちながら語気を強めた。
そうして語気を強めても答えが返ってこないことぐらい分かっているが、それが余計に聡華を苛立たせる。
元々沸点の低い聡華は、何か一つきっかけでもあれば手を出しそうなほどだ。
だが今回は自分から呼び出している手前それもできない。

苛立ちが頂点に達しようというとき、背後から声がする。
「なるほど・・・珍しい組み合わせで
中々面白そうな事話してますね。先輩？」
物陰から現れた人物は昼間あったアメリカ人。
ん、待てよ。
コイツなら・・・。
聡華はとりあえず、完璧に八つ当たりと自分で理解しながら
先ほどまでの鬱憤を晴らすかのように思い切りアルディをぶん殴る。
ゴッ！！
「あいたッ！？」
殴った鈍い音とアルディの間抜けた声がその場に響いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

え、な、何！？
なんで登場しただけで殴られたの！
それにものすごい音がした気がするんだけど！？
僕は涙目で鳥越先輩を見る。
鳥越先輩は、何かさわやかな顔でサラリと言う。
「いや、タイミングが良かったからだな」
「た、タイミング！？」
「あー、後は・・・そうだ、あれだあれ。盗み聞きした罰だ」
凄く取って付けたみたいな理由だな。
まぁ盗み聞きしてたのは事実だけどさ。
「あの、アルディ。あなたどこら変から聞いていたんですか？」
「う～ん、間違いないのか～あたりからだね」
「丁度、コイツがあたしに説明し終わったあたりからって事か。
・・・・てめぇマジだろうな、その話」
鳥越先輩は腕を組んで訝しげな目で僕を見る。

何時見ても、この鳥越先輩の目つきは慣れない。
特に正面は下手に目を合わせると何か飛んできそうで怖い。
僕は下手に話さず、コクコクとボブルヘッド人形のようにコクコクと頷いた。
「・・・ならいいけどさ」
ようやく納得してくれたようで、鳥越先輩は腕を組み直して聡也に向き直った。
聡也もその様子を見て少し笑った後、僕に尋ねる。
「そう言えばさっき、面白そうな事って言ってましたけど・・途中からしかも、後半も終わりの部分しか聞いてないのに内容分かったんですか？」
「まぁね、？紫燕？ってキーワード聞けば大体どんな話していたかは」
まぁ十中八九あの襲撃者についてだろうね。
でも少々意外だったのは、何度も言うがこの組み合わせである。
「それより、この組み合わせは・・・何、また聡也から声をかけたのかい？」
「今回はあたしからだ」
顔を動かさずに、ぶっきらぼうに答える鳥越先輩。
これはこれは、更に意外だった。
あんなに、聞きに来られるのを疎んでたのに。
「ピットで？ホワイトアウル？の調整をしてたら、先輩が来られて・・・」

「おい」
「・・・あ、姉さ・・鳥越先輩」
「お前、ちょっと時間あるか？」
「まぁ・・もう少し時間がかかりますけどこれが終わってからなら・

・」
「じゃぁ、ちょっと後で寮まで来てくれ」

「って感じで、呼びだされました」
う～ん・・・。
聞く人が聞けば、ちょっと怪しい妄想をかきたてちゃうかも・・。
「・・・それはねぇだろ」
大丈夫、もう僕はあのポーカーフェイスのテキストは捨てたからね。
さてちょっと予想外な事だったけど、いまはそれよりさっきの話だ。
僕は、一度わざとらしく喉を鳴らして改めて切りだした。
「で、さっきの？紫燕？の話だけど・・もう一度確認しますけど先輩。
本当にアレは？紫燕？だったんですか？」
「あぁ、間違いねぇ。あの色、あの機動力・・・どこをとってもありゃ？紫燕？だ」
「それは、僕も同じ意見ですよ」
「あれ？　聡也ってあのＩＳと戦ったことあったっけ？」
「ここだけの話なんですか・・ここに転校する前から僕はあの二機と何回か戦った経験があるんですよ」
なんだって？
それは初耳だけど。
よくよく思い出してみれば、あの黒いＩＳが襲撃してきた時まっ先に聡也を狙ってきた。
既にシールドエネルギーもゼロで簡単に倒せるロッソがそこに居たのに。
あの時はただの時間稼ぎかとも思ったが、ひょっとしてあわよくば聡也を落とす気で
黒いＩＳはアリーナに飛び込んできたのかもしれないな・・。
と、いきなりどこからともなく声がした。

「・・・・何が、ここだけの話？」
へ？
今何か声がしたような・・・・？
他の三人も聞こえたらしく、辺りを見渡している。
すると鳥越先輩が何かを見つけたようで、顔を思い切りひきつらせた。
「うえッ！？」
「え、何かいました！？」
鳥越先輩は、顔をひきつらせたままゆっくりと指をさす。
その方向は・・・・。ん？聡也の・・・・って。
「うわッ！」
あぁ・・・ありゃ駄目だろう・・。
あの目は・・・。
「え、あ、え？　な、何ですか！？　何がいるんで・・」
まだ良く事態をつかめていない聡也だけが、キョトンとした顔で僕たちの顔を見ている。
だがすぐに聡也にもなにがあったのか理解した。
背後に目をギランと光らせた先ほどの声の主にガッと肩を掴まれたからだ。
「・・・・ねぇ、何がここだけの話なの？」
「ろ、ロッソ・・・・な、何の事でしょうか。別に僕はそんな事一言も・・・・」
「・・・・そう。ならその身体に・・・聞くしかねぇなぁ・・あぁ？」
ロッソが右腕を部分展開した事で、ＩＳを起動した状態になり性格が豹変する。
その目はもう先ほどの非じゃないぐらいギラギラと光り右手に持つ蛇腹剣（テンポラーレ）が
ジャランと鈍い鉄の擦れる音を奏でる。
「なんで、そうなるんですか！？　あなた最近、僕に対する暴力酷

いですよ！」
「こらぁな、暴力じゃねぇんだよ・・・言うなりゃアレだな愛の鞭だ」
「旨く言ってるつもりでしょうけど、その鞭は一度当たれば即死の代物ですからね！？」
あーあ。
これは、止められないと言うか止めたらこっちも殺されそうで怖い。
だがそこへ、鳥越先輩が物おじせず間に入った。
「おい、ＩＳの無断展開は寮の規則以前に学園の校則に大きく反する」
「おいおい、その程度であたしが止まると思ってんのか？　部外者は引っこんでろって・・」
「今から三秒数えてやる・・・それまでにＩＳを閉じろよ・・良いな？」
鳥越先輩は、反論するロッソを無視してカウントを開始する。
「三・・・・」
「だから、関係ねえだろお前はよ、あぁ！？」
「ゼロ」
「「早ッ！？」」
「へぶっ！！」
僕と聡也の声がかぶり、ロッソが鳥越先輩の顔面パンチで吹き飛ぶ。
三数えるとか行ってまさか残り二秒をすっ飛ばすとは思わなかったけど
まさか部分展開とはいえＩＳを起動した相手を殴り飛ばすとは・・・。
風紀委員の名は伊達じゃないってことか・・。
ロッソは殴り飛ばされた衝撃でＩＳが待機状態に戻り、
先とは打って変わって静かに、そして無表情にムクリと起きあがった。
「・・・・・ごめんなさい、ついカッとなった」

「・・・お前、ほんとその性格難儀だな」
ハハハハ・・・。
僕と聡也は笑うしかなかった。

「・・・・そう、あのＩＳの話をしてたの・・・・」
ロッソに聡也が一から説明したおかげで、
僕も盗み聞きしはじめた時点よりも前の会話の事を聞く事が出来た。
まぁと言っても、真新しい情報は無かったけどね。
「あ、そういえばさ。ロッソお前あの黒いヤツと戦ったんだよな？」
「・・・・はい。戦いましたけど」
「そいつの顔見たか？」
そう言えば、あのＩＳは僕のと同様にバイザーが装着されている。
確かそれをセシリーが、レーザーライフルで吹き飛ばしていたな。
・・・あ、でも。
「ちょっと待ってくださいよ先輩。
確かにロッソはあの黒いＩＳと戦いましたけど
それを言うなら先輩だって救援にきた？紫燕？と戦ったんですよね。
その時に見なかったんですか？」
「あたしの場合は、相手がグッとあの野郎を抱えてやがったからな。
よく顔が見えなかったんだよ。何よりまだバイザーはつけたままだったしな」
「あぁ、なるほど」
「で、見たのか？」
鳥越先輩は、片目を閉じてロッソへ質問を投げかける。
そしてそれを受け取ったロッソは少し考えて・・。
首を横に振った。
「・・・見てない」
え？
「・・・私はその顔を見てない。私も光の加減でよく見えなかった

から・・」
「そうか・・・ふ～ん・・一体誰なのかねありゃ」
鳥越先輩は、指を組んだ腕の上でトントンとしながら考えを巡らせている。
本来なら、僕も先輩と一緒に考えを巡らせたいところだけど。
僕はチラッとロッソをみる。
一瞬だったけどロッソは右上を見た。
アレは右脳を使っている証拠。
右脳は直感や想像力をつかさどる部分だから、彼女は恐らく嘘をついた。
これ、結構見ないようにするの難しかったんだ。
まぁそれは良いとして。
ロッソが最後とどめを刺した時、敵のＩＳはロッソに至近距離で腕を取られていたんだ。
それで顔が見えないっていうのも流石におかしい。
・・・まぁ何にしても聡也、ロッソに救われたね。
「・・・・・先輩、そろそろ行っても良いですか？　私・・・・・聡也に用がある」
「ま、あたしも聞きたい事はあらかた聞いたしな。悪かったな、呼びだしちまってよ」
「あ、いえ」
「・・・・じゃあ行こう」
ロッソは言うが早いか、聡也の手を引いて踵を返す。
と、そこで何か思い出したように鳥越先輩は、二人を呼びとめた。
性格には聡也を。
「おい、悪ぃ。最後に一個だけ聞かせてくれ」
「え？」
「・・・・あの？紫燕？の操縦者・・・アレがお前の姉貴なのか？」
聡也は一瞬目を見開いたが、その後ゆっくりと頷いた。
「そうか・・・悪い引き止めちまって」

鳥越先輩もそう言い残してその場を後にする。
聡也達も消え、自然解散と言う形になったが・・・。
この問題、まだまだかなり複雑そうだな。
深まる謎。
それでも日は進んでいく。
明後日になればセシリーと買いものだしその先には臨海学校だってあるのだ。
・・・まぁ、いつも通り軽く行こうね、軽く。
大体この数日間出来事がありすぎて、普段あまりしない聞き込みやそこからのちまちました考えの構築なんてしてしまったが、やっぱり性に合わない。
僕は楽しく生きたいんだからね。
そう思うとフッと、どこからか身体の力が抜ける。
それと同時に僕はひと際大きなため息をついた。
肩肘張らずにのんびりと、楽しくにこやかに。
これがモットーさ。
それに、姉さんも言ってたけど確かにせっかくのセシリーとの買い物なのだ。
変に考えたりしてピリピリしてたら、セシリーも面白くないだろう。
ひとまず僕は、一度作った計画のメモを姉さんのところに持っていく事にした。
何言われるかわからないけど・・・。
これも失敗しないためだしね。

そして案の定・・・。

姉さんからもの凄いダメ出しを食らうのだった。

第２５話～深まる謎、それでも日は進んでく～（後書き）

あぁ、結局グダグダに・・・
どうもしるくです。

まぁ何にしてもようやく買い物編に突入します。

そして久しぶりにメンバーが出てこれそうです（爆ｗｗ

それでは２６話でお会いしましょう。

サヨナラっ！

第２６話：Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　～デート？　お出かけ？　尾行つき？～

ふんふふ～ん♪
セシリアは朝から上機嫌に鼻歌混じりで支度をしていた。
机の上にある開きっぱなしのセシリアの手帳には今日の日付がこれでもかと言うほど
赤ペンで塗りつぶされており、その下にはアルとデートと書かれている。
セシリアは、アルディが今日の事をデートと思っていないだろうなと言う事は予想できていたが
それでも自分にとっては誰が何と言おうと今日の買い物はデートである。
服はこれで・・・いやこっちの方が・・・。
いくらセシリアがお嬢様と言っても、まだまだ十五歳の恋する乙女。
やる事は普通の女の子と大して変わらない。先ほどからどの服を着て行こうかに迷い、
既にセシリアのベッドの上は何着もの服で埋め尽くされていた。
セシリアが、次の服へ手を伸ばした時その服が何者かによってスッと引かれ、
セシリアの手は宙をつかむ。
・・・？
不思議に思って振り返ると、そこにはまさにメイドという服を着たセシリアの幼馴染兼専属メイドのチェルシー・ブランケットが
先ほどの服を手に静かに立っていた。
「チェルシーでしたの。もう驚かせないでくださいな」
「いえ、その様なつもりは。ただお嬢様があまりに
悩んでおられるご様子でしたので少々助言をと思いまして」
「あら、そうでしたの、それは助かりますわ！」
セシリアはポンと両手を合わせて、目を輝かせた。

チェルシーは、セシリアにとって、大切な幼なじみと言うだけでなく心の機微に鋭く、
また色々と助け舟を出してくれる頼れるお姉さん的な存在だった。
「それで、お嬢様。既にこれだけの服をばらまかれておいでですが・・・。
既に何着か候補はおありですか？」
言われてセシリアは少しう～んと唸ってから服の山の中へ手を突っ込み二着の服を引っ張り出した。
それは一番最初に着て行こうと思っていた大人しい目のロングワンピースと、
ついさっき姿見で身体に合わせていた、淡い紺色の色を使ったノースリーブジャケット。
そのノースリーブジャケットには、中に着る薄手の半袖と七分丈のデニムが中に掛けられている。
チェルシーはその候補の中から即ノースリーブジャケットを選ぶ。
いつも大人し目大人し目と言っているチェルシーなだけにこのチョイスにはセシリアも少し驚いた。
「お嬢様、今日デートされる方は、サウスバード様でしたね？」
「え、えぇ」
「お嬢様こちらをご覧ください」
チェルシーはどこからともなく、小さなアルバムを取りだす。
セシリアはそれを受け取り、その中を見て目を丸くすると同時に顔が赤くなるのが分かった。
「ちぇ、チェッ！？　こ、これは・・・！」
「はい、これはサウスバード様のアメリカでの服装を写したものです」
チェルシーは顔を赤くしながら、食い入るように見るセシリアに淡々と告げる。
ちなみにこの時のセシリアはと言うと・・・。
こ、これがアルのアメリカでの服装・・！

結構ラフな格好が好みですのね・・でもそれがまた良いですわ！
制服姿も、似合ってますけど・・あぁ、この写真のアングルなどは絶妙ですわね！
・・・・と、こんな具合だ。
「この写真から分析するに、サウスバード様あはラフな格好を好んでおられるご様子。
とするならば今回はあのワンピースでは逆に大人し過ぎて不自然と判断します」
「なるほど・・・流石チェルシーですわ！　では早速着替えるとしましょう」
セシリアは服を抱えて、奥へと消える。
丁度今日、相部屋の女子は既に他の女子と買い物へ出かけていない。
流石にいくらチェルシーが幼馴染といえど、着替える姿を見られるのは恥ずかしいようだ。
そして数分後、その服を見事に着こなしたセシリアが颯爽と登場する。
「よくお似合いですよ、お嬢様」
「フフッ、ありがとうチェルシー」
そこまで言ってふとセシリアの頭の中に疑問が浮かぶ。
その様子に敏感に反応したチェルシーが尋ねた。
「お嬢様、どうかされましたか？」
「・・・チェルシー、さっきの写真ですけど。あれは・・」
「ローラ様から頂きました」
なる程ローラさんなら持っていて当然ですわねぇ。
・・・・これは、アルの写真を手に入れるまたとないチャンスでは！？
よし今度、ローラさんの所に行ってみましょう！
グッと拳を握るセシリアにチェルシーが更に油を注いだ。
「・・・・幼少期の物もあるそうです」
・・・・・・・・よし、忍び込んででも取ろう。

セシリアの心のうちが手に取るように分かる専属メイド（おさななじみ）はその様子を見て、実に楽しそうに笑うのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さて・・・こんなもんでいいだろう。
ぼくは、時計を見て鞄を肩にかけると部屋を後にする。
今日は、別に学生服じゃない。
白い薄手のパーカーにジーパン。
そして入学前アメリカからずっとかけてきたスポーツタイプのサングラスをかける。
このサングラスはファッションじゃない。
まぁ、僕の場合の色盲は別に要らないんだけどね、サングラス。
何が起きるかわからないしずっと愛用している。
一種の予防だよ予防。
・・・それはいいとして。
僕は部屋を出て鍵を閉めセシリーの部屋へと向かう。
確か時間は十時で、部屋に迎えに行く約束だったね。
僕は携帯の時計でもう一度時間を確認してから、セシリーの部屋へ急いだ。

コンコン
ドアをノックする音が、量の廊下に響く。
「セシリー、迎えに来たよ」
「あ、はい！　わかりましたわ、少しお待ちになって・・」
中からセシリーの声がする。
当然だけど。

声がしてから少し中でパタパタとか生活音がしてからガチャッとドアが開く。
「やぁ、セシリー行こう・・・・か・・・」
僕は思わず息をのむ。
元々セシリーは、スレンダーだから細見でスタイルも良い。
よく私服を着るとイメージが変わるというけど本当だ。
今のセシリーは、代表候補生セシリア・オルコットではなく
一流モデルセシリア・オルコットといっても過言ではないぐらいに・・・。

綺麗だった。
セシリーは、見惚れて言葉が出てこない僕を不思議に思ってラフィア生地の白い麦わら帽を軽く斜めにかぶり首を少し傾ける。
あぁ、ダメだって・・・。
それは反則だよ。
「あの、アル・・・どうかしまして？　・・・・っは！　も、もしかして私、どこか変でしたかしら!?」
セシリーはあわてて部屋に引っこもうとする。
それを僕はとっさに手を引いて止めると、無意識に言葉が飛び出していた。
「綺麗だったから・・・・・」
「え？」
「・・・あ、あぁぁご、ごめん変なこと言っちゃって！」
「い、いえ・・！」
互いに互いの顔を正面から見ることができない。
あぁ、もう・・・迎えに来て何言ってるのさ僕は・・・。
それから少し無言の時間が流れて、セシリーがおずおずと口を開いた。
「あ、あの・・」
「そ、そうだね・・時間ももったいないし・・い、行こうか・・」

僕は歩き出そうとすると、クイッとパーカーの袖をセシリーに引っ張られる。
「う、うん、　どうしたの？」
「その・・・ですから・・手を・・」
「手？」
「だ、男性が女性をエスコートするのは常識ですわ！　そう常識ですのよ！」
セシリーは、少し声高に言うと勢いよく手を差し出す。
ふぅ・・・やれやれ・・。
やっぱりお嬢様だなぁ。
僕はその手をゆっくりと取る。
「はい、これでいい？」
「そ、そうですわねでは、まいりましょう！」
迎えに来て十数分後、僕はセシリーの手を引いてようやく僕たちは寮を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

よし！いいわ、今のまぁ・・思わずって感じだったけど・・・
口に出ただけでも良しとしましょう。
ローラは、寮の物陰からアルディ達を見て心の中で興奮していた。
目的はもちろん、あの鈍感な弟とセシリアの？デート？が旨く行くかを観察するためである。
鼻息荒く興奮気味に自分の弟を見やるローラの後ろから、半ば無理やり連れてこられたある人物が
腕を組んで呆れながら声をかける。
「・・・なぁ、私はなぜこんなところに居るんだ？」
「あら、決まってるじゃない。あなたの生徒の恋路を見守るためよ」

「・・・ガキに興味は無いのだがな」
「何言ってるの、色々ガキっぽいのはなたもでしょ」
「・・・お前だけには言われたく無かったよ」
千冬は頭を抱えるがローラは気にしない。
ローラはアルディ達が見えなくなると千冬を促してその後を追った。
「ほら行くわよ、千冬」
「だから・・なんで私が・・」
「どうせ休日返上で根暗な生活送るぐらいなら外に出なきゃ」
「根暗って・・・」
「あ、それとも一夏君の方へ行きたかったかしら?」
ローラはクスッと笑って、無言で振り下ろされる拳をヒョイッと避けると
先にアルディ達を追いかけて行ってしまった。
それを見て千冬は、既に自分がローラに
巻き込まれて逃げ出せない現状にあるという事実を改めて感じるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

セシリーの手を取ってモノレールの駅までやってくる。
まだモノレールは到着していなかったが、改札をくぐってホームへと出る。
「モノレールか・・・初めて乗った時はなんか不思議な感じだったよ」
「そうですわね、アメリカやイギリスにはあまりない公共交通機関ですものね」
「なんかさ、レールが上にあるから足元がふわふわすると言うか・・・」
「えぇ、分かりますわ。私も初めて乗った時そうでしたから」

二人でたわいもない話に花を咲かせる。
結構久しぶりかもね。
この一週間はとにかく大変だったから。
聡也が転校早々問題を起こしたり、襲撃があったり、そして姉さんが来たり・・。
あぁ、でも姉さんが来た事は確かに驚いたけど
結果的にＩＳの事や、今日の事もアドバイスをくれたし良かったと思う。
ちなみに姉さんが僕に言った、アドバイス（と言う名のダメだし）は、
下手に色々なところを連れまわしてしまうぐらいなら何でもそろう？レゾナンス？で
楽しんだ方が良いというものだった。
だから僕は、これまで色々と挙げていた候補を削って
余った時間でゆっくりと？レゾナンス？内のショッピングや食事に当てる事にした。
話し始めて数分の後、モーター音と共にホームへモノレールが滑りこんでくる。
僕たちは乗り込んで、座席に座る。
そしてモノレールが走り出すと眼下に海が広がっていた。
もちろん見える景色に色など無いがそれでもなんとなく綺麗と言う事は分かる。
・・・・海か。
まぁ・・今日はその事は考えないで行こう。
僕は海から視線を外して、セシリーの方へ向き直る。
モノレールは、僕たちを独特の浮遊感で包みながら？レゾナンス？へ向かって走り続けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

良いわ良いわ！
自然よ、超自然！！
ローラはアルディ達の乗った車両の一つ後ろの車両に乗り込んで遠巻きに様子を見ていた。
もちろんだが千冬も一緒に引っ張ってきたので隣に座っているがその顔はローラとは真逆で
お世辞にも楽しそうとはいえないムスッとしたものだった。
「もぅ・・千冬・・・」
「あのな、無理やり引っ張り出されてどう楽しめと言うんだお前は・・」
「だから無理やりって発想がダメなのよ！　もっと前向きに、ポジティブにとらえないと」
「・・・・もうい・・・ん？」
唐突に千冬が何かに気がついたように一点を凝視する。
それにつられてローラが目線を動かすと・・。
「あら、一夏君にシャルロットちゃんじゃない・・」
「・・・なるほど、あいつらも買い物か」
フフフ・・・やっぱり気になるんじゃないの♪
千冬の目つきが少し変わったのを見てローラがニヤニヤと笑う。
「何、千冬。まさか実の弟に嫉妬でもしてるの？」
「ば、馬鹿な事を言うな！」
「ちょーっと！　声が大きいわよ！！」
思わず取りみだした千冬をローラが慌てて制する。
ばれたかなと聞き耳を立てると、一夏とシャルロットの声がした。

「・・・・・」
「どうしたの？　一夏」
「あ、いや・・・今、千冬姉の声がしたような・・・」
「いやいや、気のせいでしょ？・・・・・・

っていうか気のせいじゃなきゃ困るよ・・・」

ボソリと最後に言った言葉が少し引っかかるが、なんとかばれてはいないらしい。

ホッと胸をなでおろすと、ローラは千冬に詰め寄る。

「あなたね、ばれたいの！？」

「うッ・・・す、すまない・・？」

千冬が謝ってしまうほどにローラの剣幕はすさまじかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

い、今・・確かに織斑先生の声がしたような・・・？

シャルロットは再度キョロキョロと辺りを見渡すがそれらしい人影は無い。

気のせいかな・・・。

あ、でもよく考えてみれば、織斑先生がモノレールの中で馬鹿な事をって叫ぶわけないよね。

シャルロットはうんうんと、自分を納得させると隣に座る一夏を見た。

一夏は、シャルロットが女子として転校してきて皆が皆、

シャルロットと呼ぶようになったのでわざわざ呼び名を変えてくれた。

それは一夏にとっては、別に特別な意味は無いのだがシャルロットにとっては、

他のメンバーがいわゆる愛称で呼ばれていない中（鈴は仕方ないが）

シャルという愛称で

呼んでくれる事は、かなりうれしい事だった。

「なぁ、シャル」

「うん、なぁに？」

「こうやってみると結構、同じ学園の子乗ってるよな」

「そうだね、臨海学校も近いし・・・・皆考える事は同じかぁ・・」

ボソッと最後、本音が混じるが気にしない。

仮に考えている事が同じであってもこちらには、

愛称で呼ばれているというアドバンテージ（シャルロット主観）があるのだ。

そうそう簡単にその差をひっくり返される心配は無い。（これもシャルロット主観）

「あ、皆って言えば箒たちも誘おうと思ったんだけど・・皆部屋に居なかったんだよな。

シャル何か知らないか？」

ギックゥ！！

「へ、へぇ～み、皆居ないなんてほんとどうしたんだろうねぇ～」

シャルロットは冷や汗をかきながら言葉を詰まらせる。

実は・・・。

箒

「何！？　一夏が見知らぬ女と仲よさそうに歩いていただと！？

場所を言え、成敗してくれる！！！」

鈴

「なんですってぇ！？　一夏がどこの誰だかわかんないヤツと

朝ごはんを食べてたですって！？どこに居んの、教えなさいよ！！」

ラウラ

「何だと？　そうか・・・日本には水を浴びる修行と言う物があるのか・・・ふむ。

最近少したるんできている精神を鍛え直すとしよう。何、良い場所を知っている？」

と、実はシャルロットがまんまと一夏を連れだせたのは
綺麗に他の三人にデマを流して、ライバル達の目をそむけさせたから。
後が怖わいけど、一日一夏を独り占めできるんだもん。
その後の地獄は、なんとか耐えて見せるさ！
シャルロットは心の中でグッと拳を握って何度もうなずく。
ちなみにこれは内なるシャルロットの話で、外のシャルロットはいまだに冷や汗をかいている。
「おい、シャル？　どうかしたのか凄ぇ汗だぞ？」
「い、いや大丈夫だよアハハ、こ、この車内少し空調が効いてないんじゃないかなぁ～」
「・・・あぁ、シャルは汗っかきなんだな？」
「ま、まぁ・・・そう言う事にしておくよ・・」
下手に言い返して予想外の事が帰ってきても困るので
シャルロットはゴニョゴニョと語尾を濁してうつむいた。
いくら独り占めできても・・・振り向かせるまでの道のりはまだまだ険しいね・・・。
そう思わずにはいられないシャルロットだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「へぇ～ここが？レゾナンス？・・・初めてきたけどこりゃ凄いね・・」
僕は？レゾナンス？に入って一発目の感想がそれだった。
清潔感に満ち溢れた店内に綺麗に陳列される衣服。
そこで働く店員さんたちも、爽やかで対応も丁寧そうだ。
流石、ここ近辺最大級のショッピングモールの名は伊達じゃない。

「さて、ではまいりましょう」
「うん、そうだね・・どこから回ろうか?」
「どこって、決まってますわ」
首をかしげる僕にセシリーは微笑みかける。
「水着売り場ですわよ♪」

あー、目のやり場に困る・・・・。
正直言うと、アメリカでも水着売り場に行った事が無い。
理由は繰り返しになっちゃうけど、海には良い思い出が無いから。
って、今はそんな事関係なくて。
まぁ目のやり場に困るっていうのは水着売り場に来た経験の無さも多少はあるんだろうけど
何よりここ一帯にある水着が、すべて女性物という事だった。
「ねぇ、セシリー・・・なんだかすっごい場違い感があるんだけど・・・」
「あら、そうですか? 私は女なのですから別におかしくは無いと思いますが」
「いや、そりゃセシリーはそうだけど、僕は男だよ?」
「分かっておりますわ、別におかしくないでしょう。どの水着が良いのか選んでいただくために
一緒に居るのですから、何も不自然な事は・・・」
今サラッと凄い事言った!
選ぶ!?
僕が!?
ちょ、ちょっと待って・・・。
「僕そう言うのは、良く分からないよ」
「分かってますわよ、だから候補を私が挙げますから底荒選んでいただければ結構ですわ」
あぁ、なるほど・・・なら大丈夫かな。

セシリーはふんふ～んと鼻歌交じりに、水着を選定していく。
さて・・・セシリーが選ぶまで少し手持無沙汰だな。
キョロキョロと辺りを見回していると不意に声をかけられた。
「ちょっと、そこのあなた」
「・・え？　僕ですか」
「そう、僕よ。これ戻しておいてちょうだい」
そう言って見知らぬ女性はポスッと自分が引っ張り出したのであろう水着を僕に渡す。
まぁ、昔は男性が女性に向かってそう言う事やってたんだよね・・・。
それがＩＳの登場でこの逆転劇。ハハハ、笑えない。
とはいえ・・・。
う～ん。
まぁ、変ないざこざやもめごとなんて起こしたくもない。
「戻しておけばいいんですね？」
「あら、物分かりが良いじゃない、頼んだわよ」
言い残して女性は去っていく。
僕は渡された水着に目を落として、それを店員さんに手渡した。
店員さんは、気さくに対応してくれたがその一方で
先ほどの会話をセシリーが見ていたようでムスッとした顔でこちらを見ていた。
「アル、なぜ断らないのですか！」
「いや・・その特に理由は・・」
「そう言えば、アルがこの学園に来てからもう随分経ちますが、私アルが何かを断った所を見た事が無い気がするのですけど？」
「まぁ、そうだね・・あまり断らないね僕」
セシリーは、僕に半身の体勢で腕を組み、肩目で僕を一瞥する。
「全く、あなたも男でしょう？　プライドと言う物がありませんの！」
「プライドかぁ・・・・」

僕は少し考えて・・・・、ゆっくりと頷いた。
「そうだね、無い・・・のかもしれない」
「え？」
「良くわかんないんだけどさ・・・。
プライドって、要はどれだけ自分に自信があるのかって事だよね。
僕は、自慢じゃないけど今の自分に到底自信なんて持ててないんだ」
僕は痛いのも、怖いのもそれにいざこざで問題を起こすのも基本的に大嫌いだ。
出来れば、そんな物とは無縁の場所で過ごしたい。
だけど、そんな事は不可能だ。
学生といえど、社会に出れば否応にもそういう事態に直面する。
そこで必要となるのが、その痛いもの怖いものへ立ち向かうだけの強さ、自分への自信。
残念ながら、今の僕にそれがあるのかと言えば・・・答えはノーだろう。
昔から、何一つ僕は変わっていない。
それが良いと言う人もいれば・・・悪いと言う人もいる。
姉さんの嘘も、真似てはいるけどまだまだ物に出来てないし。
銃の腕だって・・・そんなには。
「まぁ、だから何だって話なんだけど・・・ね」
「・・・それでアルは良いんですの？」
「良いも悪いもないさ、それが今の僕だから・・・どうしようも無いよ・・」
僕はバツが悪そうに頬を掻くと、半ば強引に笑顔を作った。
「ま、まぁ、この話はこれで終わり！　さぁ、せっかくの買い物なんだから楽しまないと！」
「えぇ・・・そうですわね・・・・」
そう言って僕をみるセシリーの目はどことなくさみしそうだった。

◇◆◇◆◇◆

「うあっ！？」
苦笑交じりにそれを見て、スッと目を移動させると
そこには一層鋭さの増した千冬がローラも一歩引くぐらいのオーラでそこにいた。
「ローラ・・」
「はいッ！」
「・・・・悪いな、ちょっと急用ができた」
「ご、ごゆっくり～・・・」
ゆっくりと地を踏みしめる千冬の足取りが、ローラには地割れのエフェクト付きで見えた。
にしても、怒るとおっかないわねぇ・・。
まぁ、怒らなくても怖いけどね、千冬は・・・っと！？
いまだに少しさっきの千冬に気おされ気味で、また半歩後ずさった足に何かが引っかかる。
ちょ、なんでこんなところにコードが走ってんのよ！
ローラが引っかけたのは、どうやらそのわきにある自販機の物らしい。
ローラはなんとかバランスを取ろうとするが、一度崩れた体勢はいくら
ＩＳの世界二位でも立て直す事は出来なかった。
あーもう・・我ながら凡ミスね・・・。
ドッターン！！
そのまま盛大に仰向けに倒れた。
当然倒れた音は、周囲の注目を浴びるわけで・・・。
「ね。姉さん！？」
「ローラさん、どうしてこちらに・・・ッ」
見つかるわよねぇ。
そして・・・。
ジャラッ！！
「お前たち何をしている！」

「お、織斑先生!?」
「げぇッ！　千冬姉ぇ!?」
向こうは向こうで逆に見つかったようだ。
あーあ、静かに見守るはずだったのに。
多分あたしが転ばなくてもさっきの千冬のでばれてたわね・・。
あたしは、上下さかさまに弟たちを見ながら、頭の中で何と言い訳するかを考え始めた。

◇◆◇◆◇◆

「な、直してきます！　アル少し失礼しますわ！！」
な、なんだ？
姉さんがボソッと何かを耳打ちしたと思ったらセシリーが弾丸の様な早さで。
「姉さん、あのセシリーが・・・・って何その顔・・」
「フフフ～ン・・・ちょいとここいらで一つあなたに確かめたい事があるのよ」

僕はそのニヤついた顔を見て、どうも良い予感だけはしなかった。

第２６話：Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　～デート？　お出かけ？　尾行つき？～

ようやっと、ショッピングまでこぎつけたぞ！

どうもしるくです。

最近虫歯が・・・
情けない事に歯医者が大の苦手で・・・

あーでも行かんともっとひどい目に・・・。
ふぅ。
さて題名ですがＳｉｄｅＳｔｒｉｋｅと少し変更させていただきました。
これはアルディ側を示すタイトルとなります。
急遽すいませんがショッピングを二つの視点に分ける事にしました。
面倒くさくてすいません・・。

そんな感じでまた２７話で会いましょう。
サヨナラッ！！

「全く、お前たちは何をやっている！」
千冬に見つかったシャルロットと一夏は、店の中にもかかわらず正座させられていた。
既に発見されてから数十分はこうして座っている。
「異性交遊するなとは言わん。だが時と場所をわきまえろ」
あ～あ・・シャルロット足しびれてそうだなぁ・・・。
一夏達は、正座したときに靴が自分のズボンや服を汚さないように一度靴を脱いでから座っていた。
そのため、シャルロットが何度も何度も足をモゾモゾさせているのがよく分かった。
実際シャルロットはと言うと・・
うぅぅ・・まさか織斑先生がいたなんてぇ・・。
それもこんなところを見つかっちゃうし。
そ、それに何より、この座り方あ、足が痺れて・・
って駄目だ駄目だ！いま変な動きをしたら、それこそ鉄拳制裁が飛んでくるにきまってる！
・・・それだけは絶対に避けないと。
と、とにかく、頑張って耐えてこの危機を乗り切らないと！
・・・といった感じで、足の痺れと織斑先生の説教の板挟み状態。
そのどちらもが、無視できないだけにシャルロットにとっては一夏以上の苦痛である。
そんなシャルロットの思いを知ってか知らずか一夏はふと、悪戯をしたくなった。
良く言う怖いもの見たさではないが、こうしたらどうなるんだろうかというごく素朴な疑問から生まれたものだ。

一夏はいまだ小言を続ける千冬の目を盗んでチラッとシャルロットの足をみる。
その足はさっき以上にモゾモゾさせており、かなり痺れているようだった。
一夏はその足にソーッと手を伸ばし・・・・・・。
つーん
「うわひゃぁぁぁぁっ!!!」
一夏がその足を人差し指で突くと、シャルロットは素っ頓狂な声を上げて
天井に届きそうなぐらい飛び上がる。
そしてすぐに・・。
「やかましい!!」
ゴッ!!
千冬の鉄拳の餌食になった。
「・・・うぅぅ・・・酷いよぉ・・一夏ぁ～」
「わ、わりぃまさかそこまで、驚くとは・・・・・!?」
涙目で訴えるシャルロットに苦笑いで返す一夏だったが、
その笑いも長くは続かない。
今のシャルロットの?酷いよぉ・・一夏ぁ～?は
シャルロットに余計な事をしたのは一夏だと千冬が理解するのに充分すぎる情報だった。
一夏は一気に顔が引きつるが、その頭に問答無用で?二発?の鉄拳制裁が下った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

な、なんだか今もの凄い音がしたような・・・。
「こら、アルディどこ見てるの・・視線をそ～ら～さ～な～い～！！」
姉さんは僕の顔を両手で強引に固定すると、自分の顔へ向けさせる。
首が痛い・・ッ
「全くセシリアちゃんが帰ってきちゃうでしょ　時間が無いんだから」
「はいはい、分かったよ・・・で、聞きたい事って言うのは？」
どーせ、ろくなことじゃなさそうだけど・・。
まぁ多分学校生活はどうとかそこらへんだろう。
「あなたセシリアちゃんの事、どう思ってるのかなぁって」
ほら、予想通りセシリーの・・・・・え？
うん？・・き、聞き間違いかなぁ・・・もう一度。
「ご、ごめん、良く聞き取れなかったみたい・・もう一度言って？」
「あなた・・耳まで遠くなったの？」
「いいから・・」
「だからぁ、セシリアちゃんの事どう思ってるのかなって聞いたのよ」
どうやら聞き間違いじゃなかったらしい。
姉さんは本当に、セシリーの事を僕に聞いているようだ。
・・・・ってセシリー！？
ど、どういう事、え、何！？
「どう思ってるって・・何が？」
「だから、そのままの意味よ！　ほら色々あるでしょう？」
「色々って・・何？」
「あぁぁもう！　我が弟ながらなんて鈍感なの！」
姉さんは髪をかき上げながら、苛立っていた。
いや、でもどうって言われても・・。
「はぁ・・・じゃあもっと分かりやすく聞いてあげるわ・・
セシリアちゃんの事好きなの、嫌いなの？」

「あぁ、そう言うことか・・そうだね・・好きだよ」
「あら、ホントに！」
「う、うん・・・」
姉さんは僕の両手をグッと握ると顔を近づけてくる。
その表情は満面の笑みだった。
「だって、セシリーは大切な友達だからね。嫌いになる方がおかしいでしょ？」
「ん、友達？」
あれ、姉さんの顔が固まったけど・・・・。
僕なにかおかしい事言ったかな？
「と、友達なの？」
「うん」
「でも好きなのよね？」
「好きだよ、大切な友達だからね・・・・・？」
小首をかしげる僕に姉さんは盛大にため息を吐いた。
だから何さ？
「あのね、アルディ。あたしが聞いてることはそうじゃなくてセシリアちゃんが好きか嫌いかって聞いてるのよ？」
「え？　いやだから好きだって・・」
「だから、そういう好きか嫌いかじゃないのよ！」
姉さんは、僕の両肩をつかむと激しく前後に振る。
頭が激しくシェイクされクラクラする僕に姉さんは、はっきりと言った。
「あたしが言ってるのは、セシリアちゃんを
恋人として好き勝手事を言ってるの！」
恋・・・・人？
・・・こいびと？
恋する人と書いて恋人・・・って。
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？
「ちょ、ちょっと姉さん！　何言ってるのさ！？」

「予想通りの反応ね・・・もう姉さんため息すら出ない」
姉さんは両手を肩から離して頭を抱えながらいう。
予想通りっていうのは・・よくわからないけど
つまり、姉さんが聞きたいことは・・・その・・
ぼ、僕がセシリーを好きか嫌いかっていうことらしい。
こ、恋人として。
いやでも・・・。
「あの姉さん、僕そんなの・・」
「わかってるわ・・・今までのあなたの反応を見てればね・・・。
自分でもよくわからないんでしょう?」
すべてを見抜いているような姉さんの言葉に僕は、うつむいてゆっくりとうなずく。
そんなことなんて一度も考えたことなかったし、仮にあったとしてもよくわからない。
心当たりはほんの数回あるが、それが好きだという気持ちかと聞かれればそれも違うような
違わないような・・・そんな曖昧なものだった。
「まぁ、あたしも人に言えるほど経験あるわけじゃないしそんな相手もいないけれど、
身近にそういう人がいるっていうのは本当に素敵なことだと思わない?」
「それは確かに思うけど・・・・。
でもあれだね。その言い方じゃ、まるで僕のすぐ身近に
僕のことを好きな人がいるみたいな言い方だね」
ガクッ!
姉さんが思い切りうなだれ、そしてどこからか何かが倒れる音もした。
へ? 何かまたおかしなことを・・・っていうか誰か見てる?
「あ、アルディ・・・・だからあたしはさっきからそう言ってるじゃない・・・」

「え!?　そうなの」
「・・と、とにかく・・・気を取り直して、もう一度聞くわよ
あなたはセシリアちゃんのことをどう思ってるの?」
・・・・待てよ。
・・・この話の流れからいくと・・・・。
ま、まさか!
「姉さん!　まさかその・・・ぼ、僕を好きな人ってセシリーのこ
となの!?」
「だからさっきから言ってんでしょうがっ!!」
ゴッ!!!
いったぁぁ〜・・・。
そんな何もグーで殴らなくてもいいじゃないか・・・。
「それで、どうなの?　やっぱりよくわからないとか言うんじゃな
いでしょうね?」
「あ、いや・・・・・う、うん」
正直そういうことを言われてもよくわからない。
そもそも、今日に至るまで恋人をつくろうとか、恋人ができたとか
そういった経験は皆無だ。
それに、僕自身そんな状態じゃなかったし・・・。
いや、それは言い訳になるかもね。
でもそういう色恋沙汰の経験がないのは事実だ。
人が人を好きになるというのは、意外に簡単らしい。
まぁ、その簡単なのがイマイチ僕にはわからないんだけど。
「まぁ、初めてのことだから戸惑うのは仕方ないと思うわよ。
でも・・・そうねあなた少し難しく考えすぎなんじゃないのかしら
?」
「難しく?」
「そう、要は人を好きか嫌いか。そこにいろいろこの人の好きとあ
の人の好きがどう違うとか
こう違うとか面倒くさく考えようとしていない?」

それは、あると思う。
セシリーは好きだ。
でもそれと同じぐらいみんなも好きである。
その好きという感情の違いなんてわからない。
ただ、好きである。
一緒にいると楽しいし、退屈しないから
すぐに時間が過ぎてしまう。
「そんなに難しく考えることなんてないのよ。乱暴に言っちゃうとね、あの人が好きだと
ただ一人に対してに好きという感情を向けるのがいわゆる恋なんじゃないかしら」
「ただ・・・一人に・・・」
「別にあなたが、誰を好きになろうときっと誰も責めないし責められないけど、
アルディに一途な思いを持つ子がいるって言うのは事実で、
あなたはいずれそれに答えなくちゃいけない日がやってくる。
そんな時でもあなたは、わからないって逃げちゃうの？」
「逃げる・・？」
姉さんはゆっくりとうなずくと、微笑んだ。
「そう、わからないって言うのは一種の逃げでしょう？
まぁ、あなたは昔から逃げるのは得意だったけど、絶対に逃げちゃいけない
時って必ず何度か訪れるものよ。それがどんな場合かはわからないけれどね」
さらっと人の痛いところを突いてくるあたりが、姉さんらしい。
・・・逃げちゃだめな時か。
それは、多分自分の思いを伝えるときなんだろう。
それがいつになるのかは、わからないけど・・。
姉さんは、ま、がんばんなさいよと話を切り上げひとつ息をつき、
きびすを返したが

ふと何かを思い出したように僕に再び向き直った。
「あと、もうひとつ・・・。あなたさっき自分に自信が持てないといってたけど」
「え？」
「それもまぁ、好きって事と同じことよ。まずは何かに気づかなきゃ。
あなた自身が何をしたいのかどうしたいのかって事にね」
姉さんはそれだけを言い残してその場を去る。
何をしたいのか・・・どうしたいのか・・・・。
僕はセシリーが帰ってくるまで、ずっとそのことを自問自答していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

な、何もあんな大きな声で二人とも叫ばなくとも!!
セシリアはアルディ達から少し離れた場所にあるベンチに座りながらチラチラとその様子をうかがっていた。
実はセシリアはここにローラがいる事を知っていたのだ。
と言うのも、この買い物の約束を取り付けた後の二人きりの会話で事前に打ち合わせをしていたのだ。目的はただ一つ。
アルディの今の本音を聞き出すためである。
セシリア本人が聞くと言う案も一度浮上したが、良く考えてみるとその方法は流石に恥ずかしい。
そこで、こうしてローラがアルディに聞くという形を取ったわけだ。
取ったわけだが・・・・。
それにしても、かなり目立ってますわね・・あの二人。
何せはたから見たら外人二人が、ショッピングモールで言い争っているのだ。

同じ国の人でも言い争っていたら、若干引くと言うのにそれが外国人だったら余計にだ。
も、もう少しこう、聞き方と言う物があるでしょうに。
確かにアルディのこう言った事に対する物分かりの悪さや鈍感さは嫌と言うほど感じてきたし見てきた。
セシリア本人だって、何度頭を抱えたか分からない。
・・・・・はぁ、まぁいいですわ。
セシリアはパッと頭を切り替える。
いま重要なのは、あの二人が目立っていると言う事ではなく話の内容だ。
やっぱりアルはよくわかっていませんでしたわねぇ・・。
それはおおよそセシリアが予想していた事だった。
実際だが、セシリア本人も誰かを好きになると言う事に最初は戸惑ったのは事実だった。
この感情が一体何なのか、それが良く分からなかった。
その感情が、恋だと分かるまでには結構な時間を有したと思う。
だからセシリアはこのアルディの言葉を聞いて内心ホッとしていた。
そりゃ一番は好きだって言ってくれる事だったが、分からないというならそれは少なからず
昔の自分同様、アルディがセシリアに対して抱いている感情が分からないとも取れる。
かなり都合のいい取り方ではあるが。
それでも嫌いと言われるよりは数倍・・いや数十・・数百倍マシである。
まだまだ、私も魅力が足りないのかもしれませんわね。
セシリアはフッと笑ってから、髪をセットし直してきた風に装いアルディの元へ足早に戻っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「お待たせしましたわ！」
セシリーが髪を正しながら、こちらへ駆け寄ってくる。
「あ・・」
ついさっき姉さんから、セシリーが僕の事を好きだと言う事を聞いていたためか
顔をまともに見ることすらできなくて、僕は思わず下を向いた。
「アル、どうかしまして？」
「いや、べ、別に・・何でもないよ・・何でも・・」
全く変に意識しちゃうじゃないか！
正直まだ好きとかそういう気持ちについては、まだ分からないし答えもまとまっていないが
少なくとも僕も男の子だと言う事だろう。
分かっていなくても、心が無意識のうちに反応してしまう。
「それより、アル先ほどの水着結局どちらが良いんですの？」
と、丁度いい感じでセシリーが話題を変えてくれた。
これは、少し助かった。
僕はもう一度あの、水着二着を思い浮かべた。
う～ん・・・色的には・・黒って言うよりもセシリーは青かなぁ。
それにその水着に、今日かぶっている白いラフィア生地の帽子なんかをかぶったら・・・。
うん・・・良いかもしれないね。
「僕は青かな」
「やっぱり、そうですか。私もあの青いビキニは少々派手さもありつつ
その中に、大人な雰囲気を感じる中々良いデザインだと思っておりましたの！」
「そうなんだ、まぁ、喜んでもらえたなら・・少しは役に立てるのかな」

「ンフフッ、少しではありませんわよ。さてそれでは少しお待ちいくださいな
お会計を済ませてまいりますので♪」
セシリーは言うと、嬉しそうに水着売り場の中へ走っていく。
僕はその後ろ姿を見ながら今度は姉さんが最後に言った事を考えていた。
?まずは何かに気づかなきゃ。あなた自身が何をしたいのかどうしたいのかって事にね?
何をしたいのか・・・。
どうしたいのか・・・。
何をどうしたいのかと言うのは、人間で言う所の
一番簡単でそれでいて奥深く、人が生きている数だけ
その選択肢があると言ってもいい問題だ。
身近なところなら、例えばお菓子を食べたいから、大きなところなら例えばあの国と戦おうとか・・。
そこには必ず明確な理由がある。
お菓子を食べたいのは小腹がすいたからとか、あの国と戦いたいならあの国には石油があるからとか。
その答えが出ないと言う事は、僕にその?明確な理由?とやらが無いからだろうか。
いや、実際無いのだ。
?明確な理由?が。
だから何をしたらいいのか分からない。
どうしたいのかも・・。
本当に何もかも中途半端な自分。
だけどこれが自分だししょうがない。
仕方が無いんだよなぁ・・・。
いざ、その答えを導き出さなきゃいけなくなったときに
僕は一体何と答えるのか。
答えなんてすぐに出るものではないのにそれでも尚僕は

それを考えずにはいられなかった。

「そう言えばそろそろお昼ですわね・・・」
フードコートから漂ってきた、いい匂いに言葉が誘われたかのようにセシリーの口を突く。
僕は近くにあった時計に目をやると、時間は既に十二時を回ろうとしていた。
言われてみれば僕のお腹もかなり減ってきたな・・。
「何か食べる？　・・・う～ん何が良いかな」
「私は、アルに合わせますわ」
そ、そう言われると困るなぁ・・。
セシリーって結構口が肥えてそうだし。
ファミレスっていうのもな・・・ん？
目に飛び込んできたのは、ファーストフード店。
ごく普通のハンバーガーやらポテトやらが売ってるんだけどその中にアメリカのソウルフードと呼ばれるものがあった。
要は、ジャンクフードなんだけどね。
もとはアメリカの奴隷制度時代を問うして生まれたアフリカ系アメリカ人料理の総称で、
これが？ソウルフード？と呼ばれるようになったのは六十年代半ばらしい。
この料理の特徴としてはまず全体的に高カロリーで、味が濃い。
それにまぁ、そのほとんどが結構見た目もインパクトがあったりするんだこれが。
ふ～ん・・・お、サコタッシュがある。
本来ソウルフードって言うのは単品でかじりつくものじゃないんだけど。
「セシリー、ここで良い？」
「ファーストフード店ですわね・・・まぁよろしくてよ？」

「あれ?意外とすんなり・・・・セシリーここはファーストフード店って言ってね
ハンバーガーとかポテトと夏が売ってる・・」
「私そこまで箱入りではありませんのよ・・・・
と言うよりもイギリスにもここの様なファーストフード店はあります!」
・・・それはすいません・・・。

僕とセシリーはそれぞれ、注文した物をトレーに載せて席に座る。
セシリーはホットケーキにサラダとアイスティ。
僕はハンバーガーとポテトにサコタッシュ。飲み物はオレンジジュースをそれぞれ前に置いている。
「アル、それはなんですの?」
セシリーが僕の目の前にある小皿に入ったサコタッシュを指さした。
あぁ、こう言うのはあまりイギリスでは無いのかもね。
「これは、アメリカの・・・言ってみればソウルフードって言うやつだよ。
まぁ今じゃどの国でも食べようと思えば食べれるけどね。
簡単に言うとトウモロコシと豆のバター炒めかな」
アメリカの開拓者が先住民族から教わったものらしいから、厳密に言えばこれは郷土料理なのかも。
まぁ・・なんでもいいや。
食べれるし。
「ふぅん・・・そんなものもあるんですの・・」
「あ、何だったら食べる?　別に僕は構わないけど」
僕は一さじすくうと、セシリーの口元にスプーンを持っていく。
セシリーはその僕の行動に少し驚いているようだった。
あぁ、サコタッシュって結構癖のある味と言えば味だからなぁ。
場所によってはバター入ってもほんと甘すぎるのもあるぐらいだ

から・・。
セシリーは少し、戸惑いながらもそのスプーンにパクリと食いついた。
僕もそのスプーンでサコタッシュを口に含んだ。
ふむ・・・。
ほんのちょっぴり、酸っぱいね。
・・トウモロコシの甘さ中和に入れたお酢の入れ過ぎかも。
だが不味くは無い。
「どう、セシリー　美味しい？」
僕は、セシリーに感想を尋ねるが当のセシリーはなぜか顔を少し赤らめて
ジッと僕が持つスプーンを見ている。
うん、スプーンに何か・・・・。
「どうかした？」
「い、いえ・・何でもありませんわ」
そう言ってそっぽを向くセシリーの顔はそっけなく言った言葉とは裏腹に
凄くうれしそうな顔をしていた。
・・・・一体、この短い間に何があったんだろう。

僕たちは、昼食を終えて一度？レゾナンス？を出た。
セシリーがどこか静かな場所でゆっくりしたいと言ったからである。
僕は頭の中でここら辺の大まかな地図を思い浮かべ近くに公園があった事を思い出したのだ。
そこで、僕はふと忘れものに気がついた。
「あ、しまった！　さっきのお店に携帯忘れたみたい」
「アル～何やってますの～・・」
「ご、ごめんちょっと取ってくるから待ってて」
僕はセシリーを入口付近に待たせて、先ほどのファーストフード店

に急いだ。

◇◆◇◆◇◆

取る。
そして盛大に転んだ犯人の前に、一人の男が立ちふさがる。
その男は、ディープブルーの髪に鋭くも優しさを内包した蒼眼の瞳を持つ少し小柄な男性だった。
服装は他のチャラ男たちと変わらない無地のシャツに薄手の上着を羽織って、
ジーパンをはくと言うラフなものだったが雰囲気がまるで他のチャラ男とは違っていた。
「くぅぅっ・・いってぇな・・・何にしやがる！　邪魔しやがってよぉ！？」
なんて滅茶苦茶な言い分・・・。
セシリアは流石に口には出さなかったが、呆れて開いた口がふさがらなかった。
それはその男も同様だった様で大きくため息をついてから犯人の胸倉をつかむ。
「お前・・・自分が言ってる事のおかしさに気づけ」
「な、何だと！？」
「だから・・・・頭冷やして考えろつったんだよ、このボケッ！」
ゴッ！
鈍い音がして犯人の鳩尾を正確に拳がえぐる。
犯人は悲鳴らしい悲鳴も挙げないまま気を失った。
「ふん、クズめ」
どさりと乱暴に犯人を落とすと、カバンを女性に返した。
そしてチラッとセシリアの方を見る。
「大丈夫か？」
「えぇ、まぁ・・・」
「そうか・・良かった」
男は静かに頷く。
そこへ丁度携帯を取り戻ってきたアルディが合流した。
アルディは、人だかりと倒れている男性を交互に見て茫然とした顔

で尋ねてくる。
「あの、セシリー何があったの？　それにこちらさんは・・・」
「あぁ、ちょっとした事件ですわよ。この方は・・・えぇと」
そう言えばこの人、まだ名前すら知りませんわよね。
セシリアが言葉に詰まっていると、その男は気さくに自己紹介をしてくれた。
「俺は山科（やましな）　兎束（とつか）・・まぁ、あいつらのリーダー・・・らしい」
なんでらしいなのか良く分からないが、まぁそう言うことらしい。
「で、その兎束が・・・何、どうしたの？」
「あの犯人を捕まえたんですわよ」
「へぇ～そりゃ凄いね・・」
「まぁ、日常茶飯事だしなこんな事」
あれ、日本って私が思っていた以上に治安が悪いのかしら・・。
そんな事を思っていると、どこからともなく警察官がやってくる。
「ありゃりゃぁ～、もう伸びちゃってるよ・・・う～ん、こりゃぁ・・・」
「あぁ、すいません・・・俺です」
兎束はこれまた気さくに警察官に話しかける。
いや気さくと言うよりは、もう友人とかそこら辺に反仕掛けているような感じだった。
「あぁ、ま、いいんだけどさ。捕まえてくれりゃなんでも。にしても毎度毎度すまんね君たちには」
「いえ、元々そう言う？お約束？でしたからね」
「さて・・・まぁ犯人は連行するとしてだ・・。
悪いね君たち、まぁ分かりきってるから確かめるまでも無いんだけれど・・身分証か何か持ってる？」
そう言って警察官は、胸ポケットから手帳を取り出す。
「身分証？」
「学生手帳でよろしいなら・・・」
二人はそれぞれ自分の鞄とポケットからＩＳ学園の学生手帳を取り

出して警察官に手渡す。
そして何やらメモを取ると、その手帳を二人に返しながら言う。
「へぇ～、君たちあのＩＳ学園の生徒さんかぁ。こりゃ凄い」
「そ、そうですかね・・・あんまり自覚ないけど・・」
「アル・・・・」
はぁ・・・もう少ししっかりしてくれないと困るのですが・・・色々と。
・・・・ん？
セシリアは視線を動かした先で、何やら考え込んでいる兎束を見つける。
「兎束さんどうかされまして？」
「・・・・・・」
「兎束さん？」
兎束はセシリアの二度目の問いかけに、いまだ何かを考えてうつむきながら反応した。
「ＩＳ学園ってやっぱりＩＳについて色々学ぶんだよな・・・？」
何を当たり前なと思いながらセシリアは頷いた。
「・・・そうか」
「どうかしたの？　何か悩み事そうだねぇ～？」
警察官と話し終えたアルディもニヤニヤ笑いながら話に加わってくる。
その顔には、面白そうな事見つけましたと書いてあるようだった。
彼は、アルディとセシリアの二人を見てまた少し考えた後、パンッと目の前で両手を合わせたあと
勢いよく頭を下げてこう言った。

「頼む、ちょっと力を貸してくれないか！？」

セシリアはこれから起こるであろうことはまだよくわかっていなかったが、

少なくとも二人きりの楽しいデートはここで終わりだと言う事はなんとなく予想できた。

第２７話：Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　～姉はいう、あなたは何をどうしたい？～

デートを引っ張って引っ張って。
でもこれは後々それなりに必要なフラグなのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分（おい

どうもしるくです。
もう少しこの、グダグダにお付き合いくださいね（爆
ここでようやくデートだろう・・
で、多分・・・・オーシャンズイレブンには・・・・
・・・・・３０話後半を予定しております（核爆
まぁ、それなりに展開も考えておりますからお楽しみに。
気長にお読みくださいね。
よろしくお願いします。

では２８話でお会いしましょう♪
さよならッ！

第２８話：Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　～少女は金太郎飴と共に、襲撃は轟音と共に

僕たちは兎束に連れられて、とある小さな変電所へとやってきていた。
僕はセシリーの手を引きながら、兎束の後ろをついていく。
足元は砂利で所々に中ぐらいの石が転がっている。
「足元気をつけろよ」
「ねぇ、ここに何があるの？」
「ついてこれば分かるさ」
「ですけれど、頼んでおきながら行き先も教えないと言うのは少々失礼ではありません事？」
セシリーは不機嫌そうに兎束に言う。
まぁ確かに・・・。
行先ぐらいねぇ。
しばらく細い道を進むと、そこにはプレハブ小屋が立っていた。
プレハブと言っても、中々大きく周囲にはさっき見たようなチャラ男が多くたむろしていた。
「お、兄貴お帰りっす～・・・って、兄貴カップル連れこんで何する気っすか？」
「お、なになに？　兄貴が襲っちゃう系!?」
僕たちを見た数人のチャラ男が、やんややんやと騒ぎ出す。
それを見た兎束は目を細めて、声を荒げた。
「馬鹿そんなじゃない。この二人は客だ。分かったら茶でも淹れてこい！」
兎束がぴしゃりと言うと、さっきまでの喧騒がスッと止みチャラ男たちが
テキパキと動き出す。
「すまんな、まぁ馬鹿だが悪い奴らじゃないんだ」
「はぁ・・」

「さ、こっちだ」
兎束は僕たちに耳打ちすると、プレハブ小屋の中へ僕たちを招き入れた。

中に入ると更にそのプレハブ小屋が広いと言う事に驚かされる。
十数人のチャラ男や女性がいると言うのに、まだまだスペースには余裕があった。
その中の一室に通された僕たちは、少しくたびれたソファに腰を下ろす。
そこへさっきのチャラ男が、お茶を持って入ってくる。
その容姿はラフなパーカーにダボついたジーンズに金髪でピアスまで開けていたが
慣れた手つきで僕たちの前にお茶を置くと、気さくに笑ってから部屋を出て行った。
「・・あいつはまぁ容姿はともかく、家事全般は中々優秀なんだ・・・まぁ
容姿はともかくな・・」
「よく、人は見かけによらないっていうけど」
「まさにそれですわね」
セシリーも、この雰囲気に気を許したようで兎束に向かって微笑んだ。
・・・でだ。
まさか彼も、わざわざ家庭的なチャラ男がいる事を
僕たちに見せるためにここへ連れてきたんじゃないだろう。
それにつれてくる時？ＩＳ学園？について聞いてたしね。
「さて・・・それで僕たちに一体何の用なんだい？」
「あぁ、そうだな。ちょっと待っててくれ」
兎束は立ちあがると、出入り口付近にいたチャラ男達に声をかける。
そして二言三言話してしばらくすると、やけに裾の長いタンクトッ

プを
一枚羽織って腰辺りには黒いポーチを巻き、
そしてやや大きめの靴を履き茶色い髪をえんじ色バンドで束ねた少女が入ってきた。
目はやる気なく半眼で、なぜか口には金太郎飴をくわえている。
「ん～・・・兄貴～この人たちがそう？」
「あぁ、そうだ。紹介するよコイツは千葉（ちば）　志穂音（しほね）
ここで、情報処理を担当してるんだ。俺達の仕事やなんかもこいつが見つけてくる事が多いんだよ」
志穂音ちゃんね。
・・・って仕事？
「ねぇ、ちょっと気になったんだけどさ仕事ってなにやってるの？」
「そう言えば言ってなかったな、俺たちはここら近辺の自警団なんだよ」
「自警団？」
「そう、自警団。周辺地域をパトロールする代わりにここを使わせてもらってるんだ。
ほらさっきあった警察官いただろ。
あの人の知り合いがこの変電所の職員と知り合いでな」
なるほど。
ギブアンドテイクってわけね。
兎束たちがこの辺りを自警団として見回る代わりにここを貸してもらっていると言うわけか。
「丁度さ、その時変電所周辺でたむろする不良どもに頭を悩ませてたらしくて。
それを追っ払う代わりに、ここを貸してくれって頼みこんだんだよ
そしたら、思いのほか評判になっちまってさ。
これからも続けてくれるなら、長期間貸してくれるって話になったんだ」
「あの・・・兎束さん、あなた家は・・・」

セシリーの質問に一瞬顔を曇らせる兎束。
それをチラッと見ていた志穂音が、代わりにそっけなく答えた。
「ないよ、兄貴もウチも・・・ここに居るやつらぜーいん。
家も親もなーんもなし」
「え、それって・・・」
「まぁ、俺たちは孤児だからな」
「あ・・・すいません」
セシリーと僕はうつむくが、兎束は僕らの沈みかけた空気を笑い飛ばした。
「ハハハッ、そんなに沈むもんかね。俺たちはこれが普通だし、それはこれからも変わらないし・・。ま、下手に同情されるのは好きじゃないし
そんなの望んでもいない。それより今は、お前らを呼んだ理由を話さないとな」
「まぁ、兄貴らしいね・・・えーっと所で兄貴」
「あん?」
「この人たちの名前は?」
そこでようやく僕たちは、自己紹介をしていない事に気がつく。
もちろん兎束も。
「・・・・あ」
「やっぱ、兄貴らしいわ」
僕たちはその後、かなり遅めの自己紹介を行った。

「アルディと・・・」
僕はかたずをのんで見守る。
「ピクロスだっけか?」
「違うよ兄貴・・・セロリだよね?」
もう定番化しつつあるけど・・・。

「うぅぅ・・・アセロラと言われたりピクロスとかもう・・・アル・・・
私もうつかれましたわ・・」
「あぁ・・セシリーほら・・飴ちゃんあげるから・・」
「私は子供ではありませんわ！」
と言いつつ・・・あ、食べるんだ。
セシリーは飴を口の中で転がしながら、二人に向き直ると
兎束と志穂音も悪い悪いと、頭をかいた。
「それで、そろそろ本題をお願いしたいんだけど・・」
「・・そうだな、千葉アレは持ってきたか？」
兎束は志穂音に耳打ちすると、志穂音はポーチから数枚の紙の束を取り出して
机の上に広げた。
それを覗き込むと、どうやらその紙は何かの設計図のようだった。
「これは・・・・」
「数週間前、？きたるべき時に備えよ？って手紙と一緒にこの封筒に入って送られてきたんだ」
僕はその封筒を受け取る。
差出人は・・・無しか。
切手も何もないことから、直接ここへ届けられたものだろう。
僕が封筒を調べている間セシリーは志穂音と一緒に設計図を手に談議をかわしていた。
「ふむ・・・・これ・・・スナイパーライフルか何かでしょうか？」
「そうなんだよ、それ一見するとスナイパーライフルなんだけど・・・」
「その割には、スコープもありませんし・・」
「でもこれだけ長砲身となると用途はやっぱり、狙撃でしょ？」
あっちもあっちで頭を悩ませているようだった。
ふ～む・・。
そもそも、誰が何の目的でこんなのを送ってきたのだろうか。

しかもだ。
僕もセシリーもあの設計図を一目見ただけで分かった。
いやＩＳと言う物に触れていなくても一目で分かる。
あの設計図の武装は明らかに人が扱うには大きすぎる。
つまりアレはＩＳ用の武装と言う事になるわけだが。
それだと余計に不自然だ。
どうしてそんなものを、ＩＳとほとんど関係のないこの場所へ届けたのか。
その理由が皆目見当がつかなかった。
「それで・・・その、これは作ってみたの？」
「アル、流石に無理ですわよ。ここじゃ設備も・・」
「うん、作ってみたよ」
「「え！？」」
セシリーが何を馬鹿な事をと笑い飛ばそうとするが、志穂音がまるでプラモデルを作ったみたいに軽く頷き、僕たちは目を丸くした。
「こ、ここでこれを作れたのですか！？」
「まぁ、完成してないんだけれどね」
「それはどういう意味だい？」
「一応データとしてはね組み上がってるんだけど、使用者登録とかのソフト面もそうだし弾丸とかのハード面もまだ全然」
志穂音は、口にくわえていた金太郎飴をパキンと折って噛み砕く。
それに冷静に兎束が「飴は噛むもんじゃない」と突っ込みをいれている。
だがそんなのほほんとした二人とは対照的に僕たちはさっきの志穂音が言った事を良く理解出来ずにいた。
組み上がってるって・・・。
ちょっと待ってよ。
ＩＳの武装ってそんな簡単にできるものなのか？
だったら、国が莫大な予算を傾けて、または企業が大規模な工場を

持って
日夜研究しているのは何なんだろうか。
言っちゃ悪いが、ここはただのプレハブ小屋でＩＳという物を研究できるような
開発できるような機材が揃っている様には見えないし。
・・・そんなところで・・一体どうやって。
僕は彼女に怪訝なまなざしを送ると志穂音はムッとした顔をする。
「あー、信じてないんだー」
「だって、いくらなんでもこんなところで・・・」
「いーよじゃあ、証拠見せてあげるから！」
志穂音は勢いよく立ちあがると、僕たちをへやから連れだしどんどんと小屋の奥へ進んでいく。
「お、おい志穂音・・良いのか？」
「だって、しょうがないでしょ。信じてないみたいなんだから・・。
百聞は一見にしかず。見せた方が早いよ」
二人は声をひそめて、言葉を交わしながら僕たちを、
小屋の一角にあった階段の前まで僕らを案内した。
「ここを降りるんですの？」
「そうだよ、まぁウチに合わせて掘ったから少し身長高いときついかもね」
確かにその階段は小柄な志穂音が丁度入れるサイズぐらいのサイズで
僕もそれなりに低いけど、それでも身をかがめないと頭を打ってしまいそうだ。
身をかがめて階段を降りる事十数段。
そこは蛍光灯ではなく、上から配線やソケットがむき出しの電球が
数個ぶら下がっているだけで
隅っこの方は薄暗いが、中はかなり蒸し暑かった。
シャツの首元をパタパタさせている僕を見て志穂音が、
金太郎飴をかじりながらこちらを振り返った。
「ごめんね、ここ電球むき出しでそれだけでも暑いのに

更にそこにサーバーとかＰＣ繋いで動かしっ破だから余計に暑いんだ」

「だから、そんなに薄着なのか・・・」

「まぁね、さっき君たちに会うために上行ったらスースーしてかなわなかったよ」

「スースーってあなた・・・。もう少し女性なのですから・・」

とセシリーが注意しようと口を開いた傍から、志穂音はタンクトップの裾で自分を仰ぐ。

ハラリハラリと、裾が舞うたびにその奥の黒い布地が見え隠れして・・・。

鳥越先輩の時もそうだったけど、僕の周りって言うのはどうも、僕を男と思っていないのかそれとも女性としての自覚が足りないのか――――――って！？

ドゴンッ！！！

「アル？　・・・何を見てますの？　事と次第によっては・・・ね？」

も、もう殴ったあとで・・アレは・・不可抗力・・。

僕がうずくまりながら見たセシリーの顔には少なくとも三本は血管が浮いていたと思う。

「そ、それでこれが・・さっきの・・」

僕は気を取り直して（っていうかなんで僕が・・・）志穂音が操作する

ＰＣの画面を覗き込んでいた。

そこには確かに、データ上組み上がって量子化されたデータが表示されている。

「ですけど、おっしゃられた通りパラメータが滅茶苦茶ですわねぇ・・・。

実弾兵器ですから、出力調整はできませんけれど、所々にまだ無駄な情報があり過ぎて」
「これでも、結構減らした方なんだよ。ここでこう言う事出来るのって
ウチか兄貴ぐらいしかいないし・・」
彼も出来るんだ。
それは意外だなぁ・・。
ＩＳってその特性上どうして技術者の多くは女性だし。
「ま、その俺もここに籠ってもいられんしな。今日みたいにああいう事件も起きるし」
「け～っきょくウチがほとんど一人で組み上げたようなもんだしねぇ・・。
丸二日かかっちゃったよ・・」
いや、これをしかも一人で二日で完成させた君は凄い・・いやむしろ天才じゃないのかなこの子。
・・・と、ここまで話を聞いてまた一つ疑問が生まれる。
結局僕たちは何のために呼ばれたんだろうと言う事だ。
確かにここに、この武装の設計図が送られてきたと言う事は疑問だが、
既に武装もあらかた完成しているし、別に他にこれと言った問題は無いように思えるんだけど・・。
「ねぇ、僕たちは結局なんで呼ばれたのかな・・？」
「あれ、兄貴話してないの？」
「え、そうだったか？」
「・・・兄貴・・・」
兎束はすまんと頭をかくと、それを志穂音がジト目で睨みながら
僕たちに向かって説明を始めた。
「えぇとね、実はＩＳ関係の誰かを連れてきてって頼んだのはウチなんだ」
「ＩＳ関係の誰かって・・・っまた大雑把ですわね・・」

「あぁいや、この近くにＩＳ学園ってあるし結構簡単に見つかるかなぁ～なんて思ってたんだけど・・」
「まさかそんな偶然に、僕たちが出くわすとは」
自分って今まで変な事に首を突っ込むタイプだと思っていたけど、ひょっとしたら巻き込まれる体質もあるのだろうか。
それに今回はセシリーが初めに兎束に出会ったのだから、その効果範囲は周囲にも影響を与えるようだ。
だとするとそれは困るな・・・。
そのうち、動く迷惑発生機みたいなレッテルを貼られそうだ。
「で、ＩＳ関係者ならこの武装を展開できるんじゃないかと思ってね」
「それはつまり・・」
「そう、これを使える状態にしておきたいんだよ。
せっかく作ったんだからさ。それに？きたるべき時に？っていうのもあったし」
なるほどね・・・。
なんとなくだけど分かったぞ。
使える状態にしたいと言う事はつまり
備えもそうだけど、この子この武装の試射データが欲しいんだろう。
これを自力で組み上げられるだけの技術がある子だ。
データとちょっとのノウハウさえあれば、後は自分で構築できる。
要は僕たちキッカケ作りとして呼ばれたんだな・・。
「う～ん・・・ちょっと、でも難しいかなぁ」
「なんでだ？」
「私たちはＩＳ学園などの指定区域内でのみＩＳを自由に展開できますが、
学園外では国際条例にも抵触しますし・・・」
何よりこんなところで、展開なんてさせた日には国際法うんぬんの前に僕は織斑先生や
姉さんに殺されかねない。

どっちかと言えば、国際法で裁かれることよりそっちの方が僕には怖かった。
だってねぇ、どうあがいても実刑は待逃れないわけだし。
「まぁ、そんなことぐらいは知ってたけどね」
志穂音は残念なそぶりすら見せずに、新しい金太郎飴をくわえるとPCを操作してデータをメモリーカードへ落とす。
そしてそれを、僕に手渡した。
「だったら、持って帰って調べといてよ」
「はぁ!?」
いやいや、さっき?きたるべき時に?って言ったばっかじゃない。
それをなんで渡しちゃうわけ!?
志穂音はポキポキと金太郎飴を器用にかじりながら、あっけらかんと言う。
「いや、もう大体手順は分かったし・・・やれば徹夜で出来なくもないから」
「だけど・・」
「それに、もう一回作るなら色々情報があった方が良いじゃん」
それは確かにそうだけれど・・・。
あ、でも。
「それじゃぁ、そのきたるべき時って言うのは。それが急に来たらどうするの?」
「いや、急には来ないでしょ。きたるべき時にって言うんだから・・」
凄い判断基準だなぁ・・・それ。
「それにさ、きたるべき時が急に来るって言うなら、なおさら早く調整してもらわないと。違う?」
「う、うん・・まぁあそれは」
「だったらそう言うことじゃん」
「そうですわね?」

あれ、なんか上手く丸め込まれたような・・・。
僕たちはそのまま流されるような形で兎束と志穂音に、メモリーカードを押しつけられた。
あぁ、あと金太郎飴も。
中々アレは美味しかったね。

そろそろ日も落ちかけてきて、僕たちはプレハブ小屋を後にしようとしていた。
「今日は悪かったな、でも色々聞けたし何よりそのメモリーカードを渡せてよかった」
「渡されたって言うには結構強引な気もするけど・・・」
「というか、強引以外の何物でもありませんわ」
セシリーは少々ご立腹な様子で腕を組んでつんと顔をそむけている。
僕はセシリーをなだめつつ、兎束に言葉を返した。
「と、とにかく、あのデータは一度学園に戻ったら聞いておくよ」
「あぁ、迷惑かけるが・・すまん」
と、兎束が頭を下げて、いざきびすを返そうかという時だった。

ズズンッ!!
「「「・・・・!?」」」
その場にいた誰もが、目を丸くする。
今のは・・・!
「衝撃音だな、一体何だ!」
兎束がガラッと入口の扉を開けて外に出ると、ボロボロで所々に出血もみられる
チャラ男が兎束に倒れ込むように抱きついた。
「あ、兄貴・・・ッ!!」
「何だ、どうした」

「わかんねぇけど・・・急に壁が崩れてがれきが上から・・・」
崩れた?吹き飛んだじゃなくて?
ただ崩れただけなら、あんな衝撃音は・・・。
それにさっきのは、音と同時ぐらいに地面が揺れた。
とすれば、壁は爆発的事象で破壊された可能性が高い。
爆発的事象にまでは流石の変電所のコンクリートウォールも想定外だろうから
崩れても仕方ないが、それでもあの音でただ崩れただけと言うのが気にかかる。
威力を調整したのか?
僕は怪我をしたチャラ男に尋ねる。
「ねぇ、その崩れた壁の反対側って何があるの?」
「何がって・・えーっとあっちは・・・あぁそうだ車のよく通る大通りがあるな
人通りもこの時間だと結構・・」
ふむ・・・だとすると爆弾とか事前に火薬の量を調節できるものが使われたという可能性も低くなる。
そんなものを壁にしかけていたら目立ってしょうがないし。
でもだったら・・・。
僕が頭を悩ませている間に兎束はチャラ男をプレハブ小屋の奥へ寝かせ
こちらへ戻ってくる。
「どうだった?　何か他に聞けたかい?」
「いや、聞くに聞けなかったさ・・流石にあれだけボロボロだと・・な」
結局何も聞き出せなかったか・・・。
まぁ、仕方が無いね。
「それにしても・・・一体何があったのでしょうか。自然に吹き飛ぶはずもありませんし」
「そうだね・・・」

爆弾の線が消え、いよいよ僕の頭の中に考えたくない可能性が浮上する。
威力を瞬時に調整できて、尚且つ頑丈なコンクリートを簡単に破壊できる。
「・・・・セシリー」
「えぇ、私も今丁度、同じ事を考えておりましたわ」
もしもこの考えが当たっていたら、事態は急を要する。
ここには兎束をはじめとして十数人の一般人。
更に真横に変電所まであるのだ。
・・・・頼む・・当たらないでくれ・・・・。
僕はそう願いながら、グッと拳を握りしめる。
だが、そう願う僕らをあざ笑うかのように、
ゆっくりと世界最強の兵器?三機?が目の前に現れた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あーもう・・・どこ行っちゃったのかしらぁ～・・
確か、?レゾナンス?を出たところまでは覚えているんだけれど・・・。
ローラはアルディを探して、街中をウロウロと徘徊していた。
・・・否。
「って言うかここどこよ!!」
迷っていた。
はぁ・・やっぱり千冬と分かれたのは失敗だったわねぇ。
ローラは日本に来てまだ一週間もたっていない。
ましてや街中に出るのは初めてだ。
いくら案内板があるとは言っても、そのほとんどが日本語でローマ字でのルビなんてふっていない。

ローラは再び、大きくため息をつくと近くのベンチに腰を下ろす。
日はまあだ落ちておらず、人々が目の前を行きかう。
その誰もがチラチラとローラを見て行った。
整った容姿に加えてプロポーションもよく、更に綺麗な金髪をなびかせているのだから
嫌でも注目を浴びてしまう。
だが見られる方は、それほど気分が良いものでもない。
ローラは少しジト目で返してやろうかとも思ったが、ふとどこからか数人の女子の声が聞こえた。
「ねぇねぇ、あの人どこかで見たことない？」
「えー、あの女の人？」
「そうそう、どっかで見たことあるんだよねぇ～」
「・・・あ、思い出した！　あの人モンド・グロッソで・・」
あら、あたしの事知ってる日本人もいるのね。
まぁ見られてると言っても、別に悪い意味で注目されてるわけじゃないし・・・。
と、微笑みかけて・・・・
「織斑千冬にフルボッコにされたアメリカ人！」
「誰がフルボッコですってぇぇッ！！！！」
ローラは思わず声のする方向へ、周囲の目も気にせず叫んでいた。
まぁ負けたのは事実だからいいとして、フルボッコでは自分が千冬に圧倒されたかのような言い方ではないか！
怒りの矛先を向けられた女子数名はビクッと身体が跳ねる。
ローラは、ゆっくりとその数名に近づいていきそれは綺麗な、それでいて身の毛もよだつほどの笑みで語りかけた。
「ねぇ・・・誰がフルボッコにされたの、ん、ん？　ねぇ・・誰が誰にフルボッコされたの？」
「あ、いや・・・だから・・アメリカ人・・が」
「だぁれ？」
「その・・・」

はたから見れば、怪しい女性が女子達に詰めよっている、下手すれば警察を呼ばれかねない構図だ。
だが周囲のだれもがそれをしない・・・いや出来なかった。
・・・主にローラの出すオーラによって・・。
「お姉さん少し話があるの・・・こっちへ来なさい・・・」
反対すれば殺される・・・。
そう女子達も思ったのだろう。
ローラに言われるがまま物陰に入っていく。
その後しばらくして、その物陰から見つかった少女たちはひたすら
「僅差僅差僅差僅差・・・・・・」
と繰り返していたらしい。
事の顛末を知るとある通りがかりの男性は、こう思ったそうだ。
「負けた事や名前が出てこなかった事はいいんだ・・・」

ふぅッ、全く最近の子は失礼ね!
にしても怒りにまかせて歩いてきちゃったけど・・・
いよいよ?レゾナンス?まで見えなくなっちゃったわ。
ローラは夕暮れに照らされる大通りを一人歩く。
ここの道は、大通りと言う事もあって交通量も多く人の往来も多い。
さてさて・・・どうしましょうね。
携帯で千冬に電話・・・・・しても無駄か。
場所が分からないんじゃどうしようもないわね。
ローラは一度開いた携帯電話を閉じようとして・・・やめた。
ジッと携帯電話の待ち受け画面を見やるローラ。
そこには、楽しげに笑う自分と弟の姿。
・・・・。
ローラは近くのコンクリート製の壁に寄りかかる。
世話がかかるが、それがまた可愛い自分の弟。

自分で言うのも何だが、ローラにとってアルディは自慢の弟である。
だからこそ・・・。
だからこそ。
――――――――――負けてほしくない――――――――――
ローラはそう思ってしまう。
何に負けてほしくないかは言うまでもなく千冬の弟、織斑　一夏だ。
と言っても別に、自分たちみたいに戦って白黒つけろと言うわけではない。
精神的に、人間としてである。
もちろん技術的にも少しぐらい対抗してほしいところではあったが。
今は何もかもが、アルディは負けている。
多分、今ＩＳ学園に在籍する一年生の専用機持ちの中でも一番底辺だろう。
そこから這い上がって、頂点をとるっていうのも中々ドラマチックよねぇ。
だがそうなるには、まだまだアルディにはクリアしなければならない問題が山積みである。
特に、今日ローラがアルディに言った事はかなり重要なウェイトを占める。
・・・気づいてくれるかしらね。
いや・・・気が付いてもらわなければ困る。
それに気が付けなければ、アルディは小さな殻でまとまってしまいかねない。
世界第二位の弟なんだから・・・。
まぁ世界第二位とまでは言わないが、せめてＩＳ学園二位ぐらいまでには
なってもらいたいものだと思う。
ってそれじゃ、結局負けてるじゃないね。
ローラはフッと笑って、オレンジ色の空を見上げる。
綺麗な色ね・・。

これで夕日でも見えたら・・・ッ！？
不意にローラは、バチバチと何かが放電しているような音を聞く。
その音を聞いてローラは何かに気が付くとバッと弾かれたように壁から離れ声を張り上げた。
「みんな、壁から離れて！！！」
次の瞬間、ローラが寄りかかっていた高いコンクリートウォールが衝撃音と共に激しく崩落する。
崩落したがれきはそのほとんどが壁の内側へ飛ばされたが、一部のがれきは崩れた衝撃で
こちら側にも凶器となって降り注いだ。
ローラはかろうじてその餌食にならずに済んだが、ふと振り返った先に逃げ遅れた子供の姿があった。
こりゃ、あたし国際法廷に出廷かもね・・。
ローラは心の中でごちると、？ストライク・ミラージュ？を起動しほぼ展開と同時にリアスラスターを全開で噴かす。
そしてがれきの落ちる前に子供を救いあげると、瞬時にＩＳを待機状態に戻して
背中側から地面に着地した。
「ぐぅっ！」
スピードに優れる、？ストライク・ミラージュ？なだけに子供を助けるのには
充分な速さを確保できたが着地するには速すぎたようで、ローラは激しく地面にたたきつけられた。
それでも子供はしっかりと抱え込んでいたおかげで、怪我ひとつなかった。
ローラは子供を離して、痛む身体でよろよろと立ち上がる。
ったく、こんなところで？荷電粒子砲？ぶっ放すのはどこの馬鹿よ！？
ローラは、キッと攻撃のあった方面を睨む。

そこには、夕日を背に二機のＩＳが憮然と佇んでいた。

第２８話：Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　～少女は金太郎飴と共に、襲撃は轟音と共に～

さて一旦ここでＳｉｄｅＳｔｒｉｋｅは終了です。

この次はまた時間を戻して、今度は聡也とロッソのお話。
色々すっちゃかめっちゃかで、タイトルもつけにくいほどの散文とは呆れましたｗ

そんな感じで。
では次回Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌでお会いしましょう。
さよならッ！

第２９話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～商店街は思惑だらけ？～

僕は腕を組んでトントンと鳴らす。
チラッと腕時計を見やると、既に時刻は十時を回ろうとしていた。
ほんとに・・一体いつまで待たせるつもりでしょうか・・・。
僕が今いる場所は、ＩＳ学園の寮のロビー。
もうすでに一時間近くこうしてある人物を待っている。
ちなみに今日の僕の服装は制服ではなく、胸の右側に青のストライプが入った白いＴシャツにジーパンを履き、靴も外用に買った某有名メーカーのスニーカーだ。
どうしてそんな恰好で待っているかと言うと・・・。

それは僕が鳥越先輩に呼び出されたあの日までさかのぼる。
あの時、ロッソは僕に用事があると言って話が終わってから僕を寮のラウンジまで連れて行った。
そこで・・・。

ロッソは少しモジモジとしながら、何かを言いかけては辞めを何度も繰り返して、
そして何か、意を決したかのようにうなずくと、僕に向かっていつもより
少し大きな声で口を開いた。
「・・か、買い物・・・に付き合って・・・ほしい」
「え、買い物ですか？」
「・・・・うん・・」
「えぇと、何を買うんです？」
「臨海学校の準備と・・・・あと色々・・・・・」

そう言えば、もうすぐ臨海学校だったな、すっかり忘れていましたよ・・。

でも、色々って・・・・気になりますね。

「でも、臨海学校の準備なら僕がいないほうが買いやすいんじゃないんですかね？」

「・・・・・・・？」

「い、いやですから・・・ねぇ？」

「・・・・よく言いたい意味が分からない・・・」

小首をかしげるロッソに僕は少し言葉を詰まらせながら言う。

「だから・・えぇと・・・・・み、水着とかそういうのは、僕がいないほうが買いやすいんじゃないですかってことで・・・。ほ、ほら僕男ですし・・」

「・・・・そんなこと。それは大丈夫」

「へ？　だ、大丈夫？」

僕はてっきり、臨海学校の準備って言ったから、水着とかを買うものだとばかり思っていたけど違ったんでしょうか。

「・・・・・聡也に選んでもらうから」

「どうして大丈夫って言葉を使ったのか、日本人として小一時間問い詰めたいところですね！！」

・・・・とこんな感じで、日曜日の今日、僕はロッソと買い物に行くことになったわけで。

若干押し切られた感は否めなかったけど、約束したときロッソは嬉しそうに笑っていたからまぁ、嫌な気はしなかったけど。

・・・・けれど。

・・・にしても、ちょっと遅すぎやしませんかね。

ロッソさんよ？

◇◆◇◆◇◆

大きくため息をついてルームメイトはポンッとロッソの肩に手を置く。
そして大きく息を吸い込み叫んだ。
「とっとと行けぇぇっ！！！！」
ルームメイトは、？イグニッション・ブースト？も真っ青な速さでドアを開けるとポイッとロッソを廊下に放り出した。
「あ・・・・」
「いい、あんたねそんなんじゃ愛想つかされるよ！」
ルームメイトはそう言い残して部屋のドアをバンッと締めた。
ロッソは、ゆっくりと立ち上がるとボソッとつぶやく。
「・・・・・・愛想つかされる・・・」
確かそれは嫌われるとかそういう意味だった気がする。
「・・・・・それは、イヤ・・・うん、頑張る」
ロッソは、自分に言い聞かせるようにつぶやくとロビーへと急いだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

う～ん、遅い・・・。
って言うか、忘れてるなんて事は・・・・ありませんよね・・・？
だとしたら僕のこの一時間は・・・。
僕がうなだれていると、ロビーに誰かの足音が響く。
はぁ・・・ようやく来たようですね。
僕はその足音の方へ顔を向け声をかけた。
「ロッソ、何分遅刻――――――――」
「聡也、一夏見なかった！？」
「うえッ！？」
いきなり胸倉を掴まれる。

ちょちょと、なんで僕が怒られなきゃいけないんですか!?
また何か、僕癇に障るような・・・・・って。
「鈴?」
「他に誰が居んのよ!!　で一夏見なかった!?」
「い、一夏?」
どうやら鈴は、一夏を探しているらしい。
しかもかなり血相を変えて。
そこへ同じく血相を変えて飛んでくる人物が一名。
「おい、聡也一夏を見なかった・・・む、鈴?」
「箒、あんたも一夏を?」
「うむ、一夏が見知らぬ女と歩いていると聞いてな、所在を探しているのだが見つからん」
箒は鼻をフンと鳴らして、全くどこに居るのだと腕を組む。
しかし鈴は、箒の発言に首をかしげた。
「あれ、あたしは一夏が見知らぬ女性とご飯食べてるって聞いて飛んできたんだけど・・」
「何?　御飯だと?」
「えぇ、シャルロットから言われてね」
箒がピクリと反応する。
「お前もシャルロットから聞いたのか?」
「え、ってことはあんたも?」
「あぁ、つい二十分ほど前にな」
「あたしも二十分ぐらい前よ聞いたの」
そこまで言って二人の顔が、青ざめた。
そして徐々にそれが怒りの炎で真っ赤に染まっていく。
「ねぇ、箒・・・あたしたちさぁ・・・・」
「あぁ、そのようだな・・・ふ、ふふふ・・・・シャルロットめ・・・ふふふふ・・・」
鈴の拳はわなわなと震え、額には既におびただしい数の血管が浮き出ている。

箒に至っては、既に怒りの炎という表現など生ぬるい、たとえるなら・・・そうですね。
・・・マグマ！　そう怒りのボルケーノ状態！
うわぁ・・・話しかけたらとばっちり食いそうですね・・・。
静観するのが正解なんでしょうけど・・・、実は僕一夏がどこへい言ったのか知ってるんですよね・・。
ロッソを待っている時に目の前を通って行きましたから。
さて・・言うべきか言わざるべきか・・・。
と、う～んと考えたのが行けなかったようだ。
気が付けば、目の前の二頭の獰猛な獣は僕の喉元に、鋭い爪を突き付けていた。
「ふーふーッ！！　あんた何か知ってるわね！！」
「吐け！！　吐かぬならその首はねて、はらわたえぐり出してくれる！！」
なんで、寮にいて命の心配をしなくちゃならないんですか！？
二人に圧倒されて、上手く言葉が出てこないが、
このままだんまりは更に不味い事態を引き起こしかねない。
それだけは何としても避けたかった僕は、半ば叫ぶように言い放った。
「さ、さっき、目の前を手つないで一夏とシャルロットが歩いていきました！」
「ほぅ・・・・・」
「やっぱりね・・・」
二人は僕から離れると、ゆらりゆらりとまるで抜け殻のように寮の奥へと歩いていく。
「シャルロット・・・・オボエテオキナサイヨ・・・」
「ふ、ふふふ・・・ヒサシブリニ・・・チガミレルナァ・・・」
あの二人・・・・何かに取りつかれてるんじゃないだろうか。
僕はその後ろ姿を見てそう思わずには居られなかった。
「ん　どうかしたのか？」

そこへ今度はなぜだか白装束に身を包んだラウラがやってきた。
「・・・今度は何・・・？」
「今から、水行と言う修行をするのだが一緒にどうだ？」
「・・・・・・水行・・・・？」
「ちなみに場所は、噴水だぞ」
もう・・・いやだ。

ロッソがロビーに来た時には聡也は、まだ買い物前だと言うのに疲れ切っていたと言う。

気を取り直して、僕たちはモノレールで駅前まで出る。
駅前には？レゾナンス？という大きなショッピングモールがあるのだが、
やっぱり皆考える事は同じなようで、ＩＳ学園の見覚えある顔が結構歩いていた。
「・・・・・皆・・・・いるね」
「まぁ、仕方ないですよ。ここらへんじゃ一番大きなショッピングモールですからね。
で、えーっとどこから回りましょうか・・・」
僕が？レゾナンス？に入ろうと足を踏み出すと、クイッと手を引っ張られる。
「・・・・そっちじゃない」
「え？　買い物ってここでするんじゃないんですか？」
ロッソは僕の手を引っ張ったまま首を横に振った。
そして？レゾナンス？とは真逆の方向へ歩き出した。
確か、ロッソが向かっている先には商店街があったはずだ。
商店街に行きたかったのかな・・？

ロッソは、商店街の入り口までやってくるとピタッと立ち止まる。
そして商店街をじ~っと物珍しそうに見ていた。
「ロッソ、ひょっとして商店街初めてですか？」
「・・・うん。この前雑誌で見て・・・・行ってみたくなった」
へぇ・・・。まぁ僕もこの街の商店街は初めてと言えば初めてだけれど。
にしても、商店街と言う物はどこに行ってもあまり変わらない。
もちろん良い意味でだ。
活気にあふれているからね。
僕たちはゆっくりと歩きながら、左右の店に並ぶ商品を見て回る。
するととある店の前で元気のいいおじさんに声をかけられた。
おじさんは段ボールから、野菜を取り出して陳列している最中だった。
ここは・・・八百屋か。
「お、兄ちゃんデートかい？」
「え、いやいや違いますよ・・そんなんじゃありませんって」
「ハッハッハ、まぁ正直には言えねぇわな」
全く、デートって・・。
そんなんじゃないのに、ねぇ。
僕が同意を求めてロッソを振り返ると少し顔が赤らんでいる気がした。
「ん？　どうかしました？」
「・・・別に何でもない」
「兄ちゃん鈍感なのは嫌われるぜぇ？」
「・・・余計なお世話・・・」
ロッソが若干不満げに言い返す。
って言うか、鈍感？
僕が？
鈍感なのは僕よりも一夏やアルディだと思うけどなぁ。

ゴリュッ！！
「痛ったぁ！」
なぜかロッソに右足を踏みぬかれた。
「ハッハッハ、仲が良いねぇ」
仲が良いと足を踏みぬかれるのか・・・。
覚えておこう。

「ま、とりあえずこれでも食べて仲直り！」
とおじさんは僕たちの前に、みずみずしくハリのあるミニトマトを差し出した。
「・・・別に喧嘩したわけじゃないけど・・」
「まぁ、確かに・・・。あ、でもいいんですかお金・・」
「あーあー、いらねぇよそんなん。ほら良いから気にせず食ってみろって」
そ、それじゃあ。お言葉に甘えて。
僕はミニトマトを、ヘタを残して一口で口の中に放り込む。
ロッソは、少しかじって味い、また少しかじって味わう。
・・・う、なんか可愛い。
思わず見惚れてしまったが、不意に目があってとっさに視線をそらし結構強引ではあったがトマトの感想を述べた。
「こ、これ甘くておいしいですねぇ～！」
「ったりまえよ、うちには新鮮なものしか置いてねぇからな。自信のねぇもんを、押し付けたりはしねぇぜ、姉ちゃんはどうだ？」
「・・・美味しい。イタリアントマトよりは甘くないけど・・」
「ハッハッハ、イタリアントマトは糖度が八以上もあるからなぁ。ここらへんで手に入るのっていやあせいぜい糖度は六かそこらだからなぁ。
まぁそれでも、甘い部類なんだぜ？
塩トマトと夏になると普通に糖度十一とかそれ以上のもあるぐらい

だから」
「ロッソって、トマトは好きなの？」
ロッソは、ようやくミニトマトを食べ終えてポケットティッシュで手を拭きながら頷いた。
「・・・イタリアでは料理にトマトをよく使うから・・」
「ほぉ、姉ちゃん日本人じゃないとは思ってたけどイタリア人だったのか。
国際恋愛だねぇコノコノ～」
どうやらこのおじさんは、どうしても僕たちの買い物をデートにしたいようだ。
更に言うと、このおじさん。
面倒な事に年甲斐もなく茶目っけがある。
商売上は、いい性格なんだろうけどこの状況下では僕にとっては若干面倒だった。
僕は、これ以上変な事を言い出される前に、足早にその八百屋を後にした。

「ふぅ～。変な事言うおじさんでしたね・・」
「・・・変な事？」
「いや、だから僕たちの買い物をデートだとか言ってみたり・・・ロッソも迷惑ですよね」
「・・・あ・・・」
ロッソは何かを言いかけて、中断すると少し表情を曇らせた。
「あの、ロッソ？」
「・・・な、何でもない・・大丈夫」
「そうですか？・・ならいいですけど・・・」
その割には、どこかさみしそうな顔をしているけれど。
僕がもう一度声をかけようとすると、ロッソは今度は笑って大丈夫と言い、
一人先へ歩いていった。

・・よくわからないけれど・・・まぁ大丈夫でしょうね。本人もあいってるし。
僕はその背中を追って商店街を更に奥へと進んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・やっぱり聡也は私と何かじゃつまらないのかな。
ロッソは歩きながらそんな事を思う。
そりゃ確かに、いきなり見知らぬ人間にデートかいと言われて頷けるわけがないが、
それでもあんなにあっさりと否定しなくてもと思ってしまう。
・・・いや、まだ大丈夫だ。
まだまだ始まったばかり。
こんなところでめげてなどいられるものか。
ロッソは一度深く頷くと?デート?成功に向けて気持ちを切り替えるのだった。
きっと大丈夫、上手くいく。

この時はまだ、そう思っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

僕はロッソの横に並ぶと、ふと気になった事を尋ねた。
「日本の商店街はどうです?」
やっぱり、こう日本と海外じゃ商店街も色々違いそうですしね。
ロッソは少し考えてから、顔をこちらに向けた。
「・・・私はイタリアしか知らないけど、雰囲気は似てる。

・・・ただ私が住んでた所はこんなアーケードじゃなかったけど・・・」

「へぇ・・・・。日本は基本こう言うアーケードがありますからね。全天候型というか・・・イタリアは違うんですか？」

「・・・・私の住んでた地域は、みんなテントを張って、時間を区切ってたから・・・・」

なるほど・・・。

時間を区切ってねぇ。

という事は、朝市の様なかんじなのかな。

「・・・・それに・・・下も石畳でこんな区画整理も、舗装もしてない」

「なんとなく想像はできますよ。アッピア街道見たいな感じでしょうか」

「・・・・アレよりは、まぁ平らだけれど・・・そんな感じ。あと、陳列方法も――――」

それからしばらくロッソはイタリアの市場や自分の住んでいた地域の事を色々と話してくれた。

その顔はどこか楽しそうで、懐かしそうで。

やっぱり母国を離れて、たった一人で他の国へ行くってことはいくら学園に友人がいると言っても

寂しいものなんだろうな。

まぁ、僕は日本で生まれましたし地元も――――――・・・・・あれ？

地元も・・・・。

あれれ、おかしいな。

思い出せない・・・・。

そんな、確かに住んでた家は鮮明に思い出せるのに。

どこで生まれて育ってって言う情報だけが、上手く思い出せなかった。

ま、まぁ両親と死別してからしばらく潜水艦でずっと行ったり来た

りしてたし、
忘れてしまっただけでしょう。・・そう、忘れて・・・。
「・・・聡也、どうかしたの？」
「え！？」
気が付くとロッソが不安そうな顔で僕を覗き込んでいた。
あぁ、しまった。
まったく、楽しい買い物の雰囲気をぶち壊してどうするんだ僕は！
僕は、パンッと一回自分の顔を叩くとロッソに笑いかけた。
「い、いえ、なんでもありませんよ。ちょっと考え事してただけですから」
「・・・考え事・・・？」
う、な、なんでそんな微妙に寂しそうな目をするんですか。
何か、僕不味い事でも・・・。
あぁぁぁもう！
僕はそのわけは分からなかったが、これ以上追及されるのは避けたい。
「ほ、ほらとにかく、せっかくの買い物なんですから、楽しんでいきもしょうよ！」
僕は強引にロッソの肩を押しながら商店街を駆ける。
「・・・ちょ、ちょっと・・！」
「ほらほら、行きますよ！」
ふぅ、細かい事は後回しで・・・今は買い物を楽しもう。

◇◆◇◆◇◆

「・・・・なぁよ」
「うん？何でしょう？」
「・・・・んであたしがこんなことしなきゃ何ねぇんだ？」
「それはあなたが、風紀委員だからよ」
鳥越　聡華は、商店街のとある柱の陰からロッソと聡也の様子をうかがいながら
その後ろにいる人物に声をかけた。
その人物は長い黒髪をさらりと流し、優しそうな柔和な目元を持つ少女で
服装は至ってシンプルな無地シャツに上着、それにロングスカートだったが
どこか凛とした雰囲気を持っている。
「いや・・・それ理由になってねぇからな、理（ことわり）」
「あら、これほどシンプルな理由はないと思うけれど」
彼女は名を白鶴（しらつる）　理（ことわり）という。
学年は二年で、聡華と同い年だが上級生を差し置いて風紀委員の委員長を務める実力者である。
普通に黙っていれば、かなりの美人で良識人なのだがいかんせん性格が厄介で
面白いこと、楽しいことが大好きなのだ。
・・・・ったく～・・こいつに捕まったのがそもそものミスだったぜ・・
聡華は頭を抱えるがもう遅い。
すでに巻き込まれているのだから。
ちなみに最近のマイブームは・・・。
「でも驚いたわ～。この前あった委員会会議でロッソちゃんの様子がおかしいと思ったら
『・・・す、好きな人が・・・・その・・できた・・』とかいうんですもの～」
「だからって、わざわざ見に来るかよ・・・こんなストーカー紛い

なことしてまでよ」
「馬鹿ね、これはれっきとした尾行よ。私にはロッソちゃんの恋路を見届ける義務があるの。風紀委員長としてね」
「・・・職権乱用ってやつだな」
聡華はまたも頭を抱える。
そう最近のマイブームというのは、ロッソの恋路観察。
人の恋路なんざどうでもいい聡華にとっては本当にいい迷惑である。
こんなのがあの生徒会長、更識　楯無と肩を並べるＩＳ操縦者だとは到底思えねぇ・・。
大体だ。
何でこんなちゃらんぽらんにあたしがまったく勝てねぇんだよ！
その言葉のとおり、聡華はこの理に入学以来一度も勝ったことがない。
しかも聡華は専用機なのに対して、理は一応自前でチューニングデータを持っているとはいえ専用機を持っていないため？打鉄？。普通に考えれば機体のスペックだけ見ても聡華が勝てる要素しかない。
だが結果は、一方的で聡華は反撃らしい反撃をするまもなく敗北した。
はぁ・・・、まじでありえねぇ。
「ん？　何よ、その顔は」
「・・・いや、何でお前にあたしが勝てねえのかをちょっと考えてただけだ」
「なんだ、そんなこと」
「そんなことってなぁ・・」
理は聡華に向かって首を傾けて満面の笑みを向けた。
「実力不足よ」
「元も子もねぇなっ！！」
「・・・って、ちょっと声がでかいわよ！
あぁ！　ほらロッソちゃんと聡也君見えなくなっちゃったじゃない

！」

理は、バッと柱の影からから身を乗り出し二人の姿が見えなくなった事にあわてて、

聡華の手を引いて後を追いかけようとする。

だがもともと乗り気じゃない聡華は、その引かれた手に少し力を入れて引き返す。

「なぁ・・・追いかけなきゃだめか？」

「当たり前でしょ！」

ベシッ！！

問答無用のチョップが聡華の脳天を直撃。

あまりにきれいに決まって頭を抑え、珍しく涙目の聡華が言い返そうとスゥッと息を吸い込み

一瞬、身体の力が抜けたところで理はグイッと聡華を引っ張った。

「ちょ、ちょぉッ！？」

「急ぐわよ！！」

ちょうど身体の力が抜けたときに引っ張られた聡華はそのまま、軽く足を払われて理の腕の中に

ポスッと収まる。

俗に言うお姫様抱っこ状態である。

いくら聡華が下着をアルディに見られても気にしない性格だといっても

商店街の人ごみの中で、お姫様抱っこというのはさすがに耐えられない。

「お前、馬鹿か！？　下ろせ下ろせーーー！！」

「だめよ、下ろしてたら間に合わないわ！　このままいく！！」

「ちょっと格好良く言っても、むだだっつーーの！！！」

後に聡也は、商店街で「下ろせーーーーーーー！！」という断末魔にも似た叫び声を聞いたと証言している。

◇◆◇◆◇◆

ロッソはもう二、三回辺りを念入りに見てから、聡也を連れてまた歩き出した。
邪魔されてなるものか、この時間は私だけのものなのだから。

・・・・そう私だけのもの。
誰にも譲れない。
・・・・?自分自身にだって?

◇◆◇◆◇◆

「・・・・て、てめぇ・・！！」
「あら、委員長に逆らうともう一発行くわよ？」
「・・・・はぁ、すいませんね」
その声を聞いて、理はまたフフッと笑うのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・おい、あいつ・・」
「どうやら、あの二人を見張っているのは僕たちだけでは無いようですね・・」
理と聡華から少し離れた場所に人ごみに、紛れて二つの影が揺れる。
それぞれ黒髪とワインレッドの髪を持つ二人は、黒髪の少年はサングラスをかけ目元を隠し、ワインレッドの少女はキャップを目深にかぶってやや下を向いて顔全体を隠しているようだった。
「どうする、聡也・・・。流石にあいつの目の前じゃ無理だぜ」
「かといって、このまま帰っては博士に大目玉・・・ですよ？」
「ったく、あの女・・・。こないだ人にハワイ行けとか、ぬかしていやがったのに
いきなりその前に、一つ用事を頼むなんてよぉ？」
聡華は鼻を鳴らして、吐き捨てるように言う。
だが、それについては聡也も同感だった。
五条（ごじょう）　叶（かなえ）は、こっちにやってほしい事は伝えてくるがその内容の深くを語らない。
叶を信じてはいるが、今回のこの？用事？についてはいささか疑問が残る。
・・・・なにかこの用事にあの女が関与しているのか・・・それとも・・。
「おい、聡也。あいつら動いたぜ」
考え込む聡也に聡華が声をかける。

・・・まぁいいでしょう。とりあえず僕たちはやれと言われた事をしっかりとやるだけです。
聡也は頭を切り替えて二人の後を追う。

晴れ渡る初夏の日差しの下、楽しく幕を開けた聡也とロッソの買い物デートは、いつしかそれぞれの思惑が入り混じる奇妙な尾行劇へとその姿を変えようとしていた。

第２９話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～商店街は思惑だらけ？～（後書き）

さてようやく、聡也側デート変第一話が終わりました。

どうもしるくです。
こっちではシャルロットがだました三人を登場させてみました。
さいごの落ちはやはり天然のラウラ嬢に締めてもらうのが定番ですね（ぉ

それではこのあたりで。
お、いよいよ次は３０話なんですねぇ
頑張りますよ～

さよならッ！

第３０話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～失うものは唐突に～

午前中ずっと、商店街を回っていた僕たち。
っていうか、いたるところでデートデートと騒がれたのは予想外でした・・・。
そんなんじゃないっていうのに・・・。
現在僕たちは、昼食をとるべく何かいいお店がないか探している最中だった。
にしても、この商店街は意外とすごい。
大きさもそうだが、入っている店。特にその品揃えの多さには驚かされる。
いわゆるＢ級グルメなのだが、地元はもとよりアジア、アメリカ、ヨーロッパとたいていの国の料理がこの商店街にいながら食べられる。
僕はロッソの意見を聞くべく後ろを少し離れてついてきていたロッソの方を振り返る。
「ロッソ、あなたは何か食べたいものとかありますか？」
「・・・・・・・・・」
「ロッソ？」
「・・・・・え！　な、何？・・・」
ロッソは何か考え事をしていたのかようやく、僕の声に気がつきハッと顔を上げた。
「ロッソ、聞いてましたか？」
「・・・・ごめん・・・聞いていなかった」
「はぁ・・・だからどこで何を食べたいかってことですよ」
「・・・あぁ・・・別に何でもいいけど・・・」
その答えって意外に困る。

何でもいいってのは、僕が選んで良いってことだから一見すると好きなものが食べられるっていうことだけど、裏を返せば僕のセンスが問われていることとほぼ同義。
下手なもの選べないというプレッシャーは少なからずあるのだが・・・。
ふぅむ・・・。
一番ベターなのはラーメンとかカレーだけどそれだとちょっと、無難すぎる気もしますし。
せっかくこれだけ世界の料理が集まっているのですからここは奇を衒ってってみるのも・・・。
ロッソの困った返答に頭を悩ませていると、ふと目に一軒のカフェ風のおしゃれな店が飛び込んできた。
イタリア料理か・・・。
店の那覇イタリア語だったからなんて発音するのかまではわからなかったが、それなりに人気店なのか僕たち同様おなかを空かせた客たちが列を作っていた。
「ねぇ、ロッソ。イタリア料理はどうですか？」
「・・・イタリア・・・うん、良いよ」
ロッソはほんの少し考えたが、うなずいてその列の最後尾に並ぶ。
行列といっても僕たちの前には三人ほどしかいない。
すぐに店内に入れるだろう。
「・・・そういえば、聡也はイタリア料理って何か知ってるものあるの？・・・」
「いわれてみれば　、ピザとかスパゲティとか代表的なものしか知りませんねぇ」
「・・・日本に伝わったピザはイタリアのとは少し違うよ・・・？」
「え、そうなんですか？」
基本円状のこんがり焼いたパンの上にスライスチーズやケチャップ、後はベーコンとかそういう具が乗ったものイコールピザってイメー

ジだったんですけど。
やっぱりイタリア人からすれば違うんでしょうか。
まぁ、日本は仏教国と言いながらクリスマスを祝ったりしますしい い意味で、いろんな文化が混在してますから。
今さら日本でこの文化の発祥は・・なんて考えて食べる人なんていないし、その流れからピザも?そういう料理?がピザっていう風に固定化されてしまったんでしょうね。
「・・・基本的に日本に伝わったピザは、イタリア本国から伝わったものじゃなくてアメリカから伝わったものなの。基本アメリカのピザって言うのはイタリア物よりも生地が厚くて、専用のパンに具を載せてオーブンを使うみたい・・・・。」
「なるほど、じゃあ具はどうなんですか?」
「・・・・具はイタリアでは大体基本的にトマトソースにチーズ、後はバジルなんかの野菜にハム、ソーセージ、ベーコンを使ったものがオードソックスなのかな。・・・でもアメリカの場合は具が色々あるしオードソックスなものがどれって言われてもよくわからない・・・。各州ごとに大きく違うらしいから・・」
へぇ・・・。ロッソって失礼だけど意外と料理詳しいんですね。
それに比べて、あの博士は・・・。
ふと、僕の頭に一条　希が浮かぶ。
あの人、どうしてか機械を作ったり弄ったりするのは天才的なのに、料理だけは壊滅的だ。
何度戦(おののき)の中でボヤ騒ぎが起きて緊急浮上したか・・。
はぁ・・・。
今考えても恐ろしいあの料理の数々・・・。
どうして袋から出すだけの料理までがああも豹変するのか、一度その過程を見てみたいです・・。
「・・・あの、聡也・・・・つまらなかったかな・・・?」
博士の事を考えてため息をついた僕にロッソが不安そうな顔で覗き込む。

どうやらロッソは、僕が自分の話に飽きてしまったと思ったらしい。
いやいや、違う違う。
逆に色々ためになる話が聞けて楽しかったですしね。
僕は、ロッソに笑いかけてその疑問を一蹴する。
「違いますよ、ロッソの話はとても面白かったですし、色々ためになりました」
「・・・・でも、ため息ついてたよ・・・？」
「あれは、博士の事をちょっと・・・考えていて・・」
ダメだ・・。
博士って言ったらまた頭の中にあの料理の数々がフラッシュバックしてきて・・苦笑いが止まらない。
だがロッソは苦笑いよりも博士という単語が気になったらしい。
「・・・博士って？・・・・」
「あぁ、そう言えばロッソは知らないんですね。博士って言うのは、まぁそのまま博士なんですが・・・僕のＩＳ－Ｎを作り上げた人で、僕の母親・・・になるのかな」
「お母さん・・・」
「そう、母さんだね。・・それがさぁ、ほんと料理がてんでダメでして。袋開けるだけの簡単な料理でさえよくわからない、奇跡のゲテモノに・・・」
あぁぁ、もう・・・思い出したくもないのに・・・。
ちなみにボヤ騒ぎもそうだが、それを食べたクルーもまた倒れて寝込む人たちが続出したらしい。
でもなぜか博士だけは平然と立ってるんだよなぁ・・・。
ひょっとしてあの人、わざとやっているんじゃ。
「・・・あ、なるほど。だからため息なんかついて・・・」
「そうですよ、もうね。はっきりって思い出したくもありません」
僕はもうそれ以上、あのゲテモノ料理を思い出さないために話をパッと切り替える。
と言っても、急に別の話にも持って行きづらかったから、さっき少

し気になった事でも。
「そ、そういえばロッソは料理の知識結構豊富ですけど、得意なんですか？」
「・・・・まぁ、それなりには・・・」
お、否定しない。それどころかそれなりにとは。
「へぇ。何か得意な料理とかあるんです？」
「・・・・これと言って得意なものは無いけど・・・・・大体の物は作れるよ・・」
そりゃ凄い。
僕も自慢じゃないけど料理は苦手な方ですからねぇ。
料理を作れる人って、なんだか尊敬してしまいます。
と、僕が感心していると、ロッソは何やらうつむいて考えた後こちらを向いた。
その顔は、少し赤らんでいる。
「・・・聡也は・・・・その私が・・・・料理作ったら・・・・食べたい・・・？」
「え、料理ですか？　そりゃ食べたいですよ。だって自信あるんでしょ？」
「・・・・え、う、うん・・・」
「いいですねぇ。その時は是非、いただきたいですね」
「・・・・分かった、頑張るよ！・・・・」
ぱあっと笑顔が広がるロッソ。
そんなに、料理作るのが好きなんですねぇ。
これは期待できそうです。
「えー、お次のお客様。お席が空きましたのでご案内いたします」
僕が、ロッソの料理に思いをはせていると店員さんの元気な声が耳に飛び込む。
おっと、結構話し込んでいたようですね。
僕たちは店員に促され、イタリア料理の美味しそうな匂いのする店内に足を踏み入れた。

◇◆◇◆◇◆

が、理はそれをこちらも見ずに?裏拳?でへし折ると折れた破片をもう片方の手でつかみ素早く木片を聡華の首元に突き付ける。
「う・・・ぐっ!」
「危ないじゃない・・・・・ね?」
「ね、じゃねぇんだよ?ね?じゃ、あたしは――――――!!」
「・・・・・・ね?」
「・・・・・・・・・・・・・すんません」
聡華は毎回このパターンだと、また苛立ちを募らせながらも毎度毎度このパターンで負ける自分に嫌気がさしていた。
一方勝ち誇ったように満面の笑みを浮かべる理は、腰に手を当ててわざとらしいお怒りポーズをとる。
「全く、あのね時と場所を考えてよ。今は大事な仕事中なんだから」
「ストーキングがかよ・・・」
「だから尾行って言ってんでしょ!」
パカンっ!
さっきの木片が聡華の頭にクリーンヒット。
「うおぉぉ・・・・・!」
「ほんとにもう・・・ほらぁ、ロッソちゃん見えなくなっちゃったじゃない」
「てめぇは、その前にいろいろ酷ぇだろ!」
聡華は今日二回目の涙目でクッと理をにらむが、理は気にも留めない。
・・・このやろ・・。
「それに酷いっていうなら、そっちが最初でしょうが。あたしは正当防衛よ!」
「あたしはただ積年の恨みを代表して晴らそうとしただけだろ・・・・」
理が滅茶苦茶なのは今に始まったことではない。
聡華と理が初めてであったのは、ＩＳ学園入学後の一年生の時だ。
クラス替えで二年ではクラスが離れたが一年の時はまぁそれはそれ

は。
人間観察だのなんだのって理由をつけてはこっちをひっぱりまわしてくれるもんだからたまったものではない。むしろ、二年生になってクラスが離れてから余計にひどくなった気さえするぐらいだ。
「もぅ・・。私は喜ばれこそすれ恨まれるような人間じゃないのに・・・」
「・・・・一回風紀員会で信任投票やってやろうか・・」
どこからその自信がやってくるのかと呆れながら聡華は理を一瞥する。
理はその視線を感じながら、いつもどおり意味深な笑みを浮かべていた。
「・・・・さて・・・聡華ちょっとお金渡すからそこのファストフード店で昼ごはん買ってきて」
「おい、ふざけんなよ。あたしをパシリに使おうってか?」
「そうね・・・・ハンバーガーセットがいいわ。あ、マスタードは多めで飲み物は・・・クーちゃん白ブドウでお願い」
「てめぇな・・・話聞いてんのか、こら!!」
「・・・・・・・・・ね?」
「・・・・・・・・・・・了解しました」
くそ、なんつうクソむかつく笑顔だ!
聡華はまたもあの?ね?に負けたことに心底腹を立てながら、理が差し出したお金をふんだくると仏頂面のままファストフード店へと足を進めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ったく・・・・。
あいつら、何で見つかんねえのか甚だ疑問でなんねぇ・・。

理と聡華から少し離れた、オープンカフェ。
そこは商店街ながら、店の前に数脚のテーブルセットが置かれ紫香楽　聡華と一条聡也がサンドイッチ片手にコーヒーを啜っていた。
「あれで尾行のつもりかよ・・・呆れて物も言えねぇ」
「それを言うなら僕たちも、尾行しながらカフェで座ってますから人のこと言えませんけどね」
「あたしらはあんなにうるさくねぇぞ？」
「ま、それはそうですが・・」
総也はタマゴサンドを口の中に放り込むとそれをコーヒーで流し込む。
結構この食べ方喉に詰まりやすいからあまりお勧めはしないが、タマゴの甘みとコーヒーの程よい苦みがマッチして意外においしい。
聡華はこの食べ方は少し理解に苦しむが。
「まぁ、彼女たちが出てくるまではたぶんそう遠くにはいかないでしょうし。腹が減っては戦は出来ぬといいますからね」
「武士は食わねど高楊枝とも言うだろ？」
「我慢したって意味ないでしょ、こんなところで」
「・・・・まぁ・・・な」
聡華はＢＬＴサンドをポイッと口へ放り込んで手をパンパンと払いながら、ちらっと理を見やる。
・・・あいつさっき・・・。
聡華は先ほどの一連の攻防を思い起こしていた。
鳥越　聡華はあの時完全に理の不意を突いていた。
少なくともここからはそう見えたのだ。
だが、理は逆にその状況からいとも簡単に逆転して見せた。
・・・話の内容からして、あの理って女は風紀委員の委員長か。
ったく、あの二人がＩＳ学園の関係者だってことはわかってたがまさかここまで厄介者だったとは予想外だ。
あの聡華だけでも、いろいろ面倒だというのに・・・。
聡華は鼻を鳴らして視線を外すと、コーヒーを一気に飲み干して荒

くガンっと机の上に叩きつけるように置く。
それにだ、聡華にはいまだに釈然としないことがある。
それは聡也同様、五条　叶が自分たちにやってほしいといっていたひとつの用事。
これまで叶の出す任務の先には必ずといっていいほど?あの女?の影があった。
だが今回の任務にはその姿かたちどころか、影さえ見えてこない。
叶が、?あの女?の関わっていないことに首を突っ込むとも思えねぇし・・。
一体・・・。
・・・・待てよ。
ひょっとして。
聡華は一つの可能性を考える。
それは、?自分の為?・・・・。
叶があの女の影を追い続けるのは、ただ単純に自分の欲求を満たすためでそれイコール自分の為というわけではない。
叶が動くもう一つの理由があるとすれば、本当にただ自分(わがまま)の為のためとしか考えられない。
その考えにいたった聡華は、うんざりすると同時にさっきまで以上に苛立ちを募らせる。
あいつ・・・。あたしらをそんな理由のために使ってんだとしたらふざけんなよ・・!
あたしらは・・・・あたしらはなぁ!!!
グッと拳を握り締め、何もない宙を睨み付ける聡華に聡也が諭すように話しかけた。
「姉さん、今はそんなことで腹を立てても仕方ありませんよ」
「え?」
「重要なのは、博士に言われたことを百パーセント完璧にこなす事でしょう。違いますか?」
「あ、あぁ・・」

「まったく、しっかりして下さいね。？僕の？姉さんなんですから？」

？僕の？という言葉に意味深な響きを残して聡也は、サンドイッチを平らげ席を立つ。

円柱のテーブルにポツンと残された聡華は、今までの苛立ちが嘘のように気持ちが落ち着いていくのがわかる。

そこには何故か、口にも出していない自分の考えが聡也にわかったのかという当たり前の疑問は存在していなかった。

わかるのはさっきまでの苛立ちがスッと収まっていく感覚だけ。

そうだ、あたしは？聡也の？姉なんだ。

聡也の言うとおり、やれることを今はしっかりやる。

それでいい。

・・・それで、聡也が喜ぶなら・・・・

それで・・・良い。

聡華は、少しうつろになった目でゆっくりと立ち上がるとテーブルの上のゴミを片付け聡也の後を追った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ふぅ、少し食べ過ぎました・・・。

というよりもイタリア料理がただ単においしすぎただけなのですが。

「ロッソ、この店おいしかったですね」

「・・・・うん・・・そうだね・・・・」

「ここのミートソースは癖になりそうですよ、ところでロッソはあまり見たことない料理を食べていましたけれど・・・・あれは・・」

「・・・・聡也はスパゲティ見たことないの・・？」

信じられないという顔で僕を見上げるロッソ。
いやいや、そっちじゃなくてですね・・。
って言うか僕、スパゲティ食べてましたし。
「僕が言ってるのは、もう一つの方ですよ！　なんかコロッとした揚げ物食べてたじゃないですか」
「・・・・あぁ、あれはアランチーニ・・・」
「アランチーニ？」
「・・・・イタリア風のライスコロッケの事だよ・・・」
「あれ、コロッケだったですね」
「・・・・まぁ、私が食べたのはナポリ風のだったけど・・」
ロッソによるとアランチーニとは日本語で小さなオレンジを意味するイタリア語。
本場のアランチーニはシチリア風で他にもナポリ、ローマ風のがあって今回ロッソが食べたナポリ風のは中に何もいれないただおろしたチーズ、塩、ゴマ、トマトピューレを湯炊きした米と混ぜたものにパン粉をまぶして揚げる結構シンプルなものらしい。
まぁ、元々がお米だから普通のコロッケに比べると幾分ヘルシーそうだし、そこら辺はしっかりカロリー計算して食べてるあたりが女の子だなと思う。
・・・でも、よく考えたらそれって？こっち？のロッソですよね。
？あっち？のロッソはそう言う事気にして食べるんでしょうか。
僕はちょっと想像してみる。
あの性格だから、きっと？こっち？のロッソよりはこんもり食べるはず。

「ロッソ、け、結構食べますね・・」
「あぁ、いや普通だろ？」
「普通って・・・それ大盛りどころか二人前で・・うわぁ・・カロリー高そう・・」

「カロリーだぁ？　んなもん気にして飯が食えっかよ！」
「いや・・だけど一応女の子ですし・・」
「女だからカロリーを気にしなきゃいけねぇなんて決まりあるかよ、さぁさぁ食え食え！！」

・・・・・いや、うん多分こんなのだ。
フフ、いや間違いないですね。
あのロッソがだっていちいちカロリーとか細々計算するなんてありえませんよ。
僕は？あっち？のロッソが細々と指を折りながらカロリーを計算する姿を思い浮かべると何だか無性に笑いがこみあげてきた。
「・・・・・聡也、どうかしたの？・・・」
そんな僕の想像など知る由もないロッソが不思議そうに尋ねてくる。
確かに急に、相方が笑いだしたら不思議がるのは当然でしょう。
「いや、ちょっと考え事というか、何というか」
「・・・・何を、考えていたの？・・・」
「えぇ、まぁ？あっち？のロッソの事をね」
「・・・・・・・え？」
一瞬だがビクッとロッソの身体が跳ねた気がした。
何か・・・不味い事でも・・・言ったかな。
ロッソは無言のまま下を向く。
そして、手はグッと固く握られており、よく見ると小刻みに震えているのが分かる。
「あ、あの・・・ロッソ？」
「――――――ッ！？」
「え？」
僕がその肩に手を置こうとした時、ロッソがバッと反射的に身体をひるがえす。
一瞬の沈黙の後にロッソは小声で「あ」とつぶやくとばつの悪そう

に顔をそむけた。
い、一体どうしたっていうんですか・・・！？
僕はよく事態が飲み込めず、言い淀む。
だがそうは言っても何か声をかけなければという気持ちだけが、はやってしまう二も事実だった。
「ろ、ロッソ？」
そして出た言葉が、相手の名前だけとは。
我ながらとんでもなく情けない。
だが、もう言ってしまったのは仕方が無い。
僕はもう一度ロッソを呼ぶ。
「ロッソ・・・・？」
「・・・・・・・・」
「あ、あの・・・」
「・・・聡也は・・・」
「はい？」
ロッソがぽつりとつぶやく。だがそこには先ほどまでの明るさは無く声には不安の色が混じっている。
「・・・・聡也は・・・やっぱり・・・私なんかじゃ・・・嫌なのかな・・・
私じゃ・・・こんな・・・・・私じゃ・・・・・」
その事なら確か以前の襲撃の時に・・・。
・・・あれ？
僕は、質問の意味もそうだったがなんと答えたらいいのか分からず言葉が上手く出てこない。
だがどうもロッソはそれを、僕の肯定と取ってしまったらしい。
ロッソはゆっくりと顔を上げる。
その顔に僕は驚いた。
なぜなら。

・・・・泣いていたからだ。
「・・・・ロッソ・・」
ロッソは僕の顔を見て、涙を流しながらも無理やり笑顔を作る。
「・・・・変な事聞いて・・・・・ごめんね・・・・」
「あ！　ロッソ！！」
言い残してロッソはきびすを返して商店街を一人走って行ってしまう。
僕はその背中を追いかける事が出来なかった。
追いかけても、かける言葉が見つからない。
僕はただ立ち尽くすことしかできなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

しまった！
理は心の中で盛大に叫んだ。
次いで辺りを見回す。
・・・ッ！？　やっぱりいない！
急な理の態度の変化に聡華がキョトンとした顔で見つめる。
「おい、理。なんだ、何焦ってんだ？」
「聡華、居ないのよ！」
「あぁ、ロッソのやつか。にしてもよ、あの馬鹿もドジったよなぁ。目の前であんな事言われりゃ――――」
「そうじゃないわ！」
グイッと肩を捕み理は聡華に詰め寄る。
余りの剣幕に聡華は目を丸くした。
「お、おい理？」

「さっきまで居たのよ！　私たちをずっとつけてきてた二人組が」
「な、何だと！？」
「その二人が居なくなったの！」
理は、確かにロッソの恋路観察には超が付くほど興味がある。
しかし今日に限っては、少し意味合いが異なっていた。
今日はロッソの恋路観察ではなく、ある人物の命であの二人を監視していたのだ。
そして案の定二人を狙う紫香楽　聡華と一条　聡也の存在に気が付いた。
理が聡華と色々騒いでいたのも、すべては相手の視線をこちら側に出来る限り向ける事で相手の動きをある程度把握するためだ。
だが、ロッソの涙を見た時、理に一瞬の隙が出来た。
それが不味かったのだ。
・・・っく、ロッソちゃんが消えてからまだそう時間は経っていないからそんなに離れてはいないだろうけど。
・・・この人ごみじゃあねぇ。
今日は日曜日。
しかもピークは過ぎたとはいえまだ昼過ぎ。
人の量も半端では無い。
こんな中から、あの二人だけを見つけるなどほぼ不可能だ。
頭を抱えたくなる衝動を抑え理はため息を吐く。
・・・それにしても、あの二人。
あの人が言ってた見たいに確かに現れたけど・・・。
一体何が目的なのかしら。
理が、思考を巡らせていると聡華が焦った口調でまくし立てる。
「なぁ、二人組ってまさかあいつらなのか！？」
「えぇ、そうよ・・。あの学園を襲撃した二人と見て間違いないわ」
「・・・だったらロッソが！」
「だとしても、向こうの方が早く動いてるのよ！」
理はそんな事分かってるとばかりに声を荒げる。

そう分かっているのだ。
・・・後輩が危機にさらされようとしているかもしれないのに、一番近くでずっと監視していたのに・・・。そして結局この危機を作ってしまったのが自分の所為であると言う事も。
「・・・お前まさかと思うが、諦めようとしてんじゃねぇだろうな？」
「・・・もちろん、そんな事思っても無いわ」
そう分かっているからこそ。
「だったら？」
「当然よ・・」
今自分に出来る事をする！
「とにかくロッソを探しましょう！」
「あぁ、行くぜ！」
理と聡華は、既に間にあわないかもしれないと言う若干の不安を抱えつつもロッソを探すために地を蹴りだした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ハッ・・・ハァッ！
ロッソは、言い表せないような胸の痛みに耐えながら商店街を当ても無く走り続けた。
やっぱり・・・自分じゃだめだったんだ。
ロッソは思う。
あの時誰にもこの楽しい時間を譲りたくなかった。
・・・・自分自身にさえ。
これは自分の物、？あっち？の自分の物じゃない。

そう強く願えば願うほど、思えば思うほど聡也が？あっち？の自分の事を考えてあんな笑顔を浮かべていたことが許せなかったし、何より悲しかった。
聡也は自分の事なんて見てなかったんだ。
やっぱり、明るくて気性は荒いけど冗談も言えて話しやすい。
？あっち？の自分のほうが・・・。
ロッソはふと見つけた細く薄暗い路地へ隠れるように滑り込んだ。
ハァ、ハァと上がった息を少しづつ整えながらロッソは下を向く。
・・・やっぱり自分は・・。
『あぁ、そうだぜ？　誰もお前の事なんか見ちゃいない』
ハッと顔を上げる。
あたりをきょろきょろと見回すが人影は無い。
だがその声は。耳をふさごうと、何をしようとも否応なしにロッソの頭に鮮明に響いてくる。
ロッソはその声に聞き覚えがあった。
いや、聞き覚えなどというレベルではない。
これは・・・この声は・・・。
――――――――私の声・・・・！？
『大体よ、自分を見てくれなんて虫が良すぎると思わねぇかよ』
「・・・そ、それは・・・」
『ただでさえこっちは、お前見たいなのが出てきて迷惑してるってぇのに？』
「・・・・めい・・・わく」
『あぁ、迷惑だね。つーかはっきりって邪魔？』
「・・・・でも・・私は・・私だって・・」
『私だって・・・・なんだよ・・・あぁ、ひょっとしてあれか私だって楽しむ権利ぐらいあるとかそういう事抜かそうとしてんのか？』
「ッ！？」
『ばっかじゃねぇの？　そんなのあるわけねぇじゃんか・・・。だってお前は・・・』

「・・・嫌！　聞きたくないッ！！・・・」
それを今言われてしまったら本当にもう立ち上がれなくなってしまう。
今にも千切れそうな細い細い糸を必死につなぎとめようとするが、その声は何の迷いも情もなく言い放った。
『――――――――――――誰にも必要とされちゃいないんだよ・・・もちろん？聡也？にもな』
「――――――――――――あ・・・・」
耳に？プツリ？と何かが切れる音が聞こえる。
ロッソは膝から力なくペタンと座り込んでしまった。
立ち上がろうにも足に力が入らず、焦点は定まらない。
虚ろで輝きを失った瞳が最後に見たのは、座り込んだ自分を見下ろす二つの影だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ～ぁ・・・僕たちが来る前にすでにこの状態では・・」
「こいつ、壊れちまったのか？」
「本当は、僕たちが？それ？をするつもりだったんですけどね」
聡也はさらっと、言うとクイッとロッソの顎を手で上げる。
ロッソに抵抗の意思などあるはずも無くただ虚ろな目に涙をためて力ない肢体をダランと地に投げ出している。
聡也はロッソの状態を確認すると、少し考えた後ゆっくりと頷いた。
「・・・まぁ、大丈夫でしょう。彼女はもう一人内包しているようですし。むしろそちら側に用があるのでね」
「って言うと・・・」
「はい、そっちに働いてもらいます。ここは僕に任せて姉さんは向こうをお願いしますね？」
「・・・あぁ、ま、ちょりぃだろ・・」

聡也は聡華の方を振り返らずに言い返す。
聡華が路地を出て行ったことを一瞥して確認してからロッソの耳元に口を近づけた。
「ロッソ・・・大丈夫ですか？」
あたかもそれが、？あの？聡也であるように優しく、丁寧に。
聡也が二度三度ロッソの身体を揺らすと、ロッソは本当にゆっくりと瞳を動かした。
「・・・・・そう・・・や・・？」
「・・・えぇ、僕です」
「・・・・私・・・ね・・・」
「・・・探しましたよ・・急に走って行っちゃうんですから」
ロッソは少しだけ目を丸くした。
おそらく自分を追いかけてきてくれたことへの純粋な驚きなのだろう。
だが、聡也はそこで優しい言葉など続けはしない。
「ところで、何であなたがいるんでしょうか？」
「・・・え？」
「僕は確か、？あっち？のロッソと商店街でデートしていたはずですが・・」
？あっち？という単語に、やや輝きを取り戻しつつあった瞳が失意の色へと変わる。
「困りますねぇ・・・せっかく楽しいデートだったのに。勝手に変わられては」
「・・・な、何を・・」
「早く出て行ってくれません？　あなたがいると正直迷惑ですから」
「・・・あ・・・あぁ・・・」
聡也はグイッとロッソの胸倉をつかんで顔を近づけ、鋭くにらみつけると止めの一言を発した。
「・・・・出てけっていったんですよ。あなたは・・・・・邪魔だ」

「うぅ・・ッ・・うあッ！！」
パッと手を離すとロッソは急に頭を抱えて悶え始める。
狭い路地を左右にゴロゴロと転がりながら、苦しみ痛みに耐えるがその限界はすぐにやってきたようだった。
「うあぁぁぁ

第３０話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～失うものは唐突に～（後書き）

どうもお久しぶりです・・。
しるくです

すいません更新が遅れまして・・・。
で、遅れた結果がこのグダグダ加減とかもう泣けてくるｗｗ

まぁそんな感じで、Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌどうだったでしょうか。
急展開乙とかは仕方ないのですいませんｗ
さてこの先どうなるのか・・・。
次の話ではまた通常のＳｉｄｅに戻ると思いますので、よろしくです。
にしたって・・・（敵の）聡也君マジ鬼畜ｗｗｗ

では３１話でまたお会いしましょう。
さよならッ！！

第３１話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～揃う役者達・事件はこうして始まった～（前書

※もしかしたら、後日少し一部内容を付け足すかもしれません、
ご了承ください。
ストーリーの筋、流れとしてはあまり関係のない所です。

第３１話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～揃う役者達・事件はこうして始まった～

あぁ、もうなんであの時呼びとめられなかったんだ！
掛ける言葉なんて二の次でよかったじゃないか。
聡也は人ごみを縫うように走りロッソを探しながら、後悔の念にさいなまれていた。
・・・いまさらしたところでもう遅いんですがね。
とにかくロッソを見つけないと。
でも一体どこまで言ったんだ？
と、ふと見知った影を発見し足を止める。
向こうも僕に気が付いたようだった。
「姉さん！？」
僕は自然と身構えていた。
だが、相手はハァっとため息を漏らして頭をかく。
「・・・・だから何度言ったら分かんだよ・・あたしはお前の姉さんじゃねぇ」
「あ、あれ？　ひょっとして・・・・鳥越先輩？」
「ひょっとしなくても、そうだっつーの」
聡華は鼻を鳴らすと、親指ですぐ横の路地を指さした。
「ロッソ探してんだろ？　この奥だよ」
「え！　本当ですか！」
「嘘言ってどうする・・」
聡也は、聡華を押しのけるように路地裏に飛び込む。
それほど聡也は焦っているのだ。
・・・・そう。
本来なら、この状況が余りに不自然だと聡い聡也なら気づけたはずなのに。
「ロッソーッ！　どこですかーッ！？」
返事は無い。

いやむしろ・・・
「返事なんざ・・・・あるわけねぇんだっての！」
「――――――ッ！？」
聡也は寸での所で、相手の気配に気が付き飛びのく。
そして聡也がもといた場所には、鋭い木片が振り下ろされていた。
「あ、あなたは！」
「あぁあぁそうだよそう、あたしは紫香楽　聡華様だよ！！！」
聡華は右腕を部分展開させると、聡也の胸倉をつかんで路地の壁に叩きつける。
「がはっ！」
こうなると、聡也は手も足も出ない。
くそッ！これが、だだっ広いアリーナのみたいな場所なら展開して反撃できるのに・・・・ッ！！
こうも狭所ではッ！！
好きな時に呼び出せるＩＳと違いＩＳ－Ｎは、一つのユニットをまとめて展開するシステムなので部分展開が行えないのだ。
そのためこう言ったスペースの限られる所での戦闘には全くと言っていいほど向いていない。
多分それも見越して僕をここに・・・！
うぅッ！！・・・い、息が！
聡也が霞みはじめた視界で見ると聡華は、ＩＳの腕で首を締めあげていた。
「ふん・・殺しちまってもいいけどなぁ。・・・・・それはちぃと約束違反なもんでな」
「や・・・・くそく・・・ッ？」
「けどまぁ、騒がれるのも厄介だから・・・・・ちょっと寝てろ」
「ぐあッ！」
聡華はパッと喉を掴んでいた手を離すと同時に、素早く聡也の鳩尾に左拳を叩きこむ。
気を失った聡也は力なく冷たい地面に落ち、それを確認して聡華は

ＩＳを待機状態に戻すと聡也の服を漁り始めた。
「えぇっと・・・財布ん中じゃねぇな・・・・・あ、こっちか」
聡華は聡也のジーパンの内ポケットから、シリンダーカードと起動キー(イグニッション)を取り出しニヤリと笑う。
「・・・・コイツは預かっとくぜ、ちっと必要なもんなんでな」
聡華は倒れた聡也を残し、路地を後にする。
事態はゆっくりと動き始めていた。

◇◆◇◆◇◆

聡也君とロッソちゃんを狙ってくるはずだからしっかり見張ってなさいよ？　特にロッソちゃんの方をね」と言われた。
そうまさにこの現状だ。
言われておきながら、このザマとは情けないが後悔しても始まらないのも事実。
・・・・でも、どうしてロッソちゃんを・・。
あの二人は自分のＩＳを持っているはずだし。
何かをしでかすのなら、別にロッソちゃんを使わなくたって・・・。
「おい、理！」
「あ、聡華」
理は考えを中断して聡華の方へ身体を向ける。
聡華は理のすぐ横へやってくると、肩を上下させ息も整えないまま理に尋ねた。
「どうだった？」
「・・・駄目ね、そっちは？」
「・・・はぁ、はぁ・・同じくだ・・はぁ、はぁ・・・もうこのアーゲードに居ないんじゃねぇか？」
「えぇ・・・それは私も同意見よ」
「ど、同意見ってお前なぁ・・」
余りにサラリと言われ過ぎて、元々息が上がって少し苦しそうだった顔が苦笑いで歪む。
「恐らく、もうこの商店街には・・居ないでしょうね」
「・・・じゃあ、どこへ・・」
「それは、分からないけど・・・」
「っち、頼りになんねぇなぁ」
「あなただって少しは考えてよ！」
まったく・・・変な時はリードするくせに重要な時はこっち任せなんだから。
でも・・・一体どこに・・・・。
どこにと言えば・・・聡也君は？

「ねぇ、聡華、聡也君見た？」
「あぁ、いやあいつも見なかったな・・・」
「・・・聡也君って、ロッソちゃんが走り去ってからすぐに追いかけた？」
「え、あぁえぇと・・・多分そんなにすぐじゃなかったと思うぜ？」
実は理は、あの時まっ先にロッソを追いかけたのだが見失ったと判断して、先に聡也を目の届く範囲に置いておこうとロッソと聡也が分かれた場所まで一度引き返したのだ。
結局その時には聡也はおらず、優先順位の高いロッソを再び捜索し始めたのだが・・・。
だとするなら、おかしいわ。
私が戻るまで時間にして精々三、四分程度。
聡也君が逆方向に走るとも考えにくいし・・。
ま、まさか！
その時遠くから、一台の救急車の音が聞こえた。

頬を嫌な汗が流れて行く。
「・・・その間か・・・！！」
「え、どういう事だよ・・おい」
「あの救急車・・・恐らく聡也君よ」
「なんだって！？」
「多分、彼が居た場所と私が居た場所の間のせまい路地ね・・そりゃ見つからないわけだわ」
「だから・・・どういう意味・・」
「ひとまず行きましょう。聡也君が見つかっただけでもまだ良かった」
「・・・おいおい、自己完結すんなよ」
聡華は、救急車のサイレンの音のする方へ駆け出していく理をため息交じりに追いかけた。

場所はやはり理が思った通り、ロッソと聡也が分かれた場所からすぐの路地裏。
理と聡華は野次馬の人ごみを掻き分けて、その路地の中へ入る。
そこでは、今まさに聡也がストレッチャーに乗せられて病院へ搬送されるところだった。
「あの、すいません！　その子の関係者なんですけれど彼の容体は？」
言いながら理はＩＳ学園の生徒手帳を見せる。
聡華もそれに続いて学生証を提示した。
救急隊員は一瞬目を見開いたが、すぐに聡也の容体について話し始めた。
「とりあえず目立った外傷は見られないけれど、何か大きなもので首を締めあげられてその後鳩尾を思い切り殴られたんでしょう・・・。まぁ命に別条はありません、安心してください」命に別条はない。その言葉を聞けて二人とも胸をなでおろした。
「それで、これから一応検査のために病院に搬送するのですが。関係者とおっしゃられるのでしたら・・・救急車にご同乗されますか？」
「・・・どうするよ、理？」
「・・・・そうね、まぁでも二人乗って行っても・・・ね」
「じゃあ・・」
「あなた乗っていきなさい。私は少し調べ得たい事もあるから。何か分かったら私の携帯に電話してきて」
聡華は、頷くと救急隊員に連れられて救急車に乗り込む。
そして救急車は、聡也と聡華を乗せサイレンの音と共に走り去った。
騒動も聡也が搬送された事で、次第に収まっていき野次馬の人ごみも自然と消滅していく。

・・・・さて。
救急車を見送った理は再び路地裏へと入りしゃがみ込む。
・・・何かないかしらね。
それはもちろん、現場検証のためだ。
と言ってもそんな大した事をするわけではないが。
・・・ん？　これは・・・あ、あの時の木片。
なるほどこれで、気絶させようとして失敗して・・ＩＳを・・。
先ほど救急隊員の言っていた何か大きなもので首を・・・というのはまぁ、十中八九ＩＳの部分展開だろう。
・・・・けど妙ね。
ＩＳを展開出来ない聡也君に対してＩＳを部分展開して挑んだのは確かに攻め方としては間違っていないけれど・・。
そんな目立つ行動をしてしまったらわざわざ路地裏におびき寄せた意味が。
別に自分の方が優位な立場なのだから、何もそこまで焦る必要も。
・・・焦る？
待てよ。
ひょっとして聡也君を気絶させるのは焦らなくちゃいけない程に重要なファクターだった・・・？
いやでも、何のために？
相手はロッソちゃんを既に手中に収めているはずだ。
だったら別に聡也君になんて構う必要はない。
・・・何か引っかかるわね。
理は妙に引っかかる違和感の正体を考えながらゆっくりと立ち上がった。

チャリーンッ・・・
あら、お金でも落としたかしら・・。
理は音の下あたりに視線を動かしていく。
するとそこには、お金は無かったが代わりに小さな鍵が落ちていた。

理はそれを拾い上げる。
・・・・これ、何かしら?
自転車の鍵・・・にしては落ちてる場所が不自然よね。
理は、とりあえずその鍵をポケットへしまって色々と整理をしながら商店街の通りに足を進めた。
時間は早いものでもうすぐ三時を回ろうとしており太陽もやや傾き始めている。
刻一刻とその時は近づいている。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ほら、聡也」
聡華は聡也に、?聡也の?シリンダーカードを聡也に手渡す。
それは、もちろん?ホワイトアウル?のシリンダーカードである。
「ありがとうございます、姉さん」
「でも、なんか回りくどいやり方だよな」
「ま、それは仕方ありません。それだけ博士も慎重なんですよ」
「慎重も度が過ぎれば、ただ回りくどくて時間無駄にしてる気がするんだがなぁ」
聡華は、自分達から離れて公園のベンチに座るロッソを一瞥する。
大体、何なんだよあいつ。前と全然雰囲気違うじゃねぇか。
確か以前聡也と戦った時は、もっと荒っぽくてよく話す奴だったよな。
それが何の抵抗一つしねぇってのはちと疑問だぜ。
聡華はそんなロッソに対して何の警戒もしない聡也に耳打ちした。
「なぁ、あいつほんとに大丈夫なのか?　ここまでお前に付いて来てるんだからまぁ大丈夫だとはおもいてぇんだが・・・?戦える?のか?」

「何言ってるんですか？　むしろ今の彼女にはそれしかできませんよ」

「は？　そうなのか。あたしにゃどうもそうは見えねぇけど」

「姉さん、彼女が一体どういう人物か知ってますか？」

聡華はその質問の意味がよく分からず、首をかしげた。

どういう人物？

・・・・どうって。

「気性が荒いとか、口が悪いとかか？」

「・・・・まぁそれは姉さんとあまり遜色ないところですけどね」

「相変わらずさらっと、きついこと言ってくれんな」

「まぁ、それはいいとしていいですか姉さん。彼女はロッソ・ミオネッティという人物のもともとの人格なんですよ」

「・・・・だったらなんだっていうんだよ」

聡也はまぁとにかく聞いててくださいと、聡華を制して言葉をつづけていく

「ですが、今その人格はＩＳを起動させた時にしか顔を出さないつまり良くも悪くも戦闘向きの人格と言えます」

「・・・・ま、まぁそうだな」

「まぁ、普段はもう片方の人格が本来の人格のリミッターとして若干抑え込んでいたようですが今はそれもありません。理性の無くなった人間はブレーキのない車と同じですよ。一つの方向へ思いきり押してあげることさえできれば・・・・後は・・・わかりますよね？」

「なるほど・・・ね」

聡華はうなずくともう一度ロッソを見やる。

にしても、ここまで人格っていうのは変るもんかね。

片方の人格が無くなったからとはいえ・・・。

ま、いいか。

自分はやることをやるだけだしな。

「で、まぁあいつのことは分かったが、その先の連絡はあったのか

？　あたしらが聞いてたのはここまでだろ？」
「えぇ、さっき博士からちょうど返事もありましてね・・・ちょっとなかなかに面白いものがあるみたいです」
そう言って聡也は携帯電話の画面を聡華に見せる。
どうやら自分がここに来る前に叶に連絡をしていたみたいだな。
そこには一通のメールが表示されていた。
「え～っと、何々・・・・『やぁ、首尾よくいっているみたいで良かったよ。さて・・・君たちにはこれからある場所であるものを取ってきてもらいたいんだ。反応が正しければ必ずあるはずだよ・・・Ｎの三個目のコアがね・・・。場所は添付しておいたからそれどおりに。じゃ、健闘を祈っているよ』――――って三個目のコアだと！？」
おいおい、まじかよ・・・。
ＩＳ－Ｎのコアってのは？ホワイトアウル？？ブラックアウル？の二つだけじゃねぇのか？
Ｎの技術は、既に外部にもオープンにされて多くの研究機関がそのデータを持っている。
だがそのどこにもＩＳ－Ｎのコアが三個もあるなどという記載はないはずだ。
当然だ。
オープンにされた情報にそんな記載がなかったから。
だというのに三個目のコアだって？
・・・あのヤロウ・・冗談にしちゃ性質が悪いな・・。
「えぇ、だから博士は僕たちをハワイに飛ばさず、わざわざこっちへ寄こしたんですね。Ｎのコア・・ですか。まぁ確かにこれは手中に収めておいた方がいいかもしれないですね」
「まあな、その反応ってのが正しけりゃ・・・・だろ？」
「正しいですよ・・・博士がおっしゃっているんですから」
「・・・どうも、あいつはなぁ・・」
聡華は好きになれない。

何を考えているのかよくわからないし、前も書いたが聡也に変な検査ばかりしやがる。
・・まぁ、いざとなりゃあたしが守ってやるさ。
「ふふ、全く姉さんは・・。ま、いいですよゆっくりでね。さて行き先も決まったことですし・・ぼちぼち行きましょうか。日も傾いてきましたし」
「あぁ、そうだな・・・。で、どうするんだ?」
「どう?」
「だからどう攻めるんだってことだよ、まさかあたしら三人で・・・」
「いいえ、その必要はありませんよ。作戦は前の無人機のコアの時と同じです。僕と彼女が派手に暴れて、姉さんはその混乱に乗じて潜入してもらう。これがベストでしょう。それにこちらにはコレがありますからね」
聡也は言って?ホワイトアウル?のシリンダーカードを掲げる。
そのカードとこの作戦と一体何の関係があるのか・・・。
実は聡華は、?ホワイトアウル?のシリンダーカードを奪った時点ではそれを何に使うか聞かされていなかった。
とりあえず、取ってきてと言われたから取ってきただけなのだ。
小首を傾げる聡華に聡也は?ホワイトアウル?のシリンダーカードを揺らしながらフフッと笑う。
「わかりませんか?　この白い翼は赤き闘士の手綱としてはこの上なく有効なんですよ?」
「・・・あぁ?」
「はぁ・・・姉さんはもう少しだけ色恋沙汰に興味を持つべきですね。いいですか、ロッソ・ミオネッティは一条　聡也のことが好きなんですよ?」
「・・・あ、あぁなるほどそういうことか!」
簡単なことだった。
要は好きな人の言うことには従う、少々乱暴な言い方だが聡也が言

わんとすることはこれだろう。
つまり聡也は自分自ら？ホワイトアウル？に搭乗して、ロッソ・ミオネッティの行動を制御するつもりらしい。
使用者を限定しないＩＳ―Ｎだからこそとれた作戦だろう。
でも改めて考えると、少し・・・いやかなり内容的には鬼畜なきもするな・・。
しかしなんにしてもようやく納得した聡華に聡也は、また溜息をひとつ漏らした後聡華に聞こえないぐらいぼそりと呟いた。
「・・・・・まぁ、色々無知なおかげで扱いやすいというものありますがね・・・」

作戦の概要をおおむね把握し、息巻く聡華を見る目は、いつになく冷たいものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

太陽は南中をとうに越えて、街は少しづつオレンジ色に染まり始める。
それは当然この街にある病院も例外ではなく、ブラインドを下ろし更にカーテンまで締めていると言うのにオレンジ色の光はそのわずかな隙間から部屋までもオレンジ色に染め始めていた。
その病室には、ベッドに横になる一人の少年とベッドのすぐわきにある椅子に座って腕を組む一人の少女がいた。
言うまでも無く、一条　聡也と鳥越　聡華である。
聡華は、時折いまだに目を覚まさない聡也を心配そうに見つめては、また目を閉じまた見ては閉じるを繰り返していた。
・・・・くっそ。姉さん姉さん呼ばれて鬱陶しい奴だがこうなっちまうと何だかこっちも気分が良いもんじゃねぇよな・・・・。

そこには、いつもの荒っぽく聡也を遠ざけたり、お前の姉さんじゃないと呆れたりするいつもの聡華は居なかった。
ただ純粋に後輩の身を案じている。
・・・・姉さんねぇ・・。
聡華はふと、以前の事を思い出していた。
以前とは、要するに聡也と会ってからの事だ。
いきなり初対面で姉さん呼ばわりされて、ＩＳで戦闘に発展。
まぁ第一印象は最悪だわな。
だがそれは、まぁこっちの話でよくよく考えてみるとコイツにとっては結構マジな話なんだよな。
コイツのいう姉ってうのはまぁ間違いなくあの時あたしが戦ったあの？紫燕？の操縦者だろう。
あたしにクリソツだったしな。
・・・どんな気分なんだろうな。自分の姉・・・言ってみりゃ身内だよな。
そんな続柄のヤツと、剣を交えなきゃいけないっていうのは。
自分は一人っ子だし、別に親とは仲も悪くない。
やっぱ、良いもんじゃないよな。
ってか第一こいつらがなんで戦ってんのかさえよく分からねぇし。
・・・姉さんねぇ。
聡華はまた同じような事を頭の中でつぶやく。
それと同時に首をもたげる、変な考え。
姉さん・・・あたしが・・・姉さんねぇ。
自分を姉と慕ってくる聡也に笑顔で返す自分の姿をほわわ～んと想像する。
・・・・結構良くね？
――――って、馬鹿！
聡華はかぶりを振って、その考えを振り払う。
何考えてんだあたしは・・・！
うぅ、思い返すだけで何だが身震いして気だぜ・・。

・・・でも・・・もしマジでこいつがそう言って迫ってきたら・・・。

自分の姉になってくれって迫ってきたら・・・あたしはどうすんだろうか？

それは決してなくはない可能性。

ともすれば聡華の方から言うことだって状況次第では考えられる事だ。

ま、一番なのはそう言うのが来ない事だろうけどな。

聡華は、ゆっくりと目を開けて再び聡也を見ると微かに動いたような気した。

――――ッ！

聡華はガバッと椅子から身体を起こすと聡也に向かって、はやる気持ちを抑えながら静かに声をかけた。

「おい、おいッ、目ぇ覚めたのか？」

「・・・・うッ・・・ん・・」

「大丈夫か？」

「・・・・ね、姉さん？」

「・・・・・・誰がだコラ」

寝ぼけてるんなら一発とも思ったが流石にココは病院で、コイツは外傷こそなかったが気を失って救急車で運ばれた身だ。

とはいえ、既に拳を握りしめている辺りが自分らしいと思うが。

「とりあえず、先生呼んでくっから、勝手に起きあがったリはすんじゃねぇぞ！」

聡華は早口で聡也に向かってまくしたてると、病室を後にして近くのナースステーションへ向かう。

走っている最中、聡華の胸の中はまるで実の弟が目を覚ましたかの様なそんなうれしい気持ちでで満たされていた。

もちろん本人は、それが何であるのかはよく分からなかったようだが。

◇◆◇◆◇◆

す。
すると、ふと時計が目に飛び込んでくる。
時刻はもうすぐ四時半を迎えようとしていた。
・・・・四時半か・・・。
・・・・って四時半!?
「ちょちょっと、先輩!　僕って言ったどれだけ長いあいだ・・・・いつつつッ!?」
バッと身体を一気に動かしたせいで、腹部を中心にして身体に痛みが走る。
鋭い痛みの後、ジンジンと鈍痛が繰り返しやってきて、僕は顔をゆがめた。
「あぁ、馬鹿!　お前一応怪我人なんだぞ?」
「で、でもロッソが!」
「ロッソは今あたしの同級生が探してっから大丈夫だよ!　良いからあんま激しく動くなっての!」
鳥越先輩は、僕の両肩を持って制し僕をゆっくりベッドへ横たわらせる。
抵抗したかったが、流石にこうまで痛みがあると抵抗どころか言い返すので精一杯だった。
「ったく・・・怪我人なら怪我人らしくしろってんだよ」
「・・・あ、あのそれで。先輩の同級生って言うのは・・」
「白鶴　理、風紀委員の委員長でなまぁソコソコ強いし大丈夫だって。それよか今はロッソもそうだが、お前の事だ」
え、僕の・・・?
鳥越先輩は、先ほど以上に真面目な顔つきで僕に尋ねた。
「お前、自分が気を失った時の状況覚えてるか?」
「えぇ、それは・・・はっきりと」
「よし、ちょっとその事について話してもらいてぇんだが・・・」

「・・・と、言うわけなんですが・・」
「なるほどね・・・。ってことはお前を気絶させた時は紫燕(あの)の操縦者(女)だけだったんだな」
「はい、そうですね」
確かにあの時は姉さん一人だった。
・・・でも今考えてみると少し変な気もする。
そもそも姉さんはあんなところで何をしていたんだろうか。
そしてどうして僕を気絶させる必要が・・・？
しかし、何にせよ姉さんが単独で動くとは考えにくいから、多分その指示を出している人物・・・？彼？が居るのは間違いないだろう。
だとするなら、ますますこうしちゃいられないと言う気持ちが強くなる。
僕を襲ったと言う事は、ロッソにも手を伸ばしている可能性は充分に考えられる。
くそ、せっかく博士に起動キー(イグニッションキー)を送ってもらったばかりなのに・・・ってあれ？
僕は、自分のポケットを横になりながらではあったが探る。
左右のポケット、そして尻ポケットも。
だけど・・・・。
な、無い！
そんな、まさか！？
みるみる青ざめていく僕の異変に鳥越先輩も気がついて、焦り気味に声をかけてくる。
「どうした？　おい、顔色が悪くなった見てぇだけど・・気分でも悪いのか！？」
「い、いえ・・・そうではなくてですね・・・・その・・・えぇと・・・」

「だから何だよ！？」
鳥越先輩が、早く言えと苛立ちを募らせた声を上げる。
いや、だって早く言えって言われても自分だって可成り混乱してて・・・ッ
僕は顔をひきつらせながらも息を整えると、その整った息がまた乱れぬうちに一気に言った。
「ほ、ホワイトアウルが・・・・な、無い・・」
「はぁ！？」
鳥越先輩も顔が引きつりそして青ざめる。
当然だろう。
現代兵器の最先端。
性能にもよりけりだが単機で世界と戦えるだけの力を、？奪われた？のだから。
「お、おい！　お前冗談だろ！？」
「そんな性質の悪い冗談言いませんよ、事実です、事実！」
「・・・な、なんだとぉ～・・！」
「僕のズボンのポケットに入れておいたシリンダーカードと起動キー（イグニッション）全部・・・それが、まるっと無くなってて・・・」
「そ、そんなの・・・お前・・・」
もう鳥越先輩も予想がついている。
いや、むしろそれ以外に考えられない。
「お前を気絶させたヤツ意外に持っていくやついねぇじゃねぇか！！」
そう、間違いなく？ホワイトアウル？は持ち去られたのだ・・。
・・・・姉さんに。
なんてことだ！
いくら相手がＩＳを部分展開していたとはいえ、一番起こしてはいけない問題を起こしてしまった・・。
ＩＳ－Ｎは基本操縦者を登録してしまえばだれでも扱う事の出来る代物。

ＩＳのように女性しか・・・といった縛りが無い分汎用性に富むが敵にわたってしまった時は簡単に自分たちに牙をむいてくる。
それが兵器だと言ってしまえばそれまでなのだが。
「あぁ、くそっ！」
僕は、ベッドを思い切り殴りつけると、再び身体を起こす。
もう痛みなどどうでもいい。
頭の中はもう奴らを止め無ければいけないと言う思いでいっぱいだった。
しかし、それを許す鳥越先輩では無かった。
鳥越先輩は僕がベッドから降りたのを見るやガッとその肩をつかんだ。
「あ、コラ！　馬鹿野郎が何やってやがる！」
「は、離してください！　い、行かないと！！」
「馬鹿言ってんじゃねぇ！　何度も言うがてめぇは怪我人なんだぞ！」
「怪我人だろうとなんだろうと、僕にはＩＳ－Ｎを奪われた責任も・・」
「だから、そう言うのは今は置いとけって！　第一お前行くにしてもあいつらの場所が分かって・・」
と、鳥越先輩が言いかけた時だった。
スズーンッ！！

「「！！？？」」
二人揃って窓を振り返る。
鳥越先輩は僕から手を離すと、カーテンとブラインドを素早く開いた。
「あれはッ！？」
僕たちが見た光景それは、オレンジ色の世界に浮かぶ二つの影と立ち上る爆煙。
あれは・・・あのシルエットは・・！！

僕は窓の外の光景に目を凝らす。
そしてその二機のシルエットを完璧に判別できた時、僕は血の気が引いていくのが分かった。
分かったからこそ僕はその光景から目を背ける。
いやだ、認めたくない。
きっと見間違いだ、聡に決まっている。
こんな遠気から見ているんだ。
そうさ、だってあれが・・あれ・・が・・・。
僕はもう一度、恐る恐るゆっくりと確かめる様に目を二機のシルエットへと向ける。
はぁ、はぁッ・・・息が荒くなっていく。
違う・・違う・・・違う違う違う違う!!!!
だが、そうやって何度も否定しても目に入ってくる情報がその否定を更に否定する。
?ホワイトアウル?と・・・・?ペルフェット・エスダーテ?・・・・。
ぼ、僕の所為だ・・僕がロッソを泣かせてしまって・・・そして僕が気絶させられて・・結果がこれだ。
一体、僕は何をやってるんだ・・!!
と、とにかく、責任を取らなくちゃ・・
僕は息を整えることも忘れ、重たい身体を引きずり病室を出ようとする。
だがまたしても、鳥越先輩が僕をつかんだ。
振り返り鳥越先輩の顔を見やる。
その顔は、さっきまでの焦った表情ではなく、真剣なまなざしだった。
「・・・離してください・・」
「駄目だ・・・そんな状態のお前を行かせられるか」
さっきから聞いてれば、そんな状態そんな状態って!
僕は思わず声を荒げた。

「僕の状態!?　分かってますよ、自分自身の事なんですから!
でも行かなきゃいけないでしょう!　僕の所為で・・、責任もあるし・・・何よりあそこには僕のＩＳ－Ｎもそしてロッソも居るんですよ!!」
「馬鹿野郎が!!　あたしはんなこと言ってんじゃねぇんだよ!!」
「・・・っぐ・・・!?」
鳥越先輩の凄い剣幕に推され、言葉がつまる。
でも、でも・・ッ
「あたしが今言ってんのは、お前の身体の事なんかじゃねぇ。お前の気持ちの事だよ」
「き・・も・・・・ち?」
「お前・・・今、相当キてんだろ?」
「・・・ッ、そ、それは・・」
「そんな自分を追い込んだ状態で、何ができる!　それに責任が、とかぬかしてやがったが自分を責めきったヤツが取れる責任ってなんだよ?　死ぬ気か?」
言い返せなかった。
鳥越先輩を言い負かすだけの言葉が出てこない。
だって・・責任は取らなきゃいけないし・・・。
だが肝心のどうやって責任を取るのかが出てこない。
何を持って責任を取ったとするのか。
言い淀む僕に鳥越先輩が大きくため息をついた。
「・・・はぁ、一回落ち着いて良く考えろ。確かに飛び出す事は悪い事じゃねぇ。あたしだって熟考するタイプじゃねえからな。ただ、考えの一つや二つまとめてけ。飛び出すのはそれからだろ?」
「考えを・・・まとめる・・・」
「そうだ・・・お前は何がしてぇんだ?　行ってどう責任を取る?　何に対して、誰に対して?」
どう、取るか・・・。
誰に・・・

何を。
僕は、息を整えると頭をクールダウンさせる。
個人的に、かなり時間のかかる問題だと思っていたのだが頭を冷やして考え直してみると、意外に簡単な答えが浮かんだ。
あぁ・・・そうか・・・。
それでいいんだ。
僕は・・・。
そうだ。
それでいい！
いや、それしかない！
僕はバッと鳥越先輩を見る。
鳥越先輩は、肩目を閉じニヤリと笑った。
「分かったか？」
「・・・・はい」
力強く頷く僕に、鳥越先輩はまた大きくため息を漏らした。
「全く・・・先生にゃ後で言い訳考えとかねぇとな」
「・・そうですね・・なんって言いましょうか・・」
「んーーーー、そうだな」
「え、う、うわちょ、ちょっと！！」
鳥越先輩はいきなりの事で驚く僕を尻目にヒョイッと背中に背負う。
俗に言うおんぶというやつだ。
「世話のかかる後輩が、散歩したいって言ったからって理由でいいだろ！」
鳥越先輩は、へへッと笑うと僕を背負ったまま病室を後にする。
ちょっと恥ずかしかったけど、これはこれで何だか・・・心地いい。
それが、先輩が姉さんに似ているからなのか、普通に先輩がそう言う事に慣れているだけなのかは分からないが僕は先輩の暖かい背中と心地の良い揺れに身をまかせながら、現場へと急ぐ。
日は更に傾き更にオレンジ色の濃さを増す。

向かうはこの街の変電所。

そこを、襲撃した者達。
そこで、巻き込まれた者達。
そして、そこへ向かう者達

役者は今、完全に揃おうとしていた。

第３１話：Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　～揃う役者達・事件はこうして始まった～（後書き）

何が、次回は普通ですだｗ
普通にＳｉｄｅ　Ｏｗｌをお送りしました・・
すいません・・後が気なんて当てにしちゃダメですよ、どうもしるくです。

まぁですが丁度ＳｔｒｉｋｅとＯｗｌで3話づつなので丁度いいと言えば良いですよね??

次回こそ次回こそ普通に戻ります。
ってか、早くオーシャンズに行きたい自分（自分で書いといてｗｗ

まぁまだ少し長くなるかもですが、それこそ長い目で見てやってください。
でも３２話でお会いしましょう。
さよならッ！

第３２話～二人、場所は違えど前を見て～

そ、そんな馬鹿な！？
僕は目の前の光景をどうやってもすんなり受け入れる事が出来なかった。
理解できないわけではない。
むしろその逆で、すんなりとその影が何なのか理解できたからこそ、そしておおよそ予想できていたからこそ、今のこの現状を受け入れる事が出来なかったのだ。
こんな、街中でＩＳそれも三機とは・・・！！
僕の隣に居るセシリーも、顔が完全にひきつっている。
「と、とにかく建物の中に！！」
僕はまだ外にチラホラ残っていた数名のチャラ男と兎束、セシリーに向かってプレハブ小屋の中へ入るように叫ぶ。
全員が入った事を確認して、ドアを閉めるとそのドアの窓から外の様子をうかがう。
・・・アレは・・。
三機のＩＳは一機のＩＳが飛び上がるのを追いかける様に空へ上がり上空で睨みあっている。
そしてその三機のＩＳはどれも見覚えのあるものであった。
「・・・あれは、ローラさんに、ロッソさんそれに聡也さんですわね・・」
「うん、姉さんは間違いなくあの二機を止めようとしてるみたいだけど・・・どうして二人がこんな事・・・」
その疑問はセシリーも同じだったようで、手を顎に首をかしげている。
そもそも、なんでここをＩＳなんていうもので襲う必要があるんだろうか。
ＩＳは確かに強力な兵器である。

ＩＳには現存するどの兵器もかなわない。
戦闘機も、戦車も、軍艦も。
機関銃も、砲撃も、ミサイルだって。
いや、ひょっとしたら戦術核レベルの物を持ち出しても勝てないかもしれない。
それぐらいの代物だ。
そしてそれを扱う者は、少なからず訓練を受けているはずである。
・・・・・まぁ、僕は・・・・その・・・ね。
と、とにかくだ。
聡也やロッソは確実にそれなりの訓練を積んでいるはず。
並みの連中相手に、遅れを取るとも思えないし・・・。
情報が無くて相手が分からないにしても、だったらどうして初めからＩＳを起動させる必要が・・・。
う～ん・・・分からない事だらけだぞ・・・。
まぁ・・・毎度の事でもあるけど。
「アル！　考えるのも良いですけど今はそれよりも・・・ッ！」
「え、あぁ。そうだねとにかくあの二人を止めないと！」
セシリーの一喝で、頭を切り替えると僕とセシリーは兎束達をなるだけプレハブ小屋の奥に居る様に促して外へ出る。
僕はセシリーを一瞥すると、セシリーはその視線にゆっくりと頷いて返した。
そして僕は真っ二つにされた愛機（ストライク・バーディ）に目を落とす。
・・・アレ以来、まともに起動させてないけど。
でも、アクセスを拒否している以外は基本的なデータ抽出は出来たと言っていたし、特に起動させるなとは言われていない。
それに今は、そんな事を気にしている場合でもなかった。
視線を愛機（ストライク・バーディ）から空を舞う三機に移す。
流石はモンド・グロッソで総合二位に輝いただけの事はあり、二機相手でも手いっぱいという事は無かったが、それでも向こうは自由に攻撃出来る。

しかし姉さんは周辺の被害の事も考えるとそうそう手荒く攻撃が出来ない。
更に言えば。相手が撃った流れ弾も出来る範囲で弾きながらの戦闘だ。
こんなの、いくら姉さんでも何時か絶対に限界が来てしまう。
そう思うと、悠長に考えている時間なんて無かった。
僕達は同時に叫ぶ。
「行こう！　ストライク・バーディ！」
「まいりますわよ！　ブルー・ティアーズ！！」
一瞬で光が僕たちを包み込む。
そして、空に？一機？の鮮やかな青色のＩＳが舞いあがった。

って・・・・・え？

「ちょ、ちょっとアル！　何をしていますの！？」
セシリーが僕の方を振り返って叫ぶ。
その顔は驚きというよりは、疑問に近かった。
だがそれは僕も同じ事だった。
確かにＩＳの起動に成功はした。
ハイパーセンサーも問題なく動いている。
だが・・・ただ身体が、一挙手一投足がとんでもなく重たかった。
別にパワーアシストの故障では無い。
「な、なんだコレ！？　こんなのファーストシフト以前以下じゃないか！？」
いくら重火砲・重装甲の鈍足ＩＳと家でこれは異常である。
それに加えてスラスターの動きも緩慢で、フレキシブルスラスター

の名が泣いていた。
「うぅッ、くそ一体何がどうなって・・・」
『・・・・・だ・・・の・・・じゃ・・・』
「・・・・え!?」
わけがわからずただ、焦る僕の耳に・・・・・、いや正確には頭の中にどこからともなく声が響く。
それは、優しくだがそれでいて裏がある事を匂わせる不思議な声色。
初めは断片的にしか聞き取れなかったが次第に言葉が繋がって行く。
『まだ・・・の・・・じゃない・・・』
「さ、さっきから誰が・・・」
僕は居ないと分かっていながらも周囲をキョロキョロと見回す。
当然誰もそこには居らず、一番近くに居るのは少し焦りながら僕を見下ろすセシリーだけ。
繰り返し響いたその言葉は、ようやく意味のある言葉になった。
『まだ、?その時?じゃないよ』
「――――――――――え!?」
はっきりと聞こえた。
そして聞き取れたと同時に、ストライク・バーディの装甲が光となって霧散する。
「なッ!?」
「嘘!?」
セシリーと僕の驚愕の声が重なる。
「アル!　本当に何をやってますの!!」
「僕にもわからないよ!　なんか頭に声が響いたと思ったら次にはＩＳが消えてて・・・・だからその・・・・あぁもう!!」
僕は苛立って、自分の太もも辺りをパンッと叩き、セシリーにのまま勢いで言い返した。
「とにかく、セシリーは姉さんの援護に行って!!」
「でも!」
「今は、それどころじゃないでしょ!　僕もとりあえず出来る事を

するからッ」
なんでこうなったのかは、今はどうでもいい。それを深く考えている暇なんて無いのだ。
僕はセシリーにピシャリと言う。
セシリーも、これ以上言い争いを続けるのは無駄だと判断し姉さんのもとへ一直線に飛ぶ。
僕はそれを確認すると、ふぅっと息を吐き気持ちを落ち着かせて考える。
・・・セシリーには、ああ言ったけど。

今の僕に何ができる？

僕は悔しげに、オレンジ色の空を見上げる。
僕はまた、大事な時に誰の力にもなれないでいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ッつぅ！」
ローラは？ホワイトアウル？の荷電粒子砲を身を翻して避け、間髪いれずに遅い来る？ペルフェッド・エスダーテ？の蛇腹剣（テンポラーレ）をアサルトライフルの銃身で弾き距離を置く。
ここまで、動きが制限されちゃうときついわね・・・！
ローラの持ち味は何と言っても、高い機動力にある。

機動力で他を圧倒してきたからこその世界二位であり、射撃部門でのヴァルキリーなのだ。
だが今回その機動力は思わぬ形で制限されてしまった。
そう、それはここが市街地上空であると言う事。
自分が下手に動けば流れ弾が市街地に被害を及ぼす可能性もあるし、逆にだからこそ自分も下手に銃を撃てない。
既にローラは、この戦闘が始まった直後、千冬にこのエリア一帯の封鎖および住民に退避を打診したがそれもどこまで進んでいるのか。って、泣き言言ってる暇があったら、なんとかしなさい自分って話ね！
ローラは距離を取りつつ二機の下にまわりこみサブマシンガンとアサルトライフルのトリガーを引く。
パッと二手に分かれる？ホワイトアウル？と？ペルフェッド・エスダーテ？。
大体、この二機がと言うよりこの二人がなぜこんな凶行に及んだのか分からない。
それにさっきから、得意のこの口で色々と言葉を投げかけているが一向に返事が返ってこないのも妙だった。
確かロッソと言う娘は、ＩＳを起動させるとかなり気性の荒い性格に変貌すると聞いた。
それがこの戦闘では信じられないぐらい静かなのだ。
まぁ、ローラはロッソの事を話でしか聞いていないから詳しい事は分からないがそれでも何かおかしいと言う事は感づいていた。
ローラは分かれた二機の間に機体を割り込ませると、左右に銃を構えて乱射する。
その銃弾に当たるまいと、高度を上げる二機。
ローラがその二機を確認した直後、青白い閃光がその二機に直撃する。
「えッ！？」
ローラは声を漏らすと、閃光が飛んできた方向を振り返る。

するとそこには、スターライトＭｋ－？を構えたセシリアの姿があった。
「セシリアちゃん！？　どうしてここに・・・」
「丁度私たち、この近くに居りましたの。緊急の事でしたのでＩＳの使用許可などは・・・・その・・アレですけれど・・・・」
「使用許可の件は今はどうでもいいけど、私たちってことは・・・あの子も？」
「えぇ、アルも居ますわ。あの変電所のプレハブ小屋に」
ローラはハイパーセンサーで、その建物を拡大する。
外に人影は見えなかったが、まぁセシリアが言うのだからあそこに弟は居るのだろう。
・・・・って
「居るならなんであの子も来ないのよ？」
「いえ、一度はＩＳを起動させたのですが・・その何故だかすぐにＩＳが霧散してしまって・・・」
「なんですって？」
エラーでも出たのか・・・。
いやでも、確かに？ストライク・バーディ？は現状色々と問題はあったが起動してすぐに霧散するなんて問題は向こう（アメリカ）でも聞いた事が無かった。
詳しくは分からないが、明らかにおかしい。
あぁもう、どうしてこうわけわからない事が立て続けに、起こるのよッ。
ローラは心の中でひとりごちりつつ、頭を切り替えて視線を二機のＩＳに戻す。
とりあえず今は、あの二機をしっかり押さえなきゃね・・・・。
ローラはセシリアに目で合図を送り、それにゆっくりと頷いて返すセシリア。
そして？ストライク・ミラージュ？と？ブルー・ティアーズ？はほぼ同時に？敵？に向かってスラスターを噴かした。

◇◆◇◆◇◆

だがなぜだかそれだけでは、説明できないような気もした。
自分の心情を聡華は機敏に察して的確なアドバイスをくれた。
不思議だな・・・本当に。
やっぱりこの人は・・・。
「姉さん・・・・？」
「違うっての！！」
聡華は器用に背中の聡也を走りながらかかとで蹴りあげる。
太ももに軽い痛みを感じながら、一瞬目が合いお互いにフフッと笑う。
そして二人ほぼ同時に視線を前に移動させると立ち入り禁止の札がついたバリケードがあった。
両脇にはこのエリアを管轄している警察官もいる。
「っへ悪ぃ(わり)が通させてもらうぜ！　ＶＩＰ背負ってるもんでな！！」
聡華は唖然とする警察官を他所にそれを何の迷いも無く飛び越える。
ここを超えたということは、もう目的地は目と鼻の先・・・。
上空に？四機？のＩＳも見える。
とにかく今は上を・・・前を向いて、やるべきことをできることを、するだけだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

僕はついさっき姉さんから連絡をもらった。
それはあの？ホワイトアウル？の操縦者は聡也では無く、あの学園を襲撃した犯人だという内容だった。
それを踏まえて僕は再びプレハブ小屋の外へ出て四機を見上げて考える。
敵はどうして、ロッソを利用したのか、そしてなぜＩＳという現代最強兵器を使ってこんなそれほど大きくも無い変電所を襲撃したのか・・・。
ここには確かにＩＳ関係といえば、千葉(ちば)　志穂音(しほね)がいる。

彼女は確かに天才といってもいいレベルの人物ではあるが、わざわざその一人のためにＩＳを使うとはいくらなんでも考えにくい。
そういえば彼女たちは以前無人機のコアを、奪取するべく学園に二度目の襲撃をかけてきた。
まぁまんまと、盗まれたわけだけど・・・。
でもあれは完璧に壊れていると織斑先生は言ってたし何よりそんな代物がここにあるとは到底思えない。
・・・じゃあ一体・・・何が。
僕は、兎束や志穂音と話した事をざっと思い返してみる。
おかしなところはなかったか、何か引っかかる所が無いか・・・。
う～ん・・・でも、やっぱりこれと言っておかしなところはないよなぁ・・。
それに大体、そんなものがあるのなら初めにそれを出す・・・は・・・ず？
・・・・ちょっと待てよ。
僕はポケットからさっき受け取ったメモリーカードを取り出す。
そしてコレを受け取った時の会話を思い出してみる。
？け～っきょくウチがほとんど一人で組み上げたようなもんだしねぇ・・。丸二日かかっちゃったよ・・？
あの時声色は確かにかなりサラッとしたものだったけど、意外に顔は本気だった。
本当に丸二日かけて苦労したんだっていうのがその表情からも見て取れたし。
でも・・・・。
？だったら、持って帰って調べといてよ？
ここだ。
そんなに苦労した物を、志穂音はやけにあっさりと僕たちに手渡した。
そしてそれを兎束も咎めも何もしていない。
使える状態にしておきたいって言ったのにもかかわらずだ・・・。

・・どうして。
・・・・いやどうしてじゃない。
そう、そうだよ。
そうなんだ！
そうだとしたら、まずい！
僕は、弾かれたようにプレハブ小屋の中へと急ぐ。
ドアを開けてまず飛び込んできたのは、完璧にのされたチャラ男たちだった。
それも一人二人じゃない。
この小屋に居たほぼ全員。しかも争った形跡が無いところをみると、チャラ男たちはほとんど一発でのされた事は容易に想像できる。
いくらチャラ男と言ったって体格は決して華奢じゃない。
僕は倒れてうずくまるチャラ男達の間を縫うように地下への階段へと進む。
皆倒れてはいるが、特に命にかかわるような外傷を負っている人は居ない。
それよりもだ、今は恐らくこの先に居るであろう人物・・・それが一番の問題だ。
僕はもう一度、チラッとうずくまるチャラ男達を見やる。
正直、今の僕が正面切って喧嘩してもこの人たちには勝てない・・・。
そんな人たちを、一蹴した人物がこの下にいる。
一筋の汗が僕の頬を流れた。
正直言って怖い。
何より痛い事は好きじゃない。
それは今も昔も変わらない。
でも僕はセシリーに言っちゃったもんなぁ・・。
出来る事をするって・・。
僕はフウッと息をひとつ吐いて気持ちを落ち着かせると、身をかがめて一歩づつ階段を下りて行く。

十数段の階段がこの時ばかりはやけに長く感じた。
そして階段を下りあのムワッとした蒸し暑さが身体を包む。
僕は階段の降り口から部屋の中の様子を覗く。
するとそこには、？鳥越先輩のそっくりさん？と志穂音の姿があった。
僕は飛び出そうとも考えたが、少し様子が変だった。
とてもじゃないが、？そっくりさん？と志穂音が？敵対しているようには見えなかったからだ？
むしろ何か・・・話し合いというか・・・商談というか・・・交渉というか・・・
とにかくそんな感じなのだ。
僕は少し様子をみる事にした。
それと同時に何だか今すぐにでも闘うんだと意気込んできた自分が妙に馬鹿らしくもなっていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・随分と荒っぽい手を使うんだね」
「知るか、これ考えたのは聡也だ。あたしゃ知らねえよ」
志穂音の不機嫌な発言に、聡華も同じく不機嫌で返した。
聡華はここへ、かなり乱暴に進入している。
プレハブ小屋のチャラ男達を全員のしたのも彼女だ。
で、志穂音の所に来てみれば抵抗どころか逆に招き入れられてしまった。
肩すかしもいいところである。
更に詳しく聞いてみれば、あの女（かなえ）から既に連絡が来ていると言うのだからもう苛立たずには居られなかった。
何より毎度のことながらあの女に利用された自分に腹が立つ。
聡也もこの事を知っていたのだろうか・・・？

そう思うといくら聡也でも流石に腹を立てずには居られなかった。
「・・・どうでもいいけどさ、あの人礼儀をわきまえた人が来るって言ってたけど・・君全然そんなじゃないね」
「・・・あの女の事はどうでもいいんだよ・・。あたしはてめぇと長話する気はさらさらねぇ」
「ウチだって無いさ。とっとと帰ってほしいぐらいなのにわざわざ招き入れてあげてるんだから感謝してほしいよね」
「もういい。あの女から聞いてんだろうが。ほれ、例の物出せよ」
聡華がせかすと志穂音は座っていた机の一番下の引き出しの鍵を開けて中から小さい白い球体を取り出した。
それは一見するとただの鉄球のようだったが、鈍く光るソレはどことなく神秘的な力に満ちている。
球体を見た聡華はほぉ～っと声を漏らした。
「確かにコアだな・・・。そこだけは事実かよ・・・ったく」
「当たり前じゃん・・・設計図送りつけといて何言ってんの？」
「だからあたしは知らねぇんだっての・・まぁいい・・とりあえずそれこっちに渡せ」
「ほい」
志穂音はコアをポイッと放り投げる。
それはまるで、ゴミをゴミ箱へ放り投げる様に雑なものだった。
聡華はコアを落とすまいと慌てながらも両手でしっかりと受け止める。
「馬鹿野郎！　落っこちたらどうすんだよ！」
「別に～」
悪びれる様子のない志穂音に苛立ちながらも聡華は受け取ったコアを改めて吟味する。
それと同時に、再び脱力感が身体を襲う。
ったく・・・本当につまらねぇ・・。
こんなのだったら別に、あたし一人でもできた・・・・って、あん？
と、そのとき聡華はこちらを伺う一つの気配を察知する。

そして、聡華を襲っていたつまらなさからくる脱力感がスッと消えていくのがわかった。
チラッと、志穂音を見やる。
別段変わった様子がなく、きょとんとしていることから、これは別に志穂音が仕組んだとかそういう訳ではないらしい。
自然と笑みがこぼれてくる。
そして聡華はその人物に向かって叫んだ。
「・・・おい、出て来いよアメリカ野郎・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・おい、出て来いよアメリカ野郎・・・」
・・・はぁ～・・・。
いつかは見つかるだろうなぁとは、思っていたけど・・・予想外に早かったなぁ。
僕は半歩横にずれて、自分の姿を敵にさらす。
「あ、アルディ!?」
僕の登場に志穂音は驚き?そっくりさん?は僕を意味ありげな笑みで睨んでいた。
「おう、てめぇとは久しぶりだな・・・」
「・・・そうだね・・・僕はできれば会いたくはなかったけど・・・」
表面上平静を装うが、内心は心臓バクバクものである。
以前彼女と面と向かって平然と話せたのは、少なくともＩＳという一つの力があったからだと今更ながら理解する。
今こっちには何のアドバンテージも、イコールになる要素もない。
言ってみればそれだけのことなのだが、それだけのことが今の僕にはたまらなく怖かった。
「そうか・・・？　そりゃ残念だなぁ。あたしはよ・・・・会いたかったぜ?」

?そっくりさん?は手に持っていたコアを近くの机の上に置き、ゆっくりとこっちに歩み寄ってきて・・・
「がッ!?」
「あの時の借りは返させてもらわねぇとな!!」
彼女の膝が、容赦なく僕の腹部を蹴り上げる。
息が出来なくなるほどの、強烈な一撃に僕はいとも簡単に崩れ落ちる。
「ちょ、ちょっといきなり何をして・・・ッ!?」
駆け寄ろうとした志穂音に対して、?そっくりさん?は鋭い眼光だけで動きを制した。
そしてそれを確認すると、再び僕に向き直ると、未だに立ち上がれない僕の髪の毛をつかんで無理やり引き上げる。
「うぅ・・」
「このぐらいで伸びてもらっちゃ困るな、まだまだあたしの気はおさまらねぇんだからよ!」
そのまま僕を志穂音の方へ投げ捨てる。
いくら僕が小柄だといっても志穂音はさらに小柄である。
受け止められるはずもなく一緒に吹き飛ばされてしまう。
「いっつつつ・・・む、無茶苦茶するね・・彼女・・」
「そんなことより・・・ケホケホッ・・志穂音、大丈夫?」
「あはは・・・こんなのウチらじゃ日常茶飯事だから・・・ね・・」
志穂音はケラケラと笑う。
どうやら本当に大丈夫なようだが、よく笑っていられる。
?そっくりさん?ここまでやらかしてもまだすっきりしないらしい。
本当に欲求不満だなぁ・・・。
もちろんだがこれは皮肉だよ。
なんて皮肉言ってる場合でもない。
現状では彼女に勝てるような要素は何もないのだ。
体力や技術その他諸々・・・悔しいが何一つ勝っていない。
情けないけどね。

でも・・・どうしよう。
このままじゃ、二人ともなぶり殺しもいいところだった。
何か・・・何か・・・ないのか、逆転できる手立ては・・・。
ない知恵を振り絞って考えていると志穂音が、僕の袖をクイクイッと引っ張る。
その方向に顔を向けると、そこにはこの場とは不釣合いなほど満面の笑みの志穂音が?コア?を手にしている。
・・・・あれ?
だってコアは・・。
僕は、振り返と机の上には確かにまだコアが置かれていた。
僕は声を潜めて志穂音に尋ねる。
「ど、どういうこと!?」
「アレ、偽物。こっち、本物。フフフッ♪」
「え、偽物!?　いやでも・・・」
「いいから、逆転したけりゃ力貸してよ。君、あのローラ・サウスバードの弟なんでしょ・・」
「え、何でそれを!?」
「いいからいいから、ちょっとそのお得意の口をあたしに貸してよ」
「・・・あぁ、もう後でしっかり説明してもらうからね!」
「そりゃもちろん♪」
志穂音は、また笑うと僕に耳打ちする。
それを聞いて、僕は一瞬戸惑ったが、とにかく逆転の一手があるのならそれにかけるしかない。
僕は痛む身体で志穂音の前に立つと相手から志穂音が見えにくくなるように一、二歩前に出る。
恐れずに・・・今は志穂音を信じて彼女(まえ)を見た。
そして、僕は怪訝な顔をする彼女に向かって言う。

「ねぇいきなりで悪いんだけどさ、このままやっても君の勝ちだろうし・・・・・
最後の思い出作りじゃないけどほんのちょっと僕の話に付き合ってよ」

逆転へ向けた針がゆっくりと動き出した瞬間だった。

第３２話～二人、場所は違えど前を見て～（後書き）

かなりお久しぶりです・・・
本当にすいませんでした・・・。
ここしばらくずっと忙しくて更新のこの字も出来ませんでした・・・。
なので帰還が開きすぎて３２話ってまずどんな内容だったっけから始まって・・（滝汗
結局かなり強引な文章で帳尻合わせがかなり大変な感じに・・・。
とりあえずはなんとかホッと一息つける時間も出てきましたからまた連載をさせていただこうかなと思ってますのでよろしくお願いします。

で、本分なのですが、まだ少しこの変電所回が続くと思われます。
気長に見てやってください・・。

ではこの辺で３３話でお会いしましょう。
さよならッ！

第３３話～引かれた逆転への撃鉄～

「・・・・話だぁ？」
「そうだよ、お話」
前にも増して怪訝な顔になる？そっくりさん？に僕は笑いかける。
力比べじゃ僕たちの方が不利でも、話し合いならまだ僕達に分がある。
それにこちら側からのこういう話し合いの提案は一見すると不利なようにも見えるがそれは命乞いとかそういう助けを懇願する時の場合で、僕がやろうとしてるのはただ単なるお話だ。
時間を稼ぐためのね。
そうなってくると、この？不利な立場が活きてくる？。
僕達が不利な立場である事を、出来る限り発する言葉の中に混ぜ込めば自分が絶対的に有利な立場であるとより強く意識して必ず乗ってくるはずだ。
相手が慎重な相手だと少し難しい手だけど、この？そっくりさん？だからね。
言っちゃ悪いが、口で負ける気はしない。
「なんであたしが、お前と話なんざしなくちゃなんらねぇ？」
「良いじゃないか、別に。話ぐらいしたってこの状況がひっくり返るわけでもないしね・・？」
「それは・・・そりゃそうだろうけどよ」
「だったら、ほんと少しでいいんだよ。僕の話を聞いてくれないかな？」
「・・・・ちなみに聞くが何の話をするつもりなんだ？」
お、ちょっと乗ってきたかな。
でもここで安心しちゃ駄目だ。こう言うのは相手の乗り初めが一番肝心なのさ。
さて何の話をするかだけど・・・。

ここは無難に、彼女達に関する事にしよう。
こんなところで世間話もおかしいし、突拍子もない事に話題を切り替えるのも不自然だからね。
「そうだね・・・・それじゃあ・・・僕の推理を聞くって言うのはどうだい？」
「推理だと？」
「そうさ、まぁと言っても想像の範疇を出ない事なんだけれどね・・・。これまでの君たちの襲撃から色々考えていた事をさ・・・聞いてみないかい？　僕も興味があるんだ。僕の考えがどこまで当たってるのかにはね？」
その推理が自分たちの事だと分かると、彼女は眼を細めた。
当然だね。
自分達の事をどこまで相手が知っているのか、それが気にならない人間はまずいない。
ひょっとしたら自分たちの核心と呼べる所まで相手が知っているとしたら・・・？
そう考え始めるとまず、この申し出を断るという選択肢は出てこないはず。
そして案の定・・。
「・・・・いいぜ、まぁお前の言うとおりこの状況が変わるわけでもねぇし・・あたしにとっちゃ特にデメリットもなさそうだしな」
彼女は近場の椅子を拾い上げて背もたれを前にしてドカッと腰を下ろすと乱暴に言った。
「じゃ、聞かせてもらおうか？」
「・・じゃあ、始めるね。まず――――――」
僕の時間稼ぎはどうやら今のところ上手く行っているようだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ローラはセシリアと協力しながら、二機を変電所近くから遠ざけようとしていた。
しかしいいところまでは行くのだが、やはり機動力の制限は思いのほか足かせになっている。
流れ弾などのことを考えると下手には撃てないし、かといって撃たなければ変電所や自分たちも危ない。
とくに厄介なのは、戦い始めてからも今も?ペルフェッド・エスダーテ?駆る?ロッソ?だった。
いくらセシリアが来たとはいえ彼女も射撃型。
近接戦闘はローラ以上に実力は壊滅的だった。
世界第二位の操縦者と代表候補生。この二人をもってしても均衡が崩せない理由はここにあった。
「セシリアちゃん!!」
「っく!?」
そうやって考えているそばから、セシリアはロッソに組み付かれ、それをローラが?ホワイトアウル?をけん制しながら助けるという展開が続いている。
焦りを覚えながら機体を駆るローラへ向けて唐突に?ホワイトアウル?から通信が入った。
「!?」
「どうも・・・初めましてですね・・・。ローラ・サウスバードさん?」
「・・・そうね。まぁ千冬から襲撃があったってことは聞いていたけれど」
「そうですか、じゃあ僕たちのことはご存じなんですね」
バイザーで隠れた顔からは表情を読み取ることはできなかったが、逆にそれが不気味さを演出していた。
彼が手を軽く動かすと、ロッソはそれに従うようにセシリアから距

離を置き制止する。
微動だにせずこちらを睨むロッソを一瞥しながらローラは尋ねた。
「あなた・・・・ロッソちゃんに何をしたのかしら?」
「・・・別に何もしていませんが?」
「嘘はいただけませんわね、そんな答えで私たちが納得できるとでもお思いですの?」
「けれど、僕は本当に何もしていないんですけれどね・・・・特にこれと言っては・・・。
強いて言うなら少し、?お話?はしましたけど」
「お話ですって?」
セシリアが?ホワイトアウル?を睨みつけローラは怪訝な顔を浮かべる。
・・・お話・・・。
まぁ、少なくとも楽しい内容じゃないことは確かよね・・。
だがただ会話した程度で人格がここまで変わるとは考えにくい。
その?お話?というのが彼女を変えたのは事実だろうけど。
一体何をしたっていうの・・?
「そうですよ、ほんと二言三言会話を交わしただけです。嘘は言っていません・・・ですよね、ロッソ?」
彼の問いかけに、ロッソは静かに一度だけ首を縦に振る。
首を振ったロッソを見て満足げに口元を釣り上げる彼。
「ほらね、言ったとおりでしょう?」
「・・・みたいね・・」
「ふむまだ納得されていない様子ですが・・・なにぶんこちらもそこまで時間があるわけではありませんから・・・・・・続きを始めましょうか・・。世界第二位の実力をもう少し堪能させていただくことにしましょう!!」
「っく!!」
再び始まる彼とロッソの猛攻。
せめて考えぐらいまとめさせてくれと互いに思いながらローラとセ

シリアは自分の武装を構えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

聡華はひたすらまっすぐに、聡也を背負って走り続けていた。
エリア封鎖のおかげで、普段ならそれなりに混みあうこの時間でも人っ子一人おらず最短ルートで聡華は駆ける。
「おっしゃこの角曲がればもうすぐ――――っだ！？」
「うおぁッ！？」
ゴッチーン！
まさに正面衝突。
人っ子ひとりいないと言う事は当然角から誰かが曲がってくるなんて思ってもいない。
だから聡華はほとんど減速せずに足のカットだけでコーナーをクリアしようとしたのだ。
そのため聡華は、ほぼトップスピードで相手とぶつかってしまった。
「いってぇぇぇぇぇッ！！！」
聡華は聡也を背負っているから手が使えない。
頭を抱えたい衝動を必死に我慢しながら、聡華は相手に怒鳴る。
「てめぇ、どこ見て走ってやがるッ！　いきなり角から飛び出してきやぁあって！！！」
「それはこっちの台詞よ！！　角をなんてスピードで飛び出してくるわけ！！」
「やかましい！大体ここは立ち入り禁止――――で・・・って理じゃねえか・・！？」
「え、ってあぁ！　聡華！」
聡華は、理を確認するなりまずったと顔をひきつらせる。
理由は言わずもがな・・・聡也だ。

理はあの時救急車に自分を同伴させた。
それは確かに理自身も本当に調べたい事があったのだろうが、あの行動は遠まわしに聡華に聡也を安全なところで監視しろというメッセージでもあった事は聡華自身もある程度わかっていた。
だからこそ、今この場に聡也がいるということは聡華にとってもそして、聡華に監視を任せた理にとっても具合が悪い・・・いや悪すぎる。
「・・・・・聡華、どうしてここに聡也君がいるのかしら・・・」
「い、いや・・それは・・・その・・・こいつがどうしてもって！？」
「馬鹿ね！　なんでいつもの調子でピシャッと断らなかったのよ！！」
「あ・・・そ、そりゃあ・・・お前・・」
凄い剣幕で迫る理。
・・・言えねぇ・・・ほとんどあたしからけしかけたなんて言えるわけがねぇ・・・。
恐らく本当の事を言ったらコンマ数秒後には多分明日、朝日を拝めなくなっているだろう。
言い淀み、冷や汗をかく聡華に更に詰め寄る理。
しばらく静観していた聡也だったが、余りの狼狽ぶりの聡華を見かねて助け船を出した。
「ぼ、僕がお願いしたんですよ。結構強引に・・・それで渋々先輩も頷いてくれて。
それに病院からでもあんなの見せられて・・・・・・ジッとなんてしてられなくて・・・」
「そ、そうそう・・・それで仕方なく・・・よ」
いぶかしげな顔をした理だったが、聡也本人からの言葉では言い返せない。
はぁ、とため息を漏らして立ち上がると、理は改めて聡也に話しかけた。

「まぁいいわ・・・。今はそれどころじゃないものね・・。で、君が聡也君ね」
「あぁ・・・はい」
「私は白鶴（しらつる）　理（ことわり）。聡華の同級生で風紀委員長をやってるの。よろしくね」
聡也はスッと差し出された手を、聡華の背中の上から握り返す。
握り返した時にフフッと笑った顔に聡也は、少し見惚れてしまった。

「・・・で、どんな具合なんだよアレは」
「一進一退ってところね、戦う場所や相性が悪過ぎてあのローラさんでも苦戦中ってとこよ」
「・・・・・・・・・」
三人は変電所の近くまで近づき戦況を見守る。
恐らくこの場にいる誰もが、今にでも飛び出したい衝動を抑えているに違いない。
特に、本来ならあるべき力を奪われた聡也は、あの場にいるのがロッソであるという事もあって気が気ではなかった。
多分今、手元にシリンダーカードとキーさえあれば、制止など振り切って飛び出しているだろう。
だがそれが出来ない。
考えをまとめてきたはずなのに、いざ現実を突き付けられると何もできない自分という存在が余計に際立って見えてしまう。
焦るな焦るなと自分に言い聞かせれば聞かせるほど、余計に焦りが顔をのぞかせる。
聡也は、戦況をジッと見つめながら自分に出来る事を必死で考えていた。
いまだに戦況はこう着状態だったが、一瞬のすきを突かれローラの駆る？ストライク・ミラージュ？に？ホワイトアウル？の射撃が命

中して大きくバランスを崩した。
ブルー・ティアーズはなんとかサポートに行きたいがロッソに貼りつかれて思うように行かない。
はっきり言ってこの隙は致命的だ。
？ホワイトアウル？の総合火力はさして大したものでは無いが、だからと言って直撃しても大丈夫というわけでは無い。
そして彼もまた自分同様に瞬時多目的射撃（マルチロックシュート）？獅哮閃（しこうせん）？を使いこなせる操縦者。
体勢も整わぬままアレを受けたら最悪一撃で落とされる可能性だってあった。
そして既に、彼は？獅哮閃（しこうせん）？の体勢に入ろうとしていた。
すると同じように戦況を見つめていた理が聡華に鋭く言い放った。
「聡華、行きなさい！！」
「あぁ！？　や、でもよ・・」
「良いからまだ間に合うわ、あなたの紫燕の速さならッ」
「でも許可は！？」
「行けってんでしょ！！！　あなたローラさんを殺したいの！！」
「ッチ、どうなっても知らねぇぞ！！」
聡華は戸惑いながらも聡也を下すと紫燕を展開させ、？バニッシング・ブースト？で一気に舞いあがる。
聡也は、紫燕のいきなりの？バニッシング・ブースト？よりも最後の理の剣幕に推されしばらく呆気にとられてしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「さぁ、鉄クズになりましょう！」

「ローラさん！」
セシリアちゃんの切羽詰まった声が自分の置かれた状況を嫌でも理解させる。
だがそうは言っても、ローラはようやく体勢を整えたという所だった。
「・・・獅哮閃（しこうせん）」
？ホワイトアウル？は両手の二門を背部ウェポンラックに戻してまた素早くロックを解除する。そうしてフリーになった四門の砲は？ホワイトアウル？の宙返りと共にラックから外れ宙を舞い・・・
そして目の前を閃光が横切った。
「え？」
「っ！？」
その声はほぼ同時。だが焦っているのは今までチャンスだった側。ピンチだった側は逆に場に似つかわしくない抜けた声を漏らしていた・
？ホワイトアウル？はとっさの判断で無造作に二門の砲だけは回収する事が出来たが、残りの二門は空中で爆散する。？ホワイトアウル？はその閃光の正体を見てほんの少し口元をゆがめた。
「予定じゃ、全部ぶっ壊すつもりだったんだけどよ」
「・・・そうですか、それは残念でしたね・・」
「ま、いいや。どうせお前の後二門だしな・・・・ってかそもそもそれお前のじゃねぇだろ。ほんととことん節操がねぇなＩＳ－Ｎってやつぁ」
「Ｎを知ってるんですね」
「あぁ、ちょっと前に聞いたんだよ・・・あいつにな」
「・・・あいつ？」
彼女は確か・・・あぁそうだ鳥越　聡華という風紀委員の二年生だ。千冬に聞いた事がある。？気性は荒いが優秀なＩＳ操縦者の風紀委員がいる？と。

なるほど確かに気性は荒いわね・・・。
そこまで考えてあたしも聡華が言ながら視線を向けた方向に顔を向ける。
「ッち！」
「聡也君・・・病院へ運ばれたと聞いたけど・・」
まぁその情報があったから、すぐさまこの子は偽物だと分かったんだけど。ほんとこの情報をくれたあの黒髪の女の子・・・名前は確か理ちゃんって言ったかしら。あの子には感謝しないとね。
「なぜ彼が・・・！」
この戦闘で初めて、？ホワイトアウル？が見せた動揺。それを見て聡華ちゃんは口の端を釣り上げた。
「あたしがここまで背負ってきたんだよ・・・不味かったか？」
・・・・・聡華ちゃん。それ長髪のつもりだろうけどね、それはっきり言って不味いわよ。
「ん・・？　・・・いやあのローラさん・・そんな目であたしを見ないでくれます？」
「え、あらごめんなさい・・・」
おぉっといけないいけない・・・つい冷めた目で見ちゃったようだわ。
あたしは苦笑いをして謝る。すると何か忘れている事に気がつく。
・・・何だったかしら。何か・・・そう・・・青色の・・・。
「あ、あの・・・ッできたらそちらだけで盛り上がるのをやめていただけませんか・・・ッ！？」
声のした方を振り返るとセシリアちゃんが必死に？スターライトｍｋ一？？で？テンポラーレ？を防いでいた。・・・一瞬よく耐えたと身勝手ながらに思ったがそこは口に出すとトラブルになるにきまっているから。
「あ！セシリアちゃん忘れてた！」
「・・・お、そう言えば」
「・・・ロッソ、まだ倒せて無かったんですか？」

三人が三人一番無難な線で答えた。
「・・・・味方はいませんの！！」
セシリアちゃんの叫び声は真面目に悲痛だった。少々リズムが崩されたが現状でようやく近接戦闘をこなせるＩＳの登場には素直に喜ぶべきだろう。ローラは聡華にロッソを任せて、セシリアと二人がかりで手負いとなった白き翼に襲いかかって行く。逆襲は始まったばかりだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・と、ここまでが君たちが学園を襲撃した理由と僕なりの考えだよ」
僕は出来るだけ話は引っ張れるだけ引っ張ろうと？そっくりさん達？が学園を初めて襲撃した所から話を始めていた。まだ志穂音からのアクションが無いところをみるともう少し話を引っ張る必要がありそうだね・・。
「・・・ふ～ん、まぁ当たってるかどうかは言わねぇけどそこそこ考えてるんだな・・意外だったよ」
「まぁ、僕には目に見える抵抗って中々出来ないからさ、せめてこう言うことぐらいは考えないとね・・・。さてそれじゃあ、次はこの件について話そうかな？」
「ま、待て待て！　まだ話す気かよ！？」
「むしろここからが本題なんだけどね・・・ま、そんなに時間は取らせないからさ」
「・・・・ふんッ、勝手にしろ！」
机を乱暴に叩いてかぶっていた帽子を投げ捨てる。

だがそれでも辞めろと言いださなかったのは僕にとってはよかった。
まぁ、まだまだ自分が優位な立場ってことを意識してるんだろうね・・。
まぁ事実だけどさ・・・今は。
「じゃあ、勝手にさせてもらうよ・・。今回君達がここを襲撃した理由はそのＩＳ－Ｎのコアだね？」
「あぁ」
素直に頷く？そっくりさん？。まぁこれは隠しても仕方ない事だしね。
「まず、ここで一つ引っかかるよね。どうしてコア一つ奪うためだけの目的で君達がＩＳなんてものを引っ張り出してきたかってことが。でもこれは恐らく前回、前々回と同じ理由・・・大きなもので小さなものを見えなくするため。今回で言えばＩＳという大きなもので本当の目的であるＩＳ－Ｎのコアという小さなものをカムフラージュしたんだ」
実際ここにどうしてＩＳ－Ｎのコアがあるのかまでは分からない。
志穂音と彼女の関係も謎のままだ。
だが、ここに彼女が欲しているものがあると言う事だけはなんとなくわかった。
志穂音は、僕達に本当はアレを渡したかったんだと思う。でも何らかの理由でそれが出来なくなったんだ。恐らくさっき連絡がどうこうって言っていたからそれも関係しているんだろう。
ここに置いておくのは危険だと判断して早めに渡すと言う方法も考えられるけれどそれじゃ駄目なんだ。
わざわざダミーまで用意していた所を見ても、恐らく今から彼女がやろうとしている事はコアがこの場になくてはならない事なんだろう。
多分志穂音はこうなる事をある程度頭の中で想定してあったんだろうと思う。
僕は気付かれないようにチラッと後ろでひそかに、それでいながら

素早くキーボードをタイピングしていく志穂音を見る。
もちろんこれは僕の想像だから、間違いもあるだろうけどそれでも彼女はやっぱり頭がいい。
それも人の何倍・・いや何十倍も。
僕は視線を戻すと、再び話し始める。
話は、襲った理由から今度はロッソの事へと移っていた。

◇◆◇◆◇◆

ホワイトアウル？と？ペルフェッド・エスダーテ？の二機に連携する意思はさほど見られないもの」
聡也は話を聞きながら、戦闘に目を向ける。
一機づつに分断されていてサポートがしづらい状況ではあるが、理の言うとおりそれでもどうにか互いにカバーし合おうという意思がほとんど感じられない。
二機が全く別々に、連携も何もなく戦っている。
「恐らくこの件が妙に回りくどくて、面倒に感じるのはあそこであなたのＩＳを使ってる彼と実動部隊で恐らくいま変電所のどこかに潜んでいると思われるもう一人の仲間の思惑が微妙にズレてる事なんでしょうね」
「・・・要するに・・彼とねぇさ・・・紫香楽聡華の考え方が違うってことですか？」
「あたしが思うに、指示を出している側・・つまり彼が彼女に対して本来の思惑とはほんの少し違う指示を出してるんでしょうね。よく言うじゃない敵を騙すにはまず味方からって」
そこで一度話を区切ると、理は？ホワイトアウル？を睨む。
この推測が当たっていれば、あの少年はとんでもない人物だと思う。
聡也にはそこそこ言葉を濁して柔らかい表現で敵を騙すには・・・と言ったが実際はそんなものじゃない。
騙すどころか彼は唯一の味方である彼女を信頼も信用もしていないと言う事になる。要はコマだ。
・・・厄介な子よね。本当に・・。それでいて頭も切れるんだからやってらんないわ・・。
だがそれでも、今回のこのやり方は余りに酷い。
一人の少女の思いを踏みにじる最低の行為だからだ。
・・・許せないわよね・・やっぱり。
理は自分の心の奥の方からふつふつと熱いものが湧きあがってくるのが分かった。
それは怒り。

だが、心のそんな動きに対して逆に頭は冷静であり、この件をかたずけなければならない、そして片付けられる人間が聡也である事もしっかりと分かっていた。
理は頭の中で考えを手早くまとめると総也に切り出した。
「ねぇ、聡也君・・・どうして敵がロッソちゃんを利用したんだと思う？」
「え？」
「・・・理由はいくつかあるわ。彼女が二重人格で不安定だったって言うのもあるでしょう。・・・でもね、それ以上に彼らは許されない事をしたの・・・それは一人の少女の気持ちを踏みにじるにも等しい行為・・・。頭のいい聡也君ならここまで言えば分かるわよね」
「・・・・・」
聡也は無言だったが、険しい表情になって行っている事は分かった。彼にもそれなりに分かっているようで、理はちょっと安堵する。
そして彼の背中をポンっと押すようにこう言った。
「・・・ロッソちゃんを助けてあげて。それが出来るのはあなただけだから・・・ね」
理が次に見た聡也の顔は、強い決意に満ちた力強いもので理が言い終わるよりも先に痛いであろう身体を引きずりながら駆け出していた。

◇◆◇◆◇◆

僕はもうこれ以上話せないぐらい話してフウッと思わず息を漏らした。
もうネタ切れ。これ以上時間を稼ぐのは不可能だ。
再びチラッと志穂音を見る。
志穂音は、片手でもうちょっとジェスチャーしている。
・・・もうちょっとって・・！
不味いな・・。これ以上引き延ばすと流石に怪しまれるし・・。
むしろここまで怪しまれなかったのが、奇跡なぐらいなのだ。
急に言い淀む僕を見て一瞬いぶかしげな顔を見せる?そっくりさん?。
熱い部屋で汗と一緒に冷や汗が頬を流れる。
そしてその本当に細かな僕の動揺を敵は見逃してはくれないようだ。
「お前・・なんか変だな・・？」
「へ、変？　どのあたりがかな？」
「急に言い淀んだり、さっきまでの饒舌さはどこ行ったんだよ」
「あ、いやそれは・・」
ま、不味い。本当に不味いぞ!?
し、志穂音早く!
僕は志穂音をもう一度見る。だがそれがいけなかった。
「お前、何やってんだ!?」
彼女は勢いよく立ち上がると、僕の胸倉をつかんで壁に打ち付ける。
当然僕という壁を失った志穂音が、彼女の視界に飛び込んだ。
「ありゃ？」
「てめッ、そ、それは!!」
「っく！　志穂音早く!!」
僕は力を振り絞って、彼女の腕を振りほどくと体当たりで志穂音との距離を取らせた。
流石に反撃を予測できなかった?そっくりさん?はまともに体当たりを食らって数歩後退する。
渾身の体当たりでも数歩って・・僕はどんだけ弱いのさ・・・。

って今は自分の脆弱さを嘆いてる場合じゃなかった！
「うぅッ。ケホケホッ・・・て、てめぇら舐めた事してくれやがって・・・ッ！！」
？そっくりさん？は右手でダミーのコアを握りつぶす。
・・・嘘でしょ・・あれって側は金属製っぽいけど。
「もう、許さねぇ・・・・てめぇら・・・」
？そっくりさん？がＩＳの腕を部分展開する。狭所なこの場所ではそれが精いっぱいだが僕達二人を始末するには充分だろう。
「ぶっ飛ばす！！！」
飛びかかってくる、？そっくりさん？。
絶体絶命ってのは本当にこう言う事を言うんだろうね！！
だがそこへ、志穂音が待望の一言を叫んだ。
「よっしゃ、出来たよ！！」
投げられるＩＳ－Ｎのコア。
僕はそれをしっかりと両手で受け取る。
それと同時に光に包まれる僕の腕と、そしてポケットのメモリーカード。
ははーん・・・なるほどね・・そう言うことか！！
僕は瞬時に展開された装甲と大型のライフル。それらを見て何をすればいいかを瞬時に判断する。
「なッ、なんだとっ！？」
「どうやらぶっ飛ぶのはそっちの方みたいだね！！」
そして僕は迷わず・・・・・
トリガーを引いた。

第３３話～引かれた逆転への撃鉄～（後書き）

どうもお久しぶりです。
暑いですねぇほんと・・・。
で、今日は台風ですか・・。
恐ろしいですね。本州がまるっと台風に覆われてしまってます。
各地で被害も出ているようですし、皆さんもお気を付けくださいネ。

さてようやくここまで来ました。
凄いｇｄｇｄ感ですがまだ少しお願いします（汗

それではまた３４話でお会いしましょう。

さよならっ！

弟３４話～叫ぶ思い・届く気持ち・目覚める情熱～

僕は今までにないぐらい、腹が立っていた。
いやもうぷっつん状態で正直自分がここまで怒れた事に自分自身で驚いている。
僕には理先輩が何を言おうとしていたのかなんてすぐに分かった。
前々から、とんでもない人だとは思ってましたがこれは度が過ぎていますよ・・！
僕は戦闘エリアに更に近づきながら空を舞う白い翼を睨みつける。
・・今の僕にはＩＳが無い。でも・・・それでも声を、思いを届かせることはできるはずだ。
視線を動かすと、少し離れたところで鮮やかな赤と紫のＩＳが激しく火花を散らしていた。
・・・先輩、ロッソ！！
絶対に下から叫んでも声なんて届かない。
何か・・高い所はっ・・！
僕は足を止め辺りを見渡す。
すると自分の今いる場所から数メートルの所に、建設中の鉄塔が見えた。
どうやら、もうすでに鉄塔としては完成しているがまだ完成してはいない様で、電線などは敷設されていなかった。
・・・あれなら・・！
距離は少しあるが高さは充分・・・・よし！
気がつけば僕は、鉄塔の梯子に手をかけていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おらよッ！」
「っ！？」
聡華はロッソの？テンポラーレ？を素早く回避して？大蛇？の柄尻でロッソの腕部に一撃をお見舞いする。
「いつもの調子はどうしたんだよ！」
「・・・」
それと同時に。聡華は叫ぶ。
それはロッソのためそしていま下で見守っているであろう聡也（あいつ）のためだ。
ロッソのこんな無表情で無口なのも嫌だが、あいつの病院で見せたあんな張りつめた苦しそうな顔はもっと見たくない。
あぁ、もうイライラするぜッ！！！
そうイライラする。
あいつが下を向く姿を想像するだけで。
なぜなのかは分からないが、腹が立って仕方がない。
「くそったれめ！　なんで分からねぇ、なんで届かねぇんだ！！」
聡華は、どこへ向ければいいのか分からないイライラをロッソに思いと共にぶつける。
ガギィンッ！！と鉄と鉄がぶつかり合う音が響き、ロッソは大きく弾き飛ばされてしまった。
体勢を立て直したロッソが見たのは、敵意とも殺意とも違う自分の敵であるはずなのに自分を思ってくれている考えてくれているようなそんな不思議な眼をした聡華の姿だった。
その目に思わず動きの止まるロッソ。
「・・・なぁ、お前あたしの声が聞こえねぇのか？」
聡華は静かに尋ねる。
「・・・なんでだよ？　どうして自分から殻にこもっちまうんだよ」
その声は厳しくもあり

「・・・違うだろ・・それはさ。もっと周り見てみたらどうなんだよ」
そして優しくもあった。
いまだに返答のないロッソだが構わず聡華は続けた。
「お前の事を心配してるヤツ、気にかけてくれているヤツが居るだろうがよ！」
一瞬だがロッソがピクリと反応する。
気にかけてくれているヤツ・・それが誰なのか。
そんな事、言わなくたっていい。きっとロッソは分かってる。
そして自分自身も、この件は自分が解決できない事も分かっている。
だから自分はそのためのおぜん立てをする。ロッソがあいつの話を聞けるように。
絶対にあいつの言葉が届くと信じているから。
聡華はゆっくりとロッソに近づき傷つけないように注意しながらそっとロッソの頬を撫でた。
「・・・だから、な。話・・・聞いてやって・・・・・ッ！！！」
バッと手を引き目の前を通過した一撃を避ける。
「んのやろう！！」
「ロッソ！　耳を貸してはいけませんよ！　彼女は敵です！　僕を傷つける敵ですよ！！」
「何言ってやがる！！　ってかセロりだっけか、お前ローラさんと組んでるんだったらしっかり押さえろよ！！」
「セロッ！？　セシリアですわ！！　それに仕方が無いでしょう、私たちは下には撃てないんですのよ！！」
「やかましい！　代表候補生だろでめぇは、少しは踏ん張れこのボケ！」
聡華はピシャリというとロッソへ向き直る。
くっそ、さっきまでいい感じだったのによ！
聡華はロッソの目に明らかな敵意を感じて武装を整え直す。
けど・・・ここで諦めるわけにゃいかねぇ・・・ッ！

「・・・敵は・・・倒さないと・・」
「・・あ？」
なんだ、口調が・・。あの野郎（ホワイトアウル）の影響か？
いやそれにしては・・・。
「敵は、倒さなきゃ！　聡也が傷ついて・・・ッ！！」
「お、おい！？」
なんだよ、これじゃまるでＩＳ展開してねぇ時のロッソじゃねぇか！
どうなってんだ。
二重人格は不安定だとは思ってたがここまで人格形成が不安定になるもんなのかよ！？
ロッソはスラスターを全開に噴かしながら一気に聡華との距離を縮め力任せに？テンポラーレ？を無茶苦茶に振るう。
「聡也が傷ついて、嫌われちゃうからッ！　・・・だからあたしが・・・敵を！！」
「お、おいッちょっと・・落ちつけってぇッ！！」
聡華は必死に猛襲を防ぐものの、数回？紫燕？を撫で表面装甲を削り取っていく。
「誰にも、渡さない！　あの子にだって！！　あたしが聡也と一緒に居たいの！」
「っく・・・ってあれは！？」
聡華は左右に機体を振りながらロッソの剣をかわす。とふと視界の端に鉄塔に登っている人影を見つけた。
――――あれは聡也か！
よっし丁度いいタイミングだ！
聡華は左手一本破損覚悟で？テンポラーレ？を受け止め素早く後ろに回り込むとロッソを羽交い締めにする。
「離して！　あたしは敵を、敵を！！」
「そんなにあいつと一緒に居たいなら、本当の気持ちをその耳かっぽじいて本人から聞いてみろ！！」
「・・・え？」

聡華は大声で怒鳴りつける。少々錯乱気味のロッソも聡華の言った、？本当の気持ち？という単語に反応して動きが止まった。
聡華はそれを確認して、？紫燕？の望遠カメラで鉄塔の上の聡也を見る。
その視線を同様にロッソも追っていた。
多分、ロッソの眼にもしっかりと聡也が見えているはずだ。
・・・あたしが出来るのはここまでだぜ・・。後はお前がバチッと決めな！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

鳥越先輩が言わんとする事は僕にも伝わっていた。
・・・ありがとうございます。
僕は心の中で鳥越先輩に頭を下げる。
ふぅ・・・。
僕は少し離れた所で鳥越先輩に掴まれているロッソを見やる。
僕からは表情は見えないけれど、恐らく向こうからは僕の表情は見えている。
どんな表情をすればいいのかとか何を話せばいいのかとか、そんなものは関係ない。
言わなきゃだめだ。
いまこの場所で。
彼女に向かって。
しっかりと・・。
自分の言葉で。
僕は息を大きく吸い込むと、声を大にして叫んだ。
「ロッソ！　多分僕は鈍感できっと今日も知らないうちにロッソを

傷つけていたんだと思います！」
言い回しなんて関係ない。
「それに誰かに言われなくちゃ、相手の気持にも気が付けない！」
間違っていようといまいとただ思うままに言葉を紡ぐ。
「だけど、今なら分かります、ロッソの気持ちが！！」
それはまさに・・・
「ロッソ、僕は今のロッソも、そして普段のロッソもどっちも大切だから！」
聡也の心の底からの――――――
「だから本当に・・・本当に・・・・ッ」

――――――――――――――――――――叫び

「ごめんなさい！！！！！！！！！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「なぁッ！？」
聡華は素っ頓狂な声を上げながら、抜けそうになる力を止めるのが大変だった。

いわゆる？ズッコケ？というやつだ。
あの馬鹿、途中までよかったのになんで最後それなんだよ！！
そこは、そうじゃねぇだろぉ・・・。
思わず頭を抱えたくなる聡華だが、下手に力を抜くとロッソを逃してしまう。
だが、聡華はふとおかしなことに気がついた。
ロッソが微動だにしないのだ。
「おい・・・」
聡華は試しに声をかけてみるが返事はない。
だが少し、ほんの少しだが小刻みに肩がふるえているのが見て取れた。
「・・・お前・・」
「うぅ・・・っく・・・ふぅッ・・・」
「・・・ふぅ・・・ったく仕方ねぇなぁ・・」
「わた・・・聡也のこと・・」
聡華は、右腕の装甲を一旦待機状態に戻し素手でロッソの頭をクシャクシャと乱暴に撫でた。
「泣いてんじゃねぇよ、ほら顔上げろって。今はそれどこじゃねぇだろ？」
ロッソはその言葉に頷いて聡華と同じように腕の装甲を待機状態に戻して目元をぬぐう。
「あの・・・先輩・・・その・・・」
「その先はあいつに言ってやんな。あたしが貰う言葉じゃ――――」
と聡華が言いかけた直後、すさまじい勢いで白い影が上空から接近する。
「まったく、やってくれますね！！」
「っく！」
「野郎！？」
その影は、ローラとセシリアの攻撃をかいくぐってきた？ホワイト

アウル？だった。
とっさに左右に分かれる聡華とロッソ。
その間に入り素早く両手の砲を放ち牽制すると何の迷いもなく次のターゲットへ向けて狙いを定める。
「君も、わざわざやられに出てくるとは物好きですね・・・まぁ、いいですけど！」
「くっそ！！」
聡華は舌打ちしながらスラスターを噴かす。ローラもそしてセシリアも全速力なのだろうがそれでもトリガーを引く方が断然早い。少なくとも一発は撃たれてしまう。だが相手は生身の人間だ。
一発しか撃てなくても逆にそれで充分事足りる。
そして、聡華たちの悲痛な叫びと共に砲火は放たれた。

ズガアァァァァァァン！！！！！！！

聡華達が茫然と見つめる中、轟音と共に崩れて行く鉄塔。
片や一仕事終えたかのような安堵の表情を浮かべる？ホワイトアウル？。
「そ、そんな・・・」
「・・・嘘でしょう・・」
「あ、あぁ・・・」
「これが現実です。どうやらここまでの様ですね？」
勝ち誇って饒舌に話す？ホワイトアウル？。だが、その口調はすぐに焦りへと変わる。
聡華がつぶやくように言ったこの一言によって・・・。

「この距離で、間にあうのかよ・・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あ、死んだ。

僕はそのとき直感した。

だから僕は目を閉じてもう流れに身を任せていた。

人っていざ死ぬってことに直面すると、もっと泣き叫んだりわめいたりするのかなと思っていたが、どうやら自分はそうではないらしい。

さっきまでプッツンしていた心はおかしいぐらいに穏やかだし、落下しているはずなのにどこかふわふわと浮いている感じがする。

でも・・・最期にちゃんと言葉を伝えられたのはよかったですね。

誤解したままだなんていやですから・・。

・・・あれ？

・・・・いつになったら僕は地面にたたきつけられるんでしょう・・。

僕は不思議に思い、恐る恐る目を開ける。

「・・・・よかった、無事で・・・」

「え!?」

目の前にあったのは心のそこから安堵して、穏やかな顔を向けるロッソの顔だった。

「僕は・・・？」

「・・・うん、間に合ってよかった・・・」

「助かった・・・んですか・・・？」

いまいち状況がうまくつかめないがとりあえず僕はロッソに抱きかかえられている、それだけは理解できた。

っていうか・・あれ？ロッソはいまＩＳを展開しているのに・・。

口調が、いつもと・・・。

「ロッソ、その・・今はＩＳを・・」

僕は首をかしげながらロッソにたずねるが、ロッソはそれに笑顔で答えた。
こんな笑顔、初めて見たかもしれない。
それは強気で勝気なあのロッソとは違う、年相応の屈託のない笑顔。
「・・・大丈夫・・・私はもう・・大丈夫だよ」
そう言い放つ声はいつもどおり控えめで小さかったが確かな自信に満ち溢れていた。
「ロッソ・・・」
僕にはロッソの身に何が起きたのかはわからなかった。でもどこか吹っ切れたようなその顔がとても頼もしく思えた。

その時すぐ近くでまた大きな爆発が起こる。
「「!?」」
ロッソは後ろを警戒しつつ、すばやくその方向へターンする。
爆発した箇所はどうやらあのプレハブ小屋のようだった。
ものすごい量の砂煙の中から、一機のＩＳが飛び出してくる。
「あれは!」
?紫燕?!　姉さんやっぱりいたんですね・・。でも・・・・・どうしてあんなに・・・。
「・・・ボロボロ・・だね・・」
そう、右腕の装甲は吹き飛び同じように右側のスラスターも大破。
かろうじてＰＩＣのおかげでバランスは崩さず飛行はできているようだがそれでも?紫燕?最大の長所である高機動戦闘は確実に不可能だろう。
するとロッソが何かに気づいた様で、ＩＳのカメラを爆発で大きく開いた穴へとズームさせる。
「聡也・・・あれ!」
「うん・・・?」
ロッソのＩＳの映像を覗き込むとそこには、タンクトップの少女とアルディがいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「・・・ねぇ、これは誰の所為だと思う？」

「・・・ウチじゃないよ」

目をそらすんじゃないよ、目を・・。

僕は、大きくぽっかりと開いた穴を見上げる。

まだ空の色はオレンジ色ではあったもののもうそろそろ本気で日没のようだった。

あぁ、日本の空ってきれい・・・じゃなくて！！

「こんなに威力が高いなんて僕聞いてないよ！！」

「しょうがないじゃん！　むしろあの短時間でＩＳ－Ｎのコアと武装の並列起動処理（パラレルリンク）を構築できたことを褒めてよ！！」

「この有様で褒められたら相当な神経の持ち主でしょ！！」

「アメリカ人じゃん！」

「もう理由になってないよ！！」

僕は起動したＩＳ－Ｎの白い腕部装甲を待機状態に戻して頭を抱える。

最悪だ・・・。本当に最悪だぁ～・・・。

そりゃ逆転の一手にはなったけど、まさか？紫燕？に直撃したって言うのにそれでも威力衰えず地層ごと吹き飛ばすほどの威力なんて誰が思うのさ・・。

本当にこれとんでもないよ・・。設計図見たときにそれなりにやばいなぁとかは思っていたけれどさ・・。

「まぁまぁ、やっちゃった事を後悔しても仕方ないってぇ～」

・・・僕は無言でコアを志穂音に投げつけた。

「あいた！」

と、とにかく気を取り直してこんなところで頭抱えていても仕方ない。敵はすでに外へ逃げてしまったのだ。
僕たちは、壊れたサーバーやなんかを足場にその穴を登る。
そして登りきったところで、改めてその穴を振り返る。
「あっちゃぁ・・・こりゃ思ったよりも酷いや・・・あ～あぁ・・・あのサーバーはもう使えないねぇ・・」
「ねぇ、わざと言ってるのかい？」
「・・・・・そんなわけないじゃんかぁ～」
「今、変な間があった!？」
なんだよ～、もう・・。でもあの場面じゃ撃つしかなかったわけだし・・・。
仕方ないじゃないか・・・。
ふくれっ面の僕を見て志穂音はいたずらっぽい笑みをたたえて、うそうそ～と笑い飛ばす。
「あはは、そんなにむくれないでよ～。あの状況じゃ仕方ないってのはわかってるんだからさ」
「別にむくれてなんかないけどさ・・」
「ん、そう？ならいいけど」
志穂音って本当にアレだ・・・。そう・・・話すと疲れる人物の一人だと思う。
まぁ、悪い子じゃないんだけど。イメージ的にはそうだな・・・姉さんタイプだ。
嘘はつかないけど、人をからかって遊ぶのが好きなタイプなんだろうな。
僕はそんな彼女の人柄と同時に、彼女の能力の高さについても考える。
能力というのはザックリしすぎているが、要は彼女のＩＳのプログラミングに関する能力のことである。

さっき志穂音と言い争ったとき、？しょうがないじゃん！　むしろあの短時間でＩＳ－Ｎのコアと武装の並列起動（パラレルリンク）処理を構築できたことを褒めてよ！！？と言っていた。
あの時は僕もちょっと動転してたし、言い返して深く触れなかったけどこれは結構すごいことだ。
僕が稼いだ時間はせいぜい多く見積もっても二十数分余り。ＩＳ－Ｎのコアが一体どこまで完成していたのかはわからないが、起動プログラム自体をくみ上げるのだって専門の人間でも一時間弱はかかるといわれている。二十分余りしか時間がなかったことを考えると、起動プログラムを彼女はものの数分足らずで組み上げたことになる。
さらに起動と同時に並行してまだ登録すらしていないライフルを自動展開させる並列起動（パラレルリンク）処理もそんな数分数十分レベルでできるような代物ではない。
彼女だからなしえた奇跡といえるだろう。
やっぱり天才っているんだね・・。
さて・・・これからどうしよう・・。
う～んと考えているとふとひとつの疑問が浮かんだ。
「あのさ、志穂音。あのＩＳ－Ｎのコアは使えないの？」
そうだ。さっき展開できたしもしかしたら！
しかし言葉を発するより先に志穂音の表情が僕のその考えを否定した。
「う～ん・・・ちょっと無理かな。あの時展開できたのは展開部を腕のみに絞っていたから何とかなったけど、トータルフィッティングとなるとさすがにね・・ウチでも細かなパーソナルデータが無くちゃ」
「そうなんだ・・」
それじゃあ、これから先は上にいるみんなに任せるしかないのか・・・。
なんかすっきりしない・・。
ここまできて、自分だけ指をくわえてみてるしかできないなんて。

僕は最初感じたものよりは幾分か緩和された悔しさを胸に、薄暗くなり鮮やかなスラスターと閃光舞う空を見上げた。
すると、志穂音が急に僕の肩に手をやって顔を近づけてくる。
「ねぇ、アルディ～」
「うぇ!?　な、何いきなり・・・!?」
「・・・誰もいないねぇ～」
「う、うん、まぁ・・確かに居ないと言えば居ないけどぉッ!?」
志穂音はそのまま僕をプレハブ小屋の壁に押しやる。
身体は密着して、顔は相手の吐息が感じられるほどに近づいていた。
「いや、本当に・・・ちょっと・・・何?」
「ん～ふふ～・・・あのさ。ひょっとして君ウチが味方だとか思ってる?」
「・・え?」
「そうだよねぇ、だって一緒に彼女撃退したら味方だって思っちゃうよねぇ～」
「何を・・言って・・」
含みのある笑みでスッと僕のポケットからメモリーカードを抜き去る志穂音。
そしてもう片方の手には、ＩＳ－Ｎのコアが握られている。
「それ!」
「彼女とウチ・・・実は仲間だったりして・・・?」
「ッ!?」
志穂音は僕からゆっくりと距離を置く。
僕はあまりに突然の事で動けずただそれを見送ることしかできなかった。
仲間だって・・・でも確かにそう言われればそうかもしれない。
その可能性が無いわけじゃなかったんだ。
大体彼女と志穂音はあの時も、初対面な感じじゃなかったし・・・・。
しまった・・・。

盲点だった。
ツメの甘さがこんなところで出るなんてッ。
ニヤッと笑う志穂音と、冷や汗混じりに顔をひきつらせる僕。
既にＩＳ－Ｎは一部だが展開可能段階なのだ。
そしてあのメモリーカードにプログラミングされている大型ライフル。
ＩＳの使えない今の僕じゃ、どうあがいたって絶望だった。
互いに少しの間流れる沈黙。
・・・・そして。
「く、っくくくくっふ・・・・・」
「え？」
「あはははははははははッ！！！」
盛大な志穂音の笑い声が辺りを支配した。
「あぁ・・・えっと・・・ん？」
「あはははッ、いや・・ほんとに君はからかい甲斐があるねぇ！」
普段嘘ついてる分、言い返せないけど・・心臓に悪すぎる・・。
僕はとりあえず手短な石を志穂音に投げておいた。
「・・・・コノヤロッ！」
「あいた！」
「まったく・・・」
「うぅ・・ちょっとした遊び心なのに・・」
「君のは心臓に悪すぎるんだよ！」
僕の嘘はほら・・・ソフトにソフトに・・ね。
あれ？そうでもない？
・・・・い、いいんだよ今は僕の事なんて！
一人かぶりを振る僕に、志穂音はまたニコニコ笑って近寄ってくる。
「・・今度は何？」
警戒しながら僕は志穂音に尋ねる。
だが今回は特にボディタッチも無く、スッととあるものを取り出した。

「これは・・」
「さっき拾ったんだ～。きっとね、あのお姉さんが落としってったんだよ」
僕は差し出された？ソレ？を受け取る。
これが彼（聡也）の逆転へのカギだね・・・。
僕はそれをしっかり握りしめて、空を見上げた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「・・・っそったれぇ！！」
紫香楽聡華は、右装甲を大きく大破させた？紫燕？で地上にいる二人の影を憎々しく睨む。
聡華は？紫燕？のデータパネルを呼びだし損傷状況をチェックする。
「っち、思ったよりひでぇな・・。左側のスラスターにまで損傷が及んでやがる・・・」
右側は言わずもがなだったのだが、右側のスラスターのパーツが爆発の影響で左側のスラスターにめり込み稼働率は五割にも満たない。
飛んでは居られるが戦闘なんて無理だ。
だが・・・聡華はチラッと振り返るとそこには味方である聡也のＩＳとそれを取り囲む三機のＩＳが居た。
毎度毎度・・・ピンチ大好きかっつうの・・。
エネルギー残量は充分・・・か。
この残りスラスターで出来るかどうかは分からねぇが・・・勝負は一発だな・・。
聡華はその？一発？を待つためにあえて戦闘に加わらず様子をうかがう。
相手も攻撃の意図を感じなければ無理にこちらに構う事も無いはず

だ。
一か八かやるしかねぇわな・・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ロッソ・・・アルディ達は何をやってるんでしょうね？」
「・・・・さぁ、とりあえずさっきの映像はセシリアに送っておいた・・・」
ロッソ君は今サラッと、後の修羅場を作り上げた気がするんですけど。
・・・・まぁ僕に危害が無ければ良いと言えば良いのですが・・・。
チラッと視界の隅に青白いオーラをまとったイギリスのＩＳが見えたがあえて触れないでおこう・・・うん、それがいい。
さて・・・それよりも今は。
「ところで聡也・・・・あの人どうするの？」
「・・・彼女は・・・今のところ放っておいても大事ないと思います。武装もあれじゃ充分に使えないでしょうし・・・。とにかく今は彼を！」
「・・・うん、分かった！」
ロッソはスラスターに火を入れると一気に？ホワイトアウル？との距離を詰めていく。
「はぁぁぁぁぁぁッ！」
「えぇい、そんな直線的な攻撃で！」
ロッソは？テンポラーレ？を伸ばさずそのまま剣として振るう。
それを？ホワイトアウル？は機体を宙返りさせて回避しながら、片手のアサルトライフルで反撃する。
アサルトライフルの銃撃を？パーチェ・ディフェーサ？で防ぎ今度は素早く？テンポラーレ？を伸ばした。

「ッ！」
「逃がさない！」
ロッソが振るった？テンポラーレ？は？ホワイトアウル？の腕部にからみついて互いに動きが止まる。
こうなるとスラスター能力で勝る？ペルフェッド・エスダーテ？が断然有利だ。
それに相手は少なからず損傷を受けている。
一〇〇％の性能を出して切ってもまだＩＳに及ばないのがＩＳ－Ｎなのだ。徐々にロッソが？テンポラーレ？を巻きとって二機の間が狭くなっていく。
「くぅッ！　あまり調子に・・・のらないことですね！！」
「えッ！？」
しまった、まだ向こうには荷電粒子砲がフリーな状態で！！
しかも相手はもうすぐ目の前。
避けるタイミングなんて無い。
すると、突然ロッソが僕を乱暴に鳥越先輩へ投げつける。
鳥越先輩もいきなりの事だったから？大蛇？を慌てて終い両手で僕を受け止めた。
「ちょ、ロッソォ！？」
「おめぇ危ねぇだろ！？」
その直後、ロッソが荷電粒子砲の直撃を受け辺りが爆発に包まれた。
「ロッソ！！」
「おい、あの馬鹿！？」
ちょっとちょっと！
ロッソ！
避ける暇が無かったから、僕だけでもと先輩に放り投げたのか！？
だが、爆煙がはれて行くとそこには依然として無傷の？ペルフェッド・エスダーテ？の姿があった。
「何！？」
驚きの声を上げる？ホワイトアウル？だが僕たちは別の事に驚いて

いた。
「なぁ・・・あれ・・」
「え、えぇ・・・」
目じりは釣り上がり燃えるように赤い髪をまるで獣のように振り乱す。
そして声は、まさに野獣のごとき雄たけび。
「ハッハァッ!!!　よくもまぁやってくれやがったなぁえぇ!!
たっぷりと借りは返させてもらうぜぇ?覚悟しやぁれッ!」
「あいつ・・まさか」
鳥越先輩は何かを察した様だったが僕には何が起こったかは分からない。
でもとにかく?ロッソ・ミオネッティ?が完全復活したってことだけは確かに分かった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「驚いたわね・・・」
理は地上から戦闘を見上げて思わず声を漏らす。
理には既にある程度、ロッソの身に起きた変化についての予想が立っていた。
彼がいればとは思っていたけれど、まさかここまで事態が好転するとは思わなかった。
理は、出来れば聡也にはこの場所へ来てほしくなかった。彼の身の安全が最優先だったからだ。
でも結局自分は彼を炊きつけてしまった。
ロッソを助けられるのはあなただけだと言って。
正直言って迷いが無かったわけではない。
だが結果はどうだ?

事態は最高の形になったではないか。
「フフフッ、愛って偉大ね」
理は笑うと、通信回線を開く。
「まだ分かってない様子のあの二人に、ちょっと説明してあげましょ♪」
そういう理の手はいつにもまして軽やかだった。

弟３４話～叫ぶ思い・届く気持ち・目覚める情熱～（後書き）

たぶん次あたりで終わる予定しています。
というか何度も自分で言うのもなんですが、全然海に行けない！
イライラされてる方もおられるのかおられないのかわかりませんけど、本当にもう少しお付き合いくださいネ・・。

それはそうと昨日は土用の丑の日でしたね。
実は土用の丑ってうなぎを食べる日ではなくうなぎ屋がうなぎを供養する日だそうですよ。
それを僕はアメリカ人から聞きました（ぇ

日本人ってほとほと呆れるぐらい日本のことを知りませんねｗ

それでは３５話でお会いしましょう。

さよならっ！

第35話～受け取った自分だけの贈り物～

「あの・・・先輩、ロッソに何が起きたのか・・・分かるんですか？」

正直僕には何が起きたのか分からなかった。

いくら二重人格とはいえ、それを一瞬で切り替えることなど出来るものなんだろうか・・？

嫌そもそも制御できないから二重人格なわけで・・・あれ？

「・・・まぁそれなりにはな・・・確証はねぇけ・・・どぉ！？」

ん？先輩が驚いた・・・？

僕は先輩の方を見ると、先輩のすぐ目の前にモニターが開いてそこには理先輩の顔があった。

だがモニター越しの顔は、笑顔とは言い難く驚いた鳥越先輩をジト目で睨んでいる。

「・・・ちょっと、失礼じゃない？」

「馬鹿野郎・・・！？　何の前触れもなくお前の顔なんか見たらだれでもそうなるっての・・！」

『・・・へぇ・・』

「・・・あ」

しまったという顔をする鳥越先輩だったが、言った言葉は返ってはこない。

ここでもどうやら一つ修羅場が生まれたようだった。

とはいえ、いつまでもこの気まずい空気のまま放っておいても話は前に進まない。

理先輩の方から通信を入れて来たのだからそれは何か伝えたい事でもあるのだろうと思い、僕は恐る恐る口をはさむ事にした。

「あの～・・・お取り込み中悪いんですけれど・・・理先輩・・どうかしたんですか？」

『え、あぁそうだったわ。その馬鹿の所為で時間を無駄にするわけにもいかないものね』
「・・・てめぇもか・・？」
「お願いですから、火の粉を僕にまで降りかけないでくださいよ・・」
『まぁまぁ』
クスリと笑う理先輩と、凄い目で睨む鳥越先輩に挟まれながも僕は、その両者の視線を出来る限り意識しないようにしながら早く本題に排すよう急かした。
「とにかく、一体どんな要件なんですかッ」
『あらあらそんなに怒らなくてもいいのに。フフッ、まぁいいわ。今連絡したのはロッソちゃんについてよ』
「ロッソ・・・まさか理先輩ロッソに何が起きたか分かってるんですか！？」
『えぇ、そりゃあもちろん♪』
「・・・じゃあ、やっぱり」
『あら、聡華は分かってたのね・・・。意外だったわ』
理先輩の言葉で確信したように頷く鳥越先輩。二人だけ分かって僕だけ・・、なんだか疎外感・・。
っていうか、どうして分かったんだろう。
近くで見ていた鳥越先輩は、まだ分からなくもないが理先輩は地上から見ていたんですよね。
どうして僕だけ分からないんだ・・。
「あの、そこだけで納得されても・・」
「納得って言うか・・・なぁ。・・本当に分からねぇのか？」
『私たちはそんなに難しい事を考えているわけじゃないのよ』
い、いや・・・うん？
『あなた典型的に理屈で物を考えるタイプね』
「えぇ・・まぁ」
「世の中にゃ、理屈じゃ推しはかれねぇ事があるってことさ」

『そうね、そこの口の悪い女が女やってるのよ？』
「・・・どういう意味だよ・・・」
ま、まぁ理先輩と鳥越先輩の掛け合いは良いとして・・。
理屈じゃない？
ますます分からなくなってきた・・。
だって大体物事には理屈があって。
それだから説明できるし理解も出来る。
でも・・今回のはそれは理屈じゃない・・？
『あらら、ここまで言っても分からない・・？』
「・・・お前あたしはスルーか・・・もういいや・・」
「だから・・・その・・・」
『ま、これ以上焦らしても時間の無駄ね』
片目を閉じて意地悪な笑みを浮かべるモニター越しの理先輩。
それに鳥越先輩も、同調する。
「だな。ま、ちゃっちゃと言ってや『愛よ！』――うぉ！？」
「あい！？」
思わず声が上ずる。
鳥越先輩も顔が引きつっている。
あい？
ｅｙｅ・・眼
藍・・藍っていう植物の色素に由来する色
曖・・はっきりしない事
この中に答えはありますかって聞いてみたい。
多分・・・いやきっとありますよ。
ね、先輩！
僕は期待を込めた目で鳥越先輩を見やる。
だが返ってきたのは、凄くかわいそうなものをも見る目と冷たい一言だった。
「・・・お前、実は馬鹿だろ」
そんなにはっきり言わなくても・・・。

『そうよねぇ、こんなチンチクリンに馬鹿って言われたらその場から飛び降り自殺よね』
「・・・もう突っ込むだけ時間の無駄だからやらねぇ・・」
「いや・・あの・・えぇと・・あいって・・だから」
『愛よ』
「あい・・・あの・・・」
『そう、う～ん・・あぁ！　そうＬＯＶＥよ』
「あい・・・あ・・い・・・愛！？！？！？」
いやいやいやいや・・・えッ！？
あ、いや・・うぇ！？
「お前どんだけテンパってんだ・・」
間近で言っている鳥越先輩の突っ込みも耳に入らない。
いや、内心うん、想像はついていたんですよ。
理先輩がいった？あい？ってのが愛って言うのは・・。
だけど・・え、なに愛って何？
誰が誰に？
愛って言うのは、いわゆるアレだ。
誰かと誰かを好きになるとかそう言ったやつだ。
この場合は・・・。
『多分頭の中ぐるぐる回ってるわね』
「・・うん・・・・？？」
「おい、理・・なんだかイライラして来たんだが・・」
『いや、それを私に言われても・・』
「ったく・・やっぱこう言う事はなこう言う言い方するのが一番なんだって」
言うと先輩は僕の顔をＩＳの腕のままガッと掴む。
いきなり何事かと思ったが、鳥越先輩の目はいつになく真剣そのもので、僕もそんな目で見つめられては嫌でも我に返る。
僕の様子を見て、聞く体勢が出来たと判断するや鳥越先輩はサラッと言い放った。

「ロッソはお前の事が好きなの。これで分かったか？」
「・・・・え？」
今日もうすでに何回目か分からない？え？と驚き。いやもう驚いたのかさえ自分じゃ分からなかった。
ロッソが・・・・好き？
僕を？
「・・・でも、なんで？」
『だから言ってたじゃねぇかよ。理屈じゃねぇんだって」
『そうそう♪』
さっきの表情から一転二人の顔はニヤニヤしていて、口調もどこか僕を茶化している風だ。
そして一転と言えばそれを聞いてから僕の頭も、さっきまでの嵐のような思考の迷走から今は台風一過の様な穏やかな空気に変わっていた。
それでもまだ考えは少しまとまってないんですけれどね・・。
そんな僕を尻目に理先輩が鳥越先輩の発言にフォローを入れる。
『まぁでも全然説明できないわけじゃないのよ。要はロッソちゃんはさっき聡也君に自分の気持ちを叫ばれて自分に自信が持てたんじゃない？　こんなになった自分をそれでも叫んでくれる人がいるってことに。大切だってまだあなたが言ってくれた事に』
「・・・・」
『いい、聡也君。二重人格ってね、考えているよりもとっても大変だしつらいことなの。実際私も以前色々相談に乗って上げた事もあったけれどね。そもそもどっちの人格が色濃く表れるかなんて成長過程で左右されるものだし、特にロッソちゃんは今のメイン人格は後から生まれた物だからなおさらね・・』
「後から・・」
じゃあ、今のあの荒っぽいのが本当のロッソだったんですか。
僕はそう自分で思って、すぐさまその考えを否定する。
本当ってなんだろう。

どっちもロッソなんだから本当もへったくれも無いじゃないか。
けどきっとそう言う事でも悩んでたんだろうと思う。
『だからこそ、自分に自信が持てない。どっちの自分が本当なのかってのが分からないから・・』
そこで理先輩は言葉を区切ると、次に見せたのは見惚れてしまうほど優しい笑顔だった。
『でも、それをあなたはあんなに簡単に解決してしまったわ。自分の気持ちを叫ぶ。これだけの事でね。そんな人物を好きになるなって言う方が無理な話でしょ?』
「・・・・・」
な、なんだかそうやって言われると急に恥ずかしくなってくる。
自分が理先輩の、笑顔に赤くなっているのかそれともロッソが自分の事を好きだからその事実を改めて実感して恥ずかしいのか分からない。
でも確かに自分の頬が高揚して赤くなっているって言う感覚は分かる。
『両方の自分に自信を持てたからこそ、ああやって自分の人格をコントロール出来る様になったって考えるのがまぁ自然よね?』
「若干、ご都合主義っぽいけどな」
『良いじゃない、だって理屈じゃないんだしね』
「ちげぇねぇな」
ははは と笑いあう二人を横に見ながら、僕は?ホワイトアウル?と戦うロッソを見やる。
押されてはいない。むしろ上手く二人の人格を使い分けながら有利に戦っている。
このままいけば絶対に負ける事なんて無いだろう。
・・・けど・・。
実感してしまったからこそ、抑えられない衝動がこみ上げてくる。
知ってしまったから。
ようやくだけど気付いてしまったからこそ止められない一つの思い。

それは――――――――――

僕も行きたい。

あそこへ行って、守ってみたい。

自分の責任もを持って。

でもそのための翼が今の僕にはなかった。

グッと握りしめる拳。だがそこで鳥越先輩のＩＳモニターにまた別口のウィンドウが開く。

アルディ・・・？

そこに移っていたのはアルディとタンクトップの少女だった。

「お前・・・・ってかそいつ誰だよ」

『先輩話は後で、聡也！　君にプレゼントがあるんだよ』

「プレゼント？」

『フフッ、これだよ！』

アルディは言いながら黒いキーシリンダーのついたカードをかざす。

「それは！」

間違いない、僕のと同じＩＳ－Ｎのシリンダーカードだ！

これは・・・？ブラックアウル？の・・・。

「どうしてそれを君が・・！？」

『だから説明は後だって！　今からそっちに投げるからね！』

「投げる！？」

飛ばすって結構な距離が・・。

するとモニター向こうのアルディの両椀が光って無機質な白い装甲が展開される。
・・・あれ？　アルディのＩＳは青色だったはずじゃ・・。
『行くよ！』
声と共にモニターが切れ、その直後もの凄い早さでシリンダーカードが飛んでくる。
「っと、あぶねぇな・・」
それを鳥越先輩がキャッチすると、僕はそれを手渡される。
黒光りするそれは、同じシリンダーカードでありながらやはりどこか感覚的な違いはあった。
だがこれだけあっても・・・。
僕は鳥越先輩にリダイアルを要求してアルディに問う。
「あの、鍵は無いんですか？」
『鍵・・・・あ、そう言えばそれしか・・ねぇ志穂音』
『うん、ウチが拾ったんだけど鍵は無かったなぁ・・』
無かったって・・。
それじゃ使えないじゃないですか！
だがその時、会話を聞いていた理先輩がぽつりと言葉をこぼした。
『・・・・ちょっと待って・・その鍵って・・こう、自転車のロックする様な小さな鍵？』
「えぇ・・そうですけど・・・・って持ってるんですか？」
『持ってるって言うか私も拾ったのよね、あなたが倒れてた路地裏で・・』
あの時か・・。偶然ポケットから落ちてしまったんですね。流石に姉さんでもそこまでは気がつかなかったのか。
だが一応二つのアイテムは揃ったが根本的な問題がある。
それは、イグニッションキーが？ホワイトアウル？の物という事だ。
対してシリンダーカードは？ブラックアウル？用。
そんなの挿せても回せない。
「駄目ですよ・・それじゃ・・二つとも別々のものじゃないですか・

・」
だが、理先輩は僕の不安を余所にあっけらかんとして言う。
『良いじゃない、試してみれば。減るもんじゃないんだし』
「いや、まぁそれはそうですけど・・」
『あなたロッソちゃんを助けたくないの？』
「それは、助けたいですけど・・」
「だったら迷う前にまず行動だろ」
言うと鳥越先輩は、理先輩のもとへ降下していく。
そこには、降下を見て近づいてきたのかアルディと少女の姿もあった。
「はい、これ」
僕は鳥越先輩のＩＳの腕から降りると理先輩から鍵を受け取る。
鍵はいつも通りの白い鍵。
そしてそれを差し込むカードは黒。
・・・普通で考えたら入れたって何も起きるわけがない。
だってそれが普通だから。
それにＩＳ－ＮはＩＳ程ファンタジックな物じゃないはずだ。
機械なのだから、想像を超えられるはずなんて無い。
設定された能力までしか出せないそれが機械。
僕は二つのアイテムに視線を落とす。
僕がゆっくりとシリンダーにキーを差し込むと、鳥越先輩達がスッと僕の周りから離れた。
ふぅ・・・。
眼を閉じて大きく息を吐く。
・・・理屈じゃないか・・。
本当に都合のいい言葉ですね。
そして僕は、イグニッションキーを一気に回した。
――――――――――信じられなかった――――――――――

キーを回した瞬間身体に力の奔流を感じ僕は光に包まれる。
その光景を僕だけじゃない、先輩たちもアルディたちも驚きのまなざしで見ていると思う。
?ホワイトアウル?の展開時以上に感じる高いフィット感。装甲に暖かく包まれる不思議な感覚。
すべてが一瞬の事だったが、僕はそれがかなりゆっくりと優しく行われたように感じていた。
?ホワイトアウル?や?ブラックアウル?に見られたバイザーは無くなり右腕に特殊な折りたたみ式のブレードが追加された以外は装甲の形状に大きな変化は見られない。武装は四門あった砲が二門に減らされているがスラスター出力はどうやら上がっているようだ。
機体の色は?ブラックアウル?のシリンダーカードを使用したためか黒くそれが鏡面装甲仕上げになって月の淡い光を鈍く反射している。
「・・・かっこいいね・・」
誰かがボソッと言った言葉もこの機体のハイパーセンサーなら捕らえてくれる。
明らかに?ホワイトアウル?のそれとは感度も性能も違っていた。
僕は、戦闘を中断してこっちを見ている?ホワイトアウル?とロッソを見据える。
・・・やっと行けるこれで・・。
僕は頭の中にどこからか響いてきた名前を口にする。
「行きますよ・・・ナイトシュライク!」

◇◆◇◆◇◆

条聡也だった。
こんなことがあってたまるものかと、必死に否定するも接近する漆黒の機体が消えるわけではない。
馬鹿な！　こんな・・こんなことが！
「ぐッ！？」
ナイトシュライクに気をとられていた聡也は、ロッソの背部からの一撃をまともに食らい体制を大きく崩すと同時に背部ウェイポンラックを失う。
すでに聡華に武装の二つを破壊されていたのでさほど大きなダメージではないが、そこに荷電粒子砲のひとつでもあれば今頃誘爆で勝負は決まっていた。
「てめぇの敵は、あたしだっつたよな？」
『・・・今のは・・卑怯・・・』
「う、うっせ！　攻撃なんだから当たりゃ何でもいいだろ！」
『・・・聡也はきっとそういうの・・・嫌い』
「なッ！？　そ、それは困るな・・・」
ロッソはもう一人の自分自身と短い掛け合いを行う。
これができるようになったのも、聡也のおかげだ。
どっちの自分にも自信がついた事で、可能になった二重人格の同時制御？ハーモニクス？。
ロッソはこれによって瞬時の人格の入れ替えを可能としているのだ。
だがそんなことを知る由もない敵は、苛立ちを隠さずに反撃に転じる。
だがその構えた砲は、ロッソに向かって火を吹く前に手元で爆散した。
「撃たせませんよ！」
「君は、どこまで！！」
？ナイトシュライク？駆る聡也は背中に背負う荷電粒子砲で？ホワイトアウル？の砲を撃ち抜くと、
？ナイトシュライク？の右腕にマウントされた、？早贄（はやにえ）？を展開す

る。
「ロッソ！」
「っへ、言わなくてもわかってるって！！」
ロッソは？テンポラーレ？を最大長に伸ばし敵を？テンポラーレ？の刃で覆う。
聡也は？ナイトシュライク？の高い反応速度と機動性を生かして生き物のように動く？テンポラーレ？の
刃のわずかな隙間を縫うように飛び目にもとまらぬ速さで？ホワイトアウル？を切り刻んでいく。
絶え間なく続く刃と刃の猛襲。
？フェーロ・カステッロ？日本語で鉄の城を意味するイタリア語で元々ロッソが？テンポラーレ？を使って一人で行う中範囲攻撃用の技だが、それに聡也が？ナイトシュライク？で一味加えている。
やがて猛襲が終わるとそこには飛んでいるのも不思議なぐらいボロボロになった？ホワイトアウル？があった。
「はぁ・・・はぁ・・・くぅッ」
「ここまでのようですね・・・」
銃口を突きつけられて、？ホワイトアウル？はハハッとあきらめたように乾いた笑いを漏らした。
「どうするつもりですか？　・・・殺します？」
「・・・いえ、殺しはしませんよ・・。ただあなたにはしかるべきところでしかるべき処置を受けていただきます」
「・・・しかるべき・・処置？　おい、聡也そりゃ一体・・？」
ロッソが、疑問を口にするが聡也には今それを説明するつもりはなかった。
聡也はロッソを「後で・・」と制すると敵に向き直る。
「然るべき・・・処置・・ですか。ふふ・・・どちらがでしょうね・・」
「どういう意味です？」
怪訝な顔を向ける聡也に敵は乾いた笑みから含みのある笑みへとそ

の表情を変える。
バイザーで口元しか見えないがその表情は聡也には手に取るようにわかる。
「・・・それはまた・・・後でですね！！」
「うわッ！！」
「おい、聡也！」
？ホワイトアウル？は最後の足掻きとばかりに聡也の腹部を蹴り飛ばす。
そうして距離の開いたところに、静観を決め込んでいたこちらもボロボロの？紫燕？がこちらも最後の賭けといわんばかりに、？バニッシングブースト？を使い割り込んでくる。
「しまった！？」
「・・てめぇら・・覚えとけ！！」
？紫燕？はすれ違いざまにそうはき捨て、？ホワイトアウル？を回収して戦線を離脱する。
「あぁッ、くそッ！！」
ロッソは何も無い宙を蹴り悔しがり聡也は？紫燕？の飛び去った後をただ険しい顔で見つめていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・ふむ・・なるほど。
これだから、やはり面白い。
五条　叶は、潜水艦？守？の自室モニターで聡也が送ってきた映像を見て口元を緩めていた。
黒と白の融合とは・・・ね。
まぁあり得ない話では無いさ・・。
アレはそういう風な代物だったからね。

今回はこちらも初めからかなりの手負い状態だったからあの？ナイトシュライク？は性能の半分も出していない。
もちろん？ハーモニクス？の彼女も、自分の力を一〇〇％出したとはいえないだろう。
・・・にしてもだ。
叶は珍しく少し残念そうな顔をする。
こちらの収穫がゼロでは・・ね。
強いてあげるなら？ホワイトアウル？だけ。
それも相手の戦力を殺ぐまでには至らず、結果相手に更に大きい力を渡す結果になってしまった。
それに、なにより叶が残念に思っているのは三つ目のＩＳ－Ｎコアの奪取失敗であった。
・・・アレぐらいは取ってきてもらいたかったものだが・・。
実際コアを造ろうと思えば叶には造れるのだが、今は海のど真ん中で機材はあるが材料が無い。
そして時間も。
だからこそ、彼女に設計図を送ったのだがね・・・。
・・・設計図と言えば、あの聡華を吹き飛ばしたライフル。
アレも情報では、誰かからの贈り物だと言う事だったが・・・。
いや・・・。
誰かでは無いね。
おおよそ検討は付いている。
束・・・君はいつも私の邪魔をするね。
君は私に興味のかけらもないくせにね？
束という人物は興味が無い事には全くと言っていいほど関知しないくせに、自分が興味を持つと途端に鬱陶しいぐらいに構ってくる人物だ。
恐らく彼女・・・千葉　志穂音も束の触角に引っかかった人物だったのだろう。
そう、だった。

今は違うんだろうね。
束は、興味があれば一週間も経たないうちに何かしらまたアクションを起こすほどの行動力を持つ人物。
それが数週間も音沙汰なしらしいではないか。
これは完全に束の興味から外れた確かな証拠である。
・・・まぁ、そうだろうね。私もコアの製作を依頼したとはいえさほど興味があると言うわけではない。技術力の高さはまぁ認めるがそれでも自分の思っていた以上の人物では無い。
まぁどこかで会えば、挨拶ぐらいはしておこうかな。
叶は志穂音と束についての考えを切り上げるとデスクの椅子から立ち上がり、冷たく無機質な鉄の天井に視線を遊ばせる。
さて、彼らはいつごろ戻ってくるだろうね。
損傷具合から見ても、それほど高速で飛ぶ事は不可能だろう。
まぁ・・・途中で落ちたら・・・その時はその時だね。
クルーがその考えを聞けば、驚きそうな事をさらりと頭の中で唱えて叶は着ていた白衣をなびかせながらゆっくりと扉へと身体を向ける。
「・・・ふぅ、やれやれ」
それが何についてのやれやれなのかは叶本人にもよくわからなかった。

◇◆◇◆◇◆

合流した織斑先生と共に警察や消防の関係者と共に事後処理を行うらしくまだあの変電所近くに残っている。
だから今いるメンバーは、僕とセシリー、そして聡也とロッソに鳥越・白鶴両先輩と織斑先生と一緒に現場に来た一夏とシャルロットと言う事になる。
結構な大所帯だね。
「まぁ・・確かに疲れたのは事実ですわね・・」
「最後なんてセシリア、蚊帳の外だったしな！」
「それはあなたが、来るなと仰るからでしょう！」
「あ～・・ほらほらロッソ、疲れてる人を茶化しちゃダメですよ」
そう言えばロッソはＩＳ降りてもあのままだね。
出来れば、あっち側になってくれ方が今は凄く平和に収まる気がする。
「ハハッ、そう起こらなくてもいいじゃねぇか。ったく日本人と言いイギリス人といい冗談が通じねぇなぁ」
「・・・冗談だったんだ」
「アルディ・・変なところに食いつかないでください。ややこしくなりますから・・・。ほらロッソ変わって変わって」
「っち、うっせぇなぁ・・」
言いながらロッソの表情やまとう雰囲気が一瞬で変わる。
さっき、白鶴先輩に聞いたがこれを二重人格（ハーモニクス）の同時制御と言うらしい。
？ハーモニクス？・・聞くのと見るのとじゃやっぱり受ける印象もだいぶ違うね。
「・・・これでいい？・・」
「えぇ、やっと平和になりました・・・」
「・・・聡也・・。あの子が馬鹿やろうって言ってた」
「・・・結局そっち経由で言われるんですね」
がっくりと肩を落とす聡也にシャルロットと一夏が声をかけた。
「良いんじゃないかな、なんかいっつも繋がってるって感じでさ。

僕は羨ましいなぁって思うけど・・」
そう言ってチラチラ一夏を見やるシャルロット。だが・・・
「確かに、いつでもどっちとも会話ができるんだから便利だよな」
・・・いい加減僕はこの唐変木は諦めた方がいいと思うんだけどどうだろうか。
それを提言してみようか・・・・・・いややめとこ。僕はまだ朝日が見たい。
「けど、ちょっとややこしいよな」
「ややこしい・・・と言うと？」
「・・・あぁ、名前だね一夏」
「そうそう、アルディの言うとおり名前がさどっちもロッソだとなんか呼びにくくないか？」
「・・・でも、私はロッソだし・・・」
「う～んそれはそうなんだが・・」
と言って考え込む一夏。
まぁ一夏の言う事も一理ある。現状ロッソ・ミオネッティと言う人間は一人だが人格は二人いる。
よく同姓同名なんてのを聞くけど、要はそんな感じで名前を呼ぶと二人がいっぺんに反応する。
どちらかを独立して呼びたい時にはかなり不便だ。
確かに良案ではあるのだが・・。
「でもさ、一夏。そのロッソはそれでいいのかな？」
どうやらシャルロットも僕と同じ疑問を持ったようで一夏に問いかける。
「良いのかって言うと？」
「うん、確かに一夏の言いたい事は分かるけど一夏の考えだとどっちかのロッソはいきなり違う名前で呼ばれるってことだよね？」
「あ・・」
そこでようやく気がついたようだ。
そう、ロッソはこれまでもロッソとして生きてきたしきっとこれか

らだってそうだろう。
そうすると、いきなり違う名前で呼ばれると言う事は必然的に自分はロッソでは無いと突き付けられるようなものなのだ。
しかし、僕たちの心配をよそにロッソはいつも通り涼しげな口調で言う。
「・・・大丈夫・・・むしろ今はその方がいい・・・・かな・・・」
「え、でも・・」
それでもなおシャルロットは心配そうにロッソの顔を見つめる。
細かな気遣いの出来る彼女だからこそ、人一倍心配なのかもしれない。
しかしロッソはシャルロットに微笑みかける。微笑むと言っても元々こちらではそれほど表情の変化があるわけではないので、その変化は些細で言われなければ気がつかないかもしれないがその場にいる誰もがロッソは笑っていると言う事は伝わっていた。
「・・・気にしないで。私・・・気がついた。聡也の叫んだ事を聞いてね。・・・私今までどっちが本当の自分なんだろうってずっと考えてた・・・。大切なのはきっとどちらか片方で・・もう片方はいらない不必要な物なんだって・・」
自分自身をいらないって考える事はどんな気分なんだろうか。
少なくとも僕は、ちゃらんぽらんだしそんな自分への問いかけなんてしたこともないしするタイミングも無い。自分自身という物を考える。これは中々に難しい事だろうし何よりつらい事だと思う。
「・・・でもね、今日聡也の言葉を聞いたら、自分はなんて馬鹿馬鹿しい事を考えていたんだって思えてきた・・・・。どっちが大切かだなんて・・・そんな事考えるまでも無かったのに・・・」
この問題に答えなどない。でもだからこそそれが答えだと言う物を見つけた時人は大きく変われる。成長できる。
「・・・どっちも大切な自分だから・・・・ここにいるのがロッソ・ミオネッティだから・・・」
その顔からは、やはり表情は読みとれないが胸には伝わってくる。

ロッソの感情が。思いが。そして考えが。
「でも、だからこそ今・・・私は名前が欲しくなった・・。ロッソ・ミオネッティって言う名前・・嫌いじゃないしむしろ好きだけど・・・私がロッソだったら・・・・ちょっと問題があるってことに気がついたから・・・」
「・・・問題？」
コクリと頷くロッソ。
そして、ロッソはやはり涼しい顔で爆弾を投下した。
「私がロッソだったら聡也を私として好きになれないから・・・」
「なぁッ！？」
もちろんだがこの声は聡也のものだ。
一夏は今だ少しピンと来ていない様だったが、それ以外は後ろを歩いていた先輩方も含め全員がニヤニヤ顔で聡也を見ていた。
あー・・なるほどね。
つまりどっちもロッソだったら一人の人格として聡也を愛せないとそう言うわけだな。
自分だけを呼んでほしいとそう言うわけだ。
そりゃ確かにそれぞれ名前があった方がいいね。
「な、な、何を言ってッ！！？？」
「あらあら、聡也さん顔が真っ赤ですわ」
「そりゃなるだろ、こんな大勢の目の前で告られりゃぁ」
「ウフフッ、ロッソちゃん大胆ね～」
「良いなぁ・・・ぼ、僕も一夏に言って・・・・・ゴニョゴニョ」
「おい、シャルいま俺を呼ばなかったか？」
「ふえッ！？　い、いや気のせいじゃないかな！？」
まぁ・・・うん、その後なんてこうなるわな。
だが、この事について驚いたのは聡也だけではないようだ。
『お前何勝手な事言ってんだ！！！』
「・・・勝手じゃない・・」
『い、いやお前それは・・・ず、ずりぃだろ！！』

「ずるくない・・・私は自分の気持ちを言っただけ・・・」
『だったらあたしも言ってやるから変われ、今すぐ変われ！』
「やだ・・・」
う、う～ん・・・ほとんど一人漫才だねぇ。
僕にはロッソの相槌しか聞こえないけど、きっと彼女の中で壮絶なバトルが繰り広げられているのだろう・・・文字通り。
と、このまま放っておいてもまとまる話もまとまらない。
僕は少し大きめの声で一夏に聞く。
「で、一夏。名前は決まってるのかい？」
「いや、まだだぞ」
「そんな力いっぱい言わなくても・・・」
「ってか、アルディおめぇ聞く相手がちげぇだろ？」
そこへ鳥越先輩と白鶴先輩が口をはさんだ。
「そうね、聡華の言うとおり確かに言いだしっぺは一夏君だったけど・・・」
「アル、それを決めるのは一夏さんではなく聡也さんですわよ」
あぁ、そう言われればそうか・・。
僕は聡也を一瞥する。
聡也は腕を組んでブツブツと考え事をしていた。
セシリー達に解放されてから考え始めたのだろう。と言う事はまだ考え始めて一分も経っていない。まぁ人の名前を考えろって言われて一分もたたずに答えが出るはずもないか。
さてさて、どんな名前が出てくるのやら。
ロッソは当然のことながら、僕たちも固唾をのんで聡也の答えを待つ。
そして数分後聡也は一つの単語をつぶやいた。
「・・・ロゼオ・・・」
「え？」
「ロゼオ・ミオネッティ・・・はどうでしょう・・？」
ロゼオって・・・確か・・ロシア語じゃ・・？

「確かイタリア語でも、桃色ってロゼオでしたよね。ロッソは赤だからでもこっちの人格は赤って言うほど苛烈じゃない・・。でも全く赤とかけ離れた色や物でもどうかと思いますし・・だから・・ロゼオ」

僕らは一斉に彼女を振り返る。

すると彼女は・・

「ロゼオ・・・ロゼオ・ミオネッティ・・それが・・・私・・・」

何度もゆっくりと頷きながら、名前を繰り返すロゼオ。

その顔は、初めて貰った自分だけの名前をとても喜んでいるような、それでいてどこかまだ慣れない違和感があるようなそんな不思議な顔をしていた。

だが、数回それを繰り返して聡也の顔を見る。

そして今度は誰が見ても分かるような笑顔で言った。

「・・・ありがとう・・」

聡也から始めて貰った自分だけの贈り物。

それは目には見えないけれど僕にはロッソがその名前をしっかり両手で丁寧に受け取った用に見えた。

臨海学校前に僕たちの友人が一人増えた瞬間だ。

日も完全に落ちて空に綺麗な満月が見える。

そして夜空にはベガ、アルタイル、デネブの夏の大三角形が美しく輝く。

季節は夏。

サクラメントの夏もそれなりに暑かったが、ここで迎える夏は更に暑くなりそうだと・・・・いや、なるに違いないと僕は直感していた。

第３５話～受け取った自分だけの贈り物～（後書き）

ようやくこの長々と続いた買い物編が終了。
最後買い物してないじゃんって言うツッコミは無しでお願いします。

どうもお久しぶりですしるくです。

さて、次回はちょっと流石に今回がオリジナル展開過ぎたので路線を戻してちょっと、主人公を変えて短いストーリーを書こうかなと思ってます。

ですので・・・まだまだ臨海学校は先です（爆

それでは、皆さまこれからもお付き合いください・・

それでは

さよならッ！

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ～シャルロットｖｓ日独中三国同盟～（前書き）

シャルロットが箒・ラウラ・鈴を出し抜いてデート行った事の要は後始末な何か・・・です・・。

ちょっと後々に繋がる部分もチョロットだけ。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ～シャルロットｖｓ日独中三国同盟～

「まちなさい、シャルロットッ！！」
「っく、回り込まれた！」
シャルロットは後ろを振り返る。
そこにはいつも部屋で顔を合わせる小さな白銀のルームメイトが自分を追いかけてきていた。
もちろん追いかけているので、目は全然笑っていない。
後ろにはラウラ、前には鈴・・・。どっちも強敵だけど・・。
シャルロットはコンマ数秒で答えを弾きだすと前を向いて鈴に突進する。
「やけくそになったってわけ？　あんたにしちゃ随分と強引に来るじゃない！」
鈴の余裕たっぷりの声を聞いてシャルロットはにやりと笑い、やや挑発的に言葉を述べた。
「やけくそになったわけじゃないさ、ただどっちが簡単に抜けられるかを考えただけだよッ！」
「な、なんですってぇッ」
「鈴、乗せられるな！　それでは思うつぼだぞ！」
シャルロットが鈴に対して挑発的な言動を取ったのは、まさしくラウラがさっき言ったこと。
鈴は熱くなりやすい性格だから一度頭に血を登らせてしまえば代表候補生とてチョロいもの。
そして鈴はシャルロットの狙い通りに熱くなり、普通に組みつけば簡単に捕まえられると言うのにわざわざかなり大きく振りかぶって両手でシャルロットを捕まえにくる。
そんなオーバーアクションに捕まるほどシャルロットの運動神経は悪くない。
シャルロットはタイミングをずらして鈴が前のめりになるのを見る

や、軽やかにその背中を蹴って鈴の上を通過する。
「それじゃ！」
「くぅッ、ちょっと待ちな――――！？」
「ば、馬鹿！　そこをどけ！！」
鈴はシャルロットに背中を踏み台にされてその場で立ち止まって振り返る。
・・それがいけなかった。
なぜなら後ろにはラウラがいたからだ。
いくらラウラとて走っている速度を一気に止める子なんて言う人間離れした行動は不可能だ。
そして案の定・・
「「へぎゅッ！！！」」
正面衝突・・・。
倒れる二人を尻目にスタッと綺麗に着地するシャルロット。
これが審査だったら審査員の誰もが一〇．〇は確実だろう。
ホッと一息つくシャルロットしかしまだ終わっていない。
「・・・ふん、その二人を倒したからと言っていい気になるなよ・・。私はその二人ほど甘くはない！」
シャルロットが鈴をかわした先はちょっとしたホールのような感じに開けている。
そして丁度どの真中に、木刀を片手にやる気（殺る気）満々と言った表情でこちらを睨む剣の巫女がいた。
「・ほ・・・箒・・」
シャルロットの本能が告げる。
・・彼女は不味いと。
それにチラッと後ろを見やるとさっき正面衝突で倒れた二人も復活しようとしている。
・・・うわぁ・・。
これは・・・・。
「逃げるが勝ち！」

「「「待てぇッ！！！」」」
シャルロットが再び廊下を駆け始めると、さっきまでふらつきながら起き始めた二人まで種でも弾けたのかと思うほどの超絶覚醒で立ち上がりシャルロットを追いかけてくる。

さて、どうしてシャルロットが追いかけられているのか。
その理由は、簡単で先日この三人を出し抜いて一夏と買い物に出かけたからである。
実際シャルロットもこのぐらいの事は想像できなかったわけじゃない。
後が怖いなぁとは思ったのだが、それ以上に一夏を独り占めできると言う夢のような時間がシャルロットを動かしたのだ。
だからシャルロットは買い物から帰って、寮の自室に戻るまで周囲の警戒は怠らなかったしルームメイトのラウラにも細心の注意を払っていた。
だが、シャルロットはその日誰にも何も言われなかった。
ラウラはともかくとして、あの鈴や箒といった面々にも会ったが普通に二言三言会話を交わしただけで別に何もなかった。
そして次の日も何事もなく実習や授業を終えて寮の自室に帰ってきて、いつもと変わらぬ日常を過ごした。
事が動いたのはそれから数日後のある放課後だった。

「ん～・・今日もアレだな。特にコレつって面白いってわけでもつまらないってわけでもない授業だったな」
「一夏、それを普通って言うんだよ。日本語知らないのかい？」

「・・アメリカ人のお前にそれは言われたくねぇな」
授業が終わって一夏とアルディが談笑を始めるいつもの光景。
そしていつもならそこへ、セシリアや箒たちが自然に集まっていくのだが・・。
この日は少し違っていた。
いつもなら集まらない女子が複数一夏とアルディを連れて行ってしまったのだ。
もちろんセシリアはアルディについていったが。
まぁ、大方あの市街地戦の事をまた聞くつもりなのだろうと、特にそれは気に留めなかった。
と、そこへ静かに鈴が教室に入ってきた。
あれ、鈴だ。残念だったね、一夏はさっき他の子たちと一緒にどこかへ・・・・・。
と、そこまで考えてシャルロットは異変に気付く。
あれ？
・・・・一夏が連れて行かれたって言うのに・・・・
どうして箒やラウラは何も言わなかったんだ？
シャルロットは考えて行くにつれて、徐々に顔が青ざめてくのが自分でも分かった。
鈴は、ゆっくりと教壇に立つと・・・・。
「その裏切り者を引ッ立てぇいッッ！！！！」
「「「「「「サーイエッサー！！！！！！」」」」」」
バンッと教卓を叩き、教室の女子全員が鈴の号令に敬礼で答える。
そして鈴が勢いよく指さす先に・・・・シャルロットはいなかった。
「っち、流石シャルロットね！！　者ども追えぇッ！！」
「A班とB班は私に続け、残りは箒と共にターゲットを追いこむぞ！」
一糸乱れぬ素早い動きでバッと生徒が四つの班に分かれて教室を飛び出していく。

それを既に教室から逃げ出していたシャルロットは振り返りながら確認する。
そうか、このための準備期間だったのだとシャルロットはそこでようやく気がついた。
つまりはシャルロットが帰った後、他の生徒たちはあの三人が中心となって作戦を練っていたのだ。
その間悟られまいとして、鈴も箒もラウラもそして他の生徒も自分にいつもと変わらぬ態度で接していたに違いない。
にしてもまさか、クラス全体が敵になるとは思わなかった。
鈴達を舐めてたなぁ・・
シャルロットはそう思いながら、走り続けて行った。

実際代表候補生のシャルロットにとって、いくら教室全体が敵になったといえど個人個人の能力は知れている。だから兵士クラスのいわゆる?クラスメイトの女子?を巻くのは比較的簡単だった。
そして冒頭に戻るわけだ。
クラスメイトを巻いたと思っていたのだが、どうやらその班はラウラの小隊だったらしい。
軍人のラウラらしい鋭い読みでシャルロットを、とある廊下に誘導して鈴との挟み撃ち。
結局失敗に終わったが、それでもその先には箒がいた。
で、現在だ。
「止まりなさい！　いま止まったら?龍砲?五十発で許してあげるから！」
「それって避けれるのッ?」
「馬鹿ね、的が動いてどうすんのよ！！」
「確実に死亡フラグじゃないかぁ！！」
「当たり前だ！　大体誰の所為でこんな事になっていると思っているんだ！」
「引っかかる方も悪いよ！」

「引っかける方が何倍も悪いに決まっているだろう！　いい加減観念するんだシャルロット、今なら?真剣白刃取り連続三十回出来たらもれなく居合切り体験キャンペーン?実施中だぞ！」
「それは僕が居合切りを体験できるのかな！?」
「あぁ、被験者としてな！！」
「どっちも死ぬ！?」
後ろから浴びせられる、さまざまな処刑方法の数々。そのどれもが即死か散々いたぶった後にトドメとかそう言ったよくもまぁそれだけの殺し方が十五歳の乙女の頭から出てくるなと思う物ばかり。
捕まったら確実に死ぬ。
これは確かだった。
・・・これが一夏の気持ちなのかな・・。
シャルロットは少しだけ一夏に対する自分の行動を改めようと思った。
そう思うと同時に、一夏に対してやり過ぎているのかと思える自分がいた事に驚いた。

シャルロットは、廊下の角を鋭い足のカッティングだけでクリアするとその先に人影を見つけた。
・・・あれは！
チラッとこちらを見やる眠たそうな目に涼しげな雰囲気を持つ少女。
ロゼオ！
そしてちょうどいいところにロゼオの後ろには掃除用具箱が。
シャルロットは後ろを見やる。
さっきのカッティングによるすばやいコーナリングか効いているのかまだ鈴たちの姿は見えない。
よし！
「ロゼオ、ちょっと助けて！！」
「・・・どうかしたの・・」

「いや・・あぁ、あの細かい話は後で話すからちょっと匿ってよ！」
ロゼオは少し考えてコクンと頷く。それを見たシャルロットはありがとうといって掃除用具箱の中に隠れた。
シャルロットは掃除用具箱の隙間から外の様子を伺うとそこにちょうど鈴が走ってきた。
どうやらラウラたちとは別れたようだ。
「あ、ちょうどいいところに！　ロッ・・・じゃなかったロゼオあんたシャルロット見なかった！？」
よし、頼むよロゼオ・・うまくごまかして・・・。
「・・・知らないよ・・」
「本当でしょうね・・？　嘘ついてもいいことなんて一つもないわよ？」
「・・・嘘じゃない・・」
そうそう、いい調子いい調子！
後は鈴がどこかへ言ってくれることを願うだけだ。
「・・・ふ～ん・・・まぁいいわ。じゃあシャルロット見つけたらすぐに連絡すんのよ！」
そういって遠ざかっていく足音。
その小さくなっていく音が、同時にシャルロットの危険信号の色をレッドからまぁイエローぐらいまで下げる。そしてロゼオの声がした。
「・・・もう大丈夫だよ・・・」
ロゼオから与えられた危険回避成功の合図でシャルロットはゆっくりと掃除用具箱の扉を開けて・・・・。
「そこにいたのね」
鈴を見つけた。
「えぇぇぇっ！！！！？？？？」
な、何で鈴がいるの！？
さっき走っていたのは・・！？
バッと音が小さくなった方向を向くと、にやっと笑うクラスメイト

が一人・・。
・・だ、だまされた!!
いやって言うかロゼオ!
「さっき大丈夫って!!」
シャルロットがロゼオを向き直るとロゼオは、スッと一枚の写真を顔の前に掲げて見せた。
「・・・・ごめんね・・・」
その写真に写っていたのは聡也の無防備な寝顔・・・。
っていうかそもそもロゼオはここで何を。
そこでシャルロットはピンと来た。
「ば、買収ッ!!」
「さぁ、もう逃がさないわよ!!」
「っく、こんな事で!」
シャルロットは掃除用具箱の中にあった塵取りと?箒?を取り出して?武装?する。
「あんた、武器は卑怯よ!」
「そっちだって買収は卑怯だよ!」
「くぅ、ああいえばこういうわね!!」
「そっちだって!!」
シャルロットは逃げることは困難と判断してここで鈴にある程度ダメージを与えておくべく?箒?をブレード代わりに、塵取りをシールド代わりに使い鈴に切りかかる。
だが鈴も軽い身のこなしでそれらを悠々とかわすと、攻勢に転じてきた。
「食らいなさい!」
鈴は振るった?箒?を前に飛んでかわすとそのまま前方宙返りをした勢いで脚をかかとからシャルロットに叩き込む。
しかしそれをシャルロットは塵取りシールドで防ぐ。
だが威力が思っていた以上に高かったため塵取りシールドはそのたった一回の攻撃で大きくへしゃげてしまい同時に左手がかなりしび

れていた。
とっさに、左手をかばうシャルロットだがその隙は鈴にとって最大のチャンスとなる。
「もらったぁぁ！！！」
「しまった！！」
鈴の拳は完全にシャルロットの腹部を捕らえている。
今からガードしてもかなりのダメージは覚悟せねばならなかった。
「あたしを騙したこと、後悔なさい！」
それでも、すばやくシャルロットは防御体制に入る――――――――――が・・。
その攻撃は届かなかった。
寸でで拳は止まり、鈴は何者かによって首根っこを掴まれていた。
「ちょっと何すんのよ、離しなさ・・・・・・い・・・・よ？」
振り返ってわめく鈴が固まるそれはシャルロットも同様だった。
だってそこにいたのは・・・。
「織斑・・・先生・・・・」
前髪で隠れた目元の奥に見える、地上生物すべてをにらみ殺せるのではないかと思えるほどの眼光。
「鳳・・・暴れるのは構わんが・・・・・器物損壊は困るな・・・」
「い、いや。だってアレはシャルロットが勝手に持ち出して・・」
「・・・・蹴り飛ばしたのは誰だ？」
「・・・・でも・・」
「・・・誰だ・・？」
有無を言わさぬ厳しい口調と眼光で鈴に迫る千冬。
いつの間にかロゼオはいなくなっていた。
ここにいてはとばっちりを食らうと踏んで逃げたのだろう。
そしてそれは例に漏れることなくシャルロットも同じだ。
ここにいてはとばっちりを食らうし、何より鈴をあの千冬が押さえていてくれるのはありがたい。
シャルロットは一歩づつ徐々に後ずさって・・・。

「逃げるが勝ち！」
一目散に逃げ出した。
「ふ、不条理だ～～～～！！！！！」
鈴の断末魔に少しだけ同情してしまった。

シャルロット・ディノアｖｓ鳳　鈴音
結果：判定勝ち

さて何気に陣頭指揮を取っていたであろう鈴が一番初めにリタイアした。
残りはラウラと箒・・・。
どっちも強敵だ。
箒は・・・・うん？
？箒？・・・
そこで自分が？箒？を持ったまま逃げてきた事に今さら気がつく。
右手にはしっかりと握られた掃除用具の？箒？。
うぅ～ん・・・言っちゃだめだよね、それでもなんか凄く・・・言いたくなって・・・。
・・・・・・・・。
少しの間。もう一度？箒？に目をやって・・・・。
「箒が持つ？箒？・・・・なんちゃって・・・・・」
？箒？を高々と掲げてその禁句を言う自分。

そしてシャルロットは冷静に？箒？を床に置く事にした。

さ、さて気を取り直して・・・。
えぇと・・それで・・あぁそうだった。
鈴のリタイアで強敵が一人減ったとはいえ箒とラウラどちらも手ごわい。

鈴は熱くすればよかったが、箒は熱くなればなるほど余計に攻撃力が倍増するタイプだしそもそもそんな安い挑発、ラウラには効かないだろう。
さて・・・どうしようか・・・。
「あ！　シャルロット発見！！」
「えぇッ！？」
くぅッ、これじゃおちおち考え事も出来ない！
しかも、見つかったのがタイミング悪くさっき警戒していたラウラのグループだった。
「見つけたぞ！」
一拍置いて、角から姿を現す小柄なルームメイト。
くぅ・・・・！
まだ有効な策も見つかっていないのに！
ひとまずシャルロットは、反対方向へ走りだす。
幸いにしてと言うべきか、そちらにもラウラは網を張っていたのだが到着が遅れシャルロットは上の階への逃走を成功させた。
「っち！　追うぞ！　B班、分かれて反対の階段からターゲットを追いこめ！」
遠くに聞こえるラウラの指示。
・・さすが的確だ・・。それに素早い。
でも内容が聞き取れたのはよかった。
無線でもない限り声を張り上げるしかないもんね。
さっき聞こえた通りなら、このままま っすぐ廊下を走っていくとラウラのグループが前後から自分を挟み撃ちにしてくるはずだ。
そうと分かれば、こっちも対策は立てやすい。
そうと分かれば！
シャルロットは、前方集団が自分を捕捉するギリギリの所でもと来た道を戻り始めた。
「えぇ、戻るの！？」
とは、前方グループのクラスメートの声。

僕の考えが当たっているのなら・・・。
「何、戻ってきただと!?」
ラウラが驚きと同時に、メンバーを見て顔をゆがませる。
やっぱり!
人数が少ない!
シャルロットの考えは、結構単純な事だ。
挟み撃ちと言う作戦は分かっていた。だからシャルロットは班をどの人数でどれだけ分けたかに注目したのだ。反対側から・・・つまり自分を前から挟むグループは比較的後ろから追いかけるのよりも先が読めている分目標地点まで早く到達できる。だが後続集団が来るまで自分をその場にとどめておかなければならない分?人数は多めに割いてくるはずだ?と読んだのだ。
そして、その読みは的中する。思った通りラウラ側の人数は本当に少なかった。
「ごめんね、抜けさせてもらうよ!」
「あ、待て!」
「待てと言われて待つ人は居な・・・・・ッ!?」
シャルロットはラウラをかわしたところで、ラウラのグループがスッと距離を取った事に気がつく。
更には一瞬見えたラウラの顔は――――――――――――――――。

――――――――笑っていた。

そして、急に何もないはずなのに身体の身動きが取れなくなる。
――――――――これは!
「・・・・全く、てこずらせてくれる」

「っく、ＡＩＣ！？」
身動きの取れない僕を余裕の笑みで見やるラウラ。
「この程度の事、私が予測していないとでも思ったか」
「うぅッ・・・」
いや、シャルロットは常に最悪時の状況を予測していた。
だがこれは予想の斜め上を行きすぎた。
まさかＩＳまで展開してくるとは・・・。
展開とは言っても腕の一部装甲のみだが、対生身を予想していたシャルロットに対しては充分すぎる。
「さて、シャルロット・・・お前には言わねばならない事があるな・・・」
「・・・」
しかし、ラウラがここまで怒っていたとは思わなかったなぁ。
実質ラウラには鈴や箒のように、いわゆる一夏をダシに使うような引っかけをしたわけでは無い。
だがまぁ彼女も一夏を嫁とまで言って唇まで誰よりも先に奪ってしまったほどの人物だ。
怒るのもよくよく考えてみれば自然なことか・・。
シャルロットは、一つ息を吐くとラウラの？言いたい事？に耳を傾ける。
さてさて・・・何を言われるのかな。
「・・・シャルロット・・・・」
「うん・・・」
さっきまでと違う静かな口調に、周囲にも緊張が走る。
シャルロットの頬にも嫌な汗が一筋流れていた。
そして、ラウラはシャルロットをビシッと指さし大きく声を張り上げた。

「水行とは噴水ではなく滝で行う物ではないかッ！！！！！！！！！」

「・・・・・・・・はい？」

「全くよくも騙してくれたな！！　聡也に言われて気がついたからよかった物を・・・あのままでは私はいい笑い物ではないかッ！！」

・・・・・・あ、あ・・あぁ。

なるほど・・・そ、そっちで怒っていたんだね・・・。

ラウラの発言にグループの女子達も目が点になっている。

そんな中、なんとか我に返った女子の一人がラウラに尋ねた。

「あの・・・私達一夏君の・・・」
「む？　一夏がどうかしたのか？」
「え、いや、だから・・・その・・・・？」
「・・・・・・む？」
ラウラが首をかしげた時、一瞬気が抜けたのかＡＩＣが解け身体に自由が戻る。
「あ・・」
それは誰の声か。
ラウラのトンチンカンさに助けられたとはいえどの道、捕まってもいい事なんて無い！
「それじゃ！」
再び駆けだすシャルロット。しかし、あまりのラウラのズレッぷりに戦意喪失なのか誰も反応しない。
それでもラウラだけは、素早く思考を切り替えてシャルロットに迫って――――――――――――。
「おい・・・」
腕を掴まれた。
ラウラは振り返って誰が自分の腕を取ったのかを見やる。
そして次には、青ざめた。
「・・・学園内での無許可のＩＳ展開は校則違反だ・・・分かってんだよな？」
「・・・鳥越・・・先輩・・・」
どうやらラウラも面識はなくともその人物や人となりはなんとなく知っていたらしい。
にしても、恐るべきだと思う。あのラウラが青ざめるなんて・・・。
「・・・・なぁ？」
「あ、いやこれには、色々と理由があって・・・」
「・・・その話はこれからたっぷりと、委員会室で聞いてやる」
「・・・・・・・はい・・」

シャルロット・ディノアＶＳラウラ・ボーデヴィッヒ
結果：ラウラの反則負け（校則破り）

ふぅ・・・こうタイミングよくと言うか何と言うか・・・。
織斑先生も鳥越先輩もいいところで出てきてくれて助かった。
でも・・・もうそれは期待できない。
今頃鈴にしてもラウラにしてもこってり絞られているだろう。
つまり、最後の強敵・・・箒はガチンコ勝負で勝つしかない。
シャルロットは周囲を見渡す。
入口に見える三のディスプレイに、上空には不可視のシールドバリア。
・・・第三アリーナか。
確かにそこは誰が見ても第三アリーナだったが、明らかにおかしい。
・・・誰もいないね・・。
そう、誰もいない。
子に時間、放課後だというのに、自主練しているグループが一つもいないと言うのはおかしい。
・・・いや・・・・ううん・・・・おかしくない。
おかしくないね。
シャルロットにはもうここへ誘い込んだ相手なんて想像がついている。
ガシャン・・・
誰もいないアリーナに響く金属音。
誰かなんて言わなくても。、見なくても分かる。
恐らくこの人物が、この時間のアリーナを抑えたんだろう。
「・・・・待っていたぞ・・・」
その声にシャルロットはゆっくりと振り向いた。
そこには、黒き鎧をまとった剣士がいた。

凛とした空気をまとい、しゃんと立つその姿はまさに剣の巫女にふさわしい。
・・・だが・・・一つ。
その雰囲気をぶち壊す物があった。
えぇと、血管がひぃふうみぃ・・・あ、一夏がよく僕たちの顔見て何かを指さしてたのって血管を数えていたんだね。一つ賢くなったよ。
にしても・・・・よくもまぁここまで怒りが持続するものだとシャルロットは思う。
・・・・まぁ・・・それは鈴やラウラにも言える事だけど。
「箒・・・勝手にＩＳ持ち出しちゃだめでしょ？」
「・・・安心しろ・・・今日使う許可は取っている・・・」
ユラリと？打鉄？のブレードを構える箒・・・。
そして神速の踏みこみでそれを一気に振り下ろした。
「っとと！　危ないなぁ！！」
シャルロットはブレードを、自らも？ラファール・リヴァイブ・カスタム？？を起動してシールドで受け止める。
それを弾くとシャルロットは？レインオブサタディ？で箒を牽制して距離を置く。
「もう、あんまり無茶しない・・・・で・・・・よ・・・ね？」
「ふーッふーッ！！」
「い、怒りで我を忘れるって言うのは・・・本当にあるみたいだね・・・」
「・・・死ねぇ！」
「うわわわぁ！！」
目元が怖くて直視できない。
更に付け加えるなら、今の箒の機動は？打鉄？のそれを大きく上回っている。
日本のＩＳは感情によって性能が上下するシステムでも発明したのだろうか。

だとすれば、今の箒の？打鉄？にはそれが搭載されているってことになるだろうね・・・ッて！！

「ちょ、ちょっと！　箒本当に危ない！　僕死んじゃう！！」

「えぇい、良いぞ良いぞ！！　殺してやるぅ～！！」

「駄目だ、本当に我を忘れてるッ！！」

ラスボスが本当にいろんな意味でラスボスになっちゃったよ！

って言うかさっきまでの、これから最終決戦・・みたいな空気どこ行ったの！？

ねぇ！！

ラファールだから風に乗ってどっかいっちゃった！？

そんな冗談は全然笑えない。

あぁ～もう、どうしようこのままじゃ本当に僕、殺される！！

「箒、とりあえず落ち着いて！！」

「うるさい！　落ち着いていられるか！！！」

「怒りにまかせた剣じゃ正しいものは切れないよ！」

「今さらありふれたセリフなど無意味だっ！」

駄目だ、何言っても通じない・・・。

この状況、どうにかするにはもう箒を正面から倒す以外道はないようだ。

シャルロットは、気持ちを入れ替える。

正直に言うが、今の状態の箒はかなり強い。

それは、汎用機である？打鉄？で？ラファール・リヴァイヴ・カスタム？？と保々互角にやりあっていることからも分かる。

いくらシャルロットのラファールがカスタムされた物とはいえ専用機は専用機。

普通ならば、専用機が汎用機に負けることなどあってはならない。

専用機とは国家の未来を担う者が国から託される誇り高きものだ。

それが、ＩＳとはいえ量産された言ってみれば？工業製品？に負けたとあれば地に落ちるのは自分の名前だけでは無い。

・・・それに・・よくよく考えてみると確かに怒りもあるけど・・。

箒自体も以前に比べればかなり成長している。
あの時・・・そう、自分が転校直後にあった学年別トーナメントの時。
あの時の箒に比べれ場まるで別人の動きだ。
箒もかなり努力したんだろう。
だが、それでも負けられない。。
「悪いけれど、この戦いは僕も負けられないよ・・。一夏の事もあるけど・・・僕一個人としてもね！」
いくら頭に血が昇っていようとも、空気の変わったシャルロットの言葉を聞き流すほど箒も馬鹿では無い。シャルロットの真剣な声に、箒の表情も強張っている。
「・・・・それはつまり本気を出すと言う事でいいのか？」
「・・・出さなくても勝てるよ」
「っ！！」
シャルロットは冷めた口調で言い放つ。それは別に箒を見下しているわけではない。
それが真実だからだ。
箒にもそれは分かっている。
だからこそ、言い返せず顔をゆがめただけだったのだろう。
「行くよ？」
「っく！」
シャルロットは？ラピッド・スイッチ？でショットガンからサブマシンガンを呼びだし片手の？ブレッドスライサー？を展開し中近距離を上手く使いながら箒を翻弄してゆく。
しかし箒も箒で、上手くサブマシンガンの銃撃をブレードで弾きながらシャルロットの攻撃に対応する。
そして、一瞬の隙をついて反撃に出るなど善戦を見せている。
「ハァッ！！」
「ッ、中々やるね！　じゃぁこれならどう？」
シャルロットは、小刻みに武装を変えながら変則的な射撃スタイル

にシフトし距離を完全に取り始める。
射撃武器のない？打鉄？にはこの戦法は有効だ。
しかし、箒はその戦法を驚くべき方法で対処する。
「甘い！！」
「なッ！」
箒は、？打鉄？のブレードをシャルロットに向かって投擲してきたのだ。
だがそれをまともに食らってやるほどシャルロットは甘くないし下手でもない。
シャルロットはブレードをヒョイッと最小限の動きで避ける。
だが・・・。
「えッ！？　箒が居ない！？」
「ここだ！！」
「えッ！？」
シャルロットが振り向くと、そこには箒が？さっき投げたブレードを自分で受け取って今まさにふり下ろさんとしていた？。
これは箒自身が考えた対中遠距離戦での不意打ちの手段で？陽炎？と言う。
別にシャルロット用に用意していた物ではなく、鈴と？打鉄？で戦った時に感じた射撃武器を持つ相手といかにして戦うかと言う問いに対する箒の一つの答えである。
もちろん速度の速い機体・・・？紫燕？などなら難なく出来るし速度をコントロールする事で攻撃に幅を持たせる事が出来るが？打鉄？の速度は遅くはないがそれなりしかない。
だから箒はブレードを投げる速度や敵からの距離、機体を操るルートそして？打鉄？の速さなどを何度も何度も確認してギリギリのタイミングを導きだしたのだ。
「どこにそんな速さがッ」
「ふん、努力のたまものだ！」
箒はブレードを振り下ろす。

とっさにシャルロットがシールドで防ぐが体勢が不十分で上手く弾ききれず逆に自分の体勢を更に崩す結果になってしまう。
「そこだ！」
鋭い突きが、？リヴァイヴ？の左側のスカート部を貫く。
ウェポンラックになっているそこには、各種武装のマガジンが収められている。
そのマガジンにブレードが装甲を切り裂いた際に火花が飛び、左側のスカートが完全に吹き飛んでしまった。
「うぅッ！」
「どうした、本気を出さなくても勝てるのでないのか！！」
「そのつもりだったんだけどね！！」
「言い訳とは見苦しいぞ！」
更に追撃で四枚のマルチ・スラスターの内の一つを失ってしまう。
だが逆に組みついての攻撃は箒自身もそれなりの代償を払っていた。
一旦両者は離れて、自分の機体をチェックする。
「・・・マルチ・スラスターは・・壊れてないけど巧く使えるのは片側の二つだけ・・ラピッドスイッチで呼び出せてもマガジンがない・・・か。幸い？ブレッド・スライサー？は大丈夫みたいだね・・シールドエネルギーも予想以上に減ったけどそれでもまだ心配するレベルじゃない・・・・けど・・・僕もこれ以上長引かせたくないから・・・」
「・・・くぅ・・・やはり代表候補生だな・・。？陽炎？で削れたとはいえ確実にこちらに要所要所で当ててくる・・・。シールドエネルギーも効率的に削られたか・・・・・これ以上長引かせるのはどの道不利だな」
互いにチェックし終わり、相手を見据える。
そして偶然にも声が重なった。
「「これで決める！」」
箒はブレードを、下段で構えグッと体勢を低くする。
対するシャルロットも射撃武器をしまい、？ブレッド・スライサー

?を展開した。
静寂のアリーナ。
ピンっと張りつめる空気。
お互いに構えたまま一向に動かない。
何かのきっかけで切れてしまいそうなほど脆い。しかしそれゆえに
誰もそれを切る事が出来なかった。
そう、お互いに・・・。

だが、人の預かり知らぬ領域。
つまり自然はそんなものには縛られない。
そしてその瞬間は突然訪れた。

両者の間を・・・・

一陣の風が吹き抜けた。

キンッ!!

アリーナに走る一閃。

直後、折れる?ブレッド・スライサー?と完全にブレードが砕け片膝を付く?打鉄?・・・。

その瞬間決着はついた――――――。

シャルロットｖｓ篠ノ之　箒
結果：今回の中で一番まともな勝利

「・・・・シャルロット・・」
箒は戦闘が終わり、アリーナを出て行こうとするシャルロットを呼びとめた。
シャルロットはそれに振り返る。
「・・・なぁに、箒。まだ何か？」
「いや・・・その事は・・もういい・・私の負けだからな・・」
「じゃあ、どうしたの？」
「・・・なぁシャルロット・・・私は・・・いや・・・私にも専用機があればお前に勝てたんだろうか？」
「・・・え？」
シャルロットは思わず声を漏らした。
理由は言わずもがな、全く予想していなかった発言が飛び出したからだ。
専用機があれば・・・か。
箒・・・・君は・・・・。
シャルロットはさっきの戦闘を思い出す。
専用機があれば勝てると言うのは確かに甘い考えではあるが、？打鉄？のポテンシャルで？ラファール・リヴァイヴ・カスタム？？と互角にやり合った箒の実力は確かに高い。
これに専用機が加われば確かにシャルロットでも危なかっただろう。
だが逆に考えてみればシャルロットはダメージレベルＢ・・つまり小破と中破の間ぐらいのダメージを受けている。？打鉄？相手にで

ある。
「あ・・いや・・いい。変な事を聞いてしまったな・・」
無言で考えるシャルロットの態度を困惑と受け取った箒が苦笑いで話題を切り上げようとする。
だがシャルロットがそれに待ったをかけた。
「ねぇ、箒は・・・その・・専用機が欲しいの？」
その問いに箒が一拍置いて静かに話し始める。
「・・・私は・・いつも蚊帳の外だった・・。あの時・・・クラス代表戦の時の襲撃の時もアルディは飛び出して言ったのに自分は指をくわえているしかなった・・。一夏が危険に晒されていたと言うに・・」
「・・・・ねぇ、箒。僕思うんだけど一夏を助けるのって一緒に一夏と戦うことなのかな・・？」
「え？」
「僕は、そりゃ専用機があるから戦っているけど・・・。僕が箒の立場だったら・・・僕は信じて待ってると思うな・・。まぁ箒がどうかは分からないけどさ」
「・・・・・」
シャルロットは箒にきびすを返すと、独り言のように言った。
「まぁ、何にしても・・・今日の箒は強かったよ、？打鉄？でもね」
それだけを言い残してシャルロットは歩き出した。
箒が何について悩んでどう考えるのかはシャルロットには分からなかったが、だがこればかりはどうしようもない。
箒の問題なのだ。まぁでも箒なら大丈夫だろう。
シャルロットはフフッと笑うとアリーナを出て廊下の角を曲が・・・・・・。

「らないッ！！！」
「「逃がすか！！！」」

「なんでここに鈴とラウラがいるの！！」
「あんたよくも逃げたわね！！　っていうか綺麗に終わらそうとしたでしょ今！！」
「友を見捨てるとは、どういうつもりだ！！」
「あ～～～もう、いい加減許してよ～～～～～～～～！！！！！！」

シャルロットの悲鳴にも近い声がＩＳ学園にこだまする。
もう少し、シャルロットの逃走劇は続きそうだった。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ～シャルロットｖｓ日独中三国同盟～（後書き）

ショートストーリーとはいえＩＳのアルディ女の子とは違う本編の要はフラグ回収用見たいなお話に・・・。

次回はまた少しオリジナルな展開ですがよろしくお願いします。

それでは
さよならッ！

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ～よみがえれ紫燕　前編～（前書き）

紫香楽聡華が実家へ帰るサイドストーリー。

完全オリジナルですので、その点はご了承くださいね。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?～よみがえれ紫燕　前編～

・・・あちぃ・・。

紫香楽聡華。紫香楽家の養女で紫香楽製のＩＳ?紫燕?の操縦者。

その聡華は、猛暑日となった今日ているつける夏の太陽に身体を焼かれながら郊外の小さな駅前で汗だくになりながらとある人物を待っていた。

服装は白のインナーに半袖の上着を羽織り下はほんの少し大きめのダメージジーンズそして市街地戦の時かぶっていたキャップを今回も目深にかぶっている。

そして足元には、グレーのボストンバッグが置いてあった。

あの野郎・・・。あたしは昼過ぎには着くって言ったよな・・・。

なんでいねぇんだよ!

知らない人が聞いたらなんて抽象的なと思うだろう。

だが聡華はそんな細かいことなど気にしない。

そう夏にとって昼過ぎとは昼過ぎなのだ。

おまけにこの駅舎本当に小さくて、待合室はあるがエアコンも扇風機も無い。

中にいようがいまいが体感温度は変わらないのだ。

すると、そこへこの場には似合わない黒塗りの高級セダンがやってくる。

フロントマスクにはＬのアルファベットをデザインしたエンブレムが誇らしげにグリルに埋め込まれている。

聡華は荷物を片手にその車の方へ歩み出す。

・・・ッたく、ようやく来やがった・・。

聡華はその高級車を・・・・・・?通り越して?その高級車の陰に隠れてしまっていたシルバーの三枚ドアのコンパクトカーの前で立ち止まった。

そのシルバーのコンパクトカーはボンネットにＶをデザインしたエ

ンブレムをつけ全体的に丸みを帯びたフォルムを持っていた。その中からその車に似つかわしくない綺麗なブロンドのショートヘアーに黒のスーツを来た男性が降りてくる。
「・・・・おせぇ」
「いや、だってお嬢様昼過ぎだって言うもんだから・・」
「昼過ぎだろ！　あとお嬢様やめろ！」
「・・・まぁいいや、お嬢様。ささ、乗って乗って」
コンパクトカーのドアを開けて少女とはいえ女性をエスコートする男性も中々はた目滑稽ではある。
だが仕方が無い。彼の名は？渥美（あつみ）・フォン・フェッセン？。フランスと日本人のハーフの彼は紫香楽家で聡華の身の回りの世話をしているいわゆる執事なのだから。
しかし、聡華をお嬢様と呼んではいるが渥美（あつみ）にとって聡華は可愛い妹の様な感じらしい。
「にしてもお前、いつものはどうした・・？」
「いつもの・・・あぁ、クライスラー３００？・・・・車検中・・」
「だからってこれしかなかったのか？」
「文句言わない、言わない」
いや・・つってもよぉ。
聡華は、渥美の運転する車の内装をぐるっと見渡す。
当然シートは革張りではなく普通のファブリックにインパネも木目やメッキなどではなく第アルが横に三つ並んだ樹脂、メーターもスピード表示しかない。
別に車にそこまで、コダワリはないが運転してるのがスーツ着てる渥美・・・かなり違和感がある。
「・・・・ってかよ、お前暑くねぇの？」
「・・・・暑いさ・・クーラーかけててもね」
まぁ当然かと聡華は思い。シートをガダンっと倒す。
そしてシートに身を預けながらここに着た経緯を思い出していた。
アレは、そう・・・市街地戦が終わって帰還した翌日半壊した？紫

燕？を叶（あの女）に見せた時だ。

「ふむ・・・思っていた以上に損傷が酷いね・・」

「まぁ、至近距離でライフルぶっ放されたからな・・そりゃそうなるわ・・」

「・・・それで、姉さんのＩＳは直るんですか？」

「直るか直らないかと聞かれれば難しいところだね・・・ただどの道今は直らない・・・と言った所かな」

「どういう意味だそりゃ・・・？」

聡華は苛立ちを含んだ声で言う。

だが叶はそんな事気にする様子もなく、いつも通りの語りかけるような口調で言葉をつづけた。

「そのままの意味なのだが・・・。まぁ、説明するとだね我々はしばらく補給を行っていないだろう？

するとだね、元々ＩＳ－Ｎの運用を目的とした艦だからブラックアウルのスペアパーツを流用できるホワイトアウルは整備できるんだが、専用品の塊の聡華・・君のは残念ながらスペアパーツが切れてしまってね・・それに仮にスペアパーツがあったとしても損傷が酷過ぎてね・・」

「・・・要するに、部品が足らねぇって事でいいのか？」

「まぁ、最も簡潔に述べるならそうなるかな」

冷静に返したが冗談じゃない。

確かにぶっ壊したのは自分だからあまり強くは言えないにしても直せない事態になるなど予想もしていなかった。

「そうなってくるとつらいですね・・・。向こうにはナイトシュライクもありますし・・」

それは聡也も同じく、呟くように言うとうーんと唸った。

しかしここでも慌てもしなければ、焦りもしないのがこの五条　叶という人物で彼女はこの状況でも考え込むことなく、柔和な表情を崩さない。
聡華にとって叶の、この態度こそ信用しきれない大きな要因である。表情からほとんど何も読みとれないために相手が次に何を言うのかを予測できないのが気持ち悪い。
大抵そう言う場合はとんでもない事をサラッと言ってのけたりするのだ。
そしてそれは今回も例外では無かった。
「そうだね・・・ふむ、聡華・・・一度実家に行ってきなさい」
「はぁッ!?」
「仕方がないだろう・・・?紫燕?は紫香楽製のＩＳなのだからね」
「・・・い、いや・・・それは・・そうなんだけどよ・・」
あまりあの家には、良い思い出が無い。
だが決断を渋る聡華を聡也が押す。
「ですけど、このままだと?紫燕?は使えませんよ」
「そりゃ・・困るのは困るんだが・・・」
「だったら、仕方ないじゃないですか・・」
「いや・・その・・・だから・・あぁあ!そうだそう!　あたしは別に行きたくねぇってわけじゃないんだけどさ、その、アレだ実家のあのジジィがなんて言うか・・!!」
「ジジィ・・・あぁ、紫香楽誠一郎（しがらきせいいちろう）さんの事だね・・?」
「そうそう、あのジジィあたしの事嫌ってるし・・」
まぁ自分も大概あのジジィの事は嫌いだが。
「安心したまえ・・既に連絡は入れてあるんだよ。向こうも君が実家に帰る事を了承しいてくれている」
それを聞いて聡華はようやく気がついた。
これは初めからそのつもりだったんだなと・・。
つまり自分のＩＳが壊れていようがいまいがこの女は一度自分を実家に帰らせるつもりだったのだ。

そうとなれば、恐らく聡華がこれ以上何を言っても無駄だろう。
聡華にだって、この二人に口で勝てるとは思っていないし、ましてやもうすでに実家にまで連絡が入れられているとなればなおさらである。
と、まぁこんな感じで聡華は実家に戻ることとなったのだ。

「・・・嬢・・ま・・お嬢・・・」
「ん、んん・・・んあ？」
誰かが自分の身体を揺する。
「お嬢様！　到着したよ・・ほら起きてって・・」
次は揺すりながら頬を数回軽く叩かれた。
「んんんぅ・・・」
「・・・仕方が無いなぁ・・・」
っていうか・・なんだ・・なんで揺さぶられてんだ・・。
聡華はようやくゆっくりと目を開ける。
そして開眼一番目に飛び込んできたのは・・・
「タライッ！！」
「おっと！！」
聡華は金ダライを左腕で受け止める。
そして右手でその金ダライを奪い取った。
「てめぇ、殺す気か！！」
「へぇ・・お嬢様は金タライで死ぬのか・・」
「死なねぇよ・・いやそうじゃなくて、なんでお前にこんなもんで叩かれなきゃいけねぇんだッ」
「いや、だってお嬢様寝てたから・・」
「・・まぁ・・寝てたけどもな・・」
ほんと、どうしてあたしに周りは・・・。

・・・とそこまで考えて聡華は考えるのをやめた。これ以上考えていると頭が痛くなってきそうだったからだ。
とりあえず聡華は金ダライを後部座席に放り投げるとボストンバックをかついで車から降りる。
聡華は降り際に渥美に尋ねた。
「ジジィはどこにいるんだ？」
「御当主なら、多分一番奥の部屋に居られると思うよ。なんでだい？」
「ふん、どうせ後々呼びだされるぐらいなら、自分からまっ先に言ってやろうと思ってな」
聡華は言うと振り返る。
・・・紫香楽家・・か。
聡華が車を降りると目の前には立派な御屋敷があった。
日本の城を囲うような立派な白塗りの塀が屋敷全体を覆い彫刻の施された木造の堂々たる門構え。
一目でそれと分かる名家中の名家。
その門を聡華は何のためらいなく潜ると塀で隠されていた屋敷がその姿を晒す。
二階建てで、その敷地はかなり広く玄関へ続く道には白い綺麗な砂利に大理石が等間隔で並べられており両側には綺麗に造られた日本庭園も見える。
「・・・・ふん・・」
聡華は鼻を鳴らすと、乱暴な足取りで両側の美しい風景など目もくれず玄関の扉に手をかけて、この広い屋敷全体に聞こえるぐらい乱暴に開いた。
「・・・・帰ったぜ・・」
扉の音に掛けされ聡華のボソッと言ったその声をしっかり聞いた人間は誰もいなかった。

◇◆◇◆◇◆

この家に貰われた聡華にとっては父に当たる人物だ。
誠一郎はモニタールームの一つに目を凝らすとボソッとつぶやいた。
「・・・騒がしいのが帰ってきおったわい・・」
誠一郎は立ち上がると、モニター越しに聡華を一瞥して薄暗い廊下へと消えて行った。

◇◆◇◆◇◆

聡華・・お前に礼儀礼節を教えては居ないようだな・・」
「・・・うるせぇ・・顔見せに来てやっただけでも立派な礼儀ってやつだろ?」
「ふん・・・もういいわい。程度の違う人間と同士が話をしても何も前に進まんと言うのは政界の小僧どもを見ていれば嫌というほど理解できるが・・・まさかそんな人間が紫香楽家に居たとはな・・」
「んだと・・・ジジィ・・・」
「だから、もういいと言っておるだろう・・とっととふすまを閉めてこっちへ来い・・」
誠一郎は聡華を一睨みすると聡華もそれに渋々従う。
口では乱暴に言えても、誠一郎と聡華では生きてきた時間も経験も何もかもが違う。
一睨みされれば、あの聡華でさえ口応えが出来ない。それほどの雰囲気を持っているのだ。
聡華は誠一郎の近くまで歩み寄ると、ゆっくりと横のふすまが開き使用人の女性が座布団を持ってやってくる。
聡華は使用人から座布団をふんだくるとそれをバンッと畳にたたきつけてその上に胡坐をかいて座った。
その使用人もまた聡華とは目を合わせようとはしない。
聡華は足早に部屋を後にした使用人を見て今日何度目かわからない舌打ちをした。
「胸くそ悪ぃ・・」
「わしはお前のその態度が胸くそ悪いわい・・」
「あぁ!?」
聡華は喰いかかるが、あの睨みを利かせた目で見られては黙り込むしかない。
誠一郎は話題を変えるぞと言わんばかりに咳払いをすると、座敷机に置いてあった緑茶をすする。
そしてしばしの沈黙の後ため息と同時に話し始めた。
「・・・今日なぜ帰って来たのかは・・お前自身が一番よく知って

いるだろうな？」
「・・・・まぁな・・」
「やれやれ・・悪びれる様子も無しとは・・・人間的に感情まで欠落しておったとは・・」
「てめぇ・・・」
いちいち神経を逆なでしやがる！
このジジィまさかあたしが実家に戻る事を了承したのも嫌味言いたかったからだけじゃねぇだろうな？
睨む聡華を尻目に誠一郎は、懐から情報端末を取りだす。空中投影タイプの最新型の端末だ。
そしてそこに表示されていたのは現在の？紫燕？のパラメーターだった。
「くそッ」
聡華はばつの悪い顔でうつむくと声を漏らした。
だが聡華に構わず誠一郎は続ける。
「全く・・よくもまぁ、ここまで壊してくれるものだ。ＩＳは優秀だと言うのに乗り手がやはりゴミだな・・」
「・・・・・・」
「聡華・・紫燕を出せ」
聡華は求められた通り紫色の球体型のキーホルダーを誠一郎に差し出した。
誠一郎はそれをまじまじと見やると懐にしまう。
そして冷たく言い放った。
「ふむ・・・また用事があれば呼ぶとしよう・・」
誠一郎はそれを残して部屋を去る。
その背中を見て聡華はまた舌打ちをするのだった。

紫香楽家には当然だが聡華の部屋がある。

養女として迎えられたその日に与えられた部屋だ。
だから聡華は誰に案内されるでもなく玄関に置いたボストンバッグを取り階段を上がる。
階段を上がって短い廊下を一番奥に行った所にある扉が聡華の部屋だ。
・・・何年ぶりだっけな。
聡華にとってこの家は確かにあまり良い思い出は無いがこの部屋はこの部屋だけは唯一聡華が一人になれる場所だった。
そこには、うっとおしく視線をそらす使用人共も、ＩＳの研究者共もあの胸くそ悪いジジィもいない。
だから聡華にとってこの部屋だけは、嫌いになれなかった。
・・・不思議なもんだよな。嫌いな場所の一角は好きな場所だなんてよ・・。
聡華は自分のそんな気持ちを自分で少し笑いながら扉を開いた。
「やぁ、お嬢様。お帰り」
バタン。
聡華は扉を閉めた。
そして自分の目を数回こすってもう一度扉をあける。
「あれ、どうしたのかな？　お嬢さ・・ばッ！！」
「なんでてめぇがあたしより先に部屋に入ってんだよ！！」
「だからってボストンバックの一撃は不味い！　僕が死んでもいのかい？」
「むしろ今からぶっ殺してやる！！」
聡華は、渥美を追い部屋に入ると正確なバストンバッグの一撃を腹に叩きこむ。
「うごッ！？」
「よっしゃ、とどめだ！！」
「そ、聡華！　マウントポジションは駄目だって！！」
「うるせぇ、大体お前にゃ執事としての自覚が足らねぇんだよッ」
「ぎゃーーーーーッ！！」

言うまでも無い事だがこの叫び声に誠一郎はまた大きなため息をついていた。

「はぁ、はぁ・・」
「ぜぇ・・ぜぇ・・」
互いに肩で息をする。聡華の服装は乱れ上着は脱げインナーはずれて片方の肩が露出していて、渥美の方もビシッと着こなしていたスーツはしわだらけで、綺麗なブロンドの髪の毛もボサボサになっていた。
「なんで、自分の部屋でこんなに・・・はぁッ・・はぁッ・・疲れなきゃいけないんだ・・」
「それは・・・お嬢様が・・・はぁ・・ッはぁ・・暴れるからだと・・」
「な、何だとぉ～・・・って駄目だ・・限界ッ」
「僕もだよ・・」
互いに部屋に大の字になって床に転がった。
二人とも前方向に大の字であおむけになったので必然的に顔が自分の真横にくる形だ。
そこでふと聡華は思い出した。
「・・・よくアレだな・・・昔こんなことしてたな・・」
「あぁ、そう言えばそうだね・・。養女としてこの家に来た初日から僕が付き添っていたけど初めは物静かで可憐な少女だったのに・・・今じゃ・・・」
「・・悪かったな・・」
「いや良いんだよ、別にそれが悪いっていうわけじゃないしね」
・・・そうだったなぁ。こいつだけは違ったんだよ。
どいつもこいつも、あたしと目も合わせようとしねぇのにこいつだけはな。
渥美と聡華の関係は聡華がこの家に養女として来たその初日からの

仲でかなり長い。
まだまだ自分が今よりもっとガキの頃にこの家に来てただその時はまだ自分で言うのも何だがどこにでもいる普通の少女だったんだよな。口調だってこんなに荒っぽくなくて。
まぁそんな頃の自分から見ても、この渥美はなんてナヨナヨした野郎なんだって思った。
だけど渥美は、誰よりも自分に向き合ってくれた。
徐々に性格が荒っぽくなっていって前以上に自分を避ける人間が多くなっても同じレベルで話をしてくれたしそれが今の自分なんだと受け入れてくれた。
多分・・・渥美がいなけりゃあたしはこの家なんてすぐにでも飛び出してただろうなぁ・・。
その点には本当に感謝している。
だが、何より嬉しかったのは・・・。
「それと、お前さっきあたしの事名前で呼んだろ?」
「・・そうだったっけ?」
「あぁ呼んだね」
「全然気がつかなかったなぁ。で、癇に障ったんならだったら謝るけど?」
「いや・・・・良いさ!」
コイツの呼ぶあたしの名前はあのクソジジィが呼ぶ時のあんな胸くそ悪ぃ感情なんて無い。ただ純粋に自分を呼ぶ声だ。紫香楽聡華を何のしがらみも思惑も無く呼んでくれる人物。
だからこそ自分はこの渥美という男に心を許せるし自分のすべてをぶつけていける。
聡華はハハッと声を出して笑う。
死ぬほど嫌だった帰省だが、こいつがいればなんとかなりそうだ。
二人は互いに心を許せる人物同士の顔を見ながらしばらく笑顔で笑いあっていた。

◇◆◇◆◇◆

など誠一郎には造作もない事だ。
そしてその確かな目が、しっかりと?傷?の付いた意味を一つ一つを見抜いていく。
下手に攻撃を受ければ余計な場所にまで傷がつく。
だが逆に、いかに相手の攻撃が良かろうとも、それを旨くさばけば傷は付かない。
そして傷がついていないと言う事は聡華が旨く攻撃をさばけていると言うこの上ない証拠だった。
・・・まぁ、ちょっとはマシな操縦者には成長しておるようだわい・・。
誠一郎は、心の中でつぶやくとプラントを出て自分の書斎へ向かう。
書斎の椅子に腰かけると誠一郎は大きくため息をついてゆっくりと瞳を閉じた。
その脳裏にはついさっき目の当たりにしたいまだ傷の癒えぬ紫色の翼の、痛々しい姿が浮かぶ。
・・・何としても・・復活させねばならん・・・。
ここで・・・こんなところで折れて良い翼では無いのだ。
誠一郎は再びゆっくりと目を開けると、鋭い眼光で何もない宙を睨んでいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ~・・・にしてもやる事がねぇなぁ・・」
「そう言えばお嬢様は向こうではどんな生活を?」
渥美が興味しんしんと言った風に聞いてくる。
・・・向こうねぇ・・。
向こうとは当然潜水艦?守?の艦内での暮らしの事だ。
聡華は、ん~~っと少し考えてから指を折って数える様に言う。
「そうだなぁ・・・寝て、出撃して・・戻ってきてまたゴロゴロし

て・・・暇があればジジィんとこ送るレポート書いて・・・寝て・・寝て・・寝て・・・・・」
「・・・・・寝てばかりだな・・」
「仕方ねぇだろ・・潜水艦中なんだから他にやれることもないし・・」
「まぁ・・それはそうだけど・・だからって他に何かやることはないのかい？」
「まぁ・・やる事って言うか・・その・・・考え事みたいな・・」
「何について・・？」
「いや・・うまくは・・言えねぇんだけど・・・」
時々何か引っかかる時があるんだ。
それが気になりだすと、暇なときでも寝れなくなるしレポートも手につかなくなる。
何なのかは分からないのが・・少し気持ち悪いけどな。
「ふぅん・・・お嬢様にも悩み事があるのか・・」
「てめぇ、遠まわしに能天気って馬鹿にしてねぇか？」
「やだなぁ、お嬢様・・いうときはストレートに言いま・・・ずッ！！」
渥美が気付いた時には、顔面にボストンバックがめり込んでいた。

「ところで、あーだこーだやってるうちにもうすぐ夕飯の時間だけど・・」
「あれ、もうそんな時間かぁ・・・どうすっかなぁ」
「あぁ・・既にここで食べるって選択肢はないんだね・・」
「当たりめぇだろ・・」
誰が好きこのんでこんな胸くそ悪い家で飯なんざ食わねぇといけねぇんだ・・・考えただけで虫唾が走る。
とはいえ、聡華も子供の頃はずっとこの家に縛られていたためこの周辺の地理はそれほど詳しいわけでは無かった。

「にしても・・う～ん・・・お前なんかこの近くでいい所知らねぇのか？」
いきなり渥美に話題を振る聡華だったが渥美はそれを予測していたようで言葉に詰まることなく饒舌にその問いに答える。それはまさに阿吽の呼吸とも呼べるほど自然で違和感が無い。
互いがどんな反応をするのかがこの二人には分かるのだ。だから聡華はいきなり渥美に話題を振ったし渥美もその振りに難なく答える事が出来る。
「そうだね・・好みが変わってないのなら最近いい中華のお店を見つけたよ」
「マジか！　最近艦内食堂の冷凍食品ばっかでさぁ、まともな食事食ってねぇんだよ！」
そうこうやって、自分の期待通りの答えを返してくれる。
だから信頼できるし、心も許せる。
「じゃぁ、そこでいい？」
「あぁ、行こうぜ！」
「じゃあ、門の前で待っててね、車を回してくるから」
「・・・また、あのボロかよ・・」
「あるだけましでしょ！」
聡華は、まぁな、と笑うと渥美の背中を見送る。
そして少し遅れて階段を下りると、渥美を見ていたのだろうか誠一郎がそこにいた。
自然と二人の視線が合う。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
互いに睨みあって、無言のまま背を向ける。

互いの背中に思惑を背負って――――――。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?~よみがえれ紫燕　前編~（後書き）

Ｓｉｄｅｓｔｏｒｙとか言いながら前編とか笑えない。

でもお付き合いくださいｍ（ぇ

それではまた。

さよならッｗ

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?～よみがえれ紫燕　中編～（前書き）

紫香楽聡華の中編。

実はこの物語意外なところへ繋がっていくかも??

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?～よみがえれ紫燕　中編～

聡華が紫香楽の家に帰ってきて四日が過ぎたある日。
聡華は家を出て渥美と一緒に周辺を散策していた。
理由は、あまりにも自分が紫香楽家の周辺地理に疎かったから。
初日、渥美と外食した時自分が住んでいた所なのにここはどこって言うのが余りにも多かった。
挙句は渥美に「・・・・ここ、この街の中心部なんだけどなぁ・・」と呆れられてしまう始末。
流石に渥美に本気で呆れられるのはと聡華のプライドが許さない。
というわけで、渥美に案内される形で聡華は地図片手に場所を風景と照らしあ合わせながら歩いている。
「・・・・・・とこんなところかな」
「・・・やべぇ・・家から全然離れてないのに全然分かんねぇ・・・」
「まぁ・・・こっちに来てからほとんど家の中で過ごしてたもんねぇ」
「思い出させんな」
聡華は頭を押さえながら言い返す。
ほんと、思い出したくもねぇ・・・。
聡華がこの紫香楽の性を名乗る前は紫香楽の分家である?誉(ほまれ)?という名字だった。
幼いころから非常にＩＳ適正の高かった聡華は早くから紫香楽家に養女として迎えられＩＳの技術や理論を叩きこまれていた。
結果?理論?の方はご覧のあり様だが、技術という面では既にかなりのレベルに達していた。
だがその半面、聡華は多くの時間を外部との接触が無い閉鎖された空間で過ごした。
そのため友人もおらず基本的に他人との人づきあいも苦手。

性格は、誠一郎の方針で厳しくしつけられ過ぎた反動で品行方正・優美・清らかと言った一般的な?名家のお嬢様?というイメージの真逆に育ってしまいそう言う意味ではある意味誠一郎の方針から考えれば人格形成を大きく?失敗した?少女に育ってしまった。

だがまぁ、それについては誠一郎も個性の一部として今は気にしていないにしても、聡華が遊びたい盛りの幼少期に非常に嫌な思いをした事に変わりはなく今でも思い出すと時々本当にヤバイぐらい頭が痛くなったりする事があった。

つまり聡華にとってこの帰省はそれほどに嫌なものであり、今だってこのままあの家には帰りたくないと思っているほどだ。

・・・でもそうはいかねぇよなぁ・・・向こうににゃ?紫燕(ひとじち)?がいるんだから・・・。

「うなだれるのは良いけど・・・道の真ん中はやめようね」

「・・・誰のせいでこんな事になってると思ってんだよ・・・」

聡華は渥美を睨み返すと、ため息を吐きながら姿勢を正してどうにか考えを別方向に持っていこうと地図に視線を落とした。

するとふと、ある場所が目に止まる。

「あん?　・・・このマーク神社だよな?」

「そうだよ、鳥居のマークが神社、卍がお寺だね」

「なことたどうでもいいんだよ。こんなところに神社なんてあったのか・・」

「行ってみるかい?　すぐそこだし」

「・・・あぁ、そうだな」

聡華は渥美の後を追って歩き出した。

別に聡華はこの神社が気になったわけではない。

ただなんとなく、そう言う所が家のすぐ近くにあったのかって言うただそれだけ。

強いて言うなら

・・・歩き疲れたしな・・・。神社だったら木陰の一つや二つある

だろ・・・
というぐらいだった。

「さ、着いたよ。ここがさっきお嬢様が言ってた神社。白鶴神社って言ってね道場も併設されてる結構大きな神社なんだよ」

数十段という長い石段を登りきり、聡華たちは鳥居をくぐる。
するとそこは、今まで聡華達に照りつけていた太陽を立派な木々の葉が遮り、更にそこへ神社という凛とした空気も相まって室内の空調の効いた空間と同じぐらいに涼しく感じられる。
そこに響くのは蝉の声と自分達が砂利の上を歩く音だけ。
ここは、間違いなく聡華のお気に入りスポットになるだろう。
と、そこまで考えて聡華はさっき渥美が言った事を思い出す。
確か・・・
「・・・道場・・・っていったか?」
「うん言ったよ。道場はこの参道をちょっと言ったところだから、行ってみようか?」
よくよく耳を澄ませば、鍛錬を行う子供たちの声が聞こえてくる。

・・・あたしもやらされたなぁ・・・。
聡華はそんな事を思いながら、渥美と共にその声のする方へ足を進めた。

「やってるね」
「・・・あぁ」
聡華達は、換気のために少し開けられた道場の入り口から中の様子をうかがう。

中では数名の袴を来た子供たちが竹刀の薙刀を構えて基本の型を行っていた。

元々聡華が習った槍術は、薙刀術を追うようにして生まれた武術だ。というのも元々槍が主流となったのは室町時代の応仁の乱以降である。このころから戦術が次第に兵士の徒歩による戦、つまり徒戦（かちいくさ）から足軽達が密集して戦闘を行う集団戦闘へとシフトしていった。その際に振りまわして扱う薙刀は隊列を組む戦術には不向きであり、次第に槍に取って変わられたという経緯がある。

だが槍を主流に扱ういわゆる槍術は、薙刀が大正から戦後にかけて女性の武道としての地位を確立したのに対して槍術は明治時代にこの槍術を基礎とした銃剣術を制定されたもののその多くは失伝してしまっており、紫香楽瞬神流槍術（しがらきしゅんじんりゅうそうじゅつ）はそんな中でも失伝せずに槍術を主体に置く数少ない流派である。

「っていうか、あいつがこの道場の師範なのか？　偉く若い・・・っていうか同い年ぐらいじゃねぇの？」

「僕もそこまでは・・・何せここに道場があるのは知ってたけど中をのぞくのは初めてだからね」

聡華は、子供たちの前で手本を見せながら型を行う少女をみる。黒い髪を後ろで縛り凛とした雰囲気を持っているが柔和なやさしそうな眼もと。

・・・どっかで会ったような・・・。

聡華は自分の記憶を探るが、残念ながら該当する人物を探り当てる事は出来なかった。

と、ふとその少女と目があった。

「やべっ！？」

「え？」
聡華はとっさに道場の入り口から顔を話すと距離を取って身体を後ろに反転させる。
・・・ってか何がやばいんだ、あたし。
別にやばい事なんて無い。ただ練習風景を除いていただけだし迷惑はかけていない。
ただどこかで会った事あるかなと考えていたから、とっさにとってしまった行動であった。
ほどなく、道場の中から先ほど目があった少女が顔を出す。

「何か用ですか？」
「あぁ、いや別に僕は・・・」
「僕は・・・なんです？」
「その・・・だから～・・・ねぇ？」

渥美はどう対応していいものか分からずとりあえず苦笑いでその問いに答え聡華へ目で助けを求める。
後ろを向いていたとはいえその視線は聡華にもバッチリと伝わっていた。
聡華は、はぁ～ッとため息をつきながら振り返る。

「いや、別にあたしらは怪しいもんじゃ。ただ道場が近くにあるからってんでちょっと見に来ただけで・・・な？」

これでいいかよと目で渥美に尋ね渥美が小刻みに首を縦に振った。
聡華はそれを見てこれ以上ここにいても変なトラブルに発展するだろうと思い足早に立ち去ろうとする。
しかし・・・。

「あ、待って！」

少女に腕を掴まれた。
「・・・何か？」
「良かったらもっと近くで見ていかない？　私、白鶴　理。師範代役をやってるの」
訂正しよう・・・・・既にもうトラブルに巻き込まれていたようだ。

「・・・・で？」
「お嬢様～、頑張って！」
「さぁ、行きましょう！」
「師範、そんな悪者やっつけちゃえ！」

いつの間にか袴姿に着替えさせられて茫然とする聡華とやる気満々の理、その周りにはやんややんやと理を応援する子供たち。そしてそれを壁に寄りかかって応援する渥美。
「えぇ、任せなさい！　のぞきの犯人は私が懲らしめてあげる！」
「てめぇ、ちょっと待て！　なんであたしが悪者なんだよ！　ってかのぞきじゃねぇし！！」
「だまれー！　犯罪者！」
「そーだそーだ、言い訳なんて見苦しいよ！」
「胸に回す栄養をもっと頭に回せば？」

・・・子供は言う事に容赦がない。
だが聡華とて子供相手に切れるほど
「黙れ、このクソガキ共がッ。あたしはちゃんと頭に栄養は回ってんだよ！！」

馬鹿であった。
その様子をみて理はクスリと笑って得物を構える。
いま二人が手に持っているのは先ほど子供たちが、使っていた竹の薙刀だが長さが長い成人用の物。
そしてその構えを見た瞬間聡華は相手の力量を瞬時に読みとった。
程良く脱力された構えからは一部の隙も見えず、こちらに?わざと?打ちこませるだけの意識化の隙を残す。すべてにおいて無理が無く、むしろしっかりと構えているのに余裕すら感じられる。
・・・こいつ・・・滅茶苦茶なやつだけど・・・・・・できる・・・。
聡華も理の空気に引きずられるように、得物を構えた。

?紫香楽瞬神流槍術?の構えは独特で刃先を下にむけ利き腕では無い方の肘を大きく引いて利き腕はなるだけ柄に沿えるように構える。利き腕は状況に応じて柄をつかんだりもするが基本は沿える程度で上下の高さを合わせるためなどに使う。

足は少しかがめて重心を低くし、いつでも素早い踏み込みができる体勢。
この独特な型からは?紫香楽瞬神流槍術?が?一瞬の踏みこみで神をも貫く一閃をもって穿つ?事、つまり?踏み込みと突き?に重点を置いた槍の基本動作に忠実な流派であることが伺える。
まさに一撃必殺。
それ以外は必要ない流派。それがこの?紫香楽瞬神流?なのである。

「・・・紫香楽流か・・・」
「・・・まぁこの構え見りゃ、武術やってるやつならすぐに分かるわな」

言葉を交わし、訪れる沈黙。

流れる空気にさっきまで騒いでいた子供たちも静まり返り、聞こえてくるのは風が木々を揺らす音だけ。

互いに互いの実力を構えを見ただけで理解しただけにうかつに動けばその時点で負けが確定する。

そしてどこかで風に吹かれて木の葉が一枚――――――――――落ちた――――――。

「はぁっ!!」

「ふっ!!」

先に動いたのは理だった。理は薙刀を一気に振り上げ聡華の刃先を弾き、開いた胴目掛けて一気に薙刀を突きだす。

聡華はそれを鋭いバックステップでかわし構えを整える。

ＩＳの戦闘なら自分からどんどん突っ込んでいく聡華だが?紫香楽瞬神流?の本来の戦い方は?待ち?を必要とする応じ手である。

攻撃こそ最大の防御という言葉があるが、それと同時に攻撃は最大の隙が生まれる瞬間でもあるのだ。

そこをつけるかどうか・・・。

聡華は再び相手の攻撃を待つ。

一瞬だ・・その瞬間を待つんだ・・。

実際独特の構えながら?紫香楽瞬神流?には流派固有の動きがあるわけではない。

基本的に槍の突くという基本的な型がベースであるため足さばきには少し違いは見られるもののさばき等は他の流派とそんなに変わらない。

だが、だからこそ基本に忠実な分それを究めれば破たんが無く非常

に強さを発揮する。
だが、まだまだ未熟な物が使えば基礎はもろ刃の剣となって自分を危険に落としこむ。
そして聡華は、まだまだ?未熟?な部類だった。

「ねぇ、知ってる?」
「・・・・?」
「紫香楽龍が相手の攻撃を待つ応じての流派なら・・・・白鶴流薙刀術はね・・・その?待ち?を与えない」
「――――ッ!」
「?しかけ?を基礎とした攻め手主体の流派なのよ!!」

理は素早く正確に薙刀の葉先で聡華の足を払う。
相手の動きに細心の注意を払っていた聡華もその素早すぎる動作に反応出来ず足元をすくわれ大きくバランスを崩す。そこへ大きく振り上げた薙刀の一閃が襲う。

「くっそ!!」
ガッ!!
聡華はそれを薙刀の柄で防ぐ。
だがまだ終わりでは無い。
理は素早く薙刀を戻すと立ち上がった聡華の首元目掛けて薙刀を振るう。
聡華はまたも突きをバックステップでかわすが今回の突きは一段では終わらなかった。

「つぇいッ!」
「うわっと!」
さっきよりも踏み込んでの一突き。
聡華はそれを自分の薙刀の細かな刃先のコントロールで反らす。

だがまたも素早く引かれた薙刀に聡華は反撃が出来ない。

「つぁぁぁいッ！！」

「このッ！！」

先ほどとは違い今度は踏み込みながら聡華の刃先を自分の刃先にからめ大きく上に跳ねあげる。

そして・・・。

「でぇぇぇぇいッ！！！！！！」

「ぐぅっ！！！」

その流れからの振り下ろし。

聡華はかろうじて胴への直撃は防いだがそれをかばった右腕には激痛が走っていた。

思わず顔をゆがめ薙刀を持ったまま、右腕をかばう。

くっそ・・・ッ！！

こいつ、思っていたより強ぇぇッ・・！

なんだよさっきのは！

すべてがまるで水でも流れるかの様に一切無駄のない攻撃。

攻撃のテンポ、タイミングそのすべてがこちらが対応できない呼吸で行われる。

はっきりって向こうの方が圧倒的に強い立場である事はこの場にいる誰もが分かっていた。

・・・白鶴流・・？しかけ？を基礎とした攻め手の流派ね・・伊達じゃねぇ・・・。伊達じゃねぇけど・・！

聡華とて、未熟ながらに意地がある。

やられっぱなしは聡華の一番嫌いな事だ。

聡華は腕の痛みに耐えながら構えを正すと、再び相手の攻撃を？待つ？。

聡華が相手の攻め手を？待っている？のにも関わらず、攻め込まれてる大きな理由・・・それは相手が薙刀術そしてこっちが槍術と言

うそもそも使っている武器の形式が違う事にある。
薙刀術にはそもそも振りまわす等の要素が初めから含まれているのに対して槍術は基本的に突く動作が主になる。
突く直線的な動作に対して薙刀は？薙ぐ？？振りまわす？と言った円動作。直線的な攻撃は円運動によって？いなされ？？かわされ？そして上手くさばかれてしまう。
それに加えて術者がこれほどの腕前だ。
聡華自身持てるすべての突きを見せたとしても簡単に一本は取らせてくれないだろう。
なら・・・その円動作が対応できないほどの突きを持っていたとしたら？
そして聡華にはその一突きがある。
・・・アレを出すためにはどうしてももう一度相手に突きを繰り出させねぇといけない・・。
でも・・・。
突き主体の攻撃は先ほどもあったが、アレは最後の振り下ろしへの布石。
聡華が欲しいのは完全に踏み込んだ一突きだ。
その瞬間にのみ聡華に、勝機は訪れる。
聡華はその時を静かに待つが、その静寂を理の声が引き裂いた。
「やるわね、？三崩（みくえ）？にギリギリ対応するなんて。私は決めに行ったんだけど？」
「・・・・三崩（みくえ）？」

聞き慣れない言葉に警戒しながらも首をかしげる聡華。
「そう、三つ崩れると書いて三崩。白鶴流派の攻撃はまず相手の体勢を崩し、そして正確に相手に攻撃を加える事を信条としているわ。攻め手を基礎とする流派だから当然と言えば当然だけど。
その中の型の一つが？三崩？三段の攻撃で相手を崩す。ちなみに前

の数字は色々変わるわよ？」

「・・・ベラベラ喋っちまって良いのか？　自分の手の打ち晒すようなもんだぜ？」

「大丈夫よ？　あなたが次に欲しい攻撃が何なのかなんてわかってるもの」

聡華は目を見開く。

まさか・・・そんな馬鹿なと。

それが本当ならば聡華に残されていた一分の勝機が消し飛んでしまう。

しかし理はそんな聡華の不安を余所にニヤリと笑うと――――――。

「それって・・・これでしょッ？！」

思い切り踏み込んでの突きを繰り出した。

驚きながらも聡華はこのあからさまな誘いに乗る。

どの道、この先突きを繰り出してくる保証はどこにもない。

罠であろうと、それに乗らない手はないと、とっさに聡華は判断したのだ。

「あぁ、そうだよ！　それを待ってた！」

「見せてもらうわよ？　私を倒せると踏んだ必殺のひと突きを！」

聡華は、理が突きを繰り出して完全に身体が伸びきった状態になるまでグッと薙刀を我慢する。

そして完全に伸び切ったその一瞬、理の身体が制止するまさにその時。一気に薙刀を後ろに引いて身を更にかがめ？瞬神流？の名にふさわしい踏み込みで肉薄すると、思い切り胴目掛けてほぼ零距離で突きを繰り出す。

――――瞬突（しゅんとつ）――――紫香楽瞬神流の代名詞ともいえる技で、？相手の

攻撃の隙をつき一瞬の踏み込みを持って最大の一撃を突きたてる？
一発逆転の秘策である。
「かはッ！！」

鈍い音と共に、理の身体が膝から崩れ落ちる。
その瞬間勝負はついた。
――――ついたのだが――――

聡華は、その姿を複雑な心境で見ていた。

「・・・勝てた・・・とは言えねぇよな」
ボソッと聡華はつぶやくと一礼してその場に薙刀をゆっくりと置いた。

「いやぁ、まさかこれほどとは思わなかったわ～」

ものの数分後、理は道場の入り口で聡華と渥美の前に腰かけていた。
口調はさっき、思いっきり胴を突かれた人間とは思えないほどピンピンしている。

「なぁ渥美・・・あたし本気で自信喪失しそうだ・・・」
「・・・それを僕に言われてもね・・」
ごもっともで。
「いやいや、あなたそんな気を落とす必要はないわよ。実際まともに食らってたらあたしここで笑ってられないわけだしね」
「それがどうも、マジには聞こえねぇんだよ・・」

「酷いわ、私は嘘をつかない事で有名なのよ？」
「そうですかい・・・」

聡華はため息を吐いて理の横にヘナヘナと座りこむ。
もう言い返す気力も無かった。
聡華は、ニコニコ顔で鼻歌を歌う理をちらりと見やる。
・・・はぁ～分からねぇ。なんでこんな威厳もくそもねぇ様なやつがこんなに強いんだ？
あのジジィといい勝負だぜ全く・・。

「・・・さて・・・」
理はこの話はここまでと切り上げる様に言葉を発して立ち上がる。
そして聡華に向き直ると、いきなりとんでもない事をのたまった。
「あなた、あの変電所襲った犯人さんでしょ？」
「なぁッ！？」
な、何！？
・・・あ、そうだ・・思い出したぞ。
こいつどこかであったと思っていたけどそうだ・・・・
この女・・・ずっと下で戦況を見守っていた――――。

「あらあら、そんなに睨まないで？」
既に聡華達が変電所を襲ったという事実は誠一郎を含む一部の人間は知れわたっている。
しかしそれらは一般市民には公にされていない事実だった。

ＩＳ学園側からのマスコミ規制もそうだが、紫香楽家を筆頭としたＩＳの関係各所が行った徹底した情夫統制のおかげで、あれだけの騒ぎだったにも関わらずただの変電所事故として処理されていたのだ。

聡華が焦っているのはそんな事では無い。
この場にいるのは自分と理と渥美だが、すぐ後ろの道場には子供たちがいる。
そんなところで自分が犯人だと言う話をされてみろ。
話がややこしくなるにきまっている。

・・・いやまぁ、犯人であることには間違いないんだがそれでもこれ以上避けられるトラブルに突っ込んでいくのは勘弁願いたかった。
「ま、それじゃ場所を移しましょうか？」

理は聡華の鋭い睨みを華麗にスルーすると、付いてこいと遠まわしに聡華に言って歩き出した。

理が二人を連れて来たのは、先ほど聡華が居心地のいい場所だと思った白鶴神社の参道だった。
その参道のベンチに腰かけると、理は聡華を一瞥する。
まだ聡華は理を睨んだままだった。

「だからそんなに睨まないでって」
「てめぇ・・・いつからだ・・・いつから気付いてた・・」
「一番最初からだけど？」
「・・・なんだと？」

じゃあ、こいつはあたしが初めから紫香楽聡華だと思って接していたってことなのか？
だけど・・・
「でもよ、あたしのそっくりさんなら学園にもいるんじゃねぇのか？　そっちと間違えたんだろ？」

「いいえ、間違えるわけないわ。雰囲気が違うもの♪」
「・・・・・」
「それに私は最初にあなたに自己紹介したじゃない？」
「あぁ・・・」
「それが何よりの証拠だと思うけど・・・」

・・・確かに・・なんて自分は迂闊なんだとあの時の自分をぶん殴ってやりたい。
少し考えれば、分かる事だろうが。
後悔先に立たずとはよく言ったものだ。

「で？　あたしをどうすんだ？　学園にでも突きだすか？」
「ん～、それも良いけど・・・それじゃ面白くないじゃない？」
「面白くだと？」
「だから、私は何もしない。突き出しもしないしそもそもここであなたと会ったことも誰にも言わない。まぁ子どもたちは仕方ないけど子供たちはあなたが誰かなんて知らないし大丈夫よね」
「お、おい・・」

「それよりも、あなた構えがまだ少し荒いわね。もう少し力を抜いても良いんじゃない？　それとも紫香楽流ってあんなに足に力を入れたまま立ち会うのかしら？」

「あ、あぁ・・そりゃ・・気をつける・・あれ？」
「それじゃ、私子供たちを待たせてるから♪」
「・・・あ、そりゃ悪かったな・・・・・うん？」

あれ？　うまく丸め込まれたって言うか・・・なんて言うか・・・。
聡華が気がついた時には、理の姿はそこになかった。
「お嬢様・・・」

「あぁ・・・」
「・・・・案外チョロイんですね」
「やめてくれ・・情けなくなるから」
今の聡華にはそれが精いっぱいの返答だった。

聡華達はその後元の服に着替えてから周辺をしばらく散策し、そして日が傾き始めたころ帰路についた。
夕日に照らされる道を渥美と共に歩く。
色々なところを歩き回ったが、やはり一番印象に残っているのはあの理との出会いだった。

「なぁ・・・結局あいつ何がしたかったんだろうな」
「そうだねぇ、初めからお嬢様を襲撃の犯人だと知ってて試合をして・・・」
「それを、別に言いふらすつもりも無いって言ってたな」

ふ～むと聡華は腕を組む。
大体だ、まぁあたしを襲撃者と分かっていた事はまぁ良いとしても、どうしてあいつはあたしと試合をしたんだろうか？その理由が分からない。あそこであたしを潰そうとした？いやだったら、そもそもあたしにわざと？瞬突？を使わせた理由が説明できない。
痛いのが好きだと言う理由ならあいつは相変態だろうがまぁその線も無いだろう。
だったら何だ・・。
何であたしを。
考え込み立ち止まってしまう聡華。

最近何かにつけて分からない事が多すぎる。
ジジィがどうして？紫燕？だけじゃなくあたしまで家に帰る事を了承したのかや、叶に事についてもそうだし、今日の事だってそうだ。
考え出すとキリが無い。

「あぁ～～～ッ！！　もう分けわかんねぇ！」

聡華は帽子を取って片手で頭をわしゃわしゃと掻きまわす。
しかし一方の渥美は、聡華と対照的にあっけらかんとして言った。
「まぁ、なるようになるんじゃない？」
「お前なぁ・・」

思わず聡華は渥美を睨む。
だが党の渥美は睨まれても楽観的な態度を崩さなかった。
「だってさ、考えても答えが出ないんだったら考えるだけ無駄ってもんでしょ？　それに紫感も無駄だしね」
「それは・・そうかもしんねぇけどさ・・。でもなんか気持ち悪いだろ、分からねぇってのは」
「お嬢様の言いたい事も分かるよ。だけどだったら今考えて分かるの？」
「いや・・分からねぇけども！」
「でしょ～、それに大体昔からお嬢様は頭を使う事は得意じゃないんだから、あんまり無理して色々考えない方が・・・・・・・あ」

渥美はそこまで言って、自然と嫌な汗が流れるのを感じた。
そして同時に、少し饒舌に語り過ぎたと後悔したがもう遅い。

「へ、へぇ・・・それがいわゆるアレだな・・・てめぇの本心って

やつだな・・・？」
「あ、いや・・・これはちょっとしたその・・言葉のあやと言うか言い間違いと言うか言い過ぎたと言うか・・・・だから・・」
「・・・・やっぱ、お前一度マジで死ねッ！！」
「おぅわッ！！」
聡華の瞬速の踏み込みにも負けず劣らずのダッシュで逃走を図る渥美を聡華は追いかける。
夕日に浮かぶ二人のシルエットは、執事とお嬢様と言う間柄ながらどこか年の近い親友の悪ふざけのようにも見えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

すっかり日も落ち、辺りを闇が支配する。
生き物達は寝静まり静寂が広がる世界。
だが紫香楽家の地下では、お抱えの技術者達が夜通し?紫燕?の修復・改良作業に追われていた。
そしてそこには、急ピッチで組み上げられていく?紫燕?の新たなる姿を見つめる誠一郎の姿もあった。
誠一郎の傍らには端末を片手に指示を送る現場主任の男性がいた。
「
例のシステム・・・どうかな?」
「えぇ、大丈夫ですよ。まぁ予定よりは少し遅れていますがおおむね修正できる範囲ですし」
「そうか・・」
「にしても、コレ見れば見るほどとんでもないシステムですね」
主任の男は、端末を操作して?例のシステム?について誠一郎に言

葉をかける。
誠一郎はちらりとその情報に目をやってから静かに答えた。

「まぁ・・・そうだな。だがそのシステムがなければ今回のこの？紫燕？は成り立たん」
「そのための大幅改修ですか・・・」
「まぁそれだけではないがね。おぉ、そうだ。もう一つの方はどうだ？　データはさっき渡したと思うが」
「あぁ、あのデータなら確かにいただきましたよ。いまＩＳの運動プログラムにインストールしている所です」

報告を聞いた誠一郎はゆっくりと首を縦に振ると、では頼むと残してモニタールームへ足を進めた。
モニタールームに着くと誠一郎はデスクに座りコンソールを操作する。
すると呼び出し音の後、少女の声がモニタールームに響いた。
声だけだ。モニターには？Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ？と表示されている。
「はい、もしもし？」
「私だ・・・」
「・・・あら、紫香楽のおじさまですね、こんな時間にどうかしました？」

相手が誠一郎であると知ってもなお相手の少女は声のトーンを落とさずごく普通に言葉を紡ぐ。

「あぁ・・・一応礼をと思ってな」
「お礼・・・ですか？　はて私何かしましたっけ？」
「ハッハッハ、やはり面白いなお主は」

珍しく声を上げて誠一郎が笑う。
ちなみにここでの面白いは誠一郎にとって相手が中々の曲者だと言う意味だ。

「とまぁ冗談はさておき。アレで良かったんですか？」
「おぉ、充分だったとも。おかげで良いデータが取れた」
「それは良かったです。私もあの痛手を被った甲斐はあったってことですね」
「ふん、聡華の突きなどお主の実力に比べれば蚊に刺された程度じゃろうて」
「まぁ、今のところはですけどね」

誠一郎は初めてこの人物にこうして話をした時から、この人物は只者ではない事を瞬時に察していた。
だからこそ今回？聡華の戦闘スタイルのデータ取りをこの人物に一任した？のだ。
そしてその目論見は見事に成功した。
この人物から送られてきた？聡華のデータ？は誠一郎が予想していたよりも遥かに正確で詳細なものだった。
やはり只者ではない。誠一郎の目に狂いはなかった。

「ところで、一つ聞いてもいいかの？」
「なんでしょう？」
「お主は聡華が、襲撃者だと知っておってなぜわしの申し出を受けたのじゃ？」
「あぁ、その事ですか・・・」

相手は一拍置いてからフフッと笑うとサラリと言った。
「面白そうだったからではご不満ですか？」

あまりにサラリと言われて誠一郎は思わず声を詰まらせた。
そしてその次にはハッハと笑う。

「やはり、お主は・・・・只者では無いわい・・・のう?白鶴　理?」

「お褒めにあずかり恐縮至極」

恐らく相手は、受話器の前で仰々しく頭を下げている事だろう。
それを思うと更に笑いがこみあげてくる。
だがそれを表には出さず、誠一郎は紫香楽の当主として理に礼を述べた。

「・・・まぁ何にしてもだ・・・。今回は世話になった」

「紫香楽のご当主様が軽々しく私なんかに軽々しく頭を下げても良いんですか?」

「ふん、そんな気微塵も感じておらぬだろうに?」

「あら・・ばれてました?」

「まぁな・・・。さてまぁ長話も何だな。夜遅く済まなかった」

「いえいえ、こちらこそ楽しい思いをありがとうございました」

そう言って電話が切れる。

・・・ふぅ・・・。

誠一郎はため息を吐きながらモニターの一つを見やる。
そこには先ほどまで自分が間近で見ていた紫燕が写っている。

もうすぐで紫香楽の翼はよみがえる。

・・・後は・・・

誠一郎は懐から写真を一枚取り出した。
そこには笑顔で写る誠一郎と幼い少女が写っている。

・・・・聡華・・・・・・か。

これは中々に難しい問題を後回しにしてしまったと誠一郎は考えながらその写真を、実に複雑な心境でしばらくずっと見つめ続けていた。

モニター越しに写る?紫燕?は?全て?が揃うその日を待ちながらその翼を癒す。

そして?その日?は、もう眼前にまで迫っていたのであった。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?～よみがえれ紫燕　中編～（後書き）

よくよく考えたらサイドストーリーってアレですね。
短編では無いわけだから、長くても問題ないですね。

問題なのはオリジナル展開なので既に若干ＩＳかコレ?見たいな空気があるところでしょうね。

色々すいません。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ？～よみがえれ紫燕　後編～

純紫香楽製近接特化型第二世代ＩＳ？紫燕？現状報告書
開発コード：ＸＳＡＳ－００１／２Ｇ
段階：ファーストシフト
製造最高責任者：紫香楽誠一郎
搭乗者：紫香楽聡華

現状は以下のとおりである。
破損部位
右腕部：装甲板交換（同時に新システム追加により生じたユニットアッセンブリ搭載完了）
右メインスラスター：左スラスター同様に出力増強に伴ってユニット交換終了。現在出力値最適化中
右サブスラスター：機動力増強により既存個所修復後増設予定
左腕部：シールドジェネレーター交換（出力増強のため）
コアブロックシステム変更：全体の出力増加に伴うエネルギー運用値変更と新たなエネルギーバイパス構築による誤差修正
大蛇：新システム搭載完了。最終調整の後紫燕コアへのウェポンインストール開始。

以上

「・・・・・ふむ、ここまで来ると新しいＩＳを組むようなもんじゃな」
「えぇ、まぁそれは。ですが作業も順調ですから今日あれば明日の朝ぐらいには試運転までは持っていけそうですね」

「明日か」
「えぇ」
誠一郎は現場主任の話にかるく相槌を打ちながら、?紫燕?を見る。
既に上記の作業内容のほとんどを終え最終フェーズに移行した?紫燕?は新たな姿をこの場の皆に晒している。
「誠一郎様が基礎理論を構築された例のシステムも順調ですし、大丈夫ですよ」
ＩＳの作業は順風満帆。
それは今日まで大きなトラブルなくやってきた事がその証明になっているだろう。
しかし、それは技術者達に取ってだ。
誠一郎にとっては、なんとかせねばならない問題が一つ残されている。
誠一郎はそれを表に出さずに主任に後を任せ研究プラントを出ると使用人に濃いめの緑茶を頼みあの大広間の座敷机にゆっくりと座る。
そして同じくゆっくりと瞳を閉じた。
・・・そう言えばいつからであろうか、聡華があんなに?はねっかえり?になったのは。
思い出すのは聡華がまだ幼かった頃・・・。
自分が分家であった?誉?の家から聡華を養女として迎え入れた日の事。
・・・正しかったのか・・・。
ふとそんな事を思う。
養女として迎えいれた側である自分がおかしなことをと自分でも思うが。
その自問自答を繰り返しながら、誠一郎は一人静かに誰にも知られず誰にも言わず悩み続けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ぬぬぬぬぬ・・・・・・ッ」
「ほらほら、早く選ばないと？」
「うるせぇ、別に時間制限なんて無いだろ！」
「ほらほら～」
聡華が帰省した五日目の夕方、聡華は渥美と自室で思いのほか白熱した？ババ抜き？を行っていた。
現在聡華の手札は一枚、渥美は二枚。聡華がハートの六を引けばあがりだがジョーカーを引けばたちまちチャンスはピンチに変わる。
実はここに至るまで既に五回以上同じ事を繰り返しており、イケイケな性格の聡華も流石に慎重になっていた。
聡華は渥美の二枚のカードの上で右手を不安そうに何度も左右に振る。
そんな聡華に対して渥美がヒョイッとカードの場所を入れ替える。
「あ、ちょ待て！　お前選ばれる側は動くんじゃねッ！」
「そんなルールは無いよ？　それにさ言っちゃ悪いけどたかがトランプじゃないか」
「うるせぇ、何でもかんでも負けるのは好きじゃないんだッ！」
「・・・この前良いように遊ばれたのに？」
「てめぇ・・・トランプ終わったら覚えとけ・・」
「それでもトランプは続けるのか・・」
聡華の負けず嫌いも相当なものだなと渥美は思う。
まぁ誰だって敗北の屈辱にまみれるよりは勝利の栄冠をつかむ方が良いに決まっているが、それにしたってこれはたかがトランプ勝っても別に何も商品も栄誉も手に入らない。
まぁ・・・こう言う所が聡華らしいと言えばらしんだけどね。
何事にも呆れるぐらい真っすぐ真剣に。
向こうでどうかは知らないが、少なくとも渥美の知る聡華はそう言う人物だった。

「えぇとな・・・ん～～と・・・よしッ！　こっちだ！」
「あぁ！」
聡華は勢いよく渥美の手にしていた左側のカードを引きぬく。
「へっへ～、その顔は・・・・てめぇの・・・・！」
「・・・・なんてね～残念でした」
「のわッ！！」
「はい、お嬢様僕の番～・・・・ってか僕はこっちのカードね。はい・・・あがり～」
「ちょ、お前！　待てまだあたしが良いって言ってねぇだろ！！」
「そんなルールは無いよ！」
「てめぇさっきと言い今と言い・・・もう切れた！！」
「うわッ！」
渥美に飛びかかる聡華。
だが聡華も渥美も喧嘩していると言うよりは中のいい友人同士か兄妹がじゃれあっているようにも見える。
つまりはそう言う事。
渥美にとって聡華はそう言う人物でありまた逆もしかり。
ここには一つ変わった兄妹の姿があるのかもしれない。

また初日と同じようにくたくたになるまで、散々暴れまわった二人は部屋の床に転がっていた。
そこで不意に渥美が聡華にこんな事を尋ねた。
「・・・ねぇお嬢・・・いや・・聡華・・」
「・・・あん？」
渥美が聡華をお嬢様以外で呼ぶのは本当に焦っている時か本当に真面目な話夏のどちらか。
そして今は後者である。
「聡華は・・・この家に帰ってくるのやっぱり嫌だった？」

「・・・なんだよ急に」
「いや・・・ちょっと気になってね」
「・・・・そうだな・・・やっぱ嫌だったな」
「それは・・・やっぱり誠一郎様の・・？」
渥美の問いにフッと表情を曇らせる聡華。
「まぁ・・確かにあのジジィの事は・・あんまり好きじゃねぇ」
「・・・嫌いとは言わないんだね」
「・・う～ん・・なんかそう言うのとはまた少しなんか・・・そう違うって言うのか」
「違う？」
「あぁ・・なんて言えば良いのかわかんねぇけどな」
聡華はそのまま天井を見つめて動かない。
考える事はあるのだろう。
と言うよりも聡華が言った通りよく分からないのだろう。
今の自分の感情が。
自分を？誉？から養女として引き取ったおかげで自分は両親や弟と引き離された。
だが逆にそのおかげで、恐らく？誉？の家では到底届きはしなかった力を得たし経験もできた。両親が亡くなった後も今と同様の生活が出来ているのは間違いなくこの家のおかげだろうとも思う。
感謝すればいいのか怒ればいいのか、好めば良いのか嫌えば良いのか、きっとどうしたらいいのか分からないんだろう。
渥美がそう考えていると聡華が話題をこちらに振り返してきた。
「お前はどう思うんだよ。あたしの事やこの家の事とかあのジジィの事とかさ」
「え？・・・ま、まぁ・・その僕もなんて言ったらいいのか分からないけれど」
「・・・あぁ」
「僕としては・・・出来れば聡華にはこの家を嫌いになってほしくはないかな」

「・・・・」
渥美は自分の本心を言う。
さっきふと感じた嘘偽りない思いを乗せて。
「聡華にとってこの家がどんなに嫌だったかは分からないけどね。
でもここは聡華が今まで育ってきた家だから・・・さ。僕はそれだけは嫌いになってほしくはないかな」
「・・・・」
聡華は渥美の答えに無言と言う選択肢で返した。
その表情は、やはりさっきと同様に色々考えている事を思わせる複雑なものであった。
渥美と聡華はしばらく床に転がったまま、互いに思考を巡らせていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「今日からお前はわしの娘となった」
前日までいつもと変わらない日常を過ごしていた少女はある日突然全く知らない家に連れてこられて、いきなりそんな事を告げられた。
まだ幼いその少女は、小首をかしげながらその言葉を聞いた。

「今日からお嬢様のお世話をさせていただきます、渥美・フォン・フェッセンと申します以後、お見知りおきを」
今日から彼の言うとおり自分の周りの世話をしてくれる人がついた。
幼い少女でもそれぐらいは理解できた。なんかナヨナヨしたやつだと思った。

「この程度で根を上げるとは・・・お前はあの日紫香楽の性を与えられたのだ。立て！聡華！！」

この家に来てからしばらくして、?槍?の稽古をつけられた。相手はあのおじいさんだった。

何で自分がこんな事をしなきゃならないのか。凄くつらいし痛いし・・。逃げ出したいぐらい嫌だった。

「あ～あぁ・・もう誠一郎様は・・。ほら、大丈夫?お嬢様・・ちょっと沁みるかもしれないけど我慢してね?」

ボロボロの自分を彼は優しく介抱してくれた。それから話も真剣に聞いてくれた。

ナヨナヨしたやつって印象は変わらないけど良いやつだと思った。

多分こいつがいたから自分は逃げ出さなかったんだろうと今になって思う。

「そうではありません！　良いですか?どのような経緯があろうとも紫香楽の性を与えられた者ならばこの程度の作法はしっかり身につけていただかないと困ります！」

どこぞの礼儀作法の先生らしい。だけど自分にはそんなの向いていないし何より、そんなの出来ても出来なくても関係ない。第一紫香楽の名を名をって言うが勝手に養女にしたのはそっちではないか。

なぜこんな事を?

どうして自分が?

少女には答えを出すには酷な問いが徐々に少女の中で大きくなっていく。

行き場のない怒り。容易く吐く事を許されない弱音。

そしていつも耳にタコが出来るぐらい聞かされた?紫香楽の名?。

そんな不安定な環境が、次第に少女の性格を人柄を大きく変えてい

った。
自分がいつこんな性格になってしまったのか、それは自分自身でもはっきりと分からない。
だが、それでもそんな今にも壊れそうな自分を支えてくれた渥美。
多分この男がいなければ自分んはこんなに苦しんでは居ないだろう。
きっとこの男がいなければ簡単にこんな家、嫌いになれただろう。
逃げ出していただろう。
そう考えてしまうからこそ、自分を支え続けてきてくれた渥美の言った言葉が引っかかってはなれない。
?僕としては・・・出来れば聡華にはこの家を嫌いになってほしくはないかな?
自分だって、この家のすべてが嫌いでは無いのだ。
だけど好きでも無い。
分からない。
この答えはどこにあるのか・・・。
どうやったら出るのだろうか。
その答えはどこにあるのだろうか。
聡華にはそれが答えの見えない迷宮をさまよっているように感じられた。

「ん・・・んん・・・」
聡華はゆっくりと目を開ける。
「・・・あれ?」
いつの間に自分はベッドの上に・・?
部屋の電気は落とされて、自分はベッドの上で布団を掛けられていた。
そして傍らには?用事があればご連絡下さい　渥美?と書かれ下に携帯番号が記されたメモ用紙があった。

「あたし・・・あの後寝ちまったのか・・・」
月明かりだけが照らす部屋でゆっくりと身体を起こす。
・・・じゃあさっきのは・・・夢か・・・。
思い起こされるのは答えの出ない問い。
・・・ほんと、どうしたらいいんだよあたしは・・。
聡華が頭を抱えて髪の毛をクシャリと掻き上げる。
静寂が支配する中どこからともなく話し声が聡華の耳に届いた。
・・・ん?・・外か・・。でもこんな時間に一体誰が・・・。
聡華はゆっくりと起きあがると、窓際へと移動する。
声は確かに外から聞こえる。
聡華は気付かれないようにゆっくりと窓を開けると、声の主を探す。
するとしばらくしてから夏の少し蒸し暑い風と共に二つの声が入ってきた。
そしてその二つの声は聡華が最もよく知る人物の声だった。
・・・この声・・ジジィと・・・渥美?
珍しい組み合わせだと思いながら聡華は、その会話に聞き耳を立てる事にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・何?」
「ですから、誠一郎様はお嬢様の事をどう思っておられるのかとお聞きしたんです」
誠一郎は渥美を一睨みする。
そして不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「お前はそんな事を聞くために、わしをわざわざこんな時間に呼び出したのか・・・?」
「はい」
聡華でさえ睨まれれば何も言えなかった誠一郎の鋭い眼光にもひる

まずしっかりとはっきりと返答する。
その返答を聞いて誠一郎はため息と同時にやはりかという思いになった。
普通、使用人である渥美が当主である誠一郎を呼び出すなどあってはならないことなのだが、誠一郎は渥美が自分を呼んでいるという事を聞いてすぐさまそれが聡華に関する事であるという事を予測していた。
渥美を聡華に付けてから、以前にもこう言う事が何度かあった。
渥美は聡華の事になるとたとえ誠一郎相手だろうと構わず言葉をぶつけてくる。
そして今回もそうだった。
「私はこれまでも、お嬢様について誠一郎様に何度かお話をした事はありました。ですがその事だけはこれまで全くと言っていいほど御答えが無かった・・・・」
「そんな事を言わねばならんか？　わしが・・」
「えぇ・・・」
「何故だ？」
渥美は誠一郎をジッと見据え誠一郎もまたその視線をしっかりと受ける。
しばらくの沈黙の後渥美は、言い放った。

「――――――父親だからです」
「――――ッ！？」
誠一郎にとっても予想外だったようで目が大きく見開かれる。
渥美は構わず言葉をつづけた。
「お嬢様・・・いえ、聡華にとってもう父親と呼べる人間はあなたしかいません。聡華にはもう同じ名前の肉親はあなたしかいないんです」
「・・・・・・」

「だからこそ僕は聞きたい。あなたが聡華をどう思っているのかを！そりゃ僕はただの聡華の使用人かもしれません。でも・・・僕はこれ以上聡華があんな複雑で戸惑ったような顔してるのを見たくないんです！」

それは渥美の本心であった。確かに渥美にとって聡華とは何の関係も無い。ただ御屋敷のご令嬢と使用人という間柄でしかない。

しかし、いつしか渥美の中には聡華が自分の妹の様に思えていたのかもしれない。

だからこそ、聡華には笑っていてほしかったし元気でいてほしい。

何よりあんな顔は聡華には似合わない。

渥美の心情吐露が終わりまた沈黙が訪れる。

この場にもし第三者がいたら息苦しさでたまらない空気の中静かに誠一郎が口を開いた。

「・・・父か・・・」

「はい・・・」

感慨深げにそうこぼすとゆっくりと瞳を閉じる。

そしてしばらくしてゆっくりと瞳を開けると綺麗な満月を見上げて行った。

「わしは・・・聡華を月のように育てたかった・・」

「月・・・ですか？」

「月は太陽の光を受けて夜空に輝くものだ。そしてその表情は幾重にも変化する。満月もあれば半月、三日月もあれば新月のように自分を隠してしまう。人もまたしかりじゃ。一つの身体に幾重もの表情を持っている。誰かが光を与えてやらねば輝けない・・。じゃが輝いた時・・・わしらに多くの物を見せてくれる・・・わしは聡華をそんな風に育てたかった」

目を細め、どこかさびしげに言う誠一郎の姿。

渥美はその姿に驚きながらも黙って耳を傾けた。

「わしらが言うなれば聡華の太陽にならねばならなかったのじゃよ・・・まぁ似合わん言い回しじゃがな・・。しかし聡華にとってわし

らは旨い具合に太陽にはなれなかったようじゃな・・」
上手く自分達が聡華を輝かせる事が出来なかった事。
その事に関する純粋な後悔の念が感じられる。
「だがそれは今言ったところで所詮理想論だ・・。あの頃のわしと言えば誉の家から聡華を引き取ってやったことと言えばこの聡華に紫香楽の性を与えると言う事の意味を教える事ばかりに固執し、あの子をまともに見てやろうともしなかった・・・いまその現状が結果じゃよ」
誠一郎は自分を嘲笑するように笑い渥美を見やる。
「のう、渥美・・・聡華の好物・・知っておるか?」
「えぇ・・聡華は中華が大好きですから・・初日も食べに行きましたし」
「ふふッ、そんなことすらわしは知らん・・・何も見えておらなんだ・・」
誠一郎はまた月へ向き直ると、寂しそうな顔でその月を見やる。
どこでどう間違えたのかなど、今さら考えても無駄な事だ。
だがそれでも、たらればを考えてしまう。ああしていたら・・・あの時こうしていれば・・・。そんな事ばかり。
その心情を聞いていた渥美は確信した。
こんな事を考えるのはやはりこの人が父であるからだと。
さっき自分が言ったように。
だから後悔する。
だから考える。
だから寂しそうな顔をする。
すべては父だから。
そして父だからこそ・・その自覚があるからこそ・・・。
「誠一郎様は・・・その・・・・怖かったのではありませんか?」
「・・・・・怖い・・・か」
「えぇ、父親として見れなかった、見てあげられなかったから・・・だから聡華という人物が分からない。どう思っているのか、どう考

えているのか・・・だから怖かった・・」
これまで政財界の大物と呼ばれる連中と話をするにも何の恐怖さえ感じなかっただろうこの人物もそれは相手が赤の他人だから。両者ともに思惑を持っているから。腹を探り合っているからこそそこには恐怖などという感情は入り得ない。互いが互いを騙し合うのがそういう人間との会話だ。
でも聡華はそんな人間ではない。
思惑など無く呼ばねばならぬ人物。そこに騙し合いも何もないい言われる言葉はすべて真実だけだ。
だからこそ怖かった。真実を言われるのが、聞くのか。
何と言い返してくるのか分からない。
それが怖い。
「そうなのかもしれん・・・いや、きっとそうなのだろうな・・」
「・・・誠一郎様・・僕がこのような事を言うのは差し出がましく厚かましいと思うのですが・・・。聡華はきっと呼んでほしいと思います。あなたに・・・思惑なく何の気の遣いも無く・・名前を」
「・・・わしにその資格はあると思うか?」
「当たり前です。あなた以外に・・誰が聡華を呼ぶんですか?」
この人が呼ばないとだめなのだ。
自分でも他の人間でもいけない。
この人物でなければならない。
「・・・フッフ・・」
静かに笑うと誠一郎は渥美に背を向け、ゆっくりと歩き出す。
渥美はその背中をただ静かに見送るつもりだった。
しかし少し歩いたところで誠一郎が立ち止まった。
「・・・渥美よ・・わしがなぜ聡華をこの家に引き取ったのか分かるか?」
「・・・え?」
突然の問いに渥美は声を詰まらせる。
しかし初めから答えを自分で言うつもりで問いかけたようで少し笑

うと口を開いた。
「わしはな、何もあの子をＩＳの適性が高かったという理由だけで引き取ったわけではない・・。聡華になら・・託せると思ったからじゃ・・・？紫香楽の思い？を？紫燕（ちから）？をな。じゃが・・・本当はただ空を駆ける姿を見たかっただけなのかもしれん・・。聡華が笑い元気よく空を駆ける姿をの・・」
「あ・・」
「それに・・・・子が嫌いな親はおらんさ・・。まぁ・・色々と、失敗してしまったがな」
そう言い残して完全に家の中に入ってしまう。
今度こそ渥美はその背中をジッと見送った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

二人の会話の一部始終を聞いた聡華は、壁に力なく寄りかかっていた。
あのジジィが・・・そんな風に思っていたなんて知らなかった・・。
いや・・・違う。
知ろうとしなかった。
ジジィはあたしの事なんて嫌いなんだと勝手に決め付けていたのかもしれない。
本心も聞かずに・・。
「・・・あたしも・・・・怖かったんだろうかな・・・」
一人そう呟いて薄暗い部屋の天井を見つめる。
そう・・怖かったんだ。
あのジジィの本心を聞くのが怖かった。
なんだかんだいって・・あんとき渥美が言ったのがすべてじゃないか・・。

「――――――父親だからです』
あたしにはもう、本当の両親は居ない。
けど・・紫香楽としての父親ならいる・・。
そう呼べる人間がいる。
そう・・・呼べる人間から・・・嫌いだと言われる事が・・自分を嫌いだと知る事が・・怖かったんだ。
だから一方的に突き離して、話も聞こうとしなかった。
何やってんだ・・あたしは・・。
まるっきり馬鹿ではないか。
わけがわからないのではない・・・。もう答えの出ている問題の答えを新しく探したって出るわけがないんだ。
・・・・・・もう、迷わねぇ・・。
迷っちゃいけねぇんだ。
偶然とはいえジジィの本心を聞いた、いや聞けた。
だからもう、迷っちゃいけねぇ・・。
今度は・・・あたしの番なのだから・・

翌日。
聡華が目を覚ますと、その寄りかかった壁の前だった。
・・・今度はあのまま寝落ちかよ・・
我ながらどこでも寝られるなと思いながら、顔を上げると丁度部屋にノック音が響き続いて見知った声がする。
「起きたかな～、お嬢様?」
「・・なんだ渥美か・・あぁ、起きたよ・・・ただ身体は痛ぇけどな・・」
「入るよ?」
ガチャリと音をたて扉が開くと次に見たのは渥美の呆れた顔だった。

「・・・どこまで寝相が悪いのか・・」
「違ぇよ、馬鹿ッ！」
ったくこっちの気も知らねぇで・・。
まぁいいや・・
「おい、シャワー浴びっからタオル持ってきてくれねぇか？」
「タオルだけでいいの？」
「・・ん？　・・あ、あぁ・・それと着替えも・・だな・・？」
なんだどういう意味だ？
「ふぅん・・・下着はつけないと・・」
「・・そう言う意味かッ」
渥美の顔にまくがめり込む。
・・・こいつは本当に・・・ッ
きのうアレだけ真面目な事が言えてなんで今それしか言えねぇんだ・・・。
一晩だけでここまで、気分って変わるもんなのか？
ったく・・。
聡華は顔面を抑えてうずくまる渥美の横を通り過ぎる。
「とにかく、早く持ってこいよ。後な下着はあたしが持って行くからいらねぇの」
「あ、お嬢様！」
「だぁ、もう何だよ！」
「僕は黒の方が好・・・うべッ！！」
良いところに花瓶があってよかった。
聡華はそう思いながら風呂場へと足を進めた。

紫香楽の家が大きいとはいえ、風呂場はごく普通の大きさである。
聡華は服をかごに放り込むと、レバーをシャワーに切り替えて蛇口をひねる。

シャアアア

・・・はぁ、しゃあねぇ・・行くか。
聡華は足取り重く地下の研究プラントを目指した。

「お嬢様をお連れしました」
「うむ・・」
渥美の声がプラントに響きそれに静かに誠一郎が頷く。
ここでいつもなら聡華の軽口が続くのだが今日はそれが無かった。
ひたすらここに来るまで聡華は何を言えばいいのかをずっと考えていたからだ。
それを不思議に思った誠一郎が渥美に小声で問いかける。
「・・・今日はやけに大人しいな・・」
「えぇ、まぁそれは・・色々あるのでしょう、お嬢様にも」
「なんじゃ、お前でも知らんのか?」
「僕だって常に付きっきりというわけでは・・」
「・・まぁそうか・・・」
誠一郎は話を切り上げると、聡華に向き直り少し大きめの声で呼んだ。
「聡華!」
「うぇッ!?」
一瞬ビクッとなって変な声を上げてしまった聡華は、苦笑いでその呼びかけに答えた。
誠一郎は一瞬訝しげな顔をしたが、すぐに表情を元に戻すと視線で聡華にある物をみる様に促す。
聡華はその視線にゆっくりと誘導されながら、その?ある物?に目をやった。
「・・・これは・・」
そこには、新たな姿をまとった?紫の翼?の姿があった。
元々シャープだった腕部や足回りは出力強化などに伴って若干太くマッシブになっており背部の両スラスターもまた、以前よりも大型

化している。そしてカラーリングも紫いろがベースなのは変わらないが縁どりに白いラインが走っていた。
「・・・形、結構変わったな・・。作り直したのか？」
「いや・・これは？紫燕？の専用パッケージ・・・その名も？八岐大蛇（やまたのおろち）？という」
聡華の疑問に答えたのは誠一郎ではなく現場主任の男性だった。
「八岐・・・・大蛇・・・」
「？紫燕・八岐大蛇？は通常の？紫燕？にとある新しいシステムを追加するためのパッケージ、それが八岐大蛇だよ。まぁ説明するよりも使ってもらった方が早いがね」
「・・・ま、遠まわしにお嬢様はオツムがちょっとってことだね」
「分かってんだよ！　あえて言わなかったんだから触れんな！」
ったく・・・。
渥美を一瞥してから、もう一度まじまじと？紫燕？に目を移す。
これがあたしの？紫燕？・・・。
今になって思うと、この機体をジジィに預けた時自分はどうだったのだろうか。
これもきっとジジィのあの話を聞いてなかったら考えなかった事だろうし、多分今も色々騒ぎたてていただろうと思う。
聡華は誠一郎を見やるとうつむいた。
多分言わなきゃいけない事はとても簡単な一言。
でもそれが、出てこない。
こんな近くにいるのに。
・・言ってしまえが楽になれるのに。
今ま自分が誠一郎に取ってきた態度や発した言葉の数々が後悔と自責の念となってその言葉を抑え込んでいる。
「・・・何をしておる・・とっととフィッティングに入らんか」
「えぇ！？　い、今からやんのか！？」
「状況が変わったのだ・・・」
・・状況？

あぁ、いやでも・・！
聡華は喉元まで出かかっている言葉を無理やりにでも出そうとするが言葉にならない。
そんな聡華を見て誠一郎は聡華の腕を引っ張ると、？紫燕？の前まで連れて行く。
「な、何しやがッ・・！」
「言っただろう、状況が変わったと」
「状況ってなんだよ！」
誠一郎は聡華に構わず、？紫燕？の最終チェックを行っていた技術者に告げる。
「始めてくれ」
「おい、ジジィ！」
あぁ・・くそッ！
本当はこんな事言いたいわけじゃねえのに・・。
だがそう思っていても状況は変わらない。
聡華はひとまず、？紫燕？に身を預ける事にした。
いつもと同じように機体に背中を預ける様に、下手な力入れず気持ちを落ち着ける。
「では・・始めます」
技術者が声を発し、手元のケーブルが繋がったコンソールを叩く。
すると開いていた装甲が聡華の身体に沿って閉じ始めた。
「・・・お？」
変化はすぐに分かった。
違和感がねぇ・・。むしろ前の？紫燕？よりもしっくりくる感じだ・・。
「しっくりくるでしょう？　まぁ来てもらわないと困りますけどね」
もう一人の技術者がデータとにらめっこしながら聡華に話しかけた。
「なぁ、さっきもチョロッと聞いたんだけどよ。？紫燕？ってただ直しただけじゃねぇのか？」
「えぇ、違いますよ。基本的には改修ですが、新システム搭載によ

るＯＳのアップデートやハイパーセンサーの調整などなど上げればきりがありませんよ」
「あ、でも驚いたよなぁ。この？紫燕？のフィジカルフィードバックのパラメータを構築したの誠一郎様なんだからさ」
「え？」
「あぁ、そう言えばそうだったな。しかもそのまるで見たように数値が正確だったしよ」
「・・・何？」
「そうそ、特にあのアタック・シーケンスの構築は見事だったよな。まぁ、誠一郎様だしお嬢様の？槍術？なんて何度も何度も見てるだろうしさ」
・・・槍？
見たように正確？
聡華には少し思い当たる節があった。
それはあの理との一戦だ。
あの一戦何で戦ったのか良く分からなかったが。
さっきの話を聞いて少しつじつまが合うような気がしてきて来た。
・・・まさか、あのジジィが？
聡華はチラッと誠一郎に目をやる。
誠一郎は聡華に背中を見せていたが、その背中を見ただけで聡華にはなんとなく理解できた。
だからこそ、言わねばならない。
絶対に。
でも・・タイミングがわかんねぇ・・。
あぁ～くそこまで出てきてんのに・・！
と、そうこうしているうちにフィッティング作業が終わる。
「最終フェーズ移行・・。全ラインオフ。ハッチも解放しろ！」
「了解、上部ハッチ解放、ステルス処理終了確認、全ラインオフ」
主任の指示で？紫燕？に繋がれていたケーブルがすべて抜け落ち？
紫燕？が置かれていた台座も沈み起動したＰＩＣによってフワリと

?紫燕?は宙に浮かび上部ハッチが開き遠くに青空が見える。
システムはすべて正常値。
所々まだ、処理中の個所はあるがそれでも現状に支障をきたすレベルでは無かった。
聡華は、装着した自分のＩＳを一つ一つ確かめる様に動かしてそしてぐるっと施設内を見渡す。
・・・この一挙手一投足にジジィや・・多くの技術者が関わってる。
もう、あんな無様な姿は晒せない・・・いや晒させねぇ。
聡華は強く思うとさっきまでの迷いがスッと消える。
そのまま静かに目を閉じ、そして気がつけば同じように静かに口を開いた。
「なぁ、ジジィ・・・一つ聞いてもいいか」
「・・・なんじゃ?」
「昔からずっと言われ続けてきた事なんだがな・・・・紫香楽の性を名乗る事の意味っての・・・教えてくれねぇか?」
誠一郎はため息交じりに答える。

「まだそんな事も、わかっとらんかったのか・・」

あぁそうさ・・・あたしは何も分かってなかった。

「全く情けない・・」

そうだな、情けねぇよ。
ただの一言も言えねぇんだしな。

「まぁいい、よく聞いておれ・・」

あぁ、だからこれから知っていかなきゃならねぇんだ。

「紫香楽の性を与えられる事の意味・・・それは・・・・」
それは――――――――――――

「――――――――――――だ」
あぁ、期待していた通りの答えだったよ。

だから・・だからあたしも言わないとな・・・。

「・・・ありがとよ・・?親父?」

聡華は一気にスラスターを噴かすと、ハッチを飛び出し超超高度にまで上昇する。
速さは健在、更にそこに誠一郎の構築したフィジカルフィードバックによって機体の隅々までの感覚が手に取るように分かる。
しばらくしてから、モニターが開き誠一郎が言っていた?状況が変わった?の意味を理解する。
「・・・ハワイ沖ね・・。ったく・・何やってんだか!」
聡華はチラッと小さく見える紫香楽の家を振り返る。
そしてニヤッと笑う。
多分、こんな事言うの初めてかもしれない。
いや言った事はあったと思うが、こんなただ純粋な気持ちで言うのは間違いなく初めてだ。

「行ってきます」

「最後まで騒がしいヤツじゃったわい」
「・・まぁお嬢様らしいですけどね」
「ふん・・」
鼻を鳴らして振り返り一人その場を立ち去る誠一郎。
・・・全く親子そろって不器用だなぁ・・。
渥美はそう思って笑う。
いくら気丈にふるまおうとも・・あなたも人間だ。
渥美は、今見た涙を誰にも言わずそっと胸にしまい聡華が飛び出したハッチをただずっと見上げているのだった。

ここに本当の意味での紫香楽聡華は生まれ、そして空に再び？紫燕？がよみがえった。

～おまけ～

「なぁそう言えば、もう一個聞きてぇ事があったんだけどよ」

「なんじゃ」

「どうして使用人どもはあたしに目も合わせようとしなかったんだ？」

「・・・お前の八つ当たりが嫌だったんじゃろ」

「マジで！？」

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ?～よみがえれ紫燕　後編～（後書き）

もうｇｄｇｄだぜ！
そして次回から本当に待ちに待った臨海学校編です。
ほんと・・・・すいませんでしたｗ

第３６話～動き出す歯車と臨海学校～

四十人乗りの大型貸切バスが数台列をなして道を行く。
乗るのはＩＳ学園の一学年の生徒達。
そして各バスのプレートには？ＩＳ学園臨海学校一年〇組？と書かれている。
その一番先頭を走る一組のバス。その前から五列目の席に僕とセシリーが座り、その後ろには一夏とシャルロットそしてその周りをいつものメンバーが陣取っていた。
本来ならどんな所なのだろうかと思いをはせて期待を膨らませるのが普通なのだろうけど・・・。
「・・・はぁ・・」
僕はあまり気乗りしてはいなかった。
「もう、アル・・さっきからため息ばかりですわねぇ・・」
「あぁ、いや・・」
「そんなに私の隣はつまらないのですか？」
「そう言うことじゃないんだ・・うん・・」
そう言うことじゃなくて・・。
僕が気乗りしないのは・・・。
・・・海・・か。
海に良い思い出のない僕にとって、これから行くところにはまさに不安しかない。
・・でも、入らなければ良いわけだし・・。
大丈夫・・うん。
・・・多分・・。
不安ばかりが近づくにつれて大きくなっていく。
バスはいつしかトンネルに入り、そして抜けたころには目の前に青く雄大な海が広がっていた。
海の出現に湧きたつ車内。

他の生徒同様セシリーも目を輝かせていた。
それを見ていると、なんだか不安になっていた自分がどうにも馬鹿らしく思えてくる。
そうだ・・そう。不安になるぐらいなら馬鹿みたいに明るく行こう。
それがいい。それが正解だ。
きっと・・なんとかなるさ！

この時僕はこの臨海学校で、自分自身という物と正面から向き合い、考える事になるなんて想像もしていなかったんだ――――――――――。

「よし、到着だ。忘れ物には注意しろ！」
バスが止まると、織斑先生の声が響く。
そして、後続のバスも止まり中から学園の生徒達がぞろぞろと降りてきた。
僕たちもバスを降りると、自分の荷物を持ってクラスごとに整列する。
「ここが、今日から三日間お世話になる花月荘だ。臨海学校だから騒ぐなとは言わんが、従業員の仕事を増やさんように気をつけろ、いいな」
「「「よろしくお願いします」」」と声が上がり、頷いた織斑先生は次に一人の女性を紹介した。
その女性は年齢は三十代くらいだけど、笑顔の絶えない職業柄かそれよりも若く見えた。
「そしてこちらが、この旅館の女将の清州景子さんだ。旅館の事で何か分からない事があったらこの方に聞くといい」

「先ほどご紹介にあがりました、女将の清州景子です。よろしく」
流石は女将というだけあってすべての動きに品がある。
短い挨拶を終えていざ、移動しようという時、遠くから野太いエンジンサウンドが聞こえてくる。
・・あれ？　この音どこかで・・。
僕は耳をすませる。
明らかに日本の車では無い、太くお腹に響くエキゾーストノート。
その大きな音はトンネルに入ったのか更に反響して僕たちの耳に確かに響いてくる。
しばらくしてトンネルを抜け、ついにその姿を僕たちは捉えた。
・・・ブライトブルーにホワイトのストライプ・・・？
その車は鮮やかな青色のボディに真中に二本太く白いラインが走っているアメリカンマッスルカーの一つであるクーペ型のダッジ・バイパー。
八・四リッター　Ｖ型十気筒ＯＨＶエンジンをその長いボンネットに押し込み六百馬力オーバーというとんでもないパワーを有するマシンを誰かさんは見事に操り、最後は派手なタイヤスモークを上げながらパワードリフトで向きを一回転させて駐車場の一角に車を止めた。
その派手な登場に皆総ポカーン状態だった・・・僕を除いては。
「な、何？　今の・・」
「さぁ・・・あでもここって関係者以外は基本立ち入れないから学園の関係者じゃないの？」
「でもさぁ・・いくらなんでもあんな派手な普通するかなぁ」
口々に憶測を立て始める女子達。
その声が聞こえる度に僕は頭が痛くなる。
そう、あの車僕には見覚えがある・・・いやあったなんてもんじゃない。
・・・姉さん・・。まさか車までこっちに持ってきてたとは思わなかった。

そして僕の思った通り左側のドアが開いて姉さんが颯爽と降りてくる。
「ハーイ、あたし遅刻ね」
「ローラ・・生徒よりも先に教員が迷惑をかけるなッ」
「いいじゃない、せっかくの臨海学校なんだから楽しまなきゃ。こう言うのは何でもかんでも?入り?が肝心なのよ」
「フフフ、まぁま賑やかな事で」
・・・あぁもう女将さん・・・色々とすいません。

と車から視線をそらそうとした時、いつの間にか隣にいたセシリーが首をかしげて姉さんの車を凝視していた。
「ん・・どうしたの、セシリー? そんなにアメ車が珍しい?」
「イギリスにもアメリカの車はありますわよ・・・・・って、そんな事よりアル・・あれ」
セシリーは同時に指をさす。
僕もその指先を視線で追った。
「あれって・・・・・?」
「いえ、あのボンネットの影に・・」
ボンネットの・・影?
僕は目を凝らし車のボンネット付近を注視する。
するとスポーツカーならではの低いボンネットから、茶色い髪の毛が見える。
まさか車から毛が生えるわけもないから間違いなく何かしらの生物があそこにいる証拠だろうけど。
「ほんとだ・・何かいる」
「なんでしょうね?」
「さぁ・・」
「ローラさん! 車のボンネット付近に何かいますわよ~!」
セシリーが大声で姉さんを呼ぶと、当然呼ばれた姉さんは振り返るが同時にまだ好奇心旺盛な他の女子達も振り返る。

「え、なになに!?　新生物!?」
「おぉ～確かに車から毛が生えている!!」
「ＵＭＡ、ＵＭＡなら捕まえてＮＡＳＡとの交渉材料に・・・!!」
・・・何を交渉するんだろう最後の子は。
変な盛り上がりを余所に、姉さんは苦笑いを浮かべると頭を掻いた。
「あぁ・・さっきのでちょっと酔っちゃったのかもね・・」
「ん?　誰か連れて来たのか?　うちの生徒は全員いたはずだが・・」
織斑先生も怪訝な顔を浮かべて車を見やる。
それに姉さんは、笑って答えた。
「えぇ、稀代の天才を連れて来たのよ。ちょっと待ってて」
そう言うと姉さんは自分の車の方へ足を進め、ボンネット付近の?
何か?と言葉を少しかわした後その?何か?を立たせる。
その瞬間・・・。
「あっ!」
「あら!?」
「えッ!?」
「マジかよ・・!」
上から僕セシリー、シャルロットそして一夏の順に声を上げる。
あ、ってか一夏いつの間にそこに・・シャルロットも。
まぁそんな事より、なぜ立ち上がっただけで分かったかそれは服装だった。
身長は僕より少し低めで、そして?長くて若干ダボついた黒のファッション重視のタンクトップ?
更に口に加えるは金太郎飴でやる気のなさそうな半眼。
そして肩からはやや大きめの鞄をかけている。
「し、志穂音!?」
何で彼女がここに・・。
「あはは・・来ちゃった・・」
「来ちゃったって、お前なぁ」

「ローラさん・・これは一体」
「だから連れてきたんだけど・・」
いや断じていまシャルロットが聞いたのはそんな答えを期待してでは無いはずだ。
いきなりの部外者登場に織斑先生は志穂音を連れてきた姉さんに声をひそめて詰め寄っていた。
「どういうつもりだ！」
「だからそう言うつもりよ」
「ここは部外者は立ち入り禁止だとお前も知っているだろう？」
「大丈夫よ、彼女は天才なんだから」
「答えになってないぞ・・」
「うそうそ、ちゃんとした目的があるの。大丈夫だから信じてあげて、あたしに免じて」
「・・・しかしなぁ・・・」
「ほらほら、この話はおしまい！」
姉さんは離し終えたのか織斑先生の肩をポンッと押して離すと僕達に向き直る。
姉さんが向き直った時には既に志穂音は女子にその周りを囲まれた後だった。
「ねぇね、名前はなんていうの！」
「あぁ、えっと・・千葉志穂音・・」
「じゃあ、千葉ちゃんだね。千葉ちゃんはなに編入とかするの！？」
「い、いやそう言うことじゃなくて・・」
「じゃあ、どうしてここに？」
「それは・・いろいろ・・」
流石の志穂音も、圧倒的多数の女子に囲まれての質問攻めなぞ体験した事はないようで輪の外で眺めていた僕達に助けてと視線でメッセージを送るが・・。
「「「「・・・・ごめん無理」」」」
四人が四人そろって心の中で唱え首を振る。

いくら知り合いとはいっても、自分まで質問攻めにされる事を覚悟で飛び込んでいく勇気はない。
「そんなぁ～」と涙目になる志穂音だが、どうする事も出来ないのだ。
「やっぱり、珍しいのかな。同じ女子でもいきなり部外者が入ってくると」
「そりゃそうだろ。まぁ聞けば、あの娘結構色々あったらしいじゃねぇか」
「だから姉さんも連れてきたんだろうけどね」
確かに彼女には色々と聞きたい事があるのは事実だった。
恐らく姉さんもそして織斑先生にとってもそれは同じなのだろう。
だから、織斑先生はあえて大声で姉さんに詰め寄らなかったし、今じゃ渋々志穂音を受け入れている。
それはつまり、そういう事だった。
「まぁいい、お前らこんなところで無駄に集まるな馬鹿が。引率の教員と一緒にとっとと自分の部屋割を確認して荷物を置きに行け！」
パンパンと織斑先生が手を叩くと、志穂音を囲んでいた集団がスッと話を切り上げて各々クラスの教員と共に旅館へと入っていく。流石の統率力だった。
女子達が旅館へとはけて、駐車場には僕を含めた通常メンバーと志穂音そして織斑先生と姉さんが残される。
「・・・よくも見捨ててくれたじゃん・・」
ズイッと志穂音が僕達に詰め寄ってくる。
「あ、いや・・別に見捨てたわけじゃ・・・」
「そ、そうだぜ、なぁシャル？」
「う、うんそうだねセシリア・・」
「で、ですわねぇ・・」
「はぁ～ん・・そう来るそう来るんだね・・。もう良いよ分かった」
分かってくれた？
・・・にしては結構な形相で睨んじゃいるけど。

――――と。
一瞬背筋が冷たくなる。
なんだ――――。
この背筋を刃物で撫でられているかのような嫌な感覚は・・・。
・・・後ろ!?
僕はバッと振り返ってそして戦慄した。
「あ、あぁ・・せ、セシリー」
「・・うん？　どうしましたの？」
「ぼ、僕たちも旅館へ行かないかい？・・その・・・とばっちりを受ける前に!!」
「あぁッ、アル!?」
「ちょっとぉッ！　まだウチの話終わってないんだけど!?」
志穂音が吠えるが知ったこっちゃない。僕は旅館に来てまで死にたくない！
僕が見たのは・・・そうなんていうのかな。悪魔に取り付かれた人間って言うのきっとああいう顔になるんだよね。
「い～ち～か～ぁ・・・ちょ～っと聞きたい事がアルンダケドナァ・・・」
「・・え？　――――ってうおぁッ!?」
「そうだな、・・私も少し聞きたい事があるのだ・・・少し向こうでお話シヨウジャナイカ・・」
「ま、まて鈴、箒!お前は何か色々と勘違いというか妄想と言うかなんていうか分からんがソレをしちゃいないか!?」
一夏は青ざめた顔で二人の説得を試みるもこうなってはもう何をしても無駄。
シャルロットも既に自己判断で退却。完全に孤立無援の一夏だがまだ希望はある。
「ラウラ！　お前なら分かってくれるだろ！　こいつらになんとか言ってやってくれ!!」
「・・・・ほぅ・・この状況で私が言える事が・・アルトデモ・・

」
「ぎゃーー、お前もか・・・ってそうだ志穂音お前から説明してくれ！」
最後の頼みの綱志穂音に必死に助けを請う一夏だったが・・。
「・・・せ、説明も何も・・ウチに・・そのあ、あんな恥ずかしい事を言わせる気なの！？」
さっき見捨てた志穂音が助けてくれるわけがない。わざとらしい演技感丸出しだが今の三人にはそれで充分だった。
「へぇ・・どんなハズカシイコトヲシチャッタノカシラ・・」
「スゴクキニナルゾ」
「事と次第によっては・・・な？」
「あ・・あぁ・・」
合掌。

ロビーに入って、ふと気付く。
しおりの部屋割一覧に自分の名前が無いのだ。
一夏同様に。
はてさて。
まぁ・・・多分僕は一夏と同じ部屋だろうね、普通に考えて。
男同士だし。
と、不意に裾を引っ張ってくる誰か。
「ん？」
「やっほぉ～」
「・・・あぁどうも・・」
「ねぇねぇ、アル君とおりむ～の名前が無いけどどこなの部屋は～」
そう言えば、いっつもおんなじメンバーとだけ話をしていたから話す機会が無かったけど、異様に遅い移動速度の女子をクラス内で時

々みかける事があったな。・・なるほど彼女だったのか。
「あの部屋の前に一つ聞いてもいいかい？」
「う～ん？」
「名前はなんて言うの？」
「あぁ～そう言えば離すのは初めてだったねぇ～。私は布仏　本音って言うんだぁ～。で、そんな事よりも部屋はどこなの？」
そんな事って・・名前は結構重要・・・まぁいいや。
「確かに、私も気になりますわね。お部屋はどこなんですの？」
本音との会話に横にいたセシリーも参加してくる。
というか、よく見たら周囲の女子達が気がつかれないように注意しながらも聞き耳を立てている。
数が数だけに中々聞き耳っていう地味な行動だけど壮観だよ。
でも、悪いね。その期待には答えられない。
「それが僕も知らないんだよ。まぁ多分僕と一夏は同じ部屋になると思うんだけど・・。ほら男同士だし」
「ですが、聡也さんも男ですわよ？」
「そう言えば聡也はどうなったんだろうね？」
総也には失礼だがすっかり忘れてた。主に存在を。
まぁこれだけ大きな旅館だから三人部屋なんてざらだろうし・・。
そうかそこに聡也も入ってくるのかもね。
「ま、まぁとにかく部屋は先生にでも聞くさ。それじゃあまた後で」
僕は話を一旦切りセシリー達と分かれると、織斑先生のもとへ足を進める。
すると既にそこには、先客がいた。
「なぁ頼みますって！」
「いくらなんでもそれは出来ん、お前もしつこいな」
「しつこいのがウリなもんっすからね！」
「いい加減にしろ・・ったく」
ロッソが織斑先生に詰め寄っている・・。なんて命知らずな。
流石は代表候補生だ。・・・それは関係ないか。

「ロッソ、織斑先生！」
「ん？」
「おぉ、アルディ」
二人が同時に振り返る。
一方は不機嫌な顔を直そうともしない教員と、もう一方はさっきまでの真剣な表情から一転して気さくに笑うイタリアン。
「先生もロッソもどうしたんですか？」
「丁度いいところに来たな、聞いてくれよ。この先生頭固すぎだぜ」
「固すぎじゃない。お前がゆるいだけだろう！」
「だから・・何が？」
「部屋割だよ部屋割！」
ロッソはしおりを広げて自分のクラスの部屋割を僕に見せる。
そしてある部屋の枠内にロッソ・ミオネッティ／鳳　鈴音と書かれていた。
どうやらロッソは鈴と同じ部屋らしい。
・・・で、これが・・・何？
ピンと来ていない僕に、ロッソは声を荒げた。
「だからぁな、この部屋割。あたしは気にくわねぇんだって！」
「気に食わないって・・そんな理由で詰め寄ってたの！？」
つくづくロッソは命知らずだと思う。・・ロゼオちゃんと押さえなきゃ・・。
というよりもロッソと鈴ってそんなに仲悪かったっけ・・？
少なくとも喧嘩している所は見たことないけど。
「そんな理由って・・お前こっちは大問題なんだよ！」
「つまり、鈴とじゃ嫌だって事？」
「だぁッ、それも違ぇ！！」
「じゃあなんだって言うのさ！！」
会話不成立にいら立つ双方を、織斑先生は片目で呆れ気味に見てため息を吐くとロッソの変わりに答えた。
「サウスバード、コイツはな一条の名前がお前達同様に部屋割に載

っていないだろう？　その事で一条と相部屋にしてくれと頼みに来たんだ。・・・まぁもちろん却下だがな」
「だからどうしてっすかぁッ！？」
「当たり前だ、そもそもお前仮に一条と同じ部屋にしたらどうするつもりなんだ」
「・・・どうとは・・？」
ロッソは聞かれてキョトンとした顔で少し考え、そしてサラッと言った。
「色々と既成事実を作る・・・ですかね」
「「ばかやろう！！」」
思わず織斑先生と声が重なった。なんて事をサラッと言うんだ君は！！
「とにかくそんな魂胆だろうと思ったから却下なんだ馬鹿もの！この話は終わりだ。とっとと自分の部屋に行って海で溺れてこい！」
「お、溺れ！？」
「いいから行け！！」
「あ、は、はいっ！！」
今まできっと手加減していたんだろうなぁ・・。もの凄い剣幕でピシャリと言われあのロッソが逃げる様にその場を去っていく。
その後ろ姿を見て鼻を鳴らすと、今度は僕に目をやる。
「それで、お前は何の用だ？　オルコットと同じ部屋が良いとかお前もぬかすんじゃないだろうな？」
ピクッ！
どこかでロール髪の触角が動いた気がした。
にしても、どうしてセシリーの名前が？
「いえ、そう言うわけじゃなんですけど・・」
ショボーン・・・。
そしてｏｒｚになった気がした。
「・・・まぁそうだろうな。言ってみただけだ」
疑問符を頭に浮かべる僕に構わず織斑先生は続ける。

「お前が来た理由は分かっている。丁度いいから一条と織斑を呼んできてくれ。まとめて話すとしようか」
はぁ。まぁ、確かに個別に話をするより一気にまとめて話した方がそりゃ効率的だよね。
僕は丁度ロッソと一緒にいた聡也を連れ（まだ騒いでいたから目だっただけ）、そして外でボロ雑巾になって転がっていた一夏を引きずって再び織斑先生を訪れた。
織斑先生は一夏を見てため息を吐いて無言で肩に担ぐ。
・・え？
「この馬鹿は貰っておこう・・・。一夏の部屋に遊びに行きたい女子は多いはず。
「貰っておこう」この先生の言葉に大半の女子の肩がガクッと下がった。
まぁ、そうだろうね・・・。さて」
当然部屋の話には注目が集まるがその答えがさりげなくではあったが？織斑先生のお部屋？？ではしゃれにならない。死にに行くようなものだ。
「お前たちはローラに付いていけ同じ部屋だ」
「そういうこと～」
少し離れたところから笑顔でヒラヒラと手を振る。
そして傍らには志穂音の姿もあった。
まぁ、順当だね。一夏も織斑先生だったし。
・・・まぁ志穂音がいる事に若干の不安は残るけど。
それに聡也も一緒の部屋か。
まぁルームメイトが多いのは嫌じゃないし、むしろ人数が多ければ多いほどこう言うイベントというのは楽しいものだ。
「よろしくお願いしますね」
「うんうん・・ご丁寧にどうも。・・・あなたも何か言うことあるんじゃないの？」
「あ、そうだったね。日常の姉さんの体たらくを見せるのが甚だ不

安でッ！！」
「・・・余計な事は言わなくて良いの・・・分かった？」
だったら口で言ってよ・・。
殴る前にさ・・。
「じゃぁ、行きましょうか。時間ももったいないし・・ね」
「ローラさんの部屋なら・・・大丈夫かも・・」とどこからか声が聞こえたけど僕たちはあえてそれに構わず姉さんに付いて部屋へと向かった。

「さ、到着～」
姉さんがバンッとドアを開けて部屋に入り僕たちもそれに続く。
「流石、国立ね。旅館一つとっても豪華豪華・・」
「わぁ、海が見えるんですねここの部屋からは」
「おぉ、早速海に繰り出してく女子がいるねぇ」
志穂音がサラッと皮肉って聡也が感嘆して僕が見たまんまを述べる。
そこは和風の畳敷きでかなり広い部屋だ。さっき聡也が言った通り海のが見える東向きの部屋。
お風呂とトイレは別個になっていてそれもまた中々に広かった。
「さて、今日は終日自由時間だけど皆はどうするのかしら？」
姉さんが座敷机に座して僕達に尋ねた。
「僕は、海に出ようかなと思ってます。行かなかったら・・ロッソとロゼオに何言われるか分かりませんから・・」
「ふふ、ラブラブね」
「そんなんじゃないですけどね」
聡也は苦笑すると自分の鞄の中から、小さめの鞄を取り出して早速部屋を出ようとする。
そこでまだ座っていた僕に聡也は不思議そうな顔を向けた。
「あれ、アルディは行かないんですか？」

「あぁ、僕は・・・そのちょ、ちょっと休憩してから行くよ」
「そうですか・・分かりました。セシリア達にも伝えておきますね」
そう言い残して足早に部屋を後にする聡也。
僕はその背中を、さっきとは違いうつむいた不安げな顔で見送った。
そんな僕を見て、姉さんが複雑な表情で僕に声を駆ける。
「・・・アルディ・・」
「うん・・まだちょっとね・・」
「そう・・・」
そこまで話して、志穂音の存在に気がついた姉さんはチラッと志穂音を見やる。
ジッと見ていた志穂音だったが、持ってきた鞄からＰＣを取りだすとわざとらしく声を張り上げた。
「大丈夫だよ、ウチは何も聞かないし言わないし」
窓際に移動して志穂音はネット回線をつなげ始めた。
ルームメイトのありがたい心遣いに感謝しながら僕たちは会話を続ける。
「やっぱり、怖い？」
「まぁ・・ね」
海難事故で両親を目の前で亡くしたあのトラウマは何年経ってもそう簡単に消えるものじゃない。
けどこれでも回復した方なのだ。現にＩＳ学園は海にせり出したメガフロートの上に立つ言ってみれば海上学園で嫌でも海は目に入るが特にその時は何でもなかったしこんな気持ちにもならなかった。
初めなんてただの水だけでも怖かったぐらいなのだ。
「でも・・・そうは言ってられないよね・・やっぱりさ。せっかく来たわけだし」
「そうね・・出来ればあたしとしても、どんどん慣れて行ってもらいたいけど」
「だよね、うん。大丈夫だよ・・きっと」
僕はゆっくりと立ち上がると、鞄の中から自分の水着とタオルその

他諸々が入ったバッグを取りだした。
「・・・じゃあ行ってくるから」
「・・えぇ、あたしも志穂音ちゃんとちょっと話してからそっちへ行くから」
「分かったよ」
僕は出来る限り笑顔で姉さんに言って、部屋を出た・
ああは言ったが他の生徒達が心を弾ませながら海へと向かう中、楽しもう楽しもうと思えば思うたびに逆に僕の心はどんどん沈んでいった。

ポツーン。
砂浜に刺さるビーチパラソルの下で体育座り。
その前を色鮮やかな水着を身にまとった女子が踊る。
目の保養にはぴったりなのだが、嫌でも海が目に入る。
青く澄んだ美しい海。市街地からは離れているため透明度も素晴らしい。
波も穏やかで、風も心地いい。
絶好の海日和だと言うのに、気持ちだけが晴れなかった。
やっぱり、こうして目の前で見ると、どうしても一歩が踏み出せない。
このビーチパラソルの下にくるのだって少し戸惑ったぐらいだ。
・・・やっぱり駄目だ・・。
こんなんじゃ・・。残念だけど部屋に戻ろう・・。
そう思って海へ踵を返した時だった。
「あら、どこへ行かれますの?」
「え?」
セシリーとばったり・・。
セシリーはこないだの買い物の時に買った青色のパレオ付きのビキ

ニと着用していた。
普段制服の下に隠された部分があらわになっている分普段よりも色っぽい。
そう言えば向こうではモデルの仕事もしてるんだったね。
整った身体つきに思わず気恥しさから視線をそらすが、鼓動が早くなっているのは自分でも分かった。
「まだ海にも入られてない様ですけど・・どうかされました?」
「いや・・別に・・何でもないよ」
僕は足早にその場を去ろうとするがそれをセシリーが許さなかった。
「ならば、丁度良かったですわ。サンオイル・・縫ってくださいませんこと?」
「え?」
「・・・嫌でしたか?」
「あ、いや・・そうじゃないけど・・」
上手く断る理由がこんな時に限って出てこない僕の脳みそに渾身の右ストレートをぶち込んでやりたいと思いながら、僕は気付かれないように小さく息を吐くと首を縦に振った。
「では、お願いしますわ」

「えぇと・・背中だけでいいのかい?」
「そうですわね、お願いしますわ」
セシリーはブラを解いた状態でシートにうつぶせに寝転がる。
むにゅっと形を変えた胸がセクシーで目のやり場に困るが今回はそれでよかったのかもしれない。
なぜならばこの体勢ならば見ているのはセシリーの色っぽい背中と砂浜。少なくとも海を見なくて済む。
サンオイルを手に落とし少し体温で温めてからセシリーの背中に塗っていく。
「あ、やってるじゃない」
そこになぜか一夏に肩車された鈴がやってきた。

いや正確には一夏がやってきたから鈴が来た・・？
まぁどっちでもいいか。
「あら、鈴さんそれに一夏さんも・・・ってどうして肩車なぞ・・？」
「いや、勝手にこいつが乗ってきただけで深い意味はない・・」
「意味ならあるわよ　あんたの無駄に高い身長を行かせるチャンスじゃない！」
「俺の身長はそんなくだらない事にしか使えないのか！？」
「くだらないですって！？」
あぁ・・始まった。
まぁここら辺は海に来てもそんなに大差ないね。
僕は気にせずサンオイルをセシリーにまんべんなく塗布していく。
そして不意に顔を上げると・・・。
「・・・・」
「・・・・ッは！？」
ササッ
あ、隠れた。
僕と目のあったのであろうバスタオルモンスターがヤシの木の陰に隠れている。
そしてそれを見て苦笑いしているのは・・シャルロット？
・・・ってことはあれラウラか！？
多分僕と目があったと言うよりは一夏の存在が大きいのだろうけど、今はそんな事よりなんでラウラがこの真夏の太陽の下あんなぐるぐる巻きで、一人我慢比べをしているのだろうか？
僕は一夏の足を肘でコツくと視線でバスタオルモンスターを指した。
「・・・なんだ、ありゃ・・」
「多分一夏に用事があるんだろうけど・・・ね」
「・・・まぁなんとなくだが誰かは分かった・・」
「だろうね・・」
「よし、鈴とりあえず降りろ。ちょっと行ってくる・・」

いつもなら、自分以外の女子のところへ行こうとすると怒りだす鈴だが流石に鈴もあのバスタオルモンスターには若干引き気味だったようで、素直に一夏の上から降りてその後を付いていった。
全く・・・こんな暑いのに・・よくやるよ。
・・・そう言えば箒が見えないけど・・・それにロッソ達も・・。
まぁ、彼女たちにも色々とやる事があるのあろう。僕はそう思いこの考えをやめセシリーに尋ねる。
「えぇっと。こんな感じで良いかな?」
僕はセシリーに塗布し終えたサンオイルを返すと、セシリーは笑顔でそれに答える。
「えぇ、ありがとうございます」
セシリーはブラを結び直して僕の隣へ座り込む。
そしてしばらく無言が続き、セシリーから口を開いた。
「あの・・・遊びませんの?」
「うん・・僕は・・その・・ね」
「そうですか・・」
また流れる気まずい間。
どうしようかどうしようかと考えていた時不意に、誰かに手を引っ張られた。
「ねぇねぇ、アルディ君もさせっかく海に来たんだから遊ばなきゃ!」
「そうやって!　ウチらと海で遊ぼうや!」
それはクラスメートの女子達。
「えぇ、あ、ちょっと!?」
「なになに~セシリアと一緒がそんなに良かったか~」
「まぁセシリアには悪いけど、ちょう貸してもらうで~」
「あぁ!　な、何を勝手な事をしてますの!」
「だって、アルディ君のどこにもセシリアの名前なんて書いてないしなぁ~」
そう言ってどんどん僕を海の方へ引っ張る二人。

そして波打ち際で立ち止まると。
「「せーーのっ！！」」
「うわぁッ！？」
勢いよく海に向かって放り投げられる。
思いのほか強く放り投げられて波打ち際とはいえ膝の高さまで海につかるぐらいの所まで放り投げられて気がつけば、尻もちを吐く格好で僕は海に浸かっていた。

「あ――――――――」

海・・・・。
波・・・・・・。
「おーい、大丈夫かい～？」
「ちょっとやり過ぎたかなぁ？」
遠くであの二人が何か言っているが・・良く分からない。
「あぁ・・・」
漏れた言葉。それと同時に、あの時の事が鮮明に頭にフラッシュバックする。
荒れ狂う波と、傾く床・・・。
窓を突き破り、そして――――――。

僕の母さんと父さんが――――――

バシャバシャと、一斉に皆が周りに集まってくるのがぼやけた視線と霞む聴覚ながら分かる。
しかし僕はそれに構っていられない。
とんでもなく痛い頭痛に悶絶し、浅瀬を転げまわる。
「海は・・・・波もッ・・くぅうッ駄目だ、駄目なんだッ！！　また失う。僕はまたッ！！」
「アル大丈夫ですの！　しっかりしてください！」
「おい、アルディ！」
「どうした言うのだ！？」
皆が心配そうに見つめる中で、どうにか何でもないと手を上げようとするがそれすらも満足にできない。
身体を、心をそして全てを海という名の恐怖が食いつぶしていく。
「アルディッ！！！！」
そこに、ひと際大きな声が響く。
――――ね、姉さん？
「うぅ・・・ッくううぅッ！！」
「ちょっと、通して、お願い！」
水着では無かった姉さんは、服やストッキングが濡れるのも構わずに群がる生徒たちの合間を縫って僕のところまでやってくると勢いよく抱き上げて強めの口調で言った。
「アルディ！！　あたしを見なさい！」
「あぁ・・海が・・ッ」
「大丈夫だから、あたしだけを見なさい！！　ほら！」
「だい・・じょう・・ぶ？」
姉さんは半ば強引に僕の顔を手でつかみ自分の顔の方へ固定し、次第に言い聞かせるような優しい口調で僕をゆっくりと抱きしめた。
「そう・・・大丈夫だから・・あなたは何も失わない・・皆大丈夫・・ね」
「・・・大丈夫・・・失わ・・・な・・・い・・」
「そうよ、大丈夫だから・・」

姉さんが僕の頭を優しくポンポンと叩く。
その軽く走る衝撃を感じながら・・・

僕の意識は白い光に飲み込まれていった――――――――。

第３６話～動き出す歯車と臨海学校～（後書き）

ようやっと始められました臨海学校編。
ここで一夏君はパワーウプするわけですが、皆さん大事な何か忘れていませんか？
そう束さんが出てきてないんですよまだ。

何でここは原作と大きく異なる展開になっちゃいます。
・・・まぁここまで色々崩してきた僕が言えた義理ではありませんけどねｗ

それでは次は３７ですかね、そこでお会いしましょう！
さよならッ！

第37話～アルディの真実と姉の嘘～

ローラは濡れた靴や服のまま、気を失ったアルディを部屋の布団に寝かせる。
ローラが振り返ると、そこにはあのビーチにいたいつものメンバーである一夏・鈴・セシリア・ラウラ・シャルロットと千冬、部屋の奥にはＰＣを叩く志穂音とそしてさっきアルディを放り投げた二人の女子がいた。全員水着の上に各々身体が冷房などで冷えないように薄手の上着などを羽織っていた。
全員心配そうな顔で黙りこくっているが特にその中でもアルディがこうなった直接的原因を作ってしまった二人の女子は顔を下に伏せたままかなり落ち込んでいる様子だった。
その二人にローラは優しく言う。
「ま、こう言う事もあるわ。だから気にしないで・・・ね？」
「あの・・」
「ウチ達・・」
「いいから、いいから。アルディは海はあんまり得意じゃないの。だからちょっと驚いちゃっただけよ。すぐに目を覚ますから。・・さ、行きなさい。臨海学校なんだから楽しまないと！」
「「・・・・はい・・」」
二人は絞り出すように返事をすると一礼してから部屋を後にした。
それを残りのメンバーが見送ってから、ローラはふぅと息を吐いた。
「・・・実際はそんなに単純な事では無いのだろう？」
「えぇ、まぁ・・そうね」
「そんな！　ローラさん、アルは・・ッ」
「落ち着きなさいよ、セシリア騒いでもどうにもなんないじゃん！」
興奮して詰め寄ろうとしたセシリアを鈴が小柄な体で制する。
鈴の言った事はもっともで正論すぎてセシリアも反論できずに納得のいかない表情で黙りこんだ。

「・・あのローラさん。アルディの身に何が起こったんですか？」
「何が・・まぁ多分昔の事を色々と思いだしちゃったんでしょうね」
「昔？」
ラウラの問いに答えたローラの発言に箸が首をかしげる。
この場にいる誰もが首をかしげている中一夏とシャルロットだけは何か心当たりのあるような顔でローラを見ていた。
「それって・・・海難事故の・・」
「え？」
そしてポツリと一夏が言った。まさかローラもその事を知っているとは思わず驚きの声を上げた。
「僕達、前ちょっとその話をアルディから聞いたんです・・」
「あの子が・・話したの・・？」
「えぇ、触りの部分だけでしたけれど・・」
ローラはアルディが自らその事を話した事に驚きつつも、うあはり触りだけかとも思った。
アルディにとって・・まぁ自分にとってもだがあの海での出来事は非常に強いトラウマとなって今でも心の中で生き続けている。
いくらカウンセリングや様々な治療でトラウマが和らいだと言ったって、それは完全に取り除く事は難しい。その結果がこれである。
ローラはそう・・と短く言って口を閉ざす。
息苦しい静けさが支配する中、千冬が見かねて口をはさんだ。
「・・ローラ・・出来ればその話。話してくれないか。多分このままではここにいる誰もが納得しない」
千冬の発言の後また少し沈黙が流れてローラは何度かゆっくりと頷くと仕方が無いという表情で大きくため息を吐いた。
「まぁ、あたしもここまでやらかして、話さないで済むとは思ってないわよ」
ローラは言い、ひとまずこの大所帯を畳に座らせてゆっくりと話し始めた。
「話し始める前に・・ねぇ、シャルロットちゃん・・一夏君。どこ

まで聞いたのかしら？」
シャルロットと一夏は二人顔を見合わせながら記憶を探っていく。
そしておぼろげながらあの時の話を思い出した。
「確か・・・僕達が聞いたのは船旅で大波にのまれて・・・・」
「アルディの両親が波にさらわれて・・・って言う所ぐらいまでですね」
「触りって言ってもそこそこ話していたのね・・」
そこでふと同じように頷いていたセシリアが目に止まる。
あら？　セシリアちゃんも・・この事・・。
それを疑問に思ったのはローラだけでは無かったらしく、隣に座っていた鈴がセシリアに尋ねた。
「あんた知ってたの？」
「えぇ、まぁ私も昔会った時に少し聞いた程度でしたけれど・・」
「・・そう言えばアルディとセシリアは接点があったのだったな」
「その時にもちょっと話してたのね・・」
ローラは三人がある程度知っていると言う子を踏まえたうえで考えをまとめて話し始めた。

「そう・・あの日は本当に穏やかな日だった・・・」

まだアルディが十歳にも満たなかった頃の話。ようやくＩＳ関係の仕事に目処が立った私は休暇を合わせて父さんと母さんそしてアルディと一緒に旅行に出かけた。
ロサンゼルス発の六日間のカリフォルニア半島クルーズ。？サンラ

イン・オブ・マリン?全長三三〇メートル。満載総排水量約十万トンを誇る世界最大級の豪華客船に幼かったアルディははしゃぎ、胸躍らせていた。
「こんな大きな船に乗るんだね！」
「あぁ、そうだよ。これから六日間この船で家族そろって楽しむんだ」
「ローラもうまく休みが取れて本当に良かったわ」
「まぁね、一週間分の仕事まとめるのは大変だったけど」
皆笑顔で、これからの楽しい未来に思いをはせていた。
この先に待っているのが絶望であることなどその時は知る由も無かった。

出港時刻が来て船は港を離れ大海原を行く。
あたしは仕事上いつも弟の面倒を両親に任せきりだったから子言う時ぐらいゆっくりしてもらうためにアルディと一緒にこの大きな客船の中を色々見て回っていた。
そして、甲板に出たあたし達は手すりに寄りかかって気持ちのいい潮風に髪をなびかせる。
「海って本当に綺麗だね、姉さん！　青くて・・どこまでも広くて。それにこの船もオレンジと赤のラインがきれいだし・・」
「そうね、あたしもこんなにゆっくり海を見たの久しぶりかも。あ、ちなみにこの船ラインはの名前のサンラインに由来してオレンジと赤で太陽を現しているんだって」
「へぇ～そうなんだ♪　ねぇ、今度はあっちに行ってみようよ！」
「あぁ、はいはい、走っちゃだめよ」
「分かってるって」
と油断させておいて・・
「うぇ、姉さんが走るの！？」
「嘘にご用心～」
「あぁもう！」

本当に・・・楽しかった。
でもそれが・・・あんな事になるなんて。

それは本当に唐突にやってきた。
夕食がすんで家族で船尾ロビーで椅子に座っていた時、いきなり船が横に大きく揺れた。
「ちょ、ちょっと・・大丈夫なんでしょうね！？」「まぁ船旅だから、こう言う事もあるさなぁ母さん」
「えぇ・・まぁ、心配じゃないと言えば嘘になるけれどねぇ」
その時船内アナウンスが流れる。
「現在本船は、急発達した低気圧の中を進んでおります。そのためしばらく船体が大きく揺れる事がありますので、ご注意くださいませ。尚この低気圧を抜けるのに・・・」
一瞬不安になったが、正確なデータをもとに運航しているはずだからとかぶりを振ってその不安を振り払う。
それからも何分か大きな上下運動を繰り返しながら波を超えて行く船。
やけに長いなと思っていたその時、窓の外を見ていたアルディが大きな声を上げた。
「あッ！！」
「え？」
その声に振り返った時には既にアルディの目の前にこの船よりも大きな波が迫っていた。
どうやら波を乗り越えた直後にその先にあった大きな波が真横から船を襲ったらしい。
「アルディ！！」
「任せて！」
父さんの声に短く答えるのよりも早くあたしの身体は動いていた。
巨大な水の壁が、ロビーのガラスをいとも簡単に突き破る。

「あ、あぁ・・！」
「っく！！」
あたしはアルディを飛び込みながら素早く抱き上げると胸に抱え込む。
ロビー内には割れた窓ガラスがら更に大量の海水が流れ込み船のバランスを崩していった。
大きく傾く船体。流れ込む海水はあっという間に高かったロビーの天井を低くしていく。
つまりそう浸水である。
既に船外に波にさらわれた乗客の姿が複数あった。
「アルディ、ローラ！」
そこへ父さんと母さんが漂流物につかまりながらやってくる。
「良かった無事で！」
「アルディ、大丈夫？」
「お母さん・・うん」
「よかっ――――」
とアルディを母さんに手渡そうとした時、さっきと同程度の波が再び船を襲う。もうすでに三〇〇メートルを超える豪華客船の船尾部分は完全に水につかっている。
そしてそこへの大きな波の襲来は、完全に船の天井を吹き飛ばして――――――。

「父さん、母さん！！！」
「うあぁぁぁぁっ！！」
「アルディ・・アルディを！！」
さっきまで目の前にいたはずの二人が声を残して消える。
それは余りにも一瞬の出来事だった。
「え、ねぇ、お母さんは、お父さんは！？」
アルディの不安そうな声。辺りを見渡すも見えない二人。
どこに！

どこへ行ったの!?
「アルデ・・ロー・・ラ!」
っは!
声のした方を振り返るとそこには、今にも折れそうな柱にしがみつく両親の姿。
「父さん、今――――「来るんじゃない!」――――――え・・」
今行くからという声を父さんの厳しい声が遮る。
そしてあたしはその時気がついた。
父さんの顔が、そして母さんの顔が・・・こんなにも命を落とす瀬戸際の状況でも穏やかに笑っていた事に。
「父さん・・・母さん・・」
「お父さん・・・お母さん・・」
二人はそれは穏やかに笑うと、今の状況に全くに使わない明るい声で言った。
「アルディ、泣くな・・大丈夫だから・・・な」
「ローラ・・・あなたもなんて顔してるの」
それはまるで言い聞かせるように優しく・・・
「アメリカの男は強くたくましくだぞ!」
「あなたも、アメリカを背負ってるんだからそんな顔はしないの」
そして全てを悟ったように穏やかで
「・・・強くなれアルディ!」
「あなたも・・・ね」
こんな時に言う表現ではないが・・・力強かった。

「お母さん!　お父さんッ!!」
アルディが短い手を必死に伸ばすも絶対に届かない。
見えているのに・・・助けられない。
あの時のアルディはどんな事を思っていたのだろうか。
二人の声が聞こえた直後――――――。

三度押し寄せた波に二人の姿は完全に消えた――――――。

嵐が過ぎアメリカ海軍の救助艇に救出されるまであたしは必死に耐えていた。
アルディは気を失っていたが、自分は絶対に失ってはならない。
この子を・・・この子だけは絶対に。
あたしが助けられた時、アルディとあたしは全身の凍傷で正直もう少し発見が遅れたら命まで危なかったらしい。
でも・・・何とか一命は取り留めて今ここにこうして生きている。
「・・・・・これが、事故の真相」
話し終えた場の空気はそれはそれは重たかった。
誰も何も話そうとしない。
いや話せなかった。
何を切り出せばいいのかあの千冬でさえ分からなかったのだ。
そこへ、志穂音がゆっくりとその輪に加わってＰＣの画面を皆に見せた。
普段あっけらかんとしている志穂音もどう切り出せばいいのか分からなかったが、それでもおずおずと口を開いた。
「・・・・これがその当時の事故のニュース・・」

一同はその画面に注目する。そのニュースの見出しには？Ａｌｏｔ　ｏｆ　Ｃａｌｉｆｏｒｎｉａ　ｏｆｆｉｎｇ　？Ｓｕｎｌｉｎｅ　ｏｆ　Ｍａｌｉｎ？　ｓｕｂｍｅｒｇｅｎｃｅ　ｄｅａｄ　ｐｅｒｓｏｎ　ｍｉｓｓｉｎｇ　ｐｅｏｐｌｅ？（カリフォルニア沖で？サンライン　オブ　マリン号？沈没。死者行方不明者多数）とあった。

「・・向こうでもニュースになっていたんだな」

「って、待ってください！　・・この年・・ッ！？　この日付・・ッ」

急にそのニュースの年月日を見てセシリアが目を丸くする。

「何？　セシリアこの日付がどうかしたの？」

「えぇ、この丁度三年後ですわ・・私がアルにであったのは・・」

「あぁ、そう言えばそのぐらいだったわね・・」

「・・・・三年か・・・ふむ」

互いに頷き合う三人に千冬が少し考えながら口をはさんだ。

「これだけの事故の後・・・よくもまぁたった三年でお前はともかくコイツは立ち直れたな？」

「言うほど簡単じゃなかったわよ・・」

ローラは表情を更に曇らせて答えた。

セシリアが母親に連れられてサクラメントを訪れたのはセシリアの言うとおり事故から三年後の春先だったと思う。あの時はあたしもアルディもなんとか立ち直れてはいたが自分自身にもそしてアルディの幼心には深すぎるこの海難事故はあたし達を事故後しばらくずっと苦しめ続けた。

眠るたびによみがえるあの情景。両親のあの最期の笑顔。

自然と涙があふれて止まらない日もあった。

何度も姉弟ともどもカウンセリングや病院に通ったし精神安定剤まで服用したほどだ。

だがまだローラはよかった。

そうあたしには？仕事？という逃げ道があったからだ。

仕事に熱中していれば、集中していれば少なくともその間はそう言った事故の事を考えずに済む。
しかしアルディは違う。
当時も学校には通っていたが、あんな事故の後だったし何よりアルディ自身が学校へ行ける状態じゃなかった。
あんなに明るく笑っていたあの子が――――――。
「全く笑わなくなったわ・・。分かる？　結局あの事故があった年・・・一度も笑わなかったのよ？」
「・・・ちょっと・・想像できないですね」
シャルロットがボソリとつぶやくように言う。
多分それはこの場にいる誰もがそうだろう。
誰もそんなアルディを想像できない。
「もう生きる気力さえもない、まさに抜け殻の様なあの子をみるのはつらかった・・」
日がなずっと壁に力なく光のない目で寄りかかって座っているあの子をどうにかして立ち直らせたい。
前を向かせてあげたい。
けどどうすればいいかが分からなかった。
あの時ほど、自分の力が何の役にも立たないものだと思い知った事はなかった。
あの当時アメリカの代表確実とまで噂されていた自分。
だが結局一番身近な、大切な両親に励まされた挙句助けられず、そして実の弟一人満足に立ち直らせる事が出来ない。
無力だった。
ローラはそれを思い出して自虐的に笑う。笑うことしかできないではないか。
本当に馬鹿らしい・・本当に大層な？力？よね。
フフッと力なく笑い顔を上げると、これまで一言も声を発せず考え込むラウラの姿が目に留まる。
話した事に嘘はないし、疑問に思う事があったかと思いローラは聞

いた。
「ラウラちゃん・・どうかした?」
「・・・・いえ、ただ少し・・・先ほどの説明でどうしても分からない事がありまして・・」
「分からない事、そんなのあったか?」
「あぁ、一夏。もう一度ローラさんの話を思い出してみてくれないか?」
「話を?」
「そうだ。丁度ローラさんとアルディが甲板に出て海を眺めている行(くだり)を」
ラウラに言われ一夏が頭をひねる。一夏だけでは無いその話を聞いていた他の面々も次々に考え始めた。
そしてしばらくして鈴が「あッ!」と声を上げた。
「・・・ふむ、鈴は分かったようだな」
「えぇ、分かったわ・・そうおかしい・・」
「おい、鈴なんだよ、何がおかしいっていうんだ?」
「一夏、さっきの話の中でアルディはローラさんになんて言った?」
「なんて・・・って・・えぇ~と確か・・『海って本当に綺麗だね、姉さん! 青くて・・どこまでも広くて。それにこの船もオレンジと赤のラインがきれいだし・・』・・・だったか?」
鈴は一夏の答えに頷くとラウラにも目配せで答え合わせをする。
そして鈴が言った個所はラウラの?分からない事?という問いの答えだった。
しかしいまだに一夏はピンと来ていない。そこへシャルロットが助け船を出した。
「どこがおかしいんだよ・・だから・・」
「いい、アルディって生まれつきの色盲なんだよね? だったらどうしてこの時アルディは色が分かってるの?」
「う~ん・・・いやでも・・生まれつきだから慣れて見分けられるようになっただけじゃないのか?」

「ううん、だってアルディ僕のリヴァイヴ見て、『赤色？』って聞いてきたんだよ？　でもこの時はちゃんと色を見分けてるじゃない」
「確かに・・・そうだな」
「・・・というわけで悩んでいたのですが」
なるほど・・・ラウラちゃん・・流石鋭いわね。
出来ればこの話は、個人的にあまりしたくなかったのだが・・。
「・・・えぇ、そうよ。あの子の色盲は・・生まれつきなんかじゃないわ」
「つまり・・・事故の後遺症・・・と？」
ラウラが一番あり得そうな無難な回答を言うがローラは首を振った。
そして少し言葉を詰まらせながら手で顔を覆い静かに言った。
「これはあたしがあの子に吐いている中でも最大級の嘘・・・」
「・・・嘘？」
誰かがぽつりとつぶやいたが、構わずローラは勢いのままに言う。
ここで止めてしまえばきっともう言えなくなると思ったからだ。
「あの子の色を奪ったのは・・・あたしなの・・・」
「「えぇッ！？」」
「厳密に言えば、あたしが医師に頼んだの・・・・」
「そんな、どうしてですの・・」
「・・・あの子を立ち直らせるため・・・こんな方法しか思いつかなかった・・」
・・・いや、それは言い訳だと・・今でもローラは思う。
生きる気力を失い日に日に身も心もボロボロになっていく弟を見ていられなかった。直視できなかったから・・・。
立ち直らせてあげたいと言う建前を作って目をそむけただけ。
「海で両親を亡くしたあの子は、とにかく青い色に凄く敏感に反応したわ。だから家からも出れなくてずっと部屋の窓も閉めっぱなし。あたしは・・まずあの子を家から連れだしたかった。あんな塞ぎきった空間にずっといたんじゃ・・・。だからそのために・・・色を奪ったの・・」

「しかし・・・急に世界が白黒になったらいくらアルディでも・・」
「そのあたりも・・ね・・」
「・・・インプリンティングか」
千冬の言葉に頷くローラ。専門用語の出現に一夏はそのあたりに詳しそうなラウラに小声で尋ねた。
「なぁ・・インプリンティングってなんだ?」
「一種の記憶操作・・の様なものだな。本来はひよ子などが初め見た物を親だと思う事などの特定の行動を指して使う言葉なのだが、この場合は要するに?記憶の擦りこみ?という事だろう。つまりアルディは人の手によって色を失ったのにも関わらず、同時に行われたであろう記憶の擦りこみによって?自分は生まれつき色盲だった?と考えていたから、そこに違和感は生じないと言うわけだ」
「・・・なるほどな・・けどアルディは知らないし・・・・それって」
「・・・言うな。それはローラさんが一番分かっている事だ」
ラウラに言われ一夏は口を紡ぎローラを一瞥した。
その視線を受け取り一夏が何を言いたいかは分かる。
けれど・・・どうしようもなかった。
そこにアルディの意思はない。
ローラが勝手にやった事と言えばそれまでだし、自己満足だと言う事も分かっている。
しかし結果論を言ってしまえば、ローラの取った行動は正しかったと言える。
色という概念を失ったアルディは、少しずつではあるが外に出て行くようになった。
外に出て行けば、それからは思っていたよりも早く、アルディは明るくなっていきそして――――。
笑うようになった。
やった事に後悔はないが責められれば謝っても済む問題では無い。
でもそれでも、ローラはアルディが、たった一人の血のつながった

家族が立ち直ってくれた事が純粋に嬉しかった。だからもう二度とこの子をこんな目に合わせるかと思い、心に誓っていた。誓ったはずだったのに・・。

「それからしばらくしてあの子にＩＳの適性がある事がわかったの。けどその時はあたしもいろいろあって騒ぎたてられなかったんだけど。・・・でも、研究者間で専用機を作ってデータ採取をしようって風潮が高まって。そこであたしが・・・多分・・・償いの気持ちでも顔をのぞかせちゃったのかしらね。？ストライク・バーディー？のバイザーに“ダイレクト・カラー・アジャスタメント？を組み込んで疑似的にだけどあの子に色を与えてしまった・・。・・・今思えばそれもアルディがこうなった遠因かもね」

ローラは横たわるアルディを見て肩を落としながらため息を吐く。

それからは誰もまた口を開かなくなった。

ただ部屋にかかっている時計の音だけが、時間の流れをその場の人間に伝えているのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ～あ～あ～・・・まぁねぇ～」

真っ白い空間。

そこに横たわるはアルディ。そしてその周りを、ブロンドの髪を後ろで束ねる青いパーカーにオレンジのラインの走ったジーパンを着てサングラスをかけたいつぞやの女の子がニコニコしながらゆっくりと歩く。

「ふ～ん・・・にはは～・・・こんな形で巡ってくるとはねぇ～」

女の子はアルディの身体をペチペチと叩いたり突っついたりして笑

う。

――――――なんだろう――――――――。

うっすらと見えたその女の子。

「・・・む～ん・・・二回目がこんな形とはねぇ～。まぁ良いけどボクとしてはネ」

――――――二回目――――・・・そうだ。僕はこの声を聞いた事があるんだ。

考えようとしたが、急激な眠気と怠惰感が僕を襲いまともに考える事はおろか言葉を発する事も出来ない。女の子はそのまま僕の顔辺りに手をやって独り言をつぶやき続けた。

「まぁ、何にせよ・・・これでようやく・・」

――――――ようやく・・・何？――――

「ボクの存在を彼女に示せちゃうね・・・」

――――――彼女？　一体何の事を言ってるんだ・・・？――――――

だが僕はそれを聞く事が出来ない。

しかし、ぼんやりとした視界でたった一つだけ、しかと見る事が出来たものがあった。

それは・・・。

「・・・今度こそ・・・認めさせちゃうよ・・・」

という言葉と同時に、サングラスを直しながら意味深な笑みを浮かべる女の子の表情だった。

――――何が・・どうな・・・って・・・――――

僕はそれをよく理解する間もなく深い眠りに落ちて行った。

少なくともそれは、以前感じたような暖かさはなく冷たく・・そして孤独なものだったと思う。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

・・・結局、サウスバードは目を覚まさなかったな。
千冬はそんな事を考えながら旅館の高台にある岩場へと足を向けた。
そこは丁度展望台のようになっていて、水平線の向こうに沈む夕日を正面から望む事が出来る。
正直サウスバードにあんな過去があったとは伝え聞いていたが当事者から聞くのとでは印象が全く違った。流石の千冬も、少々気持ちが沈み気味になってしまい気晴らしという言い方は正しいかどうか分からないがこの展望台へ行こうと思い立ったのだった。
徐々に見えてくる夕日。だがそこには思いもよらぬ先客がいた。
「・・・・篠ノ之・・」
「・・あ、織斑先生・・」
そこにいたのは箒だった。箒は展望台にある小さなベンチに風呂はもう済ましたのか浴衣姿で座っていた。そして手には携帯電話を持っている。
その携帯電話を見て千冬は箒が誰に連絡を取ろうとしていたのか直感的に理解した。
・・・束だな・・。
稀代の大天才でありＩＳを生み出した張本人。突然消えたと思ったらひょっこり現れる神出鬼没な箒の実姉。天真爛漫だがその明るさが時に本気で恐ろしい・・怖いと思う時がある。
そんな人物。
・・・まぁ、あえて触れるまい・・か。
「篠ノ之・・・夕日でも見に来たか？」
「・・・はい・・・」
箒が束の事で声を荒げた事は千冬もその場にいたからよく知っている。
だからこそあえて触れず、たわいもない会話を切りだす。
「その・・織斑先生も・・夕日を？」

「あぁ・・サウスバードが倒れてな・・それでちょっとあった」
「そうですか・・」
この時点で千冬には当然だが箒がただ夕日を見に来ただけでは無いことぐらい分かっていた。
だがこちらからはそれを言わないのは、本当に聞きたいのならこちらから言わずとも箒自ら切りだすだろうと言う考えがあるからだった。
二人で静かに沈みゆく夕陽を見送る。
流れる沈黙は気まずくも無くだからといって気持ちの良いものでもない不思議なものだった。
すると沈黙を破り箒が静かに千冬に聞いた。
「・・・あの・・・織斑先生・・」
「・・・なんだ?」
「私は・・・どうすればいいのでしょうか・・・」
「・・・どうすれば・・か」
「私は・・いつもいつもただ見守ってばかりだった・・。あの場に駆けつけたい、皆と共に戦いたいとずっと今日まで思い続けてきました」
千冬は適当なところで相槌を入れながら箒の話しに耳を傾ける。
「ですが・・私にはそのための?力?が無い・・・でも・・・私も・・皆と共に駆けたい・・あの背中を少しでも守ってみたいのですッ!」
背中・・それが何を指すのかなど言わずもがな一夏である。
それが分かるからこそ千冬は箒に対してどうしても言いたい事があった。
「・・・・篠ノ之・・これが答えになるかは分からないが、お前に・・言っておく」
「・・え?」
千冬は箒の目をしっかりと見据えていつも通りの口調で言った。
「どんな選択をしようとも、私はそれを責めも褒めもしない。だが・

・・篠ノ之・・後悔だけはするな。その選択をしたのなら、最後までその選択を信じきれ、もちろん・・・正しい方向にな」

吐何人が正しい選択が出来るわけではない。そんな事が出来ていたら今頃この世の辞書には失敗という言葉は消え失せている。失敗するからそこから学べる。だがその失敗を後悔してはすべてがマイナスだ。

仮に失敗しても成功してもその選択を信じきる事が出来なければ成長はない。もちろん容易い事ではないが。

「・・・・・・」

「・・・・・私が言えるのはそれだけ――――――」

と、言って踵を返した瞬間だった・・・・。

バガァァァァァァァァァァァンッ!!!!!!!!!

衝撃波を伴ったすさまじい爆発と共に旅館の一角が吹き飛ぶ。

「なんだッ!?」

まさかこんなところで襲撃か!?

考えられなくはない。特にあの襲撃者共は学園に直接攻撃を仕掛けてきている。

学園に比べれば守りが無いにも等しいこの旅館なら襲うにはもってこいの場所だ。

しかし、その考えは爆煙の中から現れた一機のＩＳによって覆された。

鮮やかな青色にオレンジ色の縁どりのカラーリングに加えて特徴的な二つのスラスター。

「ば、馬鹿な・・?ストライク・バーディ?・・・だと・・・!?」

驚愕する二人の目の前で?射撃の妖精?が空へ舞う。

それは軽やかで、それでいて力強く。

そして何より――――――。

恐ろしかった。

第３７話～アルディの真実と姉の嘘～（後書き）

凄い雨です。
どうもこんばんは、しるくです。
さてて、臨海学校でのお楽しみは後に取っておくタイプのシナリオになってしまいましたが、それはもう仕様です。
どうしても一度書きたい内容があってそれをここらへんで挟ませていただきます（汗

それではこの臨海学校編も長々と行こうと思ってますのでよろしくお願いします（爆

では３８話で、お会いしましょう！
さよならッ！

第３８話～悲しき月下の死闘～

千冬と箒は、共に旅館の一角に設けられたオペレーションルームへ駆けこむ。
そこには既に、真耶が学園スタッフに指示を送っていた。
「あ、織斑先生ッ・・・と篠ノ之さん・・？」
「展望台でお会いしたもので」
「今はそれはどうでもいい。状況はどうなっている？」
千冬が会話に割って入り厳しい口調で真耶に問う。
聞かれた真耶は少し慌てながら空中投影ディスプレイを千冬に手渡しながら説明した。
「あぁぁ、えっと・・爆発後？ストライクバーディ？は浮上。現在は海上にて停止中」
「ＩＳ部隊の展開は・・？」
「現在ステルスモードにて待機中です」
「・・よし・・・それで何か通信はあったか？」
「いえ、何も」
千冬は手渡された情報に素早く目を通しながら、同時に旅館の被害状況も把握していく。
幸いにも爆発した時刻が丁度夕飯時という事もあり周囲の部屋に生徒はおらず負傷者はゼロ。
旅館へのダメージはまぁそれなりのものだが修復できない規模では無い。
それらを確認すると千冬は？ストライク・バーディ？のデータに目を移す。
？ストライク・バーディ？の現状に変化は見られない・・。暴走かとも思ったがパラメーターもさほど飛びぬけておかしいと言うわけではないし・・・では・・一体なぜ・・。
サウスバードがあんな事をするとは考えられんし。

千冬が考え込んでいると、そこへ勢いよく飛び込んできた人物がいた。
「千冬ッ！」
「ローラか・・それと千葉・・」
「どうも・・」
「お、おい！」
志穂音はペコッと頭を下げるとそのまま金太郎飴をかじりながら、開いていたポートに自分のノートＰＣを繋げキーをタイピングしていく。
そして千冬を見て片手を上げる。
「あ、お構いなく」
本来なら叱責するところだが今は構っていられない。
千冬はひとまず志穂音を置いておいて、ローラに向き直った。
「ローラ、お前この状況がどういう状況か分かるか？」
「まぁ、まったく分からなくはないけど・・今は説明している時間はないわ」
「どういう事だ？」
ローラはいつになく険しい表情で千冬を見て短く息を吐いた。
そして何度か頭を掻いたり視線を泳がせたりしながら考えをまとめて「要するに・・」と口を開こうとしたまさにその時。真耶の声がオペレーティングルームに響いた。
「通信！？　織斑先生、？ストライク・バーディー？から通常回線に割り込む形で通信がッ」
「・・繋げ」
「はいッ！」
真耶が通信担当に指示を出すと、千冬達の前にモニターが開きバイザーをつけたアルディが表示される。
しかし、容姿はアルディだったがモニター越しの人物から感じ取れる雰囲気はアルディとは全く異なるものだった。
千冬は後ろからそのモニターを睨みつけるローラと共にそのアルデ

ィに似て非なる者に対して静かに問いかけた。

「・・・お前は誰だ？」

◇◆◇◆◇◆

た気がしたがどうでもいい。
「邪魔なんだよね～・・・・・ボクが用事あるのは・・・そこのパツキン姉ちゃんなんだからさ」
千冬がゆっくりとモニターの前から退く。
そして、扉に手をかけながらこちらを睨むローラの姿を?彼女?が捉え?彼女?の口角がつり上がる。
『変わるわ・・』
『・・ローラ・・』
『説明は後でするから』
向こうでの短い会話を交わしローラがモニター前に立つ。
?彼女?は不敵に笑いローラはその笑みを睨む。
「やだなぁ・・そんなに睨まないでよね～」
『・・・アルディは?』
「ん～～～寝てる」
『・・・そう・・』
「嘘は言ってないからね」
『・・・・・・』
ローラは少し考え込む。恐らくこの状況をなんとかこれ以上、大事にしまいと考えているのだろう。
・・・はぁ・・考えることなんて無いのにね。
?彼女?はわざとらしく大きなため息を吐くとローラを待たず一方的に自分の要求を述べはじめた。
「こんなこと話してても時間の無駄だね。この通信をした理由だけちゃっちゃと伝えてあげるよ。
・・・ローラ・サウスバード・・・ボクは君に用がある・・」
?彼女?の笑みが不敵から冷酷に変わる。
その表情はこれから?彼女?がローラに対して何を何をするつもりなのかを最もよく表現していた。
しかし、用があると言われていくら弟がらみでものこのこと出て行くほどローラも馬鹿では無い。

『・・そう言われて、あたしがホイホイと出て行くとでも？』
ここへきても、まだ尚穏便に済ませようと交渉を試みるローラ。
う～ん・・・。これは・・ちょっと思い知らせてあげる必要がある
ねん・・。
ボクがどれほど本気なのかって言うのをね。
彼女は適当に闇に潜む教師陣が乗るＩＳを一機選ぶ。
まぁ・・コイツでいっか。
別に判断基準などない。本当に文字通り適当に選んだ。
そして不思議な顔でこちらをみるローラを尻目に、？彼女？はおも
むろに？ウェポンズラック？を起動。
長方形の大きなスラスター兼？武器庫？が前へとせり出しスラスタ
ーサポートがスライドしてからガシャンと音を立てて高圧荷電粒子
砲？ヘヴィハンマー？がその大きな砲口をのぞかせる。
『あなた・・何を！？』
「へっへ～・・・・ドカーンッ」
ズダァァァンッ！！
瞬間、マズルフラッシュと共に旅館の前のビーチが爆せる。
『なッ！？』
モニターの外から千冬の驚く声が聞こえる。
そして爆煙が晴れゆきそこには、？ヘヴィ・ハンマー？の直撃を受
け行動不能に陥った？打鉄？の姿があった。防御力に定評のある？
打鉄？だがその自慢の防御力は一撃で粉砕されてしまった。
？ヘヴィハンマー？の灼熱の閃光によって所々の装甲が焼けただれ、
圧倒的な火力は？打鉄？のグレーメタリックの装甲板のほぼ半数を
粉砕していた。
そして機体がその状態ならば、シールドバリアを貫通した攻撃は搭
乗者をも襲い学園の教師でもある？打鉄？の操縦者はなびけば美し
く艶やかであろう黒髪を血で赤く染めていた。
『あなたッ・・！！』
「言ったよね、君に用があるって・・。すぐに出てこないのなら・・

・残りもやったっていーんだよ？」
『ッ！？』
ロックさえもしない目視での完全な不意打ち。それも構えてから打つまでが異様なまでに早かった。
きっと吹き飛ばされた操縦者は、自分に向かって撃たれた事さえもよくわからぬまま吹き飛ばされたかもしれない。
彼女の言うとおり、放っておけば確実に学園側が展開させたＩＳ全てが誰かの言葉を借りるわけではないが？鉄クズ？になってしまう。
自分が出て行けばあの操縦者はあんな怪我を負わずに済んだかもしれない。
完全に自分の決断の遅れが招いた事態にローラは顔をゆがませながら憎々しげにつぶやいた。
『・・・分かったわ・・行けばいいのね・・。その代わり、もうそこにいるＩＳに手は出さないで・・。良いわね？』
「にはは、分かればいーんだよぉ」
『ッく！！』
ローラはモニターの向こうでギリッと奥歯をかみしめ満足げに笑う？彼女？に踵を返し入り口付近に座っていたタンクトップの少女に何かを話して部屋を後にした。
・・・ついにね・・ようやくだよ・・。
？ウェポンスクエア？を戻しながら？彼女？は再び不敵に笑っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ローラはゆっくりとビーチを歩く。
見上げる先には、月をバックに自分を見下ろす？彼女？がいた。
「・・・あたしを脅すとはね」

「結果来てくれたからね、別に方法は何でもよかったんだよ。君さえ来てくれればね」
ローラはチラッと担架で運ばれていく操縦者を見やる。
・・・あたしが、もっと早く決断していたらこんなことには・・・。
ローラは心の中でその女性に謝罪を述べると再び視線を?彼女?に戻した。
「・・・さて、時間も惜しいから・・・」
「そうね・・・あたしも早くあなたを倒して弟を返してほしいし・・・」
ローラは右手の人差指にはめた指輪に口づけをし、その直後光がローラを包み込む。
そしてローラを?ストライク・バーディ?と同様の色をした装甲が包み込んだ。
「「始めましょうかッ!」」
ローラはアサルトライフルとサブマシンガンを召喚し、撃ちまくりながら一直線に?彼女?へと突き進む。
「う~う~・・・直撃警報はつれ~い♪」
?彼女?は場に似つかわしくない声で宣言するとゴゴンっという音と共に素早く?ヘヴィハンマー?と?ファイアーフライ?を構え計四門の高火力砲撃を放つ。
「甘い!」
閃光に包まれた、ローラの姿が消え声は真後ろから聞こえた。
?フェイク・シルエット?によって敵の目を欺くのはローラの常とう手段である。
ローラは?スピードリーダー?を使用して瞬時に武装を切り替える。
左手のサブマシンガンはそのままに小ぶりの試作型荷電粒子砲?フォックス　Ｅ－６６Ｕ?へと持ちかえ至近距離から一発をお見舞いした。いくら小型とはいってもその威力は?ストライク・ミラージュ?の中では一発あたりの威力は一番高い。
いくら重装甲の?ストライク・バーディ?も至近距離からの荷電粒

子砲にはひるむはず。そうローラは考えていた。
だが、それは大きな誤算であった。
「嘘でしょ！？」
「ざ～んねん」
吹き飛ぶどころか、まるで何か強固なもので固定されているかのごとく？ストライク・バーディ？はひるみもしなければ吹き飛びもしなかった。
？彼女？は片方の？ファイアーフライ？を待機状態に戻すとローラが構えた？フォックス　Ｅ－６６Ｕ？を掴み思い切り海へと投げ捨てる。
「おまけだよん」
ミサイルポッドが開き？トーネード？がその名のごとく嵐のように落下するローラへと向かう。
かなりの勢いで背面から海面に叩きつけられたすぐ後に上からサンドイッチのようにミサイルの雨が降り注ぐ。
背面へのダメージで肺へ息を上手く送れずに苦しみながらもシールドでなんとか急所へのダメージは避けていたローラだったが、それでもみるみる装甲は削られシールドエネルギーもあっという間にイエローゾーンに突入してしまった。
「ぐぅうッ！！」
「にはは・・・海へ・・沈めぇ！」
？ウェポンスクエア？が展開されるのを見てローラはとっさに海へと潜るがトドメと言わんばかりに撃たれた？ヘヴィハンマー？の一撃の方が若干早くローラを焼く。
それでもローラへの背面への衝撃は海の水深がいくばか和らげてくれた。
まぁ、そうは言っても正面は早くもズタボロなのだが。
ザバァァンッ！！

ローラは?彼女?の位置を確認しながら少し離れた所へ離水した。
向こうも、ファーストアクションを?圧勝?して満足げに武器を構える。
ローラは肩で息をしながら手早く損傷状況を把握して、パパッと頭の中でさまざまな数値を弾きだす。
シールドエネルギーは既にイエローゾーンの半ば、武装は全て使えるがここまで装甲表面に全体的な傷が付いてしまうと、?ステルス・ミラージュ?は使用できるかわからない。
にしても・・?フォックス?を至近距離でぶっ放したのにびくともしないとは思わなかった。
そしてその後の反撃も、わざわざ荷電粒子砲を待機状態に戻して海へ投げ捨てて・・。
全てがローラの想定外の攻撃だった。
?ストライク・バーディ?は重装甲、重火砲の鈍重ＩＳである。
基本的に近接戦闘には向かず近づかれれば攻撃の手は無い。
だからローラは近づいた。そしてその結果がこれだ。
確かにストライク・バーディは鈍重ＩＳであるがひとたび攻勢に転じればこれほどまでに恐ろしい物は無い。
何せ体中に火砲を搭載しているようなものだし、あの時とっさに潜らなければ荷電粒子砲の直撃でゲームセットだった。
基本的に実弾兵器は当然だがエネルギー系の武器も海等の水が構築する元素同士の結合を弱め威力を低減させる。
ほんと海様々ね・・。
だがそれで助かっただけ。
状況は何一つ変わらない。
結局のところローラが当てた有効打は恐らく良くて?フォックス?の一撃だけだ。
けど・・あんなに・・。
ローラの頭に一つの疑問が生まれる。
確かに重装甲のＩＳである?ストライク・バーディ?だがやはりど

う考えても先ほどの一撃でびくともしないと言うのはちょっと考えにくかった。
そして同時にとある可能性が浮上する。
まさか・・・・。いやでも・・。
ローラはその可能性をかぶりを振って否定した。
そんな事はあり得ないし、今の立場ならばそんなことあってもらっては困る。
そんなありもしない可能性よりも今はどう戦うかだ。
あぁ・・もうッ・・
ローラは右腕に装備された一つの武装を見ながらごちった。
近づけばパワーで押し切られ近づかなくても、圧倒的火力が後に待つ・・。
だが逆を言えばその圧倒的火力は距離が無ければ使いづらいと言う事でもある。
・・・・あんまり得意じゃないけれど・・・。
ガシャンッ!
・・・そうも言ってられないわね。
折り畳まれていた刃が、一八〇度回転し刃の回転部がロックユニットで固定される。
「近接でやるかない・・・か」
ローラは息を整えて、再び飛ぶ。・・・弟を取り戻すために。

?彼女?はブレードを構え迫るローラを笑みと?ファイアーフライ?で迎え撃つ。
「また性懲りもなく正面から・・・・じゃないね!!」

?彼女?はいきなり機体を反転させ?ファイアーフライ?を前に突き出す。
その行動とローラが真後ろから?彼女?に切り込んだのは程同時だった。
ガギィィィィンッ!!
「っつぅ!!」
「同じ手は何度も何度も通用しないよ!!」
砲身でそのブレードを弾くともう片方の?ファイアーフライ?が火を噴く。
「その程度でッ!!」
ローラは素早いスラスター操作でそれを回避する。
だがその一撃の威力はすさまじく避けたと思った攻撃でもローラの機体のスカート部を?かすめただけ?でもぎ取っていく。
そしてそれは同時に特殊偏光装甲?ステルス・ミラージュ?の機能が完全には機能していない事を暗に示している。
本来この装甲が完璧に機能していれば、いくら威力の高い一撃でも砲撃は確実に前自分が居た場所へと飛ぶはずだ。そこに残像が残るからである。しかし先ほどの攻撃は打つ瞬間?彼女?が砲身を微調整出来た。
「厳しいわねッ」
「ボクは余裕だけどね」
もう一度追撃の閃光を放たんとする?ファイアーフライ?。
ローラはそれを宙返りしながら蹴り飛ばし回転ざまに片方を切り伏せた。
「おぉっと!?」
「撃たせない!!!」
続けてローラは左腕に召喚した、サブマシンガンをそのまま?ファイアーフライ?の砲身の中に突っ込んだ。
「な!!」
躊躇なく引かれたトリガー。砲身内で暴れた鉛の弾丸は内側から?

ファイアーフライ?を爆散させる。
夜の海に大きな火球がはじけた。
「うあぅッ!!」
「あぁぁぁッ!!」
両者の悲鳴がこだまする。
?彼女?は爆散した?ファイアーフライ?に、ローラは爆散に一番近いところにあった左腕の激痛に。
ローラは爆風に飛ばされなんとかスラスターで体勢を立て直しながら爆発をみる。
負傷した左腕はいまだに爆発の直撃を受けた左腕は上手く動かない。
ただでさえボロボロだった装甲は更に吹き飛び、シールドバリアを貫通するほどの爆風はローラの左腕から鮮血をまき散らし、左側は青色の装甲が所々赤くなっていた。
だがこれで手持ちの武装を殺ぐことはできた。?ストライク・バーディ?の中で最も取り回しのいい武装を潰せた事は大きい。
煙がだんだんと晴れていき次第に敵のＩＳが目視で確認できるようになった。
「め、滅茶苦茶するなぁ～」
「ッ!?　あの爆発でも・・・耐えるのね・・ッ」
苦々しくつぶやき、改めてその異常なまでの防御力には驚かされる。
確かに無傷では無い。ローラ以上に至近距離というよりも手元で爆発した?ファイアーフライ?はローラ同様に?ストライク・バーディ?の左側腕部装甲板の一部を吹き飛ばしていた。
しかし、同じ吹き飛ぶでもその程度は明らかに軽い。
こっちはファーストアクションそして先ほどの捨て身でほぼ中破と言ってもいいレベル、だが相手は小破・・いや小破にも入るか分からないほどの軽微な傷。
このままでは弟を助けるどころか落とされて終わり。
自分が勝ってもどうなるかは分からないが負けたらそれこそ弟は・・
アルディは帰ってこない。

こんな・・・事で・・・・ッ
弟までも失うのか・・・？
嫌だ・・そんな事・・断じて認められないッ！
認められるものかッ！！
「あああああああああぁぁぁぁぁぁっッ！！！！！」
その咆哮は自分を鼓舞するためかそれとも威圧か。
どちらにせよ、ローラは三度？ランディング・スパイク？を構えて？彼女？へ突っ込んでいく。
肉眼では消えたかのように見えるその突撃。
？彼女？が？ヘヴィハンマー？でローラを狙うが小刻みにスラスターを操作し機体を左右に振り、不完全ながら？ステルスミラージュ？は？ストライク・ミラージュ？の残像を残していく。
「厄介だねっと！」
機動を読み切れずローラの背後へと流れて行く閃光を見て？彼女？は？ヘヴィハンマー？での狙撃を諦め
変わりに？トーネード？で弾膜を張る。
「そんなもので、あたしは止められないわ！！」
今さら被弾の一つや二つ増えたところで、対して変わらない。
ローラは強引に弾膜の間に機体をねじ込んで更に加速する。
「えぇい、イグニッションブーストか！！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
すれ違う瞬間ローラは刃を？ストライク・バーディ？の？ウェポンスクエア？の継ぎ目にねじ込む。
「何を！」
「装甲の継ぎ目はいくらあなたでも弱いでしょ！？」
「ぬなッ！？」
通常なら狙って出来るものではないが、今回は運動エネルギーがローラに味方した。
そのまま勢いで、ローラは？ヘヴィハンマー？の展開用のヒンジごと分厚い装甲板を？ランディングスパイク？ではぎとりそこへまだ

動かすたびに骨がきしみ満足に物もつかめない左腕で無理やりスナイパーライフルを呼び出し右手で銃身を支えながら装甲が吹き飛びあらわになった?武器庫?へと弾丸という火を撃ちこんだ。
直後さっきとは比べ物にならないほどの爆発が辺りを包む。
?ストライク・バーディ?は堅牢な装甲に守られてはいるがそれが表側からの攻撃に限られる。
アルディが、セシリアと共に襲撃者を返り討ちにした時も、?ストライク・バーディ?は内側からの衝撃でCを上回るダメージを負った。外からの衝撃には強いが中からの衝撃には弱い。
それが一見完全な要塞ともいえるこの機体の弱点でもあった。
だがこの爆風に巻かれながらもローラはもう片方の?ウェポンスクエア?にしがみつく。
「これで、決まり」
「このッ!!」
現在敵に残された武装は左側の?ウェポンスクエア?しかない。
それを展開しなければ攻撃出来ないがそれをすればしがみついたローラによって破壊されてしまうだろう。
「あぁ、もうしぶといなぁッ!　いい加減・・・ボクを認めて、そして沈めぇぇッ!!!」
?ウェポンスクエア?を自分の腕の届くところまで動かすとファーストアクション同様にローラの足を掴んで海へと放り投げる。
そして距離が離れたのを確認して残った?ヘヴィハンマー?を起動して――――――。
「ようやく終わる・・これで君はボクを認めて――――――――って!?」
「そうねこれで・・終わりね!!」
ローラの姿が海からかき消え、声が左肩の上から聞こえる。
?フェイクシルエット?を起動したローラが驚愕の?彼女?を見て笑い、そして大きく右手を振り上げた。
「たぁぁぁぁぁぁぁぁりゃあッ!!!」

バギャアァァァァァァンッ！！！

？ランディング・スパイク？が？ウェポンスクエア？を貫き、そこへスナイパーライフルのマガジン全弾が撃ち込まれる。

「そ、そんなッ！！」

爆発の瞬間ローラはスラスターに鞭打ってその場を離れた。

この爆発は一部が吹き飛ぶと言った生半可な物では無かった。

まさに？ストライクバーディ？の大爆発。

巻き込まれればローラの今の？ストライク・ミラージュ？では同じく爆散だ。

ＩＳには致命領域対応がある。

アルディの身体はそれがしっかりと守ってくれる。

なんにせよこれで・・・・――――――――っ！！

ローラは気配を感じ取り、素早く横へ跳ぶ。

その直後、その場所を白く太い光線が襲っていた。

「馬鹿な！」

まだ動けたと言うのか！？

「まだだ・・・まだッ・・終わりじゃないぞぉぉッ！！！！」

武装は全て壊したはず。

なのに何を撃ったとッ。

みるとその手には先ほど切り裂いた荷電粒子砲が握られていた。

「っく、浅かったッ！？」

「ボクは・・ボクは認めないッ！！　君がボクを認めない事を認めないッ！！」

ここまでやっても止まらないとは・・。

？ウェポンスクエア？は完全に吹き飛び補助スラスターしか残っていない背部。

そして腕部はなんとか原形をとどめていたが、顔を覆っていたバイザーは吹き飛んでいてこの世の全てに反抗するかの様なギラギラと

した瞳がローラを射抜く。
「・・・あの目は・・」
そこでローラは気がついた。
アルディの目の色が右側だけ違う。
左目はアルディの蒼い色をした目だったが右目は黄金色の瞳。
アルディはオッドアイでは無いので、これはおかしい。
・・・まさか・・、まだ?彼女?は全てを・・。
だがたとえそうであっても、もうこの決着をつけるには?ああ?するしかない。
ローラは?ランディング・スパイク?を身体の前へ構え動かない左手で申し訳程度に沿えた。
エネルギーは底をつく寸前。向こうはどうか知らないが、こちらは最後の攻撃になるだろう。
ローラは深呼吸をして息を整える。
「・・・ごめんなさい・・・アルディ」
そう呟きローラはスラスターを全開にして?ストライク・バーディ?へと飛んだ。
もう機動もくそも無い特攻。
向こうも落とそうと、砲身の短くなった?ファイアー・フライ?を撃ちまくる。
何発か貰い残りの装甲をはぎ取っていくが構わない。
「あたしの弟は・・・ッ!!」
ローラは直前で一旦下へターンして直撃を回避するとそこからアルディの身体の右側に刃を突きたてた。
「返してもらうわッ!!!」
「――――――かはぁッ!」
シールドエネルギーが零だったが、残っていても紙レベルの脆弱さではこの刃は止められない。
?ランディング・スパイク?は易々とシールドバリアを突破して――――。

――――――――――アルディの身体を貫いた――――――――――

ローラの腕に肉を切り裂く鈍い感覚が走りそして滴る赤く生温かい命の源がローラを濡らす。

「っく・・・ぁ・・・ぅぅッ・・」

「はぁ、っ・・はぁ・・・ッ・・・ボ、ク・・は・・ッ」

最後の力を振り絞り?彼女?はローラの肩を掴んでローラを睨む。

「あたしの・・・勝ち・・ね・・・」

「・・・うぁ・・・っくぅ・・」

気を失うと同時にその手はローラの肩からずれ落ちた。

こうするしかなかった。

やりきれない思いがあふれてくる。

他に選択肢など無かった。
またも自分は、こんな方法でしか弟を救えなかった。

ローラはアルディを救援に来た学園の教師陣に任せてフラフラと宙を漂う。

「本当に・・・ごめんなさい・・・」
ローラはポツリとつぶやく。
それはアルディに対してか、それとも自分か。
それすらもよくわからない。

月下の死闘を終え称賛も歓喜もそして素直に喜べもしない勝利を得

たローラは、顔を伏せて旅館へと帰投する。
いつの間にかあふれて頬を伝う涙を隠すようにローラの顔が上を向く事は無かった。

◇◆◇◆◇◆

「でも・・倒れられないんだよ・・。アルディのお姉さんだから・・ローラさんは・・」
「それに・・・ローラさんは自らの手で弟を刺さねばならなかった。傷は・・・外見以上に深いだろうな・・・」
「・・・でしょうね」
実際弟を結果的に守ったのかもしれないが、ラウラの言った通りローラはアルディを刺した。
ローラが今回やった事が、たとえ弟のためであってもその内容は一八〇度異なる。
弟を助ける行為が弟を傷つけた。
仕方が無かったと正当化するのも難しく、また正当化出来ても納得はできない。
ローラの気持ちはきっと自分達が思う以上につらいものなのだろう。
アルディはついさっき、救急車に乗せられて近くの病院に搬送されていった。
正直その場面をセシリアが目撃しなくて良かったと一夏は思う。
恐らくあんな姿のアルディを見たらセシリアは卒倒してしまいかねない。
何が起こったのかさえ分からないし、どうしてこうなったかもわからない。
ただ、ローラが命がけでアルディを刺して?助けた?という事実だけがそこにはあった。
ローラは一夏達とすれ違った後に駆けつけた救急隊によってストレッチャーに載せられていた。
するとそれを見ていた一夏達に向かってローラが手招きをする。
「なんですか?」
一夏達が駆け寄るとローラは、人差し指をクイクイッと動かして指輪を取るようにジェスチャーする。
一夏が指輪をはずすとさっきよりもさらに消え入りそうな声で言った。

「それ、志穂音ちゃんに渡しておいて・・」
「志穂音にですか？」
「渡せば・・わかるから・・ね・・」
「わかりました」
短い会話を交わして救急車のドアが閉まりサイレンが響く。
一夏は走り去る救急車を見送りながら、二人の無事を静かに祈り続けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そんな一夏達を遠巻きに見つめる影があった。
――――――なぜ私はあの時、何も言えなかったのだ――――。
それはローラが出て行く時に一番近くにいて何かしら力になれたかもしれない箒の姿だった。
あの時箒は自分の力のなさと場の空気にも少々圧倒されて口を挟む事が出来なかった。
私に力さえあれば・・・。共に行くと言えたかもしれない。
そう力があれば、ローラさんやアルディだってもっと他の方法で守れたかもしれないのに――――。
箒は、携帯電話をゆっくりと開き、アドレス帳を表示する。
もう・・たくさんだ・・ッ。こんな思いは――――。

そして一人の人物を選んで通話ボタンを押す。
画面に表示されたその名前は――――――――――。

篠ノ之束であった――――――――――――――――。

第３８話～悲しき月下の死闘～（後書き）

書いてみたかったのは、ストライク・バーディとミラージュの対決でした。

この話見てるだけじゃなんのこっちゃですが、そこら辺は気長にお待ちくださいねぇ。

にしても・・・・。

主人公の一人がひん死の重傷ってどうよ？

聡也達も次回でてきますのでまたよろしくお願いします。

ではでは３９話でお会いしましょう

さよならッ！

第３９話～空から舞い降りるニンジン～

どんなに声を上げようとも…誰にも気づいて貰えない気持ちが分かるかな？
…分からないよね、多分。
そんなの…ボクにしか分からない。
ボクはただ気付いて認めてほしかっただけ。

…昔からずっとそれだけなのにね。
でも今回も…駄目だったみたいだけど。
にしても今回のはこれまでで一番酷いなぁ。
いや、これまでって言うか実力行使したのはこれが初めてなんだけれど。

いつもはアレだからね。叫んでただけだから。
そう、叫んでただけ。
返事が返ってこない事は薄々分かっていたんだけどね。

…彼は…まだ寝てるっぽいからネ。
身体は動きそうにないけど…もう少し借りる事にしようかな。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アルディとローラの運ばれた病院は距離的な事もあってか同じ所だ

った。
旅館から十分程走った所にある大きな救急病院だ。

ただアルディの方は怪我が怪我なだけにすぐに集中治療室（ICU）へ、
ローラも外傷は酷かったが大きな怪我は頭部を二～三針縫ったのと
後は左腕の骨折だけ。
体中に包帯を巻いてはいるが立って歩けないほど重症では無かった。

そして今目の前にはＩＣＵでの治療を終え、個室のベッドに横たわ
る弟の姿があった。
医師達の懸命の治療によって一命は取り留めたが意識はまだ戻らな
い。
だがローラは、正直すぐに意識が戻らない事に少しだけホッとして
いた。

――――なんて声をかければいいのかしらね――――

かける言葉が見つからない。

ひょっとしたらアルディは自分の身に何が起こったのかさえ知らな
いかもしれないのだ。

そんな弟に、自分は何と言ってやればいい？
自分で刺し貫いておいて、今さら「大丈夫？」や「よかった…気が
付いて」といった様な
耳触りのいい言葉などかけられるはずも無かった。

他にもっといい方法は無かったのかと、こう言う時に限って後から
そんな事が頭に浮かぶ自分に心底呆れてしまう。

今回の事は、旅館といえど学園の管轄内で起きたという事と、
あくまで？暴走ＩＳの停止のために取られた止むを得ない行為？と
して法治国家ならば殺人罪で逮捕・起訴されようと文句は言えない
事をしたにもかかわらず罰せられる事は無い。

いっそ誰か裁いてくれたらどれだけ楽だろうか。

それが間違いだったと一言、言ってくれさえすればこんなに
悩まずに間違いだったのだとその意見に身を委ねられる。

本国にはまだ連絡は取っていないが、ＩＳの稼働状況は逐一監視さ
れているから
いずれ向こうから関係者が事情ぐらいは聴きにやってくるだろう。
彼らなら、それは間違いだったと言ってくれるだろうか。

はぁ……どうも駄目ね。

いまだ覚めぬ弟の前で、ローラは自問自答を繰り返していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「こんなもんかな」
二機の戦闘が終了し、キーを打つ音だけが響くオペレーションルー
ム。
その静まり返った中志穂音はケロッとした顔で言うとパタンとＰＣ
を閉じて立ち上がる。

部屋の戸に手をかけた時、志穂音は千冬に呼び止められた。

「…待て」
「……何ですかね？」
「千葉…お前今まで何をしていたんだ？　そこで」
「言う必要、ありますか？」

千冬の目が鋭くなる。
同じくして真耶の顔からサーッと血の気が引くのが分かった。
なんて命知らずな返答をするんだと、その場にいた誰もが思った事だろう。
「…私は、お前を正直ってあまり信頼はしていない」
「ウチもされようとなんて思ってませんから……では」
志穂音は千冬の鋭い視線にも臆することなく一方的に会話を切り上げて部屋を後にした。

さてこれで後は…。
志穂音はその足でそのまま一夏達がまだ居るであろうビーチへと向かう。
いまだ学園関係者が多く事後処理に負われて走りまわっているその間を小柄な志穂音はすいすいと抜けて行く。

元々モニターであらかたの位置は確認していたが、それでなくても女性ばかりの中で
男性の一夏はやはり目立っておりすぐに発見できた。

「あら、志穂音さん？」

「ども」
志穂音はセシリアにかるく会釈すると、目も合わせずいきなり一夏に手を突きだした。
「はい」
「ん？　あ、ひょっとしてコレか？」
一夏は握りしめていた拳をほどいて、ローラの指輪を手渡した。
それを受け取ると志穂音は、短く？ありがと？と言って踵を返す。
だがそのあまりにそっけない態度にラウラが噛みついた。
「お前、この状況で他に聞く事は無いのか？」
「…無いね、じゃ」
「ま、待て！」
ラウラが志穂音の肩をガッと掴み語気を荒めた。
「お前は心配では無いのか！？　ローラさんもアルディもッ」
「ッ、ちょ、離してってッ　大体そんなの今考えたってどうにもなんないじゃんか！」
「ちょっと、そんな言い方って無いよ！」
「あ～もう、うっさいなぁ。今はそれどころじゃないんだって！」
「アルディ達の身を案じること以上に優先せねばならん事とは何なのだ？」
「そうだよ志穂音、何考えてるの！？　ちょっとセシリアも何か言ってよ！」
「……」
「セシリア？」

シャルロットがセシリアを覗き込む。
セシリアは他のメンバーとは違い何かを考えているようで顎に手を添えていた。
その様子に一夏も不思議そうに声をかける。

「どうかしたのか？」
「…ラウラさん、志穂音さんを行かせてあげてくださいな」
「うん…あたしもセシリアと同意見」
「な、なんだと！？」

てっきり同じように怒るものだと思っていたラウラがセシリアだけではなく鈴にまで同じ事を言われて思わず素っ頓狂な声を上げる。
それと同時にラウラの手から力が抜けて志穂音がラウラから逃れた。
鼻を鳴らして、足早に旅館へと引き上げて行く志穂音。

それでもまだ追いすがろうとするラウラを、今度はセシリアがその肩を掴んで制止した。

「良いのか！？　あいつのあんな態度を許してしまって」
「きっと志穂音さんには志穂音さんの考えがあるんですわ」
「どうして分かるのさ？」

「だってあの子、一言もローラさんもアルディの名前も口にしなかったから」
「え？」

「一夏さんに指輪を求めた時、志穂音さん目も合わせませんでしたしね」

「だからそれはあの子が心配してないってことなんじゃ無いの？」
合点のいかないシャルロットが首をかしげラウラが説明に納得できずに鼻を鳴らす。
鈴は昔から人の心の動きに敏感である。
それを知っている一夏は口を挟む前に鈴の説明に耳を傾ける事にした。

「きっと、口に出すと……気になっちゃうから…」
「え？」
「志穂音さんだって心配していないはずありませんわよ。
きっと心配なはずです。変電所の時だって初対面ながら結構アルに懐いていましたし」
「だからこそ、あの子はあの子なりに今やるべきことやろうって自分に言い聞かせて、
押し殺してるんだと思う……セシリアみたいにね」
「わ、私はッ……まぁ、そうですけれど」

セシリアが苦しそうに下を向く。
一夏はセシリアがアルディの怪我を見なくて良かったと思っているが逆にセシリアはなぜ自分は
そこへ立ち会って声をかけられなかったのかと非常に悔やんでいた。
だから志穂音がちょっとだけ羨ましかった。
今この瞬間何かしなければならない事がある彼女が。
恐らくローラに何か指示を受けての事だろう。
そしてそれは必ずアルディへと繋がっている。
不謹慎とは思う。
だが、アルディのために何かが出来る彼女が本当に羨ましかった。

◇◆◇◆◇◆

『……十中八九間違いないと思うけど』
「だよな」
『私だったら、寝込みを襲ってる…』
「お前…何気に結構な事言うんだな……」

自分の人格の側面を見た気がして自分自身で自分に若干?引く?という器用な事をしながらロッソは片目でチラチラと志穂音をみる。
志穂音はこちらに構わず作業を続けていた。
見ると指輪にＰＣ側から伸びた非常に小さいコネクタを取り付けキーを目にもとまらぬ早さでタイピングしていく。

そして、少し間が開くとゴソゴソとポーチから金太郎飴を取り出してパキンとかじっていた。

ってか、あいつ。この部屋来てからずっとＰＣとにらめっこだけど何やってんだ?
ロッソはそれを確かめるべく、立ち上がるが一歩が出ない。
やっぱ、気まじぃ。

う〜む、なんて声をかけたらいいものか。

まぁ、普通に気さくな感じでいいのかな。
「よぉ、何やってんだ?」
……軽すぎるな。

じゃあもっとこう、深刻な感じで。
「……なぁ…何やってるんだ……?」
これはこれで、ちと重めぇ。
ってか、この聞き方はうぜぇ。

ならこれを織り交ぜればいいのか！？
よっしゃ、それじゃ気さく重い感じで……って。
「なぁ、気さく重いってなんだ？」
『……そんな言葉は多分本国（イタリア）にも無いと思う』
「そして、今の君の行動自体がウチにとったらうぜぇよ…」
「なんだとッ！？」

サラッと入った志穂音の突っ込みに、いつもの癖でバッと反応してしまったロッソ。
さぞ、面倒くさそうな顔で言ったのだろうと思ったが意外にも志穂音の顔は笑っていた。
それに少し驚きつつも、ロッソは意を決して志穂音に聞いた。

「なぁ、お前……やっぱ根に持ってるよな？」
「根に？　……あぁ、変電所の事？」
「あぁ」
「ウチあんまり根に持つタイプじゃないし、別に気にしてないかな？」
「ほんとか！？」
「うん、全然。ウチよく竹を割ったような性格だって言われるんだ。まぁ自分じゃ、竹を割ったって言うよりはぶっ壊したって言う方が好きなんだけどね。
あ、爆発と言えば。最近海外の地下で爆発事故があったんだって。ほんと治安が悪くて怖いよね？」

「……ばっちし、根に持ってんじゃねぇかッ…」

そこでようやくロッソは気がついた。志穂音は笑っていたんじゃないと。

笑みは笑みでも志穂音の笑みは、ニコニコではなくニヤニヤだったと言う事に。

なにはともあれ話すきっかけにはなったようでロッソは、志穂音の後ろへと移動する。
画面には色々とよく分からない、数字の羅列やら設計図のようなものが引かれていた。

「なぁ、なんだこれ？」
「見て分かんないかな？　今、情報欠損部分の修復とシステム復旧。それと、
異なるベースデータを持つ二機のＩＳが互いにどこまで相互依存出来るのかを考えてたの――っと、
また駄目か。む～、もう少し依存割合を減らさなきゃだめなのかなぁ…」

「……は？」
「……君、本当に代表候補生？」
「う、うるせぇ、こう言う事はしばらくやってねぇんだよッ」

まだ人格が二つに分かれる前は、当然ロッソは自分自身で志穂音の言ったようなＩＳの理論やシステムなどの事を学んでいし、その成績も中々に優秀だった。
しかし、実際二重人格の時間の方が長い今のロッソはそういう理論的な事は全部ロゼオが受け持っていた。
今でこそ？人格の同時制御（ハーモニクス）？によって自由に人格を切り替えられるが、それが出来る前はＩＳ担当がロッソ、それ以外がロゼオと分かれていたためすっかり理論の知識など空の彼方へと素っ飛んでしま

っていた。

『…ちょっと変わって。多分私なら分かるから…』

「む、むむぅ…」

渋々といった表情だったが確かにロッソではこれが何なのか分からない。

手っ取り早いのはロゼオに変わって貰ってその説明を聞く事だろう。

「しかたねぇか…」

ロッソはつぶやくと瞳を閉じる、そして自分の意識がゆっくりと沈んでいくのを感じながら次に目を開けた時には世界が感覚でとらえられるようになっていた。

これはロッソの人格が身体の深層意識下に取りこまれた事を意味し、ロッソとロゼオの？ハーモニクス？が成功した事を表している。

ちなみにだが、ロッソもロゼオも互いに感覚を共有し合っている。

そのためどちらか片方だけという事が基本できない。

見たくない事も聞きたくない話も、聞かなければならないし見なければならないのだ。

まぁそれは置いておいて。

ロゼオがゆっくりと瞳を開けると目の前には志穂音が居た。

ロゼオはもう一度画面に目を凝らして…

これは――――――と驚いた。

「……こんなこと…出来るの？」

「理論上は可能なはずだよ。失った情報を新しい情報で補ってそれでも修復できない所を別のＩＳで補う。？プログラムリアクト？。確かどこかのサイトでこの論文が発表されてたのを……ね」

基本ＩＳの修理という物は、それ専用に作られたパーツでしか行う

事が出来ない。
コアがそのパーツを同じものだと認識できないからである。
だからパッケージ装備やオートクチュールといった物が
使用可能なのはそれらの装備をＩＳのコアが同一機体の物であると
認識できるからである。

だが今回のそれは、少し異なる。
まず大きく違うのは、欠損した部分を補うのが全く異なるＩＳであ
ると言う点である。

「本来、コアブロックの異なるＩＳはいくらそれが兄弟機として作
られたとしても流用は不可能だよね？
だけどたった一つだけ、裏技的な方法が存在するんだよ。
まぁ…裏技だから？　褒められた方法じゃないってことは確かだけ
どね」

志穂音は言うと、携帯端末を操作して空中へ図解入りの説明をディ
スプレイする。

「修理ってのは新しく取り換えたパーツごとにコアブロックへ登録
していくんだけど、
この段階で普通シリアルコードの違うパーツは弾かれちゃうんだ」

志穂音は、でも…と続けてタッチパネルを操作する。
すると説明のアニメーションが動きそこへ再び説明を行う。

「この修理の時にウチが欠損した情報を補うでしょ？
それと同時にまとめて取り換えたパーツ類のデータも詰め込んじゃ
うと……
ほらね、コアブロックが弾いちゃうパーツでもこの方法なら弾かれ

ずに使えちゃうってわけ。おわかり？」

「……えぇと……つまり、コアブロックにわざと誤認識させるって事……？」

「ま、言っちゃえばね。この方法なら専用の予備パーツが無くても簡単に修理が出来る。色々問題もあるけどね」

つまり、簡単に言えば一つ一つを単体で登録するのではなく、志穂音があらかじめ欠損した情報の中に補うに必要なパーツの情報を入れ込んで登録する事で、？初めからその部位は壊れていなかった？とコア本体を騙すのである。

確かにこの方法ならば、志穂音の言うとおり専用のスペアパーツが無くても修理は可能である。

だが？問題もある？と志穂音が言った所をロゼオは聞き逃さない。

「…問題って？」

「まぁ、色々あるけどやっぱり効率的にエネルギーを運用出来ない所だね、

そもそもコアに嘘の情報で誤認識させるわけだから…ね…。

そりゃしわ寄せがどこかにきちゃうのは仕方ないよ。でも出来る事はしなくちゃね～」

志穂音は苦笑すると、またモニターに目を戻して作業に戻っていく。

『…なぁ、分かったのか？』

「…まぁ…ね…」

ロゼオはもう一人の自分の問いに生返事で返しながら志穂音を見やる。

ロゼオは専門家ではないが言ったようにそれなりに理論派の人間だ。
だからさっきの志穂音の話にもついていけたし理解も出来た。

「彼女……紛れもなく天才だね……」
『まぁ、頭悪くねぇよな…』

?プログラムリアクト?。自分は詳しくは知り得ないが彼女の言うとおりそんな論文があるのだろう。
だが、、いくら元のＩＳデータがあるとは言ってもそれをたった一人で、このノートＰＣを使って構築し直すなどとんでもないことだ。
いや、あってはならない。
鼻歌交じりにキーを叩き、金太郎飴をかじる。

ネットサーフィンでもしているのかと聞きたくなるような気軽さで彼女はＩＳの欠損部分を補っている。

ローラさんは……ひょっとして……。

ロゼオはローラが千葉　志穂音という?金太郎飴の天才?をなぜここに連れて来たのかその理由が分かった気がした。
ただ彼女を連れて来たのはあの市街地戦でのあらましを千冬や学園関係者に話すためだけではない。
ロゼオは、ほぼ確信に近い予想を持ちながらしばらくジッと志穂音を見続けていた。

ガチャッ。

「ただいま～…ってなんであんたが！？」

鈴の志穂音を見た時のリアクションもロゼオの予想通りだった。

◇◆◇◆◇◆

所へ移動して早速テストが始まった。

そして、その場に残ったのは専用機持ちの面々。

「にしても…今年は多いですね…」

「ざっと数えて…七人か…これにあいつを含めると八人……確かに少々多いな」

織斑先生は腕を組みながら、麻耶に返事を返すとそれぞれにチェックボードを配っていく。

「うげッ、こんなにあんの…」

「ドイツもやはりまだまだ第三世代兵器の開発に真新しさは無し…か」

鈴やラウラなど受け取った面々が口々に感想を述べ表情を変える。

そんな中一人、ボーっとしていて織斑先生に頭をはたかれた人物がいた。

「全く……しっかりしろ。そらこれがお前のチェックボードだ、オルコット」

「あ、はい…すみません……」

セシリアは織斑先生からチェックボードを受け取りうつむきながら謝罪を口にする。

当然だがセシリアは、別に織斑先生に頭を叩かれたから落ち込んでいるわけではない。

そしてそれは当然聡也にも分かっていた。

そんなセシリアを見つめる聡也の小脇をロッソが突っつく。

「なぁ、やっぱ…気になってるよな？」

「…でしょうね…まぁ…でも今出来る事はほとんどありませんし…」
「でもま、あいつにゃ良かったかもな…今日、テストがあってよ…」
「え？」
「少なからず、テスト中はそれに集中できんだろ…いくらあいつでも、代表候補生なんだからよ」
ロッソは若干強めに代表候補生を強調して言うと自分のチェックボードとにらめっこしながら
揚陸艇から下ろされた自国のテスト装備の前に歩いていってしまった。

「よし、各自チェックボードは受け取ったな？　では専用機持ちも速やかにデータ取りに入れ！」
と、織斑先生の声が響くがそれに聡也が待ったをかけた。
「ちょっと待ってください、僕チェックボードいただいてないんですけど？」
「あれ？　ですけど配るチェックボードはもう……」
「いや…山田君それでいい」

織斑先生はあたかもその質問を予想していたかのように焦らず答えると、親指でとある方向を指さした。
「お前は、あっちだ」
「あっち…？」
織斑先生が指さす方向を視線で追うとそこには、ある人物の姿があった。
そしてそれは聡也が最もよく知る人物だった。

「は、博士！？」
「私もいますよ、聡也君」
「リリスさんまで…」

更に言うとその後ろでは多くの研究者や技術者がテキパキと簡易研究設備の設営に追われていた。
聡也は織斑先生に向き直るとキョトンとした顔で尋ねる。
「あの……これは？」
「そう言う事だ。一条博士からの申し出でな。お前の機体の事もあるから一度しっかりと整備も兼ねて調べたいそうだ」
…あぁ、なるほど。
確かにナイトシュライクの件もある。
アレが一体何なのか僕もどうなっているのか知りたいですしね…。
…って…
「織斑先生。どうして博士と？」
「ふん、いくらお前が他クラスとはいえ生徒の保護者ぐらい知っていてもおかしくないだろう？」
「…はぁ…そんなもんですか？」
「あぁ、そんなものだ。ではしっかりな」
片手を軽く上げてそう言い残して織斑先生は去っていく。
それを見届け、博士が口を開いた。
「さぁて…それじゃあ始めましょうか。あらかた艦から持ってきてるしね」
「それじゃ、聡也君早速ですがNを展開しちゃってくださいね～」
「あ、そう言えばキーが…」
「そう言えば、一本残して全部奪われたんだっけね……。はぁ…まぁこうなるだろうとは思ってたけど、ほらこれ、使いなさい」
そう言って、博士は僕にスペアで作っておいたと思われる？ホワイトアウル？のキーを手渡す。
それを受け取った瞬間に僕は博士が何をしたいのかがすぐに分かった。

まぁ、それは僕自身も望んでいたことなのだが。

「早速ナイトシュライク…ですか…」
「えぇ、はっきりってかなりのイレギュラーよ、あの機体…。何よりも先にこの目で見ておきたいわ？」
「……分かりました、では…」
「リリス、モニターから目を離さないでよ？」

博士がすぐ横でＰＣをセッティングしていたリリスさんに声をかけ、彼女もそれに無言でうなずく。
リリスさんはこう……一見するとノリの軽いアメリカ人なのだが。こう見えて技術者としては一流なのだから人間不思議なものだと思う。
……それはいいか。

僕はシリンダーカードにキーを差し込みあの時と同じように一機に回す。

――――――そして――――――

「……」

「…何も……起きませんね？」

「どういう事？」

それは僕が一番聞きたいです…。

その後、仕方がいから強制的に？ブラックアウル？を機動させて残りプログラムを行った。

博士やリリスさんそして僕もだけど…その場の空気ったらもう……ね。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「よっと。ここまでは順調か…えぇと次は…」

『……大丈夫？』

「まぁな。身体はお前よりは頑丈さ」

ロッソはロゼオに見えるはずもないのだが自分の二の腕をポンポンっと叩く。

『いや……そっちじゃなくて……文字読めるのかなって……』

「あたしは母国語まで読めないほどお前に馬鹿だって思われてたんだな…」

『言語学って知ってるのかなって…』

「母国語以前に文字の心配してやがった！！」

毎度のことなのだが、ロッソとロゼオ間では話が通じていても、は

たから見ればただの痛い人。
周りからはその声も存在も分からないし加えてここは、臨海学校で夏の日差しが照りつけている。
そりゃ、ちょっと暑さでおかしくなって、某友達の少ないヒロインが作り上げたエア友達か何かと盛り上がっているのかと真面目に心配する人もいるわけで……。

「あの…ロッソ…大丈夫？」
「あん？」
「いや…独り言にしちゃ大きいなぁなんて…」
「ッ！？」

そこまで言われてロッソはバッと口を押さえる。
冷静になって見てみればロッソを注視している人物は多い。
あ、あぁ……やっべぇ～…

ちなみになぜこの事（ハーモニクス）を知らない生徒がいるのか。
それは簡単でイタリア政府の申し出があったからだ。

というのも、ロッソとロゼオではＩＳの使い方に大きな差がある。
当然だがＩＳは一人で扱う物。
ＩＳが蓄積できるパーソナルデータは一人分しかない。
だがこれが驚く事に？ペルフェット・エスダーテ？にはロッソとロゼオ、二人分のパーソナルデータが
経験として蓄積されていた。

そしてそれに伴ってフラグメントマップもイタリア政府が想定していた物とは大きく異なるものが構築されている事も分かっている。

そうとなればこのレアケースをみすみすイタリア政府が逃すわけも

なく、この件を口外せぬようにと学園側に通達があった。

だから既にその存在を知っている一夏を初めとする専用機持ち以外にはロゼオ・ミオネッティという人物は存在しない事になっているのだ。

だから、周りから見れば？無口だったロッソが聡也のおかげで（これは色々憶測の末に後付けされた理由。まぁあまり間違ってはいないが）表情豊かで明るくなった？という認識なのだ。

『……ほら……大声出すから……』

「誰のせいだ……誰のッ！？」

ロゼオのあまりに白々しい台詞に小声でだが語尾を強める。

多分目の前にロゼオが居たら物陰に連れて行って半殺しだろうが今はそれどころじゃない。

「そういえば、時々元の無口なロッソ見かけるよね？」

「あ、そう言えばそうだね。まるで？別人格？みたいに…」

ギクッ！

「そうそう、それあたしも思ったよ」

「こう……なんて言うの？雰囲気とかも全く違う？もんね～」

ギクギクッ！！

「ねぇ、そこらへんロッソはどうなの？」

何がどうなのなのか……まぁ聞き返さなくてもだけど、そこで振るのかあたしに……ッ！？

「い、いや…どうって言われてもよ……な？」
『……ほらほら……頑張って……』
「お前マジで覚えてろ……あぁ、いやいやいや何でもねぇ何でもッ！？」

くっそ～…なんで臨海学校にまで来てこんな変な修羅場を体験しなくちゃいけんぇんだよッ！！（※ほぼ自分のせいです

冷や汗ダラダラのロッソにまわりも次第に不信感を抱きはじめる。

「…ねぇ、ひょっとしてさ…」
「……うん…」

不味いこのままじゃぁ……ッ。

自分のヘマで仮にこの事がバレれば、本国からかん口令が敷かれているだけに
下手をすれば今の候補生の地位もあぶない。
それだけは何としても回避しなければならない。

実力で這い上がりのし上がり認めさせて、そうして掴んだ候補生の座を
こんな間抜けなミスで手放すわけにはいかない。

とはいえどうすりゃいいんだよ！！

ひきつった笑いと困り果て泣き笑いのような顔で後ずさるロッソ。
向けられた不信感が、今にもロッソに襲いかかろうとしたまさにその時。

「そこ、何をやっている！！」

鋭い声がビーチに響き、思わずその場にいた生徒が身をすくませ、ロッソは表情が固まったままその声のした方向を見た。

「お、織斑先生ッ！？」

「他のヤツと無駄口を叩くとは随分と余裕だな…。どれ私が直々にマンツーマンで付き合ってやろう」

「あ、い…いえ…それは…」

言われた班の全員の顔が先ほどのロッソのようにひきつっていく。

織斑先生の声は、穏やかだったが目は完全に笑っちゃいなかった。

「そう遠慮する事は無いぞ。私が手取り足とり……翌日身体が動かなくなるまでみっちりと……な？」

最後の言葉に合わせて目がギランと光る。

「それが嫌なら、とっとと各自持ち場に戻って作業を続けろッ！！」

「「「「は、はいぃぃ～！！」」」」

あぁ、日本語の勉強で脱兎のごとく逃げるって言うのがあったけどきっとこんな感じなんだな。

ロッソは場違いながらそう思った。

だがホッとする間もなくロッソはパッカーンと頭を叩かれた。

「ッ～～～～！」

「全く、お前ももう少し言動には気を使え。騒ぎを起こすのは織斑だけで充分だ、馬鹿ものが！」

「す、すんません…って一夏？　あいつなんかしたんです？」

「テストに付き合うと女子が殺到してな。全く存在自体が面倒なや

つだ」

それはそれで酷いんじゃなかろうか。

織斑先生は腕を組んで鼻を鳴らすと、とにかく騒ぎを起こすなと言い残して踵を返した。

そして織斑先生が一歩足を踏み出した時だった。

空の彼方で何かが光った気がした。

「あ？　んだありゃ？」

ヒュルルルルルルルウウウウウ～～～～――――――――――――――――

まるで爆撃機が爆弾を投下した時の音の様な風を切る音。

「ッ、爆弾か！？」

ロッソは身構える。

ここはＩＳ学園ではないが世界各国からＩＳ操縦者が集まる場所。

特に専用機持ちは人質にされたら非常に有効な外交カードとして使われる。

ここを狙う意味は探せばいくらでもあった。

だが、ふと織斑先生を見たロッソは違和感を覚える。

「……あり？　なんで頭抱えてるんすか？」

「いや……ちょっとな……」

そんな会話を交わしている間にもその？落下物？は、みるみる大き

くなっていく。

『……ねぇ……』

「なんだよ……」

『……あれ、こっちに向かってるね……』

「あぁ、そうだ――――――――――って!?」

織斑先生はゆっくりそしてロッソは飛びのくようにその場を離れる。
そして次の瞬間にはロッソ達が居たところに大きなニンジンが突き刺さっていた。

そしてゆっくりとそのニンジンが割れて……。

「やっほ～、驚いた？　驚いたかな？　驚いたよね!?」

変な三段活用の……ウサミミ？

ロッソは思わずラウラを見る。
確かあいつはドイツで？シュヴァルツェ・ハーゼ？っていう、えぇとなんだっけか。
確か……そう!?クロウサ部隊？とかに所属してるんだろ。
だったらウサギとウサミミで……って。

ラウラはロッソの視線を感じるや、猛烈な勢いで首を振る。
まるで一緒にしてくれるなといわんばかりに。

「あれ、違うのか？」

『……まぁドイツ人には見えないね……』

「じゃあ誰なんだよ…」
『織斑先生知ってそうだね、さっき頭抱えてたし…』
あぁ、そう言えばそうだな。なんだか知ってるそぶりだったな。
ってなわけで。
「織斑先生……この人は？」
話を振られて、とんでもなく嫌そうな顔を浮かべ大きくため息を吐く。
そして嫌々ながら、謎のウサミミ女の名前をつぶやいた。
「コイツは……篠ノ之　箒の姉で……篠ノ之　束だ…」
その後、このビーチが驚きの声で包まれたのは言うまでも無いことだが、

ロッソはそんな中一人険しい顔で束を見つめる箒の姿を見逃してはいなかった。

第３９話～空から舞い降りるニンジン～（後書き）

今回から少し書き方を変えてみました。

見にくかった・・・を…にして少し間を開けてみました。

ご指摘ありがとうございます。

さて、ようやく束さんがご登場ですがこの先も色々もめるでしょうｗ

ただでは終わらずグダグダ行くのがこの小説のいいところ（？）ですからね（爆

ではまた４０話でお会いしましょう～

第４０話～紅椿　その力強大につき～

唖然とする周囲の目などお構いなしにニンジンから生まれた稀代の天才はビーチを所せましと駆けまわった後、千冬を見つけて再び走りだす。

悪路を走るラリーカーは砂を巻き上げ真後ろにすさまじい砂煙を上げるが、まさに今の束がその状態であった。

「おぉ、そんなところにいたのかい！　今行くよ～～ッ　待ってて待ってて！！　ハグしようっていうかする、うん決定事項だからね、ちーちゃん！」

そんなところというが、勝手に束がニンジンから出てきて明後日の方向へ走っていただけで千冬はニンジンのすぐ真横にいた。

実際ニンジンと当方との距離は一メートルも無い。

千冬に向かって猛進する束。

その進路にいた生徒達が、恐れ次々に道を開けていくなか千冬は動じることなく腕を組んでため息を吐く。

「うんうん、いいねいいね、ちーちゃんいいね！　さぁ、愛を確か――――――――ッベッ！！？？」

そして、タイミングを合わせて一気に飛び束の顔面にローリングソバットを決めた。

「おぉ、ノー○ンインパクトや！？」

「いや、あんたそれ超次元サッカー……」

千冬は盛大に吹き飛んで数回ゴロンゴロンと砂浜を転がる束を見ながら、どこからかそんな声を聞いた。

「あ、相変わらず、愛情表現が激しいね、ちーちゃん…」

「っち、浅かったか……」

「殺す気だったんですか！？」

真耶の突っ込みに千冬は少し、それでも良かったと思ってしまった。

ひとまず、千冬の一撃で落ち着いたのかパンパンと砂を払いながら束がゆっくりとこちらへやってくる。

そして千冬もようやく会話が出来る雰囲気になった事を確信し口を開こうとしたのだが……。

「で、お前何をしにき……えぇい、お前たちは自分の今するべきことに集中しろ！　時間までに出来なければ班全員終わるまで旅館には入れんからな！」

「あ、いや…でも……その人……」

「この馬鹿は放っておいても害はない。だがまぁ……おい、束自己紹介ぐらいしておけ」

千冬は束の頭のウサミミをグッと掴んで持ち上げる。その姿はまさに捉えられた野兎そのものだった。

「え～……なんで？」

「そもそもこの空気にしたのはお前だろう？」

「めんどくさいなぁ……それよりも、私はちーちゃんの胸の方に興味が……」

「やかましい。それに胸ならお前にも立派なのが付いているぞ」
「いや、でもでも自分のじゃぁねぇ…あ、私天才、束さん……いっつも見てるから見飽きちゃって…」
「だから、自己か……ってサラッと済ますなッ！」

そのままポイッと再び砂浜に放り投げられる束。
確かに千冬の言うとおりあまりにサラッと言ったもんだから自己紹介したのかしてないのか千冬が怒鳴るまで分からなかった生徒もいたぐらいだった。
だが何にしても、一番最初千冬が言ったのとさっき本人の口から？束？という名前を聞いた事でようやく目の前のこの、ふざけたウサギ女が稀代の天才でありＩＳの生みの親？篠ノ之　束？であると言う事は理解できたようだった。

「……とにかくそういうことだ。こいつには構わずお前たちはいまやるべき事をしろ。いいな」
「「「は、は～～い…」」」

目の前に世界中が血眼になって探している重要人物がいると言うのにそれに構わずとは中々無理な話ではあるのだが、相手はあの千冬である。
重要人物見たさに命を投げ出す勇気をもった生徒などいるはずもなく、渋々といった様子ではあったが各自持ち場に戻ってデータ採取を再開した。

それを見届けてから千冬は改めて、束に尋ねる。

「それで、お前……一体何をしに来たんだ？」
「あぁ、そう言えばちーちゃんは知らないんだね～。えへへ～え～っとね今日はね～ある物を届けに来たんだよ」

「ある物…だと？」
「そ、我が妹……箒ちゃんにね～」
束が向いた方向に釣られて千冬もその方向を向く。
そこには、千冬と視線があった時一瞬身体をこわばらせた箒の姿があった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「アレが、篠ノ之　束……ね。ま、天才なんて何考えてるか分かんないって言うけどほんとだったみたい」
「そうですね～。まぁ博士は色々考えてる事筒抜けですからそれもそれでどうかと思ういますけど――――――って私の頭がい頭がい骨が陥没するほどの衝撃ッ！？」
「黙って記録続けなさい…？」
「……はい、すみません……」

だからって端末の角は酷いでしょうに…。
涙目で記録を続けるリリスさんに少し同情しながら、僕は予定のプログラムの一つを終えてビーチへと降り立つ。

「どうでしたか、あんな感じで良かったですか？」
「えぇ、大丈夫よ。やっぱり機動力も？ブラックアウル？そのもの……。何か変化があると思ってやったマニューバテストも意味無かったわね…」
はぁっと大きくため息を吐いてパイプ椅子にドサッと座る。

僕は技術者の人にドリンクを貰い口に含んで辺りを見渡した。
束博士の登場で一時は騒然としたビーチも、織斑先生と束博士が何やら箒を交えて話をしはじめてからは向こうもこちらを気にしないし、こちらもあまり向こうを気にしないようにしていたためか思いのほかその後混乱なくテストは続いていた。

僕はドリンクを飲みながら博士達が設営した簡易テント群へ向かう。
夏らしい蒸し暑さだがそれでも簡易テントがあるのはありがたかった。
かなり大きめのテントで、他のクラスメート達も余剰スペースを休憩所がわりに使用してる。

そしてそこには、ひと段落ついてうちわを仰ぐロッソの姿があった。

「ロッソ、お疲れさまです」
「おぉ、聡也か」

軽く挨拶を交わして近くにあったパイプ椅子に座る。
そう言えばロッソがＩＳスーツ姿でいるのは初めてみた気がする。
いつもＩＳ展開と同時にスーツも展開していたからかな…。

実際ＩＳスーツって形状だけ見れば一昔前のスクール水着だ。
まぁその……身体に……まぁ当然密着しているわけで……。

ロッソは他の女子達に比べればスレンダーだが、それでも女子として充分すぎるほどの体系をしている。
そしてそんな体系に密着するＩＳスーツは正直言って裸よりも目のやり場に困ることだってあるわけで。

「あ～、聡也君がエロい目でロッソを見てる～」

「おぉ、エロいエロい～」
「な、ち違いますよ！？　僕は決してそんな目で…ッ」
「……聡也……あなたそれ墓穴掘ってるわよ」
「博士まで！？」

いやいや…そりゃ…僕だって男ですし？　そういう気が無いわけじゃ無いわけじゃなくて…だからあ～～もう！

「へぇ～……なるほどねぇ～」
「え？」

顔を真っ赤にしてかぶりを振る僕が次に見たのは、何やら嫌な悪戯っぽい笑みをたたえたロッソの顔だった。
そしてロッソはおもむろに立ち上がるとゆっくり僕の背中に手をまわして胸をわざとらしく押し付ける。

「ま～ぁ…仕方がねぇよなぁ。ん？」
「ちょ、ろ、ロッソ！？」
「なんだよ？　別にあたしの事、そう言う目で見ちゃいないんだろう？」

エンジ色のＩＳスーツに包まれた胸が僕の背中に押し付けられてゆっくりとその形を変えていく。
さっきも言ったがロッソはスレンダーな体系ではあるものの、それなりに出るところは出ているし女性としての魅力も充分だ。
そんな身体を押し付けられて平常心を保てるほど僕は人間出来ちゃいないし経験も無い。
僕は真っ赤になって、下を向くしかなかった。

そんな僕に更にロッソは身体をくっつけてくる。

胸はもちろんの事腰回りそして足も、ゆっくりとまるで押し付ける感触自体をロッソも確かめる様に。

わわわわわッ!?　い、いや、そんなところ!?　手なんか回しちゃだめですって!??

「急に黙っちまったなぁ～？　あぁん？　ほれほれ～どうだよあたしのカ・ラ・ダ？」

「あ、い……や…そのぉ……」

「なんだよぉ…はっきり言えってぇ…？」

ロッソはわざとらしく色っぽい声色でささやくように言う。

正直に言うが、こんな場所でアレだが色々ヤバい。

主に理性的な意味で。

多分これが密室なら……いや、やめておこう…。うん。

それを考えるとますますヤバくなりそうだ。

だけど、どっちにしたって僕もそろそろ限界だった。

さっきから頭はくらくらするし、目の前がなんかぼやけてきました…。

しかし、僕がそんな状態になっていることなどロッソは知る由もなく身体をくねらせながら更に更に密着していく。

「なぁ、どうなんだよ？」

「あの……だから……ッ」

「おいってぇ～」

「いや……えぇっとぉ……!?」

「ほらほら～？」

「うぅ……」

「なんとか言えってぇ～？……って……あれ？」
「……」
「おい、聡也？」
「きゅ～～……」

「ロッソやり過ぎ…」
僕が最後に聞こえたのはその言葉だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ～ぁ……」
『……それなんていう冗談……？』
ロッソはロゼオの鋭い突っ込みに思わず顔に手をやる。
聡也は、まるで漫画のオチみたく目をぐるぐると、まさに？なると模様？にして伸びてしまった。

とりあえずロッソは、聡也をゆっくりと下に横たわらせる。
そしてとりあえず、聡也をうちわであおぎ始めた。

「お～い……大丈夫かぁ～」
『いや、……だからそれなんていう冗談？……』
ロッソは内から来る声に耳を閉ざし、ひたすらあおぎ続ける。
内心ちょっとやり過ぎたと思い後悔したが同時に少しロッソは嬉しくもあった。

へへッ、なんだかんだ言って意識はしてくれてるみてぇだな。
正直少し心配だったのだ。

聡也は別段それほど鈍感では無い。
だがそれほど恋愛ごとに気があるわけでもない。
あの市街地戦の時、聡也は自分に叫んでくれた。

まぁ、何というか最後少し変な事になっていたと思うが大切だと言ってくれた。
だが逆を言えばそう言う時にしか、聡也は自分の思いをあまり口に出さない。
別にロッソは顔を合わすたびに好きだと言ってほしいわけではないがそれでも恋する乙女にとっては、何かしらのアクションが無いと、無性に心配になったりするものだ。

なので今回のこの反応は、ロッソにとっては聡也の気持ちを確かめられたという意味でロッソにとっては大きな収穫でもあった。

『……まぁ、やり方はともかくね…』
「考えに突っ込むのはやめてくれねぇか」

ロゼオの冷たい突っ込みを軽く流しつつ、ロッソは聡也を見てへへッとまた笑うのだった。
そうして少しの間青いでいると突然――――

ドゴォォォォン！！！

ビーチの砂がもの凄い音と共に大量に宙へ舞い上がった。

「な、なんだ！？」
「何の音！？」

周囲の生徒たちも音のした方を振り返る。

丁度その音のした場所はさっきまで束や千冬、箒達がいた場所。

「ッ……一体何が…」

『…あ、あれ…』

「あん？」

ロゼオが何を見つけたのか、ロッソにはすぐに分かった。

分かったのだが…。

「なんだありゃ……」

『……とりあえず行ってみよう…』

「あ、あぁ。あの、聡也お願いします」

ロッソは聡也をリリスに預けて、？爆心地？へと足を進めた。

ロッソは生徒たちの間をすり抜けて最前列へ。

「こいつかぁ…」

ロッソは改めて？ソレ？をまじまじと見やった。

黄色い筒状のボディと先端には高速回転するドリルに下にはこじんまりとしたキャタピラが付いていた。

大きさは長さ約四メートル高さは約三・五メートルと小型トラック程の大きさだ。

そしてそのマシンの後ろには、このマシンが掘ったのであろうボディと同じぐらいの大きさの穴が開いていた。

「これ、どこに繋がってんだろうな」

「……お願いだから入らないでね……」

「入るかッ、冗談だよ冗談！」

ロゼオとの一人漫才を終えると今度は耳に織斑先生の声が飛び込んできた。

「……馬鹿ものが。ビーチにこんな大穴を開けてしまって…」

「えへへ～見たかッ！　これが束さん特製地中輸送艦その名も？ドリモグジェット？！」

……あれ、どっかで聞いたことある名前。
某有名な人形特撮番組に似たようなマシンが登場したいたような気がする。
まぁそれはいいや。

とりあえずロッソは？ドリモグジェット？の近くで同じようにまじまじとそれを見詰めていた専用機持ちメンバーの方へ近づき声をかけた。

「なぁ、何の騒ぎなんだ？」
「ロッソか、まぁ見ての通りなのだが…」
「そうだね、僕も何が起きたのかさっぱり」
流石のラウラやシャルロットもいまいち状況を飲み込めていないようで、そう答えるのが精いっぱいのようだった。
確かにこの状況ではそれも仕方ないのだろうが…。

「あたし達が振り返った時にはもうこんな状態だったしね…」
「あーまぁ、束さんのやる事を理解しようとする方が無駄だと思うぞ…。俺でも、多分箒でさえ予測できねぇから」
「なんだよそれ、身内でも無理って…」
「そう言うもんなんだ…」
一夏のどうしようもないといったような表情にロッソもそこで何が起こったかという質問を切り上げ、再び耳を当事者たちへ傾けた。

「で、その？ドリモグ？とやらでお前は何がしたかったんだ？」
「地底探検」

ゴスッ！！
束の頭に側が金属の端末が文字通りめり込む。
やっているのは織斑先生なのだから手加減など一切なかった。

「おぉふ、ちーちゃんいつもながら鋭いツッコミだよ！！」

ゴスゴスゴスゴスゴスゴスバギョッ！！！

まったくこたえも懲りもしていない束博士に織斑先生は無表情で端末の角で叩き続ける。
そして最終的に端末の角が砕けてしまった。

「おい、束。お前の頭が頑丈すぎて壊れたぞ」

なんて言いぐさだーーーーッ！！！
恐らくその場にいた生徒全員がロッソと同じ事を思ったに違いないだろう。
しかし稀代の天才束博士は違う。
「さっすが私！　見事にちーちゃんの攻撃を防ぎきっちゃった」

バッガァァンッ！！！

「うぎょッ！？」

織斑先生も流石に限界が来たようで、束博士の頭に思いっきり端末を叩きつける。
もう角が砕けたうんぬんの話では無い。
完全に端末が砕け散ってしまっていた。

すげ……あれ鉄じゃなかったか？

『……天才は一味違うんだね…』
それもちょっと何か違う気がするけど。

「はぁ…全く。それでコイツは一体何なんだッ？」
織斑先生は束博士の胸倉をつかんで語尾を強めて束に問う。
束博士もその出席簿アタックならぬ端末インパクトは答えたらしく目をグルグルと回しフラフラの足取りでなんとか答える。

「はれぇ～……これには箒ちゃんのぉ～……ＩＳを乗っけてきたんだよォ～……」
「何？」

箒のＩＳ？

ロッソは箒を見やる。
丁度その目を無型のが織斑先生とタイミング的に重なり、箒は目じりを一瞬鋭く釣り上げる。

「どういうことだ？」
「この前ぇ～…箒ちゃんから電話があってぇ～ねぇ～…」
「……そう言うことか」

何がそう言う事何かはロッソには分からなかったが、少なくとも持ってきたのが束であると言う事を考えると専用機である事は間違いない。
ロッソはその事に、腹がたった。
だがまぁ、今こんなところで怒ったとしても何にもならない。
ひとまずロッソはその怒りを収めつつ更に、耳を傾ける。

「それで、お前が持った来たと言う事だな？」

「そうそう～…。？ドリモグジェット？はそのための無人輸送機なんだよぉ～」

織斑先生はため息を吐くと、パッと束博士から手を離す。
未だダメージの回復しない束博士がドシャッと砂浜に崩れ落ちる。
それと同時に懐から転げ落ちた小さなリモコンを束博士が手をついた拍子に押してしまう。

するとさっきまで停止していた？ドリモグジェット？のハッチがゆっくりと開き始める。
そして、皆が注目する中その？束？が持ってきたという箒の専用ＩＳがその姿を現した。

フィッティングもまだのその機体は折り畳まれた状態で？ドリモグジェット？からせり上がる。
ロッソの？ペルフェッド・エスダーテ？よりも更に鮮やかな赤色を基調としたそのＩＳ。
恐らく束博士はこれを大々的に皆に見せびらかすつもりだったのだろうか、ご丁寧に足元にはネームプレートまでおごられている。

？紅椿？それがこのＩＳの名前か…。
『まんまのネーミングだね…』
「まぁ良いんじゃないか？　ストレートでシンプルだし」
そんなたわいもない会話をしていると、いつの間にか復活した束が目にもとまらぬ早業で箒を担ぐと、装甲が割れて操縦者を受け入れる体勢の整った？紅椿？にまるでゲームにカセットをセットするかのように一気に突っ込んだ。

「ちょ、ちょっと！？」
「はいはい～は～い。箒ちゃんはお姉ちゃんに任せてねん。それじ

ゃフィッティングを始めま～す」

箒の狼狽など気にもとめず、一方的に作業を開始した束博士。
流れるような手つきでコンソールを叩き、次々に？紅椿？のフィッティング作業が終了していく。
初めはあまりのインパクトに、驚き唖然としていた群衆もひとたび慣れてしまうと率直に目の前の事態を受け入れそして考えられるようになる。
そしてそれはロッソも同じ事だった。
さっき押し殺したはずの苛立ちが再びゆっくりと、首をもたげはじめたのだ。

「……なぁ……専用機ってのは…あんなもんなのか……？」
『……ロッソ……』
「アレ見てお前許せるか？」
『それは』

ロッソが苛立つ理由は、別に箒が束にＩＳを作ってもらった事では無い。
別にそれは良い。
箒にとっては、身内のコネを最大限使用したに過ぎず別に不公平だとか騒ぐつもりはない。

問題はアレが？専用機？であると言う事だ。
代表候補生にとって専用機とは特別な意味合いがある。
ＩＳは絶対数の決まっている物だから、代表候補生全員に専用機を与えることは不可能だ。
ロッソはかなりの実力者でイタリアの代表候補生の中でも群を抜いている。

しかしそんな彼女でも一度は、二重人格の所為で？精神異常者？のレッテルを貼られ道を閉ざされた。
その後トーナメントで優勝してその座に返り咲いたと言っても、道を閉ざされた日からトーナメントまでの期間があまりに短かったためそれこそ血反吐を吐くほど努力に努力を重ねた結果でもあった。

だからこそ、腹が立つ。
そんなに簡単に？誰にも認められずに専用機に袖を通す事？が。
見ると箒の機体は既にフィッティングを終えて、試運転に入っていた。
束の放ったミサイル群を箒が全て叩き落とし大きな爆煙を空に咲かせる。
これは我がままなのかもしれない。
これは勝手な自分よがりの考えの押しつけなのかもしれない。
でも…それでも。
このままあの力を受け取ってしまったら、きっと箒はデカイミスを犯す。
それだけはなぜか分かっていた。

「……わり、ロゼオ……後で一緒に怒られてくれ」
『……はぁ……また怒られるんだね…』

その声を聞かずしてロッソは光に包まれていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

束の放ったミサイルを？空裂？によって全て叩き落とした箒は高まる興奮を抑えきれずにいた。
「これが……専用機…私の力だ……ッ！」
全てが思いのまま、？打鉄？のような量産機にはつきものの感覚のズレも無い。
まるで自分の身体の一部のように動く。
「凄い…やれる…やれるぞ！　この？紅椿？ならッ！」

そう言った直後だった。
箒を背後から強烈な衝撃が襲う。
「ぐあっ！？　な、何だ！？　っくまだミサイルを！？」
箒は慌てて、機体を立て直し束にオープンチャネルで通信を行う。

「撃つなら、撃つと言ってください！！」
『ほえ？　箒ちゃん私撃ってないよ？』
「またそう言う冗談を！！」

きっと束の事だああいってどこか自分の見えない所から撃ったにきまっている。
しかしその考えは千冬の一言ですぐに覆された。

『いや、今回は束の言っている事は正しい。束は何もしていない』
『本当だぞ、箒。束さんは指一本動かしてなかった』
『わ～お、いっくんお姉さんは嬉しいよ！』
「わわ、だからと言って抱きつかなくてもいいでしょう！！」

いきなり一夏に抱きついた束に箒は顔を真っ赤にして叫ぶ。
えぇい、全くあの人は！！

箒は急いで束と一夏の間に入るべく降下をしようとして――――――。

ガンッ！

足に何かが巻きついているのに気がついた。
む、なんだ？
巻き付いたそれ――――――。

疑問符を浮かべる箒だったが次に気がついた時には箒は海へ叩きつけられていた。

「何だッ！？」

箒は今度こそ本当に、束では無いと確信し急いで海から空へ上がる。
そして辺りを見渡すと、そこには？紅椿？同様赤をメインカラーとしたＩＳが浮かんでいた。
箒はそれを見てすぐにそのＩＳが自分を海に叩きこんだ犯人だと分かる。

「余所見たぁ……余裕だな…えぇ？」
「お前……どういうつもりだ？」

箒は目の前のＩＳ？ペルフェッド・エスダーテ？の操縦者ロッソ・ミオネッティに尋ねる。
ただ尋ねるとは言っても、完全にその言葉一つ一つには明らかな怒りの感情がこもっている。

「どういうつもり…か」
「……」
「そうだな……てめぇのその専用機。そいつの試運転に…ッ」
「ッ！？」
「付き合ってやるよッ！！」

ロッソは言うなり、？テンポラーレ？を箒に振るう。
箒はその攻撃を？雨月？で弾くと再びロッソに激しい口調で問うた。

「いい加減にしろ！　何がどうなっていると言う！？」
「いいからきやがれ！！　手ぇ抜くとマジで怪我するぞ！」
「ッ、聞く耳持たずか！」

箒は舌打ちしながら、？紅椿？を駆る。
まだ、組み上がったばかりの初稼働での戦闘だが流石というべきか束の調整はほぼ完璧だった。
更に言えばフィッティングの間？束特製要点だけまとめたノート？とかいうマニュアルを読んでいたため粗方この機体の事は理解できていたので、それなりには動かせる。

その事はロッソも少し予想外だったようで、感嘆の声を漏らした。
「へぇ、初めてにしちゃ上手いもんだ…だけど！」
ロッソは再び？テンポラーレ？を振り上げ箒を襲う。

その刃は蛇のようにしなり、不規則な動きで箒へと迫る。

「そう何度も何度も同じ手が通用するものか！！」

箒は？テンポラーレ？を？雨月？を振るいエネルギー刃で？テンポラーレ？の機動をそらすと機動力にッ物を言わせて一気に懐へと飛び込んでいく。
それを今度は左腕の攻防複合盾？パーチェ・ディフェーザ？で防ぎ火花を散らす。

「く、こ……のッ！！」
「ハァァァァァッ！！」

箒は？雨月？を右手でロッソへ押し込みながら左手の？空裂？を素早くコンパクトに振るった。

スッガァァァァァンッ！！！

至近距離でのエネルギー刃の直撃に爆発を起こす？パーチェ・ディフェーザ？。
箒はその黒煙の中をジッと見据える。

そして煙が晴れていくと同時に左腕部の吹きとんだ？ペルフェッド・エスダーテ？が顔をのぞかせた。

「ケホケホッ、えぇい…無茶苦茶しやがるッ」
ロッソは吐き捨てる様に良い、箒を睨んだ。
そこへ箒の、勝ち誇ったような声が届く。

「どうした！　偉そうに割り込んできた割には歯ごたえが無いな！」

「…っせぇ。これからだボケ」
ロッソは左腕に残っていた？パーチェ・ディフェーサ？の破片を無理やり引きちぎると再び？テンポラーレ？を？スパーダモード？で構えるとスラスターに火を入れる。
そして三度箒の？紅椿？と火花を散らしてぶつかっていく。

くっそ、ここまで威力がケタ違いだとは思わなかったぜ！
ロッソは心の中でごちりながら機体を駆る。
あの束が作った機体という事もあって、吹っかけながらも警戒はしていたつもりだったが威力が当初の予想を遥かに上回ったのは誤算だった。

まさか一撃で？パーチェ・ディフェーサ？を持って行かれるなど誰が予測できるだろうか。
こちらはシールドもしっかり展開していたと言うのに、あのエネルギー刃はこちらのシールドなど紙だと言わんばかりに容易く貫いて見せた。

それだけでは無い。
？ペルフェッド・エスダーテ？の兵装のほぼ九割を搭載している？パーチェ・ディフェーサ？を失った事はかなり大きな痛手である。

今も？テンポラーレ？で防ぎながら戦っちゃいるがいつまでもつか分からねぇッ。
何よりさっきの爆発でかなりのシールドエネルギーを持って行かれているのだ。
下手に受けたらそこで終わっちまう！

箒の刃がロッソの刃をとらえ上に跳ねあげる。
束オリジナルの最新鋭機と第三世代とはいえ最初期の機体ではその

性能にかなりの開きがある。
そしてその性能差は、ロッソの技量を賭しても覆す事の出来るものでは無かった。

「さっきはよくも海に落としてくれたな！　今度はこちらの……番だッ」
「うあぁぁぁぁッ！」

箒はロッソを蹴りあげそして背中を？雨月？の柄尻で思い切り叩きぬいた。
それと同時に上がる水柱。
舞いあがった海水が？紅椿？を濡らす。
その水柱の中心をを箒はグッと睨む。
そしてその直後だった。
？セルペンテモード？となったロッソの？テンポラーレ？が箒の足をからめ捕る。

そして一気に引っ張られると同時にロッソの姿が海面に上がる。
「くそっ」
箒は？雨月？をなんとか構えスラスターを噴射し強引に一回転させて？蛇の呪縛？から逃れるとロッソへ向かう。
？テンポラーレ？を使用している時点でロッソにもう武装は残されていないはずだからだ。
しかしロッソはそれを見てすぐに？スパーダモード？に戻しその刃を受け止るべく構える。
そしてロッソは箒が振るった？雨月？を？テンポラーレ？に当たるまさにその瞬間に？セルペンテモード？に再び移行して刃を伸ばし、？受け止める？とその刃を左手でガッと掴んだ。

「むッ！？」

「本当はよ…。スフィーダの時にしか使えねぇんだけどなッ！！」
「まさかッ！」
「ぶっ飛ばせ！　？ウラガーノッ？！！！」

ロッソの左腕の装甲を内部から吹き飛ばしながら、？雨月？を持つ右手にすさまじい衝撃が走る。
あまりの衝撃に箒は思わず？雨月？を手放してしまう。
？ウラガーノ？は本来？モードスフィーダ？の使用時に排熱のために装甲が吹き飛ぶ事でようやく使用できる武装。
そんなものを通常状態で撃てば内部から装甲がはじけ飛んでしまう事など簡単に予想できる。
だからこれは？ペルフェッド・エスダーテ？の禁則条項に盛り込まれている。
当然ダメージを受けるのは機体だけは無い。
ロッソ自身も苦痛に顔をゆがめながら、ただそれでも攻撃をやめるつもりは無かった。

「てめぇ、さっきあたしにどういうつもりかって聞いてたよなッ」
「くぅッ」
「良いぜ答えてやる！！　今てめぇが使ってるその力は……」
「……？」
「てめぇ自身の本当の力なのかッ！！」
「ッ！！」

箒の一瞬の動揺。ロッソはそれを見逃さない・
装甲が吹き飛ぶこともいとわず一撃また一撃と、箒に圧縮された空気の重たい一撃が放たれる。

「そのッ、力はッ、お前がッ、誰かにッ、認められてッ、得たッ、

力かぁッ！！！！！」

経験で圧倒的に勝るロッソの腕でもカバーしきれないほどの性能差。
それだけの能力を持った強大なＩＳを扱うからこそ、こんな形で箒にこの力を与えてはいけない。
それがロッソの思いだった。

最後の一撃で完全に左腕部装甲の吹きとんだロッソは苦痛に顔をゆがませながらも？テンポラーレ？を？スパーダモード？に移行して目の前でしっかりと構えそしてスラスター最大で突っ込んでいく。

「私は…私は――――ッ」
「わりぃなッ……」

ドッ！！

その声の後、渾身の一振りがシールドバリアを貫いて箒の鳩尾に完璧に決まった。
直後箒は気を失い、？紅椿？が解除される。
その箒の身をロッソはしっかりと抱く。

そして箒が薄れゆく意識の中、消え入りそうな声でボソリとつぶやいたのを聞いた。

――――――間違ったのか？――――――と。

第４０話～紅椿　その力強大につき～（後書き）

あ、また壊しちゃった（爆

主人公機に続き、準主役でもあるエスダーテを壊し更に箒は戦闘不能さてどうしましょう（汗ｗｗ

まぁそんなこんなで紅椿登場回は初陣敗北という苦々しい戦績で終了。

これからどうなっていくのかな！？

ではまた４１話でお会いしましょう～

あ、ちなみに束さん特製の？ドリモグジェット？アレはサンダーバードのドリルモグラからアイデアを拝借しましたｗｗ

第４１話～邂逅する白い翼～（前書き）

ようやくですがこの回、ハンバルさんが描かれた小説の主人公が登場します。

少し長めですがどうぞ。

第４１話～邂逅する白い翼～

「ふむ……こんなところで良いだろう。パラメータチェックはもういい。引き続き続けてくれたまえ」
「はいっ」
技術者が、一礼して叶の前から去っていく。
叶はそれを見送って艦橋の自分の椅子に腰を下ろした。
そして叶えは顎をさすりながらコンソールを叩き、この周辺の海図をディスプレイに表示させる。

「……いやしかし……どこへ行ったというんだ……」

叶の珍しく困惑した声が艦橋内に響く。
叶達乗る機動研究潜水艦？守（もり）？は今、太平洋のど真ん中で停泊中。
補給も済ませた後だったので特にやることと言えば、大破した？ホワイトアウル？の修復と改良ぐらいで今はクルーも交代で休養を与えている所で艦橋にも人はまばらだ。

叶は通常よりも静かなブリッジで少し考え込み、オペレーターの男性に声をかける。

「どうだろう、あの艦は見つかったかな？」
「いえ、反応が消えた海域がこの付近である事は事実なのですが、レーダでもその反応を捉える事はできません…」
「しかし、手品でもあるまいし？空母一隻がまるまる消える？などあり得ないだろう？」
「えぇ…それはそうですが……」
「……まぁ分かった。引き続き情報収集にあたってくれたまえ？」
「分かりました」

叶はクルーにそう言い残すと端末片手にブリッジを後にする。
そして足を向けたのは聡也のいる格納庫だった。
ＩＳとＩＳ－Ｎの両方をスムーズに発着艦させるため、艦橋よりも格納庫の高さは一回り大きく作られている。
通常ならば敵艦のソナー探知を極力避けるために凹凸は少ない方がよいのだが本艦は武装を搭載してはいるが、機動研究潜水空母であるためそう言った被探知の可能性増加よりも研究のしやすさＩＳ－Ｎ運用のしやすさを念頭に置いて作られているためこれでいいのだ。

「あ、博士」
「やぁ、どうかな。首尾の方は。一応さっきデータを持ってきてくれたから進捗状況は把握できてはいるのだがね。やはり目で見なければ納得できない性分らしいよ」
「……そうですか。まぁご覧いただいている通りです。今日中にはなんとか仕上げられるらしいです」

聡也の言葉に二度ほど頷くと、作業クレーンにつりさげられた装甲板を組み上げる技術者達を見やる。
こうみると、破損したとはいえかなり形を変えてしまったなと思わざるを得ない。

？ホワイトアウル？と？ブラックアウル？は基本的には同系列の機体、つまり姉妹機の様な関係である。
武装の形式が若干異なる以外は、パーツの流用さえ容易なほどに二機構造は同じである。
だから叶は、市街地戦で機体が入れ替わっても焦らず何事も無かったかのようにスペアパーツを使用して新しく？ホワイトアウル？の改修改良に望んだわけだ。

その結果？ホワイトアウル？は以前のスペックと比べて、推力が二十五パーセント、装甲値も三十パーセント向上しバッテリー系統も見直されて稼働時間も少し伸ばすことに成功している。
だがその分形状は大きく変わっており、特に推力と機動力の向上を狙ってスラスターの形状が以前までの四角い工業的な形のものから、両面計六枚の白をメインカラーに黒で縁取りされたスラスターフィンの内部に左右二機ずつに増設されたかり大型の物に変更されている。

また近接戦闘にも対応できるように二門荷電粒子砲が下ろされ、そこに二本のバタフライブレード？ストレートフェザー？を搭載するなど武装の変更も行われており、改良というよりは背部に至っては新たに一から作り直されたと言っても過言ではないほどの作業が行われていた。

「あ、そう言えば姉さんはどうなんですか、連絡ありましたか？」
「ふぅむ、まぁ連絡は無いがね。だがあの紫香楽　誠一郎が変な事をやらかすとも思えない。大丈夫だろう」

とはいえ、既に一週間が過ぎようとしている。
過程の一つや二つ報告ぐらいしてもらいたいものだ。
こちらから一度だけ連絡を取ろうと試みたものの、結局繋がらず仕舞い。
回線に割り込もうにも、紫香楽家のファイアウォールは叶を持ってしても破る事が出来なかった。

そのため結局向こうのアクション待ち。
それでも艦だけは動かせたが不測の事態に陥る可能性もゼロではなく結果追尾行動もまともに取れず現状に至ると言うわけだ。

だからさっきクルーが言っていたように艦のレーダーにしか頼らざるを得ない。
引き続き情報収集をと言ってブリッジを後にしたものの、はっきりってもう新しい情報をこの間だけで探すのは限界だろう。
全ては、？ホワイトアウル？が上がってからだな……。
叶はそう心の中で呟いてその場を聡也に任せると、甲板へとその足を進めた。
梯子をのぼり、ハッチを開ける。
見上げた空はどこまでも澄み渡っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

地上へと箒を連れ降り立ったロッソに待っていたのは、きつい千冬の一発だった。
鋭い平手打ちを、頬に食らい口の中を切ったのだろう血の味が広がる。
ロッソは無言で千冬を睨み返すと箒を千冬に預けて千冬に踵を返した。
そして千冬もまたそれを、無言で見送る。
そこへ、憮然とした表情の束がやってきた。
「む～、なんだいなんだいあの赤髪目つき悪女はぁ！！　箒ちゃんをこんな目にあわせて～ッ！！」

「束……いい。放っておけ」
「でもでも、今ならやれちゃうよん？　？ドリモグジェット？で肢体をバラバラに…」
「だから放っておけと言っているッ」
「うぅ～～～っ」

千冬は箒を抱えてピシャリという。まだ納得いかないような顔で束は千冬を見るが構わず千冬は踵を返すと箒を学園スタッフの担架に乗せられ搬送される。

見たところ外傷はない様子だったし、旅館の医務室にある設備で対応できるレベルだろう。

まったく……不器用なやつめ。

千冬はその背中を見ながら大きくため息を吐くのだった。

「あ、ロッソ」
「叩かれただけで済んでよかったってところね」
頬を赤くはらしたロッソをテントの下で出迎えた専用機持ちメンバー。
てっきりロッソは、文句や批判の一つでも飛んでくるものだとばかり思っていたが開口一番彼女達が発した言葉はそんなたわいもない言葉だった。

「なんだよ、怒ってたりしねぇのか？」
「ふん、貴様の考えなどお見通しだ」
「箒のためだよね？」

「……専用機持って浮かれてたのを正してやっただけさ」
ロッソはそっけなく返すとドカッと腰を下ろす。
そこへ、ロッソの飲んでいたドリンクを持って聡也と一夏がやってきた。

「はい、ロッソ。新しく買っておきました」
「おぉ、サンキュ」
「にしても見事なはたかれっぷりだったな」

一夏の言うとおり、平手打ちであそこまでのを食らった経験はほとんどなかった。
グッと足を踏ん張ってなかったら、今頃平手打ちで宙を舞っていたところだった。
しかしロッソはそんな事よりも気になった事があった。。
箒とこの中では一番近しいこいつが、何も言わねぇってのもおかしな話だな。

一夏意外の面々はなんとなく感づいてくれていたが、少なくともこいつだけにゃなんか言われるだろうと確信していたからだ。
それが全く何も言わずニコニコしてやがる。
どうなってんだ?

「なぁ、お前。さっきもあいつ等にゃ聞いたんだがよ。怒ってねぇのか?」
「箒の事か? そりゃ最初は何してんだって思ったけどさ。ラウラ達に言われてな。お前が箒のためにやってくれた事で、箒があなったんならそれはつまりそう言う事が一つの正解なんだろ?」

なるほどラウラ達が…。
あいつらにゃ、一つ貸しが出来ちまったなぁ。

ロッソはドリンクを口に含みながらラウラ達を一瞥した後、ビーチをぐるりと見渡す。
色々問題は起こしちまったけど、まぁデータ取りも一通り終わっているし、このまま後は何事もなく終わるだろう。

そう、ロッソが一息ついた時だった。

「た、大変です～～～ッ！！！」

ビーチに山田先生の声が響き渡る。
その尋常じゃない焦りっぷりに、そして何より織斑先生の目つきの変わりようにその場にいた誰もが嫌な汗が流れるのを感じていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「全く、まさか見つかるとはな」
叶が甲板に出てデータに目を通していた時、不意にオペレーターから端末へ通信が入った。
そして叶それを聞き事態は急転した事を確信する。
叶は、艦橋へ駆け込むと艦内放送のスイッチを入れ口を開いた。

「目標を発見した。全クルーは速やかに持ち場に戻ってくれたまえ。これより?守?は潜航し指定ポイントへ移動する」

叶の号令で、全クルーが自分の持ち場に滑りこむ。
流石はプロというべきか公私の区別はしっかりと出来ているようだ。

「各部駆動系統異常なし。気畜機内充填完了。上部カタパルト耐水圧ハッチ封鎖確認」
「弁閉鎖。バラストタンク注水準備整いました」

「それでは行こうか…。前進微速…潜航！」

巨大な鋼鉄のクジラがゆっくりと動き出しそしてやがて海の中へと姿を消す。
叶は完全に艦が潜航したのをクルーの報告で確認すると巡航速度への速度変更を指示してブリッジのデスクに座りオペレーターに声をかけた。

「しかし…よく見つけられたものだね…」
「えぇ、本当にようやくでした。これをご覧ください」
「これは？」
「発見時のレーダー画像です」

端末に送られてきたそれには確かに、探していた艦らしき影が確認できる。
しかし。
「かなり遠いな」
「えぇ……距離がここまであったとは思いませんでしたよ」

距離はあるがだがしかしようやく見つけた。

原子力空母スタン・フレイリー。
――――――さて後は間にあうか…だな。
叶えはその心配が徒労出会ってほしいと二時間半という移動時間願い続けていた。

「指定ポイントに到着。艦影一。本館前方です」
「よし機関停止。深度はこの場で固定だ。潜望鏡を上げようか」

クルーに指示を出し、潜望鏡をクルーがのぞく。
…さて間にあったかな？

叶はクルーの報告を待つ。
そして少ししてから、クルーの声が耳に飛び込んできた。
「前方に艦影あり……ですが……」
「ですが……なんだね？」
「燃えてます……目標炎上！」
「えぇい……」

叶はがっくりと肩を落とし背もたれに深く身を預けた。
遅かったか…。

「いかがなされますか？」
「そうだな……とりあえず浮上しよう」

叶は指示を送った後今回だけは叶は珍しく、本当に残念そうな顔で天を仰ぐのだった。

◇◆◇◆◇◆

つと、先に乗艦していた?守?のクルーの人たちの所にそれぞれ大型ポンプを設置していく。
そして大型ポンプのエンジンを始動させ給水ラインを海へと垂らした。

準備が整い順々にホースから水が放たれ、消火活動が始まった。
流石に甲板一枚が燃えていたので、時間はかかったがそれなりの人数と更に水は無制限。
ほどなく火は完全鎮火を迎えた。
僕はそれを確認すると、再び博士に連絡を入れる。

「博士」
『うむ……どうやら火は消えたようだね。聡也これから?守?を艦に接舷させる。他のクルーに先に調査を命じて、接舷するまで周辺警戒を頼むよ』
「分かりました」

僕は通信を切り、クルーに博士の指示を伝え艦を後にする。
まぁ、とはいえハイパーセンサーにも反応は無い。
それにだ。着艦後に少し?ホワイトアウル?のセンサーで確認したが人の気配はほとんどなく、救命ボートも全て下ろされていた。

つまりこの艦には人っ子一人いるはずがないし、炎上していたという事はつい最近何かしらの襲撃に遭ったと言う事だろうから向かっているとしても僕たちがかち合う可能性は低いだろう。
僕はそんな軽い気持ちで周辺警戒に当たった。

◇◆◇◆◇◆

まぁそうは言っても少年はなぜ自分が行かされたのかは分かっている。
それは至極単純な事で少年のＩＳ？ゴーストエース？に勝る速度を持った機体が存在しないからである。
速さがあると言う事はそれだけ速く現着出来ると言う事なわけで。
なんかこう言う時だけほんとコイツの速さが恨めしくなるぜ。
少年が心でつぶやくと同時にハイパーセンサーが目標とする艦を捉える。

「お、あれか――――って！？」

と同時にハイパーセンサーが、艦の他にも二つの大きな反応を感知し、少年は一瞬大きく目を見開いた。

っち、まさか先にどっかの誰かさんに見つけられているとは…。
それに……この片方の反応……おいおい、まさかＩＳじゃないだろうなぁッ。

とはいえ、このまま引き返すわけにもいかない。
任務は任務。
敵がいたからでは理由にならない。
だが幸いだったのは、高度が低かった事だ。
高度五百フィート以下で飛行を続けていたため、通常のレーダーに引っ掛かる可能性は少ない。
しかしＩＳが相手なら話は変わってくる。
頼むぜ～……。こんなところでもめごとは嫌だからな……

そう心の中で念じながら彼は飛ぶ。
白昼の調査活動が戦闘に発展しない事を？レイル・スカイライン？は切に願いながら。

◇◆◇◆◇◆

確かに…。
言われてみれば、ブリッジには火災で焦げたような後はある物の、ガラスにひびの一つも無い。
ブリッジの側面に描かれている？碇？をかたどったアメリカ海軍のエンブレムは綺麗に残っているし、よく飛行甲板を見てみると？一方向から強い力でめくられたような穴？が無数に空いていた。
更にその穴はそれは同じ向きでブリッジの陰になっている所にまで空いている。
これは、一方向から来た攻撃がブリッジを正確に？迂回して？装甲に突き刺さったと言う事。

こんな事？普通の兵器？では出来ない。
そう…つまりこれは……。

「んッ！？　何だと！？」
僕が博士に向かって口を開こうと顔を上げた瞬間、博士がかなり慌てた様子で叫ぶ。
そして僕を見て、叫んだ。
「聡也、艦の左舷後方だッ！」
何が左舷後方か。僕は博士の焦り様を見ただけで理解した。

僕は丁度左舷側の甲板端にいたためそのまま体重を後ろに掛け甲板から自由落下する。
すると見えた。

海上に光る白い影が。
「あれかッ！！」

僕は左腕の荷電粒子砲のトリガーを引く。
高速機動でこちらに向かってきていたそれは、戦闘機のようにも見

えたが速度的にはＩＳかもしれない。
だがどちらにしても、固定翼機が一瞬の判断で避けられるタイミングではないはずだ。
当たる、直撃だろう。

「ッフ……？ホワイトアウル？初めての……鉄クズですねッ」

その事を確信し僕は口元を緩める。
しかしそのすぐ後に僕の顔は、驚愕に変わっていた。

その戦闘機は、本来の固定翼機には不可能な機動で急旋回すると気がついた時には空高く舞い上がっていた。
翼は可変翼だったらしく急旋回に合わせて翼の後退角もかなり浅くなっている。
いやそんな事よりも。

「まさか避けるとはッ！？」

僕は機体を立て直しスラスターフィン二枚を開く。
スラスターフィンは計六枚で構成されており、展開枚数に応じてスラスター開度や機体制御システムの介入度合などをコントロールする。
そこへオープンチャネルで博士から通信が届いた。

『かなりの高軌道型の様だね……』
「どうします？」
『先ほどオペレーターから連絡があってね。機体の詳細は分からないがアメリカ国籍のＩＳだと言う事が判明したよ』

やはりＩＳだったかと舌打ちをし、上空を旋回しながらこちらを伺う機影を睨む。

「合衆国ですか……とすると飛来した目的は……」

『十中八九この艦の調査だろうね……ご苦労な事だ』

「それで？」

『ひとまずまだ調査は済んでいない。聡也悪いがあのＩＳをこの艦から遠ざけてくれたまえ』

「……分かりました」

通信が切れ僕はスラスターを噴かして相手と同じ高度まで上昇する。

そして旋回機動の真ん中に、僕は堂々と機体を割り込ませた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

やっべ、やっちった。

オレは旋回しながら、白いＩＳを見降ろしてごちる。

何があったかというと…。

よし、どうやらあの潜水艦はこちらにまだ気が付いていない。

多分、レーダーの最低感知高度以下をオレが飛べている証拠だな。

おっし、このまま――――――――――って！？

そう思ってレイルが少し速度を上げた次の瞬間目の前にあったのは大きな一枚の飛行甲板の残骸。

それがまぁ、旨い具合に斜めになって浮かんでいたのだ。

「ちょ、お、わぁッ！？」

オートクチュール?ドッグ・ファイター?は言ってみれば可変翼を持った?ゴーストエース?の戦闘機バージョン。
戦闘機以上の速度を出せるが旋回性能はというと、航空自衛隊のＴ－７練習機（ブロペラ機）にも劣る残念スペックなのだ。
避けられるはずがない。
後はご想像の通りだ。

ゴギャンッ！

その漂流していた飛行甲板の角度のまま機体は大きく跳ね、慌てて高度を落とした時には時すでに遅し。

今考えるとＡ・Ｆ・Ｃ（アクティブルイドコントローラー）があったのだからそれで回避すれば良かったのではないかと少し後悔…。

まぁその後の攻撃はそれで避けられたんだけど。
ちなみにＡ・Ｆ・Ｃとは第三世代兵器の一つで?ゴーストエース?周辺の流体を操作することで空気抵抗すら無視できるシステムの事だ。

っと、そんな事考えてる場合じゃねぇか。
オレは上昇してきた、白いＩＳを見やる。
そいつは堂々と旋回機動の真ん中に割り込んできた。

すると突然オープンチャネルが開く。
相手は…あの白いヤツか…。
『……あなたは……何者です?』
「悪いけど、それを言うわけにはいかな…んんッ…いきません」

あっぶねぇ、男言葉出るところだった。
現在確認されているＩＳを動かせる男は？公？には織斑　一夏ともう一人アメリカ人がいるとされている。
そう？公？にはね。
その後、もう一人ＩＳを動かせる男子が見つかった事は軍や政府によってその情報自体が厳重に伏せられているのだ。

そのため、自分が？男？であるという事を事情を知る物以外には原則ふせねばならない。
かといって女言葉なんて言いにくいし言いたくもない。
そんな理由から、レイルは敬語を使うようにしていた。
これなら、話し方だけで男女の区別をつける事は難しい。

『そうですか……では聞き方を変えましょう。あなたの目的はなんですか？』
「それにも答えかねますね……」
『……はぁ……そうですか』
「…？」

大きくため息を吐く白いＩＳ。
オレが丁度相手の背面に回り込んでその様子に首をかしげた瞬間――――。

ドンッ！！

「うわッ！？」
『すいませんが……少しお相手願いましょう！』

くっそ撃ってきやがったッ。
しかも今こっちを見てなかったし。

まぁハイパーセンサーを使えばその程度お手の物なのだろうが、いくらなんでも正確すぎる。
相手がこっちの速度を読み違えていなければ、直撃だっただろう。
それだけでオレは相手の技量がかなり高い事を読みとっていた。

Ａ・Ｆ・Ｃを使用しての旋回機動から、オレは一気に高度を下げ速度を増し海面すれすれを飛ぶ。

『速いッ』
「まだ全力の半分以下ですけどねッ！」

オレは充分に距離を取って旋回。
敵へと速度を生かして一気に突っ込んでいく。
そして?ドッグ・ファイター?に搭載されている十二発の短距離ミサイルが一斉に発射されそれと同時に自分も?ドッグ・ファイター?をパージする。

これ難点はパージしなきゃ肢体がまともに動かせない所だよな…。
ミサイルは、全て相手に撃ち落とされてしまったがこれでいい。
オレは、ガチャリとレールガン?メタルブレイカー?を構えてほくそ笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ちぃッ、速すぎるッ！
聡也の?ホワイトアウル?のスラスターフィンは四枚展開。これだけでも充分高機動のＩＳと互角程度の機動力は得ているはずなのにのに聡也はレイルに追いつくどころか、ハイパーセンサーを持ってしてもしっかりととらえられない。

これでは遠ざけるうんぬんの話じゃないッ！？

するとレイルがＩＳのオートクチュールをパージ。それと同時に十二発ものミサイルがこちらへ向かってくる。

「流石にその程度ではッ」

いくら追えないと言ってもそれは相手のＩＳの話。

ＩＳ武装とはいえミサイルごときにあたってやるわけにはいかない。

『――――スラスター開度七五パーセント、機動制御システム介入による機体誤差値修正――――』

スラスターフィンと連動して、機動制御プログラムが介入を開始する。

推力増強に伴って大型化されたスラスターに完全に火が入り機体を一気に押し上げる。

上昇しながら、半分は荷電粒子砲の太い閃光がまとめてミサイルを落とし、残りの半分は新たに搭載されたバタフライブレード？ストレートフェザー？を抜いて切り裂いく。

？ストレートフェザー？はＩＳ－Ｎがバッテリー駆動である事を鑑みて実刃のみの近接ブレードとして造られたがその切れ味は中々に良好なようだ。

左手に砲を右手にブレードを。

一見するとサムライガンマンの様な、格好で聡也は距離を置いて敵ＩＳの様子を伺う。

…しかし……あんなＩＳ見たこともありませんね……。歩行機能す

ら削って、機動力に特化させるとは。
敵ＩＳの姿は、明らかに従来のどのＩＳにも似ても似つかないほど独特なフォルムをしている。
パワースーツという言葉がぴったりなほどに、無駄を極限まで減らした細身のフォルム。
恐らく、あれだけの薄さだ荷電粒子砲の一発で落ちる。

……問題はどう当てるか。
実際一つだけあの速さに対向する術はあるにはあるのだが、改良後の初起動でそれを行うのも気が引ける。
しかし残念ながら？ホワイトアウル？には連射性能の高い武装が備わってはいない。
つまりあのＩＳの足を止める事が事実上できないのだ。
だがそれならそれなりにやり方という物もある。

聡也は左手の荷電粒子砲を構える。
……いくら速いとは言っても、そこに存在しているのなら…

「機動を制限する事は出来るッ！！」

聡也はレイルの機動の先を読み、トリガーを引く。
マズル内で収束されたエネルギーが一拍置いて、バチィッ！！というスパークの様な音を立てて放たれそして――――――――――――。

――――霧散した――――――
「何ッ！？」
「悪いですけど、それは撃たせるわけにはいきませんね？」
通信から余裕たっぷりなレイルの声が響く。

ビーム拡散膜内臓弾頭だったのかッ！
聡也は顔をゆがませると、スラスターを噴かし移動する。
あのミサイル。
爆発自体はさほど大きなものでは無かったが、周辺一帯にまき散らされたのは粒子。

いくらハイパーセンサーでもそれを見極めるのは不可能だ。
「やってくれるッ」
聡也は砲をラックにもどし、片方の腕にも？ストレートフェザー？を構える。
粒子の滞留時間が正確に分からない今それを待っている余裕はない。

こうなったら仕方が無い。
もう気が引けるなどといっていられる状況ではなくなない。
最大稼働はまだテストもしていないが、とにもかくにも砲撃が使えない以上格闘戦に持ち込むしかなくそのためには相手に追いつかなければならない。

「スラスターフィン、全展開（フルアクティブ）！　バイパスバルブ変更スラスター直結、システム介入オフ。ＯＳスリープ解除」

モニターに映し出される機体のステータス画面で、先ほど聡也が指示した作業が素早く行われそして全てのシークエンスが終了するとピーっという電子音の後にモニターに大きく文字が躍った。

?Ｓｐｅｅｄｓｔｒｉｋｅｉｎｇ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ
Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｓｙｓｔｅｍｓ?

?Ｈｉｇｈ　ｍａｎｅｕｖｅｒ　ｓｔｒｉｋｅｉｎｇ　ｓｔａｒｔ.
　Ｔｈｅ　ｅｘｃｌｕｓｉｖｅ　ＯＳ　?Ｓｏｎｉｃ?ｓｔａｒｔｅｄ?

【――――高機動格闘戦闘開始　専用ＯＳ?ソニック?機動――――】

その瞬間。

レイルの前から白い影が消えた。

第４１話～邂逅する白い翼～（後書き）

この回は、？スタン・フレイリー？が炎上しているというシーンですがこの艦に乗っていたのが誰かという事を考えれば、何を言いたいのかはすぐにわかるでしょうｗ

炎上させたのがＩＳだと言う事も含めればね？

さてこのレイル君はハンバルさんのＩＳの二次創作？ブレイズセブン？の主人公です。
ようやくお約束通りコラボさせてあげられましたが彼はしばらく出てきます。
予定では福音戦辺りまではちょこっと出てくるかも…。

そんな感じですが、よろしくお願いします。

ではまた次回。
失礼します。

……にしても戦闘シーンって難しいですね

第４２話～白の衝突　紫の乱入　銀色の暴走～（前書き）

福音戦第一回戦前の叶さんの言う前座の更に前のお話

第４２話～白の衝突　紫の乱入　銀色の暴走～

「嘘だろ？」

小声で呟きそして、見渡すも？ホワイトアウル？の姿は無い。
レイルは心底驚いていた。

この？ゴーストエース？の速度に付いてくるどころかこちらが見失ってしまうなど初めての事だったからだ。
そして気がついた時には、？ホワイトアウル？は真上にいた。

「捕まえましたよ！」
「なッ　くッ！！」
聡也の二本の？ストレートフェザー？を前に突き出した？メタルブレイカー？で防いだとはいえ、ブレード、機体そして何より全展開（フルアクティブ）された？ホワイトアウル？の推力がレイルを上から押し付ける。

「くっそッ」
「はぁっ！！」

聡也は？メタルブレイカー？ごと？ゴーストエース？を弾くと、少し距離を取り今度は相手と同じ高さから再び切りかかる。
速さが互角ならば、多少距離を離そうと支障はない。
聡也は右側の？ストレートフェザー？を振るう。
レイルはまたも、それを？メタルブレイカー？で防ぐが聡也はそれを確認するやすぐさま、もう片方の？ストレートフェザー？を横薙ぎに払う。
「甘いッ」
しかしそれはレイルも予測済み。防いだ瞬間にわずかに機体を引き

それを難なくかわす。
「それはこっちの台詞ですッ」
だがそこからさらに聡也は一歩踏み出して、追撃のソバットを叩きこむ。
推力は常にフル稼働状態の？ホワイトアウル？の踏み込みはレイルの予想をはるかに超え、レイルの腹部に思い切りめり込んだ。
更に一瞬のスラスターフレアを残し？ホワイトアウル？が消える。
「っ――――！」
レイルはとっさに腕部の？ハンドシールド？を展開するもすれ違いざまに振り抜かれた二本の？ストレートフェザー？の威力は機動力を限界まで高めた軽量な？ゴーストエース？を吹き飛ばす事など容易かった。

「ぐあッ！？」
今度こそ大きく吹き飛ぶレイル。
そこへ止めと言わんばかりに、決定的なダメージを入れるべく聡也が飛びこむ。
「貰いました！」
だがレイルとてそう何度も何度もあられっぱなしというわけにもいかない。
「そう何度も何度もッ」
レイルは？メタルブレイカー？の狙いを定めずトリガーを引いた。
その形状から？釘？と呼称される？メタルブレイカー？の弾丸は武器の名が示す通り徹甲弾である。

放たれた弾丸はかなり至近距離であったという事を差し引いても、？ホワイトアウル？の装甲を貫通するには充分な威力を持っていた。
「徹甲弾か！？」
ばらまかれた弾丸が？ホワイトアウル？の装甲をえぐる。

そして運の悪い事にその弾丸の一部が、スラスターフィンをかすめていた。
「な、しまった!?」
『――――スラスターフィン二番四番翼異常検知――――』
「くっそこの、もう少し耐て!!」
聡也は、ステータスモニターに叫びながら?ゴーストエース?に再び迫る。
流れる汗は、?ホワイトアウル?のフルドライブがそう長くは持たない事を示していた。
激しくぶつかり合う二機。
しかもかなりの高機動戦。
勝負は一瞬。
二人は戦いながら、その意味をよくかみしめていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時折、轟音が響く艦の上を叶は歩く。
「もう少し向こうでやってもらいたいものだが……文句は言えんな。N一機では、まだこの程度が限界か…」
叶はつぶやきながら歩みを進める。
彼女が向かっているのは、この艦のブリッジである。
鉄製の階段を上り、重い扉を開ける。
そして細い通路を通った先が操舵室だ。

「……ふむ。慌てて避難したと見えるな」
叶は、パラリと床に落ち逃げるクルーに踏み荒らされボロボロになった海図を拾いあげそれを海図台に広げる。
……これはこの海域の物では無いな……。

しかしこの海図台には、他の海図もあったが全て丸められており、広がっていたのはこの海図のみ。
「やはりこの艦は、あの我々がいた海域にいたようだね」

しかしだ。だとするならばこの艦はなぜこんなところまで…。
叶は、考えを巡らせそして一つの結論へたどり着く。

……海流か…。
このハワイ沖合は黒潮の影響でかなり潮の流れは速い。
そしてこの艦は、アンカーを下ろしていなかった。

……潮の流れというのであれば方向性や距離そして現状証拠のどれをとってもつじつまが合う。
やれやれ、まさか潮に振りまわされただけだったとは…。
発見が遅れた事が本当に悔やまれる。

叶は頭を掻きながら、ゆっくりと視線を動かす。
すると、先ほど見ていた海図台の近くにもう一枚Ａ４サイズの紙の束が落ちているのに気がつく。

ん？　…これは…。

そしてそれを拾い上げパラパラと目を通した叶は、意味深な笑みを浮かべその束を持ったままブリッジを後にした。

◇◆◇◆◇◆

しかし元々そう言った回生システムを含めての最大稼働時間が定められているわけだから、このシステムを使い続けると言う事は必然的に最大稼働時間を極端に縮める結果に繋がってしまう。

そして例にもれず聡也には、なんとかスラスターフィン異常でのシステムの強制停止は待逃れたものの、活動限界というどうしようもない現実が目の前に迫りつつあった。

オーバードライブを使用して加速する？ホワイトアウル？とその速度域が常用の？ゴーストエース？ではいくらエネルギー残量が減ってきているとってもどちらが効率的にそのエネルギーを使えるかという見方で見れば答えは火を見るより明らかだった。

もうこれ以上、全展開（フルアクティブ）を使い続けていたらシールドエネルギーまで食いはじめてしまうッ

実際、このＩＳを倒す必要は聡也には無いが、やる以上負けたくはない。

それはレイルも同じ事を思っている。

聡也はレイルの？釘？をかわすと一気に肉薄素早くシャープに？ストレートフェザー？を振り抜く。

「どうしたんです？　少し鈍くなってきましたよッ！」

「減らず口を！！」

しかし、聡也がそこに到達した時は既にレイルはそこにはおらずブレードが宙を切るヒュンっという音だけがむなしく響く。

逆にレイルもレイルで、近接戦闘武器がほとんど無い上に？メタルブレイカー？の残弾も少なくなっていた。

何より？ゴーストエース？はこれほど肉薄されての戦闘を想定していない。

あくまで機動力に頼った、？ヒットアンドアウェイ？が基本戦法。
それは他の追随を許さない、圧倒的な速さがあるからだ。
しかし今は違う。
現に聡也はレイルに追いつき、ブレードを振るってくる。
エネルギー残量で肝を冷やすのが聡也ならば、レイルは当たれば確実に一撃で終わるそんな瀬戸際のギリギリの状態で肝を冷やしていた。

レイルはブレードを避けると、接近を許さぬようパルスレーザーの？ラピッドレイ？で弾膜を張る。
これで若干時間は稼げた。
そう思った矢先だった。

「何！？」
「もうちまちま避ける時間が無くなりましてねッ！！」

聡也が無理やり弾膜の中を突っ切る。
予想外だったレイルはワンテンポ反応が遅れてしまった。

「ようやく決着ですねッ」
「しまっ！？」
聡也の口角が釣り上がる。
タイミング的には最悪。聡也にとっては最高だった。
物質はそんな物でも、動きだしからトップスピードに達するにやはそれなりの時間を必要とする。
それはＩＳでも変わらない。

――――――――――やばいッ！――――――――

そうレイルが思った刹那だった。

絶対的優位の聡也が再び焦りの声を上げたのだ。

「ッ！　まさかッ！！」

見ると？ホワイトアウル？はスラスターから火が消えかかり、バランスを大きく崩していた。

『Ｒｅｍａｉｎｄｅｒ　Ｅｎｅｒｇｙ　ｄａｎｇｅｒ　ａｒｅａ．
ＯＳ　？ＳＯＮＩＣ？ｆｏｒｃｅｄ　ｓｔｏｐ．　ｓｙｓｔｅｍ　ｅｎｅｒｇｙ－ｓａｖｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｂａｔｔｅｒｙ　ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｓｔａｒｔ．　ＩＳ　ｍａｉｎｔｅｎａｎｃｅ　ｈａｓ　ｔｏｐ　ｐｒｉｏｒｉｔｙ』

【残りエネルギー危険域。　ＯＳ　ＳＯＮＩＣ　強制停止。省エネルギーモードへ移行しバッテリー回生モード再開。ＩＳ維持を最優先に。】

？ホワイトアウル？のモニターに踊る文字に笑みは消え顔がゆがむ。

「パワーダウンだとッ！！」

スラスターフィンが閉じ、エネルギーバイパスバルブが切り替わる。

それと同時に一瞬でレイルを追いきれなくなってしまった。

だがこれはレイルにとってはピンチがチャンスに変わった瞬間だった。

「よし、貰いましたッ！」

レイルはここぞとばかりに？メタルブレイカー？を放ち？ホワイトアウル？の装甲を切り刻む。

「ぐぅッ！！」

そしてマガジン全部を撃ち尽くすと同時に？ホワイトアウル？がぐらりと傾いた。

その瞬間、勝敗は決定し――――――――無かった。

「オォォォォォォラァァァァァッ！！！！！！！！」
「ッ！？」
バッと振り返る。
そして太陽に照らされた紫の機影を、レイルのハイパーセンサーが捉えた。
ピピッとレイルのＩＳにその機体の情報が送られてきた。
…紫燕！？　スタイルは…ッ！！　高機動型かッ！！
正直この状態で、新たなＩＳしかも超がつく高機動型となどやりあえるはずもない。

レイルは迫る？紫燕？の突き出し？大蛇？を一瞬のスラスター操作で上に避け柄の上に脚部をのせ思い切り蹴った。

「あんだとッ！？」
「すいませんねッと！」

蹴られた柄ごと進行方向をずらされた聡華は舌打ち交じりに声を上げ聡也を回収して振り返るが、そのままレイルはそんな二人に構っていられないとばかりに機体の速度を上げる。

そして歯噛みする聡華を尻目に水平線のかなたへと消えた。

「くそッ！」
まだ追おうとする聡華をいさめたのは、通信の向こうの叶だった。
『聡華、あれはもう良い。深追いはせず聡也を曳航して帰艦したまえ』
「いやけどよ…ッ」
『言いたい事は分かるが、いまはそれどころでは無いのでね』
「ッく……っけ、わあったよ」

聡華は不満そうに渋々といった感じで頷く。

「……ほんと、タイミングが良いのか悪いのか……」

聡也にしてみれば九死に一生を得たわけだからタイミングはよかったのだが、聡華にしてみれば新型の？紫燕？の能力を一ミリも使えなかったのだからタイミングは悪かったと言える。

だから聡也のそんな一言が聡華には意外とグサリと来た。

帰艦した二人を叶は、格納庫で出迎える。
既に二人は、ＩＳを降り私服に戻っていた。

「やぁ、聡也、聡華…お疲れ様だったね。にしても聡華。久しぶりじゃないか？」
「ふんッ、まぁな」
「こちらとしては、連絡の一つぐらい欲しかったものだが…まぁいい」

叶は、視線を聡華からハンガーにラックされた紫燕へと移す。
……随分と形を変えてきたな……。パッケージ？八岐大蛇？とはまた何ともあの誠一郎らしいネーミングだと思うが。

叶はメカニック達が抽出したデータを端末上で確認する。
機動力に主眼を置いた機体である事は変わらずだが、パッケージ自

体の性能は中々に面白いものだ。
精々有効に使わせてもらうとしよう。

「しっかしよ、本当に良かったのか？　追わなくて」
「えぇ、そうですね。合衆国の機体ならば逃がして得な事は無いと思いますが…」
「何！？　あれアメリカの機体だったのかッ」
「知らずに飛び込んできたのか…聡華らしいがね」
「ほっとけ」
聡華はフンっとそっぽを向くが叶はそれに構わず、先ほどの疑問に答える。

「まぁいいだろう。なぜ追わなかったかだがね。先ほど通信で言った通りだよ。それどころではなくなってしまったのでね」
「そう言えばそんな事仰ってましたが……あのＩＳに交戦データを持ちかえられるよりも重要視すべき事がおありだと？」

聡也の言いたい事はもっともだ。
こう見えて色々派手にやらかしてはいるが叶は実のところ色々と各国から目をつけられている人物でもある。
アメリカもその国の一つ。
国際指名手配とまで大げさなものではないがその動向に各国が若干神経をとがらせているのは事実なのだ。
しかし、叶は聡也の心配などどこ吹く風。
ゆっくりと頷くと小脇に抱えていたＡ４サイズの紙の束を渡しいつものようにひょうひょうと言葉を連ねた。

「ふむ……まぁこれを見たまえ」
「なんだ、こりゃ？」
「表紙はＩＳの運用許可証ですね。…そして演習項目やデータ採取

に関する基準数値のデータ録…」
「その後ろのデータはともかくとしてだ。その運用許可証を受けた機体名を見てくれたまえ？」
叶の言葉に促され二人は、その項目を探す。
そして二人はその項目をほぼ御同時に見つけ、そして同時につぶやいた。
「「……シルバリオ・ゴスペル……」」
それと時を同じくして叶の端末にオペレーターの声が響いた。
『高速移動中のアメリカ国籍ＩＳをレーダーで捕捉。対象速度域スーパークルーズにて航行中。レーダートレースのまま進路一九八に変更します』
「一九八……？」
「……まさかッ！？」
進路変更を聞き聡也が何かに気がつく。それを見て叶はニヤリと笑う。
「そういう言うわけだ？　まぁ、前座には間にあわないだろうが……」
そこまで言って叶は意味深な笑みを浮かべる。
そして一層声のトーンを落として、言葉をつづけた。
「本番までには間にあうだろう……ねぇ？」

◇◆◇◆◇◆

最後の大丈夫という言葉が、僕にはどうも自分に言い聞かせているように聞こえて仕方が無かった。
しかし確かにセシリアの言うとおり今は有事。言い方は悪いが今いない人物の事を考えても仕方が無い。

僕は、データとにらめっこして一言も口を開かない博士に意見を求めた。
「博士はどう思います？」
「そうね…。格闘戦闘は未知数だし……しかも飛行速度も有に音速を超える相手…」
「速度域から見ても、ＩＳ－Ｎで太刀打ちできるレベルの相手じゃありませんねぇ…。聡也君には悪いですけど」

悔しいが仕方が無い。
学園の専用機にさえ押し負けるＮの性能では軍用ＩＳなんて抑えきれるはずもない。
……せめて、？ナイトシュライク？が使えれば……。
あの推力なら少なからず力になれると思ったのに…

あのビーチでの試験で一度たりともその姿を現さなかった？ナイトシュライク？。
どういうことなのか博士でも分からないらしい。

「まぁどっちにしても、この速度域ならアプローチは一回が限界…ですよね？　織斑先生？」
「えぇ、そうなります。ワンアプローチワンダウン。攻撃する機体はそれなりの機動力を持ち尚且つ一撃必殺の武装を持った機体で決まりでしょう」

織斑先生の言葉に全員が全員ゆっくりと、とある一人の人物を見やる。
「それなりの…」
「機動力があって…」
「一撃……」
「……必殺」
ちなみに上からシャルロット・鈴・ラウラそしてセシリアである。

「……あ～えと…俺がどうかしたのか？」
「……うん、まぁ決まりだろうな」
最後にポンっと肩を叩かれるその人物、織斑一夏だったが未だによく状況を把握できていない様子だった。
そこに鈴が、ため息交じりに説明を沿える。

「だから、あんたの？零落白夜？で落とすのよ」
「ま、待ってくれよ。本気か皆！？」
一同が無言でうなずく。
しかし一夏の動揺は無理もないことだと思う。

いきなりそんな大役をやれと言われてすぐに頷ける人間なんていない。
きっと僕だって尻ごみしてしまうでしょうね…。
しかし最大の攻撃力を持つ機体が一夏しかいない事もまた事実。
やってもらうしかない。

その辺りの心境を織斑先生はくみ取ってか、一夏に問いを投げかけた。
「織斑……これはもう訓練じゃない。自信が無いのであれば辞退してもいい。たとえここでお前が辞退したとしても、誰も何も責めん……どうする？」

口調はいつものように淡々としていたが、ニュアンスとしては出来れば行ってほしくないそんな気持ちが込められているように感じられる問い。
一夏もそれは分かっている事だろう。

一夏は静かにうつむき考え、そして次に顔を上げた時には迷いは消えていた。
「……やって見せます」
「……そうか。分かった。では具体的なアプローチ方法に入ろう」

織斑先生は一瞬だけ複雑そうな顔を見せたが、すぐに表情を戻し腕を組む。

「問題は速さね…。音速飛行中の相手にどうやって接触するか」
「エネルギーは攻撃に全部回した方がいいよね。とすると理想としては何かに運んでもらうのが一番なんだけど…」
そう相手は高高度を高速で飛行している。
未知数な部分が多い相手なのだから、下手に長引かせるのも得策ではない。
シャルロットの言うとおり攻撃にエネルギーは全て使った方がいいだろう。

「ですわね……。何かこう垂直にドンっと射出出来るような装置があれば…」
「……え？　セシリアちゃん今なんて言ったのかしら？」

セシリアが何気なく言った一言に博士が食いつく。
「え、いやですから、垂直に射出できるような装置があれば良いなと…」

「それよ！」
いきなり大声を出して指を鳴らす博士。
何事かとその場の全員が、一斉に博士に注目していた。

「あの、博士？　一体何がそれなんで…」
「要はランディングポイントに？白式？が間に合えば良いんでしょう？」
「そうですね、まぁそれは……そうですけど」
博士はニヤッと笑うと傍らで端末を操作していたリリスさんに声をかける。

「リリス！　？戦？はすぐに動かせる？」
「え、えぇと……今丁度、駆動部周りの整備点検中ですから二十分あればなんとか」
「ま、まさかッ！？」
「えぇ、そのまさかよ？」

勝手にその間だけで、納得している僕達にラウラが割って入った。
「すまないが……その…どういうことなのだ？」

「「「「うん…うん」」」」

他のメンバーも同様だったようで、一斉に首を縦に振る。
彼女たちに指をピンと立てると博士は笑みを絶やさず言った。

「一夏君を、？戦？のカタパルトから一気に射出するわ！」
「し、しかし、いくらカタパルトといえど推力を使う事に変わりは…」
「一条博士。ボーデヴィッヒの言う事も一理あります。出来れば推力は使わず織斑を現場に運びたい」

「うっ……じゃぁ…駄目ね…」

一気に勢いを殺され、しぼんでゆく博士。

あ～ぁ、格好悪い…。

また議論が振り出しに戻ったかに思えた時セシリアが意を決して立ち上がる。

「なんだ、オルコット？　何か案でもあるのか？」

セシリアは頷くと、織斑先生に進言する。

「私は先ほど、一条博士がおっしゃられた作戦に賛同しますわ」

「何？」

「だがあの方法では一夏はエネルギーを使ってしまうぞ？」

「だったら……文字通り運べばいいのですわ！」

運ぶ？

いやだからそれを今どうするかで議論をしているんじゃ……。

「……あ、そうか」

ポンっとリリスさんが手を叩く。

「何が…そうか…？」

「つまりオルコットさんは、一夏君を…」

「文字通り運ぶと言うわけね……」

え……えぇ！？

セシリアは、リリスさんと博士の言葉に頷くと視線を織斑先生に戻した。

「？ブルーティアーズ？の高機動仕様？ストライクガンナー？のインストールは三十分あればなんとかなり「二十分で充分よ」…え？」

博士が腰に手を当て、言葉を遮る。

その目はもう、どこかの冗談交じりの科学者では無い。
Ｎの技術責任者として、そして一技術者としての自信に満ち溢れている。

「私達のスタッフは、ＩＳの技術者を引き抜いてきてる。全力でサポートすれば？戦？の移動時間内でインストール・調整から戦闘行動可能状態にまで持って行って見せる」

織斑先生は、博士の目を見てゆっくりと頷く。
それが合図だった。

「リリス、？戦？に連絡を入れて。整備点検中でも何でも動かせるようにするのよ！」
「は、はいッ！」
「よし、織斑、オルコット両名は準備を始めろ。他の者はサポートにまわれ。尚現時点を持って対象はこれより対象を福音と呼称する」
「はいッ」
「分かりましたわ！」

それぞれが素早く持ち場に散っていく。
その顔つきは誰も真剣そのものだったが、どうにも僕にはセシリアの顔だけが、切羽詰まったような焦りの表情にも見えて仕方が無かった。

……あれ？そう言えば志穂音はどこへ行ったんでしょう？
当然来るものだと思っていましたけど……？

◇◆◇◆◇◆

作戦変更を不備から知らされずに、無意味な作戦にひん死の重傷を負いながらも死に臨んでいく主人公。

もちろんこの作戦が無意味だとは言わない。
でもなぜか、志穂音には一夏がその主人公と重なって見えていた。
志穂音は、はぁッと息を吐くとかぶりを振って考えを振り払う。

やめやめ…。
縁起でもない…。

そう……。

――――――縁起でもない――――――。

第４２話～白の衝突　紫の乱入　銀色の暴走～（後書き）

次回いよいよ福音戦が始まります。

主役登場はもう少し後ですね。

あと、全く関係ないですが、急に冷え込みましたからお身体にはお気を付けくださいね。

では失礼します。

第４３話～？銀色？がもたらす絶望と？赤？がもたらす？紅き？希望～

『？白式？及び？ブルーティアーズ？射出ポイントまで距離約五千』
「分かったわ。千五百を切ったら前進微速まで落として。ポイントが下手にずれても厄介だから」
『了解です』

プッと通信が切れ、恵は息を吐いて視線をへ動かす。
そこにはハンガーに固定された二機のＩＳを調整するリリス達技術者、サブメンバーとして乗艦したラウラとシャルロットそして操縦者である一夏とセシリアがいた。
機体は主にエネルギー配分、セシリアはとにかく急ピッチで高機動パッケージ？ストライクガンナー？のコア着床作業が進められている。

ちなみにラウラは、軍人故の経験豊富さそしてシャルロットはオールラウンドにそつなくこなせる技量を持ち合わせているとの理由でサブメンバーに選出されている。

恵は何気なくその状景を見ていたが、やはり部下が気になるようで自然とその目はリリスを追っていた。

「ここは、まだちょっと削れますね」
「え？　でもここまでやっちゃうとシールド分が紙以下になっちゃいそうなんですけど…」
「だったらスラスターに振り過ぎてるエネルギーの余剰分を回しちゃいましょう」
「あ、なるほどそうか…」

「もう少しスラスターの出力を上げられません？」
「？ストライクガンナー？の出力総計はかなりのものですよ？これ以上。上げることはできなくないですけどかなりピーキーになっちゃう可能性がありますね」
「ですがスピードが命の作戦ではありませんか」
「だからって扱いきれない速さはかえって足かせですよ」
「ですけどッ」

なんかこう……リリスがテキパキ動いていると違和感があるわね。とても浮上の度に酔って目を回しているとは思えない。
まぁそれだけ、真剣なのだから良い事だ。

自分もそう言う事を考えられていると言う事は、それほど変に緊張していないと言うことなのだろう。

しかし気になるのはセシリアで、先ほどのリリスの意見を聞いてもなお食い下がっている。
その姿は緊張といったものというよりはかなり切羽詰まって、自分を変に追いこんでいるようにも見えた。

恵はハンガーの傍に歩み寄ると？白式？のエネルギー配分をモニタリングしていたシャルロットに声をかけた。
「ねぇ、シャルロットちゃん」
「はい？」
「セシリアちゃん……どう思う？」
その問いにシャルロットは、複雑な表情を浮かべセシリアを見る。
当然と言えば当然だろうがやはり恵以上に、セシリアの今の姿が気になっていたようだ。

「かなり……無理はしていると思います…ね」
「やっぱり、そうよね」
「きっと、アルディがあんな事になっちゃったし……それを気にしてて。
で、多分旅館でのブリーフィングの時に鈴が思わず言っちゃったことでそれを抑えられなくなっちゃったんでしょうね」

「……そう…」

アルディとセシリアの関係は聡也から聞いて知っていた。
あの暴走事件の事も。
そして、不意に口を吐いて出てしまった鈴の？これこそアルディが適任の相手じゃんッ？という台詞がキカッケになって、アルディが居ないのならば自分がその代わりをしなければっと考えたのだろう。
その気持ちはよく分かる。
分かるのだが…。

「でも……結構危険よね、そういう心理状況での出撃って…」
「それはそうですけど。僕だって変われたら変わりたいですよ……。
あんなセシリア見ててつらいですから。
でも僕のリヴァイヴじゃどうやっても推力が足りないし、現状では専用のパッケージ装備も無い…。
物理的にそして作戦的にも、セシリア以上の適任が居ないのも事実。
…なんだか歯がゆいですね」

選択肢無し……か。
恵は、再度セシリアを見やる。

一撃必殺の威力を秘めたＩＳは燃費が極端に悪く、もう片方は心理的に不安定。

こりゃ、ちょっと……いや…かなり厳しくなりそうね。

嫌な予想ほど立ちやすいとは何とも情けない話だが恵は今、そんな事を考えることしかできなかった。

◇◆◇◆◇◆

アルディが居ない今、自分がやらなければ。

『準備は良いわね？』

「いつでも大丈夫ですわ」

「俺も大丈夫です…」

『……気をつけてね……それじゃ始めて頂戴』

通信が切れガガンッという音と共にリニアカタパルトが稼働する。

そしてそれに伴って、ハッチ内に次々とオペレーターの声が響いた。

『リニアカタパルトオンライン。システムオールグリーン。磁場形成射出推力値（ステータス）クリア』

『ハッチ解放。射出進路本艦基軸に十二時（トゥエルヴクロック）・射出角十九十度（トゥ・ハイ）』

ハッチが開き、雲ひとつない青空が目の前に開ける。

この先にいるのだ……。

絶対に止めて見せますッ！！

『進路クリア、発進どうぞッ！！』

「？ブルーティアーズ？セシリア・オルコット……行きますわッ！！」

リニアレールの生み出すとてつもない射出推力が一気に？ブルーティアーズ？を空高くまでに押し上げ、その速度を落とすまいとビットの攻撃システムさえも捨てスラスター分に回した高機動パッケージ？ストライクガンナー？の強大な推力が？白式？という荷物を乗せた状態にもかかわらず更に速度を増してゆく。

そして頭部に増設された？ブリリアント・クリアランス？が時速五〇〇キロを超える超高速の世界の情報をセシリアに伝える。

そしてそのバイザーセンサーが肉眼では米粒以下の大きさの機影をとらえた。

「見つけましたわッ！　一夏さん準備をッ」

「あぁ、一発で決めてやるッ！！」

そこに恵からの通信も入った。

『タイミングは正確にッ。一夏君、スラスター全開までマイナス八秒！』

「了解ッ！！」

七…六…五…四…三…二…一…――――――――――

「「今ッ！！」」

「オォォォォォォッ！！！！」

一夏が？零落白夜？を発動と同時に？イグニッションブースト？で？射出台（テーブル）？から飛び出す。

そしてセシリアも、？射出台（テーブル）？をパージし？ストライクガンナー？専用装備の大型レーザーライフル？スターダスト・シューター？で一夏の突撃を援護する。

（――――――行きましたわ――――――ッ）

そう思った次の瞬間、？福音？が一夏の方向を超高速で飛行しながらグリンッと振り返る。

「何ッ！？」

「っく、まさかここまでの音速機動が取れるとはッ！」

『敵機二機確認…迎撃モードスタンバイ』

低く短い機械的な声が二人の耳に届く。

一夏は、一瞬迷ったがこの間合い。下手に引けば攻撃をもろに食らってしまう。
このまま押し切るッ――――――――――!!
一夏は?雪片?をそのまま振るう。直撃はせずとも避けられはしない。
そう踏んでの事だったが、?福音?は数ミリ単位の絶妙なスラスター操作で一夏の刃を避けた。
その姿にスコープ越しのセシリアも驚愕する。
「アレを、避けるんですのねッ」
そしてセシリアは、驚愕と同時に苦虫をかみつぶしたような顔で福音を見ていた。
あれほどまでの、緻密なスラスター操作を受け付ける巨大な?フレキシブルスラスター?を搭載している機体をこの他にも知っていたからだ。
そしてその機体は、今最もセシリアがその身を案じている人物の搭乗機でもあった。
セシリアは、?スターダスト・シューター?で一夏と?福音?の間に割って入る。
福音はすぐさま距離を取るが、セシリアも正確に?スターダスト・シューター?でその動きを制限していく。
「いくら機動性が高いと言っても、避けながらではおつらいでしょうッ!　一夏さんッ」
「あぁ任せろッ!」
再び一夏が?福音?に向かって飛ぶ。
しかし?福音?は、セシリアの閃光を避けながらも踊るように一夏

の斬撃を交わしていく。

そのスラスターの使い方は、？あの機体？とは大きく異なるものだったがしかし背部の大型スラスターというだけでセシリアを戸惑わせる。

いけませんわッ、今は集中…集中しなければッ。

今はそう、そんな事を考えてはいけないッ！

セシリアは小刻みにかぶりを振って考えを振り払い、一夏を援護する。

？福音？は回避に特化した飛行を続けていたが、セシリアの援護射撃によって通常出来る回避行動が出来ないタイミングが出始める。

そしてそれこそ一撃を叩きこむ最大級のチャンスだった。

スラスターを開く角度、噴射するタイミング…。

そこにはわずかながら任意の角度へとスラスターを持って行くための？稼働時間？という隙が生まれる。

そしてその隙をセシリアは見逃さない。

「貰いましたッ！！」

セシリアの閃光が、？福音？の噴射直前のスラスターを直撃大きくバランスを崩した。

「よし、これで決まりだッ！！」

誰もがそう思った。

避ける角度では無い。

そして何より、相手は攻撃できない。

終わった、作戦は成功したと…。

――――――しかし――――――。

福音は、バランスを崩しながらもスラスターを大きくバッと左右に広げる。
そして次の瞬間、？福音？は装甲の一部を開いた。

「あ、アレはっ！！！」
「砲口かッ！！！」

一夏はすぐさま攻撃をやめその場を離れる。
そしてその直後、その場を幾重もの光の翼が襲っていた。

「なんて連射速度だッ」
「広域せん滅は伊達では無いと言う事ですのねッ！」

更に？福音？は体勢を立て直すと、その場で一回転してその翼をまき散らす。
高密度に圧縮された翼は、防御したシールドに突き刺さり爆散していく。

と、急に一夏が？福音？と真逆の海の方向へ？イグニッションブースト？で飛んでいく。
「一夏さんッ！？」
「くそッ、海上封鎖はしたんじゃねぇのかよ……まさか密漁船かッ！！」

「なんですって!?」
『密漁船はこちらでカバーするわ。予測射線上に艦を回してッ、急いでッ!!!』

一夏はシールドで翼を防ぎ恵は、?戦?の陰に密漁船を隠し射線を塞いで密漁船を守る。
しかし状況はそれでも最悪だ。
この状況でもう一つ守らねばならぬものが出来るなど。

だが相手はそんな事お構いなしに更に翼をまき散らしてくる。

そしてそれが終わると今度は翼を前方に展開し、収束砲の体勢に入った。
その瞬間、その姿が彼の…?ストライク・バーディ?の?ヘヴィ・ハンマー?の攻撃態勢とダブる。

っく、この機体ッ!!

セシリアは、思わず?スターダスト・シューター?のグリップを握る手に力が入った。

あの機体に似ていたら気が済むのかッ!!
この場で冷静さを失う事が何を意味するのか、そんな事が分からないセシリアでは無い。
しかし……でももう限界だった。
あの翼をこれ以上見てなどいられなかった。

「あなたは、どこまでッ!!!」

セシリアは丁度開いた装甲目掛けて?スターダスト・シューター?

を連射する。
?スターダスト・シューター?の直撃を受けスラスターから火を噴く?福音?。
だが……この時すべきはそんな事では無い。

この時すべきはそう……。

?福音?の翼を破壊する事ではなく、?福音自体にダメージを与え機体全体を崩す?事。

「――――――――――――――――あ――――――――――――――――」

そして我に返ったセシリアが次の瞬間見た物は……。

もう片方の翼から、放たれた収束砲の一撃によって機体をえぐられた一夏が海へと落ちその閃光が?戦?の船主部分に直撃し爆散する姿。

そして気がつけば?福音?も既にその場にはいなかった。

その事はセシリアに作戦の失敗という事実だけを突きつけていた。

◇◆◇◆◇◆

『分かった！　今そっちに行くよ』

ラウラとシャルロットは、福音が離脱した後帰還したセシリアと入れ替わるように?戦?を飛び出し一夏の捜索を行っていた。
サブメンバーとしては、こう言った行動自体は間違っていないのだが出来れば自分達が出ずに終わればそれが一番だ。
セシリア……一夏…。
シャルロットは心の中で二人の名前を唱える。
一夏はまだその姿を見ていないから、そしてセシリアはその姿を見たからこそ心配になる。
シャルロットはチラッと?戦?を一瞥してからラウラに合流すべく更にスラスターを噴かすのだった。

「……酷い…」
シャルロットはラウラが抱きかかえていた一夏を見てそう言葉を漏らした。
一夏は、直撃の瞬間に身体の前面よりは、致命的になりにくくそしてスラスターなど比較的障害物の多い背部で?福音?の攻撃を受けたようで、背中のＩＳスーツは耐熱耐火性であるにもかかわらず大きく割け、露出した皮膚も火傷が酷い。
逆に言えばＩＳの絶対防御を持ってしても防ぎきれないほどに?福音?の攻撃がすさまじかったと言う事だ。

「と、とにかく運ぼうッ」
「あぁ…そうだな…」
ラウラは、沈んだ低い声で短く返し共に?戦?を目指した。
一夏を見るその目は、これまでシャルロットが見てきたどのラウラ

の目よりも勢いのない弱弱しいものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

?戦?の艦内に設けられた一室。
その部屋の扉を閉めた直後セシリアは膝から崩れ落ちた。
正直こんな状態でよくここまで歩いてこれたと思う。

……無様…ですわね…。

今回の作戦が失敗した原因の一つを作ってしまったセシリアは自嘲気味に笑うとその身を壁に預けた。
後頭部から、ひんやりとした鋼鉄の冷たさが伝わってくる。
それと同時にようやく頭が冷めてきたのか、一気に後悔と自責そして悔しさがこみ上げる。

自分がやらなければならなかったのに。
アルディが出来ないのなら、それをするのは自分の役目なのに…
セシリアの中では、本来ならアルディへの土産話にでもなるはずの事だった。

だが今思うとそれが自分の足かせとなってしまっていたのかもしれない。
彼のために…。その思いがいつしかセシリアの正常な思考を奪い、冷静な判断を阻害してしまっていた。

少しの心構えのズレが、結果としてこれほどの事態を引き起こしてしまった。

だがいくらたらればを言おうとも、一夏が落とされてしまった事実は覆りようが無い。
日本では後の祭りとか、後悔先に立たずとか言っただろうか。
本当によく言ったものですわね…。

そこまで考えてセシリアは、糸の切れた人形のように旅館に着くまでその場を一歩も動かず静かに……ただ静かに、冷たい鋼鉄の壁に身を預けていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時刻は午後四時半を回ったところ。

いくら日照時間が長くなってきているとはいえ、まだ少し日が傾くのは早いようでビーチと海をオレンジ色に染め上げる。

沖合には船主部分に大穴を開けた?戦?が停泊しその周りを数隻の機材を積んだボートが囲んでいた。
それを低い塀の上に腰かけてロゼオと箒が眺めていた。

箒はロッソに思い切り鳩尾に決められ気を失っていたが、作戦中に

目を覚まし大方の説明を麻耶に聞かされ失敗の報告を受けた時は言葉を失っていた。
そして帰還した?戦?から搬送されていく一夏を見た時、思わず崩れ落ちそうになっていた。

その後少し時間をおいて、落ち着いたところでロゼオが箒をここへ呼び出したのだ。

ザザァン・・・ザザァンと波が打ち寄せる音だけが響くビーチ。
そしてようやく、その静けさを打ち消すようにロゼオが意を決して口を開いた。

「いきなり……呼び出してごめん」
「いや……別にそれは何とも思っていない。それに…」
「……それに……何?」
「私も一度、お前とは話さなければならないと思っていたんだ」
「え?」

ロゼオは予想外の言葉に、目を丸くする。
そんなロゼオを見て箒はフッと笑った。

「そんなに驚く事か?」
「……もう少し怒っていると思ってたからね……」
「まぁ、あの時は、少なからずは……な。だが最後ロッソに言われて目が覚めてから少し考えた…」
「……そうなんだ……」

箒はあぁと短くかえして視線を海の方へと向けそして風になびく髪を手で押さえながら言った。

「私は……正直あの作戦にどんな形であれ選出されなくて良かった。きっと私が選ばれていたら……私が今度はセシリアになっていただろう……」

「……選出されると思っていたの？……」

「姉さんの性格を考えれば、あながちあり得ない話では無いさ。あの人は無理やり世界を自分に合わせてしまった人物だからな」

「……」

「きっとあの場に、私がいれば？紅椿？の性能を盾に無理やり私を作戦メンバーにねじ込んでいたさ」

篠ノ之　束。彼女はこんなところで紹介するまでも無いほどの人物だった。

ＩＳを作り世界の常識を変え、自らの意思にそぐわないものでも無理やりそぐわせてしまう。

それでいて、後先考えず自分の欲求のままに動くのだから性質が悪い。

ロゼオは自分の考えを話し始めた箒に気付かれないぐらい小さな声でロッソを呼んだ。

今ならばロッソが話をしても別段こじれるような事にはならないだろうと思ったからだ。

だがロッソの返事はそっけないものだった。

「……ねぇロッソ変わる？」

『いや……いい。ここで聞いてる』

「そう…」

『あたしのこたぁどうだっていいから、箒の話聞いてやれって』

ロゼオは小さく頷くと箒の話しに再び耳を傾けた。

「だから、そうだな……。感謝している……という言い方はおかしいのかもしれないが、あの場に自分が居なかった事は個人的によかったと思っているんだ……。前なら恐らくこんなふうに考えることなど出来なかったのだろうが…色々考えて…、今はそう思う」

妙に?今?という言葉を強調した様に聞こえたロゼオはそこまで聞いて口を挟む。

「ねぇ……今ってことは前までどう考えてたの?」

「……そうだな。ただがむしゃらに力を追っていただけなのかもしれないな」

「力を?」

「あぁ……そうだ。仲間を守りたい……いや、違うなこれは口実だ。多分何もできなかった自分がただただ悔しくて、惨めで……だから、それだけの理由で力を求めていたのかもしれない」

どうにも力を持つと箸は、それを抑えられない。その力を使ってみたくなる。

それまで漠然とだが考えていた理由が力を持つとどこかに素っ飛んで行ってしまって…。

そこにいるのはただ力を使いたいと言う欲求のみが存在する抑えの効かなくなった自分。

考えてみるとそれはとてつもなく危険で、脆いものだろう。

「だが、ロッソに言われて分かったんだ。その力は誰かに認められて得たもの何かといわれて…。

答えはノーだ。誰にも認められてなどいない。ただ欲したから得ただけのそんな力。そんな力に何が守れる?　……そう思うと本当に……今まで変に焦っていた自分が馬鹿らしく思えてくる」

自嘲的な内容にもかかわらず箒の顔は、とても晴れやかだった。
箒は塀からスタッと降りると、伸びをして座ったままで縮こまってしまっていた筋肉を伸ばす。
そして、ロゼオを振り返ると迷いのない目ではっきりと口にした。

「ロゼオ……私はお前の…いやお前たちのおかげで、自分がどうするべきか…どうあるべきかを考える事が出来た。そしてまだまだ正解には程遠いかもしれないがその答えも出せた。本当に……ありがとう」

「……うん……」
ロゼオもそれに力強く頷く。
そしてロッソも、ロゼオの深層意識下でその言葉を聞いてしっかりと頷き、口元を緩めた。

それを見た箒は、両方の腰に手を当てて仁王立ちすると、よしッ！と声を上げる。
その理由が分からず首をかしげるロゼオの手を箒は引いた。

「行くぞッ！」
「……え？　あの……ど、どこへ！？」
「ふんッ、あのズーンとマリアナ海溝よりも深く沈んだあいつらを叩き起こしにだッ！！」
「えぇ！？　…いや…でも彼ががあなったんじゃ…それも仕方ない……」
「あの一夏（ばかもの）がそう易々とくたばるものかッ！」

さ、さっきボロボロ一夏の姿を見て崩れそうになった人物の言葉とは思えない……ッ。
『良いんじゃねぇか？　心境の変化って大事だぜ？』

いや……もはや変化ってレベルを超えているような……。
『或いは、これが成長ってやつかもな？』
成長……なのかな……。

そんな掛け合いをしていることなど知る由もない箒は、ロゼオの手を引き走る。

確かに最初一夏を見た時は、あまりの酷さに崩れ落ちそうになった。
前までの自分ならばきっと、自分はここでも変に焦ったり喚き散らしている事だろう。
だが不思議と、心配はしていなかった。

どうやら私は、焦りのあまり一番大事な事さえ見落としてしまっていたらしい。そしてその一番大事な事こそ箒が導き出した答えでもあった。

それは――――――――――――――――

――――――――信じると言う事。

私は信じる。
ロッソが示してくれた道を。
自分自身が決めた答えを。
ボロボロで目も覚まさない一夏を。

そして

この？力？を。

皆を守るための力。

皆と共に闘う力を。

もう私は迷わない。

たとえ迷っても、自分に道を示してくれる者がいる事に気づけたから。

だから迷うぐらいなら進もう、前にッ。

一歩を踏み出さなければ何も変わらない。

その事を皆にも伝えるのだ。

――――――鈴、ラウラ、シャルロット、そしてセシリア――――――

下を向いている時間など私たちには無い！

今こそ上へと羽ばたかねばならないのだ、私たちはッ

グッと見据えたその目は一点の曇りの無く澄んでいる。

答えを見つけた、一人の剣士が本当の意味で空へ羽ばたこうと、その翼をゆっくりと広げ始めていた。

第４３話～？銀色？がもたらす絶望と？赤？がもたらす？紅き？希望～（後書き

福音第一ラウンド終了。

そしてお気づきかと思いますが本編では殴られ鈴に叩きおこされる箒さんが今回は皆を叩き起こす役。

正直箒さんほど人を叩き直せるのに適任は居ないと思うのですよ。

ではまた４４話でお会いしましょう～

第４４話～希望は舞いあがる～

「えぇ、暴走ッ？　それで……えぇ、えぇ…そう。分かったわ。うん連絡ありがとう…」
アメリカ合衆国立代表候補生選定委員会。

その一室で社長机のように立派なデスクに腰かける金髪黄金色の瞳をもった女性が受話器を下ろす。
服装は、ローラが着用していた物とよく似た青色を基調とした制服。
首元にはエンジ色のネクタイを締め
セミタイトスカートを着る。
座っていても整ったプロポーションはモデルと言っても通用するレベルであった。

女性は、大きくため息を吐き手元にある資料に目を落とすと、いきなりその資料をぐちゃぐちゃと丸めてドアの脇にあるごみ箱へと放り投げる。

と、そこへ運悪く訪問者が。
更には放り投げた資料は大きく軌道が逸れて…。

「失礼します。お呼びですか？　選議官ちょ――――――って！！」

パカンッ！

「あら、タイミングの悪……良い」
「それは…言い直す必要がおありでしたか？」
まぁ勢いはあったとはいえ、所詮は紙。丸めて放ったがさして大きなダメージは受けまい。

腰かけ、まぁまぁと笑う女性の名はブラウニー・フェリップス。アメリカの国家代表および代表候補生を選出する専門委員会であるこの?合衆国立代表選定委員会?の議長を務める人物である。

ブラウニーは入ってきた男性を小さな机を囲むように置かれたソファへと促し、自分も相向かいのソファに腰掛ける。
男性はいわゆるアフリカ系アメリカンで少し前の言い方をするならば黒人である。
服装はここの関係者であることを現すように、青を基調としたスーツに首からは入館に必要なパスをぶら下げていた。

「それで、一体どんな御用でしょうか?」
「あなたいつも思うけど、もう少し柔らかく話せない?」
「すいません。この話し方が長かった物で」
「とは言ったってね…あたし達夫婦よ? ライオネル」

そう言ってブラウニーは左手の薬指にはめられたエンゲージリングを見せる。
ライオネルは分かってますよとだけ返し、この話を切り上げた。

ライオネルは別に女尊男卑の世界を皮肉って敬語で話しているわけではなく、彼の言うとおり本当にこの話し方で長くやってきたため結婚しているからという理由で、今さら変えるに変えられないだけなのだ。

だが結婚してから同じ時期に同じ部署に配置転換となったが、やはり昇進速度は、女性の方が早いようでブラウニーが議長にまで上り詰めているにもかかわらずライオネルは地方選定委員どまり。
こう言う所では女尊男卑を感じざるをえなかった。

まぁそのあたりはあまり気にしていないが。

「はぁ……まぁ良いわ。で、あなたを読んだ理由だけど」

「はい」

「あなた、今度日本へ行くらしいわね？」

「えぇ、それが何か？」

しれっと返すライオネルにブラウニーは、自分の机の上に置かれていた一枚の書類掴む。

そしてそれをライオネルの前にあった机にバンッと叩きつけた。

「何かじゃないわよッ！！　あなたこの決議に何の回答もしてないじゃないッ！」

「回答も何もありません。私はこの目で見た人物しかスカウトする気はありませんから」

「無いならないで返事を返しなさいよッ。一方的に自分の候補のパーソナルデータ送られても処理に困るわ」

「その程度、出来ない議長でもありますまい？」

「へぇ…言うじゃない。……まぁ良いわ。そっちがそのつもりならこっちにだって考えがあるわ」

「考え…？」

ライオネルが怪訝な顔をして首をかしげるとブラウニーはフフンッと鼻を鳴らした。

「そう考え。あなたが気になっているその候補者。見せてもらいましょ？」

「どういう意味です？」

「ついさっき、連絡があってね。ハワイ沖で稼働実験を行っていた？シルバリオ・ゴスペル？が暴走。その付近で小規模な戦闘があったみたいなの」

「えぇ、それで？」
「あなたも知っての通り、この件に関しては本来軍部が対応する問題であたし達の出番は無いけれど。その操縦者の処遇に関してはあたし達の管轄よ？」

そこまで言うとライオネルも流石に何を言いたいのか分かったようで、苦笑いを浮かべはじめた。
その表情を見てブラウニーは更に勢いを増す。

「どの道ナターシャを本国に呼び戻して調書を取るならこっちから出張ってくのも悪くないわよね？
それにこの件を現在対応しているのはあのＩＳ学園。丁度あなたが気にしてるって言う候補がいる所じゃなくて？」

「選議…いや…ブラウニー…」
「良いわ、丁度デスクワークも飽き飽きしてた所だし……」

ブラウニーは言うと立ち上がって、電話の横にあるインターフォンのボタンを押し秘書につなげた。

「あたしよ、日本行き一便小型機をチャーターして」
『い、今からですか！？』
「当たり前じゃない。すぐやっていいわね」
『あ、あのちょっと議ちょッ』
「ちょッって切るの流行ってるのね？」

一方的にインターフォンを切るとブラウニーはライオネルを見て笑う。
それを見てライオネルは、降参とばかりに肩をすくませるのだった。

◇◆◇◆◇◆

…？という考えが首をもたげてしまう。

って何を考えているのだッ。大丈夫に決まっている。
そうだ、大丈夫に決まっている。
私の嫁がそう簡単にくたばってたまるものか…。

……きっと大丈夫……大丈夫だよな？

どうしても上げようとする顔が下を向く。
……一夏……。
自分はどこまでも、一夏（やつ）の前ではただ一人の女の子なのだと改めて思うラウラだった。

とそこへ連絡が入る。
ＩＳのオープンチャネルではなくとても普通に、携帯電話のメールだった。
そのメールには、とある場所へ来いとの指示が書かれていた。
ラウラはその送信者を見て、目を一瞬細めたがラウラはこの気分がまぎれるのであればとその指示に従う事にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ピッ…ピッ…ピッ……

一定のリズムを電子音が刻む。

それが目を覚まさない一夏からの唯一の声。

その？声？に耳を傾けながら横になった一夏をシャルロットは見る。

ラウラと交代する時、彼女は「そうか……では頼む…」と低い声でもはっきりと言った。

正直一夏のこんな姿を目の前にラウラはよく、あそこまではっきりと受け答え出来たと思う。

多分僕なら……声になんてならないよ……。

今だってその姿を見ているだけで涙が出てきてしまいそうになる。

大丈夫大丈夫という事は分かっている。

これがＩＳの致命領域対応だと言う事も。

だけど……。

見てられないよ……こんな一夏……ッ

シャルロットの知っている一夏は、明るくて優しくて頼りになって……。

鈍感だけど真剣で……でも無茶して……傷ついて……ッ。

駄目だなぁ……明るい事考えようとしてるのに……こう言う時に限って悪いことばっかりしか思い出せないや…。

「うぅッ…一夏ぁ……」

そして気がつけばその瞳からは、大粒の涙がこぼれおちていた。

「お願いだから目を開けて……」

「俺は大丈夫だぞって笑って僕に言ってよッ！」

せきを切ってあふれだした涙は、シャルロットの思いと共に外へあふれだす。

「大丈夫だよねッ　このままなんて嫌だからッ！！」

「一夏ぁッ！！」

返事の返ってこない一夏に向けて思いを叫ぶシャルロット。

そこにあったのは一国の代表候補生ではなく年相応の少女が見せる好きな人を一心に思い心配する姿だった。

しばらく涙の止まらなかったシャルロットだが、突然携帯のバイブが鳴って慌てて涙をぬぐう。

電話だったら泣いている事を誰かに悟られて余計な心配をかけてしまうかもしれないからだ。

だがそれは電話でもなくメールだった。
「これ……」
シャルロットは、取るに足らないメールなら無視しようと思ったが送信者を見て泣きはらした目をを丸くする。
そしてその文面から何かを感じ取ったシャルロットは一夏を振り返り優しく声をかける。

「……ごめん一夏……ちょっと大事な用みたいだから行ってくるね」

シャルロットはそう言い残して、旅館の一室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

全く……。
あぁ～イライラするわねぇッ！

鈴は誰もいない自室で窓枠に寄りかかって夕日を見ていた。
志穂音がいたようだが帰ってくると同時に入れ違いで部屋を飛び出していった。

作戦メンバーに選ばれなかった鈴は、一夏が撃墜されたのを？風花の間？のモニターで見ていた。
その光景に誰もが言葉を失う中、鈴は誰よりも先にその場を後にしていた。

大体何やってんのよあいつはッ！！

あんな船一隻に構って、自分が落とされたら意味ないでしょうがッ

！！

あ～～～イライラするッ！！！

と？風花の間？を後にしてからずっとイライラしっぱなしなのだ。

一夏を落としたあの？福音？に対して

あんなところにいた密漁船に対して。

そして何より……

――――――――何もできなかった自分に対して――――――――

鈴にだって分かっている、あの時一夏はああするしかなかったということぐらい。

作戦とは最悪の事を想定して立てられるものだが、実際最悪という物はえてして想像の斜め上をカッとんで行くものだ。

海上封鎖それもＩＳによる厳重な体勢が敷かれていると聞けば、普通密漁船であってもその海域にいるかもしれないという予想など立てられるはずもない。

だからあの時一夏は、自分に出来る最大限の事をしたにすぎなかった。

そんな事は分かっている。

だから腹が立つ。
なぜ自分は誰よりも先にあの部屋を出てしまったのか。
一夏を発見したという報告だって、帰還したラウラ達から聞いたのだ。

どうして、向き合えなかったのか。

なぜ逃げてしまったのかッ！！

しかもあの中では千冬に次いで一夏との付き合いが長かったこの自分がッ

あたしは…卑怯だッ。

あの時何も見たくなかった。
見るのが怖かった。
だから逃げたのだ。

この苛立ちだって結局一夏の事を変に暗く考えないために自分に自分で八つ当たりしているだけかも知れない。

「ハハッ……我ながらサイテーね…」

乾いた笑いをもらし、窓際に置いてあったソファに座る。

……一夏……。

苛立ちはまだ消えないが、その名前を繰り返すたびに鈴はズキンっと胸が痛くなった。

あの馬鹿……そのままくたばったら承知しないんだからッ！

そう言いつつ、一夏の身を案じるその表情はいつも気丈な代表候補生、鳳・鈴音ではなく、恋する乙女鳳・鈴音だった。

鈴はふと時間を確かめようと、携帯を取り出す。

すると一通のメールが来ている事に気がついた。

……メール？　こんな時に誰よもう…。

鈴は携帯をカタタタッと操作し受信ボックスを開く。

そして送信者を見て、眉をひそめる。

それはかなり……いや普通ならばほとんどメールのやり取りをした事のない相手だったからだ。

「ここに来いって……。あの子どういう……」

鈴はとりあえず、小首をかしげながらもその指示に従う事にした。
普通ならばこんなメールに従う鈴では無いのだが本当にその送信者が意外な人物だったのだ。

だってそのメールの送信者が、？篠ノ之　箒？だったのだから。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……あの……なんで道場……？」
「ふん……まぁ黙って見ていろ」

ロゼオが首をかしげる前で箒は竹刀片手に旅館に併設される形で立っている剣道場の中で仁王立ちをしている。
制服であったが道場なので靴は履けないため、靴下は脱いでいた。

はっきり言って何がこれから怒るのかロゼオでもよく分からない。
ただ手を引っ張られてここまで連れてこられた挙句、道場で正座させられているのだから。

確か箒は？ふんッ、あのズーンとマリアナ海溝よりも深く沈んだあいつらを叩き起こしにだッ！！？と言って走りだしたはず。

それが携帯で三人を呼び出してそして何故道場なのか。

全く話が見えない。

箒はどこからともなく携帯を取り出して時間を確認する。

「ふむ……そろそろ来るはずだが……」

「だから……何が？……」

「いいから黙って――――――」

箒がそう言いかけた時、道場の玄関が開く音がする。

その音を聞いて箒がニヤリと笑った。

「来たか！」

「……まぁ来たが…」

「一体……」

「何の用なのよッ！」

まぁそりゃそうだろうとロゼオは三人に心の中で賛同する。

そんな三人に箒はスッと一本ずつ竹刀を手渡していく。

「む？　おい箒これは一体どういうつもりなのだ？」

「そうだよ、今はこんな事している場合じゃないよ」

「あんた何？　狂ったの？」

手渡された竹刀をまじまじと見ながら三人が口々に疑問を声に出す。

しかし箒はそんな三人に対し、姿勢を低くして居合の体勢を取ると有無を言わさぬ鋭い踏み込みから、すれ違いざまにラウラには小手、シャルロットは胴そして鈴には面を的確にそして素早く叩きこむ。

篠ノ之剣術流一刀型・居合？瞬罰神雷？。鋭い踏み込みからの抜き打ちによる一閃。

本来は、居合なので集団に使う技ではないが、相手が代表候補生だとしても完全に不意打ちである。油断しきっていた三人に対して動作の流れで的確に攻撃を加えることなど造作も無かった。

「貴様ッ！？」
「どうした？　……剣を渡されたのだぞ？」
「何を言ってるのさ！」
「油断するなという事だッ！！」
「あんた本当におかしくなっちゃったのッ！？」
「いや私はいたって正常だッ！！」

箒は再び、三人に迫る。
流石に一撃を入れられた事で、警戒していた三人はそれぞれ竹刀を構える。
いくら剣道を習っていない三人でも代表候補生、筋は良い。
だが箒も剣道で後れをとるわけにはいかない。

ラウラの竹刀を弾くと腹部へ竹刀の柄を叩きこむ。
「ぐぅッ！！」
「どうしたッ、ドイツ軍人はその程度かッ！！」

「箒ッ！！」
「甘いッ」
そこへシャルロットが、竹刀を横薙ぎに払い胴を狙う。だがそれをバックステップで躱すと箒は自分の竹刀をシャルロットの小手に決め竹刀ごと吹き飛ばした。
「うわぁぁぁッ！」

一瞬の攻防で二人を行動不能にした箒は、鈴をキッと睨む。

そしてまた鈴も箒をもの凄い目で睨んでいた。

「……あんたね……」

「来い……鈴ッ」

鈴が弾かれたように、箒へと飛ぶ。

そして思い切り竹刀を上段から振り下ろした。

それを箒も真正面から受け止める。

「何がしたいの！！　いきなり呼び出したと思えば竹刀でボコッてッ！　何八つ当たり！？　自分が寝てた間に一夏を勝手にメンバーに選んであんな目にあわせたから！？」

「違うッ！！」

「じゃあなんだってのよッ！」

バシィィンッ！！

箒は鈴の竹刀を諸手で弾くと、今度は箒が攻め手にまわる。

箒の鋭い一閃一閃が、鈴を襲い鈴はその一閃をなんとか防いでいく。

「確かに私は、寝ていたさッ！　その間に一夏があんな事になっていて確かに悔しい気持ちはあったッ！！」

「やっぱり八つ当たりじゃないのよッ！！　いい加減にしてよねッ！！」

「だが、私は……私はぁぁぁぁッ！！！」

「ッ！？」

箒は鈴の竹刀を剣先で絡め大きく上に弾く。

動きに吐いていけない鈴の手から、竹刀がはじけ飛び道場にカシャァァァンッという竹刀の落下音が響いた。

箒はそれを見て、竹刀をゆっくりと床に置いた。

そして腕や腹を押さえる三人に向かって、さっきまでの声とは違う静かなそれでいて決意のこもった声で言う。

「確かに私は、悔しかった……。一夏があんな風になって帰ってきた時倒れてしまいそうだったからな…。だが私は同時に悲しかった……ッ。情けなかったッ！！」

「何が情けなかったって言うのよッ」

鈴の苛立ちのこもった声にも動じず箒はジッと鈴の目を見返して言う。

「……お前たちが一夏に対して持っていた信頼度だ」

「「「ッ！？」」」

「うわべだけ、一夏を好きだの嫁だのと言っておきながら、今のお前たちは何だ？　全く一夏を信用も信頼もしていない。それでよく心配だと言えたものだなッ！！」

パッシーーンッ！！！

言いきった直後箒の右頬に鋭い痛みを感じる。

だが箒はそれにも臆せず、自分を叩いたシャルロットの手をグッと握る。

「そんな……そんな言い方ないよッ。　いくら箒でもそんな言い方は許せないッ！！」

「許せない？　許せないのはこっちの方だッ！」

「えッ！？」

「シャルロット、お前は今そう言われて腹が立ったんだろう、私を叩きたくなるほど許せないのだろうッ！！　ラウラもそして鈴も！

そう言われて引き下がれないほどに一夏（あいつ）の事が好きなのだろうッ！！！」

箒は叫ぶ。心のままに。
胸の内をさらけ出すように。

「だったら、どうして下を向くッ！　何故前を見ないッ！　どうして一夏を信じようとしないのだッ！！
あいつは大丈夫だと、胸を張って言えないッ！！」

箒の声に叫びに、そこに込められた思いに。

ラウラの、シャルロットの、そして鈴の目が大きく見開かれていく。

「今こそ、羽ばたかねばならないんだ私たちはッ。一夏のためにもッ」

「羽ばたく……」

「一夏は、今日まで私たちを守ってくれたッ！」

「僕たちを……」

「ならば、今度は私たちが一夏を守る番だろう！」

「あたし達の……番…」

そうだ……。

きっと。

きっと。

一夏なら……いや一夏だからこそ。
こんな時は絶対に前を向いているはずだ。

そして言うのだ、「お前たちは俺が守る」と。

だから……今度は私たちが言ってやるのだ。

――――――――――「お前の事は私たちが守る」と――――――――――

心の内を叫び息も絶え絶えになった箒の荒い吐息が響く道場で、フフッと不意に誰かが笑う。

箒はまだ、鼻で笑うのかと言い返すべく顔を上げたがそこにいたのは、もう下など向かずただ上を見て前を見て意志のこもった目でこちらを見やる三人の代表候補生。
そして笑みをこぼしたのは鈴だった。

「フフッ……まさか……あんたに励まされるとはね…」
「全くだ」

「箒……そのごめんね本気で引っ叩いちゃった…」

その姿はもう暗く沈んだ迷いのある表情は見えない。
もうこの場にいる誰もが、自分達が今やるべきことを理解していた。

「皆ッ……」
「確かに、お前の言うとおりだ。嫁を信じる事が出来ていなかったとは……やれやれ私も夫としてはまだまだだな」
「あんたさ……いい加減日本のってかこの世界の夫婦制度に付いて学べば？」
「そう言えばラウラ、お金の使い方も知らないって言ってたもんね」
「はぁッ？　あんた良くそれで今日まで生きてこれたわね…」

何気ないこんな普通のやり取りが、今日はいつにもまして心地いい。
そんなやり取りを見ていた箒達に、後ろからパチパチと一人拍手が聞こえる。

その拍手に、四人の視線が集まる。その先にいたのはいつの間にか？ハーモニクス？によって人格を入れ替えたロッソ・ミオネッティだった。

「やるじゃねぇか、箒」
「なに……お前の助言あってこそだ」
箒の言葉を聞いてロッソはニィッと口角を釣り上げ、箒の傍に立つとパンッと箒の肩を叩き言った。

「これで後はあいつだけだな？」

皆の脳裏にブロンドの少女が思い出される。

きっと今も壊れたおもちゃのように部屋でへたり込んでいるに違いない。

「全く、面倒なの残したわね？」

「フッ…丁度お前たちをメールで読んだ時の私の気持ちがそれだったな」

「なんですって！？」

「ま、まぁまぁ…ッ」

「……では行くかッ」

「あぁッ！」

箒はラウラの問いにしっかりと答え共に道場を後にする。

正直今のセシリアを立ち直らせるのはかなり難しいと思う。

だが私は迷わない。

たとえそれがいかに困難であっても…。

私は信じた道を突き進むだけなのだから。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……。

セシリアは、たった一人でビーチを歩く。

歩くと言ってもその足取りはフラフラと千鳥足にも似た状態で逆に歩けている事が奇跡だと思うぐらい弱弱しい。

アルディの時、自分には何もできなかった。

ただモニター越しに指をくわえ、皆と駆けつけた時には既にアルディは搬送されその姿さえも見ることは叶わなかった。

だから、あの時千冬に自ら進言した。

もう目の前で自分の大切な人達が傷ついていくのが嫌で。

自分の力で、この力で一夏を守る――――――はずだった――――。

だが結果はどうだ？

セシリアが思っていた以上に自分という物は脆く弱くちっぽけな存在だった。

口では割り切っていると言ったが結局吹っ切れておらず、福音を見る度に胸が苦しくなり。

そして結局それに限界が来て、判断ミスをして。

？白式？は落とされ、？戦？にも甚大な被害を与えてしまった。

もはや無様を通り越して滑稽である。

何度自分を自嘲したか、何度自分を蔑んだかッ！

もしあの時の自分に会えるのなら、殺してしまいたい。

いっそ、居なくなってしまえば良い。

こんな自分など……どれほどの価値があろうものか……。

セシリアはフラフラとそしてヨタヨタと砂に足を取られながらもビーチを歩いていく。

まるで何かから逃げる様に、ただあてもなくそれでも一心不乱に歩く。

と、急に体勢が大きく崩れるセシリア。

「あっ」

セシリアはドサリッと砂浜に倒れ込む。

受け身すらも取れず、顔から。

本当に……何をやっているのでしょう私は……。

ジワッと視界がかすむ。

そして気がつけばセシリアは涙を流していた。

悔しくて。
寂しくて。
そして
――――――情けなくて――――――
「ふっ…うぅッ……私は……くぅッ…ふぅッ」
セシリアのこれまで培ってきた自身やプライドが今ガラガラと音お立てて崩れていく。
こんな物……こんな程度なのですか……私はッ……。
……そう……この程度……なのですわね……。
そう考えると、自然ともう何もかもがどうでもよくなってきた。

……なんだかこんな気分……久しぶりですわね…。

あの時は、傍らにアルディが居てくれた。

でも今アルディは、病室で床に伏せている。

もう自分を助けてくれる物など誰もいない。

誰も……居ないのだ。

セシリアは輝きの消えた目で、水平線のかなたを見やる。

自爆でも何でも……道連れでも……アレを落としましょう……。もうそれぐらいしか自分には出来ないのだから。

セシリアはゆっくりと立ち上がり、そして待機状態となってセシリアの耳にピアスとして装着されている？ブルー・ティアーズ？に手を伸ばして――――――――――――――――。

「随分と、気が急いているようだな？」

その腕をパシッと掴まれた。

「!?」
「それとも、何もかもどうでもよくなったか…?」
セシリアは驚いてその手の主を見やる。
そこには、自分とは違う強い意志のこもった瞳でこちらを見やる箒の姿があった。
「ほ、箒さん……それに……」
セシリアは箒の後ろに立つ四人の影に視線を移す。
腕を組み、こちらを真っすぐ見つめるラウラ。
心配そうな視線を送るシャルロット。
ため息交じりに頭を掻く鈴。
腰に手を当て、ニィッと笑うロッソ。
そのどれもが今のセシリアにはまぶしすぎた。
何故?
どうしてあなた達は、こんな状況でそんな顔が出来るのですか?
そんな……自信に満ち溢れた……そんな顔を…。
セシリアは箒の目をそして他の四人の目を正面から見返すことが出来なかった。
思わず視線をそらそうとするがその行為を箒の声が止める。
「目をそらすな」
「え……?」
「目をそらしては駄目だ。セシリア」

「……箒さん……？」

だが言われて出来るぐらいならば初めからしている。
出来ないから……もう……自分にはそんな目は出来ない。
だから目を合わせる事も、どうしてもできなかった。

一度は箒の声で止まった視線の動きも結局そのまま下を向いてしまう。
箒はセシリアの手を離すと、再び口を開く。

「セシリア……今あることから……目をそらしてもそこには何もない」
「何も…？」
「そうだ、何もない。あるのはただ全てから逃げ続ける惨めな自分だけだ」
「ッ！」

それは……。
箒の言葉がセシリアの心を射抜く。

箒が言っているのは、まさに今の自分自身だ。
逃げる様にただひたすらに歩き続けた……この砂まみれで涙を流す惨めな自分……。
全てを打ち砕かれ、何もなくなったちっぽけな自分。

だが……ならどうすればいい？

もう……何をどう見ればいいのかさえ分からないと言うのに。
こんな無力な自分がどうすればそんな目をする事が出来る？

「ですが……私には……もう何もありません……」
「…何もない？」
「えぇ……もう、良いのです……本当に私なん――――ッ！？」

私なんてどうでもいい、そう言おうとしたセシリアはハッとした時にはまた砂浜に倒されていた。

いや…。

砂浜へと殴り飛ばされていた。

ジンジンと鈍痛を繰り返す左頬をさすりながら、セシリアは箒を見上げた。
箒はそれまで以上に厳しい口調と険しい顔でセシリアを睨んでいた。

「それ以上言ってみろッ。今度は殴り飛ばすだけでは済まさんッ！！」
「ほう……き……さん？」

箒はセシリアの前に立つとその胸倉をつかんで無理やり立ち上がらせる。

「どうでも良いだと！？　何もないだと！？　よくそんな事がぬけぬけと言えたなッ！」
セシリアの胸倉をつかんだまま大きく前後に揺さぶる箒。
それを見て流石にやり過ぎだと感じたシャルロットが箒を止めようと一歩前に出ようとしたがそれをラウラが首を振りながら制した。

「ラウラ……なんで？」
「アレを立ち直らせるにはこれぐらい必要なのだ…今は箒に任せよ

う」

本音でぶつからなければ、分からない事がある。
伝わらない事がある。

それを自分達はついさっき身をもって体験した。

箒の一言一言、その全てが自分たちの中の？何か？を奮い立たせる。
その？何か？を動かす物。

それこそが本音だ。

だから箒は、躊躇しない。
自分が正しいと思った事を全力でセシリアにぶつけていく。

「何もない？　あるだろうここにッ！お前にはあるじゃないかッ、お前をこんなにもしっかりと真剣に見てくれる者達がッ！！」
「しっかりと……見てくれる……？」
「どうでもよくも無いッ！　本当にそうか？　そうなのか？　ならお前はあいつが死のうがどうなろうが本当にその一言で片付けてしまえるのかッ！？」
「片付けて…」

その時セシリアの脳裏に、見たわけでもないのに病院で未だ意識の戻らない自分の大切な人が浮かぶ。
ちょっと嘘つきだけれど、優しくて。
優柔不断だけどいざという時には怪我も顧みず助けてくれる。

そんな彼が……死んでも…？
……嫌だ。

そんなの嫌…。

片付けられるわけがない。
仕方が無い。どうでもいいと割り切れるわけがないッ。

「まだ……私には……ある…。空っぽじゃないと…」
「あぁ、そうだ。お前は空っぽじゃない。何も無いわけじゃない、
どうでもいいわけでもない。お前はまだ立ち上がれる」

セシリアの胸倉から手を離し箒はセシリアの傍らに立ち、もう一度
四人の姿を、その目を見せる。

なんてまぶしい目なのだろう。

なんて勢いのある目のなのだろう。

なんて迷いのない目なのだろう。

そして…。

なんて綺麗な目なのだろう。

私にもまだあんな目が出来るのだろうか。

「全く手間のかかる奴だ」

あんな目で上を向けるのだろうか。

「大丈夫。僕たちはここにいる」

あんな目で立ち上がれるのだろうか。

「で、あんたがそこに居て」

あんな目でこうして誰かに手を差し伸べられるだろうか。

「立ち止まりそうになったら誰かがきっと手を差し伸べてくれるさ」

そして……そんな目で……大切な物を守れるだろうか。

「あぁ、そうだ。セシリア。お前は一人じゃない。私たちが居る。お前を待つ者もいる。だから大丈夫だ。何も迷うことなどないッ！」

今はまだ……しっかりとはそんな目で前を見れないかも知れない。

でも……もう……下を向くのはやめよう。

そんな事しても時間の無駄だからッ！

セシリアは、静かに瞳を閉じ細く綺麗な指で流れる一筋の滴をぬぐう。

そしてゆっくりと瞳を開け、今度こそまっすぐ、箒たちのその目を見る。

そこにはもう……迷いの色など無かった。

いつもの自信に満ち溢れたイギリスの麗しきご令嬢がそこに立っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「つ…疲れたッ」

ドサっとビーチのベンチに崩れる箒。

今にもその空いた口から魂が飛んでいきそうなそんな感じだった。

「まぁ……そりゃそうだろうなぁ…」

ビーチ前からロゼオを引っ張って道場まで走り、その道場では携帯を使って三人を呼び出したと思えば大立ち回り。

シャルロットには叩かれ自分もセシリアをぶん殴った。

これだけのことをほんの一時間そこらで行ったのだから逆に言えば疲れない方がおかしい。

「だが、そうも言っていられん」

「どういう事ですの？」

「これを見ろ」

ラウラはそう言って？シュヴァルツェア・レーゲン？のモニターを見せた。

そしてそこに写っていた物に一同は驚愕する。

「コレ…ッ！！」

「？福音？じゃねぇか！？」

「偶然この付近を飛んでいたロシアの哨戒機Ａ－５０が感知した反応から予測地点を割り出してドイツの軍事衛星から光学兵器で捉えたものだ」

「普通の哨戒機が…ＩＳを捉えられるもんなのか？」

ＩＳには完璧なステルス性能がある。

Ａ－５０と言えばロシアの早期警戒管制機だが、いくら高性能なレーダーを積んでいたとして従来の兵器である事に変わりはない。

そのロッソの当然の疑問に鈴が答えた。

「いや……ロシア機ならあり得ない話じゃないわよ」

「え？　どういう意味だよ、それ」
「ま、その説明はあとでしたげる。それよりも今は」
「うむ、そうだ？福音？だ」

鈴は変に話がそれるのを嫌い、話を区切る。
食い下がろうとしたロッソも間髪いれずにラウラが口を開いたため、追求を断念せざるを得なかった。
そして、今度はセシリアがやや前のめり気味にラウラのモニターを覗き込む

「このポイントは……ここからそこまで遠くはありませんわね……」
「そうだね、ここから大体四十五～五十ってとこかな」

「しかし飛べばすぐだ…な？」

箒がまるで皆に確認するように言う。
もう箒が何を言いたいのかなど言わなくても分かった。

「ったく、やっぱ行くのね」
「まぁ、そのためにこのデータを見せたわけだしな。それに本国から専用のパッケージングも届いた」
「皆さんがいかないと仰っても私は行くつもりでしたし…」
「これって僕たち立派な命令違反だね？」
「っは、今さらそんなの。大体あたし館内待機じゃなかったっけか？　ならもうあたしと箒は初めっから違反だろ」
「そうだな」

箒が立ちあがり、全員が海に向かって一列に並ぶ。
そしてゆっくりと各々のＩＳを構えた。

「私はもう下など向かない。そして信じ抜いて見せる」
「僕も、信じる……一夏を……そしてこの力をッ」
「もう私は迷いません……。ただひたすらに前を見て…ッ」
「一夏に笑われたくないしね……。一丁やったろうじゃないッ！」
「へへッ、派手にぶちかましてやるぜッ」
『……うん……』

「全ては……羽ばたくためにッ、前に行くためにッ！！」

ラウラが、シャルロットが、セシリアが、鈴が、ロッソが、そして箒が、一斉にＩＳを起動させる。

少女（きぼう）たちは夕暮れの空へ舞う。

前に進むために。

そして大切な物を守り抜くために。

「私は……私たちは戦うッ！！　その首……洗って待っていろ！！」

――――――――福音ッ！！！――――――――

第４４話～希望は舞いあがる～（後書き）

やっべｗｗ

箒さん超男前ｗｗ

でも僕はオルコッ党です。

いよいよ第二ラウンドに突入！
そしてようやく待ちに待った彼も帰ってくる！？
あ、それはもう少しだけ先の話ですねｗ

それでは次回４５話でまたお会いしましょう！

では失礼します

第４５話～絶望への挑戦～

「見つけたッ！」

？リヴァイヴ？のセンサーが海上に浮かぶ銀色の翼を捉えシャルロットが叫ぶ。
赤子のように膝を抱えその姿はまるで胎児の様であった。

「こちらもでも補足したッ、これより？シュヴァルツェア・レーゲン？は砲撃シークエンスへ移行する！」

ラウラの掛け声とともに、バッと先行していた他の五機が散開する。
？シュヴァルツェア・レーゲン？のモニターにターゲットスコープが開き？福音？を長距離ロック。
ガコンッと肩に背負う左右二門の砲がセットされ同時に給弾される。
更に、微妙なズレを左目の？ヴォーダン・オージェ？が修正していた。

「ファイアッ！！」

砲戦パッケージ？パンツァーカノーニア？によって増設された二門の八〇口径レールカノン？ブリッツ？がラウラの叫びをかき消し？福音？へ迫る。
そして？福音？がそれに気づき顔を上げた時には二発の鉄隗が直撃。
日の落ちた世界に火球を輝かせた。
その瞬間、少女たちの絶望への挑戦が幕を開けた。

「敵機移動開始……距離は……えぇい予想以上に早いかッ」

?福音?は超長距離射撃を行ったラウラを瞬時に発見。
強大な推力に物を言わせ一気に接近する。

?パンツァーカノーニア?は一発あたりの攻撃力に主眼を置いたパッケージ。
連射能力に優れた武装は搭載されていない。
それに何よりも八〇口径というとんでもなく巨大な砲を二門も肩に背負っている。
その反動は通常の?シュヴァルツェア・レーゲン?ではとてもではないが相殺しれず、その分重量が増し機動力をかなり犠牲にしていた。

?福音?は加速しながらスラスター前部の砲門を開きラウラに?銀(シルバー・ベル)の鐘?の翼よりもさらに小型の?銀の欠片(シルバー・エッジ)?を放つ。
小型といえど高密度に圧縮されたその?欠片?だけでも?シュヴァルツェア・レーゲン?に追加された対砲撃用の物理装甲?強き盾(シュタルク・ヴァント)?を削っていく。

ラウラは出来る限りの最大出力で、後退しながら?ブリッツ?を放つがその全てを?福音?は躱し更に距離が三〇〇を切った辺りから更に加速する。

?福音?の腕がラウラにもう後少しと迫った時。

?福音?は上空から降り注ぐ?四本のレーザー?に射抜かれた。

「よし、良いぞセシリアッ！」
「借りは返させてもらいますわ」

セシリアは、？ビット？を戻し？スターライトｍｋ－？？で動きを制する。

武装から見ても分かるように、今セシリアは高機動パッケージ？ストライクガンナー？を使用していない。

前回の戦闘で福音には高機動に無理やりついていくよりも手数で動きを制限した方が有効であると言う事が分かったからでる。

確かに？スターダスト・シューター？の威力は非常に高く？福音？のスラスターを破壊して見せたものの部類的にはかなり長いレーザーライフルであるし何より連射能力が？スターライトｍｋ－？？に比べると劣る。

動きを少しでも制限したいのならば威力が下がっても、連射の効く武装の方が良いに決まっている。

ラウラとセシリアのコンビネーションによって、足を止められる福音。

『敵機警戒度Ｂ以上に設定。せん滅兵器を持って対処』

動きを止められた？福音？が強引に翼を開こうとするがそこへ、背後から強い衝撃が襲う。

「それを待ってたんだッ！」

「てめぇの翼ッ！　貰ったぜッ！！」

ステルスモードで接近したシャルロットの援護射撃の陰から？ペルフェッド・エスダーテ？が飛び出し？セルペンテモード？になった？テンポラーレ？が翼の左の付け根部分に絡まる。

「おらよッ！」

そしてロッソはスラスター全開で思い切り?テンポラーレ?を引っ張る。
付け根の装甲板にギリギリと刃が食いこみ、そしてついに?福音?の片翼をもぎ取った。
更に片側の翼も、シャルロットの射撃の驟雨によって、上手くエネルギーをチャージ出来ず?福音?は止むなく砲門を閉じ片方のスラスターだけで器用に舞いあがった。
だが誰一人としてそれを追わない。

本来人が操縦していれば、これに少しでも疑問を持つだろう。しかし今この機体は操縦者を載せてはいるが完全に、機械が制御している。
精密な射撃、そして片翼を失ってもなおバランスを崩さずに飛行できる緻密なスラスター操作。だがそういった少しの事をを疑問に思わないのが、機械の弱点でもあった。

「上空には誰も居ないと思ったか?」
「あんたの行動なんて、全て予測済みよッ!!」

月を背負い、そこには紅と黒の機体が待つ。
二人は、ぬけぬけと上空へ離脱してきた?福音?に飛びかかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……全く勝手な事をしてくれるものだ……」
千冬は、モニターを見てため息を吐いた。

あまりの他人行儀な言い方に真耶が声を上げる。
「そんなのん気な……どうするんですか？」
「どうするもこうするも無い。今はただ見届けるしかあるまい」
「でも……」
「それに、覚悟を決めて出て行ったんだ。今ここで水を差すのも野暮だろう？」

千冬には分かっていた、大体こうなるだろうなという事は。
あのおてんば共が、一夏をやられて黙っているとは考えにくかったからだ。
重大な命令違反だが、だからと言って行くなといって行かぬ連中でもない。
それに……。

ッフ、まぁ悪くない目をしている。

千冬は腕を組んでモニターに映る六機のＩＳを見やる。
本当に良い目をしている。
もしかしたら、と……そんな根拠もない希望を千冬に抱かせるほどに。

しばらくモニタリングを続けていた千冬達そのオペレーティングルームへ一人＋一匹のウサギが飛び込んできた。
「織斑先生ッ、ロッソ達が出撃したって話はってうわぁッ！？」
「ちーちゃ～ん。箒ちゃんが戦ってるんだって！？」
束は襖をガラッと開けた聡也の上を、文字通りウサギのように飛び越してきた。
それを見て千冬は、別の意味で頭を抱えた。

「……はぁ、お前たちここがどこだかわかってやってるんだろうなぁ……」
「それよりロッソ達はッ！？」
「それよりも箒ちゃんだよ、箒ちゃん見せてッ！！」
「あぁもう、ちょっと退いてくださいよ篠ノ之博士ッ！」
「うるさいなぁ、ちょっとあっち行ってなよ！」
「うるさいってなんですかッ！！」
「本当の事を言ったまでだよッツ、束さんはぁッ！！」

「えぇい、貴様ら少し静かにしろッ！！　モニターに頭突っ込まれたいかッ！！」

千冬の一喝。
その威力は素晴らしく、あの束までもが黙りこんだ。
フンっと鼻を鳴らすと背を向けモニターの砲を振り返る千冬。
そして静かに二人に言った。

「一条は山田先生の所へ行け。そこでミオネッティらをモニタリングできる。束はこっちだ。少し聞きたい事があるからな」

「はい」
「分かったよ～」

そう短く返事をして、聡也と束がそれぞれ動く。
隣で、興味深そうに箒の映像を見る束に、千冬は単刀直入に尋ねた。

「？紅椿？といったか。篠ノ之ＩＳは」
「うんそうだよ、箒ちゃんの専用機にしてオーバースペックそして？白と並び立つ物？」

「一つ聞くが、あの機体は……？展開装甲？を持っているのか？」
？展開装甲？そのキーワードに束がニヤッと笑い、そして聡也がピクっと反応する。
（展開……装甲？）
「よく分かったねちーちゃん。そうだよ、？雪片弐型？の？零落白夜？に搭載されてるシステム。それをＩＳ丸ごと一機、全身のアーマーを展開装甲にしちゃったんだよね。だから本来？紅椿？は、あの？程度？の機体に苦戦する機体じゃないんだ」
「なるほどな……。つまり、篠ノ之は展開装甲を搭載しているとは知らずに使用しているということか…」
束は千冬のつぶやきを聞きクスリと笑う。
「そうだね。まぁそれでも、それなりに使いこなせてるのはセンスかな？　それに第三世代ＩＳが相手っていたって？紅椿？は第四世代機だからね。遅れを取るわけないよん」
「第四ッ！？」
その言葉に反応したのは、聞き耳を立てていた聡也。
その顔は信じられないと言う感情に支配されていた。
だが千冬はそれ以上言うのを目で制す。
聡也にもそれは伝わったようで、それ以上の追及はせずモニターに目を落としたがその後でも明らかに動揺しているのはだれの目にも明らかだった。

「……束、またやり過ぎたな？」
「まぁ、第四って言ったって完全に使いこなしての事だからねん。すぐには無理だよ～っととと、箒ちゃんが若干ピ～ンチッ、ちょっとチャネル借りるよ」
束は千冬達のモニターの通信回線に難なく割り込むと、箒達に通信をつなぐ。
その姿を見て千冬はまた一つ大きくため息を吐くのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「付きましたよ。運賃は…」
「あ、山科兎束あてで付けといてください。請求書はこの住所に送ってくれれば大丈夫ですから」
「分かりました」

タクシードライバーとの短いやり取りを終え志穂音は病院へとやってくる。
目的は一つ、出来上がったデータと？ストライク・ミラージュ？をローラに手渡すためである。

受付で、アルディが入院している部屋の番号を聞き、エレベーターに乗る。
三〇二一号室そこがアルディの病室だった。

コンコンッと扉を叩くと、ローラの声がする。
「はい、どちら様？」

「ウチですけど…」
「あぁ志穂音ちゃん……どうぞ」

ガララッと扉を開け、志穂音はベッドに近づく。
そこにはＩＳスーツから甚平型の病衣に着替えさせられたアルディが横たわっている。
心電図の機械の音だけが響く部屋。
ローラはあれからまだ一日と経っていないのにとても疲れた表情をしている。

「アルディ…まだ目覚めないんですね…」
「まぁね……でも命に別条はないから……大丈夫よ」

ローラは微笑もうとするが、上手く笑えない。
結果複雑な顔を志穂音に向ける事になってしまった。

そんなローラに掛ける言葉も見つからない志穂音は、無言でローラに？ストライク・ミラージュ？を手渡す。
ローラはそれをみて、自分がどれほど酷い表情をしているのかという事に気が付き改めて笑顔を作りなおした。
そしてローラは志穂音に右手の人差し指を差し出す。
「ごめんね、左手がこんなだから…」
「あ、はい…」

志穂音はその右手にそっと指輪を通しその手にメモリーチップも一緒に置いた。
いくら右手は自由が効くと言っても、怪我が無いわけではない。
指は綺麗だったが手の甲には砲たいが巻かれているのだ。

姉弟そろって……ボロボロだなぁ…。
志穂音は双方の姿を見て苦笑いするしかなかった。

病室の隅に置かれた小さなテーブルと椅子。
そこにローラはは腰かける。
志穂音は備え付けの、ポットを使いお茶を淹れてローラの前に置き
ローラの前に座る。

「それで、どう？」
「大分？ミラージュ？のパーツを使っちゃいましたけど……。あの
暴走時とはいえオリジナルのデータが回収できていたのは大きかっ
たです」
「と、言う事は？」
「欠損個所はほぼ完璧に補えたと言う事です」
「やっぱり、あなたに頼んで正解だったわね？」

ローラはお茶をすすり、片目を閉じフフッと笑う。
先ほどまでのぎこちないものと違って会話の中で出たごく自然な笑
み。

どうやら自分がきて話し相手になっている事はローラにとっていい
気分転換になっているようだった。
しかし、そうは言ってもこの話しに触れずにはいられない。
そう、アルディの事だ。

「だけど、アルディ…」
「あれからまだ一回も目も覚まさない。心電図の音だけが生きている事を実感させてくれるわ」
「そうですか……」
これぱかりはどうしようもない。

ハードが出来てもソフトが無ければシステムは動かない。
どちらが欠けても駄目なのだ。
志穂音はアルディをチラッと見て席を立つ。
それに釣られてローラもほぼ同時に席を立った。

そのまま志穂音はゆっくりとドアへと歩いていく。
どうしよう……やっぱり言った方がいいんだろうか……。
実は志穂音がここに来た理由はもう一つあった。
それは？福音？の暴走事件の事を伝えるため。
あの織斑　千冬の事である。きっとローラにはその事を伝えていないはずだ。
現にローラはその事に付いて何も話さない。

しかし千冬が何故話さなかったのか連絡をしなかったかに付いてはそんなもの考えなくても分かる。
それを聞けばきっとローラは自分の怪我を推してまでも最前線に立とうとするだろう。

アルディは目を覚まさないが、それでも命に別条はない。
優先すべきがどちらかなど素人でも分かる。
でもだからこそ、志穂音はためらった。

今でさえこうして話すのだって辛いはずのローラにその事を言って、こんな怪我をしたローラを結果引っ張り出してしまうのか？

でも……。

言わなかったら言わなかったで……。

取っ手をつかんだまま動かない志穂音にローラは不思議に思い尋ねる。

「どうしたの、志穂音ちゃん？」

「あ、…いや…なんでも…」

その歯切れの悪さがあだとなりローラは更に追求する。

「本当にどうしたの？」

「その……だから…」

ローラは志穂音の肩を右手で優しく掴むと、視線を合わせる様にかがみこむ。

そして落ち着かせるように静かに、ゆっくりと尋ねた。

「どうしたの？　気になる事があるなら言ってくれなきゃ？　ね？」

「――――あ…」

声をかけられ志穂音は、これまで変に迷っていた自分を責めた。

何自分は、怪我人に気を使わせているのかと。

考え直し志穂音は、息を整えてローラに言った。

「アメリカのＩＳ？シルバリオ・ゴスペル？が暴走して…一夏が…。

今第二ラウンドで箒達が戦ってるんだ」

「……なんですって？」

ローラの目つきが変わる。
もはや弱弱しい先ほどまでのローラでは無い。
それが緊急事態だと言う事とすぐに察し、頭で自分が取るべき行動を探す。
肩から手を離し、立ち上がるその姿はまさに大国アメリカ合衆国を背負って立つ軍人のそれだった。

「あの……ローラさん…」
「志穂音ちゃん……先に言ってタクシー捕まえてきて、旅館に戻りましょう。私も用意してすぐに追うから」
「だけど怪我が…」
「大丈夫、指示するぐらいだからこんな怪我どうってことないわッ。ほら、急いで」
「わっわっわッ」

ローラは志穂音の背中を押しながら急かす。
志穂音は何か言おうと、口を開けたがそれを遮るようにドアが閉まる。
……やっぱり言わない方が良かったかな……。
志穂音は少しそんな事を思いつつ、言われた通りタクシーを捕まえに走った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

遠ざかる志穂音の足音をに耳を澄ませ、ローラはドアの前から離れるとベッドの傍まで移動する。
そしてローラは目覚めぬアルディの頭をそっと撫でながらつぶやく。
「……アルディ、姉さんちょっと用事で行かなきゃいけないから…

……」

優しく、世界でたった一人の血のつながった弟に語りかける様に。

「あたしが帰って来るころには、きっと目覚めてるわよね？」

返事のない、大切な家族に向けてローラは話す。

「だからその時、ゆっくりと本当の事をお話しましょ」

ローラは名残惜しむようにアルディから手を離しベッドにメモリーチップを置いてドアへと向かう。

そしてドアの前に立ち、まさにドアを開けようとしたところでローラは最後に…と付け加えた。

「けど、もし……もし仮にあたしが帰ってくるずっと前に目が覚めちゃったら……。その時は……あなた自身の判断で……？禁断の果実？に手を伸ばすかどうかを決めなさい。そのための鍵はそこに置いておいたから……それじゃあ……ね」

そう言い残し今度こそ、ローラは部屋を後にする。

アルディの傍らにそっと置かれたメモリーチップは月の光に照らされて、まるでスポットライトを浴びているかのようにきらめいていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ハァァァァッ！！！」
鈴は近接武器を持たない?福音?へ正面から仕掛けた。
振り下ろした?双天牙月?を?福音?は腕部の装甲で受け止める。

「へぇ…結構装甲も固いのねッ、だけどッ！！」

鈴はこの戦闘にあたって、?甲龍?に機能増幅用のパッケージをインストールしていた。
その名も?崩山?。
?甲龍?最大の特徴でもある?龍砲?をもう二門増設し、更に不可視の弾丸は赤く熱を帯びたいわゆる?熱殻拡散衝撃砲?となり威力が格段に上がっている。

鈴はその増設された?龍砲?を全門開くと、?福音?に向け至近距離からぶっ放した。
鈴の?双天牙月?によって動きを止められていた?福音?がもろに直撃を受け吹き飛ぶ。

「くらえッ！！」
そこへ紅い影が飛び込んだ。
箒は吹き飛び仰向けとなった?福音?の腹部に?空裂?の一撃を振りおろす。
しかし?福音?は大型のリアスラスターそして脚部などのスラスターを使用して体勢を整えると箒の太刀を回避する。

ッく！？　あそこから立て直すかッ！！

にしても……この機体、攻撃面においてはスムーズだがかなりエネルギー効率は悪いようだな…。

現在まだ箒は知らないが、?紅椿?の展開装甲は自発展開モードに設定されている。
いわゆる完全オートであり、箒の動きに合わせてＩＳが次の行動を予測し装甲を展開しているため、戦闘行動の効率は良いがエネルギー面はかなりきつくなっていた。

と、箒が一瞬意識をそらしたのを見逃さず?福音?が翼の砲門を解放する。
それは拡散兵器ではなく、一夏を落としたあの?収束砲撃?。

まさか、この間に移動しながらチャージをッ!?
「ッ!?　しまった」
「あんの、馬鹿ッ!!」

「無理をするなシャルロット、鈴ッ！　くそッ!!」

一瞬の気の緩み。
それが真剣勝負において何を意味するかは箒自身が一番よく知っている。
既に光は砲身を離れこちらに迫っている。箒は少しでもダメージを減らそうと?雨月?・?空裂?を前に突き出して腕部装甲で頭部を守る。

とそこへ、いきなり通信で聞き覚えのある声が耳へ飛び込んだ。

『箒ちゃん、自分の前に壁があってそれが自分を守ってくれるのをイメージしちゃって!』

声が束である事は瞬時に理解できたが、内容までしっかり頭で理解する事が出来無かった。
しかしそれを束が通信で言ったと言う事は少なくもこの現状では悪くは働かないだろう。

自分の前に壁があるのをイメージ!?
よく分からんが……えぇい、こうでいいのかッ!!

箒は必死でその状景をイメージする。

すると?紅椿?の展開装甲がそれに反応。
瞬時に前面に強固なシールド装甲が出現し、一夏を一撃で落とした収束砲をいとも簡単に防ぎきる。

「これは……一体……」
『ふぃ~危なかったぁ~……』

額の汗をぬぐうポーズで束が大げさにリアクションをする。
そしてその隣では、いつもと変わらぬ表情の千冬が立っている。

「あの…これは…」
『箒ちゃん、今のが?紅椿?最大の能力にして基本中の基本?展開装甲?だよん♪』
「展開……装甲……?」

箒は聞き慣れない言葉に首をかしげる。
そこへ千冬の補足説明が入った。

『第四世代機の目標でもある?パッケージ換装を必要としない万能機?それを可能にした可変装甲展開システム。それが展開装甲だ』

「第……四…？」
『展開装甲を使うには何にでもイメージが必要だからね、その辺は気を付けて』
今でさえ一番進んでいるとされるドイツの？シュヴァルツェア・レーゲン？やこの？福音？でさえ第三世代だと言うのに、第四……。この？紅椿？が！？
箒は驚きのあまり声が出なかったが、千冬の声で我に返る。
『篠ノ之、驚くのは分かるが後にしろ。今は戦闘中だろう』
「あ…は、はいッ」
『箒ちゃん、？展開装甲？の制御プログラムＯＳをたった今端末からそっちに送っちゃったからね。？展開装甲？をセミオートにして、エネルギー効率優先に。これで少しは燃費は良くなるはずだよん。まぁ後は色々お楽しみ――――――でッ！？』
「余計なことは言わんでいい！！」
ゴッと殴られた音がして、千冬が行ったのか通信が切れ、モニターに？ｄｏｗｎｌｏａｄ？の文字が浮かび設定が変更されていく。
それを確認すると箒は再び二刀を構えて？福音？へと向かう。
？福音？は高度を下げ再び一番鈍重なラウラを狙っていた。
「ラウラッ！！」
箒は先ほどの束の言葉を思い出しながら、剣をふるった。
イメージ……イメージだッ！

私はこの相手を切るッ！！

そう強くイメージすると装甲が展開し腕部にスラスターが現れる。

「ふッ！！！」

箒の鋭い振り抜きとスラスターによって加速された雷のごとき一振りが、？福音？を弾き飛ばし弾き飛ばされた？福音？が海を跳ねる。

「ロッソッ！！」

「任せなッ！」

ロッソは海の上を跳ねて行った福音の翼を掴むとまるでもう牛にまたがるかのようにその背に乗る。

『……マルチスラスターを破壊すればッ……』

「そんな機動も取れねぇだろ！」

ロッソは、頭部に接続されたスラスターの装甲板を？パーチェ・ディフェーサ？のバルカン砲で引っぺがすと右手を力いっぱいむき出しになった内部へと叩きこむ。

バギバギッっという配管やエネルギーラインが引きちぎれる音がしてロッソの右手が引き抜かれ、掴んだ物をロッソが海へ投げ捨て背中から離れる。

その直後頭部マルチスラスターが火を噴いた。

「ハッハァッ、どうよ！！」

重要なスラスターを一つ失った事で細かな制御が出来なくなり、回避行動を上手く取れない福音に最後と言わんばかりに、射撃の雨が降り注ぐ。

「ここまでみたいだね！」
シャルロットは？ラピッドスイッチ？で？リヴァイヴ？に搭載されている二十もの火器を撃ちまくっていく。

「私たちは止められませんわよッ」
更にそこへセシリアのビットが襲い、メインの背面スラスターも限界が来たのか火を吹き始めた。
「遠慮はいらないわ、これも貰っときなさいよッ！」

海面すれすれを飛ぶ福音の正面に躍り出た鈴が？龍砲？の一斉掃射を行う。
その全てが直撃し機体が爆風と衝撃で持ちあげられたその隙間に箒は機体を滑り込ませ二刀で思い切り上空へ切り上げた。
「ふんッ！！　行ったぞラウラッ」
「あぁ、後は任せてもらおう」

もはや生きているスラスターなど存在せず、綺麗な銀色の装甲は穴だらけとなっていた。
打ち上げられた？福音？はろくに機動すら取れずボロ雑巾のような姿をその場に晒す。
そして上空では既に、ラウラが？ブリッツ？の砲撃体勢となり？福音？へのロックオンも完了していた。

「私たちの勝ちだッ！！」

そして、最後。打ち上げられた？福音？に超音速で打ち出された大口径の弾丸が直撃し水しぶきをあげて海へと没した。

その姿を確認しながらトドメを受け持ったラウラの所に、一同が集

まってくる。

「ねぇ、ちょっとあんたやり過ぎじゃない？」
「いや、そうでもあるまい？」
「まぁアレだな、あたしのスラスター破壊が効果的だったな」
「違うよ、ロッソ何見てたの？　僕の射撃だって」
「全くこれだから……。私の完璧なビットコントロールあってのことですわ」
「何を言う、私の切り上げだッ」
「あんたらねぇ、どう見たってあたしの？龍砲？じゃん」

皆が口々に軽口を言いあう。
勝利を確信して。

後は搭乗者を海から引き揚げればそれで終了だ。
と誰もが思っていた。

しかし……突然

――――――――――海面が爆せた――――――――――

「何ッ！？」

ラウラが表情をこわばらせながら叫び一斉に、皆が爆せた海を見る。

「う、嘘でしょ、これってセカンドシフトじゃッ！？」

「冗談きついぜッ！？」

爆せた海は一部が半球上に蒸発し、その中心には綺麗な青白い雷を伴いながら浮かぶ？銀色の装甲をまとった一機のＩＳの姿？

「これ、信じられないよ……」

「こんな…異常なまでの……エネルギー量…初めてみましたわッ！？」

セシリアが、悲鳴にも似た声で叫ぶ。
現に相手を補足している？ブルー・ティアーズ？のハイパーセンサーがあり得ない量のエネルギー量を検出していた。

「……くそ、まだあるのかッ」

そう……箒が歯をギリッとかみしめた直後。

『キアアアアアアアアッ！！！！！！』

獣の咆哮ともとれるその叫びの後、福音が？消えた。？

「馬鹿なッ！？」

箒は驚愕し、ハイパーセンサーで行方を追う。
しかしハイパーセンサーを持ってしてもその姿を捉える事が出来ない。

「ぐうあぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

「ッ！？」

箒はその声に振り返る。
するとそこには既にラウラを行動不能にし、強大なエネルギーの翼を携えた？福音？がこちらを見ていた。
箒にはその綺麗で見惚れそうになる翼が、禍々しく自分たちを絶望へといざなう漆黒の翼のように見えていた。

？福音？はラウラをまるでごみを捨てるかのように投げ捨て、すぐ近くでラウラを助けに入ろうとしたシャルロットをエネルギーの翼

で抱き、驟雨を零距離で浴びせた。

「うあぁぁぁぁぁぁッ！！」

「シャルロットッ！！」

「こんのぉッ！！」

「まだ落とされたりねぇかっ！」

二人もの代表候補生を難なく片付けた？福音？に激高した鈴とロッソが向かう。

ロッソは？福音？の右腕に？テンポラーレ？を巻き付け正面を開ける。

そこへ鈴がスラスター全開で飛び込む。

「止められるもんならッ！！」

しかし？福音？は鈴の突き出した？双天牙月？を左手一本で？掴む？と思い切り引き寄せ腹部に蹴りを入れぐるんッと機体を回転させてかかと落としの様な形で海へ叩き落とした。

更に右腕を抑えていたロッソを、単純なパワーで圧倒し？テンポラーレ？を一気に巻き取りその手でロッソの顔面を掴むとギリギリと締めあげながら、？シルバー・ベル？を一転収束モードで撃ち放つ。

悲鳴の一つも挙げられず鈴とロッソもまた、赤子の手をひねるように海に沈められてしまう。

「鈴ッ！！、ロッソ！！」

「箒さんッ！！　今は自分たちの身の安全を最優先に考えましょう！！」

「セシリア、だがッ！！」

そうは言うが、？紅椿？のエネルギーもほとんど残されていない上に自分よりもＩＳの操縦に長ける者たちをあんなに簡単に片づけてしまったのだ。

気を付けてどうにかなるレベルでは無い。

？福音？が次はお前たちだと言わんばかりにこちらを睨みそして次の瞬間には翼をはためかせ一気にこちらに飛んできていた。

終わるのかッ！？

私たちは……。こんなところでッ。

認められるものかッ。だがッ！！

それはセシリアとて同じ気持である。

こんなところで、汚名返上さえ出来ずに終わる？

そんな事認めたくありませんわ……でもッ！！

目の前には既に絶望が待っている。

この距離だもうどうスラスターを噴かそうが、何をしようが間にあわない。

二人は思わず目を閉じる。

そこに思い出されるのは、互いが思い守りたい人物――――――。

――――一夏に――――――

――――アルに――――――

――――――会いたい――――

こんなに強く願った事などこれまで一度も無かった…

それは死を覚悟しているからか、もう助からないと、無事では済まないと心が分かっているからか。

こんな事になるならさっさと思いなど伝えておけばよかった…。

きっともう二度と会えなくなるかもしれない…。

一夏……私はどうやら……お前の敵を取れそうもない……

アル……私……あなたを守りたいとついさっき決意を固めたばかりですのに……。

本当に……すまない…

本当に……すみません…

そう心で念じかけた時だった。

次の瞬間二人が感じた物、聞いた物は自分たちが砕け海へ落ちる音では無かった。

一つは何かが何かを切り裂く音。そしてもう一つは、一瞬だけ熱くそして大きな爆発音を残していた。

「……な、んだ？」
「……？」

二人はゆっくりと目を開ける。

そして二人は、目撃する。

あの圧倒的な強さを誇っていた？福音？が大きくのけぞり吹き飛ぶその様を。

――――そして――――

「ッ……あ……あぁ！」

「……う、うそ…ッ！？…こ、こんな……こんな事……ッ」

白き者は肩に剣を構え

青き者は全てを撃ち抜く銃を構える。

「？福音？てめぇの相手はッ！！」

「僕たちだッ！！」

そして二人はしかと見た。

今さっき念じ会いたいと願った、強く思ったその人を――――――――

第４５話～絶望への挑戦～（後書き）

福音戦第二ラウンドの半ば辺りまで話が進み、次は少し短めのを挟む予定ですが長くなるかもしれません（ぇ

まぁ重要な所なのでしっかり書きたいと思います。

では次回お会いしましょう～

第４６話～似た者同士は白にて笑い蘇る～（前書き）

アルディの復活回。

久々に彼女が登場。

いまさらですが、オンリーオリジナル回。
これまで何回そんなのがあったかって呆れ突っ込みは無しで…。
ではどうぞ

第４６話～似た者同士は白にて笑い蘇る～

真っ白な空間だった。

「……こ、ここは…」

どこなのか、説明は出来ないがそこには間違いなく一度来た事があった。

……あの時の……。

それは、ラウラとセシリーが闘った学年別トーナメント。

あのときに僕は、突然気を失って、気がつくとこんな白い空間にい

た。

だが今いるこの空間はあの時と一つだけ大きく違っていた。

「……冷えてるね、ここ…」

僕は辺りを見渡しながら腕をクロスさせて両腕を軽く摩る。

凍えそというわけではなくどちらかと言えばひんやりとした冷たい空気が漂っている。

僕もこの空気で目が覚めたようなものなのだ。

まぁそれはいいとして。

そう言えばあの時、僕は一人の少女に会ったはずだ。

底抜けに明るい金髪ポニーテールの少女に…。

と、僕が彼女を探し再び辺りを見渡していると、不意に後ろから声がした。

「……やぁ、目が覚めたんだね……おめでと」

「え？」

その声はまさに、僕が探していた少女の声。

だがその声はあまりに不機嫌で、以前会った時とは服装も大きく異なっていた。

デザインは変わっていないが、パーカーも所々敗れ特に右側の服の破れが酷かった。

ジーパンもボロボロで、ダメージジーンズと言い張っても苦しいほど。

そしてスポーツタイプサングラスも上半身と同じように右側が大きく欠け彼女の黄金色の瞳が顔をのぞかせていた。

……っていうか、あれ？

どうして僕は今色が…。

「今はね……。ここにいるからさ」

「ッ！？」

「そんな驚く事無いでしょ。ここは言うなればボクの世界なんだからね」

「君の、世界……？」

この何もない真っ白な世界が……君の……世界……。

「悪かったね、何にもなくて…」

彼女はクルッと僕に背を向けるとその場に胡坐を組んで座り込む。

背中もよく見ると服がボロボロで、時折破れたあなから見える素肌にもあざが多く残っていた。
僕は若干気が引けたが、それでも気になり遠慮がちに彼女に尋ねた。

「あ、あの……その怪我…」
「ん？」

またもかなり不機嫌な返答。
しかし彼女はそんな反応をしながらも返事を返してくれた。

「君のお姉さんにね……ったく、思いっきりやってくれちゃってぇッ」
「姉さんに？」
「そうだよッ！！　まぁあの時はボクも君の？半身？のみしかコントロールできなかったからね。そこを正確にブレードで一突き……」
「……そうなんだ」

それで服の右側があんなにボロッボロなのね。

僕は気を失っていたが、ぼんやりとだが何が起きたのかは分かっている。
それも多分僕が？ココ？にいるからなのだろう。

「それで、君は姉さんに認めてもらえた？」
「まだだよ……ってなんでそれをッ！？」
「あのね……僕にもあの時の記憶がうっすらあるの…。やたら叫んでたじゃないか認めろとかなんとかって…」

それを聞くと、彼女は驚いた顔から一転してうつむく。
う、ひょっとしてこれは聞いちゃならない事だったかな…。

しばらくの微妙に嫌な（僕的に）沈黙の後、彼女が静かに口を開く。

「……君は……さ。どれだけ叫んでも誰にも相手にされない。誰にも気が付いてもらえない寂しさがわかるかい？」

「え？」

「誰も何も返事してくれない。僕はここにいるのに、その存在すら確かめられないその寂しさ……つらさが分かるかい？」

……それは。

人は、誰かに気が付いてもらえる事で己という物を確認できる。

それが全く知らない相手でも、街中で叫べば？いきなり何だ！？？と振り向いてくれる。

気が付いてくれる、見てくれる事で人は人としてそこに存在できる。

だけどもしそれが無ければ？

人は自分を確認できない。

それは言うなれば究極にして極限の？孤独？だ。

「ボクはね。ずっと叫んでたんだ。ここにいるよって。けどどこの誰にも相手にされずその存在すら誰にも気づいてもらえなかった。……それは丁度……君のお姉さんだよ」

「気付いて……もらえなかった……」

「いや、正確には気付いていたんだろうけど、ボクが何なのかそれが分からなかったってことなんだと思う。人は窺知しがたいものを怖がるらしいからね…」

彼女は努めてサラリと言ったつもりだろうが、その声色には若干の悲しみが含まれている。
そして更にこの場の空気がひんやりとする。

なるほどね……。心が寒い暖かいのと同じような物なんだここは。
彼女が楽しければ暖かく寂しければ冷たい。

そして僕がここにいるという事はどんな形であれ僕は彼女の心の中にでもいるということになるのだろうか。

「結局ボクは、君があの時来るまでずっとこの真っ白い空間で一人ぼっちさ。だからあの時は短かったけど……楽しかったな」
「あ…」
だからあの時あんなに暖かくて、彼女も少しはしゃぎ気味だったのか…。
そりゃ……そうだよね。

一人で寂しいって気持ちは……そりゃ深い浅いはあるかもだけど……。
誰だって辛い。
「……まぁ、それを今行っても仕方ないんだけどね…多分僕のいってる気持なんてそうそう分かるもんじゃないだ「分かるよ…わかる」
…え？」

「僕……両親を海で亡くしてて。それからしばらくは君と同じ気持ちだったと思う…」
「……言わせてもらうけど、君にはお姉さんがいたじゃないか？」
「うん……だけどあの時の僕は…きっと姉さんの事なんて見てなかった…」

僕は知らず知らずのうちに彼女の声を遮って口を開いていた。

思いだされるのはあの海難事故。

父さんと母さんを一度に亡くしたあの悪夢。

あの後僕は姉さんの声なんて届かないほどに自分の殻に閉じこもっていた。

僕にはもう、何もないって……勝手にそう思って。

「……そうなんだね。……ハハッ、ボク達似た者同士だ」

「そうかも……ね」

再び流れる沈黙。

でもその沈黙はどこか、さっきの沈黙とは違っていて不思議と気持ちの良いものだった。

ひんやりとした空気も若干和らいだ気もする。

すると彼女はゆっくりとこっちにやってきて、静かにそしてそっと僕の背中に自分の背中をくっつける。

「ちょ、何――ッ！？」

「いいから、じっとしてなよ……」

「いや…だけど……」

「……にはは……心臓の音が早くなってるゾ？」

「あ、当たり前でしょッ！　いきなりこんなことされたらッ」

僕はそう言う耐性っていうか……そのあれだ。
そう言う事の経験がほぼ無いんだからッ。
まぁそれに、そもそもしてくれるような人もいないしね。

「……あの…？」
「暖かいね？」
「え？」
「暖かいんだやっぱり…。人の暖かさなんて……ボク初めてだからね」

ニッと笑うその表情は、この行動に深い意味も思惑も何もない事を如実に表していた。
同時に僕は彼女のその言葉を聞いて、本当に……辛かったんだなと思った。
人の暖かささえ知らず、この明るい性格も孤独を紛らわせるためなのかなと思ったら余計に胸が締め付けられる思いだった。

やっぱり僕たちはどうやら。初対面ながらに似た者同士らしい。

「……さてと……」
彼女はトンッと反動をつけて僕の背中から離れると、クルッとこっちを向く。
そしてスッと右手を差し出した。

「もう少しお話してたいけどね。ほら時間が無いじゃない？」
「時間？」
「そう、時間。君の大切な大切なお仲間が大ピンチだってさ」

「お仲間？」
「何でも、あの……一夏だっけ？　彼を落とした相手らしいからね」
そう言って彼女が握っていた手をゆっくりと開く。
そしてそこにあったのは、鈍く光る弾丸のネックレス。
もちろんだが、弾丸は以前と同じく真っ二つだ。

「これ……？ストライク・バーディ？…」
「そそ、君の力だよ？」
「……僕の力…」
僕はネックレスを受け取りそれをじっくりと見つめる。
と、彼女がいきなり質問を投げかけてきた。

「ね、ね……君はさ、その力で何がしたいの？」
「何が？」
「そうさ……気になるじゃんそう言うの？」

何がしたい……。

そんな事、あんまり深く考えた事無かったけれど……。
僕は左手で握っていたネックレスに目を落とす。
そして少し考えた後、これだと思う一つの答えを口にした。

「……僕は……もう誰も……大切な人を失いたくないんだ……。力を使うのならそのためかな？」
「大切な……人ね……。それはやっぱり…」
「うん……あの時の僕は泣くことしかできなくて。挙句の果てには僕よりも辛いはずの父さんと母さんに励まされる始末だった…。無力だったんだ」

思えば自分の殻にこもってしまった時だって、本当は自分の無力さがまた誰かを……姉さんを失ってしまうんじゃないかって心配だったからなのかもしれない。

だから……何も聞こえないように……聞かないようにして……世界を遮断して……。

だけど……だけど今は違う。

僕にはコレ（ちから）があるんだから。

力は所詮力でしかないのかもしれない。

だけどそれを正しく使う事が出来ればそれは強さになる。

これは僕の持論だけど、間違っていないと思う。

「僕は……だからそのために使うかな」

「……そなんだね。君の？答え？しっかり聞かせてもらったよ」

彼女は笑って言う。しかし僕はそこにフッと寂しさを感じた。

ゆっくりと遠ざかっていく彼女。

またここで、一人孤独に過ごすのか？

人の暖かささえ今さっき知ったというのに？

そんなの……そんなの絶対に……駄目だッ！

僕は彼女を無視し続ける事なんて出来ない。
それがたとえ、間違っていたとしてもだ。
気付けば僕は彼女の手をグッと掴んでいた。

「え、ちょ、何!?　君はもう行かないと」
「だったら一緒に行こう！」
「えぇッ!?　何言っちゃってんの君!?　あのね僕は君を使って暴走したんだよ!?」
「だから何だって言うんだ！　だったらなおさらだろうッ」

彼女は腕を上下に振って振りほどこうとするが、僕はそれに必死にしがみついた。
そして自分の思いを彼女にぶつける。
丁度聡也がロッソにしたみたいに。

「君は、姉さんに認められたくないの!?　自分の存在を誰かに確かめてほしくないのかいッ」
「…そりゃ確かめたいよッ、だけどそんな人いないッ。君だってボクの事なんてすぐに忘れるッ。そうに決まってるんだ。だって人は窺知しがたい物を――――――――――」

「僕は君を認めてるッ！！！　忘れもしないし無視もしないッ！！！！」

「――――――――――――――――ッ！？」

その声は自分が驚くほどに大きく、彼女が驚嘆するに値するほど迫力があった。

だけどこれが本心。

僕は絶対声も姿も彼女という存在を忘れない。

だけど、それだけじゃつまらない。

そう人生は楽しくいかなきゃ意味が無いのだから。

「僕は君を忘れないし既に君の存在を認めてる……。でも……そこで終わって良いの？

君って言う存在が。こんな面白くて楽しい存在がこんなところで終わっても？」

「……」

「知ってもらおうよッツ。皆にも世界中に君って存在をッ」

「世界……中に……？」

割れたサングラスからのぞく彼女の目にはうっすらと涙も見える。

「そうさ、そのためにも僕は力を使うッ。さっき言ったよね。僕は大切な人をもう失いたくないって……それもう君も入ってるから」

初対面で、話したのだってほんの少し。

だけどそこには、確かに本心で語り合ったって言う自信があった。

本心で言いあえば必ず気持ちは届く。

これは僕の体験でもあった。

僕は彼女の手を離して、返答を待つ。
彼女は繋がっていた手を、まじまじと見詰めて考える。
きっと頭の中ではどうすればいいのかって言うのがグルグルと答えを求めて回っているに違いない。

そして一度大きく頷くと、顔を上げる。

サングラスを外しながら涙をぬぐい真っすぐ見据えるその顔にもう、迷いはなかった。

「……君も物好きだね？」
「嘘つきとはよく言われるけどね？」
「じゃあ今までのも嘘？」
「これは本当かな？」

フフッと二人で笑いあう。
そして僕は左手を、彼女は右手をそれぞれ重ね合わせる。

「さぁて……時間も無いんだったね？」
「そうだね。急がないと送れちゃうぞ？」
「……オリジナルデータはどこまで？」
「そう言えばさっき、ちまっこいバンダナ少女がメモリーチップを持ってきてたなぁ」
「志穂音だッ」
「そのデータを見ない事には何ともねん……」

「そう……」

「うん…」

ゆっくりとネックレスから光があふれだす。

「それじゃ……」

「行きますか？」

そして僕たちは、その光にゆっくりと包まれていった。

気がつくとそこは、暗い病室で僕はベッドの上にいた。

「戻ってきたのか……？」

『そうみたいだね…』

？？

『あぁぁもう……うざったいなぁこのコードッ！！』

ブチブチッ

あれ？

僕は右手なんて動かしてないけど……？？

なんで勝手にしゃべったり動いて、心電図モニターのコードを引きちぎって――――――――ってまさかッ！？

「え、なにッ、一緒に行くって言ったけどそう言う感じなのッ！？」

『仕方が無いじゃないかッ。ボクだって初めてなんだよ。とにかく早くメモリーチップを…ッて痛たたたたたたたたッ！！！』

つまり、その左側に僕で右側に彼女で……っていうその前やってた特撮ライダー物状態。

あれ、アメリカでも字幕付きでやってるのをネットで見た事があってね。

ってそれはどうでもよくて。

痛がる僕（正確には彼女）を横眼で見ながらそりゃそうかと。

……右側ブッ刺されたんだもんね……痛くないわけないよね…。

っていうかこの状態だと痛覚まで分断されるらしい。

刺された痛みは完全に今彼女が感じてくれているおかげで、僕は痛みといっても小傷程度のヒリヒリ感しかなかった。

『と、とにかくＩＳ　ＩＳ起動しよう』

「あ、そ、そうだね」

僕はチップを手に、痛む身体を引きずって病院の屋上に立つ。

そしてネックレスを見やった。

「……ねぇ、これ思うんだけどさ。？ストライク・バーディ？ってぶっ壊れたんじゃなかったっけ？」

『完全破壊までは逝ってないよ。本体が壊れればボクもタダじゃ済まないからね』

「それってどういう事？」

『……まぁぶっちゃけちゃうとね。ボク？ストライク・バーディ？の管制意識（コントロアウセザー）なんだ。だから本体が壊れればボクも一緒にパー。おわかり？』

「……とりあえず、僕がとんでもないのを引きこんじゃったって言

うのはよく分かったよ」

思わず頭を抱えたくなった。
もう二度と孤独な思いをさせたくないと一緒に行こうと手を取った相手が、いわゆるＩＳに存在すると言われる、意識そのものだったとは……。

僕がそんな事を考えていると彼女に急かされる。

『ホラホラ、急いでって。システムチェックとかもしなきゃいけないんだからッ』
「あ、あぁ…うん分かった」

僕は久しぶりにグッと、ネックレスに力を込め瞳を閉じる。
そして心の中で強く念じる様に叫んだ。

？……行こう……バーディッ！？

あの時はここまで行って、結局解除された。
しかし今度は確かな力の奔流を感じながら僕はゆっくりと目を開ける。

機体は、従来の鮮やかな青色の装甲を持つ？ストライク・バーディ？だったが所々の意匠を？ミラージュ？から持ってきているようで、腕部には無いはずの近接ブレード？ランディングスパイク？そして姉さんの機体の一部装甲を効果的に流用する事で限定的に？ステルス・ミラージュ？の使用も可能となっていた。

長方形の？ウェポンスクエア？は健在だが、姉さんの機体になかっ

たバイザーはオリジナルデータの欠損を埋め切れていなかったのか、右側の目の部分辺りが大きく割れたままだった。

そして早速チェックに入っていた彼女（右側）に意識を持って行く。

『うわっちゃぁ……確かによく直したけど色々つぎはぎだらけだなぁ……』

「酷いの？」

『酷かないよ、酷かないんだけれど……あぁ……やっぱりプログラムリアクトを使ったんだね』

リアクト？

僕は聞き慣れない言葉に首をかしげる。

それ見て、彼女はため息を吐くと呆れながら説明した。

『プログラムリアクト。正式には？ＲＥＡＣＴ：Ｒｅｃｏｖｅｒｙ Ｅｘｔｒａ ｌｏｓｓ ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ Ａｃｔｉｏｎ Ｃｏｎｔｒｏｌ ｆｏｒ Ｔａｃｔｉｃｓ 直訳すると改修機における重要欠損情報の戦術的運用？つまり失ったボクの情報を他の機体（本体）で補ってるんだよ、今のコレは』

「それって……やっぱり問題？」

『そうだね……あのバンダナ少女、かなり頑張ったみたいでね、機動や通常行動はほとんど支障はないんだけど……』

「だけど？」

彼女は言いにくそうに言葉をそこで切ると、視線を泳がせる。

だが、時間も惜しい。

しばらく言い淀んでいたが、どうやら最終的には？惜しい？という気持ちが勝ったようで彼女は、ため息交じりに言った。

『……エネルギーバイパスの構築が不安定だから……その……現状じゃ？ストライク・バーディ？の半分の火力も使えないかも……』

っく、聞くんじゃなかった……。

？ストライク・バーディ？は一にも二にも火力で押し切るのがスタイルの一つ。

そのスタイルを潰してまで、一夏を落としたって言うあの機体と戦えるのか…。

一瞬暗い影が僕の心に忍びよる。

だが僕はその影を、慌てて追い払った。

駄目だ、こんなんじゃッ！

誰ももう失わないために戦うんだッ！

そう決めたじゃないかッ！！

僕はかぶりを振って迷いを振り切ると、丁度彼女が叫んだ。

『よっし、ひとまずこれでエネルギー面以外はなんとかなるよッ！』

「……分かった、それじゃあ……」

『よし、出ぱ～「名前決めようか」……はえ？…』

いや…まぁ確かにそういう反応になるのも分かるけど。

……なんかこう……彼女彼女じゃあ……呼びにくいよね。

それにとっさに呼ぶには名前あった方がいいと思わない？

『名前？』

「そう、ふと思ったんだよね。あるのかなって」

『……無いね』
「そう……だったら、僕が君に気づけた記念に名前でも送ろうか」
『名前……』
「どう？」
『……ふふッ、まぁ勝手にすれば』

彼女は笑ってそっけなく言うが、伝わってくる気持ちはまんざらでもない様子だった。

う～ん……そうだなぁ…。
ただ、機体名を縮めただけとかはかなり味気ないし……。

何よりも、彼女は今日がスタートライン。
……そう光り輝く太陽のように……きっといつか皆が彼女の名前と存在を知ってくれるように……。

「……よし、決めたッ」
『聞かせてもらおっか？』
「君は今日から……レイだ」
『レイ……レイかぁ～……ま、ありがたく受け取っておこうかな』

にははっと明るく笑うその姿はまさにレイ(光)だ。

一通り笑いあい、そして静かな時が行くばかり流れる。

そしてどちらからがともなく、つぶやいた。

「……さぁ、行こう」

洋上を、？福音？の姿を追って飛ぶ。

『反応はあるけど、やっぱり機動力はどっちみちアテになんて出来ないもんねぇ』

「それでも出来る限りの速度で飛ばなきゃ」

僕は一旦武装へ回していたエネルギーを遮断し、スラスターにそのエネルギーを回す。

変換効率が極端に悪くちゃこうでもしないと出力を上げられない。

焦り、奥歯を噛む。
と、ふと旅館の方向から一本の白い光が高速で飛行しているのを発見した。

「あれは…」
『……？白式？……な～る……？セカンドシフト？かぁ…』

セカンド……シフトッ

向かう方向が同じならば次第に二機は接近していく。
そしてようやく向こうもこちらに気がついた。
一夏の？白式？はレイが言ったように？セカンドシフト？によって、背面のスラスターは更に大きくそして右手に？雪片？を構え左手は大きなクロー上に変化していた。

「アルディ、お前！？」
「君こそ、落とされたんだってね。怪我は大丈夫なのかい？」
「あぁ、もう怪我は大丈夫……治ったさ」
『……あ～そういう神秘的な力、ボクにもないかなぁ…』

治った…って、そんなバカな！？

僕は一夏の身体を見やる。
一夏がどれほどの怪我をしたかは知らないが、どんなに治癒力の高い人でもこんなに早く傷は癒えたりしない。

……どういう事なんだ？

『ま、ご都合主義って言うかさそう言うやつなんでしょ？　ほんとことんボク達は主人公に向いてないね？』
「そう言う事は、言わない約束で……」
「？　お前どうかしたのか？　本当に大丈夫なのかよ」
「怪我は痛いけどね……ま、後で説明するさ。それよりも今は……急がないと」
「あぁ……だなッ！！」

僕たちは再びスラスターに火を入れて暗闇を切り裂いていく。

『居たッ！』
「怪我！？」
『ちっがーうッ！！　あそこッ！！』
「アレはッ！！」

遠目から見ても分かる、すさまじい量のエネルギーの翼。

それによって一つまた一つと、光が海に没していく。

そして最後に残った二つの光。
その二機が誰なのか？コア・ネットワーク？を通じてそれはすぐに分かった。

「箒ッ」
「セシリーッ！！」

距離はもうそんなに無いが、？ストライク・バーディ？の速度ではとてもじゃないが間にあわない。

「一夏は、イグニッションブーストで箒をッ。僕はここから狙い打つッ！！」
「どうやら迷ってる暇はねぇ……アルディ……一発で決めろよ！？」
「はなからそのつもりさッ！！」

僕は左側の？ウェポンスクエア？を展開。スラスターサポートがスライドし長方形のスラスターの中から？ヘヴィハンマー？が顔をのぞかせる。

『ロックまで待ってッ』
「いいや、ロックなんて待っていられないッ」

僕はチャージの指示を飛ばし、マズルに光が集まり始める。
それにレイは、若干焦りを口にする。

『ちょ、いくら遠くないって言ったってこの距離だよ！？』
言いたい事は分かる。
一夏が吹き飛ばした方向を正確に予測して、その標的に目視で当てるなど普通に考えれば不可能に近い。
だけど……大切な人を守れるなら、僕はその不可能さえも可能にして見せるッ！

「大丈夫ッ、目視で……」

「当てるッ！！！」

刹那大きな衝撃と共に、一筋の閃光が放たれる。

それと同時に僕は、一気に加速。

直撃を確認する必要なんて無い。

アレは当たる。

そう信じ貫いていたから。

そして一夏の斬撃と僕の攻撃によって吹きとんだ？福音？とセシリー達の間に機体を割り込ませて、一夏とほぼ同時に叫んだ。

「？福音？てめぇの相手はッ！！」

「？僕たち？だッ！！」

？福音？の姿を間近でまじまじとみたレイが嫌みたっぷりに口を開

く。
『ハハンッ？　なるほど……？福音（コレ）？もセカンドシフトかぁ。やれやれ…羨ましい限りで…こちとら、ボロボロのつぎはぎなのにね～』
「身体もボロボロなんだし……今の僕たちには丁度いいんじゃない？」
『……さぁどうだろ♪』
「だけど、僕たちはこの力で…ッ！」
『うん、そうだねッ』

多分初めてこんな気持ちで、ＩＳに乗っていると思う。

だけど……本当にもう誰も目の前で失いたくないから……。

僕はチラッとセシリーを見る。
セシリーは口元を手で押さえて必死に涙を我慢しているように見えた。
そして海面に視線を移すと、なんとか海面にまでは上がってこれた面々が驚愕の目で僕らを見上げている。

だが、一夏と言葉を交わす箒。

その言葉すらかわせないほど驚くセシリー。

そして傷だらけで僕たちを見上げる鈴、シャルロット、ラウラ、そしてロッソ。

僕は？福音？を改めて睨み直す。

相手もまた、こちらをジッと見据える。

そして僕は、ゆっくりと左手の荷電粒子砲？ファイアーフライ？を構えた。

つぎはぎだろうと何だろうと、その雄姿は今ここにいる誰もがしかと目にしている。

「……？福音？、この代償は……高くつくよッ！！」

その啖呵が、開始のゴングだった。

第４６話～似た者同士は白にて笑い蘇る～（後書き）

一夏は割愛。
あくまでこの本編主役はアルディなのでね。

さて次回はアルディとレイ、一夏のほとんど初の本格戦闘シーンが始まります。

どうなる事やら。

ではまたよろしくお願いします。

第47話～ピース～

『くっそ、やっぱ直撃でも駄目かッ』

？ヘヴィハンマー？の直撃にも目だった外傷のない福音を見てレイが舌打ちをする。

そして僕もまた同じ事を考えていた。

？ヘヴィハンマー？は？ストライク・バーディ？搭載火砲の中では最高火力を誇る兵装。

それを距離による威力の衰退や？福音？の装甲などを差し引いても、直撃して吹きとんだだけとは……。

この？プログラムリアクト？によるエネルギー効率の低下は自分が思う以上に悪かった。

顔をゆがませる僕に、突然ラウラから通信が入る。

『アルディ、お前は後方からの支援に専念しろッ！』

「ラウラ！　君…ッ」

『今は私よりも敵だッ。　その状態の機体では有効打撃は望めん！　一夏にひとまず任せ裏方に回れ！！』

「では、私も…ッ！！」

『セシリアは一旦下がるんだ、お前もエネルギー残量がこころもとなかろうッ』

「ですけど……ッ……分かりましたわッ……。アル。お気をつけて…」

セシリーと箒が一旦戦列を離れる。

それにラウラの指摘は間違っていない。

セシリーも箒もエネルギー残量に不安があるだろうし僕だってまと

もにやりあえるような状態じゃない。
最大火力であれでは、落とすどころかダメージを与えられているのかも怪しい。

出来ない事を嘆くよりも、今はやれる事を……やるしかないッ！

『一夏ッ！！』
「おうッ！」

一夏は返事と同時に？福音？を？雪片？で弾き距離を置く。
そこに僕は正確に攻撃を命中させていく。
すると福音がバッと、翼を広げる。

「まずいアレはッ！！！」

？福音？のデータは粗方レイが見せてくれた。
？ストライク・バーディ？同様に広域せん滅を目的とした特殊射撃型。
ならばあの翼を広げたという事はッ！！

『？シルバーベル？拡散レベル修正。集束距離補正……』

『まずい、あいつ。あの光の翼を？白式？に集中させるつもりだッ！』
「一夏ッ！？――――――――って」
――――――笑っている！？――――

僕は焦りながら、一夏の名を呼ぶが一夏はニヤッと笑っていた。
「いいぜ、かかってこいよッ！！」
その直後、翼の嵐が一夏目掛けて放たれる。

一夏はそれを確認すると、左手の多機能武装腕を構え叫んだ。
「？雪羅ッ？シールドモードッ！！」

雪羅と呼ばれたそのおおきなクロー部が変形し光の膜が広がると、？福音？の翼が消滅してゆく。

『これは……滅茶苦茶だなぁ…』
「エネルギーの……消滅…まさか？零落白夜？のシールドかッ！？」

僕とレイは目の前の光景にそれぞれ驚き呆れていた。
だが驚きながらも砲撃体勢で防御の取れない？福音？に射撃を行い弾雨を止める。
そこへ今度は？雪羅？をクローモードにした一夏が飛びこみ、？福音？と共に夜空に火花を散らす。

すると今度は？福音？が近距離に近づかれては厄介と、機動力を生かし距離を取り始める。
『戦術変更……狙撃に切り替え遠距離機動（ロングレンジマニューバ）へ移こ――――――ッ！？』
高速で思考中の？福音？を背後から？ヘヴィハンマー？の一撃が襲う。

「どこに行くつもりだい？」
『逃がしゃしないよ♪』
「止まって余所見とは……余裕じゃねぇかぁッ！！」

そこに一夏の?雪羅?が襲い、?福音?が再び吹きとんだ。
一夏の攻撃によって、?福音?の強大なエネルギーの象徴でもある翼が片翼もがれた。
「おっしゃ片方、貰いッ」
一夏がガッツポーズをするがそれもつかの間。

すぐにエネルギーの翼は再構築され下の姿をアルディ達に晒す。
その後も何度かチャンスはあったのだが、ことごとく再構築されるりと逃げられてしまう。

「くっそ、またかッ!」
『それよりも、その?雪羅?のクローモードとシールドモードってそんなに多様出来るわけ?』
ごちる、一夏にレイの鋭い声が飛ぶ。
一夏はその声に、苦笑いで返した。
『やっぱりね……そりゃそうか……』
「裏技には代償が付きものってことかな?」
『まぁ、そうだろうね』

?白式?は元からかなり燃費の悪い機体だったが、?雪羅?の発現と大型化したスラスターは?白式?の機動性と攻撃力防御力をかなり底上げはしている様だがその分、更にエネルギーを食いつぶすようになっているはずである。
そして今回も例にもれず、既に?白式?のエネルギーはレッドゾーン手前まで落ち込んでいることだろう。
もう後撃てて一、二回が限界ってとこか。

と、突然?福音?が全スラスターによる?イグニッションブースト

?を行う。
あっという間に両者にあった距離を詰め一夏を回し蹴りで蹴り飛ばすと、スッと不気味にアルディを見て右腕をゆっくりと引く。

『こんにゃろッ！』

だが一撃入れられる前に、レイが?福音?の突き出した右腕を防ぎカウンター気味に僕がガラ空きになった懐へ、至近距離から?ファイアーフライ?をお見舞いする。
威力が低いと言ってもこの距離。
大きく吹き飛ばないまでも、コイツも一緒ならッ！！

しかし――――――

僕が?ヘヴィハンマー?を展開した時だった。

『ッくぅッ！！　こんな時にッ』
「レイッ！？」

苦痛にゆがむレイの顔それを見て何が起きているのかはすぐに分かった。
傷口がッ！？

現在自分の身体をレイと綺麗に半分こしている僕は痛覚も分断されている。
そのため僕は、レイの傷口にまで意識が及んでおらず、かなり強引に?ヘヴィハンマー?を展開してしまっていた。

だが痛みに耐えかね思わずかがみこむ僕たちを、？福音（実戦）？が待ってくれるはずもない。

「しまッ！！」

「アルッ！！」

声が届いた時には、？福音？の弾雨が僕たちを貫いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あぁもう…ッ！！」

アルディが、丁度レイと白い空間で話をしていたころローラたちは、一向に捕まらないタクシーに苛立ちを募らせていた。

「全然通らないじゃん……なんで？」

「仕方ないわよ……この時間帯はタクシーも多くが駅前で待機中でしょうからね…」

ッチと舌打ちしながら、ローラは左腕のギプスの上で指をトントンと鳴らす。

そして、こうなったら旅館まで歩くと言いだしそうになっていたその時、不意に二人に声をかける人物がいた。

「おやおや…これは珍しい組み合わせだね？」

「？」

「ッ――あ、あんたは！？」

声をかけた女性を見てローラは首をかしげ、志穂音が驚きの声を上げる。
その女性は、漆黒の髪の毛にエメラルドの瞳が光り、口元は意味深な笑みをたたえていた。
「初めましてだね、ローラ・サウスバード…。私は…五条　叶。色々と子供たちが世話になっているようだね」

世話になっているという言葉と名前を聞きいてハッとしたローラが志穂音を振り返る。
志穂音は、今にも叶にとびかかりそうになる身体を必死で押さえこんでいるようで、小刻みに片が震えていた。

「あんたの……所為でッ！」
「私が……何か？」
「とぼけるなッ！！　あんたのせいで兄貴や大勢の人が傷ついたんだよッ！」

志穂音は声を荒げ、叶を厳しく糾弾する。
ローラにはこの会話だけで、彼女があの市街地戦闘における一応の黒幕的な人物であるという事は理解していた。
志穂音の言い分も分からなくはない。
しかし、ここで言い争っては後々大事に触ると判断したローラは、まだ何かを言いたそうにする志穂音を制し、単刀直入に尋ねた。

「あたし達に……何の用かしら？」
「おやおや、中々連れない返事だ」
「御託は良いわ、あたし達は急いでるの」
「あぁ、分かっているとも」
「え？」

ローラは怪訝な顔で叶を見つめる。
どういう事？　なんで知ってるの……。
叶えはその顔を見て、笑うと両手をスッと開く。
それはこれから何かを提案しようとしているようにも見える。

「どの道、ここでタクシーを待ったところでそうすぐには来まい？」
「どういう意味かしら？」
「それに、いくらタクシーを捕まえても、どうするね？　？会場？は海の上だというのに…」
「あなた……何が言いたいの？」

叶はニヤリと笑う。
まるでその言葉を待っていたと言わんばかりに。
そして叶が次に言った言葉は、ローラと志穂音をかなり驚かせる物だった。

「君たちを、招待しようじゃないか。我が？艦？へね？」
「なッ！？」
「驚く事でもあるまい。困っている者を捨て置けない正確な物でね？」
「何がッ！！」

志穂音が一言吐き捨てる。
だが叶はそれすらも笑顔で返して、言葉をつづけた。
まるで志穂音の話など聞いていないかのように。

「さて……どうするかな？　なんならオペレーティングシートも一つ確保しようじゃないか？」
「……何が目的？」

「それはまだ言えないがね？　ただ利害が一致しているとだけ言っておこうかな」
「利害……」
本当にどういうつもり……。
利害が一致って……彼女は一体何を……。
しかしそう考えている時間が今はかなりもったいなかった。
時は一刻一刻と動き続け状況も変わり続ける。
このまま彼女を信用して付いていくのはあまりにも危険で迂闊すぎる。
しかし、彼女の言うとおりタクシーを捕まえて……などと悠長に構えている時間も無いのは事実だった。
そしてローラが選んだ道は……。
「さて、どうするかな？」
「……分かったわ……その代わり身の安全は保証しなさい？」
「それは当然だろうね……では行こうか？」
叶は、ゆっくりと振り返り歩き出す。
その後ろを、無言で付いていこうとするローラのスカートの裾を志穂音は引っ張った。
「なんで、あんな奴の！」
「大丈夫……少なくとも手荒な事をするのなら初めからあの二人を連れてきてるだろうし、わざわざ頭が出てくる必要なんて無い……。それに少なくとも現状では一番マシな手だわ」
「だけど……」
志穂音はどうしてもそれが許せなかった。
自分たちの家をあんな風にした奴らの手を借りるなど。

その気持ちを察したローラが、少しきつめの口調で志穂音に言葉を投げる。

「今はもう、体裁やプライドなんてのを機にしてる暇はない……。暴走したＩＳを止めるためには……一刻も早く現場に行って調べるのが一番なの。だから……お願いあたしの判断を信じて……ね」

「……」

志穂音はまだ納得していないようだったが、それでも渋々頭を盾に振る。

「どうかしたかな？」

立ち止まって話していた二人に、叶が振り返る。

それにローラは何でもないとサラリと返した。

それに何かあれば……あたしの身に変えても、この子だけは助けて見せる。

覚悟があるからこその決断。

ローラは、「そうか」と短く声を発し再び歩き続ける叶の後ろ姿をジッと見据えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「外部対水圧殻、応急修理完了！　潜航深度は半分程度ですがすぐにでも動かせますッ！」

リリスの声に希が、椅子から立ち上がる。

「よし、発進準備！　聡也を旅館から呼び戻してッ！　私たちもサポートに向かうわ」

「聡也君間にあいますかね？」

「無理なら、途中で合流よ。聡也を待ってる時間は無いわ」

希の声が飛び、それがクルーを動かしていく。

「機関始動シークエンス開始」

「バラストタンクのバルブチェック遅れてるぞッ！」

「ハッチ閉……ちょっと待ってッ！　艦長ッブラックアウル間にあいましたッ！」

聡也はどうやら間にあったようだ。

希はそれに頷いて返す。

「全身微速！　湾外へ出たら最大船速でポイントへ向かうわッ！」

「ブラックアウル収容！　ハッチ完全閉鎖。水圧弁封鎖完了」

「各部チェック終了！　いけます」

そこまで聞いて希は、クルッと踵を返しリリスに短く指示をして格納庫へ向かう。

「リリス。潜航のタイミングはあなたに任せるわ。少しやる事があるから」

「分かりましたッ！」

リリスの返事を聞くか聞かないかの内に希は、格納庫へ走る。

そこには一つだけ？福音？以外にも危惧すべき対象が希の中に存在していたからだ。

――――――――――叶がこの期を逃すわけがないという事――――――――

今回あの篠ノ之　束がこの旅館に顔を出した瞬間から、その考えはあった。
そして、その束完全オリジナルの？紅椿？が現れた時に更にその考えは強くなっていた。

恐らく叶の事である。
？福音？においてはこちらと共闘を申し込んでくるか一方的に介入してくるはずだ。
だが怖いのはその後である。
上手くいって福音を落とせても……その後にあの二機を出されでもしたら、いくら代表候補生たちが相手でもエネルギー切れや損傷でまともに闘えない機体では勝負は見えている。

聡也には悪いが、現着してもすぐに彼は出せない。

その事を、早い段階で伝えるために希は急いでいる。
聡也がギリギリに言われてすぐに聞くような子でない事はよく分かっている。
大事な一人息子である。
出来るならば、思うままに行かせてあげたい。

しかし叶の事を考えるとそれは出来ないのだ。
たとえ、目の前でロッソを撃ち抜かれようとも彼は？福音？戦の決着がつかぬ限り出撃させられない。

……まぁそんな子に、闘えといって機体を与えているのだから心配しているというのはかなり矛盾しているのかもしれない。
だが今はその矛盾さえも押し殺して、希は急ぐ。

その胸の内に、聡也に対しての矛盾した気持ちと叶に対するどこまでも底知れない不安を抱えて。

そしてそんな希を乗せた?戦?もまた暗き海を突き進む。

着々と、ステージは整いつつあった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ぐぅッ!!
僕は痛むレイをかばいながら、?福音?の攻撃を防ぎきると、落とせたと思い一瞬一夏へ意識を向けた?福音?に対して、左の?ヘヴィハンマー?を展開し?非目標設定機構射撃(ノーモーションスロー)?で放つ。

これは初弾を?福音?に命中させた時に使用したテクで、元々姉さんが得意としていたもの。
更に元をただせばこれはいわゆる、銃の早撃ちである。
目標物を素早く的確に、サイトに収めトリガーを引く。
そして僕も何度か、姉さんに言われて練習した事があった。

その経験がこんなところで役立つとは思わなかったけどね……。

この？ノーモーション・スロー？を行うのにはちゃんとした理由がある。
その理由は二つ
まず一つ目は相手に自機がロックオンされているという情報を知らされずに済むという事。
通常、ロックオンされた場合照準システムから発せられた赤外線などを相手側の機体が察知し、操縦者にロックされている事を知らせる。

しかしこの撃ち方だと、それが無いため一方にかかりきりにつまりこの場合？福音？が僕に有効なダメージを淹れられたと判断して一夏へとその意識を移したその一瞬のすきなどを突く事が出来るわけだ。

そしてもう一つは、何と言ってもセットからの砲撃が通常に比べて圧倒的に早いという事。
ロックオンシステムを使用してだと、セットしてからエネルギーの集束にが入るが、？ストライクバーディ？に限っては、ロックオンシステムを立ち上げない場合は通常のファイアリングシステムによって砲身を展開し、肩に構えなくとも撃つ事が出来る。

広域せん滅型として作られた？ストライク・バーディ？が、武装をばらまく際に使用する？フリーアクティブモード？なのだが？ノーモーションスロー？というテクニックにとっては本来の使い方とは異なったとしても相性は抜群である。

とはいえ、苦し紛れの一撃。
更には、？プログラムリアクト？でエネルギー効率のとことん悪くなった一撃はまたも吹き飛ばす事には成功したが、その装甲を焼く

に至らない。

おまけに……

『つぅッ……！！！』

レイがこんな状態だ。

はっきりってかなりまずい。

早く決めてしまわねば。

僕はもう一度、一夏に追撃を食らい火花を散らす福音に照準を合わせる。

と、その時だった。

？福音？が一夏の攻撃を防ぎながら、翼をこちらに向けて振るってきたのだ。

「何ッ！？」

丁度次弾はロックオンサイトを用いての精密射撃を決め込んでいた僕は慌てて？ヘヴィハンマー？を戻す。しかしそれよりも先に光の驟雨が、眼前に迫っていた。

くそッ、間にあわないッ！！

「まだだッ！！」

「え！？」

思わず目をつぶった僕だったが、その声に再び顔を上げた。

そしてその直後僕の脇を黒い影が、すり抜ける。

「この程度の攻撃で、？シュヴァルツェア・レーゲン？を落とせるものかッ！！」
「ラウラ！」
ラウラはシールドを展開し、？福音？の攻撃を防ぐ。
「あたし達もいるわよッ　一夏、何押し負けちゃってるわけ！？」
そこへ上空から鈴が、一夏と共に？福音？を押し返し、大きく弾く。
「よくもやってくれたねッ！！　倍返しだッ！！」
弾かれた？福音？を高速飛来したシャルロットの？ブレッド・スライサー？が更に薙ぎスラスター補正も間にあわず大きく体勢を崩す。
「これは……おまけだッ！！」
そしてロッソが、？テンポラーレ？を？セルペンテモード？で巻き付け引き寄せ回し蹴りを叩きこんだ。
？福音？はＩＳ三機の攻撃をまともに受けて、近くに露出していた岩に激突して砂煙を巻きあげた。
「ふぅ……間にあったか……」
「ラウラ……それに皆も…」
「なに、押し込まれてんのよ？　セカンドシフトは飾りなの？」
「う、うるせぇな、これから怒涛の反撃が始まるところだったんだよッ！」
一時話しあう時間が稼げ、一斉に皆がその場に集まってくる。
そして遅れて鈴も一夏と軽口をたたき合いながら合流した。
「それがセカンドシフトした……」
「あぁ、なんかわかんねぇけど怪我も治っちまったみたいだ」
「な、なんか、あんたとアルディィが並ぶと、アルディィのボロボロ加

滅が際立つわね……」

苦笑いをしながら鈴が、言うとその言葉にムッとしたレイが言い返した。

『悪かったね、チンチクリン』

「な、なんですって!?」

「ちょ、レイ!!　殴られるの僕の身体なんだからね!?」

『だったら何してもいいじゃん～』

「鈴、殴るなら右側をどうぞ!」

「は!?　いや、殴って…右側?」

僕の言う事に疑問符を浮かべる鈴。

だがそれをシャルロットが制する。

「時間が無いからその話は後でね」

「う、ぐぅッ」

鈴は怒りと疑問の混ざった複雑な表情で拳を下ろす。

僕は心の中でシャルロットに頭を下げた。

……と、ちょっと待てよ?

そう言えば普通に話してはいるが、どうしてラウラ達が助けにこれたんだ?

通信が来た時には戦闘なんて出来ないぐらいボロボロだったはずなのに…。

僕がその事を尋ねるとラウラはぁぁと言って振り返ると海の一角、月明かりに照らされて漆黒に鈍く光る図体を晒している大きな潜水艦を指さした。

その潜水艦は上部に飛行甲板ハッチを持つ潜水空母だった。

「あの艦で応急処置をな」
「あれは？」
その問いにラウラは、少しだけ目じりを釣り上げる。
「あの……例の襲撃者が乗っている艦だ」
「ッ！？　そんな艦に修理を？」
「あぁ、普通なら危険すぎると申し出を断るところだがあの艦にローラさんと志穂音が居てな…」
「姉さんと、志穂音が…」
「何故いたのかは定かでは無かったが、現状で最善の判断は戦闘可能な領域までＩＳを復活させる事。まぁ…作業自体は志穂音が行っている……。大丈夫だろう」
そんな、艦に……何故姉さんたちが……。
どういう事なんだ？
「それじゃあ、セシリー達も？？」
「うん、セシリアと箒は比較的損傷が軽微だったからね…。僕たち甚大組を先に修理したんだ。も数腰したら戻ってくると思うよ」
シャルロットの話しに耳を傾けつつ、僕はハイパーセンサーで潜水艦を拡大表示させる。
すると確かにハッチの奥に姉さんと志穂音を確認した。
……まぁこれも後でだな。
今はッ！！
僕がバッと？福音？を見やると丁度？福音？がダメージチェックを

終えまさに羽ばたこうとしている所だった。

「皆、来るぞッ！！　奴の翼の動きには充分注意しろッ！！」

ラウラが大きな声で全員に伝える。
そして再び、戦況が動きだした。

◇◆◇◆◇◆

「？ブルーティアーズ？の遠隔システム不良……システムバックアップは？」
「こちらにッ」

セシリアの機体はローラが対処していた。
ローラは、アメリカ合衆国の代表ではあるが、本職は研究開発局のアドバイザー。
こう見えて、機械類は強いし整備も自分で行える腕がある。
ローラはセシリアに手渡された、システムを片っ端からチェックしていく。

それこそ、自分の機体を自分で整備してきたセシリア以上の早さで。
しかも右手一本でだ。

……凄いですわね……。やっぱりこれが国家代表……。

セシリアはその姿をみて、自覚する。
まだ自分はこの領域に到達すらしていない事を。
足元さえ見えていない事を。
こんな時だがエラー一つごときでうろたえてしまった、自分が少し恥ずかしくなった。

「仕方が無い……セシリアちゃん。レーザーライフル以外を撃った経験は？」
「え、あ、あぁ、スナイパーライフルなら少々…」
「セシリアちゃん、これから？ブルーティアーズ？を下ろすわ」
「それはつまり…」
「その代わり、あたしのスナイパーライフルを貸してあげる。一発あたりの威力は？スターライト？のそれを超えるわよ？」
「……それしか……ありませんわね…」

ローラのウィンク混じりの、提案にセシリアは即決すると、すぐに作業を開始した。

「いやはや……凄いものだね？　私たちの技術者でもあぁまで素早くいくものか…」

「……博士、どういうつもりなんですか？」

二人の作業を見て感嘆の言葉を漏らす叶に、聡也は尋ねた。

言うなれば聡也達の敵だ。

そんな相手を何故わざわざ艦に招いて修理までさせるのか聡也にはその考えが理解できなかった。

問いを投げかけた聡也をちらりと叶は見ると、軽く微笑んだ。

「なに……これといって特別な理由はないさ。言うなれば利害の一致……それぐらいの事だよ」

「……利害ですか」

「我々にとっても、あの？福音？は邪魔なものでしかないのでね」

「つまり期を伺っている……と？」

「うん、まぁ……そうだね。そうとも取れるね。まぁいずれにしてもあの？福音？を？どうにかしてもらわねば？」

最後の言葉が、叶の考えの全てである事を察し聡也はそこで話を区切り視線を整備中の二機のＩＳへと移す。

第三世代ＩＳの？ブルーティアーズ？そして篠ノ之　束フルオリジナルのハイスペックＩＳ？紅椿？。

聡也にはどちらも興味深い機体だったが特にこの？紅椿？がこの程度とは思えなかった。

第四世代…この程度無訳はないでしょう。

これではただの欠陥機だ。

何か……あるのだろう。

そしてゆっくりと視線を遠くに向ける。

光踊る戦場は、彼らの仲間が戻ったとはいえまだ決着にはもう少し……そう、何か？重要なピース？が必要だとそんな気がした。

そしてそのピースは間違いなくこの？紅椿？が握っているのだという事も同時に頭によぎる聡也だった。

第４７話～ピース～（後書き）

次回？福音戦？を終わらせたいなぁ～と思う次第です（爆

改めて思うんですが、書き出しって一番難しいですね。
なので僕はいつも書き出しが台詞になってしまいますｗ

第４８話～その名はガンホーク～

「ちぃッ！！」
ラウラは舌打ちしながら？福音？の猛攻に耐える。
？シュヴァルツェア・レーゲン？は応急修理の際、砲戦パッケージである？パンツァーカノーニア？を下ろしていた。
そのため機動力は大方回復しているのだが、今度は反面装甲が少なくなったことで？福音？の攻撃に耐えうる防御力を失っていた。
僕はそれを見て、少なくとも装甲はこの中で一番厚い？ストライク・バーディ？に攻撃の気をそらせるために威嚇射撃を行う。
「ハァァァァァッ！！」
「これでどうよッ！！」
そうして足の止まった所へ、鈴と一夏のコンビネーション。
流石は幼馴染同士だ。
急造のコンビネーションでも息があっているのは凄い。
しかしそれでも落としきれない。
僕の？ハイパーセンサー？が一夏の焦る顔をズームで切り取る。
その顔を見る限り、エネルギーはほぼ底を尽きかけているのだろう。
ちなみにだが？ストライク・バーディ？のエネルギーはまだまだかなり余力がある。
というのも元々搭載されているエネルギー量が多いうえに、エネルギー変換効率が悪いというだけで別に兵装に馬鹿食いされているわ

けではない。
そのため、？ヘヴィ・ハンマー？を撃ちまくってはいるが、まだまだエネルギーゲージは安全に機で推移していた。

それでも攻めあぐねているの事実。

この中で現在？福音？を落とせる攻撃力を持つのは一夏か今補給修理作業中の箒の？紅椿？だろう。
セシリーは先ほどの通信で、？ブルーティアーズ？を下ろして姉さんのスナイパーライフルを準備しているらしいし。

だがこの状況をどうひっくり返せばいい？

…どう考えたってッ！？

と、一瞬気をそらした時だった。

『近接モードへ移行……』

短く機械的な声は、気がつけば目の前で聞こえた。

「ッ！？」

「アルディッ！！」

「こっからじゃまにあわねぇッ」

シャルロットが、背後からアサルトライフルと小型の無反動砲で援護するも全て高エネルギーの翼で防がれてしまう。

？福音？は展開していた？ヘヴィハンマー？を？ウェポンスクエア？ごと掴むとアンロックユニットのヒンジごと無理やり引きちぎる。

「なッ！？」

馬鹿な、こんなパワーがあったのかッ！？
…いや、そうか！
そのために近接モードに！！

そうして大きく機体のバランスが崩れた僕に、今度は引きちぎったそれを僕に投げつける。
ウェポンスクエア
「このッ！！」
『でもなんで……引きちぎって…！！　――――ま、まさかッ！？』

レイに嫌な汗が流れる。そしてその考えはおおよそ当たりだった。

？福音？は投げつけた？ウェポンスクエア？に？シルバーベル？を浴びせまくる。
いくら装甲が厚いと言ったってそんな局部的な猛攻にいつまでも耐えられるわけもなく、ついに？福音？の攻撃が？ウェポンスクエア？内部のエネルギーや火砲に引火し――――――――――。

――――――大爆発を起こした――――――

◇◆◇◆◇◆

セシリアの声に自分の手が止まっていた事に気付きローラは端末のコンソールを叩いていく。
すると次々に?ブルーティアーズ?が消えていき変わりに防護用の物理シールとが付与されていく。
そして手にはローラのスナイパーライフル?ラインフィールドＲＯ―??が現れる。

チャキッとそれを構えるセシリア。
そしてローラは全てのコードを引き抜いた。

「準備完了よセシリアちゃんッ!!」
「まいりますッ!!」

そう言い残しセシリアが飛び立つ。
それを見て焦ったのは箒である。

「まだなのかッ!」
「……駄目だエラーコードが消えない……」
志穂音の絶望的な返答に箒はグッと力を込めた。

何を……何をしているんだ?紅椿ッ?!!　私は……私は早くあそこへ行かねばならんのだッ!!
私は一夏と、そして皆と戦いたいッ!!少しでも力になりたいのだッ!!

更に箒は握る手に力を込める。
するとまだ何も指示も動作もしていないというのに、?紅椿?から黄金色の粒子があふれだす。

「これは……志穂音か?」

「違う、でもコレ凄いよ……一瞬で？紅椿？のエネルギーが回復してく…」

そして箒のモニターに踊るワンオフアビリティ？絢爛舞踏？の文字。

「これは……そうか……そう言うことなのだな！！」

「あ、あのちょっと？」

いきなりの事に困惑する、志穂音に箒は笑って振り返る。

「大丈夫だ、行ってくる」

「え、あ、……うん……気を付けて…」

志穂音も理解が追い付かず思わずそう言うしかなかった。

◇◆◇◆◇◆

『あいつは大丈夫だ！　私の方でもしっかりとコアの反応はトレース出来ている！』

ほどなくして、？白式？にもアルディの者と思われる反応が帰ってきた。
その場所は…。
「海の中かッ！！」

ラウラの言いたい事が分からないわけじゃない。
コアネットワークで探し当てられたという事は、間違いなくＩＳは展開している。
操縦者の周りを覆うシールドエネルギーやバリアによって窒息する事も無いだろう。

だがだからと言ってほおっておく事など一夏には出来なかった。

あいつは、俺たちの仲間なんだ！

一夏はそう強く念じるとスラスターを吹かそうとする。
そこへ見かねたラウラが正面に回り込んだ。

「いい加減にしろッ！！　今私たちには落ちた奴にまで構っている時間的余裕などない！」
「ぐっ、ラウラ！！」
「大丈夫だあいつはッ！！！」
「――――――ッ！？」

思いのほか大きな声に一夏はたじろぐ。
そしてハッとした。
ラウラの鋭い瞳の奥に悔しさがにじみ出ていたからだ。

無事だと分かっていても、助けに行きたい。
仲間なのだから心配じゃないはずが無い。
だが今そっち方面に気をやって、?福音?を相手に出来るほど自分たちは強くはない。
だからこそ悔しいのだ。

一夏は、アルディが居るであろう海の方向を見て一言吐き捨てた。

「くそっ」
「一夏ッ！」
「一夏さん！」

自分を呼ぶ声が二つ近づいてくるのに気付き一夏は顔を上げる。
見るとそれは、ビットの無くなった?ブルー・ティアーズ?と黄金色の粒子を纏う?紅椿?の姿だった。
そして箒は一夏に近寄ると、スッと右手を差し出す。

「一夏……黙ってこれを受け取れ」
「え?」
一夏はその右手に、自分の左手を乗せる。
すると、驚いた事に?白式?のエネルギーが回復していく。
「これはッ！！」
「……だから言っただろう、黙って受け取れとな」
一夏は身体に満ち溢れる力を感じながら、箒を見返す。
そしてその目を見て箒も、しっかりと頷いて見せた。

そこへ今度はセシリアが、焦りを出来るだけ押し殺して一夏に問いかける。

「アルは？　一夏さん……アルはどうなったんですの！？」
「あいつは……ＩＳを展開したまま……あそこだ」
「そん…な」

一夏が海を指さし、セシリアから顔の色が消え声が上ずる。
しかし、そんな仲間への憂慮さえ状況は許してくれない。

『お取り込み中悪いけど、煙が晴れるよ！　皆、注意して！！』
「ッ――――！」
オープンチャネルで連絡が入り、シャルロットの声が皆の視線を爆煙の中心に向かわせる。

そして現れたのは、あの爆風でさえも無傷の姿を晒す？福音？の姿。

「あれでも、落ちねぇのか…ッ！！」
「まだまだ、厳しくなりそうだな…」
「……むぅッ」
「セシリア……頭を切り替えろ」
「……ッ、分かって…ますわ……ッ」

ラウラの静かな指摘にセシリアは、苦渋の表情を浮かべて返事を返す。
セシリアはアルディが落下したであろう場所を見てセシリアは心に改めて誓う。

さっさと片付けて……すぐに迎えにあがりますわ！

「まいりますッ！！」

そして皆のスラスターに、もう一度火が入る。

確かに、あの爆発を無傷で耐えきった？福音？はとんでもないを通り越してもはや異常だ。

それにアルディがどうであれ落とされた…。

だがそれでも、今的に背を見せるわけにはいかない。

しかしこんな時だからこそ皆信じていた。

あいつは大丈夫だと。

まさに火の入ったスラスターのごとく、皆の心はまだ熱く燃えたぎっていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……海……か……。

爆発をもろに受けた？ストライクバーディ？は前面装甲が粉砕。
ＰＩＣにまで異常をきたし、自力で海面に上がることすら不可能なほどボロボロだった。
かろうじて残った右側の？ウェポンスクエア？も動作不可。

操縦者の生命維持装置だけは働いているようで、息苦しさは感じないがそれも長くは耐たないだろう。

しばらく沈んだところで、浮遊感が消える。

……底に着いたのか……。

きっと……父さんや母さんが死ぬ間際に見た世界もこんな感じだったのだろうか……。

なんて……

そう……なんて……

――――綺麗なんだろう――――――――

壊れかけたバイザーから送られてくる、乱れた色彩の世界でもそれが白黒の世界しか知らないアルディに撮ってはたまらなく綺麗に見えた。

月明かりが、海の底を淡く照らし目の前には幻想的な世界が広がっていた。

冷たい海の底なのに……。
孤独で、寂しいはずなのに……。

その世界を見ているだけで不思議と心が暖かくなる感じがする。

こんなふうに、海を見たのは初めてだった。

自分にとって海とは、もう二度と出来れば入りたくも行きたくもない所だった。

でも……今は……

こんな綺麗な場所だったんだ……。

僕の大切な人たちを奪った世界は…。

……ハハッ……ずるいよね。

人からかけがえない者奪っておいて、自分ばかり綺麗な顔するなんてさ…。

僕はパワーアシストの切れた機体を、無理やり動かそうとする。

こんなところで、むざむざ落ちてやるもんかッ！

海なんかに……、殺されやしないッ！！

そうだ……こんなところで…ッ倒れてたまるもんかッ！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

くそぅ・・・無様だなぁ～……。

レイは海に落下した時からずっとそんな事をつぶやいていた。

何が、認められるだよ……。こんなんじゃ認められるどころかそんなんいたか？で終わっちゃうじゃんかッ！

けど……。

ＩＳの？コントロールアクセサー？である彼女にはコンソールやモニターを見ずとも機体の状態は手に取るように分かった。

こんなボロボロで、何が出来る？

アンロックユニットで保持されていた？ウェポンスクエア？のメインスラスターは特に装甲に覆われているわけではないためバイパスはそのほとんどが使い物にならず、作動不可。

更にエネルギー自体もだいぶ落下の衝撃で外部流出していたらしく、あれだけ余裕のあったエネルギーは既に底を尽いていて生命維持装置に優先的に回されている。

エネルギーが何のではＰＩＣ再設定も無駄…。

浮かべたところで意味が無い。

何が……君の力だッ！

レイはアルディに？ストライク・バーディ？を手渡した時の事を思い出していた。

今思えば、全て自分が足を引っ張っている。

傷の所為でチャンスを逃したり、彼がうまく立ち回れなかったり。

このボクがッ…こんな……こんな傷程度で……負けたの？

……いや……まだだッ！！

そうまだ終われないッ！！

ボクは……まだ終わるわけにはいかないッ！！

あの女に認めてもらうために……そして何より……。

？知ってもらおうよッ。皆にも世界中に君って存在をッ？

そう言って、自分の手を取ってくれた彼のために……。

そう……強く願った時。

ガガンッと、パワーアシストの切れた機体が持ち上がる。

見ると彼が、もがきあがき重たい鉄の塊と化した?ストライク・バーディ?を立たせようとしていた。

こんなことで……こんなところで……

ボクはぁぁぁぁぁぁッ！！！！！

その瞬間だった。

身体からあふれた光がボロボロの機体全てを包んでいった。

そしてモニターには、英語でこう綴られていた。

First Shift started ― Limiter allbreak

◇◆◇◆◇◆

「この光は……」
「まさか、彼もセカンドシフトを――――!?」
「いや、それはあり得ないわッ!!」
聡也が予測した事をローラがすぐさま否定する。
そんな事あり得てたまるものか。
あの機体は……まだッ!!

しかし光りはだんだんと、その輝きを増し前まで艦の下は薄暗い夜の海であったのに居案では昼間よりも明るく照らされている。

そして様子は、海に接しているローラたちより上空で戦闘を繰り広げていた一夏達にも鮮明に見えていた。

「な、何が起こっているんだ!?」
「何よコレ!?」
「ISの暴走か?…いやだがこの光は…」
「ですが……」
「うん……綺麗…」
「……」

各々がその光を見て、口々に感想を口にする。

そしてあの?福音?までもが、その光に魅了される。

光はある範囲まで広がると、ゆっくりと集束していく。

そして光が、見えなくなった瞬間――――――。

ドゴォォォウッ！！！！！

海が爆せ、まるで昼間かと間違える程の閃光が？福音？を襲った。

「なんだッ！？」

その閃光は一番近くで切りあっていた一夏は当然だが、一番距離を取って援護射撃をしていたセシリアが感じるほど凄い熱量を持っていた。

そして、今度は一気に海が？割れる？。

文字通り、一機のＩＳを中心に海が割れた。

「あれは……」

誰かがそれを見て言う。

鮮やかなスカイブルーの機体に走るオレンジ色のライン。

背部に背負う身の丈ほどに巨大化し、角ばっていたフォルムは角の取れた流線形なった？ウェポンスクエア？。
元々大きかった、機体は更にその大きさを増し、装甲に走るスリッドにはエネルギーラインが走り全身にエネルギーの波動が駆け巡る。
同時に筋肉質になった両椀部に握られる大型荷電粒子砲？ファイアーフライｖｅｒ．ＳＢ？。
そして肩部アーマーにペイントされた星条旗が、月に照らされ輝く。

全てを守る堅牢な鎧と全てを焼きつくし、破壊し、蹂躙する圧倒的な搭載火砲（剣）

ローラは口元を押さえ……そしてポツリとつぶやいた。

「ガン……ホーク……！！」

◇◆◇◆◇◆

「どうしちゃったんだ!?　これ、まさかセカンドシフト!?」
『違うよッ……これが本当の?ストライクバーディ?なの』
「どういう事?」
そこまでレイの説明を聞いて、急に姉さんから連絡が入った。

『アルディ!　大丈夫なのッ!?』
「姉さん…これはどういう事なの?」
『あんた、妙なリミッター付けてくれたじゃないかッ!!』
『!?　あ、あなたなんでッ!』

姉さんがレイの声を聞いて驚く。
あ。そうか姉さんはまだレイの事を知らないんだったね……。

『ま、まぁあなたの事はあとよ。アルディそれが?ストライクバーディ?の真のファーストシフト?ストライク・バーディ・ガンホーク?』
「ガン…ホーク」

姉さんの話によると、この機体は元々とあるアメリカの構想に則って造られた軍用のＩＳだった。
その理由は、データの欲しい研究者側と姉さんの弟である僕に専用機を与える事を渋った上層部の両者の思惑をある部分でくみ取りある部分で相反した結果だという。
だが、いくらＩＳ学園で運用すると言っても、軍用ＩＳは単体での戦闘能力だけで一夏達一般企業運用されるＩＳの能力を超える性能を保持している。

ＩＳはセカンドシフトを予測するのはほぼ不可能だが、最適化終了

後の？ファーストシフト？を弄る事は簡単である。
そのため姉さんは何重ものプロテクトを掛け、更にファイアリングシステムにもリミッターをかけていたらしい。

そしてそのリミッターが外れた今、真の姿を現したというわけだ。
そう軍用ＩＳ？ストライク・バーディ・ガンホーク？としてッ！

ちなみに姉さんが先ほど言った？ガンホーク？とは正式名称（ＧＵＮ・ＨＡＷＫ　ＧＵａｒｄｉａｎ　ｆｏｒ　Ｈｅａｖｙ　Ａｔｔａｃｋｋｉｎｇ　Ｗｅａｐｏｎｓ　Ｋｅｅｐｅｒ）【直訳：重火力兵装を保有する為のｇｕａｒｄｉａｎ（機動兵器）】という単語の頭文字などを取った造語だそうだ。

「でも……そのプロテクトはなんで解けたの？」
『さぁ…それは何とも……。まぁでも……その姿が発言したってことは……？福音？の未来は決まったわね』

姉さんは、最初の動揺はどこへやら。ウィンクすると通信を一方的に切ってしまった。

……。

僕は荷電粒子砲を握る手に力を込める。

身体にこれまで感じた事のないほど力がみなぎってくるのが分かった。
視線の先には先ほどの一撃をくらい、警戒態勢でこちらを睨む？福音？の姿。

「……よくもやってくれたね？」

『……ボク達を怒らせたこと……後悔しながら落ちて行けッ！！』

僕はスラスターを吹かし空へ舞い上がる。

やっぱり重装甲だからこんなもんが限界か。

機動性では圧倒的に勝る相手。

『敵機装甲値一定水準値異常と判断。集束砲を持って対応』

？福音？の翼の砲門が開き光が集まり始める。

「ッ！？　いかん避けろッ！！　この砲撃は先ほどまでとケタが違うッ！！」

『銀の暴風雨（シルバー・ブラスト）……発射』

ラウラの声が飛ぶが、僕たちは慌てない。

いや慌てる必要すらない。

「そんな攻撃は？ガンホーク？には届かないッ！！」

僕たちはそのけた外れのエネルギー収束砲撃を真正面から受け止める。

もちろんシールドなど開かない。

その必要性も無い。

直撃の爆風で辺りに黒い煙が立ち込める。

バゴウゥゥゥゥゥゥッ！！！

だがそんな立ちこめる爆風を切り裂き、？ストライクバーディ？の閃光がまたも？福音？を押し返していく。

『総エネルギー量、計測……純粋換算八〇〇〇……予備合計一七五〇〇と断定』

「な、何そのエネルギー量ッ！！」

シャルロットがそのエネルギー量に舌を巻き、その圧倒的な姿に言葉を失う。

もう戦術も何もない、圧倒的な火力そして圧倒的な防御力で、今の今まで苦しめられていた？福音？がもてあそばれていく。

『近接武器未搭載、ブレード展開近接モード開始』

近接武器が無いと判断し、？福音？が僕の懐に飛び込んでくる。

「レイッ！」

『近接はッ、まかせてぇッ！！』

右側の荷電粒子砲を量子変換で戻し、レイが構えるその腕にゆっくりと次の武装が展開されていく。

だがそれは銃でもなければ砲でもない。

ガッと握るは剣の柄。

そして現れたのは、巨大なエネルギーブレード。

つばの先にひし形上のエネルギー固定具を持ちそこからあふれだす有り余るエネルギー。

「ランディングホーンッ！！！」

姉さんのランディングスパイクを取りこんで？ファーストシフト？した事で発言したイレギュラー武装だがレイは初呼び出しながらに気にいっているらしい。
レイはその長大なブレードを、横薙ぎに払う。
それを回避し、今度は下から狙う？福音？に僕が？ファイアーフライｖｅｒ．ＳＢ？を放つ。

だがそれも回避されてしまう。
接近中は機動力で劣るこの機体では中々止めるのは難しかった。

だが僕は決して一人で闘っているわけじゃないッ！！
そこにはいる頼れる仲間たちがッ！！

「セシリー、鈴ッ！！」

「はいッ！！」
「まかせなさいッ！」

僕は最大出力でリアスラスターに後進の指示を出し少しでも距離を取る。
そして開いたわずかな間合いに、？双天牙月？を構えた鈴が機体を滑り込ませる。

「これも持ってけ！！」

ブレードで相手を弾くと？福音？に最大出力の？龍砲？お見舞いする。
威力よりも空間圧兵器の影響で動きの鈍くなった？福音？にセシリーの正確無比なスナイパーライフルの精密射撃（ピンポイントアタック）が決まった。
しかしまだ驚異でもあるエネルギーの翼が健在だ。

その翼が、？福音？の機動力を支える屋台骨。
アレさえ折れれば、後は？福音？に直接一撃必殺を叩きこめばいい。
なかなか見えなかった勝利への道が開けた。

「一夏、最後の仕上げと行こう！」
「あぁッ！　そろそろ終わらせねぇとなッ！！」
「皆はどう、行ける！？」

僕は皆にオープンチャネルで問う。
そして皆が一用に首を縦に振った。
「それじゃぁ行くよッ！！」

「これが？シュヴァルツェアレーゲン？の最大出力だッ！！」
まずラウラが先陣切って飛び出す。
ワイヤーブレードを巧みに使い、スルスルと逃げる？福音？を捕まえると自分側に引き寄せ翼以外のスラスターを破壊する。

「やるわね、流石ドイツ軍人ッ！！　こりゃあたしも負けてらんないわッ！」
次に鈴が入れ替わり福音を？双天牙月？で吹き飛ばした後更にそれを投げつけ、？福音？の吹き飛ぶ方向をしっかりと調節する。

「もう手加減はねぇッ！！」
「行くよロッソッ！」

ロッソは?モードスフィーダ?を開始。
?ウラガーノ?でゼロ距離から圧縮空気砲を浴びせ装甲の飛び散った?福音?をシャルロットへ放り投げる。

『機体損傷度上昇。システム保護最優先』

だがその間に?福音?がむざむざやられるぐらいならとエネルギー翼を使い離脱を試みる。
しかしそれをシャルロットは許さない。
「逃がすもんかッ!!」

シャルロットは回り込むと、シールドをパージし真正面から六九口径パイルバンカー?グレースケール?を叩きこんだ。

その威力は近接武器限定ならば第二世代最高クラス。
それがたとえ相手が第三世代機であってもその威力に偽りはない。
翼以外をズタボロにされながらも飛行を試みる?福音?に警告音が響く。

『自機被ロック警戒。ランダム回避行動開始』

?福音?が見つめる先には、?紅椿?を従えた?ストライク・バーディ?の姿。

まだ射撃体勢に入っていない。まずはその動きを止めないとね。
僕は兵装ステータスからリミッターが解除されたある武装を展開する。
?ウェポンスクエア?が真横に展開して?ウェポンスクエア?の下部にある正方形ハッチが開く。

そしてそこから顔を出したのは巨大なスピーカー。
試作特殊音響兵器？ハウリングエコー？
「さぁ、止まってもらうよッ！！」
『起動！　ハウリングエコーッ！！』
レイの声と共に発せられた超高周波の音。
この兵器は互いのＩＳの位置を知るためのコアネットワークに停止信号を含んだ特定の周波数帯の音波を無理やり流しこむことでコアに作用して一定範囲内のＩＳの機動力を完全に削ぐ事が出来る。
ギギギッっと、かろうじて動く頭部がこちらを見る。
そして僕はその前で悠々と両方の？ヘヴィハンマー？を展開した。
だがあのエネルギー翼を完全に破壊するには、たとえ残りのエネルギー全てを？ヘヴィハンマー？に回してもギリギリ行けるかどうかだろう。
何せ量はこちらの方に分があるが密度が違いすぎる。
だからこそ僕は箒を連れている。
僕は箒へと？ヘヴィハンマー？のエネルギーラインを手渡す。
そしてロックと共にその翼に向けて一気にトリガーを引いた。
ドォウウウウウウウウウウウッ！！！！
「ぐうううッ！！！」

「まだかッツ、まだ切れんかッ！？」

やはり思った通りの密度……だけどッ！！

にあれだけあった？ストライク・バーディ？のエネルギーは、疾うに？ヘヴィハンマー？の最大出力砲撃によって底を尽いているが後ろで箒がエネルギーラインに触れていてくれるおかげで、無限エネルギー生成サーキット？絢爛舞踏？によってほぼ無限にエネルギーは供給される。

「あぁぁぁぁぁぁぁ落ちろぉぉぉぉぉッ！！！！！！」

『機……い……ｓ……傷…限……破……』

ノイズ混じりの声が聞こえた直後、？福音？の翼が太い潜航に貫かれた。

「よし！！　やったぞ！！」

「後は任せたよッ！！　一夏ッ！！」

「オォォォォォォォォォォォッ！！！！！！」

無防備となった堕天使に、騎士が制裁の剣を振り下ろす。

その瞬間、全てが終わった。

「やった、やったぞッ！！」

「ハハッ、やった…勝ったん……だ…」

そう思うとフッと力が抜ける。

緊張の糸は切れ、僕の身体を限界以上のところで支えていたものが無くなると同時に極度の疲労感と貧血が僕を襲う。

「アルディッ！！」

箒がとっさに手を伸ばすが、その手の先を僕が落ちていく。

そして僕が最後の最後に見たのは、黒い竜が僕を抱きとめている姿だった。

第４８話～その名はガンホーク～（後書き）

まさかのここでファーストシフトするお話ｗ

まぁなんにせよようやく、？福音戦？が終わってひと段落つけるかなという所です。

これからもオリキャラは多数登場しますよ。

その辺ご了承くださいね？

では次回お楽しみに～

第４９話～終戦…そして～

皆、アルディの落下に息をのんだ。

そして、次の瞬間アルディを抱き抱えた影に言葉を失った。

「……何……あれ…？」

鈴がぽつりとつぶやく。

視線の先にあったのは、一機のＩＳ。

黒いＩＳスーツに身を包み、鋭いツインアイが搭載されたバイザーによって不敵に笑う口元のみが見える。

先ほどからゆっくりと左右に揺れる長く力強い尾は背中を背骨のように走り二対のスラスターが取り付けられていた。

そして、アンロックユニットによって固定されるまるで悪魔の翼の様な鋭角的な大型スラスターを左右一基づつ背負う。

黒を基調とし、関節部などに赤が用いられている配色や鋭く大きい腕部の造詣も相まってその姿は邪悪な龍騎士のようにも見えた。

「気をつけなければね？　戦闘は終わった時が一番危ない」

そう言ってアルディをセシリアにゆっくりと預けセシリアは戸惑いながらもそれに従う。

「あ、あの……」

「今は詮索しない方がいい……そう、お互いのためにね？」

「……そうは言ってもな」

セシリアの顔の前にスッと手を持って行き行動を制する？龍騎士？。
だがそれにラウラが難色を示す。

当然と言えば当然だろう。
アルディを助けたとはいえ、味方と決まったわけではない。
そしてそれである以上、警戒を解くわけにもいかず対応にも困る。
だが次に？龍騎士？の口にした言葉が一気にその結論の天秤を敵側に動かした。

「……時には直感に頼ってみるのも悪くないと思うがね。遺伝子強化素体（アドヴァンスド）君？」

「ッ！？」

「それってッ！」
「あんた……本当に何者……？」

一斉に警戒を強め、ボロボロの武器を構える。
それを見て龍騎士は、フッと笑う。

「……やめたまえ。？福音戦？で消耗しきった君たちでは……悪いが戦いにすらならんよ…」

一夏はまだエネルギーは残っているが、それでも安心できる量ではなく、箒の？絢爛舞踏？も今は発動できない。

鈴やシャルロット、ロッソやラウラなどは処置を施したとはいえ応急的な物。
既に限界も近い。

この中では一番ダメージが軽微なセシリアでさえスナイパーライフルの残弾は〇。
アルディは言わずもがなすぐに病院に連れていかなければならないほどの重症。

確かに？龍騎士？の言うとおり相手の力量は分からないが戦いにすらならないだろう。

「全く、それよりも早く彼を治療してあげたまえ」
「言われなくてもッ！！」

？龍騎士？はセシリアを言葉と視線で促すとセシリアは、チラッとラウラを見やる。
そしてラウラがゆっくりと頷くのを見てから、丁度現場に到着していた？戦？へと機体を飛ばした。

それを見て、再びフッと笑うと？龍騎士？はラウラ達に踵を返す。

「さて……私はそろそろお暇させてもらおう。どの道今日は顔見せ程度で来た様なものだからね」

「……顔見せだと？」

「彼を助けられたのはほとんど偶然だよ」

「……」

「まぁ、そう睨まないでくれないか？アドヴァンスド君？」

「……っく、とっと失せろ…ッ！！」

ラウラはそう呼ばれるのが好きではない。
増してや誰かも分からないような奴に言われるなど腹が立つ。

だが？シュヴァルツェアレーゲン？も限界のこの状態ではたとえ飛び出したところで殴れもしない。

怒りを押し殺してラウラは声を絞り出すと、？龍騎士？は微笑を残しその場から消えた。

「なんて速さだ。？紅椿？でも追いつけるかどうか…」

「……逆に、それだけの速さがあったからアルディを助けられたってみるべきでしょうね…」

「そりゃそうさ」

「え？」

箒と鈴の話に割って入ったのはロッソだった。
ロッソは、見えなくなった？龍騎士？がさっきまでいた所を見ながら二人に続けた。

「あの機体は……イタリアのだからな」

「なに？」

「正確にゃ、本来あたしが乗るはずだった機体さ……イタリアの第

三世代……？イグナイト・スパーダ・ドゥラゴーネ？……機動力を重視した特殊近接格闘型ＩＳだ」

「あんたが乗るはずだった……機体？　どういう事？」

鈴の疑問は恐らくこの場全員の疑問だろう。

しかしラウラが頭を切り替え、そこまでと言わんばかりに手を叩いた。

「それも気になるが、とにかく今は一夏、その操縦者の事もある。帰艦しよう」

有無を言わせずピシャリといわれては流石の鈴たちも言い返すことはできなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

事後処理などもあり、結局皆が旅館へ戻った時には日付が変わってしまっていたがセシリアは先に？戦？でアルディの応急処置を済ませその足で、病院へと飛んでいた。本来病院へＩＳで乗り付けるなど規則違反以前に機密保護の観点からいっても許される事ではないのだが、そんな事を気にしている余裕などなかった。

病室のベッドで横たわるアルディ。

あれだけの傷を受けたすぐ後に、癒えぬままで？福音？と戦った代償はあまりにも大きく、傷は完全に開き？福音戦？で受けたダメージも更に上乗せされ治療を行った先生も「この状態でよく動けたも

のだ」と驚きを隠せない様子だった。

ずっと、寝てばかりですわね…。まったく、これではせっかく色々と用意してきたものが全部パーですわ。

セシリアは、クスッと笑うがその笑みには寂しさや哀しさがにじむ。
そして悔しさも。
彼がこんな状態のときでさえ自分はまた助けられてしまった。
今度は自分の番だと思っていたのに。

でも……そうはいっても。
あの時、目の前に青色の影が現れた時……驚きもあった。
だがそれ以上に、嬉しかった。

偶然そうなったのかもしれない。
あの時彼が取れるポジションはそれなりに多くあった。
でも彼は、自分の前に割って入ってくれたのだ。
これが嬉しさを感じずにいられようか？

セシリアはいつの間にか、頬を流れ落ちていた涙をぬぐう。
そしてそのために一瞬瞳を閉じた時だった。

「ん……うぅッ……」
「ッ！？」
「セ、シリー……？」
「アルッ！　よかった気が付きましたのねッ」

アルディはまだうつろな目だったが、こちらをそれなりに捉えている様だった。
そしてゆっくりと身体を起こそうとして。

「痛ッ……つ～～～ッ」
「あ、まだ起きてはいけませんわッ！　あなた自分がどれほどの怪我をされたか分かってますの！？」
「ハハッ、そう言えばそうだったね……」
「もう少しご自分の身体を大切にしてください…」
心配というよりは、セシリアは少し呆れ気味だった。
セシリアはハァッと、ため息をつくとずれた掛け布団をソッと正す。
「ん、ありがと…」
「先生のお話では、本来なら一カ月弱は安静にしてなければとの話でしたが……経過を見るだけならば学園の設備でなんとかなるらしいですわ」
「つまり、僕は明後日一緒に帰るってわけだね」
「そうなりますわね」
それきり一旦話が途切れる。
その姿は互いに何と言えば良いのか言葉を模索している様にも見えた。
な、何を言えば良いのでしょうか……。
セシリアはアルディに背を向けて頭のなかで色々と思考を巡らせる。
お身体の事は聞きましたし……。
それにあの事も……。
あの事とは、あの？龍騎士？の事。
だがそんな事を今話して、変に戦闘の事まで思い出されるのも……。
こう言う時に鍵って話したい内容が浮かんでこない。

自分のボキャブラリーと発想の無さには呆れてしまう。

セシリアが頭を悩ませていると、不意にアルディが声をあげる。

「アルッ！？」

バッと振り返るセシリアだったが、なぜか彼はＩＳのバイザーを起動させていて……？

◇◆◇◆◇◆

そうか……そう言うことなのか…。
なんでこう……タイミングの悪い。

もちろんなのだが、僕側からレイの行動をある程度抑制する事は出来る。
だが、それはあくまで最低限。
会話やその他の細かなところまで制するのは不可能だ。

「あ、あのアル？　どうかされまして？」
『おりょ、あぁ……ですわ姉ちゃんだね。初めてみたけど』
「は、はい？」

当然セシリーにはなにがなんだか……。
目を丸くするどころか、目が点になっている。
本来なら止めたいところだけど、ここで僕が変に口を出すと本気で先生を呼ばれそうだ。
それも外科医や内科医じゃなく？精神科医？や？脳外科医？をね。

「本当に大丈夫ですの！？」
『にはは、大丈夫だって。ボクは彼の身体を借りてるだけ――――って、ナースコール持つのはやめよう』
「いえ……だって…」
レイはペシンと右手でセシリーの伸ばした手を払う。
あ、勝手に動いた。
やっぱり右側なんだ。

『まぁまぁとりあえず落ち着いて』
「ですけど……」
『まままま…そこに座っちゃって～』

促されるままにベッドわきにあった椅子へちょこんっと腰かける。
そのセシリーを見てレイが一言……。

「ボクはもう少し、胸は大きい方がいいね」
「「はぁッ!?」」

思わず声でちゃったッ!!
でも気にしてられない。
何言ってんの自分ッ!?
まぁ本当に自分なんだけどさッ!?

「いきなり何言ってんの!?」
『あ、いや…だって……ねぇ』
「ねぇじゃなくてッ、僕はセシリーぐらいのがちょうどいいと思ってるよッ!」
『いや、アレだとちょっと控えめすぎだよ。なんなら揉もうか?』
「だから、いい殴られるのは僕なんだ――――――よ?」

そこまで言って気が付くとは、僕のセシリーレーダーもぼろくなったもんだ。
そして直後、僕側の頬にビンタがストライク。
……怪我人は丁重に扱いましょう。

『うわぁ……痛そう……』
「痛いよ……そりゃ痛いさッ!」
『まぁでもその分、右側の痛みはないからお相子お相子』

なにがお相子だッ。
回避できる痛みをわざわざ受けるのは回避出来ない痛みを受けるのに比べたら数十倍馬鹿らしい。
そんな僕たちの、掛け合いを少しの間黙って見ていたセシリーが、わざとらしく咳払いをして改めて聞いてくる。

「それで、アル。これはどういう事ですの？　独り芝居にしてはよく考えられていると思いますが？」
『だから……ボクは最初に言ったよね。彼の身体を借りてるだけだって。つまりは……そう言う事なんだけど…？』
「ですから、それに意味が分からないのですわッ！」
「ごめん、セシリー。僕もどう説明したらいいものか分からないんだけど……一言で言っちゃえば……」
『ＩＳの意思その物ってことだね』
「ッ！？」

そう言われて信じられるわけがないし、逆に素直に信じる気持にもなれない。
現に当事者たる僕だってそうだったのだから。

だけどこれが事実。

僕が体験したあの白い空間での出来事。
アレを伝えるには言葉じゃ足りないけどね。

「ＩＳの……意思…」
『そうさ、信じないのは勝手だけれどだったらこの状況を説明できるかい？』
そう言ってレイは、スッと両手を開く。

僕の状態をくまなく見てくれと言わんばかりに。

『どうして、ＩＳを展開した途端話し方が変わったの？　なんで彼はこの大きな傷の痛みをまるで感じていないように接する事が？それに何より、こんな芝居をする必要がこの状況であると思う？』

「そ、それは……」

『説明できないでしょ？　当たり前だよね。だってボクがＩＳの意思その物だっていう理由でしか説明がつけられないものね』

未だに半信半疑といったところだろうか。

しかし彼女が言った事その全てに説明をつけようと思えば、その答えしかない。

特に一番最後の、？どうしてこの状況で芝居をする必要があるのか？という問いに答えるには。

「……でも、そんなまさか…そんな事が…」

「僕も……それを聞いた時は頭を抱えたけどね…」

『ま、でも出ちゃったもんは仕方ないさ』

そんなのん気な…。

こっちの気も知らないでぇッ！？

僕は思わず寝ながらにして少しのけぞる。

なぜならセシリーが、グッとこちらに顔を近づけてきたから。

「な、何か？」
「アル…この事は……内密にした方がよろしいですわよ？」
『か、顔が近すぎるよ？』

いつもなら、そう言われて慌てて身を引くセシリーもその顔にそんな色は見られない。
むしろ更に真剣さを増して僕に迫る。
「考えてもみてください。ＩＳはこうして実用化されているとはいえまだ謎の多い代物です。そんな中でＩＳの意思なんていうブラックボックスの塊が表面化しているなんて事が世界に知れたらッ」

そこまで言われて、ようやく僕は事の重大さに気が付く。

そうだ……。
そんな事になれば…。
『ま、きっと世界は血眼だろうね。世界でたった二人ＩＳを動かせる男子って言うだけじゃなく……このボクを強引な手段で手に入れようとする輩も出てくる……かも？』

ゆっくりと顔を離してから、レイの言葉にセシリーは頷く。
確かに……

それは厄介だ。

「そうなって……またアルが危険な目にあってこんなボロボロになるのは……私見ていられません…」
心配そうな瞳で見つめるセシリーに僕は微笑みかける。

「大丈夫さ。そのためにセシリーが僕を鍛えてくれるんでしょ？」
「え？」
「もう、僕は……目の前で大切な人を失いたくないから……そのために戦うよ……」
『ま、ボクはボクなりにね。目標もあるし』
「アル……それに……えぇと…」
『レイ……彼がくれた名前さ』

互いに笑顔で握手を交わす。

それを見て僕はまた笑う。

心に決めた物を抱いて、もっと強くなる。

自分を見つめ直して出したそれが僕の精いっぱいの答えだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

叶は、近くの湾内に艦を隠し帽子を目深にかぶった聡也と聡華、そしてローラ、志穂音の四人を連れてとある場所へと向かう。

「おい、どこ行くんだよ」

聡華が表情を崩さずいつもの笑みで歩き続ける叶に苛立ちながら尋

ねた。
聡也を除く他の面々も同様に、怪訝な顔を叶に向ける。
だが、叶は表情に考えを見せず静かにその問いに返す。

「ん？　まぁ、付いてきたまえ」
「そう言いながら、ずっとけもの道みたいな所を歩いてるんだけれど？」
「アメリカ代表はこの程度で根を上げるのかな？」
「そう言う意味じゃくて…」

ローラの言うとおり、艦を降りてからしばらくずっと未整備の登山道の様な所を歩き続けている。
体力は全然大丈夫だが、怪我をしているという事を少しは考えてもらいたい。

一向に見えない目的地への道を歩き続けるのは精神的に結構来るものがあった。

そんな叶の変わり映えしない返答に、志穂音が眉をひそめる。
「まさかさ、あんた達。ウチらに何かするつもりじゃないよね？」
「……仮にそのつもりなら、艦で手を出しているだろう？」
「そうかしらね？　案外あんたらって回りくどい手を使うし。何しでかすか分かったもんじゃないのよね」
「安心したまえ。何もするつもりはないさ。……現時点ではね？」

含みのある言い方に一層警戒心を強めるも、歩みを止めない叶に付いていく。
結局あーだこーだ言ってこの先にある物を見てみたい。
要はローラも志穂音もそう言う事だった。

歩き続ける事数十分。
いきなり視界が開け小さな岬が眼前に広がる。
そしてそこには高さ三〇メートルという断崖絶壁の手すりに腰かける一匹のうさぎ。

風に特徴的な耳や服が揺れ、その人物の顔を月明かりが照らす。
その姿はまるで現代に現れた魔法使いの様な、そんな雰囲気を醸し出している。

「おや？」
「……会いたかったよ……篠ノ之　束…」

叶がこちらを振り向いた束に声をかける。
束は基本世界でたった三人にしか興味が無い。
織斑　千冬、織斑　一夏、そして妹の篠ノ之　箒。

この三人だけ。
後はどうでもいい。
死のうがどうなろうが興味が無い。

だから反応こそすれ、叶の問いかけをごく普通に無視をする。
叶は、束のそんな反応を見てフフッと笑ういながら近づき。

「……さようならだ」

トンッとその背中を何の躊躇なく押した。

「なッ！！」

ローラたちが慌てて手すりから身を乗り出した時には既に束の姿はどこにも見えない。
あったのは、断崖絶壁に打ち寄せる海の白波だけ。

「ちょっと、あなたッ！」
「どうすんのさッ！？」
「落ち着いてください」
「落ちつけって、君ね」

聡也や聡華、叶のあまりの落ち着き払い様に思わず詰め寄るローラだったが、突如？上？から声がする。

「あっぶないね～……背中押されるとは思ってなかったよん…まぁ、良いけどねん」
「……ふむ、刺し殺した方が良かったかな？」
「あはは、君中々面白い、面白いろいろい。ロイは外人？」
「アメリカ性かな……まぁ日本人ではないだろうね？」

確かに落下したはずの人間がなぜか上から現れる。
ローラたちは一瞬驚いたが、すぐに何故聡也が一ミリも焦らなかったかを悟った。

理由は感嘆それが篠ノ之　束という人物だからだ。
不可能なことなどなく世界を自分に合わせる滅茶苦茶な人物。
目の前でたわいのない、本当に意味も無い会話を交わす束と叶を見てローラたちはそう思った。

「ん？　騒がしいな」
そこへ、もう一人ローラにとっては意外な人物が顔を出す。
「千冬ッ！？」

「お前もいたのか」
更にその後ろからは希も顔を出した。
「おやおや、これはこれは？」
「叶…」
「んだよ、雁首揃っちまったぜ」
聡華はボソリとしかし、それなりに周囲に聞こえる声で言う。
帽子は目深にかぶったままだが、千冬にはそれが襲撃者であるという事はすぐに分かった。
そしてその後ろで指示を出していた人物が叶であるという事も。
一瞬、千冬は目を細めたがすぐに視線を束へと移す。
「どうやら、皆お前に用があってきたらしい。特にこの二人の研究者達はな」
「流石は、ブリュンヒルデ。お見通しというわけですかな？」
「……」
「出来れば、その名はやめていただきたいのですが？」
「おっと、これは失礼……？ブリュンヒルデ君？？」
叶は千冬の鋭い眼にも臆することなくいつも通りに返した。
そしてそれは、その呼び方を変えないという意志の表れでもある。
叶は、ゆっくりと瞳を閉じながら役者のように、手をスッと束に向けた。
「まぁ……我々は用事はあるが、さほど休養というわけでもないくてね。？ブリュンヒルデ君？君から先に話を終えたまえ？」
「……どういうつもりですか？」

「言葉の通りじゃなくて？　織斑先生。確かに叶の言うとおり私たちは束博士に用はありますが、旧知の間柄のお二人からどうぞ？」

千冬の問いに答えたのは希だった。
希は叶の近くに歩み寄りながら、互いに顔を見合わせる。
そして互いに、頷き合った。
その考えに付いては。両者とも同じというわけだ。

余りにも不自然。違和感のある会話の始め方。
しかし、世界に興味のある人物が三人しかいない束にとって頭の上を飛び交っていた先ほどまでの会話に何の意味も無い。

束は手すりに座り直すと顔は海を見たままで千冬に話しかけた。

「唐突ですが問題です！　ちーちゃんが乗りこなしたあの？白騎士？はどこへ行ったのでしょう？」
「……それを今ここで言うのか？」

チラッと、千冬はローラ達を見やる。
ローラ達は聞き耳こそ立てているが、あくまで傍観者を決め込んでいる様子だった。
千冬はその様子を一瞥してから、少しの沈黙の後ゆっくりとその答えを発した。

「……？白式？…それをしろしきと読めば……答えはおのずとな」
「ピンポーン大正解～」
「でね、ここからはたとえ話なんだけど、そのコアを使っている？白式？。その元となった？白騎士？そしてモンドグロッソであそこのアメリカ人と戦った？暮桜？。この二機がコアネットワークで情報をやり取りしていたとしたら…？」

千冬には、束がなにを言いたいのかその答えを聞く前にわかっていた。

「つまり、同じ？ワンオフ・アビリティー？が発言してもおかしくない……か」

「そうだね。そう言う事になるね」

そこまで言って二人は黙りこむ。

数分の長い沈黙。

風の音や流れだけがその場にいる者に時間の流れを感じさせる。

そして今度は千冬が、たとえ話を始める。

束は、珍しいねとだけ言ってその話に耳を傾けた。

「とある天才が居たとしよう。それこそ世界を相手に馬鹿げたマッチポンプを仕掛けるほどに。その天才が機体と妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは？」

「手っ取り早い方法だと、どこかのＩＳかな？」

「そうだ。だが、いくら天才でもわざわざコアを造ってＩＳを用意するなんて面倒な事をしようとは思わない。だから既存のＩＳを暴走させて敵に仕立て上げる」

「ふむふむ」

「そして、他の専用機持ちと共に妹は華々しく専用機持ちとしてデビューする……どうだ？　面白いたとえ話だろう？」

「へぇ……凄いね～天才だよ本当に。一度会ってみたいね」

「あぁ、そうだな。かつて十二カ国の軍事コンピュータにハッキングを仕掛けるという大事件を引き起こした馬鹿にな……」

「フフッ」

束は笑うと手すりから身軽にピョンッと宙返りで降り立つと、空に浮かぶ満月を見あげた。

「ねぇ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこな」

「そうなんだ……」

再び訪れる沈黙。

それは互いに話すべき事が終わった事を周囲にアピールしているようなものだった。

そしてそれを確認した叶がゆっくりと動く。

「話は、もう良いかな？」

千冬と束双方が、全く異なった視線を叶に送る。

「では……今度は私たちの番だね？」

そう言って叶は、まるで代表のように話し始める。

――――――――月光が照らす岬での密会はまだ続く――――――――。

第４９話～終戦…そして～（後書き）

千冬と束の会話のシーンで意外に割かれてしまったため叶達ターンは次回に持ち越しｗ

楽しんでいただければ幸いです。

それでは。

第５０話～月下にて～

?白騎士事件?と名付けられた大事件は、今から十年ほど前に発生した。

十二カ国もの軍事コンピュータがハッキングされ二千発を超えるミサイルがこの日本という極東の島国目掛けて発射されたのだ。

誰もが、絶望し国の消滅を覚悟した。

だがその危機を救ったのは白銀のＩＳをまとった一人の女性。

どこからともなく現れたそのＩＳは半数をぶった切り、その半数を荷電粒子砲を呼び出して破壊した。

余りにも異常すぎる事態に、世界の反応は鋭かった。

当時最新鋭の機体まで投入されての偵察という名の?白騎士破壊任務?。

だが

結果は散々たるものだった。

当時の記録では、？ロシア空軍？に所属する戦闘機Ｓｕ－３３たった一機のみがかろうじて帰還しただけ。

それ以外は、全て人命を奪うことなく破壊されていた。

そしてその事実は、従来兵器とＩＳの決定的でそして絶望的な戦力差の表れでしかなかった。

その結果を受けて急速にＩＳは世界に広まっていく。

そして今やＩＳ無くしては、軍備を語れずといわれるまでに浸透している。

しかし……。

「ＩＳは、確かに世界を大きく変貌させた。女性にしか扱えぬという事を差し引いてもね。だが……それは所詮表の顔でしかない」

「表……か」

「織斑　千冬。そして篠ノ之　束…。君達は知っているかどうか分からないが……確かにあの事件で人は死んでいない……だが、君は間接的にではあるが人を殺している」

「……」

「君はあの事件の後、一体どれほどの技術者や軍人の血が流れたか分かっているかい？」

千冬は、間違いなく?白騎士事件?で人の命は奪っていない。
そしていくら束でもマッチポンプ程度で人は殺さない。
だが、逆にそれが世界に与えた屈辱は計り知れない物があるだろう。

「これまで、培い養ってきた自信、プライド……それらを支えに生きてきた者達は、それを根底から破壊されてしまったら……一体何をよりどころにして生きていけばいい?」
「……プライドや自信……そんなもの。私でなくても何時かは壊されるものではありませんか?」

「世界は君ほど、強く考えられるものではないッ!」

珍しく叶が声を荒げる。
それだけ、この話は叶にとっても重要なものだという事が伝わってきた。

「私も知人の多くを失ったよ……。あの事件の所為でね…」

叶のその言葉に、希も思わず表情を曇らせる。
希もまた、同様に少なからずあの事件がきっかけで知人を亡くしていた。
気持ちは同じだ。

「あの時……君達はゲーム感覚でミサイルや戦闘機を落としていたのだろうね……。自分の身は一〇〇パーセント安全だからね……」
「けれど、私達は必死だった……当時私たちはロシアに居て。わけも分からないままあんな事件に巻き込まれて……。気がつけば全部終わってたわ。世界は……敗北して……それを受け入れた…」

「だが……強くない世界にも……少なからず強くあろうとする者達が居る。それが私たちだよ」
「そうして造り上げたのが……Nか」
千冬の言葉に静かに頷く叶と希。
「Nは基本的には既存のシステムで組み上げられたものだ。つまり従来機代表というわけだね」
「試作と失敗を繰り返しながら、莫大な予算をつぎ込んで全部で七機製造されて。その完成型が？ホワイトアウル？と？ブラックアウル？の二機。この世に現存するたった二機のN…」
そこまで聞いて千冬に一つの疑問がわき上がる。
それは？ナイトシュライク？の発現だ。
アレが既存の兵器の枠を出ないものだとすれば、成長も変化もするはずがない。
設定された出力以上の力は出せない。それが機械であり既存の兵器のはずである。
千冬はその疑問を、叶に投げかける。
「ちょっと待っていただきたい。だったらあの？ナイトシュライク？はどう説明を付けるつもりですか？」
「どう…とは？」
「あれは成長では無いのですか？」
叶はフッと笑う。それは希も同様だった。
「確かに仰られる通り、私も今日の今日までその理由が分かりませんでした……。ですが昼間取ったデータを分析する事で……その理由が分かった気がします」

「と、言いますと？」

「Ｎは確かに、ＩＳのコアのように成長はしません。なのでアレにはセカンドシフトなどといった段階が無い。しかし……アレは操縦者とＩＳのコア以上に深くリンクする性質がある」

「感情の上下によって、機体の性能が大きく変化する。言うなれば人と機械の純粋な融合です」

「感情……で？」

「君達を数回にわたって襲撃した際……聡也の機体の攻撃にムラがあっただろう？　ＩＳ学園の候補生達があんなに苦しんだ無人機相手に圧倒したり、そうかと思えば、そんな代表候補生達のＩＳに見るも無残にやられたり……とね？」

「……なるほど」

「ほぇ～……あんな木偶人形にそんな秘密がねぇ～」

「木偶人形ですって…ッ！？」

「そう声荒げるな…落ち着きたまえ、希。彼女と言い争ってもね？」

束の何の遠慮も無い発言に険しい表情を見せる希を叶が制す。

希はそれに渋々といった形で従うが、束を目ではキッと睨んでいた。

「まぁ…とにかく。我々はそう言う過程でＮを造り上げた。ここまで言えばうっすらと私が言いたい事が見えてくると思いますがね？」

「……つまり……」

「……私たち……いやこの場合は私のが正しいかな。その私の究極的な目的ですよ」

ＩＳに対抗するためにＮを造り、そして束や千冬に明らかな敵意を持つ。
希はともかくとしてこの人物が言いたい事それは……。

「世界を元に戻すこと……それが死んでしまった者たちへの立向けとなる……」

世界を元に戻す…。叶は努めてオブラートに包んで言ったつもりだろうが真意はダダモレだった。
流石にその真意を知って静観していたローラが声を上げる。

「あなた、戦争を始めるつもりなのッ！？」
「……当たらずとも遠からずというやつだね……ＮにはＩＳにない強みがあるそれが何だかわかるかい？」
「そんな事はどうでもいいわッ！！　あなた……いや五条叶！！　あなたどれほどの血が流れたかって言っておきながら、更に多くの人の血を流すつもり！？」

「だがそうしなければ、もはや止められんよッ！！　Ｎが完成した瞬間にその運命は決まったも同然だったのだからねッ」
「ッ！？」
ローラはあまりの言い草に絶句する。
そして変わりに志穂音が、叶の話に苦い顔をしていた希に詰め寄った。

「あんたも同じ思いなのッ！？」
「……私は……初めはそうだったのかもしれないわね……」
「初めは？」
「……けどそれが間違っていた事に……造ってから気が付いた……」

「どういう事？」

「Ｎが完成した時……。ある事件が起きたのよ…」

ＩＳ－Ｎは、ロシアで造られたが環境などの問題もあってロシアでは満足にデータが取れないと判断して比較的兵器の稼働実験のおこないやすいアメリカへ完成品ごと使用権限を移譲する予定だった。
しかし、その移譲前夜ある事件が発生した。
それが五条　叶らによるＮの強奪事件である。

「確かに…アメリカの方が稼働実験データはロシアよりも遥かに取りやすい。だがね。なぜ仮想敵と称したＩＳと訓練、テストといった場で定められたデータだけを取らねばならない？　戦場があるのならばそこで試すのが一番だというのに。何故？」

「戦場？」

「そう……戦場さ。世界各国からＩＳ操縦者の集まる恰好の戦場……」

「ＩＳ学園……だからお前達は……」

「おかげで色々と良いデータが取れているよ」

希は若干反れた会話を戻しながら話を続ける。

「その事件で……叶は抵抗しなかった人にまで手を下した…」

「それって…」

「非戦闘員ってところかしらね……言うなれば研究者とか……技術者とか…」

「何を今さら驚く事があるかね？　目的のための犠牲は手段と同じ

だよ。それに、Nを造っておきながら、何故抵抗するのか……それこそ私には理解できない」

「あんた、自分の未来を奪われたような言い方をさっきしてたけど……だったらあんたがあんたのために人の未来を潰すことは何とも思わないの！？」

「そうだが？」

「自己中心的なッ！！」

あっけらかんと言う叶に、志穂音は吐き捨てた。

こんな人物を相手にしていたのかと今さらになって少し腹立たしさがこみ上げてくる。

そりゃ希が、考えを改めたくもなる。

目的のために手段を選ばない。

味方に銃を向けてでも、自分の目的をやり遂げる。

これほどに自己中心的な人物だったとは…。

「自己中心的……私の一番嫌いな言葉だね。人はいつだって自己中心的なものだ。そこの彼女の様に」

「そ、それはッ……」

そう言われてしまうと志穂音も言い返せない。

事実だからだ。

世界を自分に合わせてしまう自己中心的な人物など篠ノ之　束以外に考えられない。

言い淀む、志穂音を尻目に叶は言葉を続けていく。

「先ほどローラ・サウスバードが言った事が全てだよ。君達がそこ

そこ楽しいと言ったこの世界……。済まないが私にとっては、これっぽっちも楽しくないのでね……。時が来れば世界は君達に問いかける日も来るはずさ……。あの時の世界が本当に正しかったのか……正しくなかったのか…」

その台詞は、千冬や束にだけ向けられたものではない。
同じ道を歩みながらも、途中でそれに反発した希。
世界の流れの中で、今の立場や地位を得たローラや、その知識を持つ志穂音にも同じように向けられている。

「世界が……？」
「言っただろう。世界には強くあろうとする者達が居ると……。ゆっくりとだが確実に……それはできつつあることだ」

叶は踵を返すと、片手をヒラヒラと振る。
そして、息をひとつ吐いた。

「私の話はこれぐらいで良い。さて……先ほどから私に意見をぶつけ続けているローラ・サウスバードど……千葉　志穂音。君たちもまた言いたい事や聞きたい事があるのではないのかな？」

「えッ！？」
「そ、それは……」

思わず顔を見合わせるローラと志穂音。
叶の言うとおり、二人にもまた確かに言いたい事というよりは聞きたい事はあった。
しかし、この会話の流れでどうそれを切りだすか……。

「さぁ、どうしたね？」
「……最後に一つ聞かせてもらえますか？」
「む？」

話しをローラ達に振ろうとしていた叶に千冬が声をかける。
叶はそれにどうぞ、と短く言葉を発した。

「ＩＳを嫌っているのならば……何故あなたはＩＳを運用しているのです？」
「……？紫燕？の事かな？」
「はい…」

？紫燕？は間違いなく紫香楽製の純粋な？ＩＳ？である。
千冬にはどうもＩＳを倒そうとしている叶が何故ＩＳを運用するのか。
その繋がりが見えてこない。

「私は、基本的に自らの目的のために動く。その行動理念は変わらない。しかし時に相反する存在が利害を一致させる時もある」

「……」
「紫香楽誠一郎もまた根底にあるものは同じ。そのアプローチの方法……そして事情……それら異なる要因が重なって……今この状況がある。まぁ、そう言う事だよ。さ、話しは終わりだ」

叶は微笑を浮かべると聡華と聡也をひきつれその場を後にする。
言いたい事だけを言いに来た。そのついでにローラと志穂音を返しに来た。
叶にとっては、恐らくそのぐらいの事だったのだろう。

「全く、付いてこいって言って強引に連れて来たと思えば勝手に帰ってくし……ほんっと腹立つヤツッ！！」
「まぁでも……あたし達を艦に乗せてくれた事については、感謝しないとね」
「うッ……それは……そうだけど」
「で、お前たちも何か言いたい事があるのか？」

千冬の声に一瞬ビクッと身体を震わせる二人。
本当に、嫌な流れを残して言ってくれたと両者は思いつつも顔を千冬へと向け、ローラは苦笑を浮かべた。

「はぁッ……ちょっと向こう行きましょうか」

そう言ってローラは志穂音を連れて、岬の端へと移動する。
「む～ッ。ちーちゃんをどこへ連れてくの～！！」
「……黙ってろ」

千冬の遠慮のない物言いは、親友だからかなんなのか。
束はプクーッと頬を膨らませながらそっぽを向くと、また岬の手すりに腰かけた。

「……随分ストレートに物を言うのね」
「アレはあのぐらい言っても聞かんさ……で、話というのは？」
「……本当は一つだったんだけど……今の話聞いて少し増えちゃったみたい」
「構わんさ」

千冬は腕組みをしたまま手すりに身を預けこちらを見やる。

「……それじゃまず初めに決めたた事から話すわ。……千冬この子をＩＳ学園に特別編入させてほしいの」
「何？」
「この子、ＩＳは使えないけど技術力そしてＩＳに関する知識はそこら辺の学者や技術者よりも凄い物を持ってるわ。整備科は二年からだけど……なんとか…」
「ま、待ってくれ。いきなりそう言われてもな。大体何故だ？　彼女が志望したのか？」
「……彼女の了解は得ているわ」
ローラの言葉に志穂音はコクンと頷く。
それを見て千冬は改めて理由を聞いた。
「一体どういう事なんだ？」
「このまま、彼女を変電所に戻したら多分きっとまた襲われる」
そもそもあの変電所襲撃の目的は、志穂音が造ったある物が目的だった。
そしてまだそれが志穂音の手にある以上、叶が襲わないとは限らない。
それがローラの言い分である。
その説明を聞いた千冬はローラの説明の中に出てきた？ある物？という表現が気になった。
「……ある物？」
「これだよ」
志穂音は腰のポーチから、白い直径二十センチほどの鉄球を取り出

して千冬に手渡した。

「これは……コアか」

「そう、Ｎの三番目のコア」

「だが彼女は、現存するのは二機と言っていたが？」

「それ、あの五条　叶から造ってくれって頼まれた物なんだよ」

一瞬、目を丸くする千冬。

それも当然かと、思いながら志穂音は言葉を続ける。

「確かにおかしな話だよね。Ｎを造るにはそれこそ国家予算並みのお金が必要だから…」

「そんな金があるのか？」

「ないよ、言っとくけどさウチは孤児だよ孤児。そんな蓄えあるわけないじゃん」

「だったらこれはどうくみ上げた？」

「それは、確かにコアなんだけどコアとして使うには余りにもお粗末な仕上がりでねぇ」

志穂音はヒョイッと千冬の手からコアを取ると、それを起動させる。

だが起動したそれはいわゆるＩＳの部分展開に近いものだった。

「あの時はさ。アルディにトータルフィッティングはパーソナルデータが無いとって言ったんだけど……。どうやらこれが限界みたい」

アハハっと笑う志穂音は展開を解きコアを待機状態に戻す。

そして再びそれを千冬に預けた。

「そりゃそうだよね、彼女から送られてきた設計図にはちょっと街中の電器街をうろつけば手に入るような部品ばかりが記されてて。コアといってもそんな物の寄せ集めでＮが完成しちゃったらそれこそ、技術者は自殺しちゃうよね」

「つまり、五条　叶は……市販の、しかもどこでも購入できるような物を使ってＮのコアが出来るのかそれを試したかった。そう言うことか」

「付け加えるなら、ちょっとメカに詳しい素人に造れるかどうかも試したかったんだろうね～」

「仮にそれが成功していたら……一気にＩＳの包囲網は狭まる。まさしく戦争だな」

いやそれだけではない。戦争ならばまだいい。

それが暴徒化すれば、収集の付かない事にもなりかねない。

彼女はそれをも見越して、志穂音にそれを依頼したというのだろうか。

だが……。

「まぁ、こいつが失敗か成功かは置いておくとして……なら何故襲撃した？」

無理やりそれを強奪したかったからか…。

いやそれでは志穂音の言う、依頼されたという部分が説明できなくなってしまう。

それにロッソを使ったわけも…。

「多分この件をややこしくしているのは、彼女の所為」

そう言ってローラは、クイッと顔を動かして手すりに腰かけ未だ頬

を膨らませっぱなしの束を指した。

「束？」

「五条　叶が襲撃した時の事覚えている？」

「あぁ……それはな」

一回目が、無人機が襲撃した時。

そして二回目が、無人機のコアを奪いに来た時だ。

「まさか……あの女は…」

「というよりも、あなたも薄々感じてるんでしょ？」

「……」

「五条　叶は篠ノ之　束が関係している所に必ず顔を出す。そして何かしらのアクションを起こす…」

「今回ウチはね、同時期に彼女から一丁ライフルのデータ構築を頼まれてね」

「ライフル？」

「そう、地下室を岩盤ごと地上まで撃ち抜けるほどに強力な」

確かに現場には、巨大な大穴が開いていた。

だが千冬はあの穴は、ＩＳの戦闘で空いてしまったものだとばかり思っていたのだ。

「あ、もちろんＩＳ用のだよ。あらかじめ」

いや…仮にＩＳ用だとしてもその威力は異常……だが……。

「……束なら……あり得るか……」

「まぁそれで叶も、色々と策を練った結果ああなった。ってわけで

しょ」

どこか釈然としないが、一通りあの事件の説明は付いた。
そして話しは再び、編入の話に戻っていく。
確かに、これまでの話しを聞く限り志穂音は相当な技術を持っている。
それこそ、さっきも言ったように波の技術者なら到底及ばないほどの技術を。
しかし、ＩＳを使えない所がどうもネックだった。
いくら整備科の二年とはいってもそれなりにＩＳを使えての事だ。

ちなみに基本的に高校教育課程に位置するＩＳ学園だが、その実決まった年齢制限はあまり存在しない。
例えば、アメリカには飛び級制度が存在するが、日本にはそんな制度は存在しない。

つまり高校教育を受けるのは日本人ならば一律十七歳であるがアメリカではそれよりも早い段階で高校に入学する事が出来てしまう。
そう言った各国の教育事情を考慮して、ＩＳ学園では編入に限り年齢制限を特に設けてはいなかった。

だが特にそこは千冬は、心配はしていない。
Ｎとはいえそれを造り上げる技術そして、何より…。
千冬は、しばらく沈黙を続け考えをまとめると志穂音に尋ねた。

「あの、サウスバードの機体を修理したのはお前だろう？」
「え？…う、うん…」
「やはりな……オペレーティングルームから一部記録映像とデータが複製され持ちだされていた…。あれはお前の仕業だったんだな」
「仕方なかったんだ……。ローラさんに言われてて」

「まぁ、そうだろうな」

やはり心配はない。

オリジナルデータを元にあそこまでＩＳを復元できる技術と知識。

だがそうはいっても…。

「やはりＩＳを使えん事にはな……二年にいきなり編入というわけにもいかんし…」

「でも、この技術放っておくにはあまりにもったいないわよね？」

「それはそうだが…」

「けれど、ＩＳの維持メンテも割ける人員は限られてくる。だったら優秀な人材は確保しなきゃ」

千冬はローラの顔をちらりと見て、そして大きくため息をついた。

なぜならその向けられた笑顔が、悪戯っぽく笑っていたからだ。

そして次にローラが懐から見せた物を見てもはや苦笑いしかできなかった。

「……お前……」

「もうちゃんと学園長さんの許可は得てました」

ローラは学園長の？轡木（くつわぎ）？の印が押された編入許可証を千冬に見せて笑う。

「だったらなぜ、私に話しを持ちかけた」

「いきなり編入したら、あなた嫌でしょ？　旅館じゃかなり訝しげな顔で見られたって志穂音ちゃん言ってたしね」

「……そりゃそうだろう。あんな事態になっても眉ひとつ動かさずキーを叩いていれば不審に思うさ」

「あの時は、映像データの抽出とか？ストライク・バーディ？のデータを引っ張り出すので大分疲れてたから……イライラしてたしね…」

「まぁ、いいさ。だが、これからは学園の生徒になる身だ。言葉遣いだけは直しておけ。いいな？」

「ま、努力するよ」

「い・い・な？」

「ッ！　は、はい…」

語尾を強めた千冬の言葉に、慌てて返事をし直す志穂音。

これは少し、大変そうだとローラは志穂音を見て表情を緩ませた。

そしてローラは志穂音を、希達のいる所へ返し二人で手すりに寄りかかる。

「ちょっと長々話し過ぎたかしら？」

「さっきも言ったろう、構わんとな」

「そう……じゃぁ、もう少し…いいかしら」

「あぁ」

「……さっきね、あなたが篠ノ之博士と話しているのを聞いていて少し思ったの…」

「私が？白騎士？だという話か？」

千冬の答えにローラは首を横に振った。

「それはどうでもいいわ。あたしには、篠ノ之博士やあなたみたいに世界を変えることはできない。言ううなればその大きな流れに流される、ごく普通のＩＳ操縦者…」

「だが世界第二位で今も飛び続けているじゃないか？　それを普通

とは言わんだろう」

「誰かさんが、辞めたおかげで永遠の世界第二位よ」

「ふん、私には私でやる事がある」

ローラは、そうねと返して話しを続けた。

「そんな普通の人間からすれば……さっきあなたが言ってた？世界はそこそこ楽しい？っていう言葉は普通出てこないと思ってね」

「楽しくないのか？」

「少なくとも、あたしは自分の身体をこんなにして楽しいとは言えないかしら」

「……」

ローラはフッと笑うと、海の方を振り返る。

「時々分からなくなるの……。やってる事、やってきた事…それが正しかったのかどうか…」

「後悔していると？」

「そうじゃないわ。でも……いや…そうかも。あの暴走事故だって……もっと何か…良い方法はなかったのかとか……考えてしまったり。アルディのためって言いながら、あたしは間違いを正当化してるだけなんじゃないのかって……そう…思う時があるの」

ローラは言いたい事を、自分でもまとまっていないと感じながらも言い続けそれを千冬は黙って聞く。

「どうにも……自信が持てなくなる……共に飛んでいれば守れると…思ってそれを信じているのに」

「つまり……お前は信じ切れていないわけだ。弟を」

「え？」
「私は、あの馬鹿（一夏）を信じている。大丈夫だと」
「あたしだって……信じてるわよ…」

ローラは言い返すが、どうにも言葉が小さくなってしまう。
それは千冬が、的確にローラの核心を突いた証拠に他ならなかった。

「いいや、違うな。お前は信じ切れていない」
「ッ…」
「お前は、多分…そうあの事故以来だ…あの海難事故以来。アルディに対して迷っている」
「迷って…だけど」
「色を奪ったそれが、立ち直るきっかけになった。だが他に道はなかったのかと考えるそのこと自体が信じ切れていない証拠だ」

他に、他に、他に……確かに自分はそうやって考えている節はあった。
だが、でもそれは

「それは、アルディの事を思って…」
「思うなら……信じてやれ」
「……」
「迷うな。お前が迷えば……あいつは誰を目標としていけばいい。誰を信じればいい……。姉とは……そう言うものだ」

千冬は手すりに寄りかかる身を起こし、希達の所へと歩きはじめる。
恐らくそこにいた誰もが凛とした空気を纏い、黒いスーツを着こなす千冬と、ボロボロの青いスーツで傷だらけのローラが妙に対照的に写っていた事だろう。

世界第一位と第二位の間にある差もまた同時に映し出していたのかもしれない。

ローラはその後ろ姿を見つめながら、最後に尋ねた。

「……どうして、あなたはそこまで信じ切れるの？」

「ん？……そうだな…」

千冬は少し考えて、振り返らずに答えた。

「戦場に出れぬから…かもな。お前は出れるんだ…やるべき事があるとは言っても私からすればお前の方が少々羨ましい。近くでしっかりと守って…そして信じてやれ」

「言われなくても…ね」

ローラのその返事が、千冬に届いたかどうかは分からなかったが、誰一人話さず風と波の音だけになった月明り照らす岬の空気が、全ての話しが終わったという事を皆に知らせている事だけはよく理解できた。

臨海学校はもう一日残されている。

明日こそは本当に少しゆっくりしたいと思いながら、ローラは千冬の後に続くのだった。

第５０話～月下にて～（後書き）

一通り、それぞれの言い分をまとめた回で。

読めば分かるかもしれないし分からないかもしれないそんな感じの回にしてみました。

もちろんですが全ての答えを放り込んでいませんから謎は謎のままですよ。

ではまた５１話でお会いしましょう。

お気づきかと思われますが、アルディの暴走事件が一日目の夜そして福音事件が二日目の夜で、臨海学校は三泊四日なので、おや一日余ってる～

ってなわけでｗ

次回はようやく書ける臨海学校での日常回の予定です。

では失礼します～

第５１話～Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　アルディの後日談～（前書き）

超絶遅れてすいません。

更に遅れたうえに……

第５１話～Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　アルディの後日談～

臨海学校は三泊四日つまり今日が最終日という事になる。
本来ならば、？福音？の件で遅れたデータを取らねばならないが、流石に遊びたい盛りの生徒たちを初日そして先日とずっと旅館に拘束しっぱなしであった事を鑑みて最終日は、初日の穴埋めという形で自由日とされた。

今日もいい天気で、陽気も良い。
それだっていうのに…。
寝てなきゃいけないって言うのは実につまらない。
まぁ怪我人だから仕方ないけど。

さっき、チョロっとセシリーは顔を出しに来てくれたけどそれ以降は全く誰も来ない。

もはやつまらないじゃない、暇だ。

なにぶん、休みの日でもあまりゴロゴロして時間をつぶすタイプじゃないだけにこの時間がただただ苦痛であった。
な～にかないかなぁ……。

でも身体を起こそうにも傷が痛むし……。
はぁ……痛まずになんか出来る事…ん？…痛まずに？
そこで僕はゆっくりとではあったが寝ながらポンっと手を打った。
あぁ、そうだ。
アレがある。
僕は思うなり早速……。
『へ、呼んだ？　って痛いッ！？』
「我ながら良い方法だと思わないかい？」
『君、ひょっとしてボクを痛み止め代わりに呼んだのかい？』
「それ以外に何か？」
『あぁもうコイツ助けなきゃよかったッ！』
僕がやった事それは、ＩＳを起動させる事。
起動といっても、ちょこっと、本当にちょこっとＩＳのバイザーを起動させてレイを呼び出したのだ。
レイはＩＳを展開すると勝手に僕の右側にアクセスするようになっているらしい。
そして同時に痛覚などの感覚も、左右別々に分離する。
多少会話が一人芝居になって、頭を心配される以外は少なくとも僕にとっては痛みを止めるこれが手っ取り早い方法だった。

「さて……痛みも引いたところで」
『……押しつけだけだよね？』
「……引いたところで？」
『押し付けただけだろッ！！』
「あはは、まぁまぁそう怒んないで。別にそのためだけで起動したわけじゃないから」
『今、大筋で認めたよね？』

僕はレイの言葉を軽く流して天井を見つめる。
思い出すのは、昨日の一件。
あんな……。
あんな非現実的な事を経験したという実感が一日経って、そしてセシリーとも話した後だというのに湧いてこなかった。
でも、たった今適当に…本当にただ痛いからそれだけの理由でレイを呼んだその瞬間に、あの出来事が全て事実だったという事を僕に理解させる。

ぼんやりと天井を見つめ続ける僕の様子をしばらく無言で観察していたレイだったが、呼び出された側としては我慢できるのも意外と短かったようで、不機嫌に口を開いた。

『で、本当に何の用さ？』
「え、あぁうん…」
『あぁうん…って……君が呼んだんでしょうが』
「……いや……なんかさ……本当だったんだなって…」
『何が？』
「…昨日の事」
『あぁ…そうだね。ま、やっぱり実感わかないかなぁ？』

レイはいつもの調子で明るくそしてあっけらかんとして言う。
そのあっけらかん差が、逆にレイがやはり普通な存在じゃないという事を僕に実感させた。
あんな事があっても、驚かずにそうだねで済んでしまう。
まぁ、最もレイの中でも僕と同じぐらい驚いているような何か別の事はあるんだろうけれど。

「改めて考えると……とんでもないよね、やっぱり」
『そりゃぁね、意識失いました、でＩＳの意志に会って身体半分こで復活しました…で、戦ってみれば機体は真のファーストシフトで？福音？を倒せました……なんて事、他の人のみならず自分自身でも中々、「はいそうですか」って納得はできないよね』

言ってしまえば、たった二行で終わるのに。
余りにも内容が非現実的すぎるのだ。

「納得……とかじゃないんだけどね……素直に受け入れられないっていうかさ」
『うん』
「……まぁでも――――」

と僕が言いかけた時、バンッと襖が開いた。
僕は慌ててＩＳを待機状態に戻して視線を動かす。

「な、何！？」
「……ふむ、驚かせてしまったか？」
「ら、ラウラ」

僕的には意外な、いや意外すぎる訪問者に目を丸くする。
ラウラは、制服姿で片手に端末を持っていた。

彼女は、そのまま僕の傍まで歩み寄り腰を下ろす。

「それで、何をしに来たの？」

「なに、セシリアに頼まれたのだ。お前を見ていてやってくれとな」

「セシリーが？」

「……というよりも、皆で決めた事だ。今日は一日自由時間だろう？　だがお前はそんな身体だ。だからと言って、一日中お前の面倒を誰かに見てもらうわけにもいかない。ローラさんだってやることはある。だから時間を区切って……、ま、そう言う事だ」

「気にしなくていいのに」

「そうもいかんさ。お前も大事な仲間なのだからな」

皆が少しでも気にかけてくれている事は正直有難かったし嬉しかった。

思わず僕は、顔がほくそ笑む。

「けど……僕はこんなだし動ける状態じゃないけどね」

「ゆっくりすればいい。今日ぐらいはな」

ゆっくりねぇ。

ついさっきそれに耐えられなくてレイを呼んだ手前、微妙に気まずい。

ラウラは壁に身を預けると、小型端末を起動させると今日のニュースにザッと目を通し始めた。

そうして十数分、互いに会話のない時間が続いたが、不意にラウラがぽつりと端末を見ながら口を開いた。

「……そう言えば、さっきアメリカからローラさんを訪ねてきた二人組が居たな」

「え、姉さんを？」

「あぁ、どうやらＩＳの関係者だったようだが…」
「無理もないよね……あんな事があったんだし…」
「まぁな、こんなに大きく記事として取り上げられてしまっては無理もないかもしれん」

そう言ってラウラは、端末の画面を僕に見せてくれる。
そこには？太平洋沖でＩＳ謎の暴走　事故調査委員会組織し本格的調査へ？と見出しが書かれていた。

流石にアメリカもここまで大々的に各国に取り上げられてしまっては…。
鹿もラウラが見せてくれた記事はアメリカの、ネット記事。
つまり本国でもそれだけ大きく取り上げられているという事だ。
今のご時世、いくら海域封鎖や情報規制を敷いたところでどこからだって情報は漏れる。
大方、姉さんに会いに来たって言う人達はＩＳでもその関係の人たちなのだろう。

「それで、姉さんは？　応じたの」
「それから先は何ともな。一応話しは聞いている風だったが」
「そうなんだ…」
「フッ、まぁ気にしても仕方がないさ。それよりもお前は身体を治す事に専念するんだな」

そう言ってラウラは笑い、再び視線を端末に戻す。

にしても……姉さんに……来訪者ねぇ？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「全く、驚いたわ。連絡ぐらいよこせばいいのに」
「驚いたのはあたしの方よローラ、なんてザマなの？」
「……もう少し……言葉を選べませんでしたか？」
「え？」

ローラはついさっき自分を訪ねてきた二人組――――ブラウニーとライオネル――――を旅館の応接間を借り、そこへ通した。
目の前の机には人数分のコーヒーも淹れられている。

「にしても……あれね。あなた達、どうして二人できたの？」
「いえ、元々私が一人で来るつもりだったのですが……彼女が…」
「散々、議決した案件に反対しまくった挙句勝手に候補を選ばれたんじゃあたし立つ瀬ないでしょ？」
「つまりは……なに、ブラウニーの変な意地？」
「い、意地って、あんたねぇ……。それだけじゃないわよ。暴走事件の事も聞きに来たの。一々ナターシャを本国に持って帰って呼び出して…なんて面倒な事出来るわけないでしょ」

「……面倒ってあんたね…」

自分の立場と責務をどう思っているのかとローラは少し頭を抱えたくなった。
とそこで、ローラの目にブラウニーとライオネルの薬指にそれぞれ指輪がはまっている事に気がついた。

「あれ？　おそろいの指輪なんてあなた達、どうかしたの？」
「は？」

「え？」

「い、いや…それに薬指って……まるで婚約者みたいね。まぁ…冗談でも笑えないけど」

「……い、いや…」

「婚約者といいますか…」

「え？」

「夫婦ですけれど」

「うん…」

「……うそ？」

もう本当にローラは頭を抱えた。

「と、とりあえず話を戻しましょう」

ローラはそう言ってズレにズレまくった話を元に戻すべく若干まだ戸惑いながらも場を仕切り直した。

「何もそんなに驚かなくてもねぇ」
「久しぶりに会った人間が、知らせなく結婚してたら驚くでしょ！　それに夫婦そろってならなおさらね……って、もうそれは良いの！　本当にもう……で、何をしに来たわけ？」

ブラウニーは、フフッと笑うとライオネルに目配せをした。
そしてライオネルが傍らの鞄から一枚の書類をローラに手渡す。
そしてローラはそれを見て、顔をこわばらせた。

「これはッ…」
「ローラ…あなたを、その記してある日付をもってＩＳ研究開発局へ？正式に？配属とするわ」
「そんな、急すぎるわッ！」
「辞令に急も何もないでしょう？」
「それでも…」

ローラはグッと歯噛みする。

実際ローラは今、アメリカの研究開発局に属してはいるが正式な配属ではなくあくまでアドバイザーとしてであった。
だから、思いのほか身軽にこうして日本にきたりしても、特に問題はなかった。
だが正式配属となれば話しは別である。
ローラは受け取った書類に記された日付を確認する。
そこに記されていたのは今日から二日後の日付。

今日帰ったとしても……いや、逆に今日帰らなければこの日付の日に研究開発局に戻る事は出来ない。

全く昨日の夜、千冬に近くで守って信じてやれと言われたばかりだ

というのに……。

物事には何事にもタイミングというものがある。
そしてこれはローラにとって最悪と言わざるを得なかった。
まぁ怪我をしている手前すぐに空にも上がれず、アルディ自身も大けがではそれほどすぐに回復は不可能だろうがそれでも、日本とアメリカ。

余りに遠すぎる。

尚も食い下がろうとするローラにブラウニーはため息を吐きながら次なる書類をローラに手渡した。
その書類は束になっていて上をワニ口クリップで閉じられている。

「何よ、これは…」
「ねぇ、ローラ。？ストライクバーディ？がアメリカ合衆国にもたらしたものはあまり多くはないわ。けれどその中身は……かなり濃い」
「？」

パラパラと書類をめくっていくローラがある一枚の項で手を止める。
そしてその内容を呼んだ時ローラが何故正式に配属になったのかその理由がなんとなくわかった気がした。

「こ、これは……」
「そしてその濃い情報や？技術？は使わなきゃ意味が無いの。言ってる意味はお分かりよね？」

……ブラウニーは語りかける様に言うと、フフッと笑う。
そして付け加える様に一言を添えた。

「世界は動いてるのよ……あなた達が想像も出来ないぐらいの速度でね……」
ローラはその言葉を聞いて、そしてもう一度書類の束に目を落として、最後に大きく息を吐いた。

世界は動いている。

その事は確かあの五条　叶も言っていた事だった。
そしてその流れが今こうして自分の目の前にゆっくりとだが確実に提示されていく。

「大丈夫よ、あなたが帰ってもあたし達がこっちにしばらく用事で残るし、それに後日になっちゃうけどアメリカから有能な人材を一人呼んであるから♪」

ブラウニーは言うとウィンクをしながらコーヒーをすする。
……有能な人材ね……。
まぁ、それは良い。
けれどまぁ、確かにこれは自分が帰らなければならない事態なのかもしれない。

……それにだ。
ローラはこうも思う。
確かにタイミングは最悪だった。
近くで守れも信じれも出来ない。
でも、逆に遠く離れていてもアルディの弟の事をしっかりと信じきる事が出来れば、それはそれで大きな進歩では無いのかと。

ローラはそう思い、出来るだけ前向きに考える事にした。

まだ色々と納得はできていないが、それでもローラは渋々だが頭を縦に振った。

その様子を見るブラウニーの目が一瞬、冷たく光った事に気がつかぬまま。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「だぁぁぁぁッ！？　また負けたッ！？」

「鈴はめくる位置が適当すぎるんだよ」

「それに、一度めくったカードの位置も適当に投げて戻すから分からなくなるんだ」

「うぅぅ～～～～ッ！！」

「性格が災いしたな、鈴」

「……あなた達に任せた私が馬鹿でしたわ…」

頭を抱えるセシリーをベッドに横になりながら見つつ僕は苦笑する。

まぁ、こうなる事はほんの少しだが期待していた。

だけど実際なると、なんて言うか……傷に響く。

今、一夏達がやっているのは神経衰弱第六回戦。

よくもまぁ飽きずにというか何と言うか。
僕自身は参加していないがそれを一歩引いたところから見ても中々面白かった。
主に、鈴の一人負けが。

さっきラウラの言ったように鈴は、めくったカードを乱雑に放り投げるように戻す。
だからいざ自分の番となった時にこのカードどこだったっけって言うのが多く結果カードを得られず毎回指摘されているのに自滅していく。

そもそもなんでこうなったかだが、ラウラが来た後しばらくしてシャルロットがやってきた。
気の効くシャルロットは退屈しないようにとトランプを持ってきてくれたのだが、よく考えるとそれが発端だったのかもしれない。

本来ならば、シャルロットと交代で出ていくはずだったラウラがトランプに興味を示し初めは三人で軽くババ抜きなどのゲームを楽しんだ。

そうこうしているうちに、どんどん時間が過ぎ交代予定のメンバーが続々と入ってきて結果こうなったのだ。
ちなみにセシリーは、一度ビットを下ろしてしまったために再設定が必要とかで一番最後に部屋に入ってきてトランプを楽しむ皆に唖然としていた。
まぁ、そんな感じでセシリーは今も頭を抱えているのだがそんなセシリーにラウラ達には言い返す言葉が見つからなかった鈴が丁度いいとばかりに噛みついてきた。

「何が馬鹿よ！？　大体あんたが頼んだでしょうが。アルディの看

病をお願いしますわって！」
「さしもの私もこんなになるとは思ってませんわッ！」
「予測しなさいよッ！」
「無茶苦茶！？」

まさかのセシリー押し負け。
まぁ……相手が鈴だしね。
そこへセシリアを落ち着かせようとシャルロットがキラッならぬシャルッと割り込む。

「まぁまぁ、鈴もセシリアも。あんまり騒いじゃうとアルディの傷に響くよ☆ミ」
「そんなシャルッと爽やかに言われても説得力ありませんわよ！？」
「全く……良いかセシリアこれはな。場を和ませるレクリエーションなのだ」
「ラウラさん……そんなトランプ片手に言われましても…」
「それに私たちはちゃんとアルディを見ていたしな」
「箒さん…視界にとらえる＝見ていたっていまそんな感じで言いましたわね…」

突っ込みどころ満載のメンバーに的確な突っ込みを入れていくセシリー。
おぉ凄い、セシリーが常識人に見えてきた。

「なんですのその目は……」
「……何でもありません」

言ったら殺されるね。
セシリーはやや突っ込みつかれた目で、ため息を吐いた。

「それにしても……本当に良かったの？　せっかくの自由時間なのに…」

ひとまず落ち着いた面々に僕は、問いかける。
看病をしてくれるのは確かにありがたいし、話し相手も出来て退屈はしない。
けどそれは結局自分側の理屈で、一夏達が自分たちの時間を割いてくれている事に変わりはないのだ。
そう思うと申し訳ない。

だがそんな心配をよそにラウラが、しれっと返した。
「言っただろう、お前は大事な仲間なのだ。これぐらい当然だろう」
「ラウラの言うとおりだアルディ。お前が怪我して寝てんのに俺らだけ楽しめるかよ」

「……神経衰弱は随分とお楽しそうでしたけど……」
「いやッ…あれは…鈴がやってたから……」
「何！？　私もしていただろうッ！」
「箒、そりゃそうだけど」
「トランプなら僕もやってたよね？」
「私もだな……なのに…何故鈴だ？」
「……だから…や、だって鈴やってたろ……？」

一夏は向けられた視線にあれは失言だったという後悔を覚えつつチラッと鈴を見る。
しかし鈴がこんな時に一夏を助ける言葉を言うものか。
予想通り鈴はさっきのお返しとばかりに油を注ぐ。

「も～一夏ったら……そんなに？あたし？とトランプがしたいならそう言ってくれればいいのに～」

あたしを強調した発言に一瞬なんで鈴はそんなところを強調したのかと一夏の頭は考え始めるがすぐさま背後に迫る殺気に振り返る。

「……っはッ！？」

「「「一夏ぁッ！！！」」」

「わ、わりぃアルディッ！！　俺はまだ死にたくないッ！！」

「あ、逃げた！」

「えぇい待て一夏ッ！！」

「っく、流石嫁……素早いなだがッ！」

阿修羅のごとき形相で睨まれた一夏は部屋から逃走。

それを追って三人の阿修羅が解き放たれる。

しばらくは、旅館の中で壮絶なチェイスが行われる事だろう。

そうして部屋に残されたのは僕と鈴とセシリーの三人だけ。

鈴もその後を追いかけるんだろうなと思ったのだが鈴は、ふぅっとため息をひとつ吐いた。

「ま、こんなもんでしょ。一夏には悪いけどしばらくあの三人を引きつけてもらいましょ」

「あ、あの鈴さん？　どういう…」

「ん？　なにボケた事言ってんのよセシリアまで」

そう言って鈴がセシリーに近づき何やら耳打ちをする。

すると一瞬でボッとセシリーの顔が真っ赤に染まった。

「り、鈴さん！？　なななな何を言って！？」

「何って……そのままの意味じゃん？　あ、アルディあたし行くとこあるからちょっと行ってくるわね」
「あ、ちょっと鈴さ――――」
そう言って僕の、そしてセシリーの言葉も聞かぬうちに部屋を後にする鈴。
…一体なんなんだ？
セシリーはまだ少し顔を赤く染めてブツブツと何かを言ってるみたいだし。
ほんと、鈴は何を言ったのやら。
このまま放っておいて観察もそれなりに時間はつぶせそうだったが流石にそれは可哀そうだと思いセシリーに声をかけた。
「ねぇ、セシリー？」
「全く……鈴さん……なんて事を仰いますの…」
「セシリーって」
「それに大体どうしてこう言う時だけ…」
あぁもう駄目だなぁ…。
もう少し大きめの声で言ってみるか。
「セシリーってばッ！」
「ひゃいッ！？」
僕が少し語気を強めると、セシリーの身体がビクッと跳ねた。
と同時に大きな声を出した僕の腹部も痛くなる。
思わず顔をしかめた僕にセシリーが、ハッとして心配そうにのぞきこむ。

「ア、アル！？」
「ちょっと大声出して響いたみたい…。大丈夫大丈夫」
「ふぅ……いきなり大声を出すからですわ」
「いや言うけどね、セシリー。僕二回も呼んだんだけど」
「……コホンッ」

あ、咳払いで話題を無理やり終わらせた。
……まぁ良いけど。

「それで、なんですの？」
「え、何が？」
「ですから、私を呼んだじゃありませんか」
「あぁ……いや…まぁ、セシリーが自分の世界に入っちゃってたみたいだから現実に引き戻そうかと」
「……その話はさっき終わりましたわ」

あ～だったね。咳払い一つで終わらせたね～。
しかし、実際そうなのだからそれ以外説明しようがない。
だからと言ってこれでは、会話が堂々巡りするだけかとも思い何か話題を考えてみる。

何か話題話題……。

う～ん…。

……やば、何も思いつかないぞ。
元からそれほど、想像力豊かじゃないと思っていたけどこれほどとは思わなかった。
それでも何かと話題を探す僕に、逆にセシリーがフッと微笑んで僕

に声をかけてくれた。

「アル……」

「うん？」

「私、正直……ホッとしてますの」

「ホッとしている？」

声をかけてくれたおかげで話題探しをしなくて良いのはありがたいが、セシリーが言いたい事がいまいちつかめない。

何が言いたいのかな？

「それは、どういう意味？」

「そのままの意味ですわ。こうやって普通に何気ない会話が出来る事。それがこんなにもホッとするとは思いもしませんでしたから」

「あ……」

こうしてさっきまで皆とワイワイと話していたから、気が付きにくいけれど僕たちはつい先日まで一歩間違えれば命を落としかねない場所に居たのだ。

確かにそう思うのは当然だと思う。

それに僕に至っては……。

僕は自分で自分の腹部をさすった。

少し撫でただけでも痛みを感じる。

当然だが、死んでしまえばこの痛みすら感じることはないのだ。

変な言い方だが、さっきのセシリーの言葉を聞いた後だからだろうかこの痛みを感じる度に安心する自分がいた。

「あんな事になって……病院で生死の境をさまよって……そうしたら次には目の前に居ましたわ…。

ケロッとした顔で、本当に……どれだけ……こっちが心配したとッ……思って…ッ」
「セシリー……」
瞳にはうっすらと涙も見える。
その時の気持ちを考えると、何も言葉が出てこない。
僕だってそうだ。
あの時、？福音？に狙われているセシリーを遠目から見ていても経っても居られなかった。
結果助ける事が出来てよかったけれど、目の前であの心境ならそこに心配する人が居ないというのはどれほど不安だったか。
「本当に、勝手ですわね……。初めてお会いした時もそうでしたけど……本当に自分勝手でッ　なのにそれでいて自由で……本当に……本当にッ！！」
「セシリー……」
僕は表情を緩めると、セシリーのグッと固く握られた手に左手をゆっくりと重ねた。
「……アル？」
「けど……僕は失わずに済んだ。皆を僕にとってかけがえのない人たちを」
そう……確かに僕はセシリーや皆に心配をかけに掛けたかもしれないでもそれでも、僕は僕と？レイ？は確かに失わずに済んだのだ。
かけがえのない人達を。
僕は、痛みをこらえてゆっくりと身体を起こす。
それを見たセシリーが、素早く僕に肩を貸してくれた。

「アル？」
「セシリー……お願い聞いてくれるかな？」
「……はい？」
セシリーはその言葉にキョトンとした顔で首をかしげた。

「う～ん……綺麗だね～」
「いきなり海を見たいだなんて……なんなんですの？」

肩を貸してくれたセシリーが、呟く。
僕はセシリーに軽く礼を言いつつ近場のベンチに腰を下ろした。
セシリーもそれにつられるように隣に腰を下ろす。

目の前には水平線に今沈まんとしている夕日が見え、海をオレンジ色に染めていた。

「正直……こんな気持ちで海を見たのは初めてかもしれない…」
「……」
「海は僕にとって、一番来たくない場所だったから……」

でも、あの時？福音？に海へ叩き落とされた時。
あの時見た海は……とても綺麗だった。
だからこんなに綺麗なところでもう誰も失痛くないと思ったんだ。
思えば、一度は全てを海に奪われて、でももう誰も失うなって自分の背中を押してくれたのも海かもしれない。

「けどまさか……海に背中押されるとは思わなかったなぁ」
「……アル？　あの……一体何を？」
「いや……何でもないよ……ただ……守れたんだなって…」
「えぇ、そうですわね。皆無事ですわ」
「あ、いやそうじゃなくて」
「はい？」

今の返答にどこか問題が？というような顔でこちらを見やるセシリー。
そんなセシリーの顔を見て思わず笑いがこみあげてしまう。
その僕の反応に、セシリーがムッとした。

「なんですのいきなり、失礼ですわよ」
「あぁ、ごめんごめん……でもやっぱり……守れてよかったよ」
「ですから……はい？」
「そう言う事」

僕はそう言って、ゆっくりと海へと視線を戻す。
未だ夕日に照らされた海は、動き始めた世界の事など全く知る由もない穏やか姿で僕たちの前に広がっていた。

第５１話～Ｓｉｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　アルディの後日談～（後書き）

遅れたうえにｇｄｇｄな内容ですいません。

色々忙しかったんです。

……はい、言い訳ですすいませんでした。

ようやく臨海学校も終わりですね。

次回にまだ聡也パートが残っているんですじぇ……。。

次パートは完璧オリジナルなのでそのあたりお願いします……。

では、本当に遅れてしまいすいませんでした。

第５２話～Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　聡也の後日談～（前書き）

完全オリ。
やっぱ聡也版はどうやっても完全オリ物になっちゃうなぁ…

第52話～Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　聡也の後日談～

「ほら、ちょっともう少しよく見せてくださいよッ！」
「う、うるせぇよッ　大丈夫だって言ってんだろ！？」
「駄目ですよッ！」
「……聡也まで……何やってるんだか」

希の白けた声にも全く動ぜず、聡也とロッソは、傍から見れば取っ組み合いの様な診察を続ける。

というのもロッソは旅館に帰るなり、他のメンバーが診察を受ける中事もあろうにそれをスルーした揚句そのまま自室に直行して翌日まで寝た上に、再三の呼び出しも全てすっぽかすという荒技をやってのけていた。

もはやここまで来ると、命知らずという言葉がぴったりだ。
まぁ、あの千冬に殴られてもガン飛ばすのはロッソぐらいしかいないだろうが。
そんなロッソが今日、ひょっこり？戦？に顔を指したのだ。

丁度良かったから聡也が、なんで抜けだしたりして再三の呼び出しにも応じなかったのかその理由を聞いたところ。

単純に「面倒だったから」という答えが返ってきた。
これにはもう唖然として声すら出なかった一同だった。
ここまで自力で来たのだから身体の方は本当に大丈夫なのだろうが、一応分かる範囲で傷や身体の状態を確認しようとまずはリリスを筆

頭に医療関連のクルーがロッソに接触を試みた。

しかし、ロッソは大丈夫の一点張りで最後はリリスの顔面に小型の消火器がめり込んでいた。

つまりは失敗である。

その後も数回別の方法を取ったのだが、結局どれも失敗してしまい希が取った最終手段が聡也である。

当然、男である聡也は反対した。それはもう凄く。

だが結局は押し切られ、外見上分かる範囲でという条件付きで渋々頭を縦に振ったのだ。

ロッソもまさか聡也が出てくるとは思っていなかったらしくかなり動揺していた。

ロッソは、上こそパーカーを羽織ってはいたが、そのしたは赤いビキニ。

聡也の登場で、変に意識したのか露出している太ももや足などは比較的簡単に診察する事が出来た。

立ち会ったクルーが、初めから聡也を立ち会わせればよかったと思うほどにスムーズだった。

問題はその後。

パーカーを脱いでくれと言った後だ。

ロッソはかたくなにそれを拒んで、で今がこれである。

「良いから、脱いでくださいよッ！」

「ばっか、お前何言ってやがる！？」

「変に赤くならないでくださいッ！！」

まぁ、知らない人が見たら一発で捕まるだろう。

……聡也が。

「大体、なんでお前が脱がすんだよッ！？」

「ロッソがちゃんとしないからですッ」

「いや、そう言うことじゃなくてどうしてお前なんだってことッ！」

「ロッソが怪我をしたのは、ある意味出撃を止められなかった僕にも責任があるからですッ」

「そんなところで、持ち前の責任感発揮！？」

ロッソそしてロゼオにとって、聡也のこの責任感の強さは彼を好きになった一つの要因でもあるがこんなところでそれを最大限発揮されても困る。

別にロッソは、異性に自分の裸体を見られようが何とも思わない。

相手が聡也（好きな人）だから、ここまで反対しているのだ。

乱暴な口調で荒っぽい性格のロッソもまた一人の恋する少女なのだ。

しかしさしものロッソも面と向かってしかも他のクルーの前で本当の事など言えるはずもなく聡也の行動に対する有効な反抗の手段が見つからない。

だからと言ってこのままでは、本当に力づくでパーカーを脱がされかねない。

どんな事を言おうとも責任と言いだした聡也を止める事が出来ないのはロッソが一番よく分かっていた。

そしてついに……

「わ、分かった、黙って脱ぐからお前離れろってッ！！」

「そうやって、またッ」
「いやだからほんとだっての！！　ちゃんと見せるからッ」
「む…むむぅ……そこまで言うんなら」
「はぁ……とりあえず、外で待っててくれよ」

ロッソが言うと聡也が、まだ訝しげな眼をロッソに向ける。
それにロッソは半ばやけくそ気味に言い返した。

「だから、ちゃんと見せるって言ってんだろッ！！　少しは信じろよッ！！」
「……分かりましたよ……じゃぁ、僕は出て待ってますからね」

そう言って踵を返す聡也だったが、最後の最後もう一度振り返ると念を押すように言った。
「ちゃんと、見せるんですよ？」
「良いから出てけーー！！」
「はいはい……わかりましたよ…」

今度こそ聡也は部屋を後にする。

「ったく……あたしはどんなけ信用されてないんだよッ」
『……仕方ないと思うよ』

？このまま自分自身に突っ込まれ続ける様になったら自分もいよいよ終わりだな？とロッソは自嘲気味にそう思うのだった。

「全く……手間取らせてくれましたね……」

ハッチが開かれた、？戦？の格納庫。
その日陰に聡也とロッソは二人座りこんで心地の良い潮風に吹かれいた。
聡也は、ジト目でロッソを見やるがロッソはその目に反応せず鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。

聡也はそれを見て、やれやれと肩をすくませる。
勝気で荒っぽいロッソと、大人しくあまり表情を表に出さないロゼオ。
その二人がこうして一つの身体を共有し合っているというのは、そのきっかけを作った自分が言うのも何だが不思議なものだ。

自分自身に何かを言われる感覚というものがどんなものなのか分からないが、きっとロゼオが外に出ている時は内側からそれはそれはさぞやかましく吠えたてられるのだろう。

「な、なに、人の顔見て笑ってやがんだよ、気味悪ぃな…」
「フフッ、いえ……何でもありませんよ」
「？」

怪訝な顔で首をかしげるロッソにまた笑って返すと、聡也はさりげなく問いかけた。

「なんで、診察……受けなかったんですか？」
「あぁ？　だから面倒だったって……」
「違いますよね？」
「……え？」

ロッソは思わずキョトンとした顔で聡也を見返す。

聡也の言い方が、あまりにこちらの行動を決め付けたような言い方だったから、そして何よりそれが余りに図星過ぎた（・・・・・）からである。

「戦闘後の診察は、搭乗者として半ば義務の様なものですからね。いくらロッソでもそれを面倒だからと言って抜けだすはずもありませんしそれに何よりロゼオが止めるでしょ？」

「……いや……それは…」

「いえ、別に僕は責めているわけでは。……やっぱり気になりますか？　例の機体が」

「ッ！？　……ハハッ、お見通しってやつか…」

ロッソは苦笑いを浮かべて、頬を掻く。

聡也も、後に知った事だったがあの？福音戦？終了後に突如として現れたあの機体はイタリアの機体であった。

？イグナイト・スパーダ・ドゥラゴーネ？。

確かに、あの姿は龍騎士を名乗るにはふさわしい姿だったが、何より驚いたのはその早さだった。

離脱した時もそうだったが、アルディを助けた時艦の広域サーチにも引っかからなかった。

つまり敵は一万以上の彼方から、米粒ほどの小ささで落下するアルディを見つけ駆けつけたのだ。

とんでもない推力である。

「あの機体は、元々あたしの機体と同時期に造られたもんなんだよ」

「同時期……つまり第三世代機という事ですね」

「あぁ」

ロッソはゆっくりとそれに肯定する。
そして同時に聡也は少し苦い顔をした。
実際、箒の？紅椿？そして一夏の？白式？を除けば第三世代のＩＳは基本的に最新鋭の機体である。
そして、アルディを助けたとはいえオープンチャネルで発せられたあの口ぶりを聞く限り味方では無い。
という事は、いずれ聡也とも戦う事になるだろう。
いくら先日のデータどりで？ナイトシュライク？発動のきっかけがつかめたとはいっても未だに成功していない。
そんな状態でもし仮にあのＩＳとかち合う事にでもなったら間違いなく負ける。

「アレは同時期に造られたって言ってもかなり実験的要素が強ぇ機体でよ。ちょっと特殊な兵器を搭載してんだ」
「特殊な？　それはどんなんなんです？」
「えぇ……っと……確か～～……あれ、何だったけ？」

笑って頭を掻くロッソに聡也は思わず力が抜けた。
まぁ、ロッソがそれを正確に覚えているとは聡也も思っていない。
少し抜けているぐらいがロッソらしいとも思えた。

すると多分、内面で色々と良いあったのだろう渋々と言った形でロッソが奥に引っ込み、一気に雰囲気が物静かになる。

「……彼女に説明を任せた……私が馬鹿だった…」
「成り行きで聞いた僕も悪かったですよ……」

互いに自分自身に呆れつつ、話を戻す。
「それで、特殊な兵装というのは？」

「……あの機体は、？微振動破砕？っていうシステムを使用する事が前提なの……」
「？微振動破砕？……超高速の震動波によって物質の内部元素結合そのものを破壊する……っていうやつですね」
「うん……私もそれほど詳しく知っているわけじゃないから、詳細なスペックまでは思いだせないけれど……確かそうだったはず……」

ロゼオは当時の記憶を探りながらポツポツとつぶやいていく。
それからも少しは機体に付いての事は分かったが結局詳細なスペックや搭載火砲の事までは分からなかった。

粗方、そのＩＳの事を聞き終えるとふと疑問が浮かぶ。

「そう言えば、どうしてあのＩＳはロゼオ達の乗機にならなかったんですか？」
「……どうしてって？」
「あぁ、いや素朴な疑問ってやつですよ。確かに？ペルフェッド・エスダーテ？はバランスの取れた優秀な機体ですが、聞く限りあの？スパーダ？もそれほど劣っているとは思えないですし……」

むしろ、？微振動破砕？なんていう他の国がどこもやっていないような技術を研究した方が有益な気もする。
加えてあの推力だ。
突き詰めて行けば、ＩＳの強豪ひしめくヨーロッパ連合の中でもかなり上位に食い込む実力を秘めた機体になりうるはずだ。
そんな機体をどうして、代表候補生でもあるロッソに使わせなかったのかが聡也にとっては疑問であった。

「……操作性がピーキーすぎた…」
「ピーキー？」

「要は、機体に対する推力が大きすぎたのね？」

急に背後から聞こえた声に僕たちは、振り返る。
そこには、メガネをクイッと直しながらこちらに歩み寄ってくる博士の姿があった。

「博士」
「ついさっきまであのＩＳの映像、チェックしててね。まぁ、確かに大きいわよねあのスラスター」
「けど、大きいからあれだけの推力な訳で、それが武器なんじゃないんですか？」

何度も言うがあの機体は一万以上の遠方から一瞬でアルディを助けられたのだ。
プラスに働きこそすれマイナスになる事があるのだろうか？

「聡也は、基本的にバランスの良い機体しか使っていないからね。本当にバランスの崩れた機体がどれほど乗りにくいか……まぁピンとこないのかもしれないわね」

まぁ、バランスがいい悪いに限らず、聡也が使えるのはＮの二機だけなのだから選択肢はおのずと限られてくるのだが。

未だにピンと来ていない聡也に希は、説明口調で言う。
「例えば、そうね。大きな車と小さな車があるとするじゃない。で、その大きな車のエンジンはその大きさに似合ったものが載っている。けど小さい車には、その大きな車用のエンジンが載っているとしましょう」
「はい」
「大きな車には大きさに似合った出力を出せるエンジンが載ってい

るから普通に走る事が出来るけど、小さい車にはその大きなエンジンが載っている、つまりその車を動かすには必要十分以上の出力を持っている。しかも度を超えたね」

そこまで言われてようやくハッとした。

今までその速さだけに目が行ってそれがウィークポイントだとは思わなかった。

そう言う事だったのか…。

「必要以上に大きな推力は、確かに機体を一瞬で超高速に持っていくことは可能かもしれないけれど、それを扱う者にはまさに神経をすり減らす作業を強いる……。まさに欠陥機ね」

「……でもじゃあ、なんでそんな欠陥機をあの人は……」

「それは分からないけどね……けど、そんな？欠陥機？をあそこまで自在に動かせるって言うのは少なくとも、彼女はただものじゃないってことは分かるわね」

「それに……あの人、アルディを助けたけど一体何のために…」

そうだ、それもよく分からない。

間違いなく味方では無いのに、どうしてアルディを助ける必要があったのか。

あそこでアルディが死んだら困るような理由が彼女にもあったというのだろうか。

もちろん自分たちもアルディには死んでもらっては困るのだが。

「まぁ、分からなけりゃ分からないで良いんだけどね。さてと……聡也」

ポンと手を叩く博士。

うん……この先は大体予想できるんだ。

「取れなかったデータ、まとめてとっちゃいましょう」

……ですよね。うん分かってました。

どうやら僕には、今日自由という言葉はないようだ。

しかしその言葉を聞いてしゅんとしたのは僕だけでは無かったようだ。

「……私……」

「あ、うん…」

まいったな。

流石にこんなロゼオを放置してデータ取りに行けるほど人間出来ていません…。

困惑の目を博士に向けると、博士はフフッと笑うとわざとらしく大きな声で言う。

「あ～……そういえば、リリスがさっきロッソちゃんのフィジカルデータを学園の方へ送るって言って部屋にこもっちゃったから人手不足ねぇ～」

「……え？」

「あ～どうしましょうねぇ？　どこかにソコソコメカに強くてデータも取れてかつ一緒にＩＳで飛べる子がいれば良いんだけど…？」

「……あ、あの…私…」

「…フフッ、手伝ってくれる？」

ロゼオに博士が微笑みかけると、ロゼオは初め戸惑ったがすぐに事情を呑み込んで微笑み返し首を縦に振った。

『さて……えーっと……ここまでは前回ので取れてるから……』
博士がチェックボード片手に、一人ごちる。
その様子を、僕は？ブラックアウル？のモニター越しに見る。
ロゼオもＩＳを展開してはいるが、？戦？の周辺海上で待機している。
ロゼオの主な役目は、この周辺の海上封鎖および安全の確保。
そして博士のデータ採取の補助である。

『じゃぁ、聡也。今から数パターンの異なるスペックシートを送るからそれを順番にインストールして、今からこのエリアに表示するターゲットを全部破壊しなさい。分かった？』

「はい、了解です」
『それじゃ……始めましょ♪』
「博士……年甲斐もなくウィンクはやめた方が…」
『――――と思ったけど先に耐久テストを終わらせましょう。ロゼオちゃん。？スフィーダ？起動。零距離から？ウラガーノ？で聡也がどこまで耐えれるかデータを取りましょう』
「今、聡也がって言いませんでした！？　機体じゃなくて！？」
『……分かりました……』
「ロゼオも分かっちゃだめ！？」

口は災いのもと……。
ひとまず僕は平謝りしてから、テストに移行した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「五番六番ヒット。七番クリティカル　八番ヒット　九番スルー…」

聡也が打ち抜いた的のデータを読み上げまとめながら、艦に転送する。

それが今ロゼオに与えられた仕事だった。

ロゼオの前には複数のモニターが並びそこへ、次々とデータが送られてくる。

しかしその中に、一つだけ全くデータを取るうえでは関係のない物があった。

そこに写っていたのは、顔の表情が読みとれるぐらいに拡大表示された聡也の姿。

ロゼオはデータに目を通しながら、チラチラとそちらに目を向ける。

……やっぱり……格好いいなぁ……

自分でも少し頬が赤くなっているのが分かるが仕方が無い。

そもそも聡也がこうやって必死になっている顔を、まじまじと見る機会などほとんどない。

共にＩＳに乗っている時というのは互いに授業か何かしらイベントか戦闘か…。

とにかく相手の顔をよく見る時間など無い時ばかりなのだ。

……こう言う時ぐらい……良いよね…

ロゼオは聡心の中で呟きながら、作業を進める。
しかしまぁ、当然なのだが?心の呟き?と言った物も?ハーモニクス?は共有し合ってしまう。
だから、この後お決まりで来るのは……

『な~にが、良いよねだよ何が!』
「……黙ってて……今は私の番…」
『そうは言うがな、あたしだってお前って言うフィルター越しじゃなくこの目で聡也の顔が見てぇんだよ!　……ってことで変われ今すぐ変われ!!』
「……やだ……それにロッソに聡也の顔を見つつデータ整理なんて事が出来るとは思えない……」
『うッ……そ、そりゃ…まぁ……ってか、お前意外に器用な事してんのな…』

痛いところを自分に突かれるというのも、情けない話ではあるのだが仕方が無い。
言われて言い返せないのだからロッソも短くロゼオに言葉を返した後は黙りこむしかなかった。

だがさっきロッソが言ったように、ロゼオはかなり器用な事をしている。
送られてくるデータを読み上げながらまとめ、更に目ではデータ・聡也・データ・聡也・聡也・聡也・聡也・データ……と言った感じで、モニターを見ながら作業しているのだ。

志穂音程では無いにしても、ロゼオも流石に二重人格になってから長い間、座学側を担当してきただけの事はある様だった。

そうしてデータを送り続ける事数十分。
ビーっという電子音の後、希の声がオープンチャネルで響いてきた。
『はい、そこまで。後は……フフンなるほど中々面白いのが残ったわね。それじゃ聡也もロゼオちゃんも一度艦に戻ってきて。休憩してから最後のテストに入りましょう』

ロゼオと聡也はモニター越しの希に、頷いて返すとそれを見た希も満足そうにうなずき返して、ウィンドウが他のデータを表示していたウィンドウと一緒に消える。

しかしロゼオが表示させていた、聡也のウィンドウだけは艦に戻ってＩＳを待機状態に戻すまでずっと点いたままだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ふぅ…。

僕は一息つくと博士からカップにストローの刺さった特製のドリンクを二本受け取り、そのうちの一本を隣にいたロゼオに手渡す。
博士いわく？医学的見地に基づいた超がつくほど特製のアイソトニック飲料？との事らしい。
ちなみに味は某大手飲料メーカーの、オリンピック公式サポート飲料のそれに近い物だ。

ロゼオはその？特製飲料？を受け取ると、？ちう～？という効果音

がぴったり合いそうな感じでストローで飲料を口の中へ運ぶ。
それがどことなく小動物っぽくてかわいかった。

まぁ、ロッソなら間違いなく、カップのふた開けてがぶ飲みだろう。
それはいいとして。

「それで、データは取れたんですか？」
「えぇ、もちろん。最後のフェイズを残して完璧にね」
「……そう言えば、さっき言ってた面白いのが残ったって言うのは……どういう意味ですか？」

僕の問いかけにロゼオも言葉を続ける。
うん？　面白いのが残った？

……そんな事言ってたんですね…。

博士の面白いという言葉に少し僕は頭痛を感じた。
なぜなら博士の言う面白いとは、大抵の場合が僕にとって良い思い出が無い。

急な運用テストしかり、博士の？特製？料理しかり……

しかしその数十分後、僕のそんな考えは今回ばかりは外れだったという事に気づかされた。
なぜならそれは、僕にとってもそしてロゼオにとっても中々に興味深い内容だったからだ。

『それじゃ……準備は良いかしら？』
モニター越しの博士の声が僕とそしてロゼオに伝わる。
海上には一定の距離を取った僕の？ブラックアウル？と？ペルフェッド・エスダーテ？
そして少し離れた所にはハッチを解放して計測機器を並べる？戦？の姿がある。

博士の言った面白い事とは実践データの総合取得いわゆる模擬戦だった。
基本的には学園での演習などで取られたデータが博士の下に稼働実績という形で送られるのだが、それは？ホワイトアウル？の場合である。

成り行きとはいえ搭乗機が入れ替わるという前代未聞の事象に加えて恰好のデータ取りの場になるはずであった？福音戦？においても僕自身は出撃していないため取れていない。

？福音戦？の事に関しては予想外のこととはいえそう言った事もあって博士は一度しっかりと戦闘データだけでも取っておきたいらしく、このテストはだいぶ前から計画されていたものらしい。
と言っても相手は別段ロゼオを想定していたわけではないのだが。
……ただ正直ロゼオが模擬戦の相手を引きうけてくれたことには驚いた。
まぁ、彼女は彼女なりの考えあってのことだろうけれど。

僕はそこまで考えて頭を切り替える。
相手はロゼオ。
これまで戦ってきたのがたとえロッソだとしてもその実力は折り紙

つきなのだ。
他ごとを考えて、たとえ模擬戦なれど戦える相手では無い。
『双方とも……良い眼ね……じゃあ…行くわよッ！！』
？戦？から発せられるブザー音それがはじまりの合図。
その音と共に、僕は弾かれるように機体を躍らせた。
臨海学校最終日しかも完全フリーな一日がＩＳのテストに忙殺されるとは何とも味気ないが、それはそれで僕らしいとも思えた。
それになにより……。
僕は相手の攻撃をさばきながら、チラッと赤い機体を駆るその少女を見やる。
そしてフッと口元を緩ませた。
僕にとっては忙殺されているこの一日が、この上なく充実した物になっているのは確かですしね。
穏やかな海の上で、繰り広げられる黒と赤の模擬戦闘。

その姿はまるで、二機が楽しそうにダンスを踊っている様だったと後に一条　希は語っている。

こうして、聡也の臨海学校最終日は終わりを告げた。

第５２話～Ｓｉｄｅ　Ｏｗｌ　聡也の後日談～（後書き）

……もう何もいいますまい……。

投稿日遅れてすいませんでした……。

第５３話～世界は今…～

色々な事があった臨海学校。
間違いなく僕の人生の中で忘れられない事が数多く起こった三日間だった。

……まぁ寝た所も含めてね。

当然だが僕は、旅館の中にいる人間の中では超が付くほどの重症。
怪我は病院で手当てしてもらったとはいえ、その後ＩＳで戦闘している。

その結果、傷口も開いて気がついた時には旅館の布団で寝かされていた。

そんな事もあり、もうこれ以上馬鹿な事をしないように誰かが監視する事になったんだけど。
僕は姉さんが来るとばかり思っていたんだけどね。
急用とかで既に旅館にいなくて、その監視役を買って出たのが……。

織斑先生だった……。

まぁ担任だし当然と言えば当然なんだけど、こうなんていうか少し離れたところに布団を敷いて寝ているだけなのにそれはもう寝にく

くて仕方が無かった。
もうなんていうか、寝ている時ぐらいその存在感をなんとかしてほしいものだ。

おかげでまだ眠い……。

時刻は朝の八時五〇分。僕は途中で合流したセシリーの肩を借りてバスの集合場所までやってきていた。
ちなみに織斑先生は、色々と旅館の方と出立の手続きがあるようで、僕を起こしてから先に部屋を後にしていた。

まぁ引率の先生って言うのは流石に、怪我人にばかり構ってはいられないってことかな。

集合場所には、続々と生徒が集まってくる。
集まった生徒たちは各クラスごとに点呼を取り、学年主任の織斑先生のところに名簿が集められている。
その様子を、見渡しながら観察しているとふと集合場所から見える駐車場に目がとまった。

……あれ？　車が……。

姉さんの事だから、片腕が使えなくても自分の車に乗って移動するはずだ。
という事は本来駐車場に車はないはずである。
一瞬、旅館の人の車かとも思ったが、それは少し考えにくい。

なぜなら止まっていた車は、白に黒のストライプの走ったダッジ・チャージャーだったからだ。

いくらなんでも、この車。

和風の旅館にとてもじゃないがミスマッチ過ぎる。

……一体誰車だろうか。

「……全員そろったな。よし、静かにしてこちらを向け」

とと、気にはなるが今は置いておこう。

こっちの方がとんでもなく大事だ。

「さて、諸連絡はあるがそれは追々バスの中で各担任から話がある。それよりも今この場で諸君らに行っておかなければならん事があってな」

そう言うと織斑先生の傍らにアタッシュケースを持った一人の女性が現れた。

服装は姉さんの様な青を基調としたサマースーツに綺麗なロングヘアーの金髪を後ろで軽く束ね、勢いのある黄金色の瞳をもつ女性だった。

「誰だろう？」

「ローラさん知り合いとか？」

「じゃあ、ローラさんどこよ」

「い、いやそれは分かんないけど……」

「けど、綺麗な人だよね～」

突然の美女の登場に一気にざわつくも、織斑先生の咳払い一つで静けさを取り戻すのは流石だと思う。

学園に入学して数カ月、織斑千冬という名の恐怖心は着実に生徒を蝕んでいた。

それはともかく、あの人……アメリカ人？

「突然だが、ローラ・サウスバードは諸事情により帰国する事となった」

「えぇ！？　ローラさん帰っちゃったの！？」

「なんだろうね、事情って……」

「ねぇ、アルディ君は何か聞いてない？」

「い、いや、何も…」

すぐ隣にいたクラスメイトの質問を、苦笑交じりに返しながら僕は肩を貸してくれているセシリーを見る。

その視線に気がついたセシリーが、僕に耳元で呟く。

「本当に何も聞いていませんの？」

「本当だって……まさか帰国までしてるとは思わなかった……」

「……あの方は？」

「それも分からない……名前ぐらい分かれば……姉さんとは結構行動を共にしていたからどこかで会っていれば頭の片隅に覚えていそうなもんなんだけど……」

セシリーとの会話の間織斑先生がその女性の学園での役割を離し終えて、気がつけばその女性の自己紹介に入っていた。

「今、紹介に挙がりました。まぁ、見ての通りのアメリカ人。残念ながらの既婚者で娘が一人」

……なんとなくだけどこの人。

結構面倒な臭いがする。

「好きな物は、甘い物。嫌いな物は甘すぎる物。好きな事はドライブで嫌いな事は遠出……そんなちょっとおちゃめな私の名前はッ！！」

女性は声を張り上げビシッと一学年の生徒達に指をさす。

「ブラウニー・フェリップスッ！！」

そして高らかに名乗りを上げると、力強く腕を組んだ。

効果音を付けるとするながら？ババーン？か？ドン！？だろう。

そしてもう一つ、訂正させてほしい。

この人は面倒な人だ。

「ちなみに、私こう見えても元国家代表だったのよ、モンド・グロッソにだって出場してるんですからね」

モンド・グロッソに？

僕を含め、その単語を聞きそして国家代表だったという話を聞けば、いかに滅茶苦茶な自己紹介をした相手でも凄い人に見えてしまう。

ん？……待てよ。

モンド・グロッソ…アメリカの国家代ひょ……

その時僕の頭にピンと来るものがあった。
そして思わずそれは口に出てしまう。

「あぁ、姉さんに予選で負けたあの……」
「え？　アル？」

そうだ、初戦でそう言えばアメリカ同士でつぶし合ったんだ……。
うんうんと頷き納得する僕だったがポロっと言った言葉は予想以上に広がっていくもので。

「ローラさんに負けちゃったんだぁ……」
「けどまぁローラさん世界第二位だし」
「予選落ちかぁ……」
「なんか国家代表も……それ聞いちゃうとなぁ……」

次々に浴びせられる、白けたコメントの数々。
当然大きな声で言っているわけではないが逆に小声の方が案外相手に与えるダメージは大きい。

「べ、別に……あれは……その……色々と国との掛け合いが…あって……」

ズバンッと中々派手に名乗りを上げた矢先、思わぬ返答に冷や汗をかきながらブツブツと呟く。
そして最後に？アレがアルディ・サウスバードか？っとボソッと呟くとなんとかブラウニーさんは持ち直した。

まぁそれでも終始、冷や汗と額に数本血管がにじみ出ていた事を考えると確実に切れてる事だけは予想できたし、何より僕の名前を呟いたってことは、人物の断定ももう済んでいる。

後で嫌な予感しかしない。

とりあえず僕は怪我人ですとだけは、伝えておく事にしよう。
と、そんな形でブラウニーさんは自己紹介を終えるといよいよそれぞれのバスへ向かう。

「はぁ……なんでこう……」
「まぁ、私からも一言添えてはみますが…」
「ひとまずバスに向かおうか」
「そうですわね」

短く言葉を交わして、ゆっくりと僕たちはバスへと歩きはじめる。
そしてその時だった。
少し遠目から声をかけられたのは。

「アルディ。あなたはこっち」
「え？」

声の方向を振り向くと、そこには……。

「うわぁ……意外に早かった…」

ブラウニーさんだった。
ブラウニーさんがチャージャーの横で滅茶苦茶笑顔でこっちに手を振っていた。

駆けよるブラウニーさんに僕とセシリーは尋ねる。
「これから僕を海に捨てに行くんですか？」

「あ、あのアルはこう見えても怪我人でして……」
「それとも、あれで人気のない所に連れて行って……」
「ほ、骨も何本か……ですから余り手荒なことはぁぁぁあの……」
「……えぇと。　とりあえず何が言いたいのかしら？」

キョトンとするブラウニーさんがなんだかとっても印象的だった。

「アッハハハハハッ、…ってそんな事しないわよ！」
「いやでも…あの時最後ボソッと呟いた時はそれはもう凄い目で…」
「……睨まれないと思った？」
「いやすいませんでした」
「……ん、結構」

ざわっ！！

ん？　なんだバスの方が……。

僕達がブラウニーさんと話をしていた時、突然一台のバスの中とその周辺がざわついた。
そしてバスの中から、一人の女性が降りてくる。
その人もブラウニーさんの様な鮮やかな金髪をたたえている。
服はカジュアル全開で胸元の大きく開いた、サマースーツを着ていた。

「……はぁ、問題起こさないでって言ったわよね、ナータシャ」
「ナターシャって……えぇッ！？」
ナターシャさん！？
どうしてここに……。

「別に、問題なんて起こしてないわ。ちょっと白い騎士（ナイト）に口づけをね」
「それが問題なのよッ！！　馬鹿やってないで乗んなさい！」
「……はいはいって、アル～♪」
「どうも……ご無沙汰してます……ナターシャさん」
「写真はローラに見せてもらってたけど……大きくなったわねぇ」
「いえ、まぁ……」
「あの……私がいる事を、お忘れではありませんわよね？」

突然の出来事に、対応しきれないセシリーだったがそろそろ乗り遅れてはと口を挟む。
当然目は安定のジト目だ。

「そうだったね、セシリーこの人は……」
「説明すると長くなるから…とりあえず後ろ乗んなさい…走りながら説明しましょ」
「え、でもバスが……」
「いいの、織斑には許可を取ってあるから。ほら早く」

言われるがままにチャージャーの後部座席にセシリーと一緒に押し込まれるとブラウニーさんは無造作にトランクへ僕たちの荷物を放

り込み、バスよりも一足先に旅館を後にする。

そう言えば旅館の人に何も言ってないな……。

僕がその時思ったのそんな事だった。

道中ブラウニーさんは姉さんとの関係、ナターシャさんは僕との関係やそして驚いた事にあの?福音?の操縦者だったということなどを手短に説明してくれた。

「それで、ブラウニーさん。その?福音?は、どうなるのでしょうか?」

「そうねぇ、普通なら……まぁコアを抜かれて凍結処理が一般的な流れだけど」

「もう回収は済んでいらっしゃるので?」

「一応飛び散った装甲片とかの回収は開始しているみたいね」

暴走を起こしたISはたとえその後安定を取り戻したとしても凍結処理を施される。

具体的にはコアを初期化されて、装甲から取り外され最終的にはパーソナルデータやその他操縦者にかかわる全ての情報を完全にフォーマットされる。

凍結と言っていはいるが、言うなれば解体のそれに近い。

ブラウニーさんの言葉を聞いてナターシャさんはわずかに組んだ腕

をこわばらせる。

「ナターシャさん……」

「仕方ないわ…これぱっかりは……けど、あの子は私を守ってくれた……最後の最後まで」

「守ってくれた…」

その間隔は僕にも分かる。

いや僕ならなおさらだろう。

僕も？福音戦？ではレイにかなり救われたしね。

「でも……だからこそ私は許さないわ……あの子の好きな空を一番好きな所を奪った……その人物を私は許さない…」

許さない…そう語るナターシャさんの声は、僕が今の今まで聞いた事のないような低く、それでいて激情を押し殺したようなそんな声だった。

「……ナターシャ、あなたそれまさかと思うけどここ以外で誰かに行ってないでしょうね？」

「言ったわ。ブリュンヒルデにね」

「はぁ……全く」

ブラウニーさんはため息交じりに片手でポリポリと頭を掻く。

ブリュンヒルデ……つまり織斑先生に言ったってことか。

「それで、彼女はなんて？」

「無茶するなって言われたわ」

「でしょうね。まぁ少しは大人しくしてなさいな、悪いようにはしないから」

「……悪いようにはってどういう意味よ？」
「ま、そのままの意味よ、それにあなただって怪我は大きくないとは言えしてるんでしょ、本国に帰ったら一応検査は受けなさいよ」
本国か…ん、そう言えば。
「ねぇ、ブラウニーさん。本国って言えば姉さんはどうして帰国したんですか？」
「あ、私もそれは気になっていましたわ。ローラさんが急いで帰らねばならないようとは一体…」
「悪いけど、それはちょっと言えないわ。色々あるのよ。アメリカもね」
「けど……」
「でもまぁ、一つ言えるのは、世界は動き始めているってことよ…私たちが思いもよらないほどの速度でね…」
「……」
その問いにブラウニーさんはサラリと返す。
こうもあっさりとかわされてしまうと、後に続く言葉が無かった。
一通り話し終えた僕らは、特に誰からも口を開くことなく終始無言だった。
響くのは信号などで止まると聞こえるダッジチャージャーの持つ六リッターという大排気量ＯＨＶエンジンの心地のいいロッカーアームの音と、走り出すと聞こえるアメリカンマッスルカーらしい野太いサウンドだけ。
世界は動き始めている……か。

そんなまだ全然実感なんて無くて、それがどういう意味なのかさえ僕はよくわかっていなかった。

ただ今は、ようやく取り戻した平穏に身を任せて僕は車の後部座席でゆっくりと瞳を閉じる。

世界なんて僕が考えても仕方が無いし、どう動こうとも今の僕にはどうにもできない。

そう、今はただ平穏をただゆっくり抱きしめて僕は静かに眠るだけだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「寝ちゃったか……」

「そうみたいね……彼女も」

ナターシャは、後部座席をチラッと見ながら車の振動で自然と寄り添って眠るアルディとセシリアを見て笑う。しかしすぐに表情を険しい物に変え、後部座席の二人に聞こえないように声も落とす。

「それで、真面目にローラをどうしてアメリカに返したの？　もう言っちょ踏み込んで言わせてもらえるならどうしてあの子とローラ

を引き離すような事を……」
「……言ったでしょ。アメリカにも色々あるのよ……こればっかりはね」

そんな事はナターシャにだって分かる。
ブラウニーは肩書こそ?合衆国立代表選定委員会議長?というものだがその実は候補生の選定だけにとどまらずＩＳの技術や開発そしてＩＳ部隊の運用や人事と言った事にまで影響力を持つ非常に重要なポストの人物である。

ナターシャは、このタイミングでブラウニーがローラを怪我人ながらに帰国させた理由を測りかねていた。

ローラは現在研究開発局でアドバイザーをやっている。
確かに怪我人でもアドバイザーは務まるが、だからと言って今別段研究開発局が人員不足だとかというった話を少なくともナターシャは聞いていない。

自分が暴走したＩＳに乗っていた時間は精々一日かそこら。
たったそれだけの時間で急に人員不足に陥るような部署でもない。

更に言えば、ローラが今帰国すれば少なくとも事件にかかわった人物の一人として聴き取りの一つや二つはされるはずだ。

しかしだ。ブラウニーは本国で調書を取るのが面倒だからとわざわざ出張ってきたのだ。
ローラにただ調書を取らせるためだけに帰国させたとも考えにくいしまずあり得ないだろう。

そう考えると少なくともナターシャには、ブラウニーがローラを帰国させる意図が全く分からなかった。

「ブラウニー……私はこれでも国家代表なのよ？」
「だから？」
「もっと言えばアメリカの国家代表。言ってる意味分かるでしょ」
「……国家代表は、禁則事項を除けば不当な隊の運用等不当と思われる一切の事柄に対して上官またはそれに準ずる者への意見・理由を求める事が出来る……合衆国におけるＩＳ運用及びＩＳに関する人事に関する基本条項第二条十一項……はぁ……よく覚えてたわね」

「それはあなたもでしょう？」

？アメリカ合衆国ＩＳ運用人事規制法？これが先ほどブラウニーが長々と喋った条例文章の一般的な名称である。
これは、簡単に言えば上層部の暴走を国家代表が抑えるために制定された法案で、基本条項と言っているものの議会で可決され合衆国憲法にもしっかりと記載されているれっきとした法律である。

この法に則って考えるのであれば、上官とはブラウニーであり国家代表はナターシャ。
そして不当な人事とはローラのアメリカ帰国という事になる。

ここはアメリカでは無いためその法が適応されるわけではないにしろ、その法を知る者としては正当すぎる権利を主張しているナターシャを無下に扱うわけにもいかない。

ブラウニーは、深いため息をつくとバックミラーで二人がまだ眠っている事を注意深く確認する。

そして渋々と言った表情で口を開いた。

「……ナターシャ。アルディがドイツの代表候補生に怪我をさせられたことは知ってる？」

「ドイツ……えぇまぁ。それが何？」

「あの事でアメリカは、騒ぎ立てはしなかったものの水面下でドイツに賠償を求めたのよ」

「賠償ねぇ……けど、あの国がそう簡単に頭を縦に振るかしらね」

ドイツは何かとバックグラウンドに怪しい影が見え隠れしており欧州連合の中では、一番警戒されている国の一つでもある。

そんな国が水面下の交渉ごときで簡単に賠償に応じるとは思えない。

「まぁね。初めはかなり強気だったわ。こっちが怪我をしたのは確かでも代表候補生じゃなかったって所まで突っ込んできたし」

「そんなところにまで……」

「でもねぇ、流石に向こうさんも例のシステムの件の話を切り出したら態度が一変したわ」

例のシステムとはラウラの？シュヴァルツェア・レーゲン？に極秘に搭載されていたヴァルキリートレースシステムの事だ。

ラウラの機体に積まれていたそれによって、学園のイベントが中止になったことはナターシャの耳にも届いていた。

ＶＴシステムは確立されたシステムとは言い難く、搭乗者に尋常ではない負担をかけるシステムであり最悪命も落としかねない代物。

どのタイミングでアメリカがドイツとの賠償交渉に入ったのかは定かではないが、ドイツにとってはそれがしかも各国のスカウトや企

業が目を光らせるＩＳ学園のトーナメント会場で発動したことは最悪のふた文字しかないだろう。

各方面への根回しや情報操作或いは買収……様々な手を使ってようやく沈静化したそのシステムの話をぶり返されてはたまったものではない。

しかも相手は、どこぞの弱小国家では無い。

その気になれば、何をしでかすか分かったもんじゃない大国アメリカである。

「そ、その事を話題にしてからは交渉は本当に円滑だったわ」

「でしょうね……それでドイツから何で賠償してもらったのかしら？」

少なくともアメリカがドイツに金で解決しろなんていうわけがない。

それでは本当の意味で？得？にはなりえない。

賠償と言ってはいるがそこには当然損得勘定が入り混じる。

アメリカにとっての本当の得とはこの場合金銭的な物ではないはずだ。

ナターシャの問いに、フフッと笑うとブラウニーはニヤリと笑う。

「それは言えないわ。けど良い物よ」

「良い物……ねぇ」

「そう、良い物。そしてそれが手に入ったからこそ、ローラを帰国させたの」

良い物とブラウニーははぐらかすが、ナターシャにはもう既に大体の検討は付いていた。

現アメリカがドイツから手に入れたいものなどアレしかないではないか。

ナターシャはブラウニーの返答に、何度か小刻みに頷くと話をそこで切り上げ視線をスッと窓の外へ移す。

車はまだ、海岸線付近を走っており丁度反対車線を挟んだその向こうには澄みきった綺麗な海が見える。

気候も穏やかなため海では、レジャーを楽しむ小型船舶も見えた。

本当に穏やかで平和な時間だと思う。

そしてしばらく外を眺めた後ナターシャは、すやすやと眠る二人を見やった。

先ほどと変わらないこちらも穏やかな寝顔。

しかしアルディはもとよりセシリアも、制服で隠されているとはいえその細く白い身体には未だ癒えぬ多くの傷が隠されている。

そう考えると不意に、ナターシャの胸がチクリと痛みだす。

彼らにこれほどの傷や怪我を負わせたのは自分なのだ。

気がつけばナターシャは、グッと拳を握りしめていた。

そんな自分が、彼らの未来を案ずるなど……。

「……大丈夫よ、彼らはそんな事思っても無いし考えても居ない。

だからあなたが責任を感じる必要はないわ」

「……えぇ……」

「それに……これから彼らを待っているのは、これほど生易しい世界でもない」

確かにブラウニーの言うとおり彼らはこの先、こんな物など比べ物にならないほど大きな物と対峙し戦い、そして更に選択を迫られていくことになるだろう。

アメリカをはじめとする列強国家はもちろんだが、そこにあのNの開発者五条　叶。そしてあの組織。

……動き出す世界は、余りにも速くそして大きな、うねりとなって彼らを飲み込んでいく。

「そうなった時に……今度はあなたが……ね？」
「けど私はＩＳが」
「だから……悪いようにはしないって言ったでしょ？」
「でも」
「いい加減悪い方向に考えるのやめなさい。大体さっきまでローラの話してどうしてそっち方面に言っちゃうのかなぁ」
「そ、それは！」

思わず声を荒げたナータシャは、慌てて口を塞ぐ。
そして、後ろの二人がまだ寝ている事を確認するとホッと胸を撫でおろした。

そんなナターシャを見てブラウニーは、微笑んだ。

「ま、大丈夫よ　大丈夫♪」

それは寝ている二人のことなのか、はたまた世界のことなのか。

自分から不吉な事を言っておいてとブラウニーを睨みながら、ナターシャはため息を一つ吐いてシートに座り直す。

チラリと見えた外の景色は相変わらずの平穏な景色。

車はそんな平穏な時間の中をひた走っていくのだった。

◇◆◇◆◇◆

「さて……そろそろかな？」

――――――今世界は大きく動き始めた――――――

第５３話～世界は今…～（後書き）

この所不定期で申し訳ありませんでした。

一応ここまでが大きなくくりで一章扱いとなります。

次からは少し、世界の事を掻いたオリジナル物が展開されていってあの生徒カイチョーやその妹の話などを掻いていく予定にしています。

まだまだ続くのでこれからもよろしくお願いします。

それでは次回お会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7556r/

IS　インフィニット・ストラトス～偽りの翼～

2011年12月27日19時47分発行